鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）

東九州自動車道建設（大隅 IC～末吉財部 IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

SEKIYAMA

関山遺跡

（曽於市末吉町）

TORIIGAWA

鳥居川遺跡

CHISYANOKI

チシャノ木遺跡

（曽於市大隅町）

2008年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）

関山遺跡
鳥居川遺跡
チシャノ木遺跡

二〇〇八年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

赤色顔料が貯蔵されていた縄文早期土器(1)

上　大型の土器に入れ子状で出土した小型の土器

下　赤色顔料（パイプ状ベンガラ）の貯蔵状況

関山遺跡

赤色顔料が貯蔵されていた縄文早期土器(2)

上　復元された大小の変形撚糸文土器

下　赤色顔料を除去した小型の土器の内面

関山遺跡

出土遺物

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，末吉財部ＩＣ～志布志ＩＣ区間の事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）に照会した。

この計画に伴い，これを受けて文化財課は，平成11年11月に末吉財部ＩＣ～鹿屋串良ＩＣ間を，平成12年２月には鹿屋串良ＩＣ～志布志ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡（854,100㎡）が存在することが明らかになった。その結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部高速道路対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センターの４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の緻密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査や確認調査が実施されることとなった。

そこで，鹿児島県は平成13年７月10日から７月26日において，末吉財部ＩＣ～鹿屋串良ＩＣ間の工事計画図をもとに33の遺跡についての詳細分布調査と，平成13年９月17日から10月26日までと平成13年12月３日から12月25日において遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成13年10月１日から平成14年３月22日（実働85日）の間に確認調査を実施した。

平成14年４月には，鹿屋串良ＩＣから志布志ＩＣについて再分布調査を実施した結果，遺跡の調査対象面積が678,700㎡なった。

その後，日本道路公団の民営化の閣議決定（現：西日本高速道路株式会社）と新直轄方式に基づく道路建設が確定し，平成15年11月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年12月には末吉財部ＩＣから大隅ＩＣ間の発掘調査協定書締結の運びとなり，本格的な埋蔵文化財の発掘調査が開始されることとなった。

平成16年１月から３月には，井手山遺跡，定段遺跡，稲村遺跡の工事用道路建設予定地について本調査を実施した。

平成16年３月には，国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事により新直轄方式施行に伴う確認書締結が結ばれ，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとし，今までの確認書，協定書はそのまま生きるという内容であった。

その結果，平成16年度には，中之迫遺跡の確認調査と本調査，菅牟田遺跡の確認調査，前年度に引き続いて定段遺跡の確認調査及び唐尾遺跡の確認調査と本調査を行った。

中之迫遺跡は，平成16年５月10日から７月27日までに工事用道路予定地の確認調査及び本線部分の確認調査及び本調査を実施し，調査面積は4,498㎡であった。

調査の結果，縄文時代早期と晩期の包含層が残存していることが判明し，早期の石坂式土器や石鏃，磨石などの遺物が出土した。

菅牟田遺跡は，平成16年５月17日から５月21日までに菅牟田遺跡の確認調査を実施し，調査面積は154㎡であった。

調査の結果，良好と思われた台地も後世の土地改良などの影響によるもので，旧地形は起伏に富み入れ込んだ地形で，遺物包含層は確認されなかった。

定段遺跡は，平成16年８月３日から10月27日まで本線部分において確認調査を実施し，調査面積は500㎡であった。

調査の結果，縄文時代早期前葉の竪穴住居跡，土坑，集石遺構などの遺構や前平式土器をはじめとする土器や石器などの遺物も出土した。

唐尾遺跡は，平成16年11月１日から平成17年３月18日までに本線部分において確認調査を実施し，調査面積は3,280㎡であった。

調査の結果，縄文時代早期，中期，晩期をはじめ古代の包含層が確認され，中期の落とし穴，晩期の竪穴住居跡，古代の掘立柱建物跡などを検出し，早期の塞ノ神式土器や晩期の入佐式土器，土師器，須恵器，墨書土器，焼塩壺などの遺物が出土した。

その後，平成17年度は，昨年度に引き続いて唐尾遺跡の本調査，関山西遺跡・関山遺跡・定段遺跡・稲村遺跡の本調査及び建山遺跡・狩俣遺跡の確認調査と本調査，高古塚遺跡の確認調査を行った。

平成18年度は，建山遺跡・狩俣遺跡・高古塚遺跡の本調査，鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡・西原段Ⅰ遺跡の確認調査及び本調査，野鹿倉遺跡の確認調査，西原段Ⅰ遺跡周辺の試掘調査，唐尾遺跡の整理作業を行った。

平成19年度は，西原段Ⅰ遺跡（一部）・野鹿倉遺跡の本調査・関山西遺跡・関山遺跡・唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡・鳥居川遺跡・チシャノ木

遺跡の整理作業及び報告書刊行，建山遺跡，定段遺跡の整理作業を実施した。一方，大隅ＩＣから鹿屋串良ＩＣ間の宮ケ原遺跡・天神段遺跡・野方前段遺跡・宮ノ本遺跡・加治木堀遺跡の確認調査及び本調査，椿山遺跡・柿木段遺跡・石縊遺跡・十三塚遺跡の確認調査を実施した。

なお，事業区間内の遺跡の概要については，以下の通りである。

第２節　大隅ＩＣ～末吉財部ＩＣ間の遺跡の概要

１　関山西遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町諏訪方関山西にあり，末吉町の西方で標高約293ｍの台地に位置し，遺跡の近隣には光神集落が所在している。

遺跡は，集落内を東西方向に国道10号線が走り，集落の西方端で，国道10号線を起点とする一般地方道光神・諏訪方線が末吉町市街地へ向かっている。遺跡は，国道10号と県道とに挟まれた複数の谷が混在入するその台地のひとつに所在している。

遺跡へのアクセスは，国道10号線沿い光神小学校隣接を起点として集落内を南側へ走り県道と交差している市道から略西側方向へ農道が縦走し，遺跡へ至っている。

遺跡の立地している台地は，東側に向かって八つ手状にのびる台地のひとつで，宮崎県の日向灘に流れ込む大淀川の支流である村上川に開析されており，そのために南の谷に挟まれ，台地と谷の底部との比高差は約30ｍである。

遺跡の周辺には，２つの大きい谷を挟んで北側に桐木遺跡，耳取遺跡，北側の谷を挟んで南側には関山遺跡などがあり，周辺には大規模な遺跡がみられる。

本遺跡は，平成13年度に確認調査，平成17年には本調査を実施し，調査面積は5,090㎡（延11,720㎡）である。調査の結果，縄文時代早期・晩期，弥生時代，古墳時代，古代，中世にかけての複合遺跡であることが判明した。

遺跡は，西側から東側へ緩やかに傾斜し，調査区全体に中世から縄文時代晩期にかけての包含層が確認されＸ層上面の地形は北側尾根状の丘陵２地があり東側へ大きく傾斜していたが，縄文時代早期の包含層が存在している。

調査の結果，縄文時代早期該当層では，集石遺構25基，土坑８基が検出され，塞ノ神式土器，吉田式土器，押型文土器，石鏃，磨石，石皿などが出土した。

縄文時代晩期該当層では，竪穴状遺構２基が検出され，入佐式土器や石鏃，チップやフレークなどが出土した。

弥生時代該当層では，弥生時代初頭のものと考えられる刻目突帯文土器や磨製石が出土した。

古墳時代該当層では，成川式土器，鉄鏃（圭頭鏃）や刀子などの土器や鉄製品が出土した。

古代該当層では，土坑200基，焼土，土師器と軽石を中心とした土器集中あり，土師器や須恵器などか出土した。

中世該当層では，掘立柱建物跡２棟，溝状遺構４条，畝状遺構，土師器埋納遺構１基，土坑墓１基，大型土坑５基が検出された。２条の溝状遺構は幅が１ｍを越える大型の溝で，その形状はＵ字状やＶ字状を呈し，埋土には文明ボラ（1471年の桜島起源の噴出物）の堆積が確認された。

２　関山遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町諏訪方関山にあり，末吉町の西方で標高約296ｍの台地上に位置している。

遺跡の所在している台地は，光神集落内を東西方向に国道10号線が走っている。光神集落の西方端には，国道10号線を起点とし，末吉町市街地へ延びる一般地方道光神・諏訪方線により分断されている。

遺跡の位置する台地は，北側に谷部をもち，南側は東側に延びる台地上の畑地にあり，北側谷の底部と遺跡の立地する台地との比高差は約30ｍである。

本遺跡は，旧石器時代から縄文早期・後期～晩期，古代～中世にかけての複合遺跡で，周辺には関山西遺跡・桐木遺跡・耳取遺跡などが谷を隔てて連なり，同じ台地の南側には唐尾遺跡が所在し，周辺には大規模な遺跡がみられる。

本遺跡の確認調査は，平成13年10月１日から12月21日（実働は44日間）までに関山西遺跡と並行して実施し，古代から縄文時代晩期（9,700㎡），縄文時代中期（4,300㎡），縄文時代早期（10,600㎡），縄文時代草創期・旧石器時代（7,850㎡）の範囲で確認された。

その後，本遺跡は平成17年度に本調査を実施し，調査面積は9,780㎡（延30,182㎡）に及んでいる。調査の結果，旧石器時代，縄文時代早期から晩期，古代から近世にかけての複合遺跡であることが判明した。

本遺跡の現地形は，緩やかな起伏のある台地で，旧地形は調査区のほぼ中央部を南北に走る尾根から東西方向に細かくいくつかの谷が連なる地形であったことが判明された。

旧石器時代該当層では，被熱を受け散礫した礫群２基が検出され，削器，剥片，チップなどが出土した。

縄文時代早期該当層では，集石遺構９基，落とし穴19基，土坑２基が検出され，押型文土器，変形撚糸文土器，吉田式土器，前平式土器などや石鏃，石匙，磨石，石斧などが出土した。

縄文時代中期該当層では，落とし穴５基が検出され，底面に逆茂木痕と考えられる痕跡も確認された。

縄文時代後期から晩期該当層では，竪穴住居跡１軒が検出され，黒川式土器の深鉢形土器や浅鉢形土器，

石鏃，磨石などが出土した。

古代から中世該当層では，溝状遺構８条が検出され，幅は約50㎝で，最長約24ｍもあり，底面には踏み固められた硬化面の痕跡も確認され，少量の土師器が出土した。

近世では，掘立柱建物跡４棟を検出し，２間×３間２棟，２棟は調査区外へ延びている。

３　唐尾遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町諏訪方唐尾にあり，末吉町の西方で関山遺跡と同台地に位置し，一般地方道光神・諏訪方線南側に接する標高約293ｍの広大な台地上にある。

遺跡は，関山西遺跡，関山遺跡と遺跡の立地は類似した環境にあり，縄文早期・中期・晩期，古代の時期の遺構や遺物などがみられる複合遺跡である。

また，本遺跡の位置している台地は，後世において圃場整備等により大きく削平を受けており，遺跡の中心は南側台地縁辺部付近を中心に存在し，周辺の三方部は谷に取り囲まれている。特に，南側の谷は比高差が大きい谷が貫入している。

調査は，平成16年度に確認調査と本調査，平成17年度には本調査を実施し，調査面積は7,800㎡（延14,040㎡）で，縄文時代早期・中期・晩期，古代などの複合遺跡である。

本遺跡の縄文時代早期該当層では，集石遺構１基が検出され，前平式土器，石坂式土器，山形押型文土器，敲石，磨石などが出土した。

縄文時代中期該当層では，落とし穴８基が検出された。

縄文時代晩期該当層では，竪穴住居跡１軒が検出され，入佐式土器，石鏃，フレーク，磨石などが出土した。

古代該当層では，軽石集積２基，掘立柱建物跡４棟，焼土跡３か所が検出され，土師器，墨書土器，刻書土器，鉄器などが出土した。

４　西原段Ⅰ遺跡

本遺跡は，曽於市大隅町中之内西原段にあり，大隅町のほぼ中央北側で，標高約290ｍの台地上に位置している。遺跡には主要地方道志布志福山線の坂元を起点とする市道桂・二重堀線が走り，市道沿いにある折田と梶ケ野との集落間の台地の畑地及び宅地に所在している。遺跡は，西梶ケ野集落側の台地で，周辺部には谷部をもち，北西側の台地縁辺部の畑地には西原段Ⅱ遺跡があり，平成８年度には調査を実施されている。遺跡の周辺には，台地西側端にある宮岡遺跡，東原遺跡をはじめ，東側谷を隔てて梶ケ野集落周辺に前畑遺跡，打込遺跡，ノトロ遺跡，前岡遺跡，重ケ迫遺跡などがあり，周辺には縄文時代，弥生時代・古代にかけての多くの遺跡が周知されている。本遺跡は，平成18年度に確認調査，本調査，隣接地の試掘調査を実施し，調査面積は6,004㎡（延10,807㎡），試掘調査110㎡に及んでいる。その結果，旧石器時代，縄文時代，古代から中世にかけての複合遺跡である。

本遺跡の旧石器時代該当層では，削器が１点出土した。

縄文時代早期該当層では，集石遺構３基が検出された。

縄文時代中期～後期該当層では，土坑２基が検出され，土器片が出土した。

縄文時代晩期該当層では，集石遺構１基が検出され，１個体分と考えられる土器片や磨製石斧など出土した。

古代～中世該当層では，底面に複数の小穴をもつ落とし穴１基が検出され，土師器が出土した。

５　野鹿倉遺跡

本遺跡は，曽於市大隅町中之内野鹿倉にあり，大隅町の西方で，複雑に谷の入り込んだ狭少な標高約287ｍの台地縁辺端部に位置している。遺跡は，主要地方道志布志・福山線八木塚と同線坂元を起点とする市道桂・二重堀線の西原段Ⅰ遺跡との，ほぼ中間地点付近で，養豚場や養鶏場のある台地に所在し，遺跡の周辺は30ｍから60ｍの谷が複雑に貫入している。

本遺跡は，平成18年度に確認調査を実施し，調査面積は20㎡で，縄文時代早期と弥生時代から古代まで遺物が確認された。平成19年度には，８月１日から10月26日まで調査した。

その結果，旧石器時代該当層では細石刃，石核，剥片が出土した。

縄文時代早期該当層では，集石遺構12基が検出され，変形撚糸文土器，下剥峰式土器，押型文土器が出土した。

古代該当層では，土師器が出土している。

６　建山遺跡

本遺跡は，曽於市大隅町岩川建山にあり，大隅町のほぼ中央北側で，八木塚の集落に近隣し，南西方向に谷を持つ標高約282ｍ～270ｍの台地縁辺部に位置している。遺跡の一部は，主要地方道志布志福山線により２分されている。遺跡の南西側の谷部には，志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ，さらにその支流となる川の開析によって南東から北西に延びるやせ尾根状の台地が形成されている。遺跡の立地する台地と谷の底面との比高差は約60～70ｍで，現地形は緩やかな起伏のある台地である。

しかし，調査の結果では旧地形が調査区域のほぼ中央部を南北に走る屋根から東西方向に細かい谷がいくつか連なる地形であったことが判明している。

本遺跡の周辺には狩俣遺跡，高古塚遺跡，西原段

Ⅰ・Ⅱ遺跡，野鹿倉遺跡などがあり，旧石器時代，縄文時代早期から晩期，古代にかけての遺跡などが判明している。本遺跡は，平成17年度に確認調査，遺跡南端部及び県道63号北側部分（一部）の本調査を実施し，旧石器時代，縄文時代早期から晩期，古代～中世にかけての複合遺跡であることが判明した。

その後，平成18年度に本調査を実施し，調査面積は18,983㎡（延34,170㎡）である。

本調査の結果，旧石器時代ナイフ型石器文化期では，ブロック１基が検出され，ナイフ型石器，剥片尖頭器，フレーク，チップなどが出土した。

旧石器時代細石刃文化期では，ブロック19基，うち石器製作所が考えられるブロック１か所が検出され，細石刃核，細石刃などが出土し，石材は西北九州系・中九州系・霧島系などの黒曜石が混在して出土した。

縄文時代早期該当層では，竪穴住居跡２軒，集石遺構，土坑，連穴土坑１基，落とし穴４基が検出され，吉田式土器，石坂式土器，手向山式土器，塞ノ神式土器，押型文土器，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石，石皿などが出土した。

縄文時代前期～晩期該当層では，竪穴住居跡が１軒検出され，黒川式土器，磨製石斧，打製石斧が出土した。

古代～中世該当層では，掘立柱建物跡が５棟検出され，規模は２間×２間のものが２棟，２間×３間のものが２棟，不明のものが１棟である。他に，溝状遺構が５条，焼土跡６基検出された。

７　狩俣遺跡

本遺跡は，曽於市大隅町岩川狩俣にあり，大隅町のほぼ中央北側で，標高約270ｍの台地上に位置している。

遺跡の南西側の谷部には，志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ，さらにその支流となる川の開析によって南東から北西に延びるやせ尾根状の台地が形成されている。また，台地は北側と南側に開析する谷により，南北にはさらに小さな舌状台地が形成されている。遺跡の立地する台地と谷の底面との比高差は約30ｍで，周辺には，西原段Ⅰ遺跡，建山遺跡，高古塚遺跡など旧石器時代～古代の遺跡が存在している。

本遺跡は，平成13年度の確認調査において，縄文時代早期～近世にかけての複合遺跡であることが判明し，平成17年・平成18年度には本調査を実施した。調査面積は18,647㎡（延33,564㎡）である。

調査の結果，縄文時代早期該当層では，集石遺構23基，土坑が検出され，前平式土器，石坂式土器，押型文土器，手向山式土器，打製石斧，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，チップ等が出土した。縄文時代中期～晩期該当層では，落とし穴，焼土，土坑等が検出され，黒川式土器，磨製石斧，石鏃，チップ等が出土した。

古代該当層では，掘立柱建物跡，畝状遺構，溝状遺構，土坑が検出され，土師器，須恵器，紡錘車等が多く出土した。

中世該当層では，掘立柱建物跡，畝状遺構，溝状遺構，土坑が検出され，土師器等が出土した。

近世該当層では，畝状遺構，土坑等が検出され，薩摩焼等が出土した。

８　高古塚遺跡

本遺跡は，曽於市大隅町岩川高古塚にあり，大隅町のほぼ中央北側の標高約250ｍで，四方を谷に囲まれた台地上に位置している。

遺跡の南側谷部には，志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ，さらにその支流となる川の開析によって南東から北西に延びるやせ尾根状の台地が形成されている。遺跡の立地する台地は，周辺と谷の底面との比高差約30ｍを測る。

周辺には谷を隔てた北側に，狩俣遺跡，西原段Ⅰ遺跡，建山遺跡など旧石器時代～古代の遺跡が存在している。

本遺跡は，平成17年度に確認調査を行い，縄文時代早期と古代の複合遺跡であることが判明した。平成18年度に本調査を実施し，調査面積は6,410㎡（延11,778㎡）である。

調査の結果，縄文時代早期該当層では，集石遺構13基，落とし穴３基が検出され，前平式土器，吉田式土器，下剥峯式土器，石坂式土器，押型文土器，スクレイパー，剥片，磨石が出土した。

縄文時代中期～後期該当層では，中期のものと思われる落とし穴が６基，集石遺構が２基検出され，後期の指宿式土器が出土した。

古代該当層では，掘立柱建物跡２棟が検出され，土師器や須恵器が出土した。

９　菅牟田遺跡

本遺跡は，曽於市大隅町岩川菅牟田にあり，大隅町のほぼ中央南側で，市道を挟み標高約225ｍの台地北側縁辺部と谷に挟まれた馬の背状の台地南側辺部とに分かれ，四方を谷に囲まれた台地上に位置している。

遺跡の西側から北側の谷部には，志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ，北東側眼下には菅牟田の集落や菅牟田小学校を望むことができる。

遺跡の立地する台地は，周辺の低地との比高差約70ｍを測り，周辺には高古塚遺跡や定段遺跡など旧石器時代から古代の遺跡が存在している。

本遺跡は，平成16年５月に確認調査を実施した。その結果，良好な台地と思われた北側台地の旧地形は起伏に富んだ地形で，さらに，南側尾根部でも包含層は消失されており，本調査を実施するまでには及ばな

かった。

10　定段遺跡

本遺跡は，曽於市大隅町岩川定段にあり，大隅町のほぼ中央南側の標高約220mで，三方を谷に囲まれた台地上に位置している。

遺跡のはるか北側谷部には，志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ，菅牟田の集落や菅牟田小学校があり，菅牟田遺跡に近隣した位置にある馬の背状台地の畑地に所在し，周辺の底面との比高差は，約60mを測る。

周辺には隣接した稲村遺跡をはじめとして，菅牟田遺跡・イチノ木遺跡・上山遺跡・船窪迫遺跡・久木山遺跡など縄文時代，古代の遺跡が存在している。

本遺跡の調査は，平成13年９月，10月，12月に試掘調査，平成16年１月15日から３月12日までに工事用道路部分の本調査を行い，縄文時代早期前葉（約１万～９千５百年前）の集落跡の存在が想定される遺構（竪穴住居跡９軒以上，土坑14基以上，集石遺構６基）とともに，多量の土器（前平式土器）や石器（磨石，石皿，石鏃）などが出土した。

そこで，より詳細な遺跡の情報を得るために，平成16年８月３日～10月27日，平成17年１月19日～１月26日の２回にわたり本線部分における包含層内の遺物の把握と遺構の広がり（集落跡の範囲）を確認するための調査を実施した。

その結果，竪穴住居跡，土坑，大型竪穴住居跡などの遺構や多くの遺物が発見され，遺構検出の配置から集落跡と考えられる範囲がほぼ把握された。また，遺構の検出面，遺構の埋土，遺構内遺物をはじめとする出土遺物等を総合的に検討した結果，上野原遺跡より一様式先行する時期で，縄文時代草創期の栫ノ原遺跡と縄文時代早期前葉の上野原遺跡をつなぐ時期の集落をもつ，極めて重要な遺跡であると判断した。

本調査は，平成17年５月９日から平成18年３月31日まで実施し，調査面積は7,300㎡（延15,894㎡）であった。

遺跡の取り扱いについては，極めて重要な遺跡であると判断したことから，定期的に関係機関へ調査成果を報告し，協議・調整を行い，最終的に「記録保存」と決定した。この決定を受け，定住集落の解明のため多角的な分析を行えるように，より一層慎重に調査を行った。

また，下層の旧石器時代の範囲確認を進めながら１月末を目途に調査終了との報告を行ったが，調査範囲の拡大や縄文時代早期の遺構が広範囲で高密度で検出され，期間内終了が困難と判断し，３月末日まで調査期間を延長した。

全ての調査の結果，竪穴住居跡約40軒，土坑約220基，集石遺構約30基が，東西130m，南北約60mの範囲に検出された。これらの遺構は，埋土内に含まれている火山灰等の状況から３つのパターンに分類でき，遺構内遺物と関連させながら縄文時代早期前葉の集落の変遷を伺い知ることが期待できる。また，縄文時代前期から中期該当層では，落とし穴約30基を検出し，土坑底面には小穴などの杭跡が確認された。

11　稲村遺跡

本遺跡は，曽於市大隅町岩川稲村にあり，大隅町のほぼ中央南側の標高約227mで，三方を谷に囲まれた定段遺跡と同一台地で，隣接した畑地に位置している。

遺跡の調査は，定段遺跡と並行して平成16年１月15日から３月12日までに工事用道路部分の農道に沿う形で確認調査を実施した。

その結果，縄文時代晩期の包含層が南側において部分的に残存していることが判明した。

本遺跡では，平成17年５月９日から平成18年３月31日までに確認調査の結果を受けて，縄文時代晩期の遺物が出土した南側のトレンチを拡張，新たに５か所にトレンチを設定し，旧地形の確認や遺物出土状況に応じてトレンチを広げながら調査を進めた。

調査面積は，3,987㎡（延5,746㎡）であった。その結果，遺構としては中世から近世のものと思われる硬化面を伴う道路状遺構や畠跡を検出し，遺物は縄文時代早期及び晩期の土器片，石鏃，大分県の姫島産の黒曜石などが出土した。

12　中之迫遺跡

本遺跡は，曽於市大隅町岩川中之迫にあり，大隅町のほぼ中央南側で，市道を挟み標高約225mの台地北側縁辺の北側と谷に挟まれた馬の背状の台地南側辺部とに分かれ，四方を谷に囲まれた台地上に位置している。

遺跡の北西側から東側の低地には，志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ，東側や南東眼下には上諏訪の集落や岩川高校等を経て岩川の市街地へと続いている。

遺跡の立地する台地は，周辺の低地との比高差約90mを測り，周辺には中迫Ⅰ遺跡，中迫Ⅱ遺跡，所迫遺跡，池ノ段遺跡，諏訪迫遺跡などがあり，縄文時代早期，晩期，古代などの遺跡が周知されている。本遺跡では，平成16年４月30日から平成16年７月28日までに確認調査を受け，本調査では遺構検出はなかったが，縄文時代早期の石坂式土器，石鏃，磨石をはじめ組織痕文土器，磨石，石皿などが出土した。遺跡調査面積は5,598㎡（延10,076㎡）であった。

13・14　鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡は，曽於市大隅町岩川鳥居川及びチシャノ木にあり，大隅町のほぼ中央南側

で，県道垂水～南之郷線の新原集落に隣接する県道沿いの大隅インター内に位置する。

チシャノ木遺跡は，深さ20m，幅80mの谷を挟んで鳥居川遺跡と向かい合う標高215mの台地の畑地内にある。

チシャノ木遺跡は，平成18年５月９日から平成18年９月28日まで，鳥居川遺跡は平成18年10月３日～11月28日まで調査を実施した。それぞれの遺跡では，確認調査を先行して調査を実施した。

その結果，畑地改良やごぼう等の栽培，圃場整備事業などにより攪乱を受けた部分が多かった。両遺跡ともに遺物包含層が確認された地区について本調査を実施した。

調査の結果，鳥居川遺跡は，縄文時代早期，縄文時代晩期の複合遺跡であることが判明した。遺構は確認されなかったが，縄文時代早期及び縄文時代晩期の土器片が出土し，各期１個体ずつ完形復元できた。

チシャノ木遺跡は，旧石器時代，縄文時代早期，縄文時代中期～後期，縄文時代晩期，古代～中世，近世の複合遺跡であることが判明した。

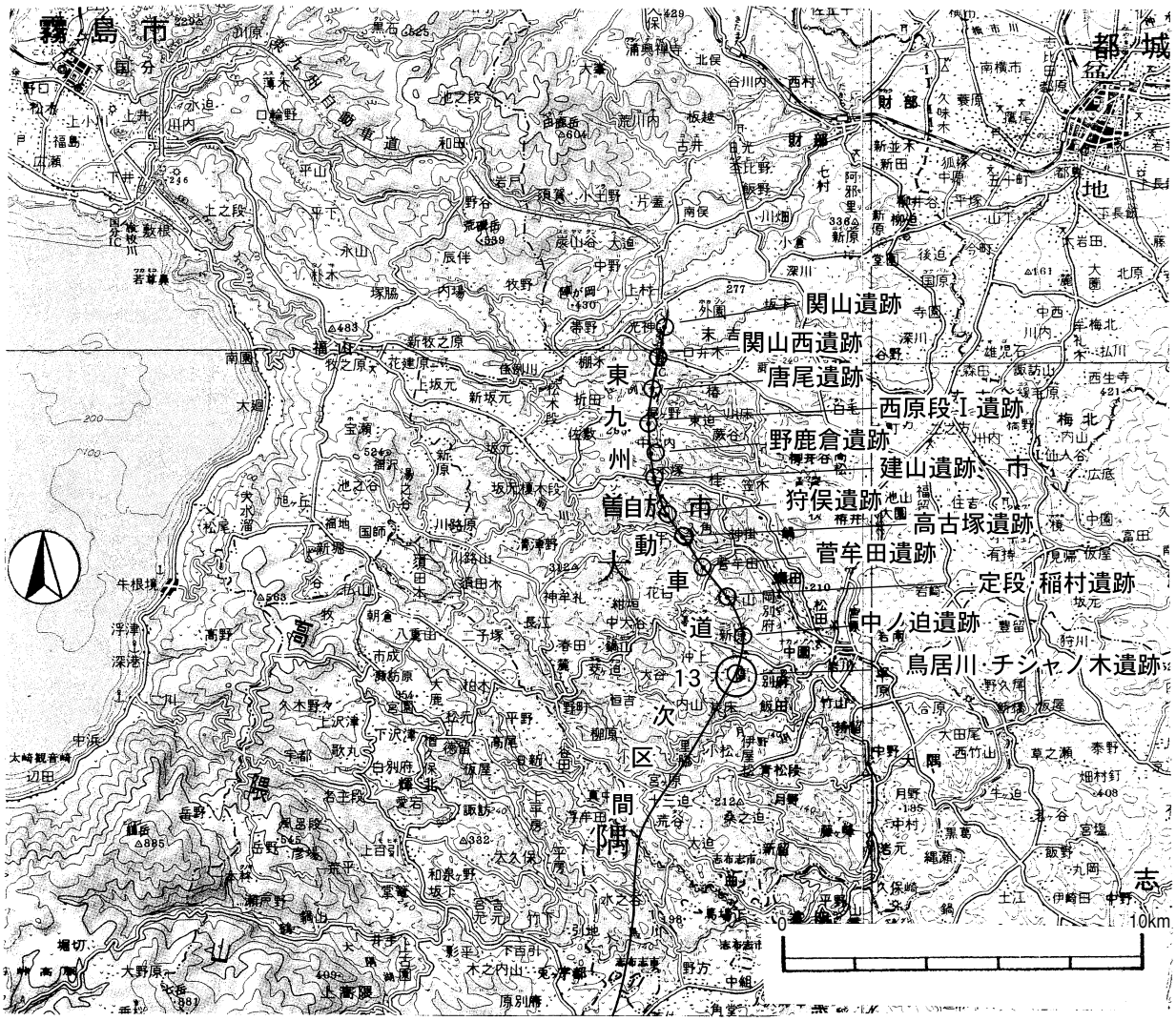
旧石器時代ナイフ形石器文化期の層から，削器１点が出土したが，路線外に本体部分が想定される。

縄文時代早期該当層では，集石遺構２基，落とし穴２基，土坑３基が検出され，土器片や水晶製石鏃などが出土した。

縄文時代中期から後期は，土坑１基が検出され，阿高式土器，西平式土器，石鏃，スクレイパー，敲石，磨石などが出土した。

古代～中世該当層では，落とし穴１基が検出され，遺構の攪乱された埋土内から縄文時代晩期の黒川式土器に比定できる土器片が１点出土した。

他に，近世の溝状遺構が２条検出され，遺構の埋土内から陶器，火打ち石，寛永通宝，軽石製品，縄文時代晩期の黒川式土器に比定できる土器が出土した。



第１図　東九州自動車道（大隅ＩＣ～末吉財部ＩＣ間）建設関連の遺跡位置図

序　　文

この報告書は，東九州自動車道13次区間（大隅ＩＣ～末吉財部ＩＣ間）の建設に伴って，平成17年度に実施した曽於市末吉町（旧曽於郡末吉町）に所在する関山遺跡と，平成18年度に実施した同市大隅町（旧曽於郡大隅町）に所在する鳥居川遺跡，チシャノ木遺跡の発掘調査の記録です。

関山遺跡は，旧石器時代ナイフ形石器文化期と細石器文化期，そして縄文時代早期から晩期，古代から中世，近世の複合遺跡です。特に，縄文時代早期において，19基の落とし穴が検出され，前平式土器，吉田式土器，石鏃などが出土しました。なかでも，縄文時代早期後葉で，赤色顔料が詰まったまま入れ子状で発見された変形撚糸文土器は，この時代の類例が少なく大変注目されます。

鳥居川遺跡は，縄文時代早期及び晩期の複合遺跡です。

チシャノ木遺跡は，旧石器時代ナイフ形石器文化期，縄文時代早期，後期，晩期，古代から中世，近世の複合遺跡です。なかでも，古代から中世の落とし穴は，形状が細長い箱形をしており，類例が少なく今後の研究に貴重な資料となりました。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力をいただいた国土交通省大隅河川工事事務所や曽於市教育委員会及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　宮　原　景　信

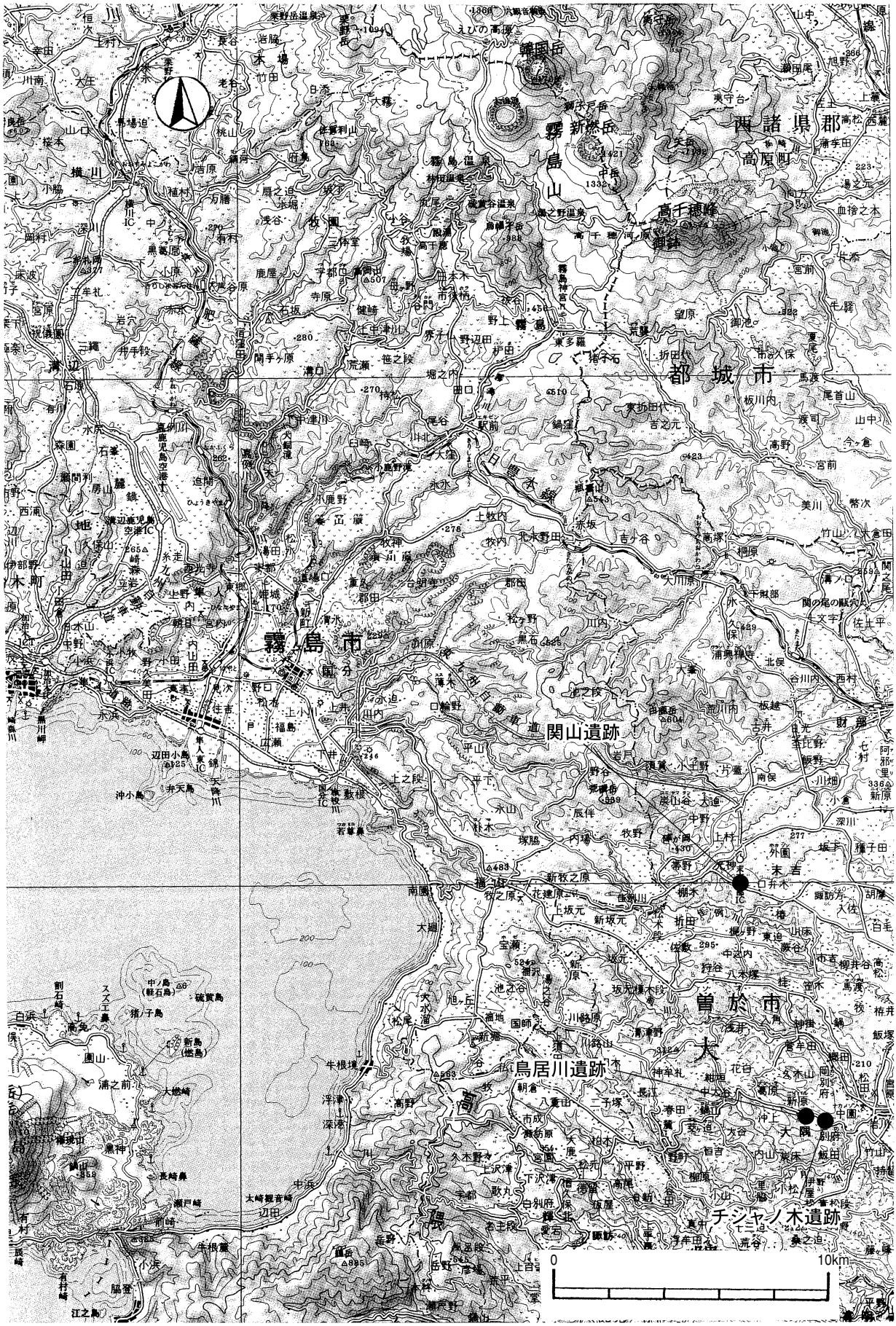
報　告　書　抄　録

ふりがな	せきやまいせき　とりいがわいせき　ちしゃのきいせき
書名	関山遺跡　鳥居川遺跡　チシャノ木遺跡
副書名	東九州自動車道建設（大隅IC～末吉財部IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	125
編集者名	長﨑慎太郎・松下建生・立神次郎・寒川朋枝・岩下直樹・木内敏生
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森　2番1号　TEL0995－48－5811
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
せきやまいせき 関山遺跡	かごしまけん 鹿児島県 そおし 曽於市 すえよしちょう 末吉町 すわかた 諏訪方 905番地	46217	66－168	31° 40′ 13″	130° 56′ 16″	確認調査 2003.01.11 ～ 2003.03.20 本調査 2005.05.09 ～ 2005.10.28	4,260	東九州自動車道建設（大隅IC～末吉財部IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査
とりいがわいせき 鳥居川遺跡	かごしまけん 鹿児島県 そおし 曽於市 おおすみちょう 大隅町 いわがわ 岩川 とりいがわ 鳥居川	46217	63－257	31° 35′ 29″	130° 57′ 54″	確認・本調査 2005.05.09 ～ 2005.09.28	3,100	
ちしゃのきいせき チシャノ木遺跡	かごしまけん 鹿児島県 そおし 曽於市 おおすみちょう 大隅町 いわがわ 岩川 ちしゃのき チシャノ木	46217	63－258	31° 35′ 27″	130° 58′ 04″	確認・本調査 2006.10.04 ～ 2006.11.28	7,400	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	備考
関山遺跡	集落 包含地	旧石器時代 縄文時代 古代～中世 近世	礫群 集石，落とし穴，竪穴住居跡 溝状遺構 掘立柱建物跡	ナイフ形石器，細石刃 吉田式，変形撚糸文，岩崎式，入佐式土器，石鏃他 土師器 薩摩焼，染付	
鳥居川遺跡	散布地	縄文時代		押型文，塞ノ神式，黒川式土器，石鏃他	
チシャノ木遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代 古代～中世 近世	集石，落とし穴，土坑 落とし穴 溝状遺構	削器 押型文,西平式,黒川式土器,石鏃他 陶器，火打ち石，寛永通宝,軽石製品他	

遺跡の概要	関山遺跡は，旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。特に，縄文時代早期の落とし穴が19基検出されたことと，赤色顔料の詰まった縄文時代早期の変形撚糸文土器が入れ子状で出土したことは，今後の研究に貴重な資料となると思われる。 鳥居川遺跡では，遺構は確認されなかったが，縄文時代晩期の土器が，深鉢と浅鉢がセットで出土している。 チシャノ木遺跡は，関山遺跡と同じく旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。特に，縄文時代晩期の遺物が主体を占め，組織痕土器も出土している。また，古代～中世の細長い箱形をした落とし穴も検出されており，注目される。


霧島市
都城市
曽於市
関山遺跡
鳥居川遺跡
チジャノ木遺跡
霧島山
新燃岳
高千穂峰
韓国岳
西諸県郡
高原町
0
10km

遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は，東九州自動車道建設（大隅ＩＣ～末吉財部ＩＣ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本報告書の，関山遺跡は鹿児島県曽於市末吉町諏訪方905番地ほか，鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡は同県同市大隅町岩川鳥居川1441－１ほかに所在する。

3　発掘調査は，日本道路公団鹿児島工事事務所（現西日本高速道路株式会社）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査を担当した。

4　発掘調査事業は，関山遺跡を平成17年５月９日から平成17年10月28日にかけて実施し，鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡を平成18年５月９日から平成18年11月28日にかけて実施し，整理作業及び報告書作成は平成19年度に実施した。本報告書は，国土交通省九州地方整備局大隅国道河川事務所の委託を受けて作成したものである。

5　遺物番号は，関山遺跡と鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡それぞれで通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は，各図ごとに示した。

7　本書で用いたレベル数値は，道路公団鹿児島工事事務所が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査における図面作成，写真撮影は，各担当者が行った。

9　関山遺跡の遺構図のトレース及び出土状況図の作成は，整理作業員の協力を得て長﨑が行った。土器の実測・トレースは彌榮久志と整理作業員の協力を得て長﨑が行った。石器の実測・トレースは，馬籠亮道と寒川と整理作業員の協力を得て岩下と立神が行った。

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡の遺構図のトレースは整理作業員の協力を得て寒川が行った。出土状況図の作成は，内村光伸と整理作業員の協力を得て松下が行った。土器の実測・トレースは整理作業員の協力を得て寒川と松下が行った。石器の実測・トレースは整理作業員の協力を得て寒川が行った。

石器の実測・トレースの一部は，㈱九州文化財研究所，国際航業㈱に委託した。

10　参考資料として放射性炭素年代測定を依頼し，その結果を掲載した。

11　遺物の写真撮影・現像は，吉岡康弘，福永修一が行った。

12　関山遺跡の遺物注記の記号はＳＹ，鳥居川遺跡はトリ，チシャノ木遺跡のはチシャで表記してある。

13　本報告書の執筆・編集は長﨑慎太郎，松下建生，立神次郎，寒川朋枝，岩下直樹，内山伸明，木内敏生が行った。各項目の執筆分担は以下のとおりである。

Ⅰ・・・・・・・・・・・・・・・立神次郎
Ⅱ・・・立神次郎・長﨑慎太郎・松下建生
Ⅲ・・・立神次郎・長﨑慎太郎・松下建生
Ⅳ・・・・・・・・・長﨑慎太郎・松下建生
Ⅴ・・・長﨑慎太郎・岩下直樹・立神次郎
木内敏生・内山伸明
Ⅵ・・・・松下建生・寒川朋枝・内山伸明

14　本書で掲載した出土遺物・図面・写真等は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。

巻頭図版１～３
序　　文
報告書抄録
遺跡位置図
例　　言

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに　1
　第１節　調査に至るまでの経過　1
　第２節　大隅IC～末吉財部IC間の遺跡の概要　2
第Ⅱ章　発掘調査の経過　7
　第１節　調査の経緯　7
　第２節　調査の組織　8
　第３節　調査の経過（日誌抄）　9
第Ⅲ章　遺跡の位置と環境　15
　第１節　地理的環境　15
　第２節　歴史的環境　15
第Ⅳ章　遺跡の層位　24
第Ⅴ章　関山遺跡　25
　第１節　発掘調査の方法　25
　第２節　旧石器時代の調査成果　33
　　第１項　分布状況　33
　　第２項　遺構　33
　　第３項　遺物　37
　第３節　縄文時代の調査成果　43
　　第１項　分布状況　43
　　第２項　縄文時代早期　43
　　1　遺構　43
　　2　土器　73
　　3　石器　84
　　第３項　縄文時代中期　97
　　1　遺構　97
　　2　土器・石器　102
　　第４項　縄文時代後・晩期　103
　　1　遺構　103
　　2　土器　103
　　3　石器　110
　第４節　古墳時代・古代・中世の調査成果　114
　　第１項　分布状況　114
　　第２項　遺構　114
　　第３項　遺物　119
　第５節　近世・近代の調査成果　120
　　第１項　分布状況　120
　　第２項　遺構　120
　　第３項　遺物　120
　第６節　まとめ　129
　　第１項　遺構・遺物について　129
　　第２項　縄文時代の落とし穴状遺構について　130
　第７節　化学分析の結果　132
　　第１項　縄文土器に貯蔵されていた赤色顔料　132
　　第２項　放射性炭素年代測定　136
第Ⅵ章　鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡　145
　第１節　発掘調査の方法と層位　145
　　第１項　発掘調査の方法　145
　　第２項　層位　145
　第２節　鳥居川遺跡の調査成果　152
　　第１項　縄文時代の調査成果　152
　　1　調査の概要　152
　　2　遺物　152
　第３節　チシャノ木遺跡の調査成果　160
　　第１項　旧石器時代の調査成果　160
　　1　調査の概要　160
　　2　遺物　160
　　第２項　縄文時代の調査成果　161
　　1　調査の概要　161
　　2　遺構　161
　　3　遺物　166
　　第３項　古代～中世の調査成果　210
　　1　調査の概要　210
　　2　遺構　211
　　3　遺構内遺物　211
　　第４項　近世の調査成果　212
　　1　調査の概要　212
　　2　遺構　212
　　3　遺構内遺物　212
　第４節　まとめ　215
　　第１項　縄文時代の遺構・遺物　215
　　第２項　古代～中世の遺構　216
　　第３項　近世の遺構　217
　第５節　化学分析の結果　218
　　第１項　放射性炭素年代測定　218
　　第２項　縄文土器に塗布された赤色顔料　223
写真図版
あとがき

挿　図　目　次

第１図　東九州自動車（大隅IC～末吉財部IC間）
道建設関連の遺跡位置図…… 6
第２図　曽於市と周辺の主な遺跡地図…… 19
第３図　関山遺跡周辺の遺跡地図…… 20
第４図　鳥居川・チシャノ木遺跡周辺の遺跡地図… 22
第５図　土層断面図…… 24

関　山　遺　跡

第６図　グリッド・トレンチ配置図…… 25
第７図　周辺地形図…… 26
第８図　土層断面図⑴…… 27
第９図　土層断面図⑵…… 28
第10図　土層断面図⑶…… 29
第11図　土層断面図⑷…… 30
第12図　土層断面図⑸…… 31
第13図　旧石器時代の遺構配置図…… 33
第14図　旧石器時代の礫群…… 34
第15図　旧石器時代の層別出土状況図…… 35
第16図　旧石器時代の遺物出土状況図…… 36
第17図　旧石器時代の石器⑴…… 38
第18図　旧石器時代の石器⑵…… 39
第19図　旧石器時代の石器⑶…… 40
第20図　旧石器時代の石器⑷…… 41
第21図　縄文時代の時期別遺構配置・遺物
出土状況図…… 43
第22図　縄文時代早期の遺構配置図…… 45
第23図　縄文時代早期の集石１号・２号…… 46
第24図　縄文時代早期の集石３号…… 47
第25図　縄文時代早期の集石４号・５号…… 48
第26図　縄文時代早期の集石６号・７号…… 49
第27図　縄文時代早期の集石８号…… 50
第28図　縄文時代早期の集石９号…… 51
第29図　縄文時代早期の土坑１号・２号…… 52
第30図　縄文時代早期の落とし穴状遺構１号…… 54
第31図　縄文時代早期の落とし穴状遺構２号…… 55
第32図　縄文時代早期の落とし穴状遺構３号…… 56
第33図　縄文時代早期の落とし穴状遺構４号…… 57
第34図　縄文時代早期の落とし穴状遺構５号…… 58
第35図　縄文時代早期の落とし穴状遺構６号…… 59
第36図　縄文時代早期の落とし穴状遺構７号…… 60
第37図　縄文時代早期の落とし穴状遺構８号…… 61
第38図　縄文時代早期の落とし穴状遺構９号…… 62
第39図　縄文時代早期の落とし穴状遺構10号…… 63
第40図　縄文時代早期の落とし穴状遺構11号…… 64
第41図　縄文時代早期の落とし穴状遺構12号…… 65
第42図　縄文時代早期の落とし穴状遺構13号…… 66
第43図　縄文時代早期の落とし穴状遺構14号…… 67
第44図　縄文時代早期の落とし穴状遺構15号…… 68
第45図　縄文時代早期の落とし穴状遺構16号…… 69
第46図　縄文時代早期の落とし穴状遺構17号…… 70
第47図　縄文時代早期の落とし穴状遺構18号･19号… 71
第48図　縄文時代早期の土器出土状況図…… 73
第49図　縄文時代早期の土器⑴…… 74
第50図　縄文時代早期の土器⑵…… 75
第51図　縄文時代早期の土器⑶…… 76
第52図　縄文時代早期土器（98，99）の出土状況…… 77
第53図　縄文時代早期の土器⑷…… 77
第54図　縄文時代早期の土器⑸…… 78
第55図　縄文時代早期の土器⑹…… 79
第56図　縄文時代早期の土器⑺…… 80
第57図　縄文時代早期土器（107）の出土状況 …… 81
第58図　縄文時代早期の土器⑻…… 82
第59図　縄文時代早期の石器出土状況図…… 85
第60図　縄文時代早期の石器⑴…… 87
第61図　縄文時代早期の石器⑵…… 88
第62図　縄文時代早期の石器⑶…… 89
第63図　縄文時代早期の石器⑷…… 90
第64図　縄文時代早期の石器⑸…… 91
第65図　縄文時代早期の石器⑹…… 92
第66図　縄文時代早期の石器⑺…… 93
第67図　縄文時代早期の石器⑻…… 94
第68図　縄文時代中期の遺構配置・遺物
出土状況図…… 97
第69図　縄文時代中期の落とし穴状遺構１号…… 98
第70図　縄文時代中期の落とし穴状遺構２号…… 99
第71図　縄文時代中期の落とし穴状遺構３号…… 100
第72図　縄文時代中期の落とし穴状遺構４号･５号… 101
第73図　縄文時代中期の遺物…… 102
第74図　縄文時代後・晩期の遺構配置・土器
出土状況図…… 103
第75図　縄文時代後期の竪穴住居跡…… 104
第76図　縄文時代後期の土器…… 105
第77図　縄文時代晩期の土器⑴…… 106
第78図　縄文時代晩期の土器⑵…… 107
第79図　縄文時代後・晩期の石器出土状況図…… 110
第80図　縄文時代後・晩期の石器⑴…… 111
第81図　縄文時代後・晩期の石器⑵…… 112
第82図　縄文時代後・晩期の石器⑶…… 113
第83図　古墳時代・古代・中世の遺構配置・遺物
出土状況図…… 114
第84図　中世の溝状遺構全体図…… 115
第85図　中世の溝状遺構⑴…… 116
第86図　中世の溝状遺構⑵…… 117
第87図　中世の溝状遺構⑶…… 118

第88図　古墳時代・古代・中世の遺物…… 119
第89図　近世の遺構配置・遺物出土状況図…… 120
第90図　近世の掘立柱建物跡配置図…… 121
第91図　近世の掘立柱建物跡１号…… 122
第92図　近世の掘立柱建物跡２号…… 123
第93図　近世の掘立柱建物跡３号…… 124
第94図　近世の掘立柱建物跡４号…… 125
第95図　近世の遺物…… 126
第96図　近世・近代の遺物…… 127
第97図　赤色顔料付着遺物の出土遺跡地図…… 135

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡

第１図　遺跡周辺地形及びグリッド図…… 146
第２図　トレンチ配置図…… 147
第３図　トレンチ土層断面図１…… 148
第４図　トレンチ土層断面図２…… 149
第５図　トレンチ土層断面図３…… 150
第６図　トレンチ土層断面図４…… 151

鳥居川遺跡

第７図　縄文時代遺物出土分布図…… 152
第８図　縄文時代早期土器…… 153
第９図　縄文時代早期土器出土分布図…… 153
第10図　縄文時代晩期土器出土分布図…… 154
第11図　縄文時代晩期土器⑴…… 155
第12図　縄文時代晩期土器⑵…… 156
第13図　縄文時代石器出土分布図…… 158
第14図　縄文時代石材別出土分布図…… 158
第15図　縄文時代石器…… 159

チシャノ木遺跡

第16図　旧石器出土状況…… 160
第17図　旧石器時代遺物…… 160
第18図　縄文時代早期遺構配置図…… 161
第19図　縄文時代早期集石遺構…… 162
第20図　縄文時代早期落とし穴…… 164
第21図　縄文時代早期土坑…… 165
第22図　縄文時代遺物出土分布図…… 167
第23図　縄文時代早期～後期土器（１～５類）
出土分布図…… 168
第24図　縄文時代早期～後期土器…… 169
第25図　縄文時代後期土器…… 170
第26図　縄文時代晩期土器（６a類）出土分布図… 171
第27図　縄文時代晩期土器⑴…… 172
第28図　縄文時代晩期土器⑵…… 173
第29図　縄文時代晩期土器⑶…… 174
第30図　縄文時代晩期土器（６b類）出土分布図… 175
第31図　縄文時代晩期土器⑷…… 176
第32図　縄文時代晩期土器⑸…… 177
第33図　縄文時代晩期土器（６c類）
出土分布図⑴…… 178
第34図　縄文時代晩期土器⑹…… 179
第35図　縄文時代晩期土器（６c類）
出土分布図⑵…… 181
第36図　縄文時代晩期土器⑺…… 182
第37図　縄文時代晩期土器⑻…… 183
第38図　縄文時代晩期土器⑼…… 185
第39図　縄文時代晩期土器⑽…… 186
第40図　縄文時代晩期土器（６c類）
出土分布図⑶…… 187
第41図　縄文時代晩期土器⑾…… 188
第42図　縄文時代晩期土器⑿…… 189
第43図　縄文時代晩期土器⒀…… 190
第44図　縄文時代晩期土器⒁…… 191
第45図　縄文時代晩期土器（６d類）
・その他円盤状土製品出土分布図…… 192
第46図　縄文時代晩期土器⒂…… 193
第47図　縄文時代晩期土器⒃
・その他円盤状土製品…… 194
第48図　縄文時代石器全出土分布図…… 200
第49図　縄文時代石器器種別出土分布図⑴…… 200
第50図　縄文時代石器器種別出土分布図⑵…… 201
第51図　縄文時代石器石材別出土分布図⑴…… 202
第52図　縄文時代石器石材別出土分布図⑵…… 203
第53図　縄文時代石器⑴…… 204
第54図　縄文時代石器⑵…… 205
第55図　縄文時代石器⑶…… 206
第56図　縄文時代石器⑷…… 207
第57図　縄文時代石器⑸…… 208
第58図　縄文時代石器⑹…… 209
第59図　古代～中世遺構配置図…… 210
第60図　古代～中世落とし穴及び遺構内遺物…… 211
第61図　近世遺構配置図…… 212
第62図　近世溝状遺構１・２…… 213
第63図　近世溝状遺構断面図…… 214
第64図　近世溝状遺構内遺物…… 214

本文中写真（チシャノ木遺跡のみ）

写真１　№99の拡大部分…… 182
写真２　組織痕土器モデリング陽像⑴…… 184
写真３　組織痕土器モデリング陽像⑵…… 185
写真４　組織痕土器モデリング陽像⑶…… 191
写真５　年代測定用土器写真（表２・資料№18）… 219

図　版　目　次

関山遺跡
図版１　遺跡空中写真・土層断面・旧石器時代の調査
図版２　縄文時代早期の集石
図版３　縄文時代早期の落とし穴１
図版４　縄文時代早期の落とし穴２
図版５　縄文時代早期の落とし穴３・土器出土状況
図版６　縄文早期土器・中期落とし穴・後期竪穴住居跡
図版７　中世の溝状遺構・近世の掘立柱建物跡
図版８　旧石器時代の石器
図版９　縄文時代早期の土器１
図版10　縄文時代早期の土器２
図版11　縄文時代早期の土器３
図版12　縄文時代早期の土器４
図版13　縄文時代中・後期の土器
図版14　縄文時代晩期の土器
図版15　縄文時代の石器１
図版16　縄文時代の石器２
図版17　縄文時代の石器３
図版18　縄文時代の礫石器・中世の砥石
図版19　古墳時代・中世・近世・近代の遺物
図版20　近世・近代の遺物

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡
図版21　鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡遠景
図版22　確認トレンチ土層断面
図版23　チシャノ木遺跡縄文時代早期の集石・落とし穴
図版24　チシャノ木遺跡縄文時代早期の落とし穴・土坑
図版25　チシャノ木遺跡近世の溝状遺構
図版26　チシャノ木遺跡古代～中世の落とし穴
図版27　鳥居川遺跡出土土器
図版28　チシャノ木遺跡縄文時代晩期土器（６a類）
図版29　チシャノ木遺跡縄文時代晩期土器（６b･６c類）
図版30　チシャノ木遺跡縄文時代晩期土器（６c類）
図版31　チシャノ木遺跡縄文時代晩期土器（６c類）
図版32　チシャノ木遺跡縄文時代晩期土器（６d類）
　　・縄文時代石器

表　目　次

第１表　関山遺跡の周辺遺跡一覧表　21
第２表　鳥居川・チシャノ木遺跡の周辺遺跡一覧表　23

関山遺跡
第３表　旧石器時代石器観察表　42
第４表　縄文時代早期落とし穴状遺構観察表　72
第５表　縄文時代早期土器観察表⑴　83
第６表　縄文時代早期土器観察表⑵　84
第７表　縄文時代早期石器観察表⑴　95
第８表　縄文時代早期石器観察表⑵　96
第９表　縄文時代中期落とし穴状遺構観察表　99
第10表　縄文時代中期土器観察表　102
第11表　縄文時代中期石器観察表　102
第12表　縄文時代後・晩期土器観察表⑴　108
第13表　縄文時代後・晩期土器観察表⑵　109
第14表　縄文時代後・晩期石器観察表　112
第15表　古墳時代・古代・中世遺物観察表　119
第16表　近世・近代遺物観察表　128
第17表　鹿児島県内出土赤色顔料観察表　134

鳥居川遺跡
第１表　鳥居川遺跡出土土器観察表　157
第２表　鳥居川遺跡出土石器観察表　159

チシャノ木遺跡
第３表　旧石器観察表　160
第４表　集石重量計測表　163
第５表　縄文時代出土土器観察表１　194
第６表　縄文時代出土土器観察表２　195
第７表　縄文時代出土土器観察表３　196
第８表　縄文時代出土土器観察表４　197
第９表　縄文時代出土土器観察表５　198
第10表　縄文時代出土石器観察表　208
第11表　古代～中世遺構内遺物観察表　211
第12表　近世遺構内遺物観察表　214
第13表　縄文時代石器器種別出土表　216
第14表　赤色顔料観察表　224

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第１節　調査の経緯

鹿児島県教育委員会は，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所より末吉財部ＩＣ～鹿屋串良ＩＣ間の埋蔵文化財分布調査を実施したところ，当事業区内には，33か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部高速道路対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センターの４者で協議を重ね対応を検討してきたが，途中，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。

その結果，遺跡の緻密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査や確認調査が実施されることになった。

そこで，平成13年７月10日～７月26日にかけて分布調査で判明した33か所の遺跡についての詳細分布調査を，平成13年９月17日～10月26日，平成13年12月３日～12月25日の２回にかけて遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を，さらに，平成13年10月１日～平成14年３月22日にかけて関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査を実施した。

関山遺跡は，平成13年10月１日から12月21日（実働44日間）に関山西遺跡と並行して確認調査を実施した。

調査は，トレンチを13か所設定し行った。各トレンチともに表土及び中間の火山灰層は重機で除去し遺物の出土する可能性のある地層については人力による掘削で対応した。一方，調査の過程で北側に遺跡範囲が拡大した。

確認調査の結果，古代から縄文時代晩期が9,700㎡，縄文時代中期が4,300㎡，縄文時代早期が10,600㎡，縄文時代草創期・旧石器時代が7,850㎡の範囲で遺物包含層が確認された。

本遺跡については，現状保存や設計変更が不可能であることから，記録保存のための緊急発掘調査（本調査）を実施することとなった。

本調査は，平成17年５月９日から平成17年10月28日まで，5,931㎡（延面積20,325㎡）を対象として，埋蔵文化財の記録保存を図ることになり，埋蔵文化財センターが実施した。

調査の結果，旧石器時代該当層からは，礫群２基をはじめ削器・剥片・チップなどの遺物が出土した。

縄文時代早期に該当する遺構は，集石９基，落とし穴19基，土坑２基が検出され，遺物は，吉田式土器，前平式土器などの土器や石鏃・石匙・磨石・石斧などの石器が出土している。

縄文時代中期に該当する遺構は，落とし穴５基が検出され，遺物は，少量の土器片が出土した。

縄文時代後期～晩期に該当する遺構は，竪穴住居跡１軒が検出され，遺物は，深鉢形土器や浅鉢形土器のほか磨石等の石器が出土した。

古代～中世に該当する遺構は，古道８条が検出され，遺物は，土師器が出土した。

近世の遺構は掘立柱建物跡４棟が検出された。

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡の調査は，平成18年５月９日から平成18年11月28日（実働110日）まで実施した。両遺跡とも確認調査を行った後，本調査を実施した。工事の関係上，チシャノ木遺跡の調査を平成18年５月９日から平成18年９月28日まで，鳥居川遺跡の調査を平成18年10月３日から平成18年11月28日まで実施し，道路建設予定地内すべての調査を終了した。

調査の結果，鳥居川遺跡は縄文時代早期から縄文時代晩期にかけての複合遺跡，チシャノ木遺跡は，旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明した。

鳥居川遺跡では，遺構は確認できなかったが，遺物は，縄文時代早期の押型文土器，塞ノ神式土器や縄文時代晩期の黒川式土器に比定できる土器や石鏃が出土した。

チシャノ木遺跡では，旧石器時代該当層から削器が１点出土した。

縄文時代早期に該当する遺構は，集石２基，落とし穴２基，土坑３基が検出され，遺物は，押型文土器，無文土器，石鏃，スクレイパー，石斧片，磨石，敲石などが出土した。

縄文時代前期～後期に該当する遺構は，検出されなかったが，遺物は，形式は不明だが前期の土器，後期の阿高式土器や西平式に比定できる土器，石鏃，異形石器，石斧片，磨石，石皿片などが出土した。

縄文時代晩期に該当する遺構は，検出されなかったが，遺物は，黒川式土器に比定できる深鉢形土器や浅鉢形土器，組織痕をもつ中華鍋形をした鉢形土器，石鏃，スクレイパー，異形石器，石斧片などが出土した。

古代～中世に該当する遺構は，落とし穴１基が検出され，遺構の埋土内から縄文時代晩期の黒川式土器に比定できる土器が１点出土した。

他に，近世の溝状遺構が２条検出され，遺構の埋土内から，陶器，軽石製品，火打ち石，寛永通宝，縄文時代晩期の黒川式土器に比定できる土器片などが出土した。

第２節　調査の組織

平成13年度調査体制（関山遺跡確認調査）

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，
　　鹿児島県土木部高速道路対策室
調査主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者　鹿児島県立埋蔵文化財センター　所長　井上　明文
調査企画者　〃　次長兼総務課長　黒木　友幸
　　〃　主任文化財主事兼調査課長　新東　晃一
　　〃　調査課長補佐　立神　次郎
　　〃　主任文化財主事兼
　　第二調査係長　彌榮　久志
　　〃　主任文化財主事　長野　眞一
調査担当者　〃　文化財主事　岩澤　和徳
　　〃　文化財主事　山崎　省一
　　〃　文化財研究員　桑波田武志
事務担当者　〃　総務係長　前田　昭信
　　〃　主査　栗山　和己

平成17年度調査体制（関山遺跡本調査）

事業主体者　西日本高速道路株式会社鹿児島工事事務所，
　　鹿児島県土木部高速道路対策室
調査主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者　鹿児島県立埋蔵文化財センター　所長　上今　常雄
調査企画者　〃　次長兼総務課長　有川　昭人
　　〃　次長兼調査第一課長
　　兼南の縄文調査室長　新東　晃一
　　〃　調査第二課長　立神　次郎
　　〃　主任文化財主事兼
　　調査第二課第一調査係長　彌榮　久志
調査担当者　〃　主任文化財主事兼
　　調査第二課第一調査係長　彌榮　久志
　　〃　文化財主事　井ノ上秀文
　　〃　文化財主事　鶴田　靜彦
　　〃　文化財主事　内山　伸明
　　〃　文化財研究員　木内　敏生
　　〃　文化財研究員　馬籠　亮道
　　〃　文化財調査員　市耒　真澄
事務担当者　〃　主幹兼総務係長　平野　浩二
　　〃　主事　福山恵一郎

平成18年度調査体制（鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡確認・本調査）

事業主体者　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事
　　務所，鹿児島県土木部高速道路対策室
調査主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者　鹿児島県立埋蔵文化財センター所長　(～H18.7.31)上今　常雄
　　〃　(H18.8. 1～)宮原　景信
調査企画者　〃　次長兼総務課長　有川　昭人
　　〃　次長兼南の縄文調査室長　新東　晃一
　　〃　調査第二課長　立神　次郎
　　〃　主任文化財主事兼
　　調査第二課第一調査係長　彌榮　久志
　　〃　主任文化財主事　井ノ上秀文
調査担当者　〃　文化財主事　高岡　和也
　　〃　文化財主事　田畑　哲治
　　〃　文化財主事　松下　建生
　　〃　文化財調査員　(～H18.8.28)藤井　大祐
　　〃　文化財調査員　(H18.9. 4～)橋口　拓也
事務担当者　〃　総務係長　寄井田正秀
　　〃　主事　五百路　真
指導助言者　鹿児島大学法文学部教授　森脇　広

平成19年度調査体制（整理・報告書作成）

事業主体者　国土交通省大隅河川国道事務所，鹿児島県
　　土木部高速道路対策室
作成主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成責任者　鹿児島県立埋蔵文化財センター　所長　宮原　景信
作成企画者　〃　次長兼総務課長　平山　章
　　〃　次長兼南の縄文室長　新東　晃一
　　〃　調査第二課長　立神　次郎
　　〃　主任文化財主事兼
　　調査第二課第一調査係長　彌榮　久志
関山遺跡作成担当者
　　〃　調査第二課長　立神　次郎
　　〃　文化財研究員　長﨑慎太郎
　　〃　文化財調査員　岩下　直樹
鳥居川・チシャノ木遺跡作成担当者
　　〃　文化財主事　松下　建生
　　〃　文化財調査員　寒川　朋枝
事務担当者　〃　総務係長　寄井田正秀
　　〃　主事　五百路　真
報告書作成検討委員会　平成19年12月17日　宮原所長ほか11名
報告書作成指導委員会　平成19年12月13日　新東次長ほか３名
企画担当者　井ノ上秀文　髙岡和也　馬籠亮道
指導助言者　鹿児島大学法文学部准教授　本田　道輝
　　福岡大学人文学部准教授　桃崎　祐輔

助言者・協力者
　赤塚次郎　尾関清子　成瀬正勝　東和幸　小村辰也
　堀木真美子　田村哲　岩本佳子　相美伊久雄
　宮田栄二　内山伸明　中村和美　関明恵　福永修一
　抜水茂樹　永濵功治　黒川忠広　内村光伸　木内敏生
　岩永勇亮

第３節　調査の経過（日誌抄）

１　関山遺跡

確認調査は，平成13年10月１日から12月21日（実働44日間）に関山西遺跡と並行して13か所にトレンチを設定して実施した。

調査の方法は，各トレンチともに表土及び中間の火山灰層は重機で除去し遺物の出土する可能性のある地層については人力による掘削で対応した。一方，調査の過程で北側に遺跡範囲が拡大した。以下，確認調査の経過は日誌抄により週単位で略述する。

確認調査

平成13年10月１日（月）～10月５日（金）

１～７トレンチの表層より掘り下げ。１トレンチはⅥ層まで掘り下げ。縄文晩期の遺物が出土。２トレンチはⅣ層まで掘り下げ。竪穴住居跡１軒を検出。３トレンチはⅤｂ層まで掘り下げ。４・５トレンチはⅥｂ層まで掘り下げ。６トレンチはⅥａ層まで掘り下げ。溝・道跡らしい遺構を検出。

平成13年10月９日（火）～10月12日（金）

１・３～８トレンチの掘り下げ。１・６トレンチはⅥ層まで掘り下げ。３トレンチはⅤｂ層まで掘り下げ。４トレンチはⅧ層まで掘り下げ。６トレンチは古道跡実測作業。７トレンチはⅤ層まで掘り下げ。８トレンチはⅢ層下面に溝・道跡らしい遺構を検出。

平成13年10月15日（月）～10月19日（金）

１・３～８トレンチの掘り下げ。１・３・５・７トレンチはⅥ層及びⅥｂ層まで掘り下げ。３・５・７トレンチはⅥ層まで掘り下げ。４トレンチはⅨ層まで掘り下げ。６・７トレンチはⅥａ層掘り下げ。古道跡実測作業。８トレンチは遺構検出及び実測。

平成13年10月23日（火）～10月26日（金）

１・３・５～７トレンチの掘り下げ。１トレンチはⅦ層まで掘り下げ。３・５トレンチはⅨ層まで掘り下げ。６トレンチは出土遺物取り上げ及びⅥａ層掘り下げ。７トレンチはⅨ層掘り下げ。落とし穴遺構を検出。

平成13年11月２日（月）～11月９日（金）

３・４・６・８～10トレンチの掘り下げ。４トレンチはⅩⅡ層まで掘り下げ。ⅩⅠ層遺物取り上げ。６トレンチはⅧ層掘り下げ。８トレンチはⅥｂ層掘り下げ。９トレンチはⅢ層掘り下げ。10トレンチは古道（近代？）を検出。

平成13年11月12日（月）～11月16日（金）

３・４・６～10トレンチの掘り下げ。３トレンチはⅩⅣ層の掘り下げ。４トレンチはⅩⅡ層まで掘り下げ。土坑写真撮影。６トレンチはⅨ層掘り下げ。落とし穴実測。Ⅷ層の出土遺物取り上げ。８トレンチはⅧ層掘り下げ。９トレンチはⅥ層掘り下げ。10トレンチはⅩ層掘り下げ。Ⅷ層より塞ノ神式（Ａａ）土器が出土。

平成13年11月19日（月）～11月22日（木）

１・３・６～10トレンチの掘り下げ。１・３・６トレンチはⅩⅣ層の掘り下げ。土層断面実側・完掘状況写真撮影。１トレンチは埋め戻し。７トレンチはⅩ層掘り下げ。落とし穴実測。Ⅷ層の出土遺物取り上げ。８トレンチはⅩ層掘り下げ。Ⅶ層出土遺物取り上げ。９トレンチはⅧ層掘り下げ。10トレンチはⅩⅠ層掘り下げ。

平成13年12月３日（月）～12月７日（金）

２～11トレンチの掘り下げ。２トレンチは竪穴住居跡実測後埋め戻し作業。３トレンチは埋め戻し作業。４トレンチは土坑？の掘り下げ及び実測。５・６・９トレンチはⅩⅣ層の掘り下げ。７トレンチは完掘状況写真撮影。８トレンチは土坑平面実測及び埋め戻し。９トレンチは旧石器時代のマイクロブレード出土。10トレンチはⅩⅢ層掘り下げ。11トレンチは表層よりⅦ層まで掘り下げ。

平成13年12月10日（月）～12月14日（金）

４～６・９・11～13トレンチの掘り下げ。４・５トレンチはⅩⅦ層掘り下げ及び完掘状況写真撮影。土層断面実測。６トレンチは旧石器時代の包含層掘り下げ。９トレンチⅩⅦ層掘り下げ。11トレンチはⅧ層の掘り下げ。７トレンチは完掘状況写真撮影。11トレンチはⅩⅢ層の掘り下げ。12トレンチＡはⅧ層まで掘り下げ。12トレンチＢはⅤ層掘り下げ。出土遺物取り上げ。13トレンチはⅩⅣ層の掘り下げ及び土層断面実測。

平成13年12月17日（月）～12月20日（木）

４～６・９・11～13トレンチの掘り下げ。４・５トレンチは土層断面実測及び埋め戻し作業。６・９トレンチはⅩⅦ層掘り下げ及び埋め戻し。11トレンチは土層断面実側。12トレンチＢはⅧ層掘り下げ及び埋め戻し作業。13トレンチは埋め戻し作業。調査終了。トレンチ位置図及び調査成果のまとめ。

確認調査の結果，古代から縄文時代晩期にかけては9,700㎡，縄文時代中期が4,300㎡，縄文時代早期が10,600㎡，縄文時代草創期・旧石器時代が7,850㎡の範囲で遺物包含層が確認された。本遺跡については，現状保存や設計変更が不可能であることから，記録保存のための緊急発掘調査（本調査）を実施することとなった。

本調査

本調査は，平成17年５月９日（月）から平成17年10月28日（金）に終了した。以下，本調査の調査概要は日誌抄により週単位で略述する。

平成17年５月９日（火）～５月13日（金）

調査器材等の確認，調査方針及び調査方法の確認。調査区域の確認。重機による表土剥ぎ作業。南側（唐尾遺跡側）確認トレンチ設定作業。グリッド杭打ち作業。作業員へのオリエンテーション。環境整備。Ｆ・Ｇ－26～31区の東壁の精査。表土残土層掘り下げ及び精査作業。Ｈ－25～28区，Ｆ・Ｇ－27区のＩｂ層掘り下げ。Ｆ～Ｈ

－29～31区の東壁の精査。表土層及びⅡ層の残土掘り下げ。御池火山灰層まで作成部分の範囲図作成。Ｇ－30・31区，Ｈ－25～27区のⅢ層掘り下げ。Ｆ・Ｇ－26・27区のⅣ層掘り下げ。関山・南班：１～３トレンチ掘り下げ。環境整備。

平成17年５月16日（月）～５月20日（金）

Ｈ－25～28区，Ｇ－30・31区のⅡ層黒色土上面の検出及び掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－25～27区の御池火山灰層上面の検出作業。Ｆ・Ｇ－28・29・32区のⅢ層黒褐色土上面の検出及び掘り下げ作業。Ｈ－25～27区のⅢ層遺物出土状況実測作業。Ｆ～Ｈ－25・26・31区，Ｈ－27区，Ｆ－30区のⅢ層黒褐色土掘り下げ作業。Ｈ－25～27区のⅢ層遺物出土状況実測作業。Ｆ～Ｈ－24～26区，Ｈ－27区，Ｆ・Ｇ－28区，Ｆ～Ｈ－29～31区のⅢ層黒色土掘り下げ作業及びⅣ層上面検出。

関山・南班：１～３トレンチⅣ層掘り下げ。１トレンチⅣ層より遺物出土。遺物出土状況平板実測。トレンチ配置図作成。上今所長視察，新東次長，繁昌主任来跡（５月16日）

平成17年５月23日（月）～５月27日（金）

Ｇ・Ｈ－21～25区，Ｆ－26・27区，Ｆ～Ｈ－28区，Ｆ～Ｈ－29・30区，Ｇ・Ｈ－31・32区，Ｅ・Ｆ－26・27区，Ｆ－28区のⅢ層黒色土の掘り下げ及びⅣ層上面の検出作業。Ｇ・Ｈ－25区，Ｇ・Ｈ－30～32区のⅢ層遺物出土状況実測作業及び遺物取り上げ。Ｆ～Ｈ－20～24区の表層からⅢ層掘り下げ及びⅣ層上面の検出。Ｆ～Ｈ－20～22区，Ｇ・Ｈ－23区のⅣ層黒褐色土掘り下げ。Ｆ～Ｈ－29～32区，Ｇ－28区のⅣ層上部掘り下げ。縄文時代晩期の遺物出土。Ｆ～Ｈ－19～21区，Ｇ・Ｈ－21区Ⅳ層黒褐色土掘り下げ。溝状遺構検出。一部硬化面を確認。Ｆ～Ｈ－28～32区のⅣｂ層御池火山灰層掘り下げ。Ⅳａ層の残存部分より縄文土器が出土。Ｈ－27区土坑掘り下げ。関山・南班：１（14Ｔ）～３（16Ｔ）トレンチⅣ～Ⅷ層掘り下げ。有川次長視察，平野主幹，立神課長来跡（５月24日）。日本道路公団鹿児島工事事務所庶務課長，工務課長来跡（５月26日）。

平成17年６月１日（水）～６月３日（金）

Ｆ～Ｈ－25区の北側に幅３ｍのトレンチを設定し，確認トレンチのⅣｂ層～Ｖａ層掘り下げ。Ｆ～Ｈ－27・29区の北側に幅３ｍのトレンチを設定し，確認トレンチⅣｂ層～Ｖａ層掘り下げ。Ｆ～Ｈ－28・29区の北側に幅３ｍの確認トレンチを設定し，Ⅳｂ層～Ｖａ層掘り下げ。Ｆ～Ｈ－28・29区のⅣｂ層上面のコンター図作成。Ｆ～Ｈ－25～32区コンター図作成。Ｈ－21～23区のⅣｂ層上面のコンター図作成。Ｆ～Ｈ－25・27・29区の北側に幅３ｍのトレンチを設定し，Ｖ層及びⅥｂ層掘り下げ。Ｆ～Ｈ－19～21区の古道精査後写真撮影・実測準備作業。関山・南班：14トレンチ薩摩層まで掘り下げ。16・17トレンチの縄文時代早期包含層掘り下げ。16トレンチの縄文時代早期の土器片出土。鷲東文化財課長視察，青﨑埋蔵文化財係長，上今所長，立神課長来跡（６月３日）。

平成17年６月６日（月）～６月10日（金）

Ｆ～Ｈ－25・27・29区の北側に幅３ｍの確認トレンチのⅥａ層～Ⅶ層掘り下げ作業。薩摩層上面検出。27区より遺物出土。Ｆ～Ｈ－19～21区の古道の掘り下げ後実側作業。断面実測のため掘り下げ。Ｇ・Ｈ－４区Ⅵａ層青灰色土上面の精査作業。Ｅ～Ｇ－15～19区Ⅳ層上面検出後精査，削平状況平板実測。Ｅ～Ｇ－18・19区Ⅳａ層の掘り下げ。Ｆ・Ｇ－22・23区のⅣ層からⅥ層掘り下げ。Ｆ～Ｈ－25・27・29区のⅥ～Ⅷ層掘り下げ。Ｆ～Ｈ－25区北トレンチ東側部分のⅦ・Ⅷ層掘り下げ後出土状況実測。精査後写真撮影。遺物取り上げ。Ｆ～Ｈ－27区北トレンチのⅦ・Ⅷ層掘り下げ後出土状況実測。精査後写真撮影。遺物取り上げ。Ｆ～Ｈ－29区北トレンチのⅦ・Ⅷ層遺物出土状況実測作業及び遺物取り上げ後Ⅸ層の掘り下げ。Ｈ－28区の竪穴住居跡精査後写真撮影。平面実測及び埋土堆積状況断面実測作業。Ｆ～Ｈ－26～29区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ。Ｅ・Ｆ－15・16区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ。Ｅ～Ｇ－17・18区のⅣａ・Ⅳｂ層掘り下げ。Ｅ～Ｇ－20・21区古道掘り下げ後実測。Ｆ～Ｈ－22・23・24区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ。関山・南班：16・17トレンチの縄文時代早期包含層の掘り下げ。16トレンチを拡張し，縄文時代早期包含層の掘り下げ。土坑検出及び半截し，埋土掘り下げ。出土遺物取り上げ。14・16トレンチ縄文時代草創期～旧石器時代細石器文化期の掘り下げ。15トレンチ完掘状況写真撮影後埋め戻し。

平成17年６月13日（月）～６月17日（金）

Ｅ・Ｆ－15区のⅨ・Ｘ層の掘り下げ。Ｄ・Ｅ－15区の旧石器時代の包含層掘り下げ。Ｄ～Ｆ－16区のⅦ・Ⅷ層の掘り下げ。Ｄ・Ｅ－16区で変形撚糸文土器出土。精査後出土状況写真撮影。Ｆ－16区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ。Ｅ～Ｇ－17・18区のⅣａ～Ⅵ層の掘り下げ。Ｅ～Ｇ－17区のトレンチのⅦ・Ⅷ層掘り下げ。Ｅ～Ｇ－19区のⅢ・Ⅳ層の掘り下げ。Ｅ～Ｇ－20・21区の古道掘り下げ後実測。Ｆ・Ｇ－22・23区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ。Ｆ・Ｇ－16区のＶ～Ⅶ層掘り下げ。Ｅ～Ｇ－17区の北側に３ｍ幅のトレンチⅣｂ層の掘り下げ。Ｆ・Ｇ－26・27区のⅥ・Ⅶ層の掘り下げ。Ｇ－28・29区のⅣ・Ⅷ層の掘り下げ作業。Ｈ－28区の竪穴住居跡掘り下げ精査後写真撮影。Ｇ－26・27区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ。Ｇ－29区の旧石器時代の包含層掘り下げ。関山・南班：14トレンチ旧石器時代細石器文化期の掘り下げ。16トレンチ縄文時代早期土坑の掘り下げ。土坑の平面及び断面実側作業。側道部分のⅣ層掘り下げ。14及び16トレンチ15～17層（旧石器時代）の掘り下げ。土坑の平面及び断面実側作業。側道部分のⅣ層掘り下げ。遺物出土状況平板実測後取り上げ。

平成17年６月20日（月）～６月24日（金）

Ｅ～Ｇ－17区のⅦ・Ⅷ層の掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－20区の古道の掘り下げ作業。完掘状況写真撮影及び実測作業。Ｆ・Ｇ－25～27区のⅥ～Ⅷ層掘り下げ。遺物及び礫が出土。Ｆ・Ｇ－28区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ。Ｇ－29区のトレンチ旧石器時代包含層掘り下げ作業。Ｈ－28区の竪穴住居跡掘り下げ，精査後写真撮影。Ｅ～Ｇ－17区のⅧ～Ⅹ層掘り下げ。Ｄ・Ｅ－16区で変形撚糸文土器の出土状況実測。Ｅ・Ｇ－19・20区のⅢ層黒色土掘り下げ。Ｆ・Ｇ－21区のⅣｂ・Ⅴ層及びＦ・Ｇ－25区のⅥ・Ⅶ層掘り下げ。Ｆ～Ｈ－26・27区及びＦ・Ｇ－26・27区のⅦ・Ⅷ層の掘り下げ。関山・南班：14トレンチの土層断面実測。16トレンチ完掘状況写真撮影後埋め戻し。

平成17年６月27日（月）～７月１日（金）

Ｆ・Ｇ－19（Ⅲ層）・25～28区Ⅶ・Ⅷ層の掘り下げ。Ｈ－28区縄文晩期の竪穴住居跡実測後掘り下げ作業。Ｆ～Ｈ－25区の北壁土層断面実測作業。Ｆ・Ｇ－21区Ⅴ・Ⅵ層の掘り下げ。Ｆ・Ｇ－19・20区のⅢ層及びⅣａ層掘り下げ。関山・南班：14トレンチ及び側道部分の完掘状況写真撮影後埋め戻し。

平成17年７月４日（月）～７月８日（金）

実測図整理作業，出土遺物水洗及び注記作業。Ｆ～Ｈ－19・20区のⅣａ層掘り下げ作業。Ｄ・Ｅ－23～25区のⅢ層掘り下げ作業。Ｇ・Ｈ－30・32区，Ｃ－６・７区のⅥ層掘り下げ作業。Ｆ～Ｈ－26・27区縄文早期出土遺物取り上げ作業。Ｇ－29区の旧石器時代遺物出土実測後取り上げ作業。Ｃ－４区，Ｄ－４・５区，Ｅ－５区のⅡ層掘り下げ作業。Ｈ－28区縄文晩期の竪穴住居跡掘り下げ後実測作業。Ｄ・Ｅ－23～25区の近世掘立柱建物跡実測作業。

平成17年７月11日（月）～７月15日（金）

Ｄ～Ｆ－15・16区のⅨ層上面コンター図実測作業。Ｄ・Ｅ－16区変形撚糸文土器出土状況写真撮影。Ｄ・Ｅ－17区のⅤ～Ⅷ層掘り下げ。Ｅ～Ｇ－19・20区のⅣｂ層上面検出後コンター図実測作業。Ｆ・Ｇ－21区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－25区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ作業。Ｅ～Ｇ－26～29区の出土遺物実測後取り上げ作業及びⅨ層上面精査。遺構検出作業。Ｇ・Ｈ－30～32区Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ作業。Ｄ・Ｅ－23～25区近世掘立柱建物跡のピット半截掘り下げ作業，実測作業後写真撮影作業。Ｇ・Ｅ－17区の南側Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層掘り下げ作業。Ｆ－19・20区西側５ｍトレンチ掘り下げ作業。Ｇ－29区トレンチ精査。Ｇ・Ｈ－30～32区Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ。

平成17年７月19日（火）～７月22日（金）

Ｄ～Ｆ－14～16区のⅩ層掘り下げ作業。Ｈ－４区26・27区及びＧ・Ｈ－28・29区掘り下げ作業。Ｄ・Ｅ－16区変形撚糸文土器出土状況実測作業。Ｆ－19・20区のⅣｂ層～Ⅴ層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－21区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ作業。Ｈ－26区及びＧ・Ｈ－28・29区の掘り下げ。Ｇ・Ｈ－30～32区のⅥ～Ⅷ層遺物出土状況実測作業後遺物取り上げ作業。Ｄ・Ｅ－23～25区のⅣ層掘り下げ作業。Ｄ－23・24区近世掘立柱建物跡の実測作業後掘り下げ。写真撮影作業。Ｇ－29区の３号集石遺構実側作業。宮崎県議会総合交通流通対策特別委員会議員ほか遺跡見学（７月21日）

平成17年７月25日（月）～７月28日（木）

Ｄ・Ｅ－15・16区のⅨ層掘り下げ作業。Ｆ－19・20区のⅣｂ層～Ⅴ層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－21区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ作業。Ｄ・Ｅ－24・25区のⅢ層掘り下げ。Ｆ・Ｇ－24区のⅦ層掘り下げ作業。Ｇ－27区の集石遺構実測。Ｆ－26区Ⅶ層の５号集石遺構の平・断面実側作業。Ｇ－17区のⅧ層掘り下げ作業。Ｅ－23～25区のⅢ層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－27区の集石遺構実測作業。Ｆ・Ｇ－27区の北側（旧石器時代）確認トレンチ掘り下げ。Ｈ－28・29区の東側（旧石器時代）確認トレンチ掘り下げ。Ｄ－22区の表土剥ぎ及び精査作業。

平成17年８月２日（火）～８月５日（金）

Ｆ－19・20区のⅥ～Ⅷ層掘り下げ作業。Ｇ－20区の南側トレンチⅩ～ⅩⅦ層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－24・25区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－27区北側トレンチの掘り下げ作業。Ｈ－28・29区西側トレンチの掘り下げ作業。Ｄ－24・25区のⅣａ層出土遺物実側後取り上げ作業。Ｄ・Ｅ－26・27区のⅣｂ層～Ⅵ層掘り下げ作業。Ｆ～Ｈ－24・25区の出土遺物実測後遺物取り上げ作業。曽於市末吉町教育委員会遺跡見学10名（８月３日）。

平成17年８月８日（月）～８月10日（水）

Ｆ－19・20区のⅥ～Ⅷ・Ⅸ層掘り下げ作業。Ｅ・Ｆ－24・25区の出土遺物実測後遺物取り上げ作業。掘り下げ作業。Ｄ・Ｅ－23～26区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ作業。Ｅ～Ｇ－25・26区のⅧ層掘り下げ作業。出土遺物実測作業後遺物取り上げ作業。Ｆ・Ｇ－26・27区の集石遺構掘込み面検出作業。Ｈ－28，30区の集石遺構の実測作業。Ｆ・Ｇ－24～26区のⅨ層上面精査作業。集石遺構１～８号掘り下げ後実測作業。写真撮影。Ｄ・Ｅ－16区変形撚糸文土器出土状況実側作業及び写真撮影。取り上げ作業。Ｈ

－28区の６号集石遺構平・断面実側作業。Ｈ－30・31区の７・８号集石遺構実測作業及び掘り下げ作業。写真撮影。

平成17年８月16日（火）～８月19日（金）

Ｆ－19・20区のⅧ・Ⅸ層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－18区のⅦ層掘り下げ作業。Ｆ－19区のⅧ層掘り下げ作業。Ｄ・Ｅ－23～25区のⅧ層掘り下げ作業及びⅨ層上面コンター図作成作業。Ｇ・Ｈ－30～32区のⅨ・Ⅹ層掘り下げ作業。Ｅ～Ｇ－25・26区のⅧ層掘り下げ作業。出土遺物実測作業後遺物取り上げ作業。１号集石遺構の実測作業及び写真撮影。Ｆ－20区の落とし穴２号掘り下げ作業。落とし穴１・２・４・７・11・12号実測作業及び写真撮影。Ｄ・Ｅ－18区のⅦ層掘り下げ作業。Ｄ－22区のⅦ層掘り下げ作業。Ｇ－28・29区のⅩ層掘り下げ作業。Ｆ－19・20区のⅨ層上面コンター図作成作業。Ｄ－22区のⅦ層掘り下げ作業。

平成17年８月22日（月）～８月26日（金）

Ｆ～Ｈ－18区のⅦ・Ⅷ層掘り下げ作業。Ｄ－22区のⅦ・Ⅷ・Ⅸ層掘り下げ作業。Ｅ－18区のⅨ層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－26・27区のⅨ・Ⅹ層掘り下げ作業。Ｇ－28・29区及びＧ－31区のⅩⅣ層掘り下げ作業。実測図整理作業。Ｇ－24～26区のⅩ・ⅩⅠ層の掘り下げ作業。３・６・７・９号集石遺構の実測作業及び掘り下げ作業。写真撮影。13・16・18号土坑掘り下げ及び検出状況写真撮影。Ｇ・Ｈ－31区のⅩⅣ層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－22～25区の遺物出土状況実測及び遺物取り上げ作業。

平成17年９月５日（月）～９月９日（金）

Ｇ－25・26・28・29区の旧石器時代包含層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－20区のⅤ層掘り下げ及び落とし穴検出作業。ＳＤ１・12・20・22・25・26の掘り下げ。ＳＤ１・２・14・16・18の実測作業及び写真撮影。ＳＤ19・33写真撮影。ＳＥ９・10号の実測及び写真撮影。Ｄ－24区の土器のカット掘り下げ作業。Ｆ－24区の10号集石遺構の掘り下げ作業及び平・断面実測作業。Ｇ－28・29区のⅩⅣ・ⅩⅤ層掘り下げ作業。Ｅ－26区及びＤ・Ｅ－25区のⅨ・Ⅹ層掘り下げ作業。Ｇ－22～27区のⅩからⅩⅢ層の掘り下げ作業。Ｆ－25～27区のⅩ～ⅩⅡ層の掘り下げ作業。

平成17年９月12日（月）～９月16日（金）

Ｄ－25区，Ｇ－22～27区，Ｅ・Ｆ－25・26区のⅩ～ⅩⅣ・ⅩⅥ層掘り下げ作業。ＳＤ２・13・14・16・18・19・26・33・34の掘り下げ作業。ＳＤ14・33の位置図作成作業。ＳＤ10の実測作業。Ｅ－23～25区，Ｆ－23～25区，Ｄ－22～24区，Ｅ－９～18区のⅩ～ⅩⅣ・ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｅ～Ｇ－18区のⅩⅠ層～ⅩⅣ・ⅩⅥ層掘り下げ作業。

平成17年９月20日（火）～９月22日（木）

Ｇ－22～27区，Ｅ・Ｆ－25・26区，Ｄ－22～24区，Ｅ～Ｇ－18区のⅩⅠ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。ＳＤ１・13・20・25・33・34の掘り下げ作業。Ｅ－23～25区，Ｆ－23～25区，Ｅ－９～18区のⅩⅠ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。

平成17年９月26日（月）～９月28日（水）

Ｄ・Ｅ－19～21区の近世柱穴及び古代古道検出及び精査作業。Ｄ・Ｅ－23・24区のⅧ・Ⅸ，Ⅹ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｆ－25・26区のⅩⅢ・ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｇ－23・24区Ⅹ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｇ・Ｈ－４～12区の確認トレンチ掘り下げ作業。Ｅ－23～25区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ作業。Ｆ－27区の集石遺構実測作業。Ｆ－27区のⅦ層集石遺構実測作業。Ｆ・Ｇ－27区及びＨ－28・29区の北側確認トレンチ（旧石器時代）掘り下げ作業。

平成17年10月４日（火）～10月７日（金）

Ｆ・Ｇ－27区，Ｅ～Ｇ－26区，Ｄ～Ｇ－24・25区，Ｄ・Ｅ－23区，Ｆ・Ｇ－23区，Ｄ～Ｇ－22区のⅩ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｈ・Ｇ－12区のⅩ～ⅩⅡ・Ⅲ層掘り下げ作業。Ｄ～Ｆ－19～22区近世掘立柱建物跡及び古代古道の掘り下げ作業及び実測作業。Ｇ・Ｈ－４区のⅩⅡ～ⅩⅢ層掘り下げ作業。Ｆ－13・14区の確認トレンチⅠ～Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ作業。所長視察，寄井田主査，繁昌主任文化財主事来跡（10月５日）。

平成17年10月11日（火）～10月14日（金）

Ｆ・Ｇ－27区，Ｅ～Ｇ－26区，Ｄ～Ｇ－24・25区，Ｄ～Ｇ－23区，Ｆ・Ｇ－23・24区，Ｄ～Ｇ－22区，Ｈ－26・27区，Ｅ－23～26区，Ｄ－23～25区のⅩ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｇ・Ｈ－12区のⅩ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｄ～Ｆ－19～22区近世掘立柱建物跡及び古代古道の掘り下げ作業及び実測作業。Ｇ・Ｈ－４区のⅩⅡ～ⅩⅢ層掘り下げ作業。Ｆ－13・14区の確認トレンチⅠ～Ⅲ・Ⅳ～Ⅷ層掘り下げ作業。土層断面実測作業及び落とし穴の半截断面写真撮影及び実測作業。

平成17年10月17日（月）～10月21日（金）

Ｈ－26・27区，Ｆ・Ｇ－23・24区，Ｄ－23・24区，Ｅ－23～26区のⅩ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｇ・Ｈ－12区のⅩ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｄ～Ｆ－19～22区，近世掘立柱建物跡及び古代古道の掘り下げ作業及び実測作業。Ｆ－13・14区の確認トレンチⅣ～ⅩⅡ層掘り下げ作業。Ｄ・Ｅ－４区の20・21区Ⅳ層掘り下げ作業。土層断面実測作業及び落とし穴の半截断面写真撮影及び実測作業。Ｄ～Ｆ－19～22区の古代古道実測及び掘り下げ作業。Ｄ～Ｆ－19～23区のⅢ～Ⅵ層掘り下げ作業。Ｄ～Ｈ－23～27区の落とし穴写真撮影及び半截断面実測作業。Ｄ・Ｅ－19～23区のⅣ～Ⅶ層掘り下げ作業。Ｇ－16区の確認トレンチ掘り下げ作業。Ｄ－21・22区のⅦ層出遺物実側及び遺物取り上げ作業。

平成17年10月24日（月）～10月28日（金）

Ｄ～Ｆ－19～22区のⅣ～Ⅷ層掘り下げ作業。Ｇ－16区の確認トレンチⅥ～Ⅷ層掘り下げ作業。Ｆ・Ｇ－24・25区のⅩⅠ～ⅩⅣ層掘り下げ作業。Ｄ・Ｅ－19～22区のⅩ

Ⅳ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｇ－16区の確認トレンチⅥ～Ⅷ層掘り下げ作業。落とし穴の半截作業。断面写真撮影及び実側後掘り下げ作業。土層断面実測作業。Ｄ～Ｆ－21～25区のⅩⅢ～ⅩⅥ層掘り下げ作業。Ｄ・Ｅ－19・20区のⅦ～Ⅷ層掘り下げ作業。調査事務所撤収準備（建山遺跡へ）。

２　鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡

調査の経過は，日誌抄により週単位で略述する。なお，文章中のＴｒはトレンチのことである。

平成18年５月９日（火）～５月12日（金）

調査箇所周辺の環境整備（鳥居川遺跡からチシャノ木遺跡への通路階段作り等）。重機による表土剥ぎ。確認Ｔｒを17本設定し調査（12Ｔｒで晩期の土器片出土）。１Ｔｒ～８ＴｒはⅧ層上面で一時調査終了。Ｔｒ配置図作成。１Ｔｒ～８Ｔｒの断面写真撮影。

平成18年５月15日（月）～５月19日（金）

９Ｔｒ～17Ｔｒの調査（Ⅷ層上面で一時調査終了）。ＡＢ№１杭から№２杭へ向かって60ｍの北側部分の本調査開始（Ｖａ層～Ⅶ層の調査）。

平成18年５月22日（月）～５月26日（金）

ＡＢ№１杭から№２杭へ向かって60ｍの北側部分，Ｖａ層～Ⅶ層の調査（一部，Ⅷ層検出）。確認Ｔｒ12・13の遺物取上。Ⅷ層上面コンター図作成（一部）。ＡＢ№１杭から№２杭へ向かって60ｍの南側部分，重機による表土剥ぎ。

平成18年６月１日（木）～６月２日（金）

ＡＢ№１杭から№２杭へ向かって60ｍの調査：北側部分，Ⅶ層～Ⅷ層掘り下げ。アカホヤ埋土の落とし穴２基検出，検出状況写真撮影。南側部分，Ｖ層掘り下げ。

平成18年６月５日（月）～６月９日（金）

確認Ｔｒ８の土層断面図作成（北壁と西壁）。ＡＢ№１杭から№２杭へ向かって60ｍの調査：北側部分，Ⅶ層～Ⅷ層掘り下げ。遺物取上。Ⅷ層上面で集石１・２号検出，検出状況写真撮影。南側部分，Ｖ層掘り下げ。

平成18年６月12日（月）～６月16日（金）

ＡＢ№１杭から№２杭へ向かって60ｍの調査：北側部分，Ⅷ層上面コンター図作成（残りの部分）。遺物取上。Ⅷ層上面で集石１号実測，集石２号追加検出，検出状況写真撮影。下層確認Ｔｒ設定，調査。南側部分，Ｖ層掘り下げ，掘り下げ中に溝状遺構検出，検出状況写真撮影。

平成18年６月19日（月）～６月23日（金）

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡共通のグリッドを公共座標を基に設定。ＡＢ№１杭から№２杭へ向かって60ｍの調査：北側部分，下層確認調査。落とし穴の調査。集石２号実測終了後，精査中に下層から新たに集石を検出。南側部分，Ｖ層掘り下げ中に溝状遺構検出（前週の延長部分），写真撮影，調査。焼土跡検出，写真撮影，実測。遺物取上。

平成18年６月26日（月）～６月28日（水）

Ｍ～Ｑ－30～36区，下層確認調査。下層確認Ｔｒ配置図作成。Ｖ層掘り下げ。

平成18年７月３日（月）～７月７日（金）

Ｎ～Ｐ－31～34区，Ｖ層掘り下げ。Ｑ－20～26区，Ⅵｂ層～Ⅶ層掘り下げ。

平成18年７月10日（月）～７月14日（金）

Ｍ～Ｑ－30～36区，下層確認調査，写真撮影。Ｖ層掘り下げ。溝状遺構調査（実測，写真撮影）。Ｑ－20～26区，Ⅵｂ層～Ⅶ層掘り下げ。

平成18年７月18日（火）～７月21日（金）

Ｌ・Ｍ－35・36区，27Ｔｒ土層断面実測。Ｎ－36区，29Ｔｒ土層断面実測（北・南・東壁の三面）。

Ｑ－20～26区，Ⅵｂ層～Ⅷ層上面まで掘り下げ。Ⅷ層上面コンター図作成準備。Ｐ～Ｒ－28～31区，Ｖａ層掘り下げ。

平成18年７月24日（月）～７月28日（金）

Ｐ・Ｑ－20～26区，Ⅷ層上面コンター図作成。Ⅷ層掘り下げ後，下層確認Ｔｒを設定し，調査。調査中，Ｑ－21区，31ＴｒのⅩⅢ層上面で削器が１点出土したために地形を考慮しながら周辺に２ｍ×２ｍのメッシュを組み，千鳥方式での調査に変更し，下層確認Ｔｒ調査を一時中断。遺物取上。Ｐ～Ｒ－28～31区，Ｖａ層掘り下げ。遺物出土状況写真撮影，遺物取上。Ｏ～Ｑ－31～33区，溝状遺構調査。

平成18年８月２日（水）～８月４日（金）

Ｑ－20～26区，千鳥方式での調査の結果，チップが数点出土した以外は遺物は出土しなかったので，下層確認Ｔｒ調査を再開。Ｎ～Ｐ－27～31区，Ⅳ層・Ｖ層掘り下げ及び遺物取上。Ｍ－34区，落とし穴調査。

平成18年８月７日（月）～８月11日（金）

Ｍ－34区，落とし穴の半截・写真撮影。Ｎ～Ｒ－27～31区，Ⅳ層・Ｖ層掘り下げ及び遺物取上。Ｏ～Ｑ－31～33区，溝状遺構実測。Ｑ－20・21区，下層確認調査。

平成18年８月16日（水）～８月18日（金）

Ｎ～Ｒ－27～31区，Ｖ層掘り下げ。Ｑ－20・21区，下層確認調査。

平成18年８月21日(月)～８月25日(金)及び８月28日(月)

Ｎ～Ｒ－27～31区，Ｖ層掘り下げ。Ｏ～Ｑ－30～33区，Ｖ層コンター図作成準備。Ｑ－20・21区，下層確認調査。

平成18年９月４日（月）～９月８日（金）

Ｏ～Ｒ－27～33区，Ｖ層調査及びコンター図作成。Ｒ～Ｔ－18～22区，Ⅷ層上面コンター図作成及びⅧ層以下の下層確認調査。Ｒ～Ｔ－23～26区，Ⅷ層調査。

平成18年９月11日（月）～９月15日（金）

Ｒ～Ｔ－18～26区，Ⅷ層上面コンター図作成（23～26区）及びⅧ層以下の下層確認調査。Ｏ～Ｓ－27～34区，Ⅷ層調査・Ⅷ層上面コンター図作成・Ⅷ層以下の下層確認調査。Ｒ・Ｓ－23・24区，遺物取上。31・32拡張Ｔｒ及び38Ｔｒの土層断面写真撮影，実測。Ｒ・Ｓ－23区，７号～９号土坑調査（写真撮影，実測等）。

平成18年９月18日（月）～９月22日（金）

Ｒ・Ｓ－23区，７号～９号土坑調査（写真撮影，実測等）。Ｏ～Ｓ－27～34区，Ⅷ層以下の下層確認調査。Ｑ－29区，イモ穴13号の調査（ピットを伴う落とし穴と判明）。

平成18年９月25日（月）～９月28日（木）

Ｒ－24・25区及びＯ～Ｓ－27～34区，Ⅷ層以下の下層確認調査。Ｒ・Ｓ－23区，７号～９号土坑調査（写真撮影，実測等）。41Ｔｒ・44Ｔｒ・47Ｔｒ・49Ｔｒ土層断面写真撮影，実測。※チシャノ木遺跡の調査終了

平成18年10月３日（火）～10月６日（金）※３日（火）はセンターの職員のみ。

鳥居川遺跡調査開始（Ａ・Ｂ２地点の調査）。Ａ地点（事務所近く）・Ｂ地点，重機による表土剥ぎ。Ｂ地点，グリッド杭打ち及びＶ層調査。

平成18年10月９日（月）～10月13日（金）

Ａ地点：グリッド杭打ち及びＶ層調査。Ｂ地点：Ｖ層調査終了及びコンター図作成。

平成18年10月16日（月）～10月20日（金）

Ａ地点：Ｖ・Ⅵ層調査。Ｇ－５区，土器集中出土部分（Ｖ層）の写真撮影，実測。Ｖ層コンター図作成。Ｂ地点：Ⅵ・Ⅶ層調査。Ｓ－３・４区，Ⅵ・Ⅶ層の遺物取上。Ｑ～Ｓ－３～６区，Ⅷ層上面コンター図作成。

平成18年10月23日（月）～10月27日（金）

Ａ地点：Ⅵ層調査。Ｆ・Ｇ－５・６区，遺物取上。Ｆ・Ｇ－５～７区，Ｖ層コンター図作成。Ｆ－５区，土器集中出土部分（Ⅵ層）の写真撮影，実測。Ｂ地点：Ｏ・Ｐ－６・７区，Ⅵ・Ⅶ層調査及びⅧ層上面コンター図作成。Ｑ～Ｓ－３・４区，Ⅷ層上面コンター図作成。Ｑ～Ｓ－４～６区，Ⅷ層以下の確認調査。

平成18年11月１日（水）～11月２日（木）

Ａ地点：Ⅷ層調査（一部，Ⅵ・Ⅶ層調査）。Ｂ地点：Ｑ～Ｓ－４～６区，Ⅷ層以下の確認Ｔｒ調査及びＴｒ内土層断面実測。Ｂ地点終了。

平成18年11月６日（月）～11月10日（金）

Ａ地点：Ⅷ層調査（一部，Ⅵ・Ⅶ層調査）及びⅧ層上面コンター図作成。Ｘ層調査。

平成18年11月13日（月）～11月17日（金）

Ａ地点：旧石器時代該当層の確認調査

平成18年11月20日（月）～11月24日（金）

Ａ地点：旧石器時代該当層の確認調査

平成18年11月27日（月）～11月28日（火）

Ａ地点：旧石器時代該当層の確認調査，調査終了。西原段Ⅰ遺跡への移転準備。

整理・報告書作成事業の概要

１　関山遺跡

関山遺跡の整理・報告書作成作業は，平成19年４月10日～平成20年３月19日まで行った。

整理作業従事者（11名）

岡野菜穂子，梯チヨ子，熊谷郁子，佐土原恵，那須マリ子，橋口晶子，橋口恵，原田純代，前田美保子，山形貴世子，横山妙子（50音順，敬称略）

２　鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡の整理・報告書作成作業は，平成19年４月10日～平成19年12月28日まで行った。

整理作業従事者（12名）

井手上福代，大重泰代，加藤明子，児玉節子，細田保子，立山佳代子，中内洋子，原田ゆかり，日高千津子，藤本惠子，前田明子，松元康子（50音順，敬称略）

第Ⅲ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

遺跡の所在する曽於市は，鹿児島県の東部を形成する大隅半島の北部に位置し，東側は志布志市，南側は曽於郡大崎町及び鹿屋市，西側は霧島市，北側は都城市に接し，宮崎県との県境に位置している。

遺跡の所在する曽於市を含めた鹿児島県北部から大隅半島北半分にかけての地勢を外観すれば，東西の山地とこれらに挟まれた低地帯から構成されている。

山地は，東側に志布志湾北部から宮崎県に突出した形で，北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山地ともいう）で，主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で中生層の地質からなっている。西側には北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈山地へと連なる。高隈山地は，北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と，南部の大篦柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山々から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。ともに，東西の山地は九州山地の延長をなし，それらの間は低地帯となり，丘陵や台地及び低地となっている。

これらの山間地を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布し，典型的なシラス地形となっている。この地域の火砕流は，南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や大部分は湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。この火砕流堆積物は，堆積後現在に至るまでに大小多くの河川で開析され，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。一方，低地は，高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が志布志湾，鹿児島湾，太平洋などに注いでいる。この河川は，上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また何段かの河岸段丘も認められる。

曽於市のうち末吉町の地勢は，東西に細長く，南北は広狭があり，東部は標高500～600mの山岳地帯で，中央部は標高160～180mの平地を呈し，西部は標高300mほどのシラス台地となっている。町の東部から北部の町境付近を大淀川が都城市方面へ流れ，大淀川流域に開けたところで，都城盆地の一角をなしている。また，町の南部の境界付近を菱田川が大隅町（曽於市）や有明町（志布志市）へ流れ，その流域には水田地帯が広がり，豊かな自然，肥沃な台地を形成して県内随一の農畜産基地でもある。本市の末吉町は，明治20年（1887）に曾於郡が東西に分かれ，末吉郷は東曾於郡の所属である。明治22年（1889）には市制村施行により，末吉郷が末吉村となり，大正11年（1922）に町制を施行し，現在に至っていたが，平成15年１月に曽於北部地区任意合併協議会が設立され，4月には曽於北部合併協議会を設置し，２年後の平成17年７月１日に，本町を含めた大隅町や財部町との３町が合併して新しい曽於市が誕生した。

関山遺跡は，曽於市末吉町諏訪方関山にあり，末吉町の西方で標高約296mの台地上に位置している。遺跡は，光神集落内を東西方向に走っている国道10号線を起点とし，末吉町の市街地へ延びる一般地方道光神・諏訪方線により分断され，台地の北側には谷部をもち，南側は東側へ延びる台地上の畑地に続いており，北側谷の底部と遺跡の立地する台地との比高差は約30mである。

鳥居川遺跡は，曽於市大隅町岩川鳥居川にあり，標高215mの台地上に位置している。

チシャノ木遺跡は，曽於市大隅町岩川チシャノ木にあり，標高215mの台地上に位置している。

鳥居川遺跡とチシャノ木遺跡は，深さ20m，幅80mの谷を挟んで隣接しており，県道71号（垂水～南之郷）線と接続する大隅ＩＣ内にある。

第２節　歴史的環境

曽於市の文化財は，遺跡を含めて多くが周知されている。中でも，県指定民俗文化財には，弥五郎どん祭り（昭和62年指定），住吉神社の流鏑馬（昭和56年指定），熊野神社の鬼追い（平成６年指定），県指定天然記念物には，溝ノ口洞穴（昭和30年指定），県指定有形文化財に投谷八幡宮（平成15年指定）などがある。

一方，遺跡は昭和60年刊行の『鹿児島県市町村別遺跡地名表』によると，大隅町が264か所，財部町が101か所，末吉町が171か所の536か所が周知されている。うち，末吉町では旧石器時代６か所，縄文時代117か所，弥生時代36か所，古墳時代23か所，古代・中世30か所，近世・近代７か所などが記載されている。これまでは，平成３年度以降の大隅地区埋蔵文化財分布調査をはじめ各種事業による確認調査や本調査を実施してきた。旧各町での初期の事業は，県営特殊農地保全整備事業による文化財の調査が大半で，近年では東九州自動車道建設による大規模調査なども実施されている。　特に，町土地区画整理事業，県営シラス対策関連事業，過疎基幹農道整備事業，町道改良整備事業，町工業団地造成工事，町道改良舗装工事，県営ふるさと農道整備事業，県営かんがい排水整備事業，町経営基盤確立農業構造改善事業，簡易土地基盤整備事業，県営ほ場整備事業，団体営畜産経営環境整備事業，農村総合整備事業，県営基盤整備事業，県営特殊農地保全整備事業，旧傾斜地崩壊対策工事，中学校統合に係る校舎増築事業，中山間地域農村活性化総合整備事業，町民プール公園建設工事などの事業による多くの調査が，これまで実施されている。

本市の埋蔵文化財については，旧末吉町の遺跡を中心に，一部旧財部町や旧大隅町の遺跡についても，その概要を略述したい。

桐木遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町諏訪方桐木にあり，大淀川水系に属する今別府川と村山川によって丘陵性台地が浸食を受け，小台地群に分断された標高300ｍの国道10号線に隣接した台地に位置している。

本遺跡の調査は，東九州自動車道建設に伴い鹿児島県教育委員会が平成８年（1996）に確認調査，平成９年から平成14年（2002）までに本調査を実施し，旧石器時代，縄文時代草創期・早期・中期・後期・晩期，古墳時代，古代～近世までの複合遺跡である。

本遺跡は，霧島・桜島・鬼界カルデラ・姶良カルデラ関係のテフラが整然と堆積し，その間に遺構や遺物が残され，層位的観察が容易である。また，遺物包含層が10枚もあり，遺物も多量に出土し，当時を解明できる遺跡とされている。

旧石器時代は，細石刃文化期やナイフ形石器文化期の遺物が出土している。細石刃文化期は，礫群をはじめ細石刃や細石核などの遺物が出土し，細石器は石器製作の生活の様子が各所にそのまま残されていた。また，最下層のナイフ形石器文化期は，礫群をはじめナイフ形石器や剥片尖頭器などが出土し，大型の剥片尖頭器を主体に20㎝程度の礫で構成されている礫群が検出されている。

縄文時代は，草創期・早期・中期・後期・晩期の包含層が確認され，縄文時代草創期は集石遺構を検出し，隆起線文土器や石鏃などが出土している。

縄文時代早期は，３枚の早期該当の包含層から遺構や遺物が発見され，早期前葉の層では竪穴住居跡２軒や集石遺構などの遺構を検出し，吉田式土器や前平式土器などが，早期中葉の層からは集石遺構や塞ノ神Ａ式土器，平栫式土器，石坂式土器などが出土した。また，早期後葉の層からは集石遺構や塞ノ神Ｂ式土器など出土し，土器型式の前後関係が明らかになった。

縄文時代中期は，大量の石鏃・石匙の石器類と東海系の土器をはじめ搬入品の船元式土器と南九州の条痕文尖底土器が供伴し，搬入土器は瀬戸内海沿岸で盛んに作られた縄文時代中期を代表するもので，直接持ち込まれたと報告されている。

縄文時代後期は，集石遺構４基，石器製作跡２か所などを検出した。出土遺物は，岩崎上層式土器，市来式土器，石鏃，石斧，敲石，磨石などの土器や石器が出土した。

縄文時代晩期は，竪穴住居跡５軒，掘立柱建物跡２棟，土坑，焼土などの遺構を検出した。遺物は，入佐式土器，黒川式土器をはじめ石鏃，石斧，磨石，敲石などの土器や石器が出土している。

古墳時代から古代にかけては，成川式土器や土師器が出土し，古代から中世については，道路状遺構が出土している。

上中段遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町深川上中にあり，大淀川の支流である村山川の南側で，標高241ｍの台地に位置している。本遺跡は，曽於市（旧末吉町）教育委員会が調査主体となって鹿児島県教育委員会の協力を得て，昭和60年（1985）に県営特殊保全整備事業に伴い調査を実施し，縄文時代中期・後期・晩期・古代にかけての複合遺跡であることが判明した。

本遺跡の遺構は中期・後期・晩期の時期の土坑19基が検出され，円形・楕円形・円形に近い不定形を呈した小型のものが多い。遺物は，土器については，出土層や形式により縄文時代中期・後期・晩期に分けられる。

縄文時代中期や後期の遺物は，岩崎下層式土器，岩崎上層式土器，指宿式土器，綾系土器などの土器をはじめ土製品のメンコなども出土している。

縄文時代晩期前・中葉の遺物は，入佐式土器や黒川式土器の深鉢や浅鉢などみられ，深鉢は粗製土器で浅鉢は精製土器が多いとされている。

縄文時代晩期後葉の土器は，刻目突帯文を有する夜臼式土器が中心に，甕・鉢・浅鉢・高坏・朱塗り磨研壺・彩文土器などがセットで出土している。また，組織痕文土器や夜臼式土器の鉢の底部に籾殻圧痕がみられ，当時，このことは特出された。

古代の遺物は，土師器の甕・坏・皿や須恵器などが出土し，土師器には墨書土器や内面に布目圧痕をもつものもある。また，土師器とともに鞴の羽口・鉄製品・鉄滓など出土し，製鉄遺跡であったことが知られている。

石器については，時期が特定できるものもあるが，磨製石斧，打製石斧，敲石，打製石鏃，石錐，削器，楔形石器，トロトロ石器が出土している。

地蔵免遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町二之方地蔵免にあり，末吉市街地の南側で，末吉小学校東側へ約500ｍで，北向きとなる緩やかな起伏のある標高185ｍの舌状台地の縁辺部に位置し，遺跡の背後地は畑地帯であるが，市街地化が進んでいる。

本遺跡は，町プール公園建設に伴い曽於市（旧末吉町）教育委員会が確認調査を平成５年（1993）５月13日～６月８日までの間に実施し，縄文時代早期と縄文時代後期との複合遺跡である。その後，遺跡の取り扱いの協議の結果，約4,000㎡については平成５年７月12日～平成５年10月６日まで本調査を行うこととなった。調査の結果，縄文時代早期の遺構は，竪穴住居跡，連穴土坑，落とし穴，集石遺構などを検出し，前平式土器，山形押型文土器，変形撚糸文土器，手向山式土器，石坂式土器などの土器が出土し，石鏃，磨石，石皿などの石器がみられる。

縄文時代後期の遺構は，土坑や柱穴を検出したが，用

途は不明である。遺物は，市来式土器を中心に，縄文時代晩期の入佐式土器をはじめ，磨石や石錘など少量の石器が出土している。

小倉前遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町深川小倉前ほかにあり，内村と小倉集落間とに広がる標高約250mの台地に位置している。遺跡の北側から東側にかけては大淀川の支流である村山川となり，15～20mの比高差をもち懸崖となっている。さらに，北側には東西方向に国道10号線が走っており，旧街道の髙岡筋に当たる。

本遺跡は，平成８年に深川内村地区において農村地域工業等導入事業に伴い，曽於市（旧末吉町）教育委員会が県教育委員会の協力を得て本調査を実施した。その結果，縄文時代中期と縄文時代晩期の遺構や遺物が発見され，複合遺跡であることが判明した。

縄文時代中期の遺構は土坑３基を検出し，春日式土器や石鏃，石匙，敲石，磨石，石皿などの遺物が出土した。

縄文時代晩期は，遺構として土坑数基と夜臼式土器や黒川式土器などの土器をはじめ打製石斧，磨石，敲石，石皿などの石器が出土している。

入佐遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町諏訪方の入佐集落内にあり，末吉町の西部で入佐集落の西南部へ延びる道路沿いの標高約240m台地に位置し，遺跡の東側は大淀川支流の谷頭部分にあたり急崖となり，西側は台地が広がり畑地となっている。さらに，南側は菱田川の上流部となり急傾斜となり国道10号線が走っており，財部町へと続いている。

遺跡は，町道の開削工事により，掘割部分の断面に土器の破片が確認され，昭和38年に河口貞徳氏により調査が実施されている。調査の結果，縄文時代晩期の竪穴住居跡や入佐式土器などが出土し，縄文晩期前半の土器型式の標識遺跡となっている。

土器の器種は，深鉢と浅鉢が主であるが，深鉢は粗製土器で，浅鉢はそのほとんどが精製土器である。

宮之迫遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町南之郷宮之迫の標高240mの舌状台地縁辺部に位置し，昭和55年（1980）に県営特殊保全整備事業に伴い曽於市（旧末吉町）教育委員会が調査主体となり，県教育委員会の協力を得て調査を実施した。

その結果，縄文時代中期から後期にかけての遺物が大量に出土した。

本遺跡は，竪穴住居跡１軒，土坑２基，集石遺構２基などの遺構を検出し，遺物は縄文中期から縄文後期中頃の岩崎下層式土器や岩崎上層式土器などの土器が大量に出土し，多くの土器が押しつぶされたような状態で出土し復元完形品が多く出土している。

一方，石器は，石鏃，磨製石斧，打製石斧，石皿，磨石，石錐，ハンマストーン，剥片石器，擦切用砥，石包丁状石器などが出土しているが，食物加工具の石器が多く，石鏃が１点で狩猟用具の道具がほとんどみられてないのが特徴である。

丸尾遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町二ノ方丸尾にあり，町の市街地の中心部から南側約1.5㎞の標高約190mのシラス台地上の縁辺部に位置している。

遺跡は，昭和47年度から昭和58年度にかけて実施された「大隅地区埋蔵文化財分布調査」で発見された。その後，昭和55年度には県営特殊農地保全整備事業に伴い鹿児島県教育委員会が確認調査を実施した。

その結果，縄文時代後期の市来式土器の範疇に入るものであったが，器形や文様などの特徴から丸尾式土器として型式設定されることとなった。

中岳洞穴遺跡

本遺跡は，曽於市末吉町南之郷中岳にあり，大淀川上流の標高約290mの洞穴に位置している。本洞穴は，河口貞徳氏が昭和44年（1969）に地元の高木秀吉の案内で現地調査を実施し，洞穴床面から黒川式土器片を発見している。本格的な調査は，曽於市（旧末吉町）教育委員会が調査主体で，河口貞徳氏が昭和53年（1978）から昭和54年に４次にわたって発掘調査を実施している。

本洞穴は県東向きに開口し，幅５～７m，奥行き14mほどの規模で，縄文時代後期から晩期にかけての洞穴遺跡である。縄文時代後期の西平式土器の時期から後期末の御領式土器まで連続して生活し，洞穴の奥の部分が使われ，縄文時代晩期には洞穴内全域が生活面として使われている。晩期の入佐式土器の時期には集石炉が，黒川式土器の時期には掘込炉が設けられ，周辺から土器や石器が集中して出土している。

また，獣骨や貝殻の集積や自然遺物としてはイノシシやシカなどの骨の占める割合が多く，ハマグリなど海産の貝類がこの内陸部で出土している。

耳取遺跡

本遺跡は，曽於市財部町南俣耳取にあり，大淀川水系に属する今別府川と村山川によって丘陵性台地が浸食を受け，小台地群に分断された標高290mの国道10号線に隣接した台地縁辺部に位置している。国道10号線の向かい側には桐木遺跡が所在する。

本遺跡は，東九州自動車道建設に伴い鹿児島県教育委員会が平成８年（1996）に確認調査，平成11年（1999）から平成12年（2000）までに本調査を実施し，旧石器時代，縄文時代草創期・早期・中期・晩期，古墳時代～古代までの複合遺跡である。特に，旧石器時代の細石器文化期及びナイフ形石器文化期は，遺物包含層がともに２時期の文化が確認された。

旧石器時代の細石器文化期は，２つの包含層から出土し，細石器を作り出すときの技術の違いや出土地点がずれることから２時期が確認されている。ⅩⅡ層では礫数５個の小さい礫群が１基検出されている。

旧石器時代のナイフ形石器文化期では，ⅩⅢ層より礫数７個で構成されている礫群１基や小型の台形石器が多量に出土し，少量の二側縁加工のナイフ形石器もみられる。

一方，ⅩⅥ・ⅩⅦ層のナイフ形石器文化期では，礫群の径や深さが30～40㎝で，礫数は拳大の礫15～50個の礫群90基が検出されている。礫群には多くの炭化物を伴い，火を使った痕跡が確認されている。また，53号礫群の近隣では，人工的に線を刻んだ線刻礫が出土し，その形状から女性を表現したシルト質頁岩の石像（ヴィーナス）で，日本最古の女性像と想定されている。

本遺跡は，旧石器時代のほか縄文時代の包含層も確認され，縄文時代草創期は少量の土器と石器製作跡のブロック１か所を検出している。

縄文時代早期は，３枚の早期該当の包含層から遺構や遺物が発見され，早期前葉の層では集石遺構４基の遺構を検出し，押型文土器や塞ノ神Ａ式土器など土器をはじめ石鏃，磨石などの石器が出土した。また，Ⅵ層からは集石遺構２基の遺構の検出や塞ノ神Ａ式土器や石鏃，磨石などが出土した。

踊場遺跡

本遺跡は，曽於市財部町南俣字踊場にあり，財部市街地から南西方向に約6.3㎞のところに位置している。炭山谷川と今別府川の間に挟まれた標高300ｍの東北方向に延びる台地南縁辺段丘に所在している。

本遺跡の北側には，標高300ｍの丘陵を隔てて財部城ヶ尾遺跡があり，古代の蔵骨器などが出土している。

本遺跡の調査は，東九州自動車道建設に伴い鹿児島県教育委員会が平成６年（1994）10月と平成７年（1995）の分布調査により発見され，平成12年（2000）に確認調査を経て本調査を実施し，縄文時代早期・中期・晩期，古代，中世までの複合遺跡である。調査面積は4,390㎡である。縄文時代早期は，集石遺構４基をはじめ塞ノ神Ａ式土器，手向山式土器，磨石，石皿などの遺物が出土している。

縄文時代中期は，少量の阿高式土器が出土し，縄文時代晩期では土坑５基をはじめ黒川式土器，石鏃，磨石，石皿，石錐，磨製石斧，打製石斧，小型の勾玉などが出土している。また，石器製作を行っていたような痕跡を示すフレーク，チップなどが集中しているか所が確認されている。

一方，古代では掘立柱建物跡９棟，焼土跡，古道跡，軽石集積遺構１基，集石遺構２基，多数のピットなどを検出している。なかでも掘立柱建物跡のうち，斜面を削平し平坦面をつくり出して建てられたものは，９世紀終末から10世紀初頭の時期が考えられる特殊な遺構であると報告されている。

遺物は，土師器，須恵器，内黒土師器などがみられ，周辺から墨書土器や焼塩土器，須恵器片を転用した転用硯，紡錘車，鉄製品，銅製品などの遺物が出土している。

中世では，全域が文明ボラ（1471年桜島噴出物）パックされた畝跡が東西方向の延びている痕跡が確認されている。

高篠遺跡

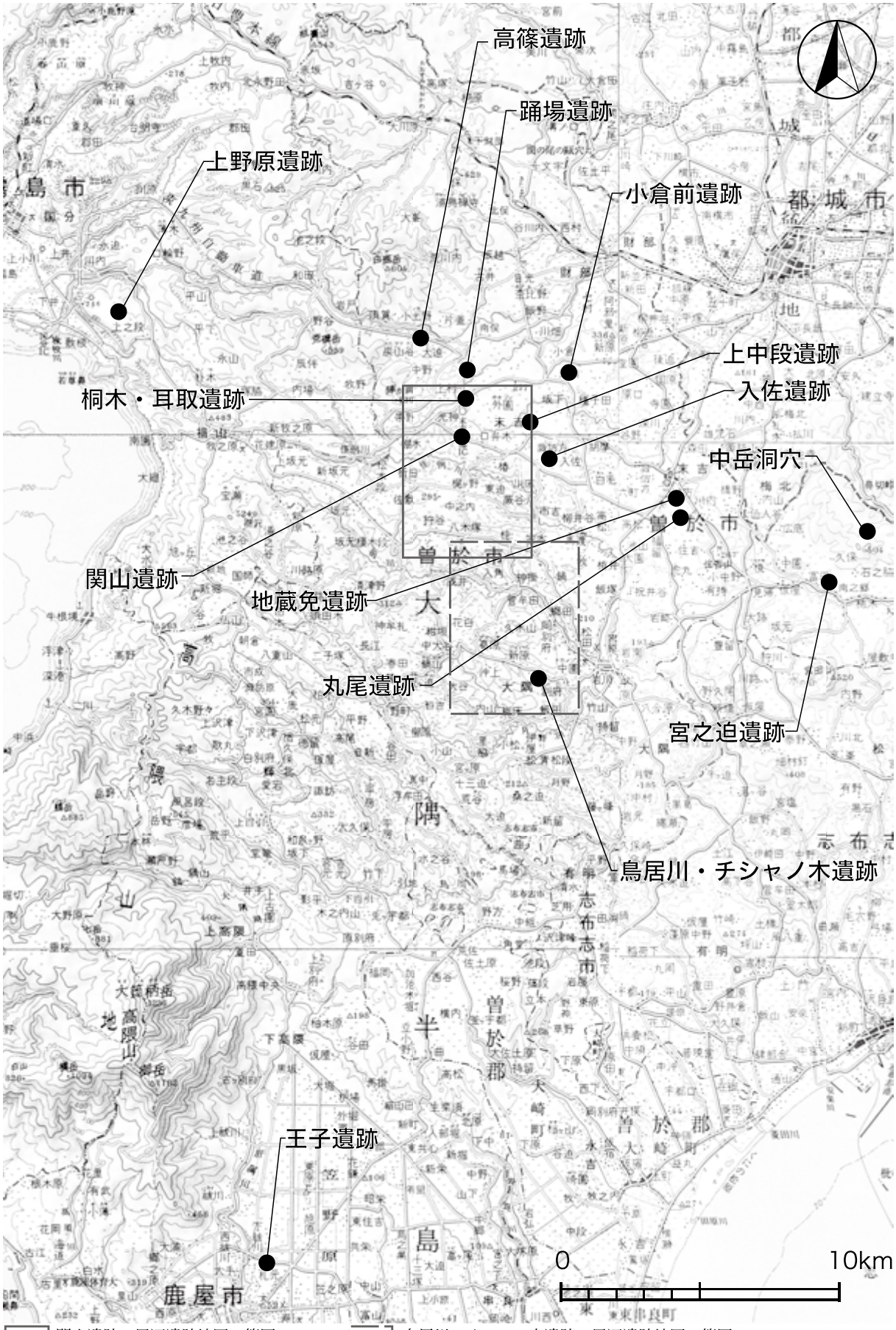
本遺跡は，曽於市財部町南俣字高篠にあり，財部市街地から南南西方向に約７㎞のところに位置し，横市川と炭山谷川の間に挟まれた標高320ｍの東北方向に延びる台地に所在している。

本遺跡の現状は山林で，以前は畑作を行うために階段状に整地され，一部は削平を受けていた。東側に約１㎞には高篠坂遺跡があり，縄文時代早期の遺構遺物などがみられる。

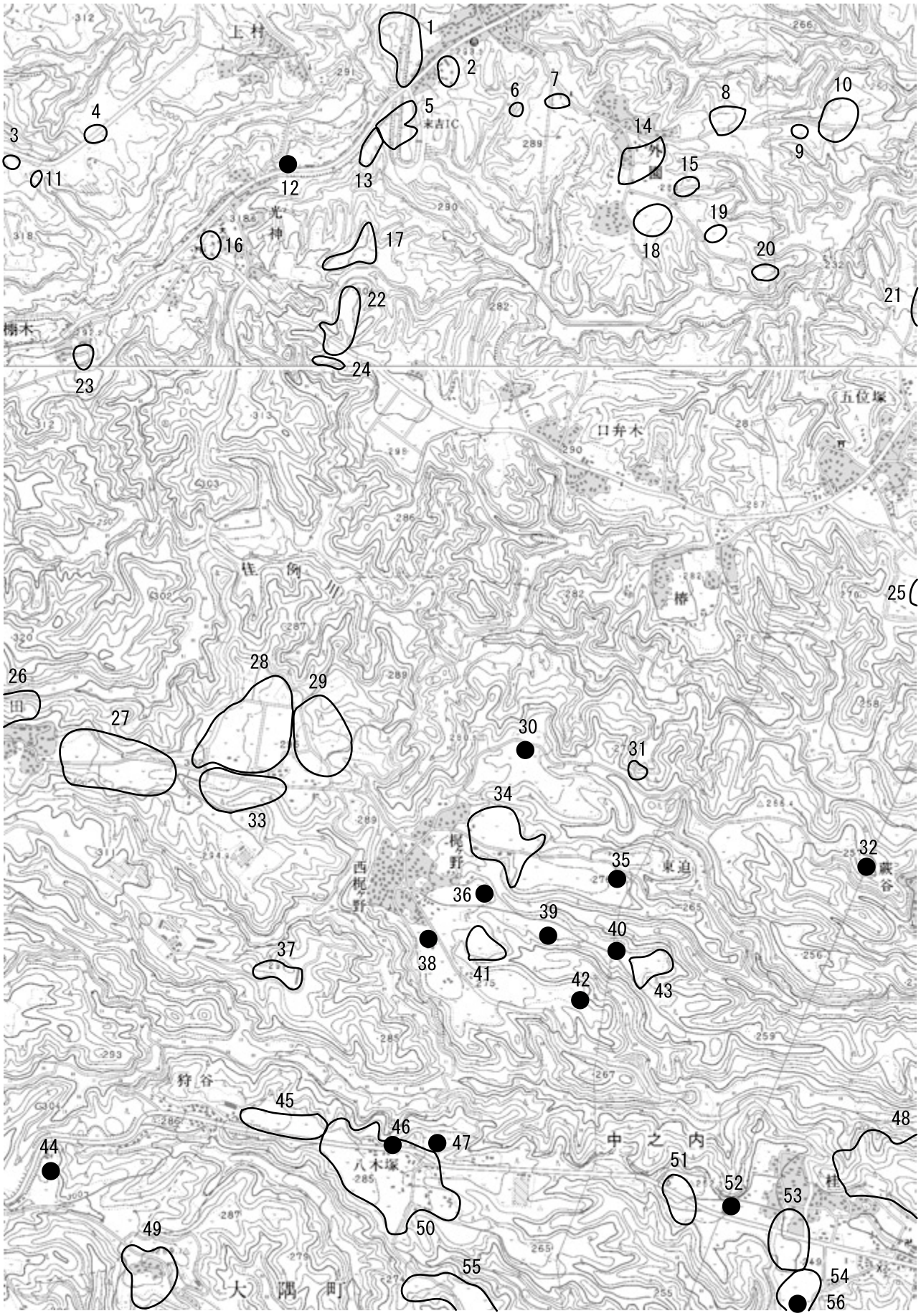
本遺跡の調査は，東九州自動車道建設に伴い鹿児島県教育委員会が平成９年（1997）に確認調査と平成７年の分布調査により発見され，平成10～12年度に本調査を実施し，縄文時代後期と古代の複合遺跡である。調査面積は8,800㎡である。

古代では，掘立柱建物跡16棟，軽石集積遺構６基，屋内炉21基（内，軽石集積遺構１基），屋外炉７基，焼土28か所，土坑13基，溝状遺構１条，古道３条，畝状遺構10数条などが検出されている。掘立柱建物跡は，２間×４間，２間×３間，２間×２間の３タイプがほぼ南北方向軸に重複して検出されている。うち，数棟では屋内炉が検出され，加熱を受け調理施設であったとされている。

遺物は，須恵器，墨書土器を含む多くの土師器，石製飾具，焼塩土器，紡錘車，土錘，羽口，鉄滓などが出土し，土師器は，甕が多く坏，埦，内黒土師器埦，墨書土器などが出土し，検出された遺構や遺物から９～10世紀の時期のものであると報告されている。



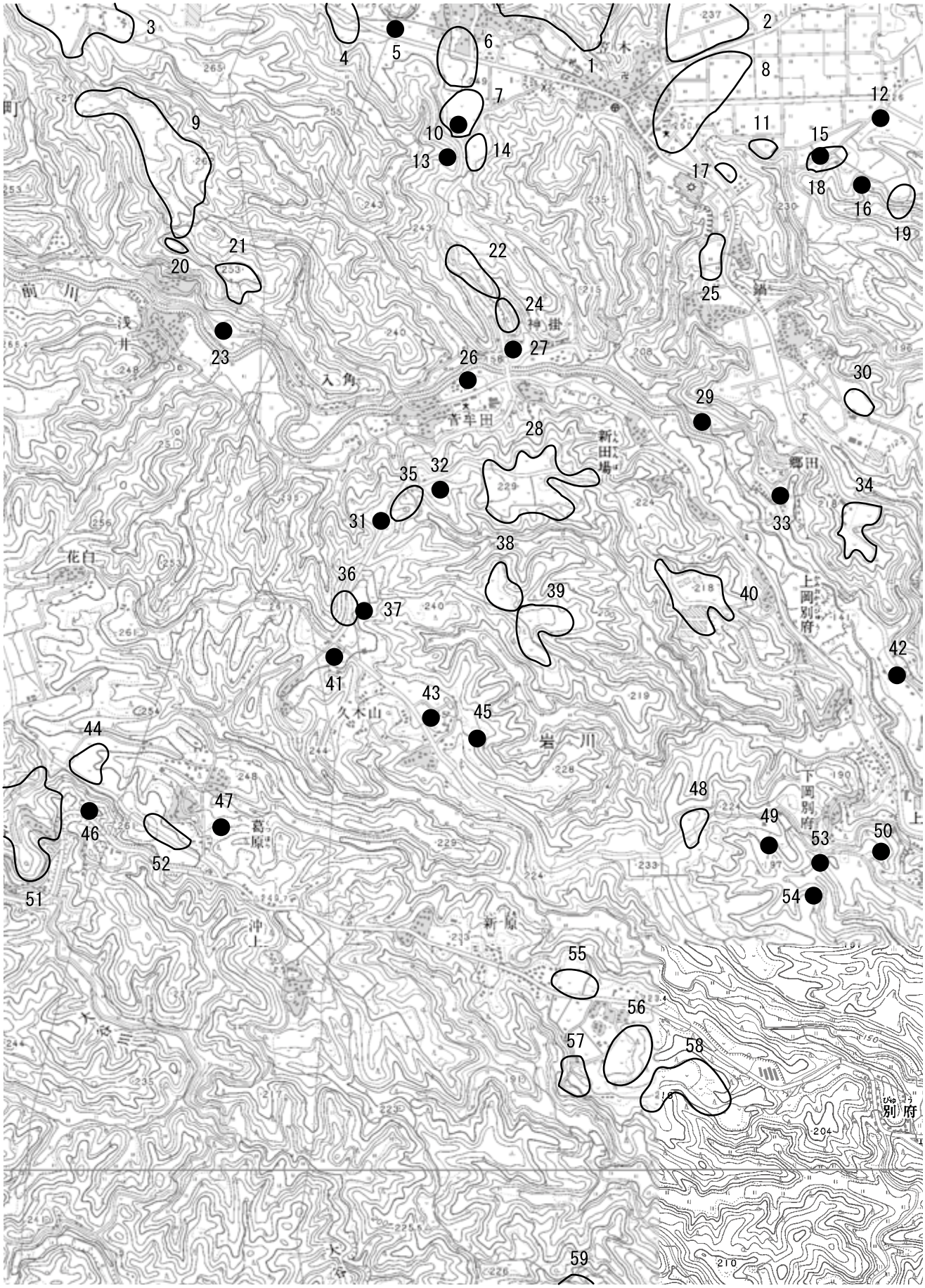
第２図　曽於市と周辺の主な遺跡地図



第３図　関山遺跡周辺の遺跡地図

第１表　関山遺跡の周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	65-95-0	耳取	曽於市財部町南俣耳取	台地	旧石器，縄文（草・早）		県埋文報(91)
2	66-59-0	末吉通山宿場跡	曽於市末吉町深川通山	台地	近世	宿場跡	(町)昭和43.1
3	65-82-0	荷床２	曽於市財部町南俣字荷床		歴史	土師器	
4	65-81-0	荷床１	曽於市財部町南俣字荷床		歴史	土師器	
5	66-165-0	桐木	曽於市末吉町諏訪方桐木	台地	旧石器，縄文，古墳～中世		県埋文報(91)
6	66-74-0	通山上川路	曽於市末吉町深川五位塚通山上川路	台地	縄文，中世	夜臼式	町埋文報(3)
7	66-73-0	真方入口	曽於市末吉町深川五位塚真方入口	台地	縄文	轟式	町埋文報(3)
8	66-77-0	楠木岡Ａ	曽於市末吉町深川楠木岡	台地	縄文(晩)，古代	土師器	町埋文報(4)(5)
9	66-78-0	楠木岡Ｂ	曽於市末吉町深川楠木岡	台地	縄文(晩)，古代	土師器	町埋文報(4)(5)
10	66-79-0	楠木岡Ｃ	曽於市末吉町深川楠木岡	台地	縄文，古代	土師器	町埋文報(4)(5)
11	65-83-0	八畝	曽於市財部町南俣字八畝		縄文，歴史	土師器	
12	65-36-0	野方	曽於市財部町南俣字野方	台地	縄文，平安	土師器・内黒土師器	
13	66-166-0	桐木Ｂ	曽於市末吉町諏訪方桐木	台地	旧石器，縄文，古墳～平安		県埋文報(75)
14	66-157-0	臼杵	曽於市末吉町深川外園	台地	縄文，古墳		平成10年農政
15	66-72-0	下ノ窪	曽於市末吉町深川五位塚下ノ窪	台地	縄 文（晩），古代	入佐式・土師器	町埋文報(4)
16	66-61-0	山王神社六地蔵庚申塔	曽於市末吉町諏訪方218	山	江戸	地蔵庚申塔	
17	66-167-0	関山西	曽於市末吉町諏訪方関山西	台地	縄文，弥生，奈良，平安		平成17年度本調査
18	66-76-0	四枝道	曽於市末吉町深川四枝道	台地	縄文(晩)，古代	土師器	町埋文報(4)(5)
19	66-71-0	仮牧	曽於市末吉町深川五位塚仮牧	台地	古代	土師器・須恵器	町埋文報(4)
20	66-70-0	五位塚渡り下	曽於市末吉町深川五位塚渡り下	台地	縄文(早)	山形押形文	町埋文報(4)
21	66-69-0	上中段	曽於市末吉町深川上中段	台地	縄文(中～晩)	黒川式･岩崎上層式･指宿式	町埋文報(4)
22	**66-168-0**	**関山**	**曽於市末吉町諏訪方関山**	**台地**	**旧石器，縄文，古代，中世，近世**		**本報告書**
23	66-135-0	大角豆ヶ迫	曽於市末吉町諏訪方棚木	台地	縄文，奈良～平安		平成５年農政分布調査
24	66-169-0	唐尾	曽於市末吉町諏訪方唐尾	台地	縄文(晩)		H16，17年度本調査
25	66-126-0	塚ノ段	曽於市末吉町諏訪方塚ノ段	台地	縄文～平安	土師器	町埋文報(22)
26	63-36-0	前畑段	曽於市大隅町中之内前畑段	丘陵	縄文(後)	岩崎上層式	
27	63-101-0	東原	曽於市大隅町中之内東原	台地	縄文，弥生，奈良，平安	縄文土器・土師器・打製石斧（半欠）・鉄	
28	63-57-0	西原段Ⅱ	曽於市大隅町中之内西原段	台地	縄文	縄文土器	町埋文報(12)
29	63-27-0	西原段Ⅰ	曽於市大隅町中之内西原段	台地	縄文(後)	岩崎上層式	H18，19年度本調査
30	63-99-0	ノトロ	曽於市大隅町中之内ノトロ	台地	縄文(晩)	縄文土器・局部磨製石斧・叩石	
31	63-206-0	谷川内	曽於市大隅町中之内谷川内	丘陵	奈良～平安	土師器	
32	63-146-0	蕨谷	曽於市大隅町中之内蕨谷	丘陵	縄文(早)，歴史	小片のため時代不明	
33	63-186-0	峯段	曽於市大隅町中之内峯段	台地	縄文，平安	土器・土師器	町埋文報(16)
34	63-115-0	打込	曽於市大隅町中之内打込	台地	弥生，歴史	土師器	
35	63-95-0	わらび堂	曽於市大隅町中之内わらび堂	台地	縄文(晩)	縄文土器・貝岩剥片	
36	63-142-0	前岡	曽於市大隅町中之内前岡	台地	歴史	土師器	
37	63-252-0	野鹿倉	曽於市大隅町中之内野鹿倉	台地	縄文	土器	H19年度本調査
38	63-141-0	前畑	曽於市大隅町中之内前畑	台地	縄文，歴史	須恵器	県埋文報(56)
39	63-143-0	重ヶ迫	曽於市大隅町中之内重ヶ迫	台地	古代	土師器	
40	63-144-0	重吉迫Ⅰ	曽於市大隅町中之内重吉迫	台地	古代	土師器・黒色土器	
41	63-40-0	中崎迫	曽於市大隅町中之内中崎迫	台地	縄文(晩)，歴史	土師器	
42	63-145-0	高尾迫	曽於市大隅町中之内高尾迫	台地	歴史	土師器	
43	63-28-0	重吉迫Ⅱ	曽於市大隅町中之内重吉迫	台地	縄文(後)，古代	土師器	
44	63-17-0	観音段	曽於市大隅町中之内4300	台地	縄文（早）	石皿	
45	63-29-0	狩谷	曽於市大隅町中之内狩谷	台地	縄文（後）	叩石・石皿	「大隅町誌」
46	63-187-0	八木塚	曽於市大隅町中之内八木塚	台地	中世	墳丘（消滅）	
47	63-102-0	柿木渡	曽於市大隅町中之内柿木渡	台地	縄文	石錘（５例）	
48	63-168-0	手取城跡	曽於市大隅町中之内手取・陣之元	丘陵	中世，近世		町埋文報(15)
49	63-16-0	赤松迫	曽於市大隅町大谷赤松迫	台地	縄文(早)	石坂式	
50	63-253-0	建山	曽於市大隅町中之内建山	台地	縄文，古墳	土器	H17，18年度本調査
51	63-213-0	一里山	曽於市大隅町中之内一里山サセフ	台地	縄文(早)	前平式・塞ノ神式	
52	63-166-0	一里山	曽於市大隅町中之内一里山・二本枦	台地	縄文(晩)，古墳	土師器・青磁	
53	63-239-0	尾ノ迫	曽於市大隅町中之内桂	台地	縄文，中世，近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
54	63-240-0	吹切段Ａ	曽於市大隅町中之内西笠木	台地	縄文，中世，近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
55	63-254-0	狩俣	曽於市大隅町岩川狩俣	台地	縄文，古代	土器・石器	H17，18年度本調査
56	63-41-0	吹切段Ⅰ	曽於市大隅町中之内吹切段	台地	縄文(晩)	(布目文)	「大隅町誌」

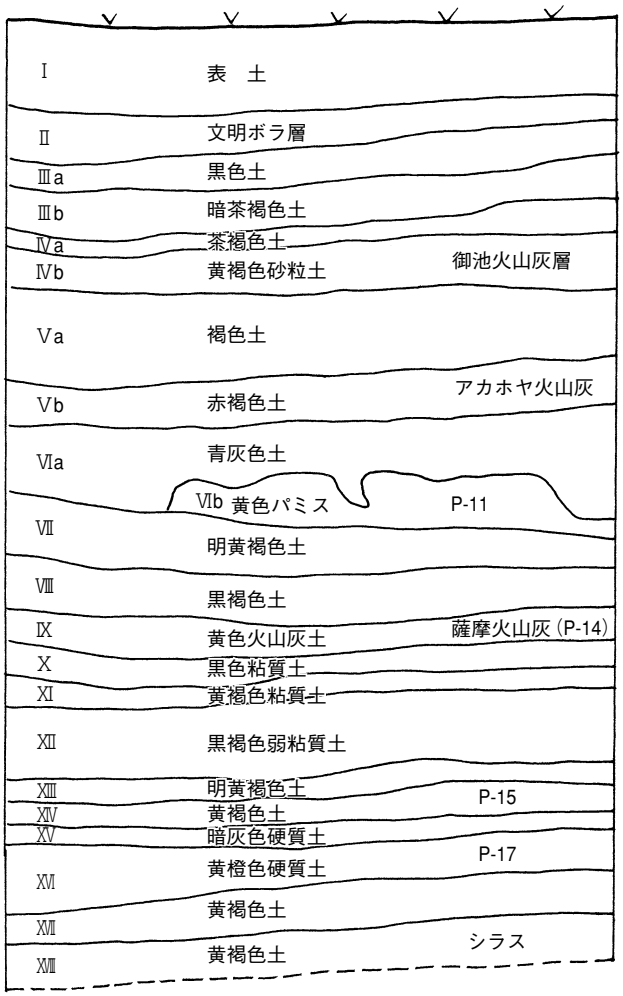


第４図　鳥居川・チシャノ木遺跡周辺の遺跡地図

第２表　鳥居川・チシャノ木遺跡の周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番　号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	63-168-0	手取城跡	曽於市大隅町中之内手取・陣之元	丘陵	中世，近世		「日本城郭体系」18，町埋文報(15)
2	63-236-0	陣之元	曽於市大隅町中之内東笠木	台地	縄文，中世	土器・陶磁器	町埋文報(15)
3	63-253-0	建山	曽於市大隅町中之内建山	台地	縄文，古墳	土器	
4	63-213-0	一里山	曽於市大隅町中之内一里山サセフ	台地	縄文(早)	前平式・塞ノ神式	
5	63-166-0	一里山	曽於市大隅町中之内一里山・二本枦	台地	縄文(晩)，歴史	土師器・青磁	
6	63-239-0	尾ノ迫	曽於市大隅町中之内桂	台地	縄文，中世，近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
7	63-240-0	吹切段Ａ	曽於市大隅町中之内西笠木	台地	縄文，中世，近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
8	63-223-0	笠木	曽於市大隅町笠木	台地	縄文(晩)奈良～近世		町埋文報(15)
9	63-254-0	狩俣	曽於市大隅町岩川狩俣	台地	縄文，古代	土器・石器	
10	63-41-0	吹切段Ⅰ	曽於市大隅町中之内吹切段	台地	縄文(晩)	(布目文)	「大隅町誌」
11	63-222-0	前田・外戸堀	曽於市大隅町笠木前田外戸堀	台地	縄文(中・後)		町埋文報(15)
12	63-133-0	井手間Ⅰ	曽於市大隅町中之内井手間	台地	古墳		
13	63-118-0	吹切段Ⅱ	曽於市大隅町中之内吹切段	台地	縄文(早・晩)，弥生，古代，中世	弥生土器	
14	63-241-0	松ヶ迫田	曽於市大隅町中之内笠木	台地	縄文	土器・石器	町埋文報(21)
15	63-42-0	論所迫	曽於市大隅町中之内論所迫・外戸田	台地	縄文(晩)，歴史	石刃・土師器	
16	63-77-0	論所谷	曽於市大隅町中之内論所谷	台地	縄文	石斧	
17	63-224-0	中田	曽於市大隅町笠木中田	台地	縄文（晩）		町埋文報(15)
18	63-221-0	外戸田	曽於市大隅町笠木外戸田	台地	縄文(後)，古代		町埋文報(15)
19	63-148-0	井手間Ⅱ	曽於市大隅町中之内井手間	台地	歴史	土師器	
20	63-234-0	入角	曽於市大隅町岩川入角	台地	古墳？	墳丘？	
21	63-255-0	高古塚	曽於市大隅町岩川高古塚	台地	古墳，古代	土器	
22	63-52-0	松ヶ迫田	曽於市大隅町中之内松ヶ迫田	台地	縄文(早･後･晩)，歴史	縄文土器	
23	63-61-0	浅井	曽於市大隅町岩川向上・仮屋ヶ段	丘陵	縄文	石斧・叩石	「大隅町誌」
24	63-242-0	長迫Ａ	曽於市大隅町中之内神掛	段丘	縄文，中世，近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
25	63-225-0	津風呂ヶ山	曽於市大隅町笠木津風呂ヶ山	台地	縄文(後・晩)		町埋文報(15)
26	63-136-0	光神免	曽於市大隅町岩川2828－３	丘陵	古墳	土師器	削平を受けているが墳丘らしきものが残存
27	63-119-0	長迫	曽於市大隅町中之内長迫	丘陵	縄文(晩)，弥生，歴史	石斧・叩石・土師器	
28	63-44-0	上山	曽於市大隅町岩川上山	台地	縄文(晩)，歴史		
29	63-100-0	郷田Ⅱ	曽於市大隅町中之内鍋山	丘陵	縄文(晩)，弥生	押型文・網目状文・弥生土器・土師器	
30	63-226-0	般久保	曽於市大隅町笠木	台地	縄文		町埋文報(15)
31	63-243-0	菅牟田Ａ	曽於市大隅町岩川管牟田	山腹	縄文，中世，近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
32	63-43-0	イチノ木	曽於市大隅町岩川イチノ木・前畑段	台地	縄文（晩）		
33	63-120-0	郷田Ⅰ	曽於市大隅町中之内郷田	丘陵	縄文（早・中・後・晩），弥生，歴史	土師器	
34	63-149-0	片水段	曽於市大隅町中之内片水段	丘陵	縄文(早･前･晩)，歴史	集石遺構・陥し穴３基等（縄文早期）・土師器	確認調査
35	63-156-0	菅牟田	曽於市大隅町岩川管牟田	丘陵	縄文，古代	土師器	町埋文報(21)
36	63-244-0	井手山Ａ	曽於市大隅町岩川井手山	台地	縄文(早)，近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
37	63-62-0	井手山	曽於市大隅町岩川井手山・定塚	台地	縄文，歴史	土師器	
38	63-2-0	定塚	曽於市大隅町岩川定塚・入佐	台地	縄文(早)，歴史	前平式・塞ノ神式・土師器	
39	63-63-0	稲村	曽於市大隅町岩川稲村	丘陵	縄文		
40	63-3-0	段	曽於市大隅町岩川小豆穴・段・赤称迫	台地	縄文(早・晩)，歴史	押型文・石匙・打製石器・土師器	
41	63-70-0	久木山	曽於市大隅町岩川麦ヶ迫	台地	縄文	叩石・石皿・石斧	「大隅町誌」
42	63-150-0	上松田	曽於市大隅町中之内上松田	低地	縄文，歴史	土師器	
43	63-185-0	久木山経塚	曽於市大隅町岩川3357	台地		一字一石経塚	
44	63-24-0	大丸	曽於市大隅町大谷2040	台地	縄文(中・後)	阿高式・指宿式・岩崎式	「大隅町誌」，町埋文報(5)
45	63-157-0	舟窪迫	曽於市大隅町岩川舟窪迫	丘陵	歴史	土師器	
46	63-25-0	向段	曽於市大隅町大谷向段	丘陵	縄文(中・後)	阿高式・指宿式・市来式	「大隅町誌」，「郷土の史跡」第４号，町埋文報(5)
47	63-4-0	葛原	曽於市大隅町岩川葛原	台地	縄文(早・晩)	押型文	「大隅町誌」
48	63-256-0	中之迫	曽於市大隅町岩川中之迫	台地	古墳	土器	
49	63-158-0	中迫Ⅰ	曽於市大隅町岩川中迫	丘陵	歴史	土師器	
50	63-46-0	所迫	曽於市大隅町岩川所迫	丘陵	縄文(晩)	刃器	
51	63-191-0	中大谷城跡	曽於市大隅町大谷字中大谷	丘陵	中世（戦国末～慶長４年）	腰郭・空堀・竪堀・大手・搦手	県埋文報(29)
52	63-227-0	小迫頭	曽於市大隅町岩川葛原	台地	縄文(前～晩)	土器・石器	町埋文報(5)
53	63-45-0	中迫Ⅱ	曽於市大隅町岩川中迫	丘陵	縄文(晩)	黒川式	
54	63-64-0	池ノ段	曽於市大隅町岩川池ノ段	丘陵	縄文		
55	63-216-0	新原	曽於市大隅町岩川1257	台地	縄文(晩)	石斧	
56	**63-257-0**	**鳥井川**	**曽於市大隅町岩川鳥井川**	**台地**	**縄文**	**土器**	**本報告書**
57	63-259-0	岩川前段	曽於市大隅町岩川前段	台地	縄文	土器	
58	**63-258-0**	**チシャノ木**	**曽於市大隅町岩川チシャノ木**	**台地**	**縄文，古代**	**土器**	**本報告書**
59	63-193-0	大谷城跡	曽於市大隅町大谷字本城他	丘陵･台地	中世（南北朝～戦国末）	腰郭・空堀・大手・搦手・土塁・狼煙台	県埋文報(29)

第Ⅳ章　遺跡の層位



※土層柱状図は桐木遺跡をもとに作成

第５図　土層断面図

第５図の地層模式図で示したように第Ⅰ層が畑として使用された表土層である。

第Ⅱ層は薄い黄色を呈した小粒の軽石層で，文明３年（1471）の桜島起源軽石層である。文明年間に噴火し，降下したことで文明ボラと言われている。ボラとは鹿児島県霧島市福山町牧ノ原地区を中心に言われている俗称で，軽石をさしている表現である。この軽石層はよく中世の遺構を覆っていることが多く，畠の畝跡等が発見されている。

第Ⅲ層は粒の小さい土質でⅢａ層とⅢｂ層に分けられる。Ⅲａ層は腐食が発達した黒色土でよく中世の遺物を出土する層である。Ⅲｂ層は暗茶褐色土で奈良・平安時代の遺物が包含されている層である。

第Ⅳ層はⅣａ層とⅣｂ層に分けられる層で，特にⅣｂ層は霧島山御池起源の火山灰で，御池火山灰と言われている層である。Ⅳａ層は御池火山灰の二次堆積層に相当し茶褐色土層でやや腐食土層を呈している。縄文時代中期と晩期の遺物が出土している。Ⅳｂ層は黄褐色砂粒土で，霧島山系の東端にある御池からの噴出物に相当する火山灰である。また，これらの層が流れ込んだ落とし穴状遺構も第Ⅴ層で確認できる。

第Ⅴ層はⅤａ層とⅤｂ層に分けられる。この層は主に鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰で形成された層に相当する。Ⅴａ層は褐色土でⅤｂ層の二次堆積土の腐植土層である。縄文早期末から前期にかけての層である。それはこの層がアカホヤ火山灰約ＢＰ6,300年とその上の御池火山灰約ＢＰ4,300年の間である理由からである。Ⅴｂ層はアカホヤ火山灰の一次層に相当し，赤褐色でさらさら感があり，下位に赤い火山豆石の堆積がみられる。

第Ⅵ層はⅥａ層とⅥｂ層に分けられる。Ⅵａ層は青灰色土層で霧島起源の火山灰が腐食した土層である。縄文時代早期の遺物が出土する。Ⅵｂ層は桜島起源のＰ11の降下火山灰によるもので黄色や茶色軽石が下部に堆積し一次層を形成している。上部は軽石層が崩れた状態で堆積しているので２次的な層と判断できる。この層には軽石層のため遺物の出土はない。このＰ11のＢＰ年代は約7,400年である。

第Ⅶ層は明黄褐色をした腐食土層である。この層は縄文時代早期の遺物が出土する。

第Ⅷ層は黒褐色をした腐植土層である。遺物の出土は少ない。

第Ⅸ層は黄色火山灰堆積層で桜島起源のＰ14にあたる。別名薩摩火山灰である。ＢＰ年代は約11,400年と言われている。遺物の出土はない。

第Ⅹ層は黒色粘質の発達した腐植土層である。通称チョコ層と呼ばれ，縄文時代草創期から旧石器時代の遺物が出土する層である。

第ⅩⅠ層は軟質の黄褐色粘質土層で小形のナイフ形石器を出土する層である。

第ⅩⅡ層は硬質のブロックがある黒褐色弱粘質土層で，ナイフ形石器が出土する層である。

第ⅩⅢ層は硬質のローム層で明黄褐色土層の中に白い径２・３㎜のパミスが部分的に点在する。ナイフ形石器が出土する層である。

第ⅩⅣ層は硬質ロームの黄褐色土層で中に赤褐色パミスが点在する。このパミスは桜島起源のＰ15に相当する。ナイフ形石器を出土する層である。

第ⅩⅤ層は硬質のローム層で暗灰色を呈している。これは，下部にナイフ形石器を出土する層である。

第ⅩⅥ層黄橙色の硬質ローム層である。中に赤茶褐色のＰ17のパミスを含む。上部にナイフ形石器を出土する層である。

第ⅩⅦ層は黄褐色土層でこの層の下位になるシラスの風化層である。

第ⅩⅧ層は黄褐色土でシラスの二次堆積層である。

関　山　遺　跡

第Ⅴ章　関山遺跡

第１節　発掘調査の方法

全面調査は，確認調査時に設定された道路センター杭282～283間を基準にした10mグリッドをもとに実施した。

調査区は，道路建設地のため細長く，長軸はほぼ南北の方位に一致している。また，調査区南側を県道501号線が横断し，調査区は南北に分断されている。グリッドには，西から東へＡ～Ｊ，南から北へ１～34区の名称を付した。このグリッドを基準に遺構実測・遺物の取り上げを行った。

確認調査では，13か所の確認トレンチを入れて，調査範囲を絞り込んだ。その結果，全面調査は県道北側の台地から谷に向う地点を中心に行い，県道南側の台地中央部の地点には，さらに確認トレンチを入れて調査範囲の絞り込みを行った。

調査範囲は，第６図で示した様にＤ－14区，Ｄ－17区，Ｆ－16区を結んだ三角形の地域とＤ－19区，Ｇ－17区，Ｄ－25区，Ｇ－36区を結んだ台形の地域で実施した。

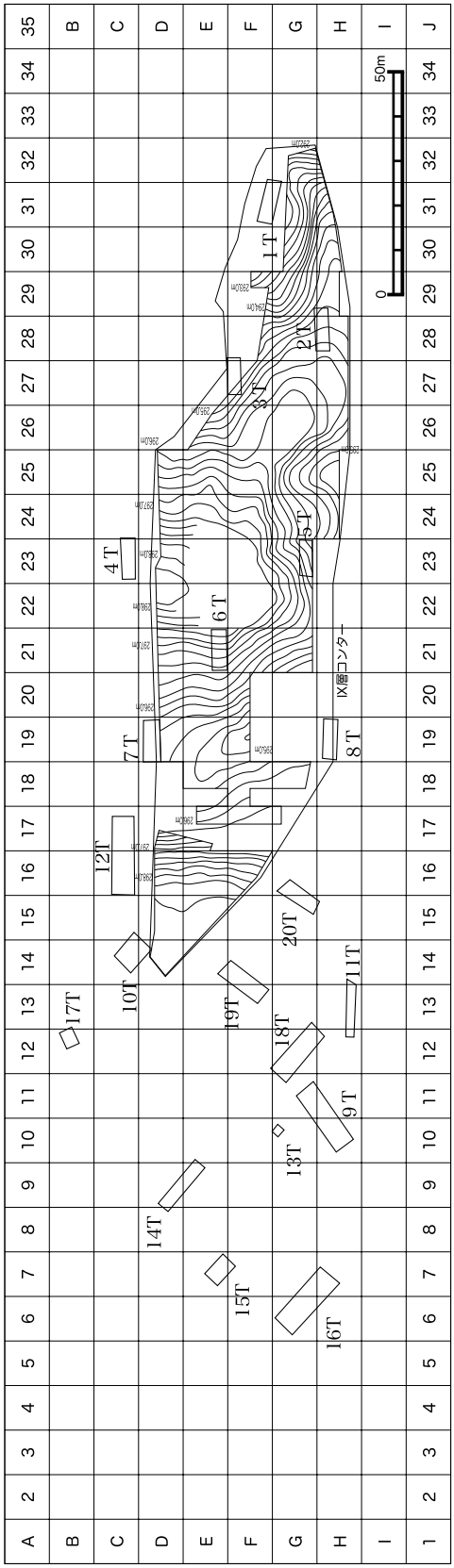
発掘調査は，重機で表土を除去したあと，人力で遺物包含層を掘り下げ，遺構検出を行った。Ⅱ層の文明ボラ層の堆積が１ｍを超える場所もあり，これも重機で除去した。掘削と並行して，壁沿いに先行トレンチを設定して，土層の堆積状況の把握に努めた。

Ⅲ層面では，近世の遺構の検出を行い，掘立柱建物跡とピット群が確認された。Ⅲｂ層面では，古代・中世の遺構の検出を行い，溝状遺構が確認された。Ⅳａ層面では縄文時代後期の遺構の検出を行い，竪穴住居跡が確認された。Ⅴａ層面では，縄文中期の遺構の検出を行い，落とし穴が確認された。Ⅶ～Ⅷ層では，縄文早期の遺構の検出を行い，集石が確認された。Ⅸ層面では，縄文早期の遺構の検出を行い，落とし穴と土坑が確認された。

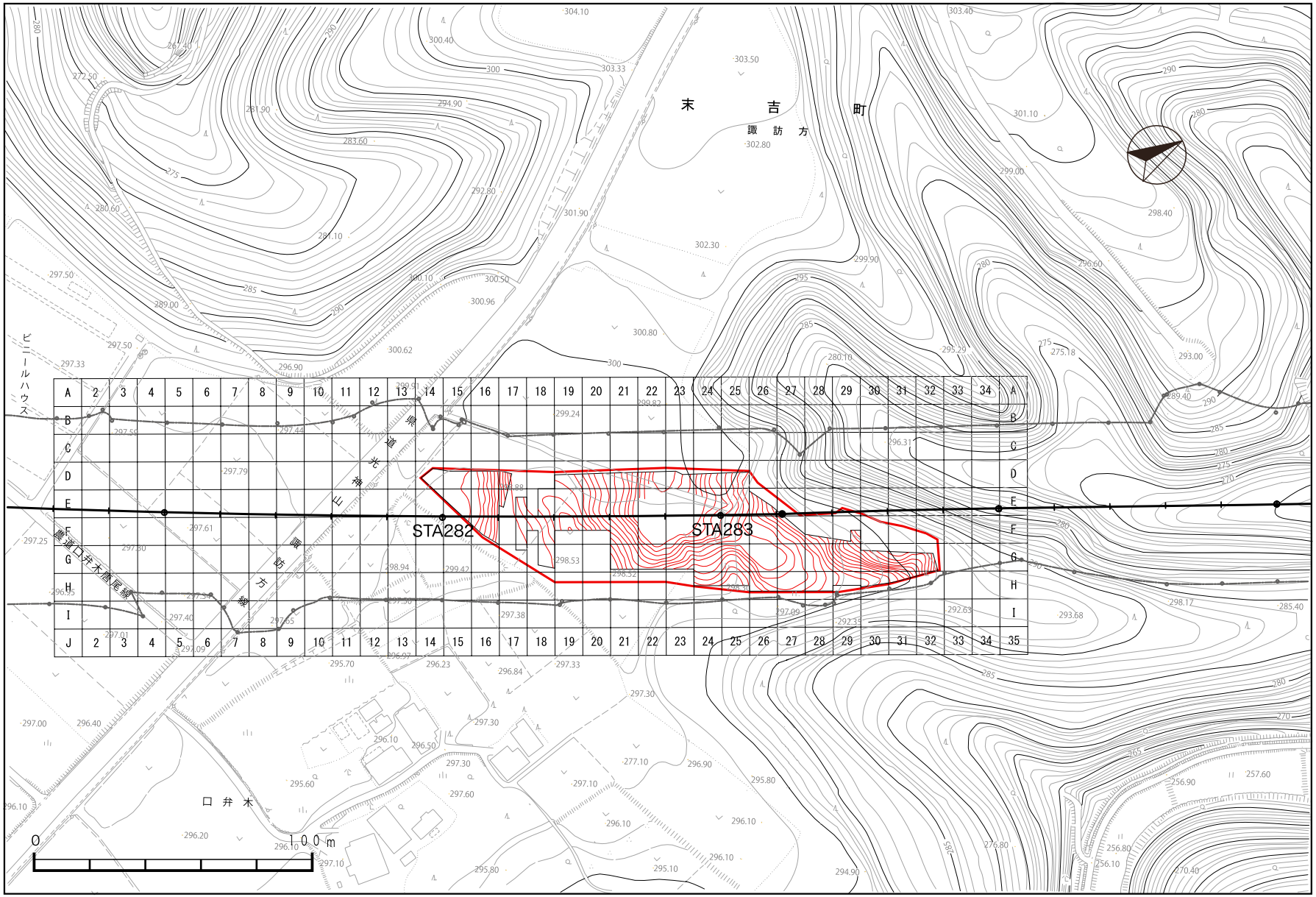
旧石器時代の調査は，確認トレンチ及び先行トレンチで，遺物の集中が確認された地点を拡張する方法で行った。拡張した地点は，２ｍメッシュを設定して掘り下げを行った。礫群が２基確認され，細石刃文化期の遺物とナイフ形石器文化期の遺物が出土している。

全面調査では，遺構配置図の作成と遺物取り上げを，光波測量で行った。遺構配置図の一部については，平板測量でも行った。確認調査では，遺構配置図の作成と遺物取り上げのいずれも，平板測量で行った。

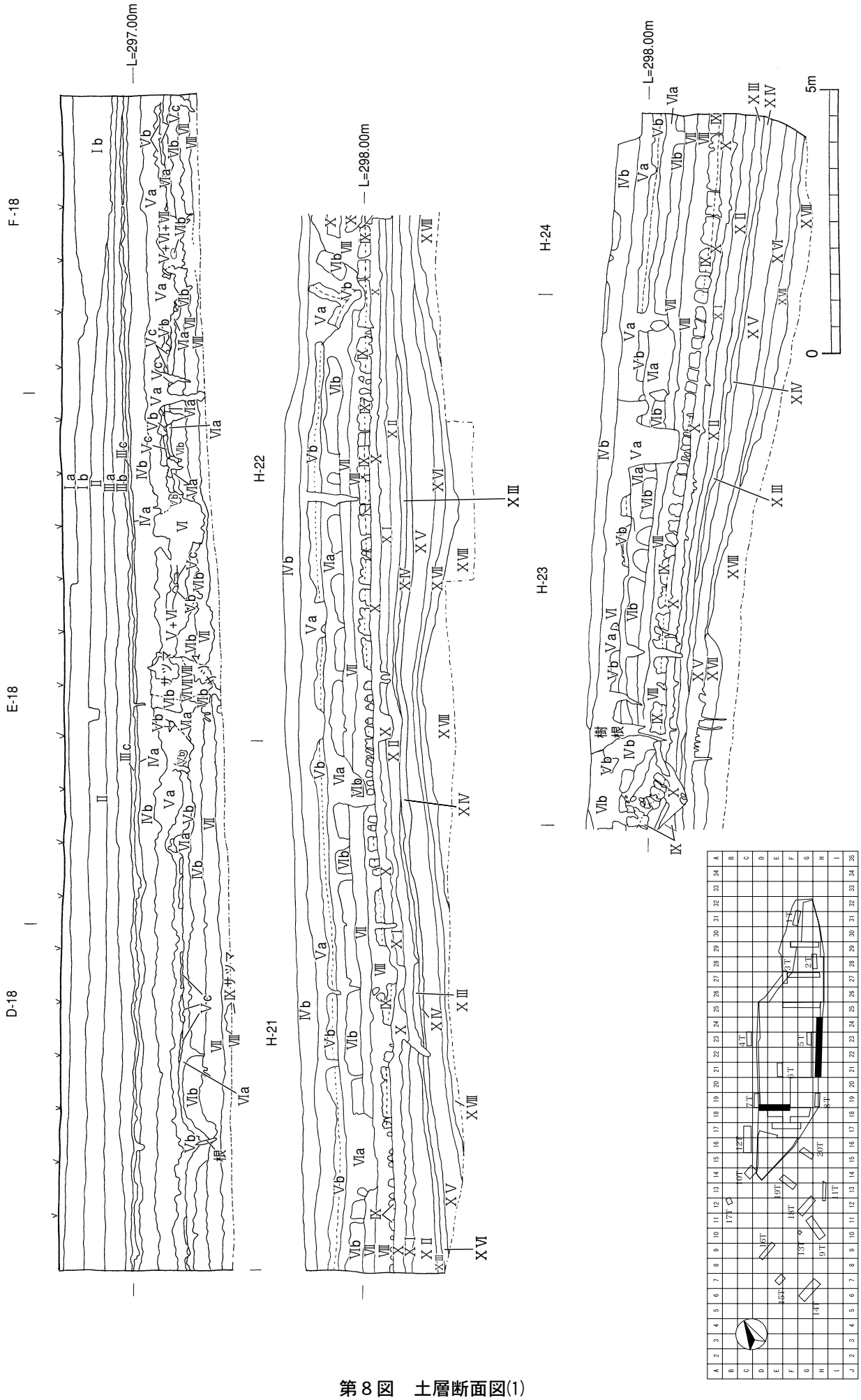
第８～10図は全面調査区の土層断面図である。第11，12図は確認トレンチの土層断面図である。調査区は，樹痕や一部攪乱層があり，少々乱れているが水平に近い堆積をしている。



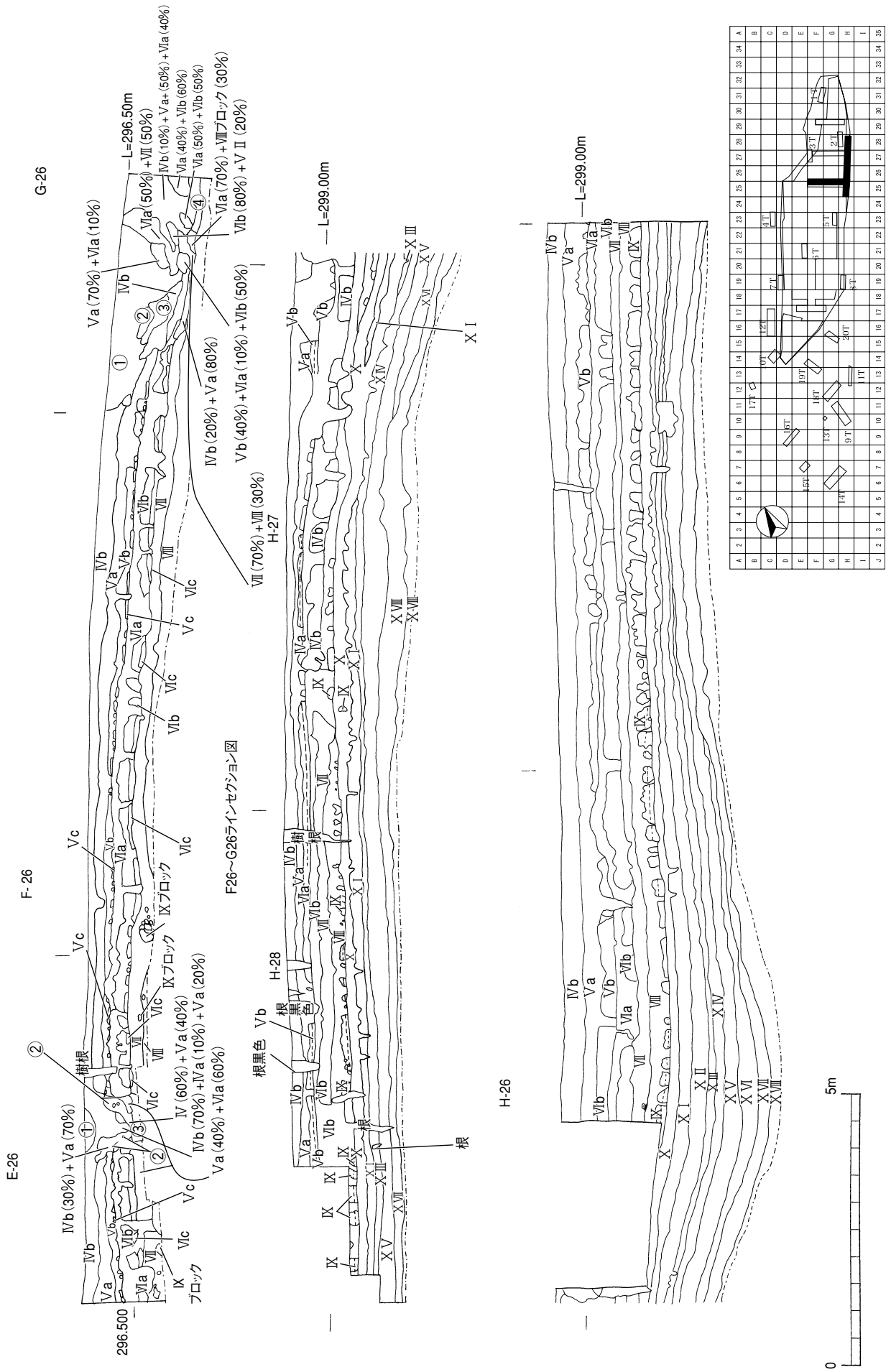
第６図　グリッド・トレンチ配置図



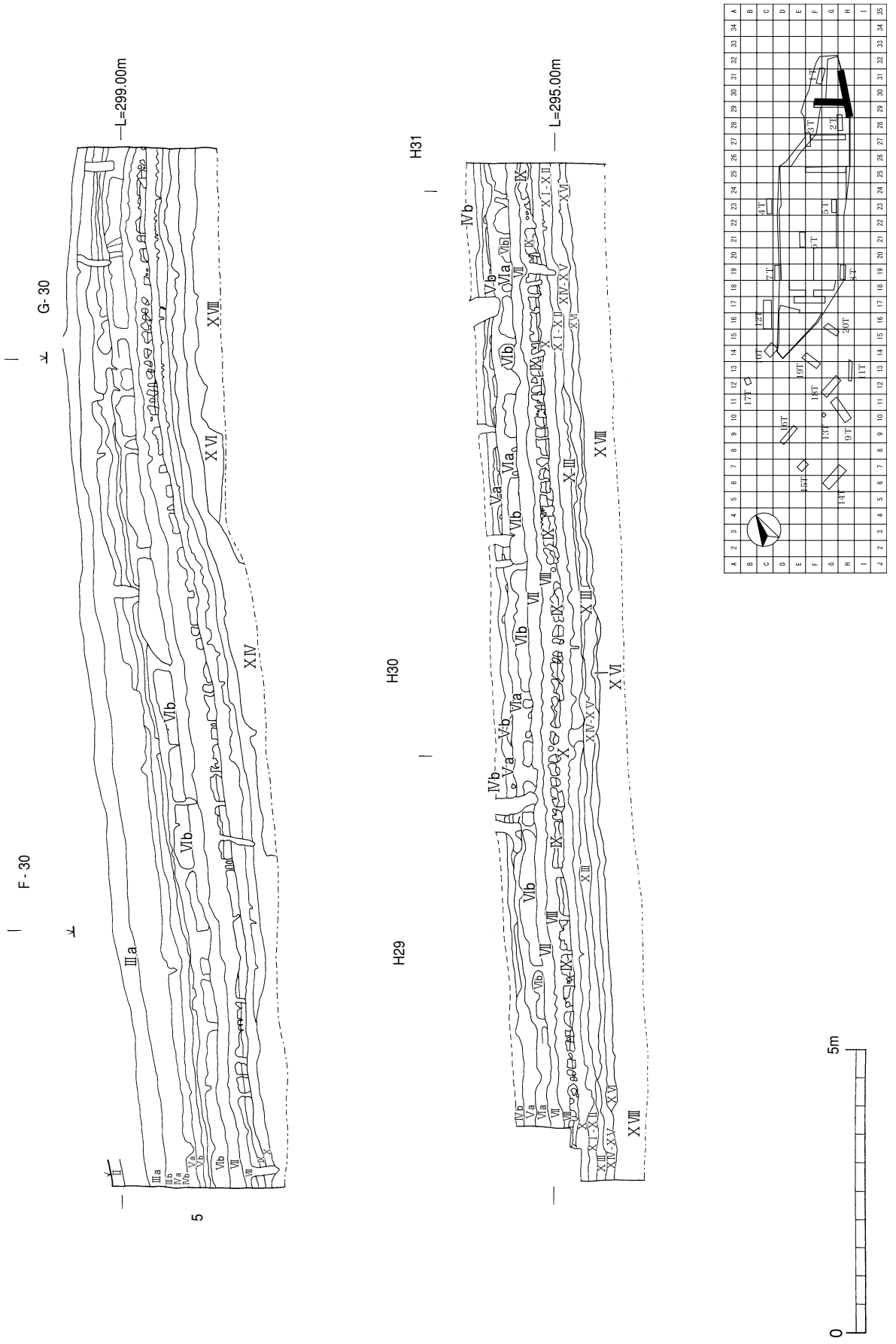
第７図　周辺地形図



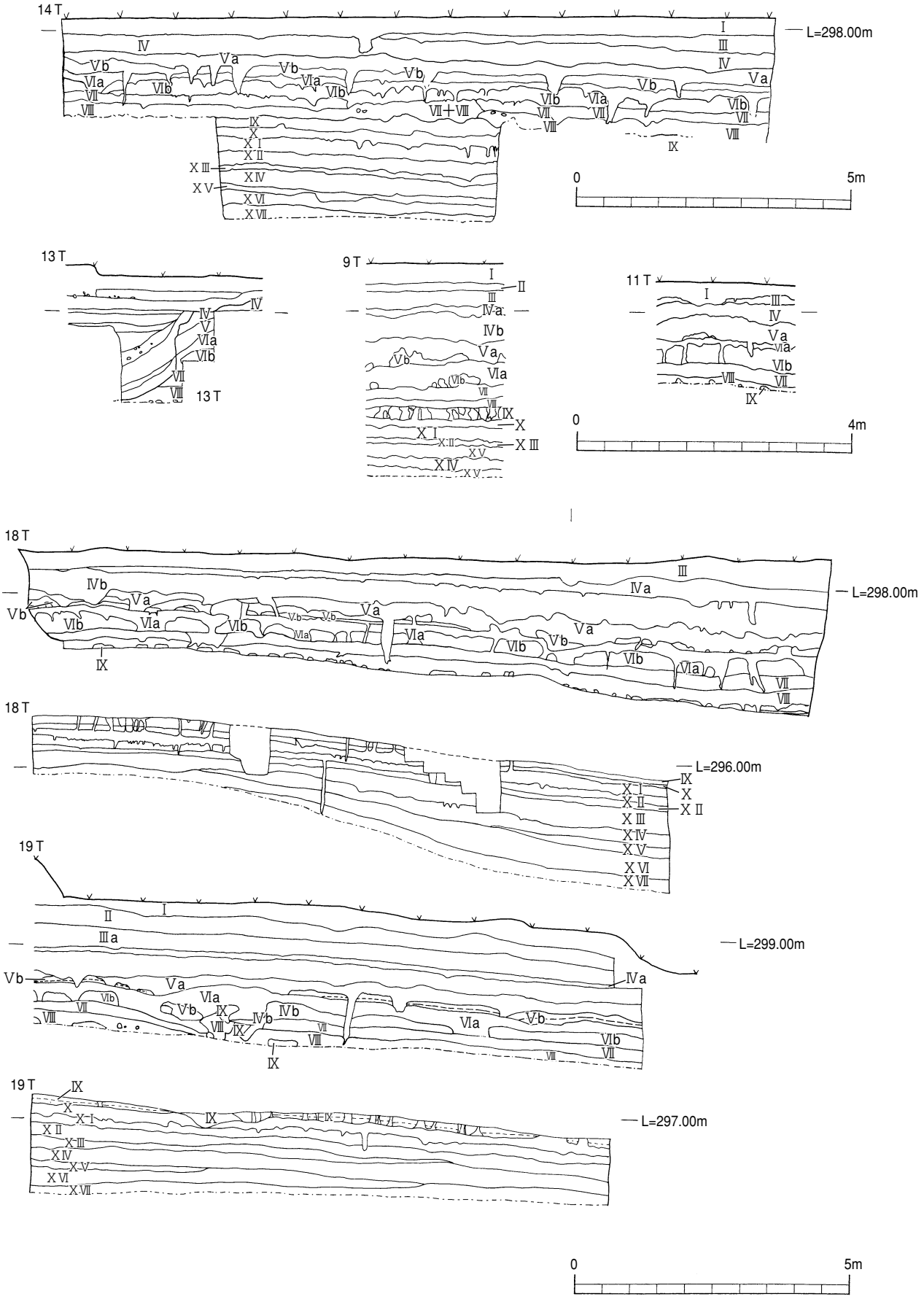
第８図　土層断面図(1)


G-26
F-26
E-26
H-27
H-28
H-26
F26～G26ラインセクション図
L=296.50m
L=299.00m
296.500
樹根
根黒色
根
IXブロック
5m
0

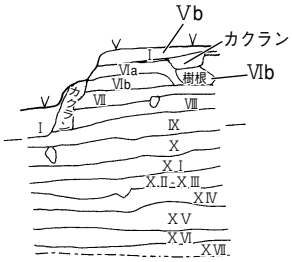
第９図　土層断面図(2)

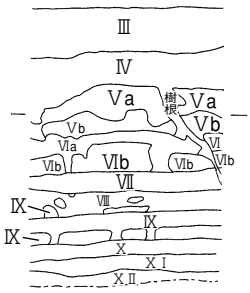


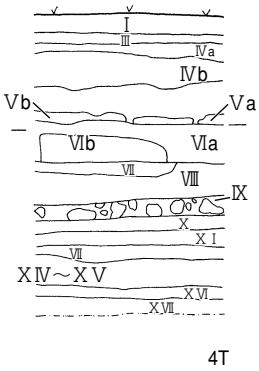
第10図　土層断面図(3)

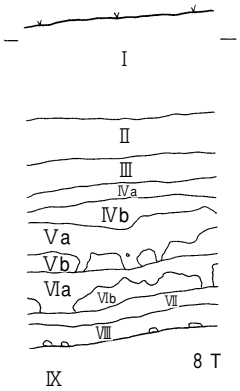

14T
L=298.00m
0
5m
13T
9T
11T
0
4m
18T
L=298.00m
18T
L=296.00m
19T
L=299.00m
19T
L=297.00m
0
5m

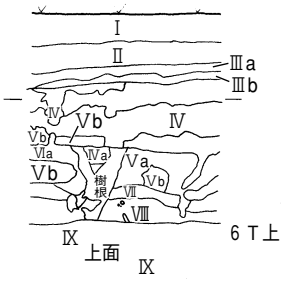
第11図　土層断面図(4)

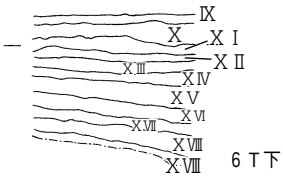

Vb
カクラン
VIa
VIb
樹根
10T

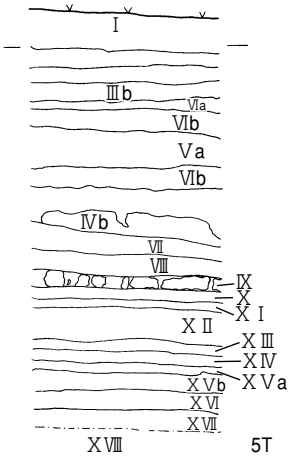

III
IV
Va
樹根
Vb
VIa
VIb
VII
VIII
IX
X
XI
XII
7T

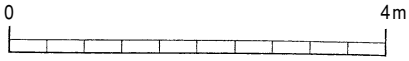

I
III
IVa
IVb
Vb
Va
VIb
VIa
VII
VIII
IX
X
XI
XIV～XV
XVI
XVII
4T

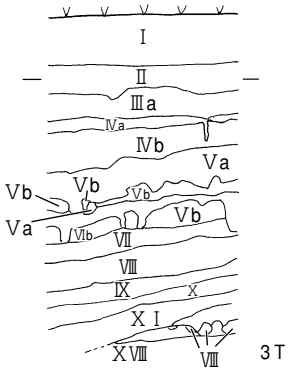

I
II
III
IVa
IVb
Va
Vb
VIa
VIb
VII
VIII
IX
8T

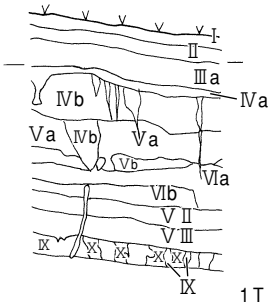

I
II
IIIa
IIIb
IV
Vb
Va
IVa
VIa
樹根
VII
VIII
IX
上面
6T上

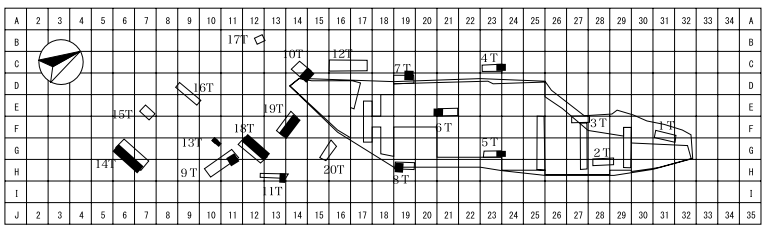

IX
X
XI
XII
XIII
XIV
XV
XVI
XVII
XVIII
6T下


I
IIIb
VIa
VIb
Va
IVb
VII
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
XIV
XVb
XVa
XVI
XVII
XVIII
5T


0
4m


I
II
IIIa
IVa
IVb
Va
Vb
VIb
VII
VIII
IX
X
XI
XVIII
3T


I
II
IIIa
IVa
IVb
Va
Vb
VIa
VIb
VII
VIII
IX
X
1T


17T
10T
12T
7T
4T
16T
15T
19T
18T
13T
6T
3T
1T
5T
2T
14T
9T
20T
8T
11T

第12図　土層断面図(5)

第２項　確認トレンチの状況

平成13年度の確認調査では，１Ｔから13Ｔまで設定して調査している。なお，14Ｔから20Ｔは，平成17年度の本調査時に遺跡範囲確認のために実施したものである。

１Ｔ

Ⅸ層まで検出した。Ⅲ層～Ｖａ層，Ⅶ層，Ⅷ層で遺物が出土している。

２Ｔ

表層の下は，ボラ抜きによる攪乱をうけている。Ⅳ層上面でⅢ層を埋土にした竪穴住居跡を検出した。下位の層は，本調査で調査している。

３Ｔ

ＸⅢ層まで検出した。Ⅱ層は一部ボラ抜きによる攪乱を受けている。Ⅲ層，Ⅳ層，Ⅵａ層，Ⅶ層，ＸＩ層で遺物が出土している。

４Ｔ

ＸⅦ層まで検出した。表層の下は，ボラ抜きによる攪乱を受けている。Ⅲ層は下部のみ残存している。Ⅲ層～Ｖｂ層はトレンチ中央部より北側が部分的に堆積している。Ⅵ層～ＸⅢ層まで堆積しているが，Ⅶ層以下の分層が困難であった。Ⅳ層，Ｖａ層，Ⅶ層，Ⅷ層，Ｘ層，ＸＩ層，ＸⅢ層で遺物が出土している。

５Ｔ

ＸⅧ層まで検出した。他のトレンチに比べ層の堆積がしっかりしている。Ⅸ層下部には，Ｐ14の一次堆積と見られる黄褐色微粒軽石が見られる。Ⅲ層，Ⅳ層，Ｖａ層，Ⅶ層で遺物が出土している。

６Ｔ

ＸⅧ層まで検出した。ボラ抜きによる攪乱を受けて，Ⅱ層からＶｂ層は削平を受け，部分的に堆積している。Ⅲ層～Ｖａ層，Ⅵａ層，Ⅶ層，Ⅷ層で遺物が出土している。また，Ⅷ層埋土の落とし穴状遺構を検出している。

７Ｔ

ＸⅡ層まで検出した。他のトレンチに比べ層の堆積がしっかりしている。南側に下るにつれてトレンチ内ではＸ層とＸＩ層の混在した層が見られる。Ⅲ層とⅦ層で遺物が出土している。

８Ｔ

Ⅸ層まで検出した。Ⅱ層からⅢ層は，北側へ途中から削平を受け，部分的に堆積している。表土が１ｍ以上と厚い。かつて県道建設に伴い，排土を埋めたと考えられる。Ⅳ層とⅦ層で遺物が出土している。

９Ｔ

ＸＶ層まで検出した。Ⅱ層からⅢ層は，削平を受けて部分的に堆積している。Ⅲ層で遺物が出土している。

10Ｔ

県道に面した地点であり，表土下は，Ⅱ層～Ｖａ層まで削平を受け，Ｖｂ層のアカホヤ火山灰層からの堆積になる。ＸＩ層まで検出した。Ⅶ層とＸ層で遺物が出土している。

11Ｔ

Ⅸ層まで検出した。ボラ抜きによる攪乱を受けて，Ⅱ層からⅢ層まで削平を受け，Ⅲ層の下部が部分的に堆積している。Ⅶ層，Ⅷ層で遺物が出土している。

12Ｔ

Ⅷ層まで検出した。ボラ抜きによる攪乱を受けて，Ⅱ層からⅢ層は削平を受けている。Ⅳ層とＶａ層で遺物が出土している。

13Ｔ

Ⅷ層まで検出した。繰り返しボラ抜きによる攪乱を受けて，Ⅱ層からⅢ層は削平を受けている。それ以下の層も部分的に削平を受けている。ボラ抜きを繰り返した攪乱層中に，大正３年（1914年）の桜島大噴火による火山灰層も確認されている。

第３項　石材の分類

本遺跡の石材の中で黒曜石の分類名称については，以下のように分類する。

黒曜石Ａ類（OB-A）

不純物が少ない黒色の良質な黒曜石で，まれに白色の不純物を含む。光沢はあるが，透明感はない。腰岳の原産資料に類似する。

黒曜石Ｂ類（OB-B）

不純物を多量に含みガラス質の強い性質を持つ黒曜石である。三船，日東，五女木，小川内，芳ヶ野，荒平，小浜，長谷，小国等の原産地資料に類似する。

黒曜石Ｃ類（OB-C）

不純物が少ない良質の黒曜石で飴色～黒色を基調とする。自然面は擦りガラス状を呈するものが多い。上青木，桑ノ木津留の原産地資料や霧島系の黒曜石に類似する。

第２節　旧石器時代の調査成果

第１項　分布状況

旧石器時代の調査は，平成13年度の確認トレンチ及び，本調査時の下層確認トレンチで，遺物の集中が確認された地点を拡張する方法で行った。拡張した地点は，２ｍメッシュを設定して掘り下げを行った。

台地から谷部に向かう縁辺部で礫群が２基確認され，細石刃文化期と，ナイフ形石器文化期の遺物が出土している。

谷部からの落ち込みには，ＸＩ層とＸⅡ層が混在する面もあり，流れ込みと考えられる遺物の出土状況もみられる。

第２項　遺構

礫群が２基，尾根の平坦部で検出されている。遺構名に付加したSR番号は，発掘調査時点での遺構番号である。

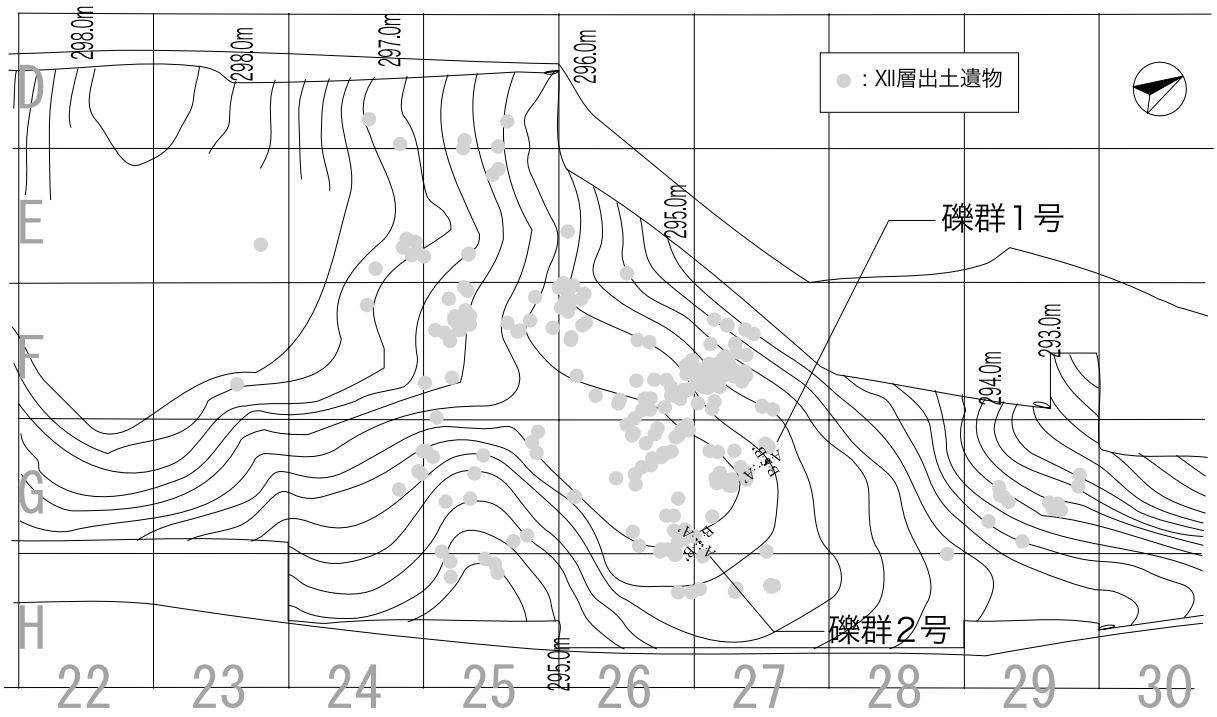
礫群１号（第14図）

Ｇ－26～27区のＸⅢ層面上で検出された。10個の石を確認した。被熱により，赤化，破砕しているものもあった。石材は頁岩，砂岩，凝灰岩が多い。落ち込み内の埋土はＸⅡ層土である。　（SR1）

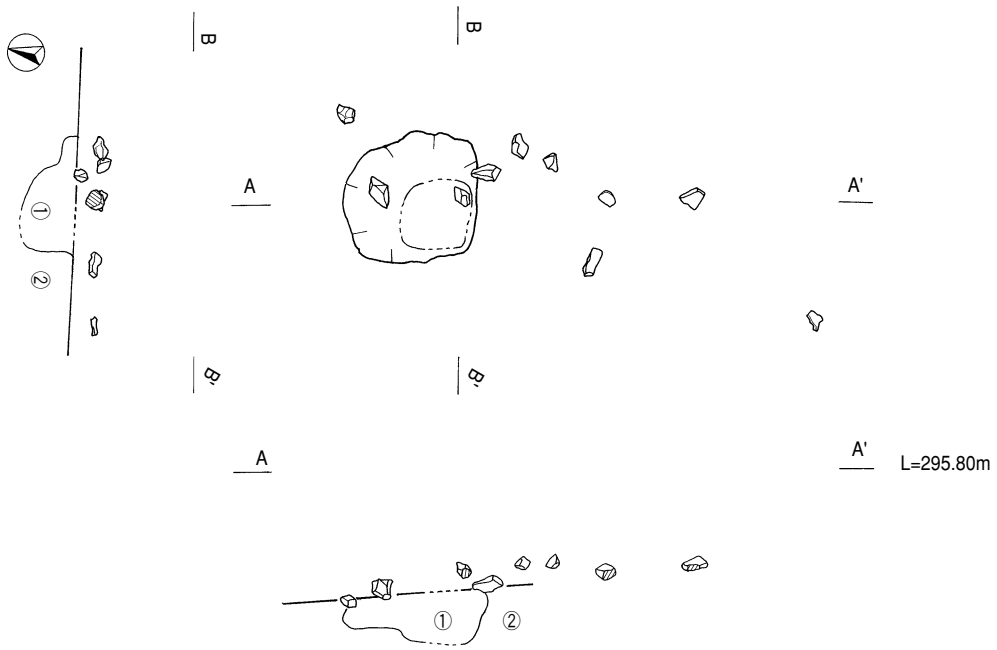
礫群２号（第14図）

Ｇ－27区で検出された。７個の石を確認した。約50㎝角状に固まって検出した。被熱により，赤化，破砕しているものもあった。石材は頁岩，砂岩，凝灰岩が多い。

（SR2）

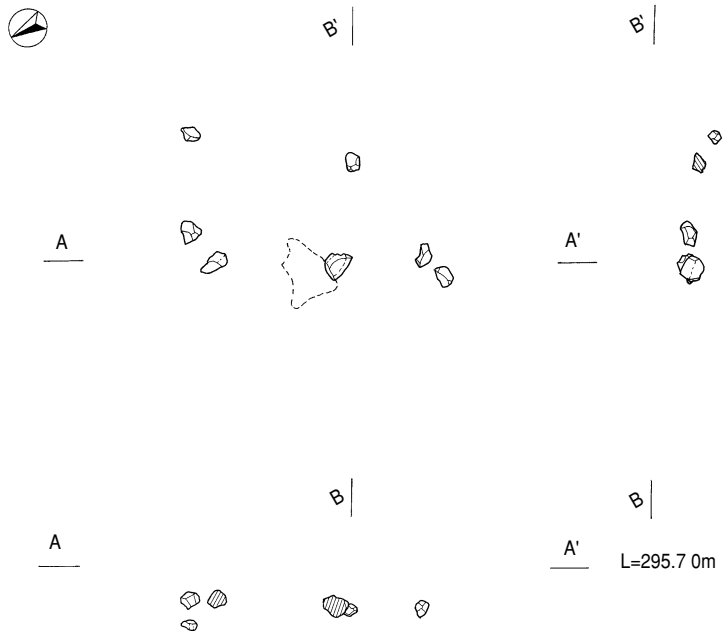


第13図　旧石器時代の遺構配置図

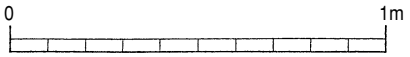


礫群１号（G―27区）

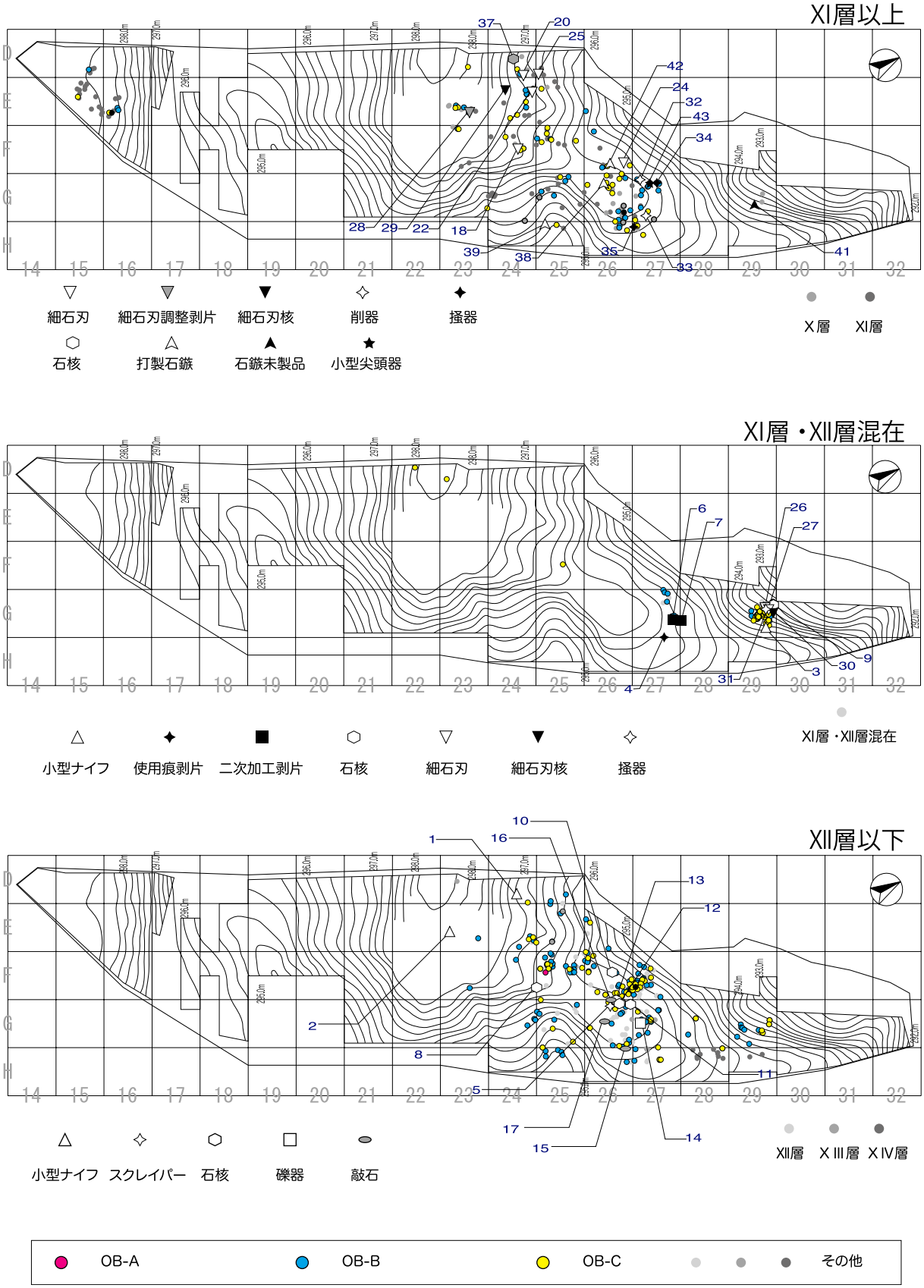
① 褐色土(7.5YR4/6)。ⅩⅡ層を中心とした色合い。②よりも黒っぽく見える。径１㎜～２㎜程度のオレンジ色のパミスを少量含む。P15はほとんど含まない。径１㎜弱の白や黒の砂粒をごく少量含む。しまりあり。粘りややあり。一部硬い部分があり，しまりが強く，粘りはなくボロボロと崩れる。
② ⅩⅢ層。明褐色土(7.5YR5/8)。P15を少量含む。しまりあり。粘りややあり。



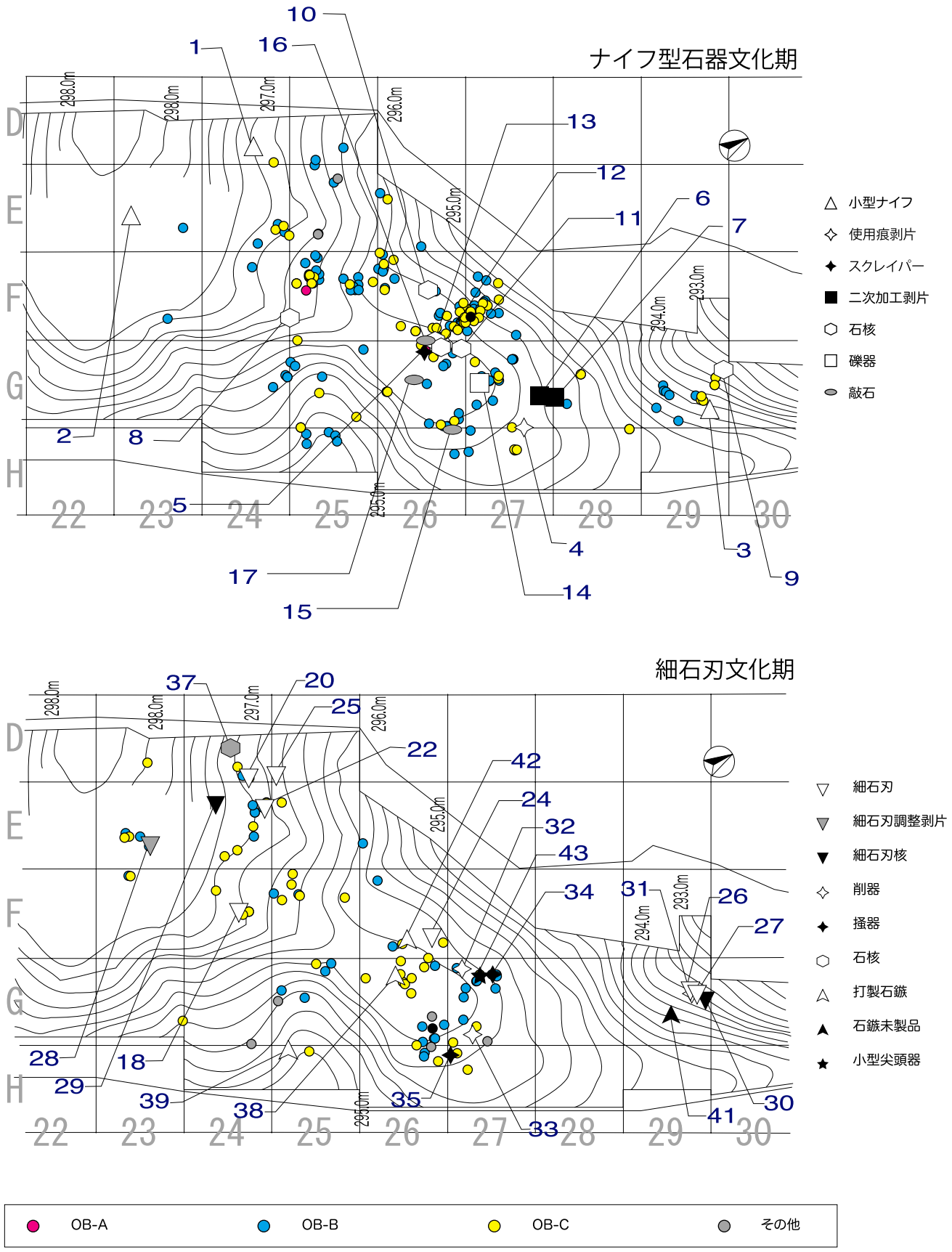
礫群２号（G―27区）



第14図　旧石器時代の礫群



第15図　旧石器時代の層別出土状況図



第16図　旧石器時代の遺物出土状況図

第３項　遺物

⑴　ナイフ形石器文化期

小型のナイフ形石器（１～３）

図の１～３は小型のナイフ形石器である。１は縦長剥片を素材とし，二側縁に二次加工であるブランティングを施している。２は縦長剥片を素材とし，一側縁にブランティングを施している。基部は欠損している。３は幅広剥片を素材とし，一側縁に粗いブランティングが施されている。

使用痕剥片（４）

図の４は使用痕剥片である。安山岩製の縦長剥片を素材としており，片側縁辺に微細ながら刃部として使用された痕跡が見られる。

スクレイパー（５）

図の５はスクレイパーである。厚めの剥片を素材としており，剥片の打面部に粗い二次加工を施し刃部としている。

二次加工剥片（６・７）

図の６と７は一部に二次加工が認められる剥片である。６は正面の上部と下部，裏面の右側縁に微細な二次加工が施されている。また左側縁に微細な使用痕も確認していることから楔形石器の可能性もある。７は正面の下部に微細な二次加工が施されている。

石核（８～13）

図の８～13は石核である。８は打面と作業面を交互に入れ替えながら剥離をおこなう石核である。９・10は単一方向から作出した平坦な面の剥離をおこなう石核である。11は礫面上で複数回の打面転移を行いながら剥離をおこなう石核である。12・13は単一方向から円礫の自然面の剥離をおこなう石核である。

礫器（14）

図の14は礫器である。砂岩製で下部に刃部加工を施している。また，左側縁と上部にも僅かに加工の痕跡が見られる。

凹石・敲石（15～17）

図の15・17は敲石である。両方とも砂岩製で15は上下に敲打痕，正面と裏面に磨面，17は上下と右側面に敲打痕をそれぞれ確認している。16は凹石・敲石である。安山岩製で正面・裏面と左右側面に凹石としての使用の痕跡，上下に敲打痕を確認している。

⑵　細石刃文化期

細石刃（18～28）

細石刃は合計10点出土しており，図の18～28までがそれに該当する。18～21・24は完形品で22が頭・中間部，23・25～27が尾部にあたる。なお28は細石刃ではなく調整剥片だと思われる。

細石刃核（29・30）

図の29・30は細石刃核である。29は野岳・休場系の細石刃核で，30は船野系の細石刃核だと思われる。29は剥片を素材とし，打面転移を行い作業面は正面の後の側面に形成されている。裏面と下部に礫面を残している。30は分割礫を素材としており，分割面を打面とし両側面に石核態形を施している。作業面は正面であるが剥落している。

掻器（31～33）

図の31～33は掻器である。31・32は剥片の打面部に刃部の加工を施している。33は左側縁辺に刃部の加工を施している。

削器（34・35）

図の34・35は削器である。34は右側縁辺に二次加工を施し刃部にしており，35は左側縁辺に加工を施している。

石核（36・37）

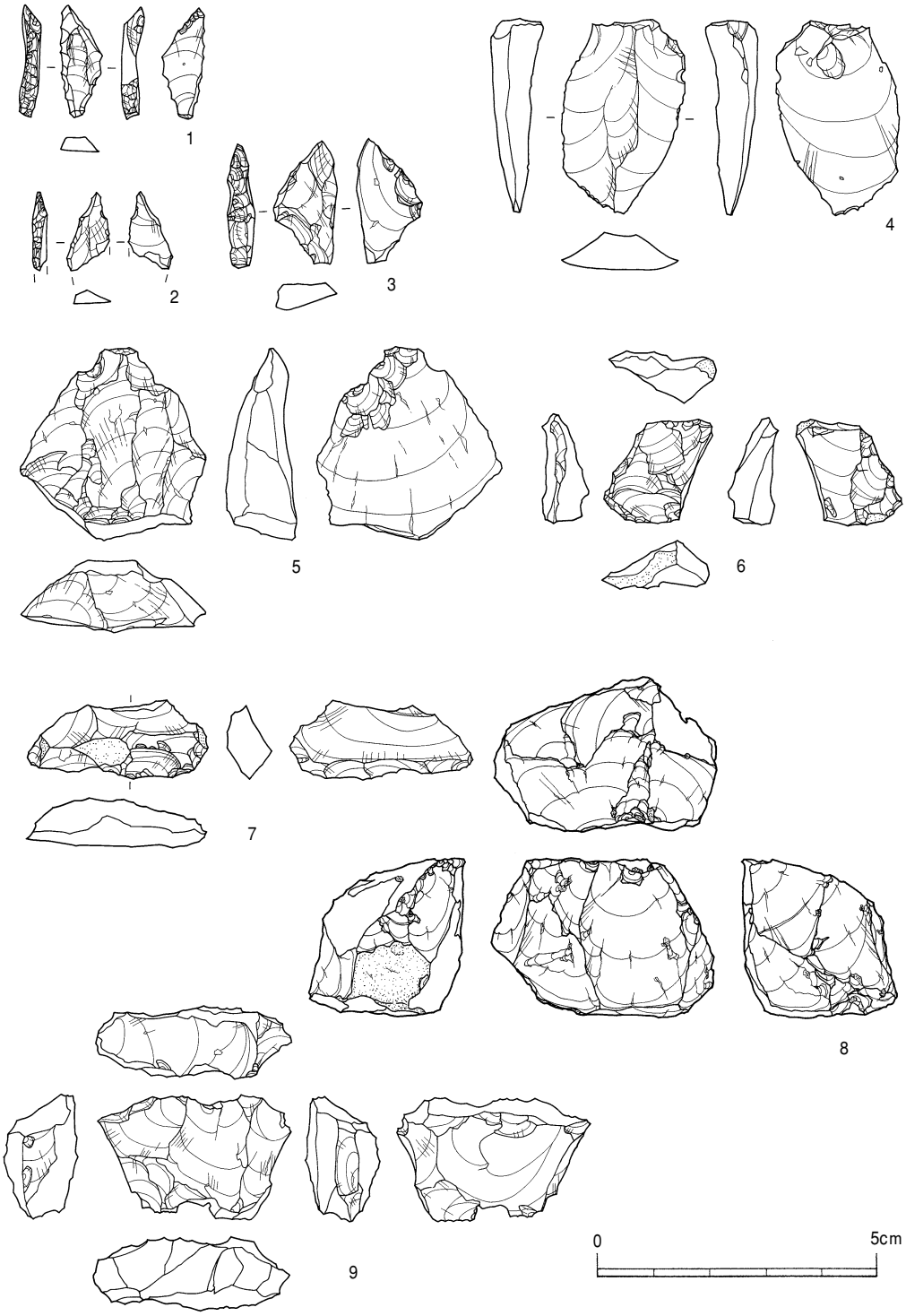
図の36・37は石核である。36は素材の周縁部から求心的な剥離をおこなう石核である。下面に刃部として使用された痕跡が僅かに見られる。37は多面体のサイコロ状に打面転移をおこなう石核だが，細石刃核のブランクの可能性もある。

石鏃（38～42）

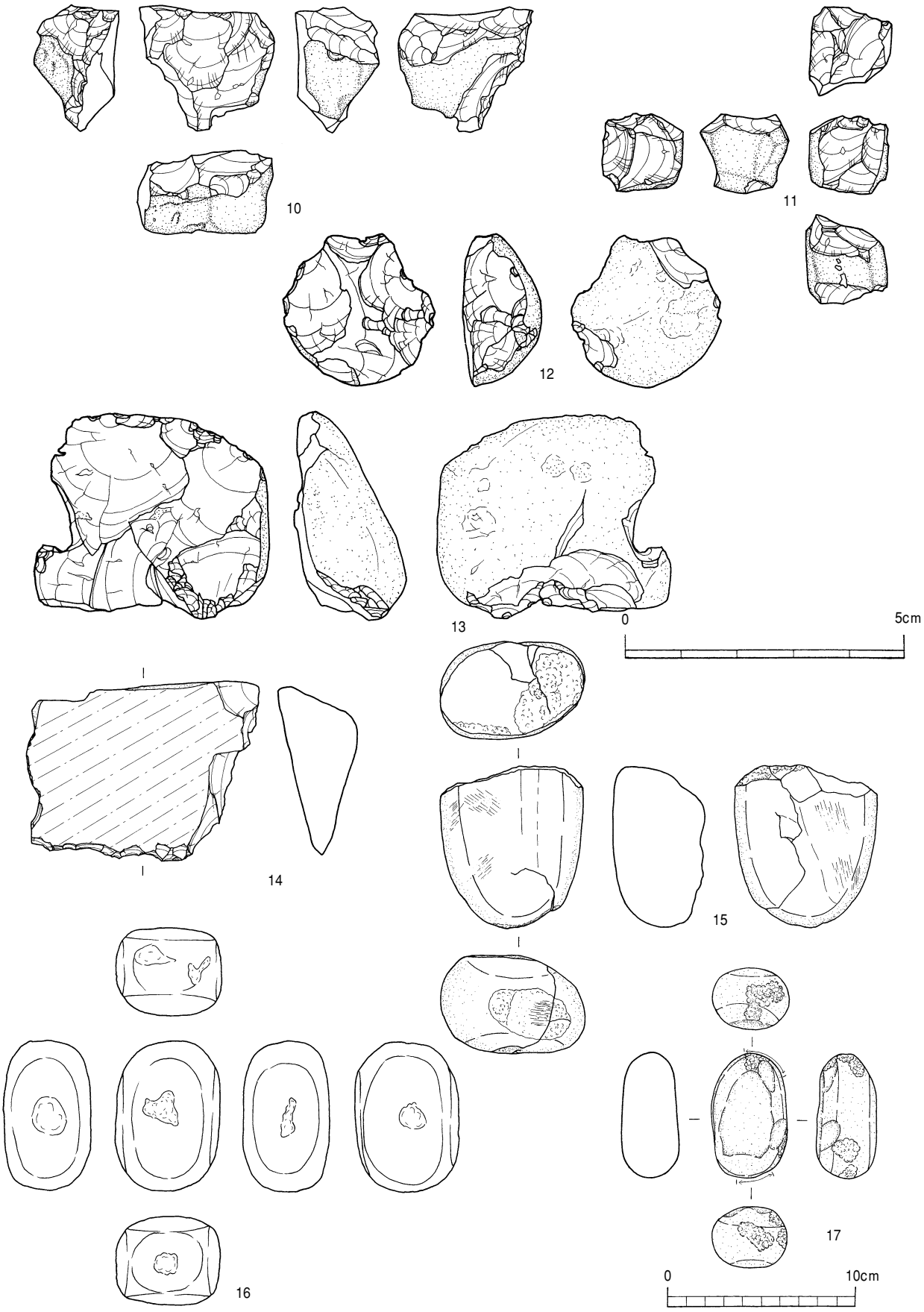
旧石器時代遺物包含層での石鏃は５点出土しており，図の38～42がそれに該当する。38は先端が鋭い二等辺三角形をしており基部が欠損している。39は先端が鈍く基部が欠損している。40は逆刺が鋭く深い抉りのある凹基式の二等辺三角形をしている。41は先端が鋭く外湾的な側辺を持つ三角形で未製品である。42は逆刺が丸く深い抉りのある凹基式の二等辺三角形をしており基部が欠損している。また42の石鏃は器形などを考慮すると早期の混じりである可能性がある。

小型の尖頭器（43）

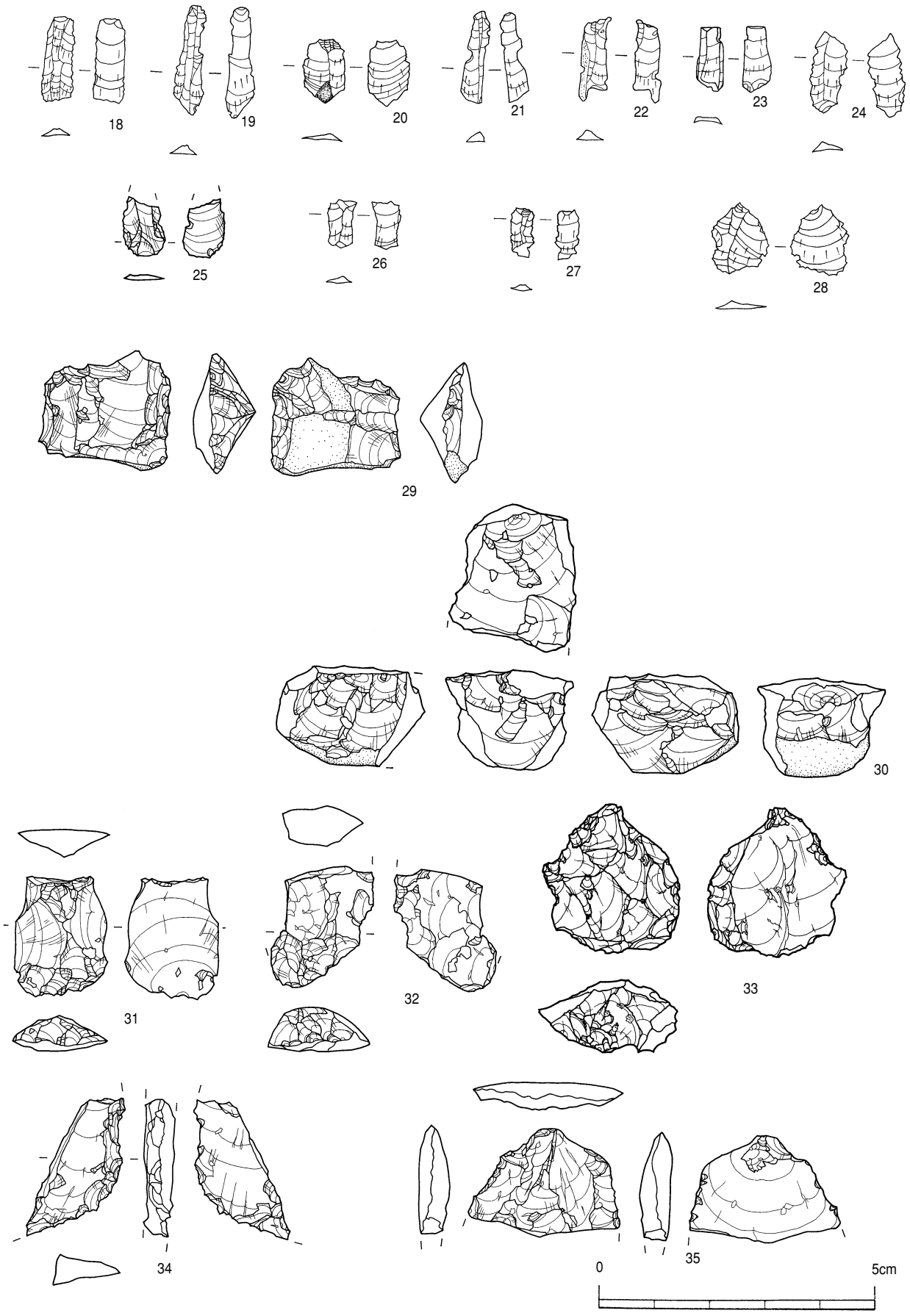
図の43は小型の尖頭器である。全面に押圧剥離が施されており，基部に厚みがあり先端部は薄い。また先端部の作りが整っていないので未製品だと思われる。



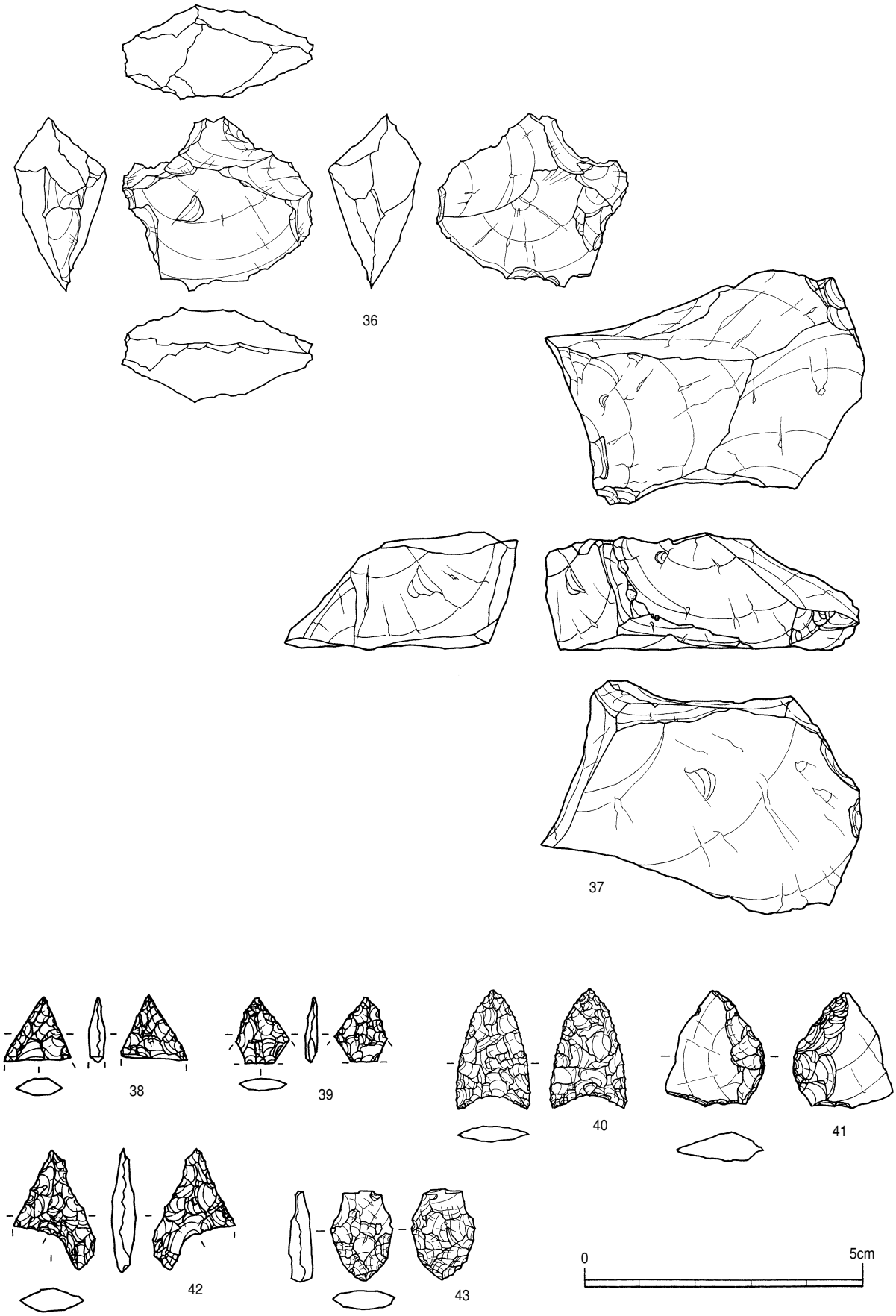
第17図　旧石器時代の石器(1)



第18図　旧石器時代の石器(2)



第19図　旧石器時代の石器(3)



第20図　旧石器時代の石器(4)

第３表　旧石器時代石器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土区	層位	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
17	1	2986	D－24	XⅡ	小型ナイフ	黒曜石C	2.00	0.70	0.25	0.50	
	2	2380	E－23	XⅠ	小型ナイフ	黒曜石C	1.40	0.80	0.25	0.22	
	3	2438	G－29	XⅠ～XⅤ	小型ナイフ	黒曜石C	2.20	1.15	0.50	1.10	
	4	2423	G－27	XⅠ．XⅡ	使用痕剥片	安山岩	3.50	2.20	0.70	4.76	
	5	2714	G－26	XⅡ	スクレイパー	黒曜石B	3.45	3.30	1.20	11.35	
	6	2422	G－27	XⅠ．XⅡ	二次加工剥片	黒曜石C	1.90	1.90	0.90	1.84	
	7	2425	G－28	XⅠ．XⅡ	二次加工剥片	黒曜石C	1.40	3.20	0.80	3.14	
	8	3493	F－25	XⅡ	石核	黒曜石B	2.80	4.00	2.78	30.78	
	9	2492	G－29	XⅠ～XⅤ	石核	黒曜石B	2.20	3.40	1.30	9.53	
18	10	2803	F－26	XⅡ	石核	黒曜石B	2.25	2.40	1.50	6.82	
	11	2719	G－26	XⅡ	石核	黒曜石C	1.40	1.45	1.60	3.82	
	12	2727	G－26	Ⅶ	石核	黒曜石B	2.70	2.70	1.40	9.13	
	13	3188	F－26	Ⅷ	石核	黒曜石B	3.70	4.20	2.00	28.07	
	14	2623	G－21	XⅡ	礫器	砂岩	12.50	9.60	3.80	480.00	
	15	2661	H－26	XⅡ	敲石	砂岩	8.50	7.70	5.00	440.00	
	16	2717	G－25	Ⅶ	凹石・敲石	安山岩	8.00	5.40	4.50	340.00	
	17	2703	C－26	XⅡ	敲石	砂岩	6.60	4.10	3.20	120.00	
19	18	2950	F－24	XⅠ	細石刃	黒曜石C	1.55	0.60	0.15	0.14	
	19	一括	9T	X	細石刃	黒曜石C	2.00	0.55	0.20	0.16	
	20	2982	D－24	XⅠ	細石刃	黒曜石C	1.15	0.80	0.15	0.14	
	21	一括	9T	X	細石刃	黒曜石C	1.75	0.50	0.20	0.11	
	22	2992	E－24	XⅠ	細石刃	黒曜石C	1.55	0.55	0.20	0.12	
	23	一括	9T	X	細石刃	黒曜石C	1.20	0.55	0.15	0.09	
	24	2783	F－26	XⅡ	細石刃	黒曜石C	1.50	0.68	0.20	0.17	
	25	2977	D－25	XⅠ	細石刃	黒曜石C	1.10	0.80	0.10	0.10	
	26	2462	G－29	XⅠ～XⅤ	細石刃	黒曜石C	0.90	0.60	0.15	0.05	
	27	2472	G－29	XⅠ～XⅤ	細石刃	黒曜石C	0.90	0.45	0.10	0.04	
	28	2374	E－23	XⅠ	調整F	黒曜石C	1.25	1.05	0.15	0.19	
	29	2996	E－24	X	細石刃核	黒曜石C	2.30	2.15	1.10	4.65	
	30	2486	G－28	XⅠ～XⅤ	細石刃核	黒曜石B	1.80	2.65	2.30	12.28	
	31	2460	G－29	XⅠ～XⅤ	掻器	黒曜石B	2.20	1.70	0.50	2.04	
	32	2613	G－27	XⅠ	掻器	黒曜石B	1.80	2.20	0.70	3.02	
	33	2640	G－27	X	掻器	黒曜石B	2.70	2.50	1.33	7.27	
	34	2602	G－27	XⅠ	削器	黒曜石B	1.20	2.95	0.40	1.67	
	35	2650	H－27	XⅠ	削器	黒曜石B	1.95	2.75	0.50	2.46	
20	36	一括	4T	X	石核	黒曜石B	3.10	3.40	1.60	11.31	
	37	2988	D－24	X	石核	黒曜石B	4.20	5.60	2.10	44.59	
	38	2690	G－26	XⅠ	打製石鏃	チャート	1.20	1.20	0.30	0.32	
	39	2901	H－25	X	打製石鏃	黒曜石C	1.15	0.95	0.20	0.19	
	40	一括	10T	X	打製石鏃	黒曜石C	2.10	1.40	0.30	0.58	
	41	1082	G－29	X	石鏃未完成	黒曜石C	2.10	1.75	0.50	1.42	
	42	2794	F－26	X	打製石鏃	黒曜石C	2.00	1.50	0.45	0.65	
	43	2605	G－27	XⅠ	小型尖頭器	黒曜石C	1.60	1.10	0.35	0.75	

第３節　縄文時代の調査成果

第１項　分布状況

縄文時代早期は，アカホヤ火山灰層であるⅤb層と薩摩火山灰層であるⅨ層との間の，Ⅵ層・Ⅶ層・Ⅷ層を遺物包含層とした。遺構・遺物は，Ｄ－20～Ｈ－29区を中心に分布している。

縄文時代前～中期は，霧島御池火山灰層であるⅣb層とⅤb層との間の，Ⅴa層を遺物包含層とした。遺構・遺物はＤ－19～Ｅ－20区を中心に分布している。

縄文時代後～晩期は，Ⅳb層より上位のⅣa層とⅢb層を遺物包含層とした。Ｇ－25～Ｈ－31区を中心に分布している。

第２項　縄文時代早期

１　遺構

遺構は集石が９基，土坑が２基，落とし穴状遺構が19基検出されている。遺構名に付加したＳＥおよびＳＤ番号は，発掘調査時点での遺構番号である。

⑴集石

集石１号（第23図）

Ｆ－24区で検出された。36個の石を確認した。被熱により，赤化した石もあった。集石としては崩れて広く散在している状態である。Ⅶ層とⅧ層土が混在した落ち込みがみられる。礫の大部分は，落ち込みからそれた位置にあり，使用後にかき出されたと考えられる　（SE５）

集石２号（第23図）

Ｆ－26区で検出された。17個の石を確認した。石材は安山岩，頁岩が多い。赤化，破砕しているものもあった。礫の集中する部分の周囲には，Ⅶ層の落ち込みがみられた。落ち込みは最下部の一部と考えられる。　（SE10）

集石３号（第24図）

Ｆ－26区Ⅶ層下面で検出された。60個の石を確認した。赤化，破砕しているものもあった。石材は，青灰色で緻密かつなめらかで硬質のもの，灰白色でやや粗くやや硬質のもの，淡青灰色で緻密かつやや粗く硬質のものの３つに大別できる。Ⅶ層とⅧ層土が混在した不整形の落ち込みがみられる。　（SE１）

集石４号（第25図）

Ｇ－27区Ⅶ層下面で検出された。赤化，破砕しているものもあった。凝灰岩角礫を多用する。集石としては崩れて広く散在している状態である。Ⅵ層起源のパミスを含んだⅦ層土の落ち込みがみられる。　（SE２）

集石５号（第25図）

Ｈ－27区で検出された。平坦部に形成され，一部樹根による撹乱がみられる。礫の分布に沿って，Ⅶ層とⅧ層土が混在した落ち込みがみられる。　（SE３）

集石６号（第26図）

Ｈ－27区で検出された。赤化，破砕しているものもあった。石材は，青灰色で緻密かつなめらかで硬質のも

第21図　縄文時代の時期別遺構配置・遺物出土状況図

の，灰白色でやや粗くやや硬質のもの，淡青灰色で緻密かつ硬質のものの３つに大別できる。　（SE４）

集石７号（第26図）

Ｈ－28区で検出された。12個の石を確認した。石材は凝灰岩，頁岩が大部分であるが，アの礫は摩耗した面をもつ黒曜石である。Ⅵ層起源のパミスを含んだⅦ層土の落ち込みがみられる。落ち込みは最下部の一部とみられる。また，調査区境の壁面近くで検出されているので，全容を捉えていない可能性もある。　（SE６）

集石８号（第27図）

Ｈ－30区で検出された。赤化，破砕しているものもあった。石材は凝灰岩が多く，頁岩と砂岩も含まれる。礫１～７以外のものはレベルが低いことから，かき出されたか，８号集石以外のものである可能性がある。Ⅵ層起源のパミスを含んだⅦ層土の落ち込みがみられるが，樹根による撹乱がみられる。　（SE７）

集石９号（第28図）

Ｈ－31区で検出された。尾根の平坦部の落ち際に形成されている。被熱しているもの多い。石材は凝灰岩が主体で頁岩も含まれる。Ⅶ層とⅧ層土が混在した落ち込みがみられる。落ち込みは２ヶ所あり，２基の集石の集合である可能性がある。　（SE８）

⑵土坑

土坑１号（第29図）

Ｇ－26区で検出された。Ⅸ層上面で検出したが，ＸⅠ層まで掘りこまれている。埋土内には礫や土器片，黒曜石チップもみられる。規模は長軸150㎝，短軸100㎝，深さ30㎝で卵を半カットした形状である。　（SD14）

土坑２号（第29図）

Ｆ－21区で検出された。埋土内には礫が３点みられる。規模は長軸180㎝，短軸100㎝，深さ30㎝で隅丸長方形である。埋土はⅧ層土に20～30㎜の黄色パミスと，１㎜の白色パミスが混在している。また，白色パミスは多量である。　（SD34）

⑶落とし穴状遺構

調査区の中央，Ｄ－19区からＨ－27区にかけて，19基が検出された。標高296ｍから298ｍにかけて，ほぼコンターラインに沿う形で検出されている。落とし穴状遺構13号と19号を除き，全ての落とし穴状遺構の底面のほぼ中央に，逆茂木痕と思われるピットが１基ずつ検出された。埋土については，全ての落とし穴状遺構の上部は，Ｐ－13を含むⅧ層土が中心となっている。Ｐ－13は底部に近づくにつれ量が少なくなっていくが，ほぼ全ての埋土中にみられる。

落とし穴状遺構１号（第30図）

Ｈ－27区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，一部削平されている。長軸が推定で166㎝，短軸が推定で113㎝である。底面は長軸が100㎝，短軸が57㎝である。深さは検出面から184㎝である。底面には径12㎝，深さ58㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，北側の壁は削平されているためにはっきりしないが，南側の壁は検出面から21㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。礫が埋土①中から２点，埋土②中から１点検出された。　（SD33）

落とし穴状遺構２号（第31図）

Ｇ－25区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は，樹痕のためにはっきりしない。長軸は163㎝，短軸が94㎝である。底面は長軸が98㎝，短軸が54㎝である。深さは検出面から145㎝である。底面には径６㎝，深さ55㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，東側の壁は検出面から20㎝，西側の壁は26㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。礫が埋土②中から１点，床面付近から４点検出された。　（SD16）

落とし穴状遺構３号（第32図）

Ｇ－25区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が131㎝，短軸が88㎝である。底面は長軸が70㎝，短軸が38㎝である。深さは検出面から155㎝である。底面には径８㎝，深さ51㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，西側の壁は検出面から15㎝，東側の壁は15㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。礫が埋土①中から１点，埋土②中から１点検出された。　（SD18）

落とし穴状遺構４号（第33図）

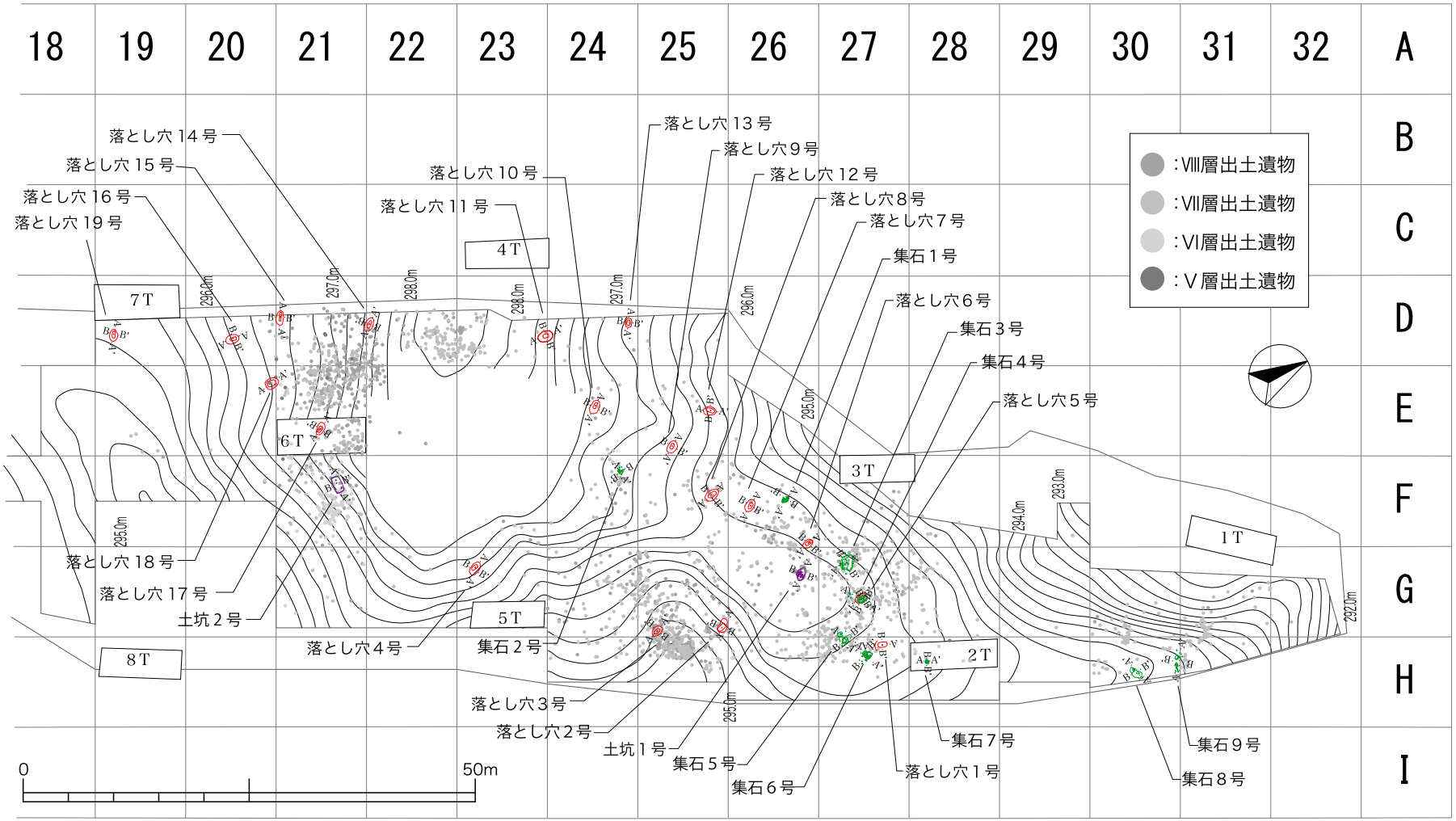
Ｇ－23区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が161㎝，短軸が92㎝である。底面は長軸が54㎝，短軸が39㎝である。深さは検出面から161㎝である。底面には逆茂木痕が１本検出されたが，実測はできなかった。断面の形状は，西側の壁は検出面から29㎝，東側の壁は34㎝で段を持ち，そこから緩やかに下がる形状である。底面は平坦である。　（SD19）

落とし穴状遺構５号（第34図）

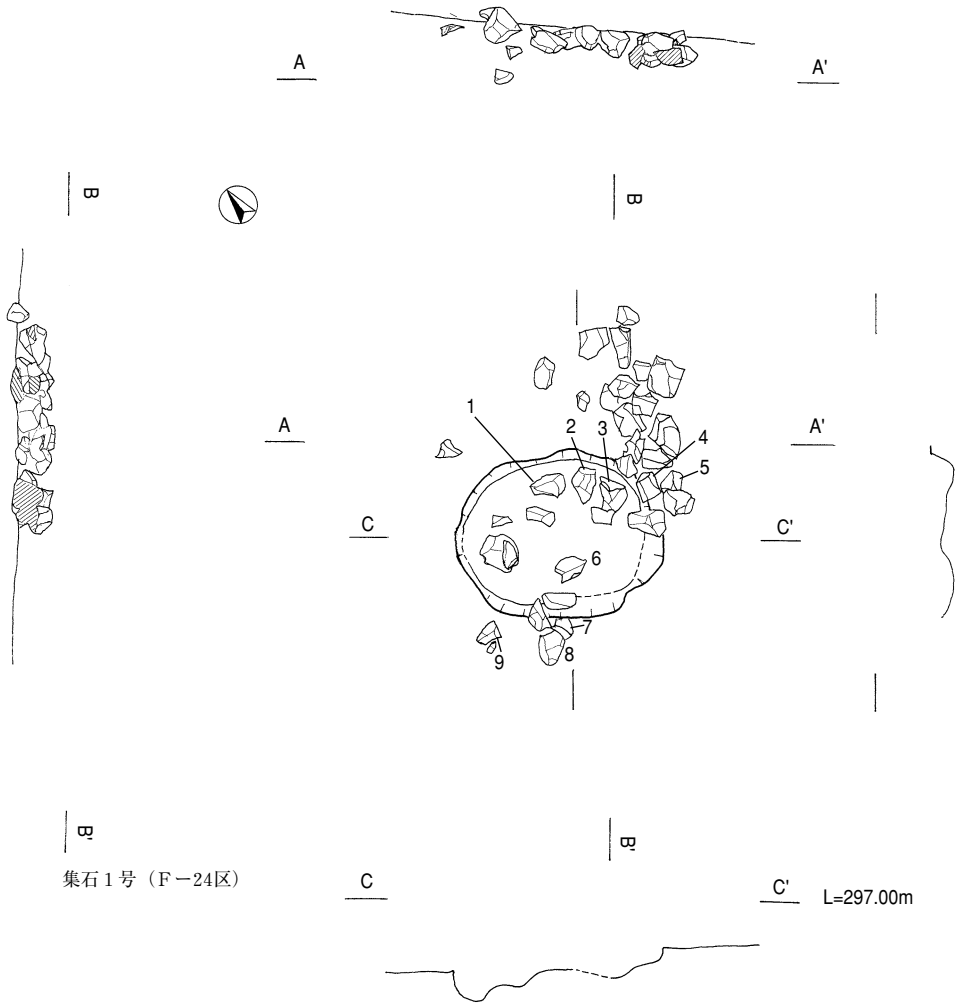
Ｇ－27区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が139㎝，短軸が86㎝である。底面は長軸が73㎝，短軸が29㎝である。深さは検出面から167㎝である。底面には径４㎝，深さ50㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，北側の壁は検出面から27㎝，南側の壁は25㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。礫が埋土①中から１点検出された。　（SD15）

落とし穴状遺構６号（第35図）

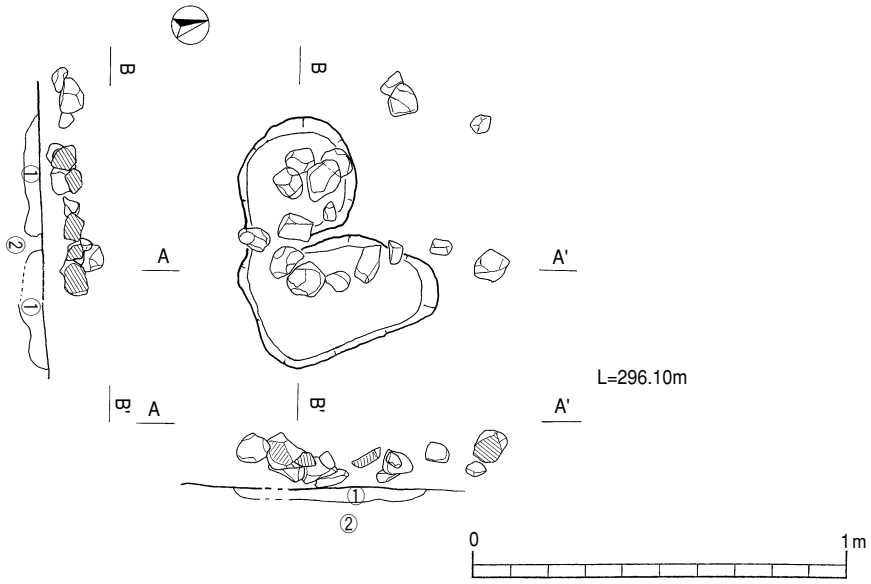
Ｆ－26区で検出された。樹痕のためにⅩ層上面での検出となったが，他の落とし穴状遺構と同様に，Ⅸ層上面



第22図　縄文時代早期の遺構配置図



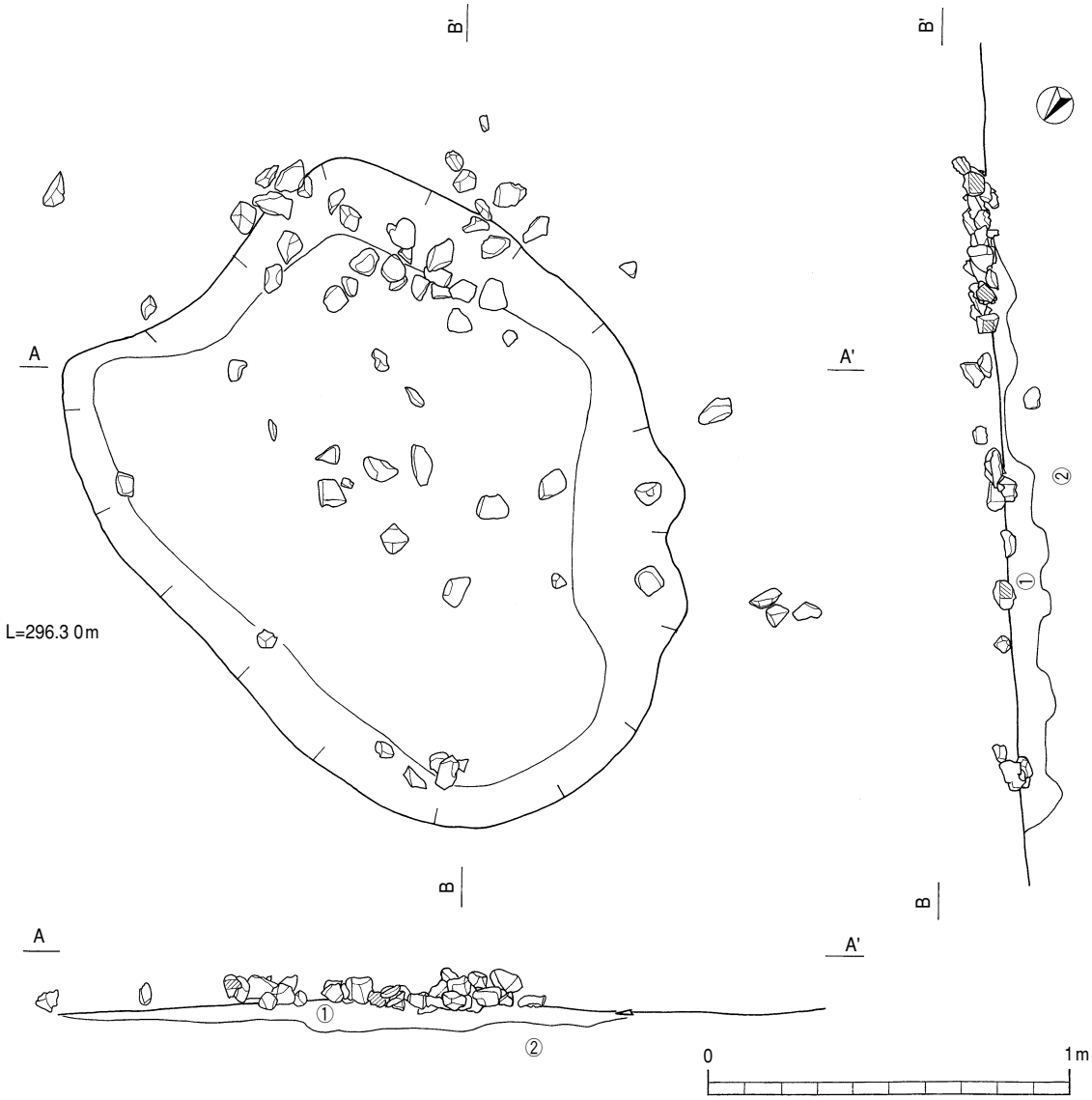
集石１号（Ｆ－24区）



集石２号（Ｆ―26区）

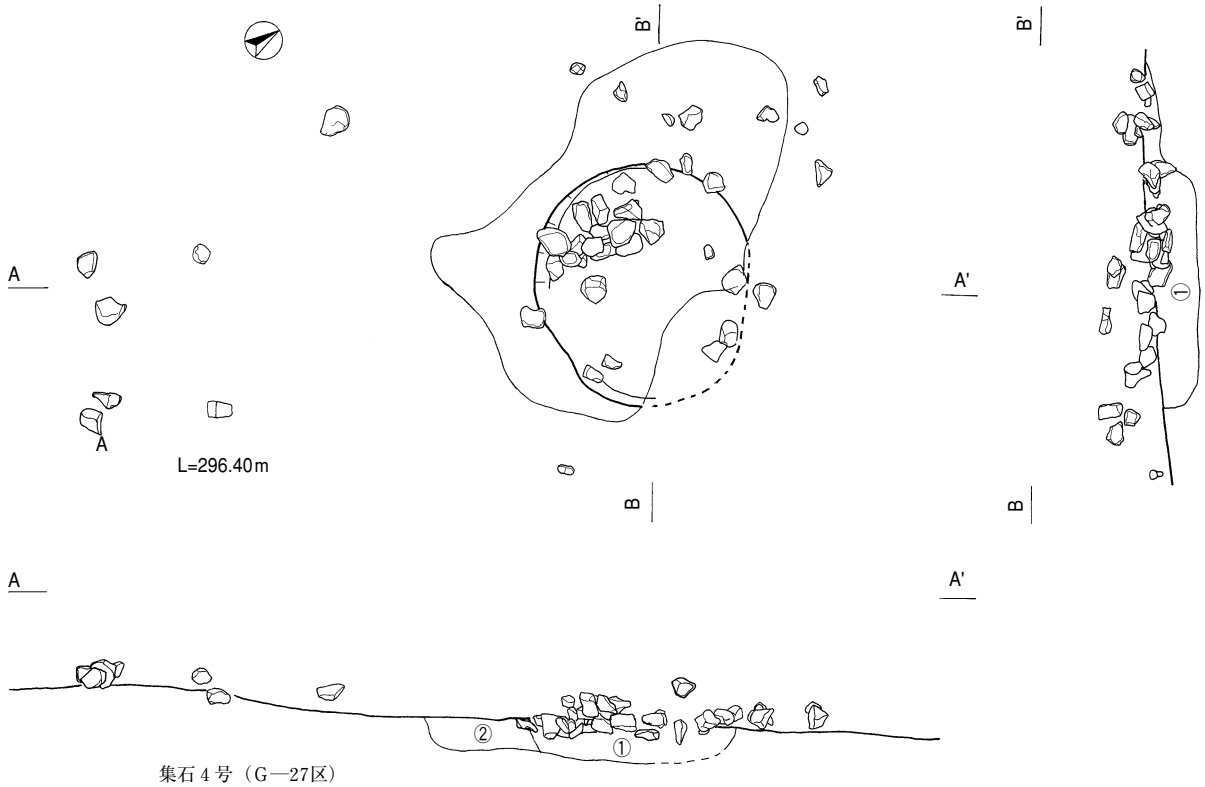
① 暗褐色土(10YR3/4)。Ⅶ層を中心とした色合い。径１㎜～数㎜の黄色または橙色のパミスを少量含む。粘りややあり。しまりあり。
② 黒褐色土(10YR2/3)。①より全体的に黒っぽい。Ⅷ層の可能性あり。径１㎜程度の白いパミスを多く含む。また，径１㎜～数㎜の黄色または橙色のパミスを少量含む。粘りややあり。しまりあり。①よりしまっている。

第23図　縄文時代早期の集石１号・２号

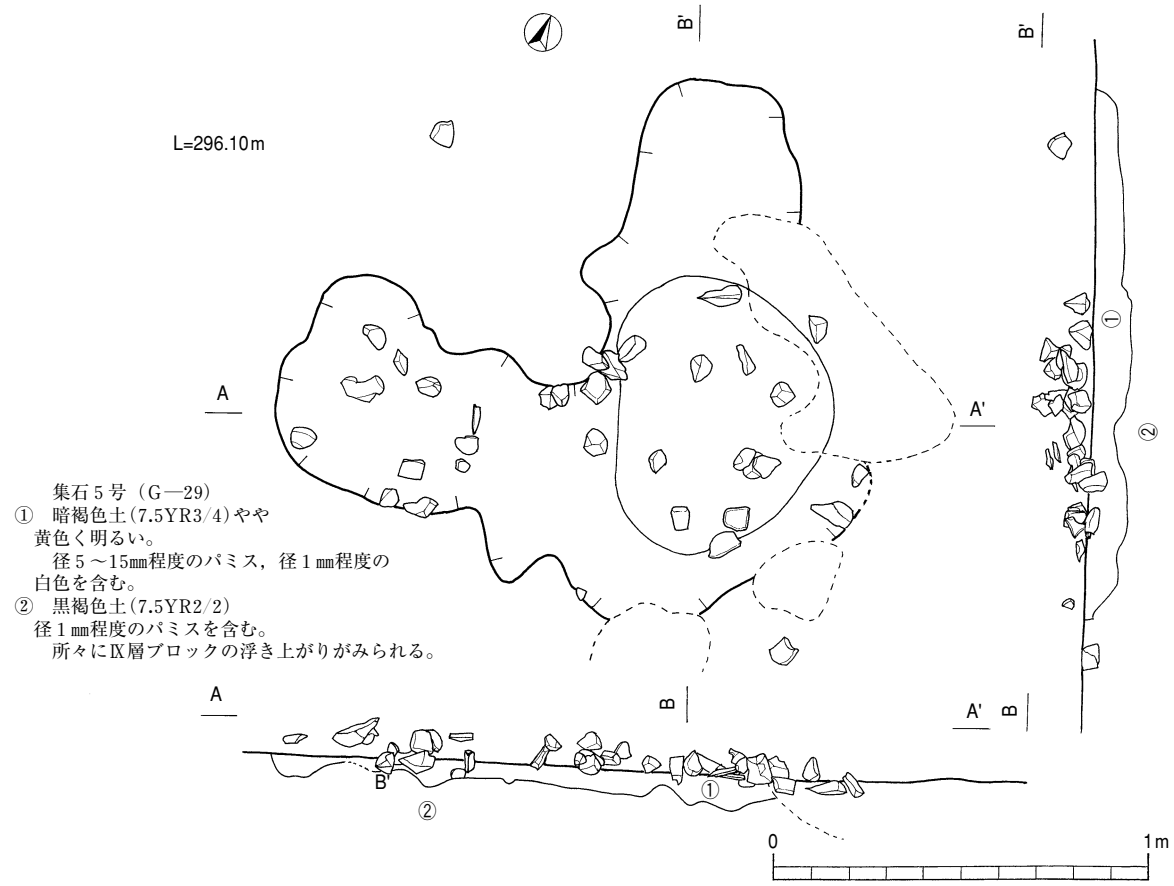


集石３号（G―27区）
① やや赤みがかった黒褐色土(7.5YR3/2)。Ⅶ層＋Ⅷ層の混ざり土。
地山と比べるとやや柔らかい。所々径５～15㎜程度のパミスを含む。径１㎜程度の白色パミスも入るがⅧ層土よりは少ない。
② Ⅷ層土黒色土(7.5YR1.7/1)
径１㎜程度の白色パミスが多く入る。混ざり土と比べてややしまっている

第24図　縄文時代早期の集石３号

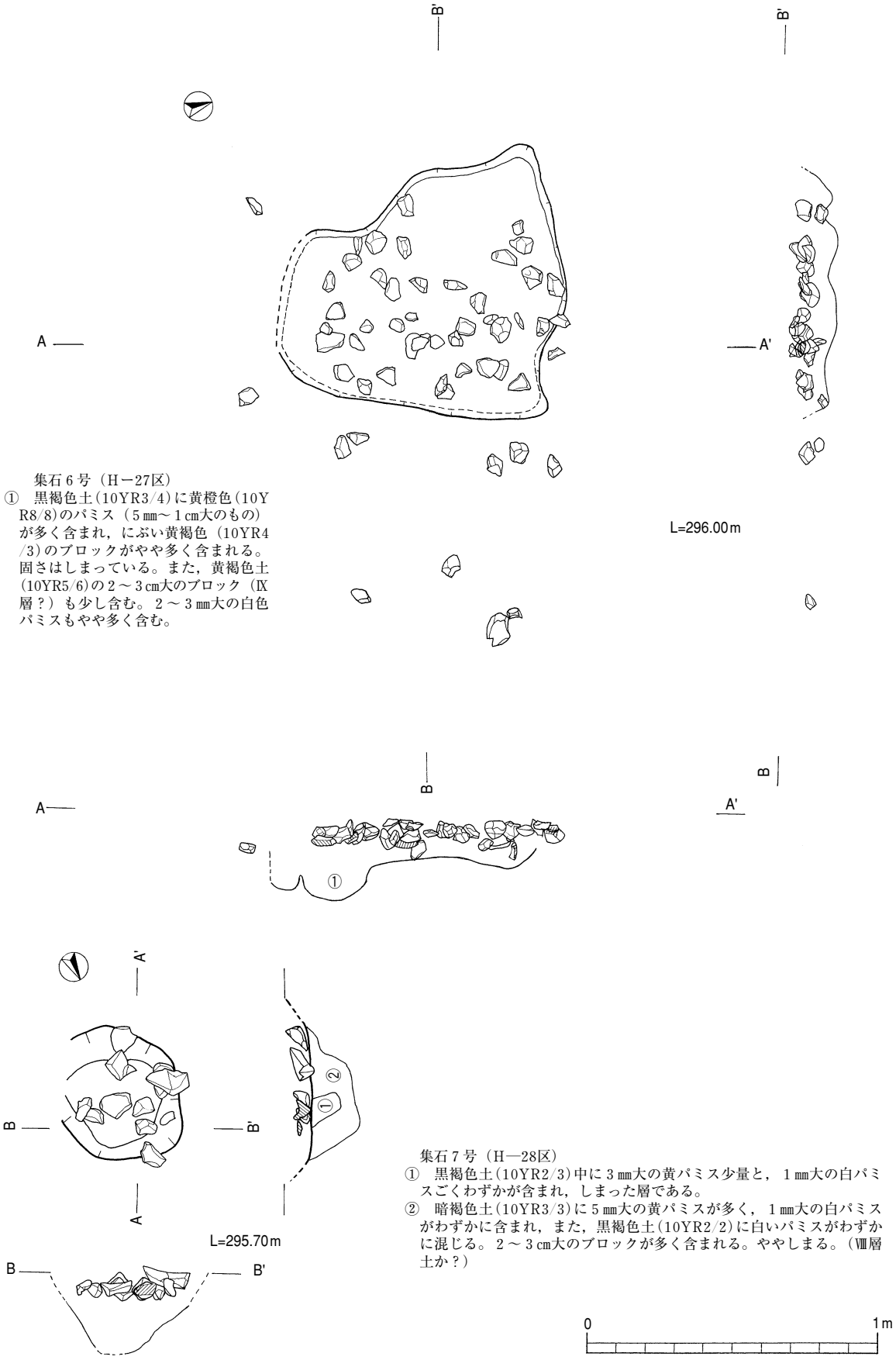


集石４号（G―27区）
① Ⅶ層土主体。①よりやや明るいパミスをあまり含まない。
② Ⅶ層＋Ⅷ層の混ざり土。径５～10㎜位のパミスを含む。



集石５号（G―29）
① 暗褐色土(7.5YR3/4)やや黄色く明るい。
径５～15㎜程度のパミス，径１㎜程度の白色を含む。
② 黒褐色土(7.5YR2/2)
径１㎜程度のパミスを含む。
所々にⅨ層ブロックの浮き上がりがみられる。

第25図　縄文時代早期の集石４号・５号

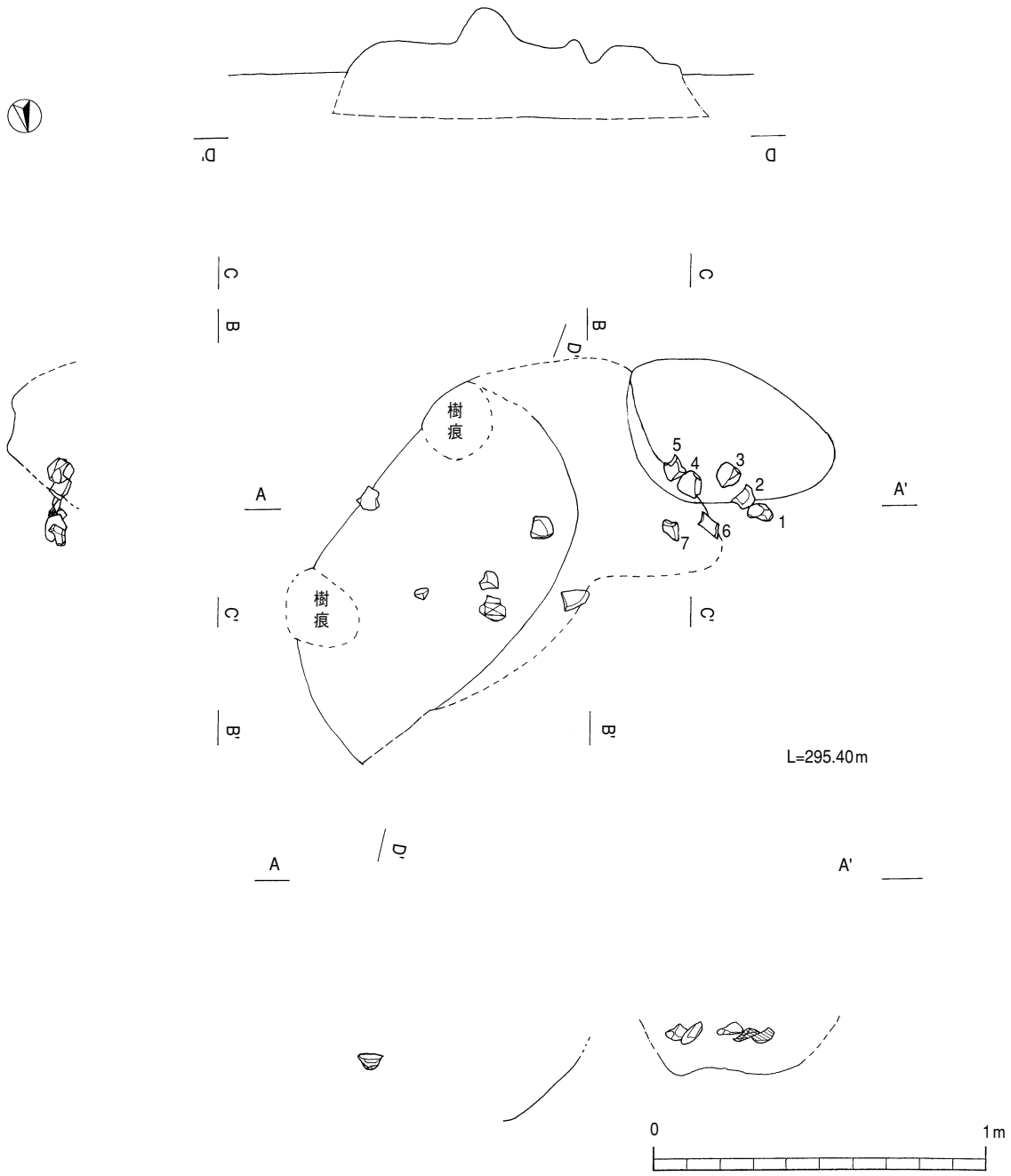


集石６号（Ｈ－27区）
① 黒褐色土(10YR3/4)に黄橙色(10YR8/8)のパミス（５㎜～１㎝大のもの）が多く含まれ，にぶい黄褐色（10YR4/3)のブロックがやや多く含まれる。固さはしまっている。また，黄褐色土(10YR5/6)の２～３㎝大のブロック（Ⅸ層？）も少し含む。２～３㎜大の白色パミスもやや多く含む。

集石７号（Ｈ―28区）
① 黒褐色土(10YR2/3)中に３㎜大の黄パミス少量と，１㎜大の白パミスごくわずかが含まれ，しまった層である。
② 暗褐色土(10YR3/3)に５㎜大の黄パミスが多く，１㎜大の白パミスがわずかに含まれ，また，黒褐色土(10YR2/2)に白いパミスがわずかに混じる。２～３㎝大のブロックが多く含まれる。ややしまる。（Ⅷ層土か？）

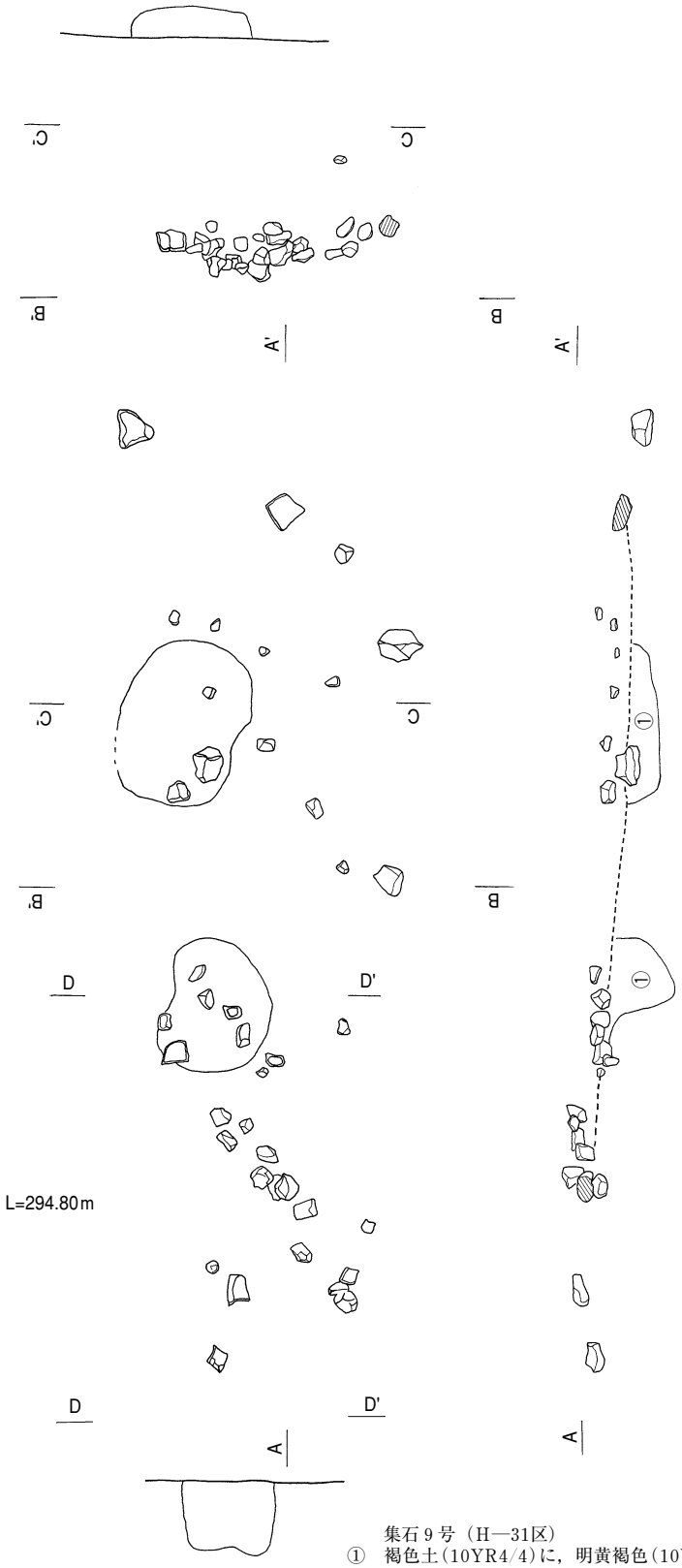
0　1m

第26図　縄文時代早期の集石６号・７号



集石８号（Ｈ－30区）
① 黒褐色土(10YR2/3)に橙色(7.5YR6/8)の５㎜大のパミスをわずかに含む。硬さはやや締まっている。
② 褐色土(10YR4/4) に明黄褐色(10YR7/6) のパミスをやや含む。硬さは締まっているが基本的に柔らかい。（５㎜大）
③ 波線の内側はⅨ層及びⅧ層ににぶい黄褐色土(10YR4/3) が入りこんでいる範囲

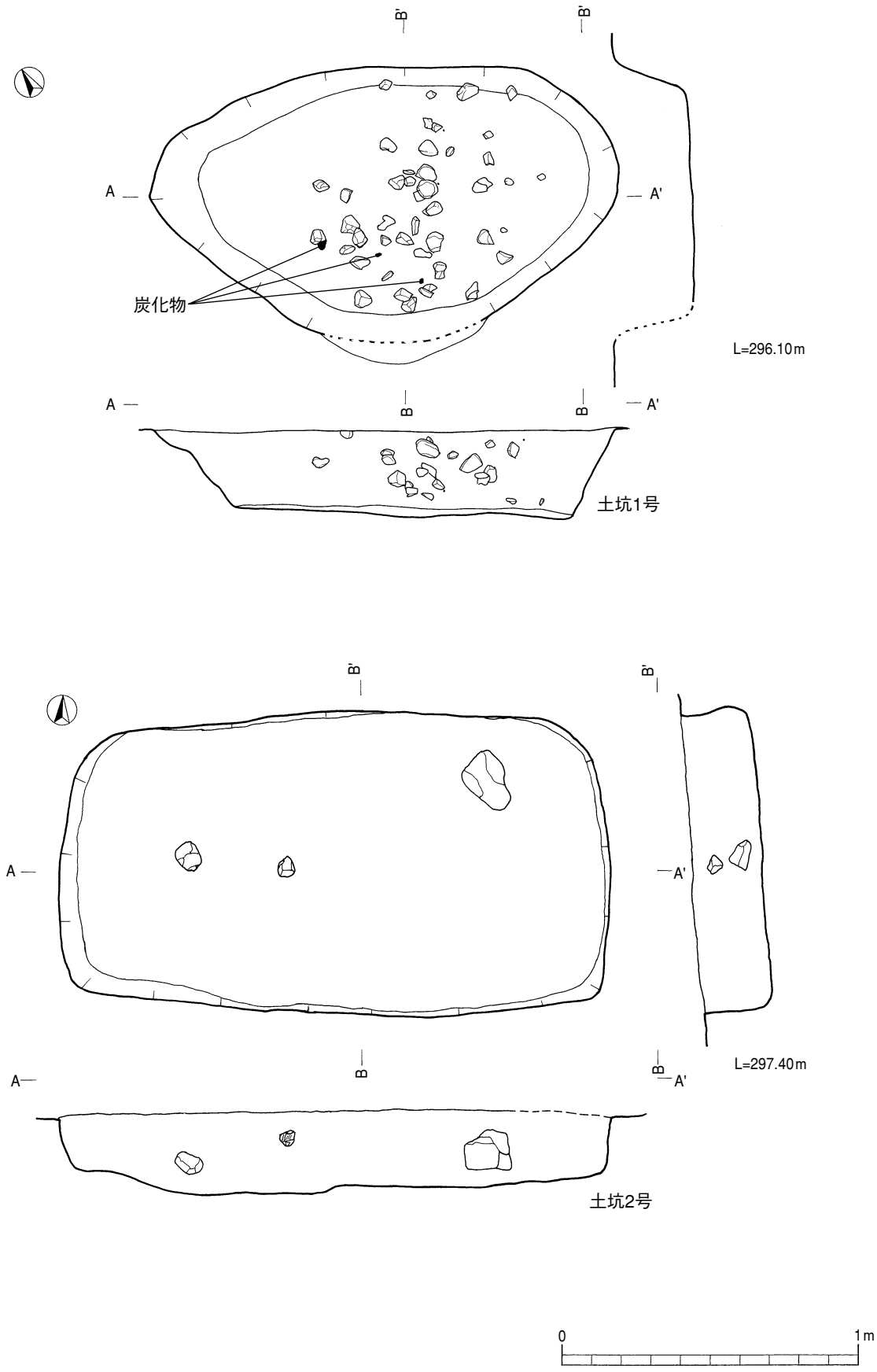
第27図　縄文時代早期の集石８号



集石９号（H―31区）
① 褐色土(10YR4/4)に，明黄褐色(10YR7/6)のパミス（５㎜大）をやや含む。固さはしまっているが，基本的にやわらかい。
（集石８号と同じ層）

0　1m

第28図　縄文時代早期の集石９号



第29図　縄文時代早期の土坑１号・２号

で検出されるものと思われる。平面の形状は楕円形であり，長軸が推定で114㎝，短軸が79㎝である。底面は長軸が79㎝，短軸が37㎝である。深さは検出面から170㎝である。底面には径８㎝，深さ44㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，樹痕のために他の落とし穴状遺構にみられるような段は判別できないが，ほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。礫が埋土①中から１点検出された。（SD35）

落とし穴状遺構７号（第36図）

Ｆ－26区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が143㎝，短軸が92㎝である。底面は長軸が76㎝，短軸が41㎝である。深さは検出面から168㎝である。底面には径10㎝，深さ53㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，西側の壁は検出面から25㎝，東側の壁は20㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。（SD13）

落とし穴状遺構８号（第37図）

Ｆ－25区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が167㎝，短軸が109㎝である。底面は長軸が98㎝，短軸は推定で51㎝である。深さは検出面から208㎝である。底面には径８㎝，深さ46㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，北側の壁は検出面から39㎝，北側の壁は69㎝で段を持ち，樹痕と思われる外側へのふくらみが一部あるものの，段からほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。（SD17）

落とし穴状遺構９号（第38図）

Ｅ－25区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が141㎝，短軸が98㎝である。底面は長軸が60㎝，短軸が37㎝である。深さは検出面から196㎝である。底面には径５㎝，深さ44㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，西側の壁は検出面から34㎝，東側の壁は32㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。（SD20）

落とし穴状遺構10号（第39図）

Ｅ－24区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が156㎝，短軸が95㎝である。底面は長軸が69㎝，短軸が31㎝である。深さは検出面から191㎝である。底面には径６㎝，深さ44㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，西側の壁は検出面から21㎝，東側の壁は41㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。（SD25）

落とし穴状遺構11号（第40図）

Ｄ－23区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が168㎝，短軸が115㎝である。底面は長軸が58㎝，短軸が42㎝である。深さは検出面から220㎝である。底面には径８㎝，深さ54㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，南側の壁は検出面から24㎝，南東側の壁は32㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は，南側は平坦であり，北側は中央から緩やかに立ち上がっている。（SD31）

落とし穴状遺構12号（第41図）

Ｅ－25区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が152㎝，短軸が93㎝である。底面は長軸が88㎝，短軸が45㎝である。深さは検出面から130㎝である。底面には径９㎝，深さ56㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，南側の壁は検出面から37㎝，北側の壁は19㎝で段を持ち，そこから南側の壁は緩やかに，北側の壁はほぼ垂直に下がる形状である。底面はほぼ平坦である。（SD22）

落とし穴状遺構13号（第42図）

Ｄ－24区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は卵形であり，長軸が96㎝，短軸が72㎝である。底面は長軸が59㎝，短軸が39㎝である。深さは検出面から127㎝である。底面には逆茂木痕はみられなかった。断面の形状は，西側の壁は検出面から25㎝，東側の壁は42㎝で緩やかな段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。（SD26）

落とし穴状遺構14号（第43図）

Ｄ－22区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が156㎝，短軸が84㎝である。底面は長軸が87㎝，短軸が34㎝である。深さは検出面から172㎝である。底面には径８㎝，深さ76㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，東側の壁は検出面から36㎝，南側の壁は20㎝で，ごく緩やかな段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。（SD36）

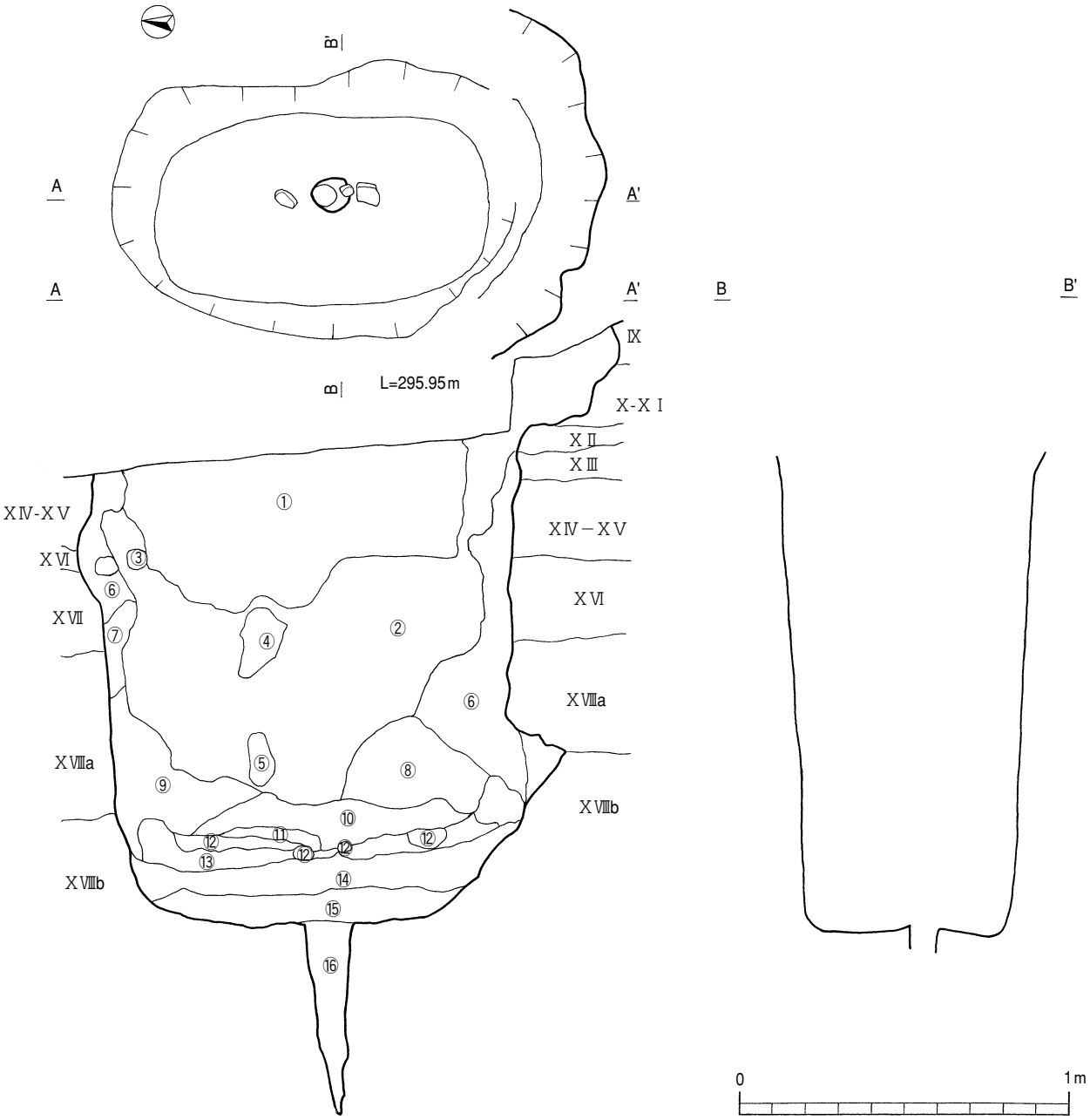
落とし穴状遺構15号（第44図）

Ｄ－21区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が156㎝，短軸が82㎝である。底面は長軸が99㎝，短軸が20㎝である。深さは検出面から185㎝である。底面には径８㎝，深さ42㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，西側の壁の段は樹痕によりはっきりしないが，東側の壁は検出面から27㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は，西側は中央から緩やかに立ち上がり，東側は平坦である。（SD42）

落とし穴状遺構16号（第45図）

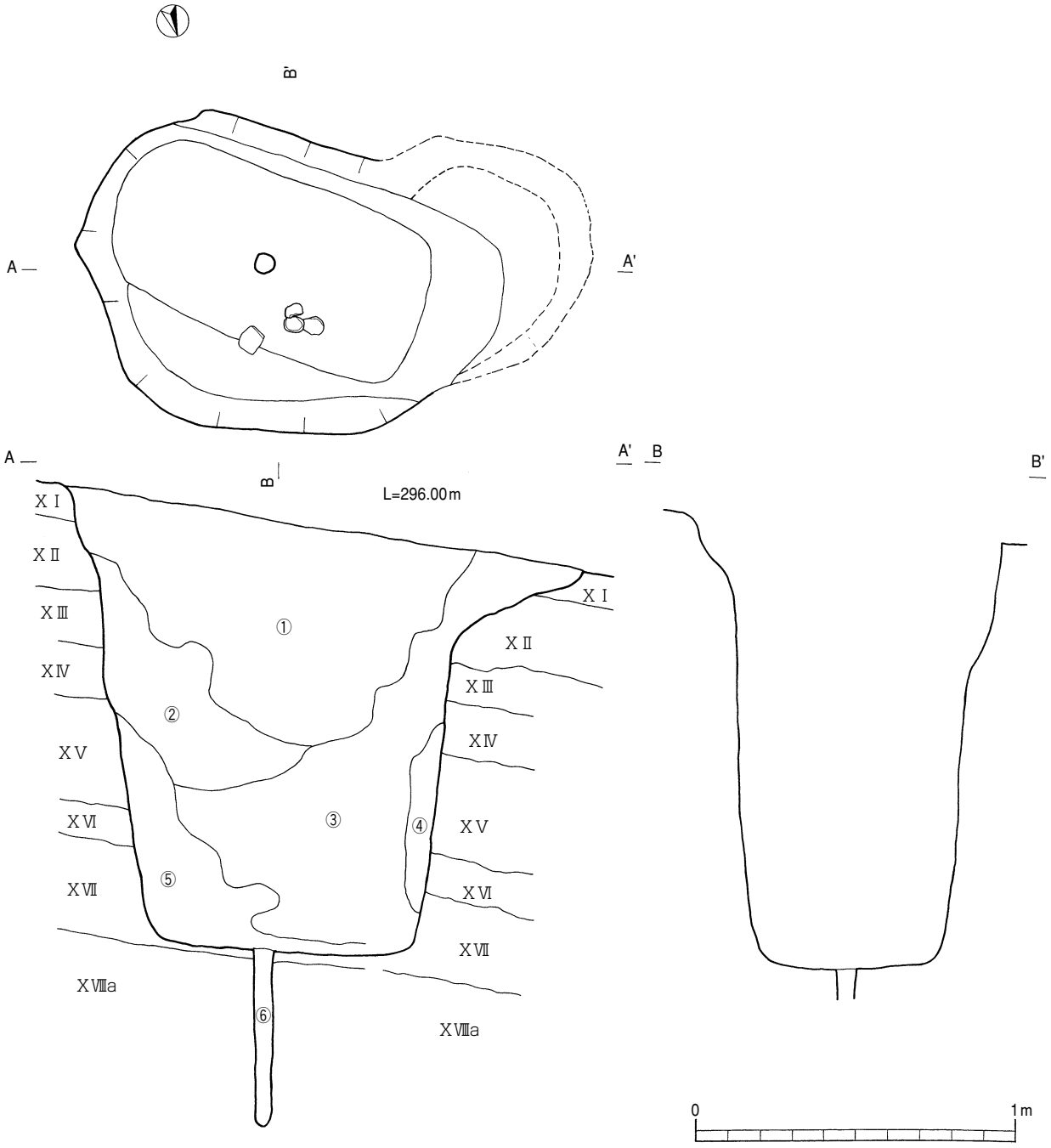
Ｄ－20区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が146㎝，短軸が95㎝である。底面は長軸が70㎝，短軸が37㎝である。深さは検出面から167㎝である。底面には径７㎝，深さ42㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，北側の壁は検出面から21㎝でごく緩やかな段，南側の壁は48㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。（SD39）

①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10～30㎜の橙色パミス(P-13)，径１㎜前後の白色パミスを含む。
②	褐色土(7.5YR4/4)。①と⑩の混土層。①が優勢。
③	褐色土(7.5YR4/6)。ⅩⅠ～ⅩⅢ層起源のブロック。
④	暗褐色土(10YR3/3)。①と⑦の混土層。
⑤	⑦のブロック。部分的に①との混土だが，⑦が優勢。
⑥	①と⑦の混土。白色，黄色パミスが多く，やや①が優勢。
⑦	暗褐色土(7.5YR3/4)。①とⅩⅣ～ⅩⅦ層の混土か？径１㎜前後の黄色，白色パミスをわずかに含む。
⑧	暗褐色土(7.5YR3/4)。①と⑩の混土。①が優勢で径20㎜前後のP-13とサツマブロックを含む。②よりも①の割合が多い。
⑨	暗褐色土(7.5YR3/4)。①と⑩の混土。②と比べやや⑩が優勢。
⑩	暗褐色土(7.5YR3/4)。ⅩⅣ～ⅩⅦ層起源と考えられる混土層。少量の①を含む。
⑪	①と⑩の混土層。⑧とほぼ同じ。
⑫	褐色土(7.5YR4/4)。ⅩⅣ～ⅩⅦ相当のブロック。⑩のように混土状態になっておらず，やや明るい。
⑬	⑩とほぼ同じだが，①は含まない。
⑭	黄橙色土(10YR8/6)。⑩とⅩⅧｂ層の混土層。ⅩⅧｂ層が優勢で白っぽい。
⑮	にぶい黄橙色土(10YR6/4)。⑬と⑭の混土層だが，⑬が優勢。
⑯	⑬と⑭の混土層だが，⑭が優勢。⑬はブロック状になっている。



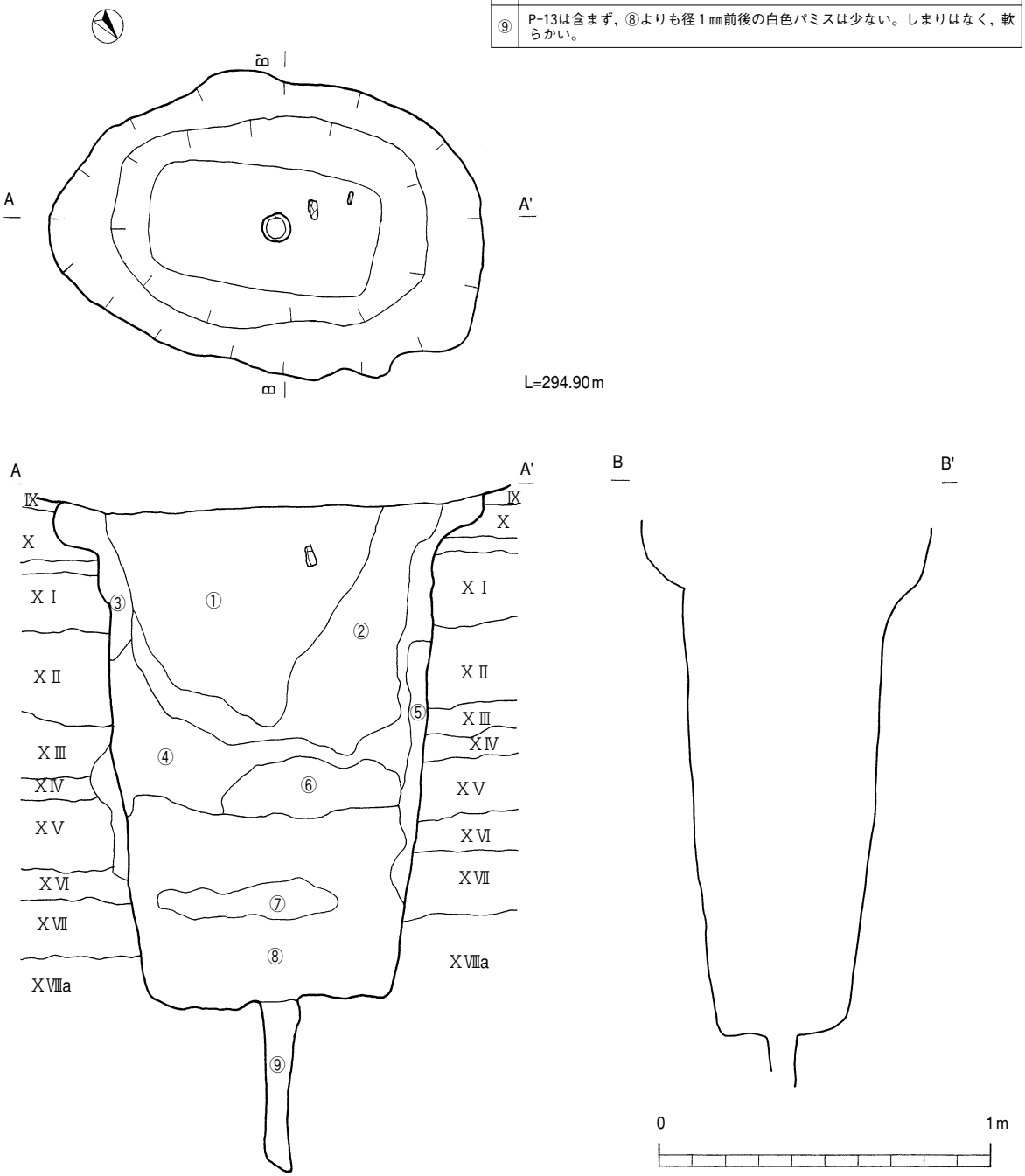
第30図　縄文時代早期の落とし穴状遺構１号

①	黒色土(10YR1.7/1)。Ⅷ層土。径10㎜前後の橙色パミス（P-13），径１㎜前後の白色パミスを多く含む。
②	黒褐色土（7.5YR2/2）。径10㎜前後のP-13を少量含む。径１㎜前後の白色パミスは少ない。粘質。
③	黒褐色土(7.5YR3/1)。①と②の混土層だが①が主体。①よりやや明るい。
④	黒褐色土(7.5YR3/1)。③とほぼ同じだが，①の割合がやや少ない。
⑤	②とほぼ同じだが，②よりも黒っぽい。
⑥	黒褐色土(7.5YR3/2)。Ⅷ層土と⑤の混土層。



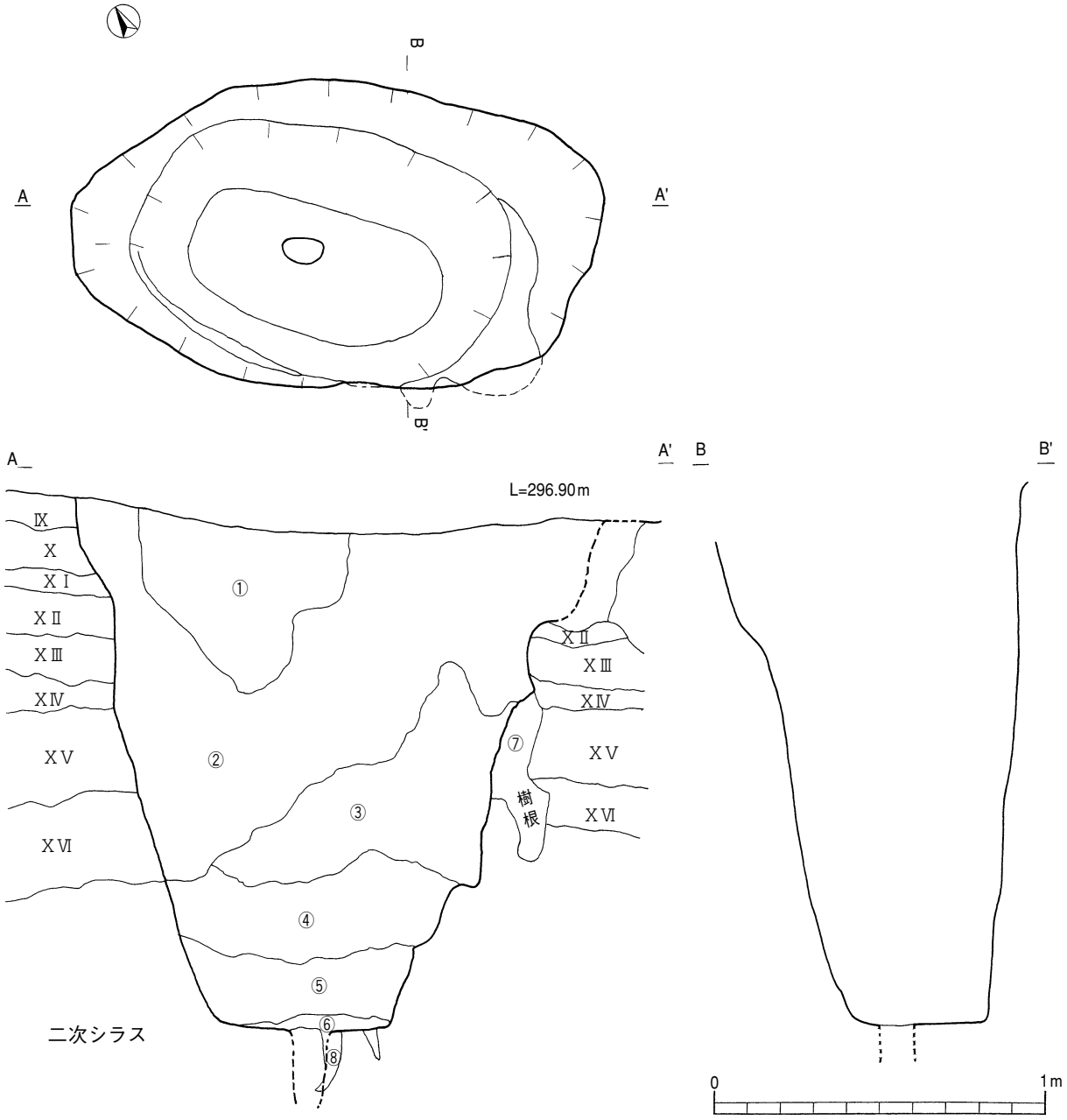
第31図　縄文時代早期の落とし穴状遺構２号

①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10～40㎜ の橙色パミス（P-13）を多量に含む。径１㎜前後の白色パミスを多く含む。
②	黒色土(7.5YR2/1)。①よりもP-13が極端に減る。１㎜前後の白色粒は多い。
③	⑤に同じ。
④	黒褐色土(7.5YR2/2)。①と⑥の混土層。ただしP-13はほとんど含まない。
⑤	褐色土(7.5YR4/6)。⑥とほぼ同じだが，やや明るい。
⑥	褐色土(7.5YR4/4)。①とⅩⅠ～ⅩⅦ層との混土層。ⅩⅠ～ⅩⅦ層がやや優勢。
⑦	極暗褐色土(7.5YR2/3)。⑥とほぼ同じだが，やや暗い。
⑧	黒色土(7.5YR2/1)。②とほぼ同じだが，径20～30㎜のP-13が部分的にブロック状に混入する。
⑨	P-13は含まず，⑧よりも径１㎜前後の白色パミスは少ない。しまりはなく，軟らかい。



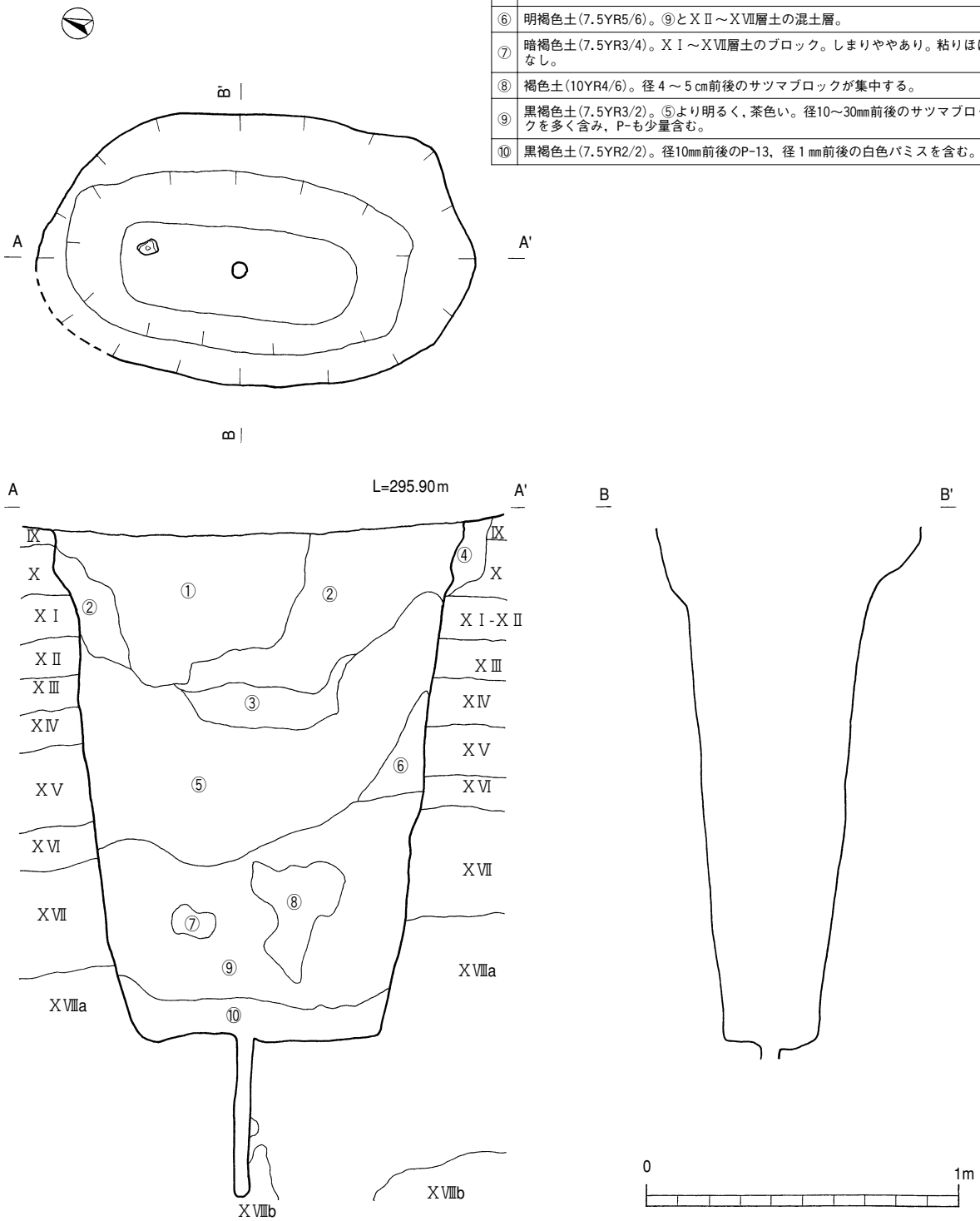
第32図　縄文時代早期の落とし穴状遺構３号

①	黒褐色土。径５～20㎜の黄色のパミス，径２～５㎜の白色のパミスが混入。
②	褐色土。径５～20㎜の黄色のパミス，径２～５㎜の白色のパミスが混入。
③	②よりも明るい。やや茶褐色ぎみ。径２～５㎜の白色のパミスが少ない。
④	③よりもやや暗い。
⑤	④よりもやや暗い。
⑥	淡褐色土。フカフカしている。
⑦	樹痕。フカフカして，やわらかい。
⑧	シラス主体の混ざり土。径10㎝前後の逆茂木痕の可能性のある細長い掘り込みがあったが，実測はできなかった。



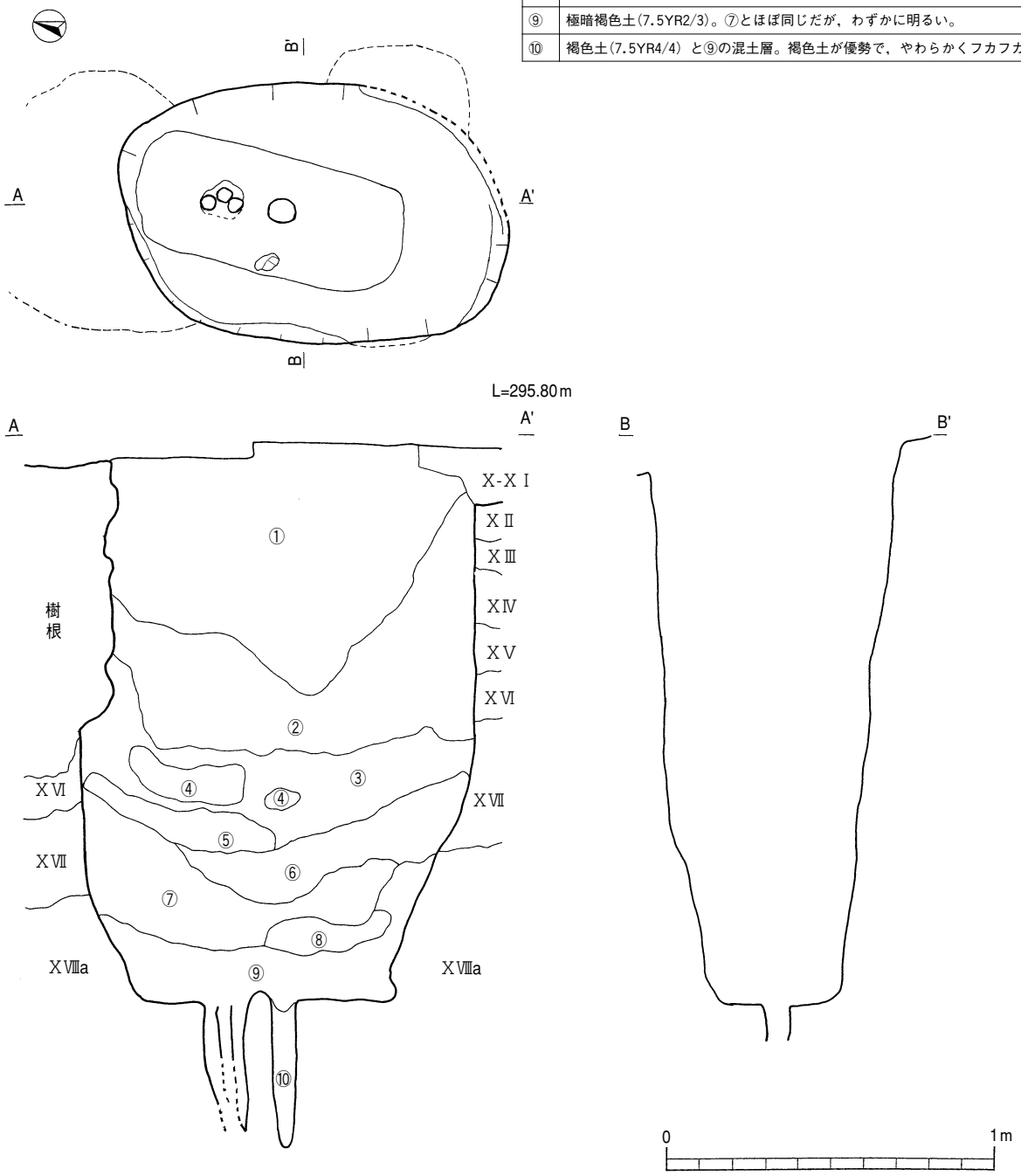
第33図　縄文時代早期の落とし穴状遺構４号

①	黒色土(7.5YR1.7/1)。Ⅷ層土。径10㎜前後の橙色パミス(P-13),径１㎜前後の白色パミスを含む。
②	黒褐色土(7.5YR3/1)。①とほぼ同じだが，やや明るい。
③	黒褐色土(7.5YR2/2)。P-13を含まず，径３㎝前後のサツマブロックを含む。
④	暗褐色土(7.5YR3/3)。①とⅩ・ⅩⅠ層土の混土層。
⑤	極暗褐色土(7.5YR2/3)。③とほぼ同じだが，P-13を含む。
⑥	明褐色土(7.5YR5/6)。⑨とⅩⅡ～ⅩⅦ層土の混土層。
⑦	暗褐色土(7.5YR3/4)。ⅩⅠ～ⅩⅦ層土のブロック。しまりややあり。粘りほぼなし。
⑧	褐色土(10YR4/6)。径４～５㎝前後のサツマブロックが集中する。
⑨	黒褐色土(7.5YR3/2)。⑤より明るく，茶色い。径10～30㎜前後のサツマブロックを多く含み，P-も少量含む。
⑩	黒褐色土(7.5YR2/2)。径10㎜前後のP-13，径１㎜前後の白色パミスを含む。



第34図　縄文時代早期の落とし穴状遺構５号

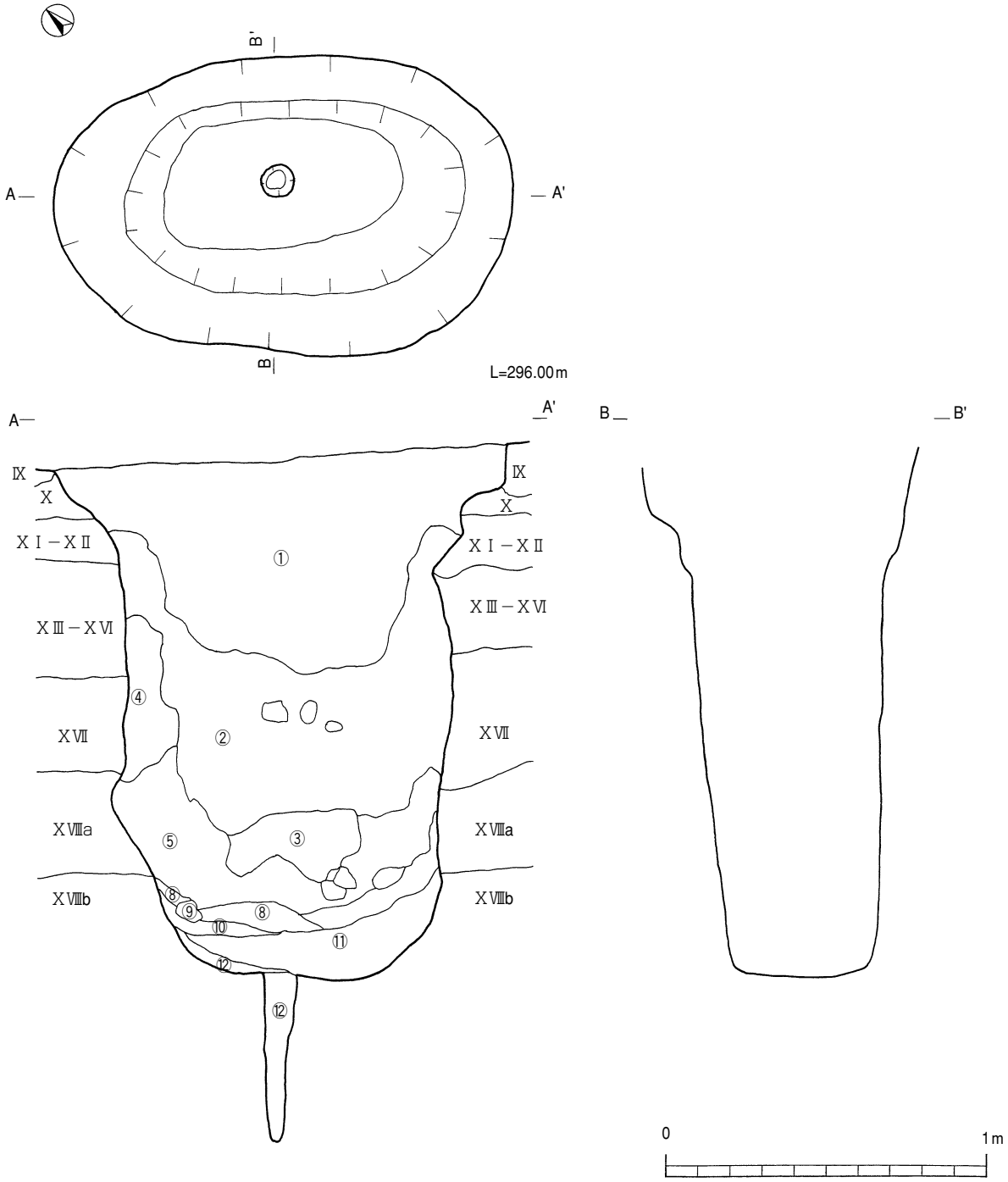
①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10～30ｍｍの橙色パミス（P-13），径１㎜前後の白色パミスを含む。
②	黒褐色土(7.5YR2/2)。①に似るがP-13をほとんど含まない。径１㎜前後の白色パミスは多い。
③	②と④の混土層。やや②が優勢。
④	褐色土(7.5YR4/3)。ＸＩ～ＸⅢ層土のブロック。
⑤	褐色土(7.5YR4/3)。④とほぼ同じだが，やや暗い。ＸⅣ～ＸⅥ層土を含む。
⑥	暗褐色土(7.5YR3/4)。③とほぼ同じだが，④⑤のブロックを含まない。③よりやや明るい。
⑦	黒褐色土(7.5YR2/2)。①に似るが，P-13はほとんど含まない。径１～３㎝のサツマブロックを含む。
⑧	明褐色土(7.5YR5/6)。サツマブロック。
⑨	極暗褐色土(7.5YR2/3)。⑦とほぼ同じだが，わずかに明るい。
⑩	褐色土(7.5YR4/4）と⑨の混土層。褐色土が優勢で，やわらかくフカフカ。



第35図　縄文時代早期の落とし穴状遺構６号

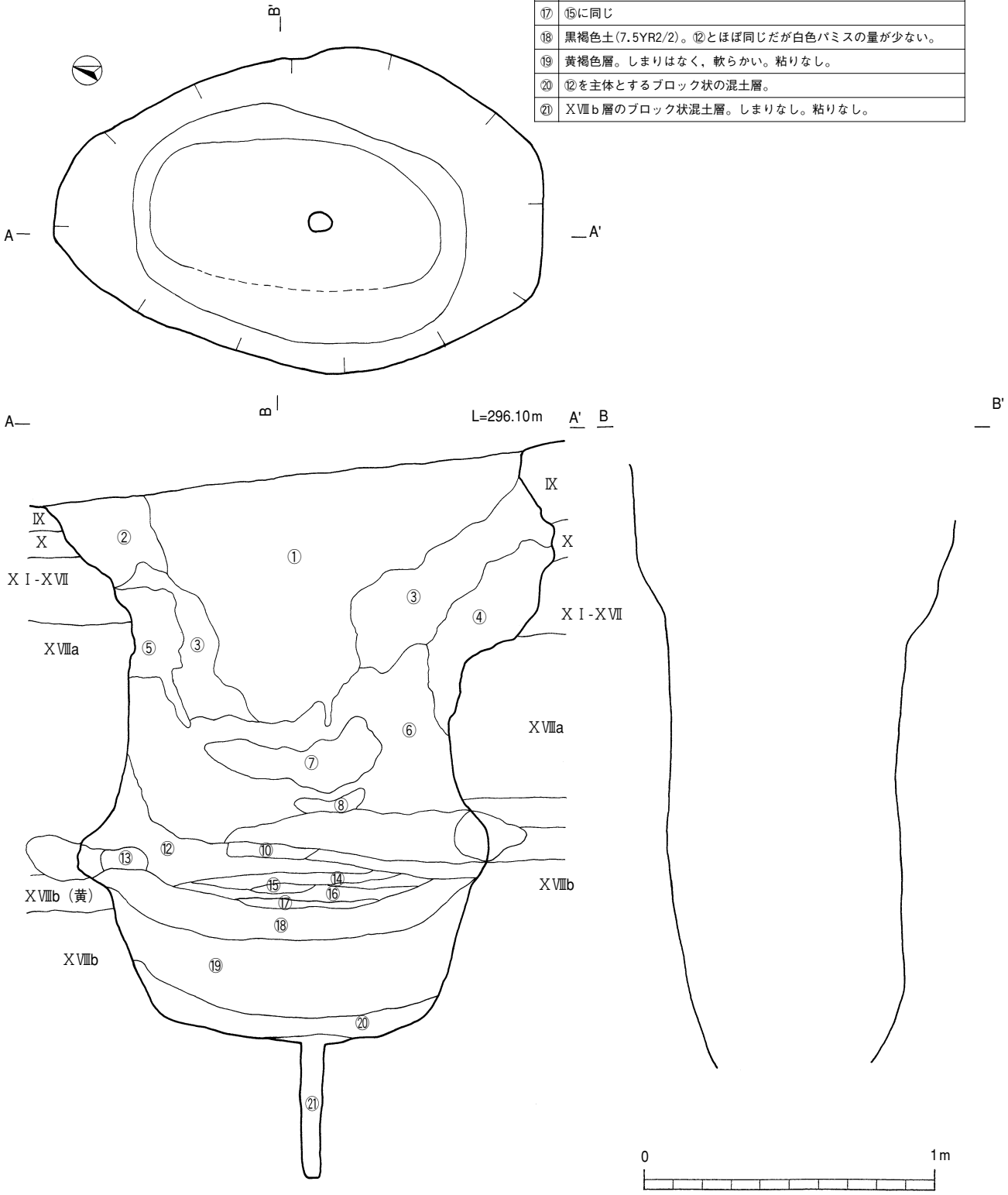
①	黒色土(7.5YR1.7/1)。Ⅷ層土。径10㎜前後の橙色パミス（P-13），径10～30㎜の黄褐色パミス、径１㎝前後の白色パミスを含む。
②	黒褐色土(7.5YR3/2)。①主体の混土層。径10～50㎜前後のサツマブロックを含む。しまりややあり。粘りなし。
③	黄褐色土(10YR5/6)。ⅩⅧｂ層土主体の混土層。しまりややあり。粘りなし。
④	暗褐色土(10YR3/4)。①主体の混土層。しまりややあり。粘りなし。

⑤	褐色土(7.5YR4/4)。①にⅩⅧｂ層土がブロック状に混ざる。しまりややあり。粘りなし。
⑥	褐色土(7.5YR4/4)。⑤のブロック。しまりややあり。粘りなし。
⑦	⑤よりも①の割合が少ない。
⑧	ⅩⅧｂ層土主体の混土層。
⑨	サツマブロック。
⑩	⑦よりⅩⅧｂ層土の割合が多い。
⑪	⑧よりⅩⅧｂ層土の割合がさらに多い。
⑫	⑪よりⅩⅧｂ層土の割合が多い。



第36図　縄文時代早期の落とし穴状遺構７号

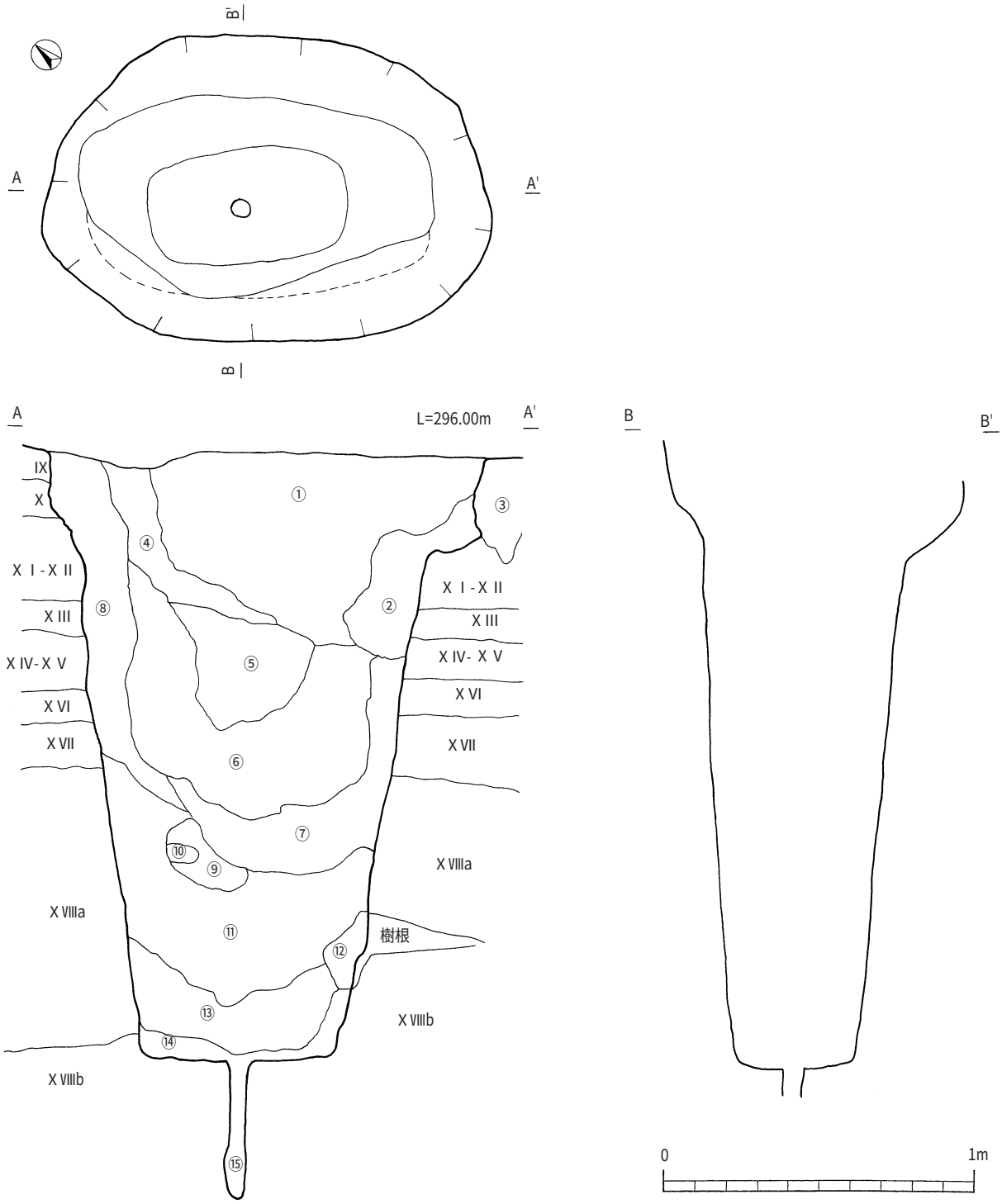
①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10～40㎜の橙色パミス（P-13）を少量，径１㎜前後の白色パミスを多く含む。しまりややあり。粘りややあり。
②	黒褐色土(7.5YR3/2)。①と④の混土層。③よりやや明るい。
③	黒褐色土(7.5YR2/2)。①と④の混土層。①が優勢。径５㎜前後のP-13を少量含む。径１㎜前後の白色パミスも含む。
④	褐色土(7.5YR4/6)。ＸＩ～ＸⅦ層起源。しまりややあり。粘りややあり。
⑤	暗褐色土(7.5YR3/4)。①と④の混土層。④が優勢。一部樹痕による攪乱あり。
⑥	褐色土(7.5YR4/3)。①と④と⑦の混土層。
⑦	極暗褐色土(7.5YR2/3)。サツマブロックが中心。
⑧	明褐色土(7.5YR5/8)。ＸＩ～ＸⅦ層起源の粘質土ブロック。
⑨	暗褐色土(7.5YR3/4)。⑥とほぼ同じだが白色パミスが⑥よりやや多い。
⑩	⑦に同じ
⑪	褐色土(7.5YR4/4)。④と⑦の混土層。
⑫	褐色土(7.5YR4/3)。⑨とほぼ同じだが白色パミスの量が少ない。
⑬	明褐色土(7.5YR5/6)。粘質土ブロック。
⑭	⑦に同じ
⑮	黒褐色土(7.5YR3/2)。Ⅷ層土。径１㎜前後の白色パミスを含む。
⑯	⑦に同じ
⑰	⑮に同じ
⑱	黒褐色土(7.5YR2/2)。⑫とほぼ同じだが白色パミスの量が少ない。
⑲	黄褐色層。しまりはなく，軟らかい。粘りなし。
⑳	⑫を主体とするブロック状の混土層。
㉑	ⅧＢ層のブロック状混土層。しまりなし。粘りなし。



第37図　縄文時代早期の落とし穴状遺構８号

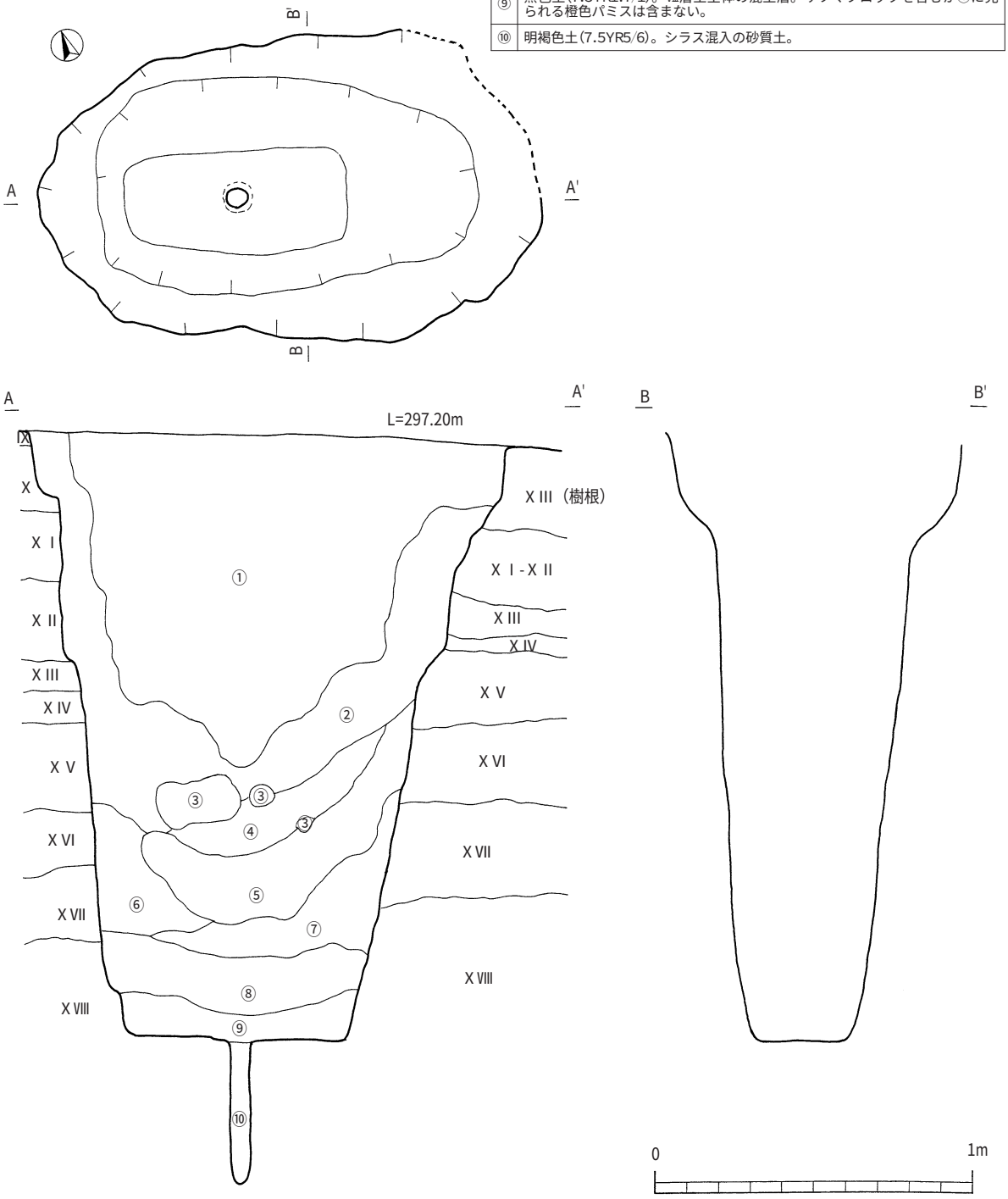
①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10㎜前後の橙色パミス（P-13），径１m前後の黄色，白色パミスを含む。
②	褐色土(7.5YR4/4)。①とⅩⅠ～ⅩⅢ層土の混土層。ややⅩⅠ～ⅩⅢ層土が優勢。
③	樹痕。Ⅷ層土。
④	黒色土(7.5YR2/1)。①とほぼ同じだが，やや明るい。
⑤	黒褐色土(7.5YR2/2)。④とほぼ同じだが，やや明るい。径40㎜前後のサツマブロックが目立つ。
⑥	黒色土(7.5YR1.7/1)。①とほぼ同じだが，P-13が少ない。
⑦	黒褐色土(7.5YR2/2)。⑥とほぼ同じだが，P-13が細粒化している。
⑧	極暗褐色土(7.5YR2/3)。①とⅩⅠ～ⅩⅢ層土との混土層。

⑨	暗褐色土(7.5YR3/4)。①と⑩の混土層。
⑩	褐色土(7.5YR4/4)。ⅩⅣ～ⅩⅦ層起源のブロック。
⑪	暗褐色土(7.5YR3/3)。⑥よりやや明るい。P-13は⑥より多い。径20～30㎜のサツマブロックを含む。
⑫	褐色土(7.5YR4/4)。樹痕。
⑬	黒褐色土(7.5YR2/2)。⑪とほぼ同じだが，黒色土が優勢で，P-13が少ない。白色パミスはやや多い。
⑭	褐色土(7.5YR4/3)。シラスを含むブロック状の混土層。
⑮	にぶい褐色土(7.5YR5/4)。ⅩⅧb層と⑭の混土層。



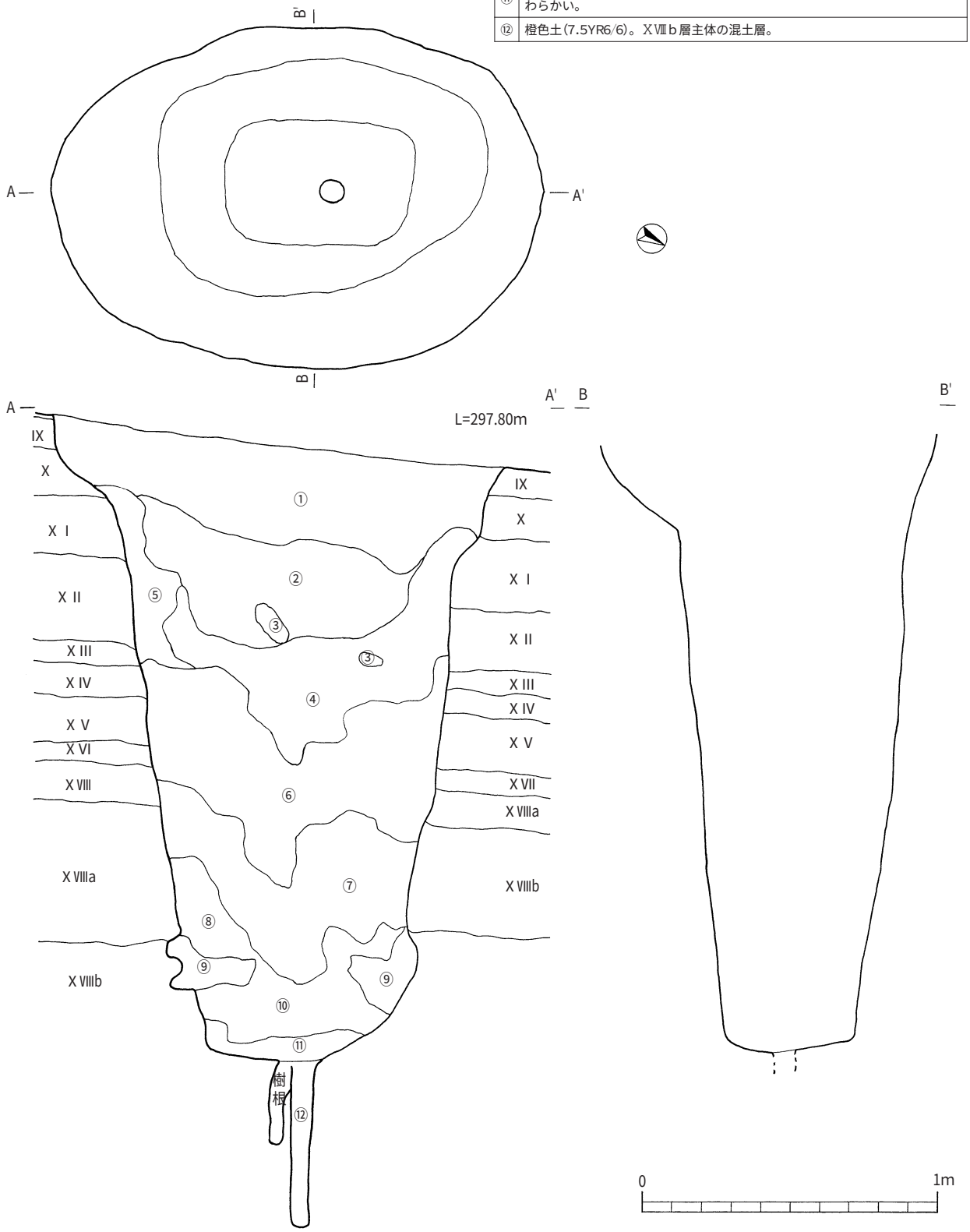
第38図　縄文時代早期の落とし穴状遺構９号

①	黒色土(7.5YR1.7/1)。Ⅷ層土。径10～30㎜前後の橙色パミス（P-13），径１㎜前後の白色パミスを含む。しまりあり。粘りなし。
②	黒褐色土(7.5YR2/2)。①を主体とする③との混土層。しまりややあり。粘りなし。
③	褐色土ブロック(7.5YR4/4)。粘質土。
④	黒褐色土(7.5YR3/2)。②よりも③の割合が多い。径３～４㎝のサツマブロックを含む。
⑤	暗褐色土(7.5YR3/4)。③を主体とする混土層。
⑥	黒褐色土(7.5YR3/2)。①と③の混土層。
⑦	黒褐色土(7.5YR3/2)。④とほぼ同じだが，やや暗い。
⑧	黒褐色土(7.5YR2/2)。①と③の混土層。②よりやや①が多く暗い。
⑨	黒色土(7.5YR1.7/1)。Ⅷ層土主体の混土層。サツマブロックを含むが①に見られる橙色パミスは含まない。
⑩	明褐色土(7.5YR5/6)。シラス混入の砂質土。



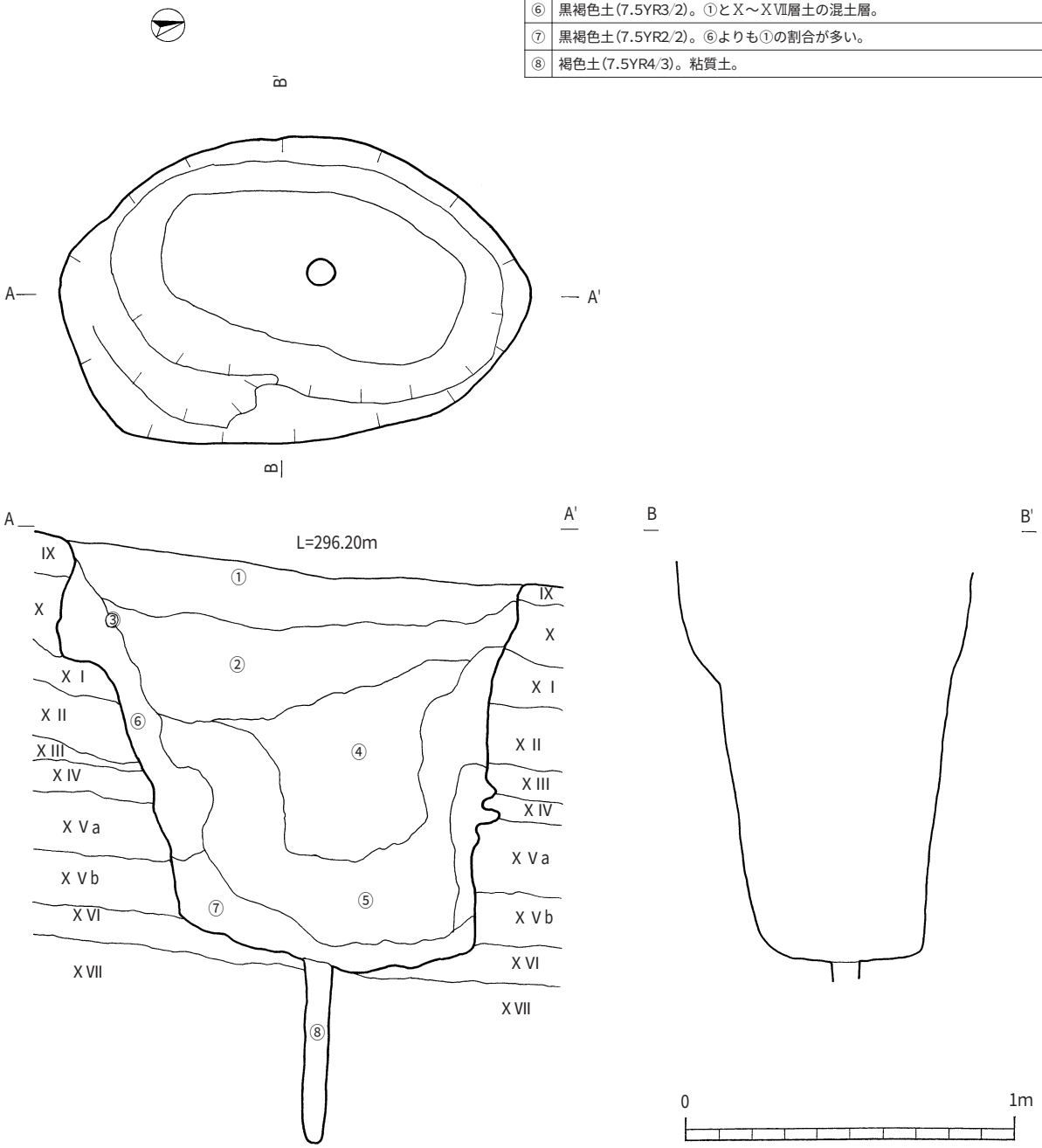
第39図　縄文時代早期の落とし穴状遺構10号

①	黒色土(7.5YR2/1)。径10～20㎜の橙色パミス（P-13），径１㎜前後の白色，黄色パミスを含む。
②	黒色土(7.5YR1.7/1)。①とほぼ同じだが，やや暗い。
③	褐色土(7.5YR4/4)。ⅩⅠ～ⅩⅢ層起源のブロック。
④	黒褐色土(7.5YR2/2)。②と⑥の混土層。径１㎜前後の白色パミスを多く含む。径５～15㎜前後のP-13を少量含む。
⑤	黒褐色土(7.5YR3/1)。④とⅩ～ⅩⅢ層土の混土層。Ⅹ～ⅩⅢ層土がやや優勢。
⑥	黒褐色土(7.5YR3/2)。④と⑦の混土層。④がやや優勢で白色パミスを多く含む。
⑦	褐色土(7.5YR4/3)。⑧とサツマブロックを含むⅩⅠ～ⅩⅢ層土の混土層。径10㎜前後のP-13をわずかに含む。白色パミスは少ない。
⑧	極暗褐色土(7.5YR2/3)。⑦と⑩の混土層。やや⑩が優勢。
⑨	褐色土(7.5YR4/3)。④とⅩⅧｂの混土層。ⅩⅧｂがやや優勢。樹痕か？
⑩	黒褐色土(7.5YR3/2)。④とⅩⅧｂの混土層。④が優勢。径３㎝前後のサツマブロックを含む。
⑪	にぶい褐色土(7.5YR5/4)。④とⅩⅧｂの混土層。ⅩⅧｂが優勢で明るく，やわらかい。
⑫	橙色土(7.5YR6/6)。ⅩⅧｂ層主体の混土層。



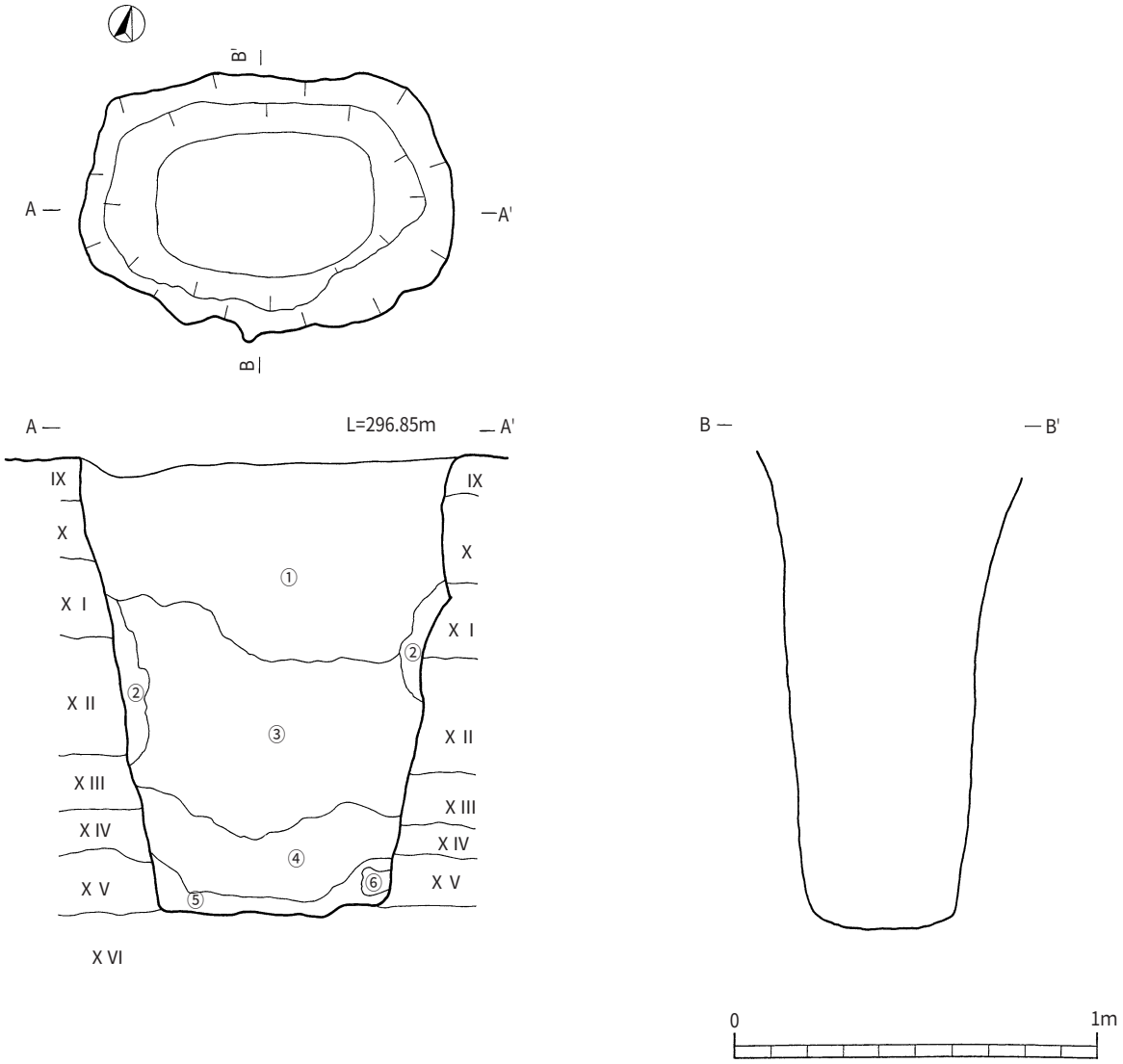
第40図　縄文時代早期の落とし穴状遺構11号

①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径20㎜前後の橙色パミス（P-13），径１～２㎜前後の黄色，白色パミスを含む。
②	黒褐色土(7.5YR2/2)。①とほぼ同じだが，やや明るい。
③	サツマブロック。
④	黒色土(7.5YR1.7/1)。①とほぼ同じだが，サツマブロック，橙色パミス，白色パミスの割合がやや増える。
⑤	極暗褐色土(7.5YR2/3)。②とほぼ同じだが，やや明るい。
⑥	黒褐色土(7.5YR3/2)。①とⅩ～ⅩⅦ層土の混土層。
⑦	黒褐色土(7.5YR2/2)。⑥よりも①の割合が多い。
⑧	褐色土(7.5YR4/3)。粘質土。



第41図　縄文時代早期の落とし穴状遺構12号

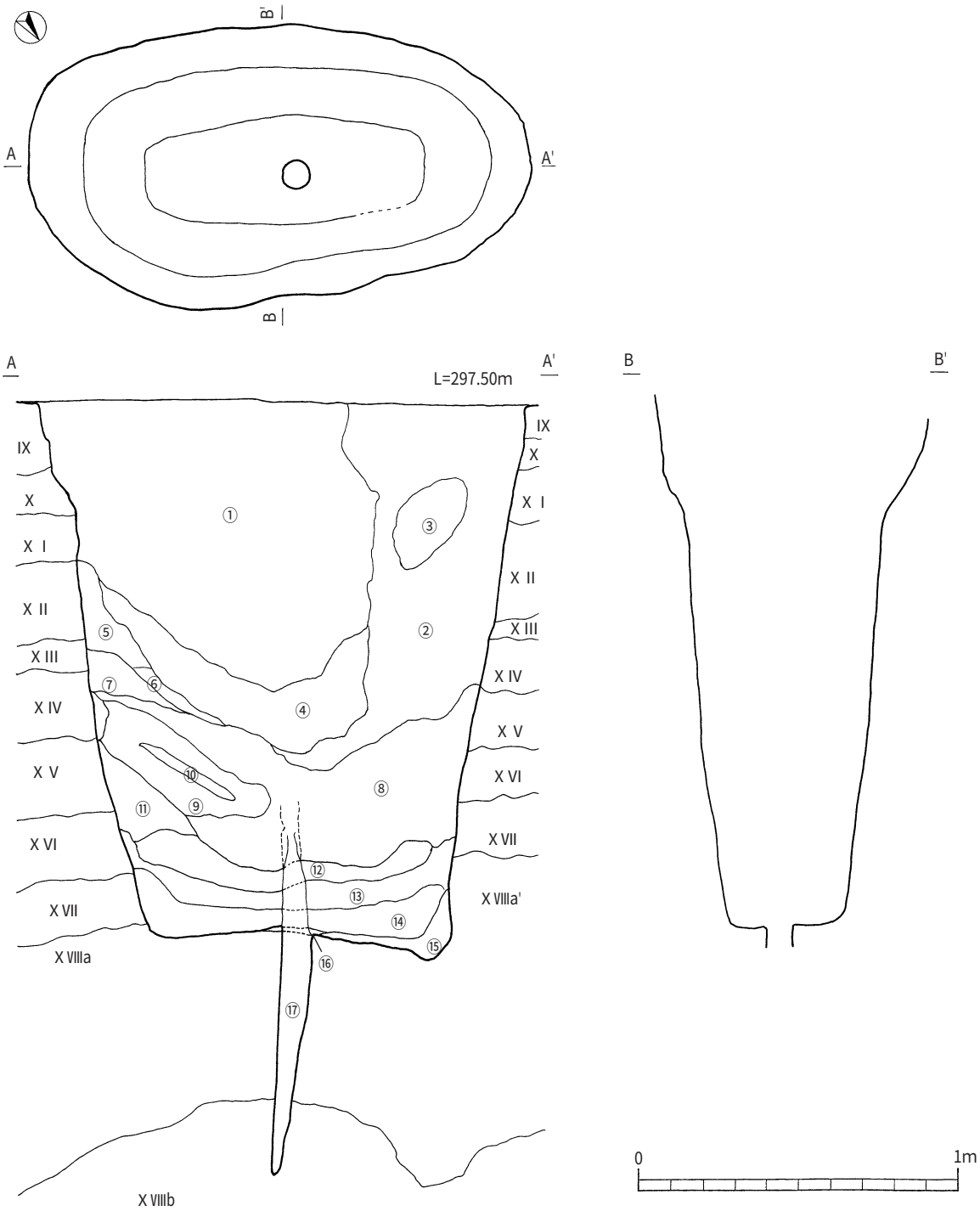
①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10㎜前後の橙色パミス（P-13），径１㎜前後の白色パミス，径10～20㎜のサツマブロックを含む。
②	暗褐色土(7.5YR3/4)。ＸＩ～ＸⅡ層土の混土ブロック。わずかに①を含む。
③	黒褐色土(7.5YR2/2)。①とほぼ同じだが，やや茶色い。
④	黒色土(7.5YR1.7/1)。①とほぼ同じだが，P-13やサツマブロックはあまりみられない。白色パミスの量も少ない。
⑤	黒褐色土(7.5YR3/1)。④とＸⅣ～ＸＶ層土の混土。ＸⅣ～ＸＶ層土が多い。やや粘性がある。
⑥	褐色土(7.5YR4/3)。ＸⅢ～ＸⅣ層相当のブロック。



第42図　縄文時代早期の落とし穴状遺構13号

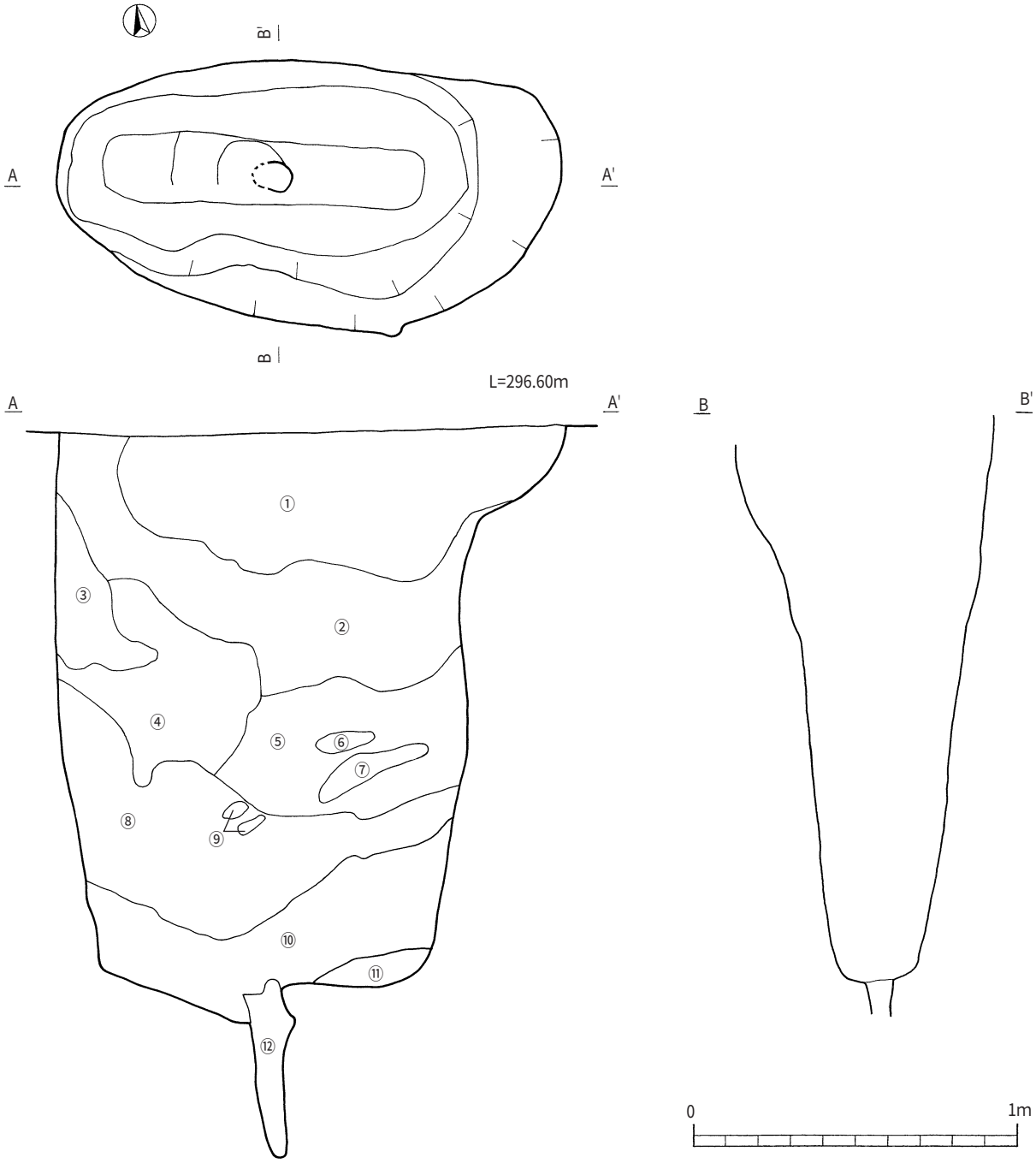
①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10～30㎜の橙色パミス（P-13），径１㎜前後の白色パミスを含む。
②	極暗褐色土(7.5YR2/3)。Ⅷ～ⅩⅡ層土の混土層。パミス等をほとんど含まない。
③	黒色土(7.5YR2/1)。Ⅷ層土のブロックだが，パミス等はほとんど含まない。
④	黒褐色土(7.5YR2/2)。①と②の混土層。径30～40㎜のサツマブロックを含む。
⑤	黒色土(7.5YR2/1)。①と②の混土層。②が優勢でパミス等が少ない。④よりやや暗い。
⑥	②に同じ
⑦	黒褐色土(7.5YR3/2)。⑤とほぼ同じだが，サツマブロックを含む。

⑧	黒褐色土(7.5YR3/2)。Ⅹ～ⅩⅥ層起源の混土層。②と似ているがやわらかい。
⑨	黒色土(7.5YR2/1)。Ⅷ層土主体の混土層。P-13は含まないが，白色パミスは少量含む。
⑩	明褐色土(7.5YR5/6)。サツマブロック。径10～20㎜に砕片化している。
⑪	極暗褐色土(7.5YR2/3)。⑧と⑫の混土層。⑧が優勢。
⑫	黒色土(7.5YR2/1)。Ⅷ層土主体の混土層。径10㎜前後のサツマブロック，白色パミスをわずかに含む。
⑬	⑧に同じ
⑭	⑫に同じ
⑮	黄橙色土(10YR8/6)。シラス主体の混土層。
⑯	橙色土(7.5YR6/8)。シラス主体の混土層。⑮よりも色調がはっきりしている。
⑰	暗褐色土(7.5YR3/3)。⑧，⑫，ⅩⅧａのブロック等の混土層。ブロック状。やわらかくしまりなし。



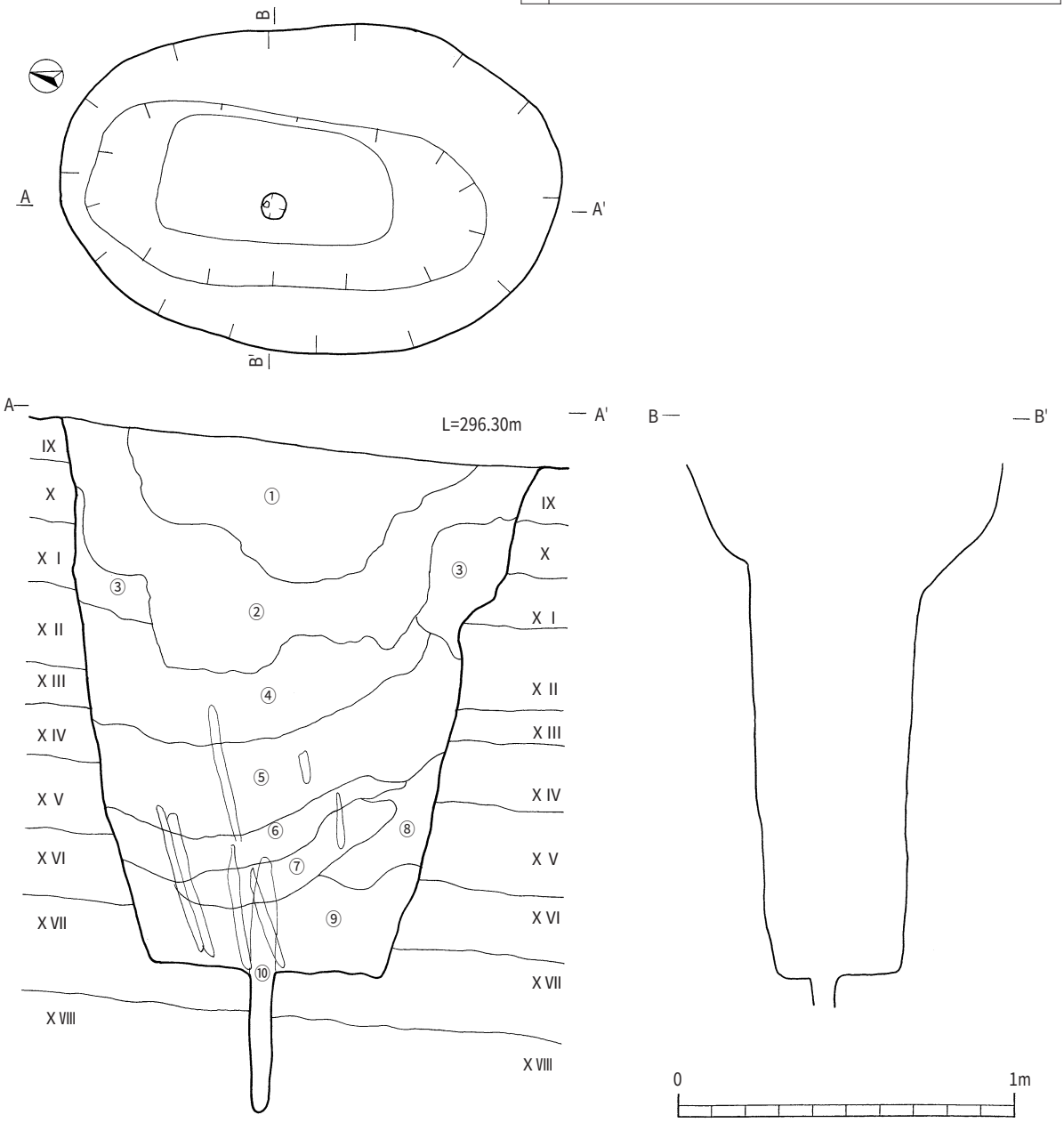
第43図　縄文時代早期の落とし穴状遺構14号

①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10～30㎜前後の橙色パミス（P-13），径１～３㎜前後の黄色パミス，径１㎜前後の白色パミスを含む。
②	黒色土(7.5YR2/1)。①と③の混土層。①よりもP-13が少なく，全体的にやや明るい。
③	黒褐色土(7.5YR3/2)。Ⅹ～ⅩⅢ層起源の混土層。
④	黒褐色土(7.5YR2/2)。②と③の混土層。②よりもP-13が少ない。わずかにサツマブロックを含む。
⑤	黒褐色土(7.5YR3/1)。④と⑩の混土層。
⑥	径３㎝前後に砕片化したサツマブロック。
⑦	径１㎝前後に砕片化したサツマブロック。
⑧	極暗褐色土(7.5YR2/3)。⑩とⅩⅡ～ⅩⅥ層土の混土層。ⅩⅡ～ⅩⅥ層は径５㎝前後のブロック状。P-13を含む。
⑨	サツマブロック。
⑩	黒色土(7.5YR1/1.7)。P-13を含む。シラスブロックを少量含む。
⑪	褐色土(10YR4/6)。⑩とシラスの混土層。
⑫	にぶい褐色土(7.5YR5/4)。⑩とシラスの混土層。



第44図　縄文時代早期の落とし穴状遺構15号

①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10～30㎜前後の橙色パミス（P-13），径３㎜前後の黄色パミス，径１㎜前後の白色パミスを多く含む。
②	黒色土(7.5YR2/1)。①と③の混土層。
③	黒褐色土(7.5YR2/2)。①とⅩ～ⅩⅠ層土の混土層。
④	黒褐色土(7.5YR3/1)。径10㎜前後のP-13を含む。②よりのパミスの量は少ない。径10～20㎜のサツマブロックをわずかに含む。
⑤	極暗褐色土(7.5YR2/3)。⑥とサツマブロックの混土層。径10～20㎜のP-13をわずかに含む。
⑥	黒褐色土(7.5YR2/2)。径３㎜前後の黄色パミス，径１㎜前後の白色パミスを多く含む。
⑦	極暗褐色土(7.5YR2/3)。⑧とサツマブロックの混土層。
⑧	黒褐色土(7.5YR2/2)。径１㎜前後の白色パミス，径10㎜前後のP-13を少量含む黒色土。
⑨	黒褐色土(7.5YR3/2)。①とⅩ～ⅩⅥ層の混土層。
⑩	⑦，⑧，ⅩⅧ層土の混土層。やわらかくしまりなし。



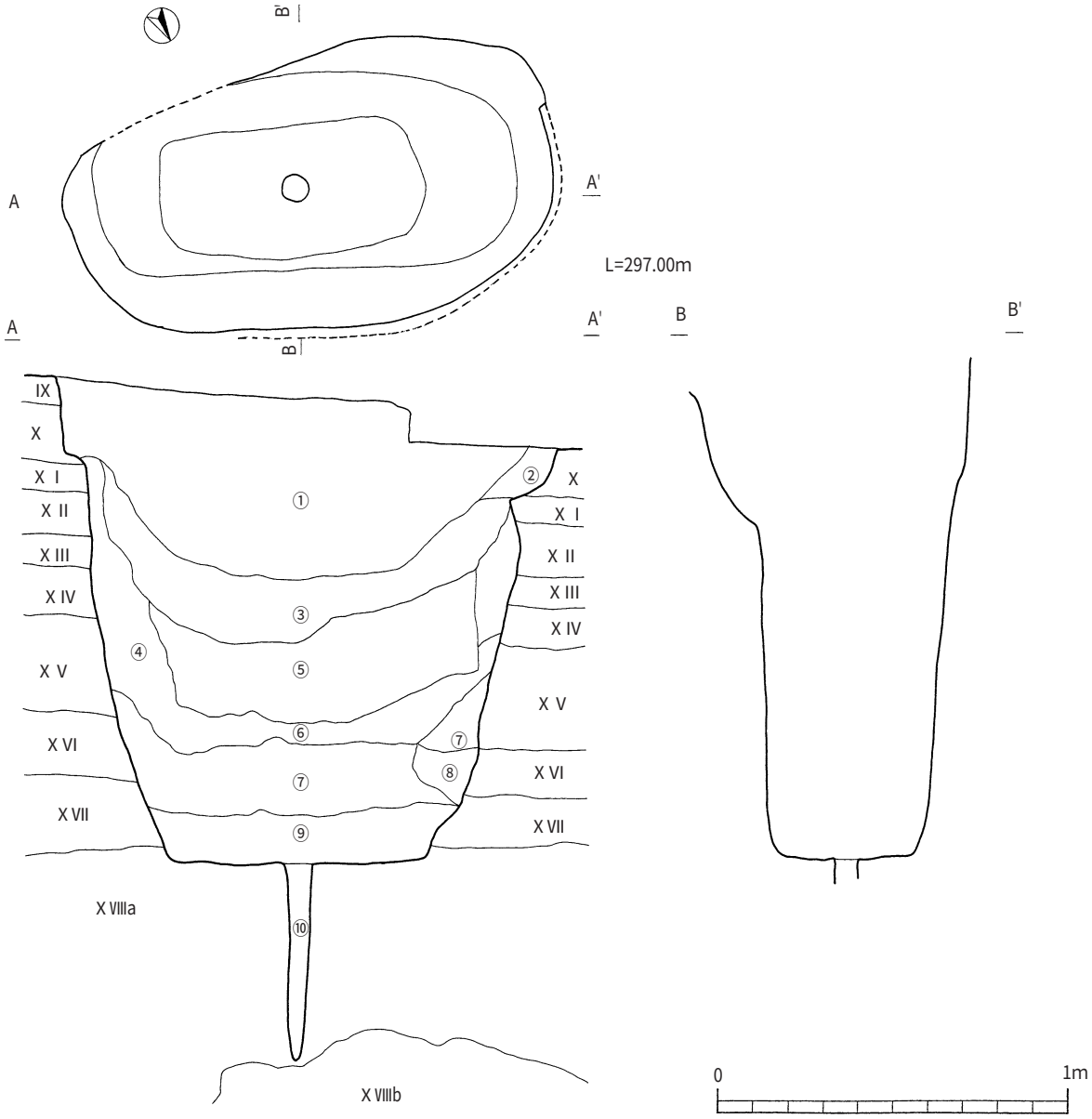
第45図　縄文時代早期の落とし穴状遺構16号

落とし穴17号

①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10～20㎜前後の橙色パミス（P-13），径１～３㎜の黄色パミス，径１㎜前後の白色パミスを含む。
②	褐色土(7.5YR4/3)。Ⅹ層起源の混土層。白色パミスを少量含む。
③	黒褐色土(7.5YR2/2)。①に似ているが，P-13，白色パミスともにやや量が減る。
④	極暗褐色土(7.5YR2/3)。②と③の混土層。③がやや優勢。③よりやや明るい。
⑤	暗褐色土(7.5YR3/3)。③よりもP-13は少なく，径１㎜前後の白色パミスは多い。径20～50㎜のサツマブロックを含む。
⑥	黒褐色土(7.5YR3/2)。⑤よりパミスの量がやや減る。サツマブロックを少量含む。
⑦	黒褐色土(7.5YR3/2)。⑥よりさらにパミスの量が減る。
⑧	暗褐色土(7.5YR3/4)。ⅩⅠ～ⅩⅦ層土主体の混土層。
⑨	①に同じ。
⑩	褐色土(7.5YR4/3)。⑧と⑨の混土層。しまりはなく，やわらかい。

落とし穴18号

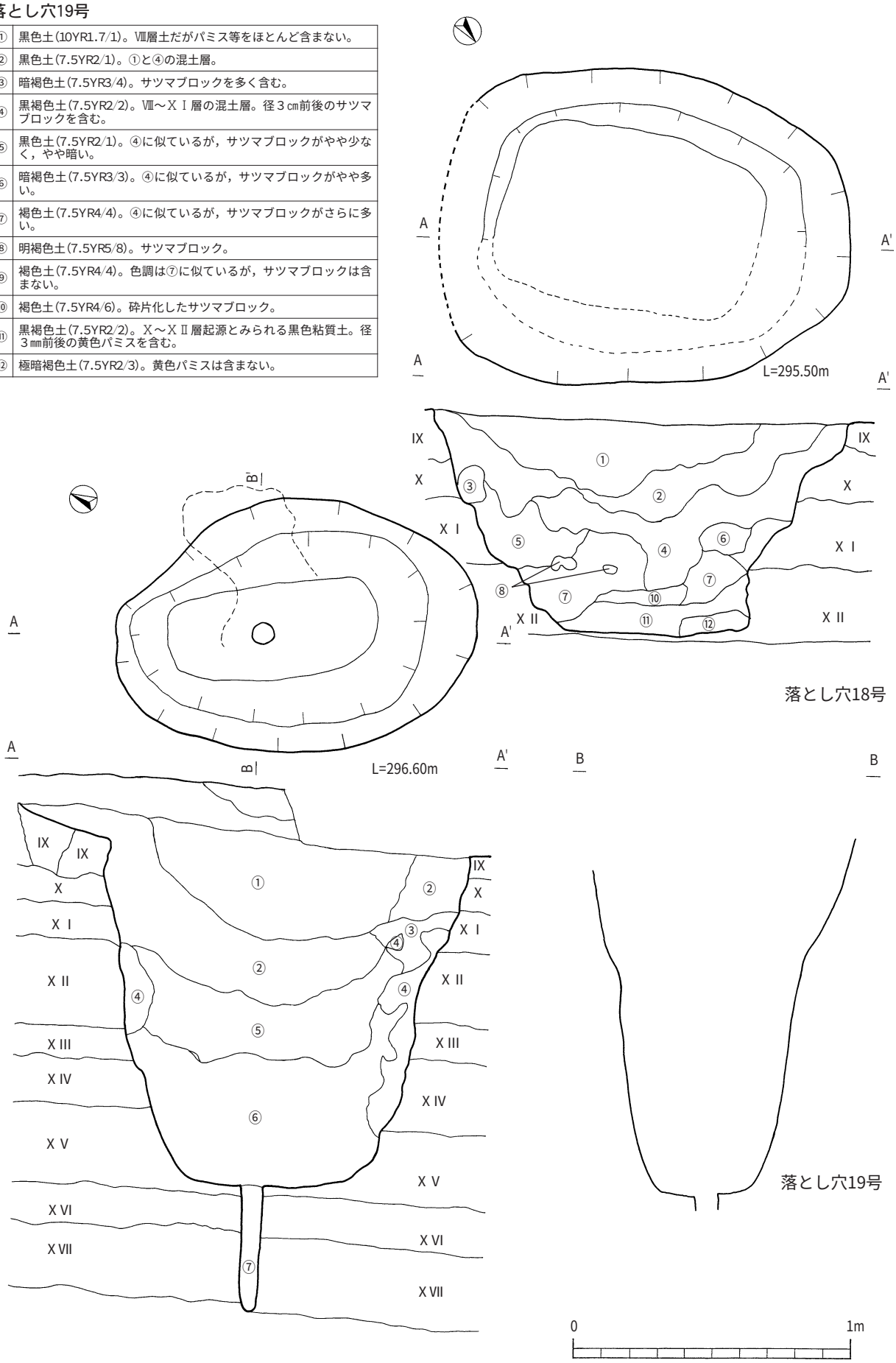
①	黒色土(7.5YR1.7/1)。径10～30㎜前後の橙色パミス（P-13），径３㎜前後の黄色パミス，径１㎜前後の白色パミスを多く含む。
②	黒色土(7.5YR2/1)。③と似ているが③より明るく，P-13がやや少ない。
③	黒褐色土(7.5YR3/2)。④と⑥の混土層。樹痕か？
④	暗褐色土(7.5YR3/4)。ⅩⅠ～ⅩⅦ層主体の混土層。樹痕か？
⑤	黒褐色土(7.5YR2/2)。④よりも明るい。パミス等の状況は④に似ている。
⑥	黒褐色土(7.5YR3/2)。⑦よりも明るい。パミス等の状況は④に似ている。
⑦	褐色土(7.5YR4/4)。ⅩⅦ～ⅩⅧ層土の砂質土。



第46図　縄文時代早期の落とし穴状遺構17号

落とし穴19号

①	黒色土(10YR1.7/1)。Ⅷ層土だがパミス等をほとんど含まない。
②	黒色土(7.5YR2/1)。①と④の混土層。
③	暗褐色土(7.5YR3/4)。サツマブロックを多く含む。
④	黒褐色土(7.5YR2/2)。Ⅷ～ⅩⅠ層の混土層。径３㎝前後のサツマブロックを含む。
⑤	黒色土(7.5YR2/1)。④に似ているが，サツマブロックがやや少なく，やや暗い。
⑥	暗褐色土(7.5YR3/3)。④に似ているが，サツマブロックがやや多い。
⑦	褐色土(7.5YR4/4)。④に似ているが，サツマブロックがさらに多い。
⑧	明褐色土(7.5YR5/8)。サツマブロック。
⑨	褐色土(7.5YR4/4)。色調は⑦に似ているが，サツマブロックは含まない。
⑩	褐色土(7.5YR4/6)。砕片化したサツマブロック。
⑪	黒褐色土(7.5YR2/2)。Ⅹ～ⅩⅡ層起源とみられる黒色粘質土。径３㎜前後の黄色パミスを含む。
⑫	極暗褐色土(7.5YR2/3)。黄色パミスは含まない。



第47図　縄文時代早期の落とし穴状遺構18号・19号

落とし穴状遺構17号（第46図）

Ｅ－21区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，一部削平されている。長軸が推定で142㎝，短軸が推定で79㎝である。底面は長軸が75㎝，短軸が39㎝である。深さは検出面から140㎝である。底面には径８㎝，深さ57㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，東側の壁は検出面から22㎝，西側の壁は推定で26㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。（SD40）

落とし穴状遺構18号（第47図）

Ｅ－20区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は楕円形であり，長軸が129㎝，短軸が89㎝である。底面は長軸が73㎝，短軸が34㎝である。深さは検出面から132㎝である。底面には径８㎝，深さ45㎝の逆茂木痕が１本検出された。断面の形状は，北側の壁は検出面から32㎝，南側の壁は46㎝で段を持ち，そこからほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。（SD38）

落とし穴状遺構19号（第47図）

Ｄ－19区，Ⅸ層上面で検出された。平面の形状は卵形であり，長軸が150㎝，短軸が113㎝である。底面は長軸が65㎝，短軸が30㎝である。深さは検出面から79㎝である。底面には逆茂木痕はみられなかった。断面の形状は，検出面から東側，西側の壁とも複数の小さな段を持ち，緩やかに下がる形状である。底面は平坦である。埋土については，他の落とし穴状遺構には多くみられるP-13や径１㎜前後の白色パミスの量が，極端に少ないという特徴がある。調査担当者は，落とし穴状遺構ではない可能性も指摘している。（SD43）

第４表　縄文時代早期落とし穴状遺構観察表

遺構名	検出面	形状	検出面からの深さ（㎝）	上面		底面		底面のピット			備考
				長軸（㎝）	短軸（㎝）	長軸（㎝）	短軸（㎝）	数	上面の径（㎝）	検出面からの深さ（㎝）	
落とし穴状遺構１号	Ⅸ層	楕円形	184	166?	113?	100	57	1	12	58	上部は一部削平
落とし穴状遺構２号	Ⅸ層	不定形？	145	163	94	98	54	1	6	55	上部は一部削平
落とし穴状遺構３号	Ⅸ層	楕円形	155	131	88	70	38	1	8	51	
落とし穴状遺構４号	Ⅸ層	楕円形	161	161	92	54	39	1			底面のピットは実測不可
落とし穴状遺構５号	Ⅸ層	楕円形	167	139	86	73	29	1	4	50	
落とし穴状遺構６号	Ⅹ層？	楕円形	170	114?	79	79	37	1	8	44	樹痕のため検出はⅩ層
落とし穴状遺構７号	Ⅸ層	楕円形	168	143	92	76	41	1	10	53	
落とし穴状遺構８号	Ⅸ層	楕円形	208	167	109	98	51?	1	8	46	
落とし穴状遺構９号	Ⅸ層	楕円形	196	141	98	60	37	1	5	44	
落とし穴状遺構10号	Ⅸ層	楕円形	191	156	95	69	31	1	6	44	
落とし穴状遺構11号	Ⅸ層	楕円形	220	168	115	58	42	1	8	54	
落とし穴状遺構12号	Ⅸ層	楕円形	130	152	93	88	45	1	9	56	
落とし穴状遺構13号	Ⅸ層	卵形	127	96	72	59	39	0			
落とし穴状遺構14号	Ⅸ層	楕円形	172	156	84	87	34	1	8	76	
落とし穴状遺構15号	Ⅸ層	楕円形	185	156	82	99	20	1	8	42	
落とし穴状遺構16号	Ⅸ層	楕円形	167	146	95	70	37	1	7	42	
落とし穴状遺構17号	Ⅸ層	楕円形	140	142?	79?	75	39	1	8	57	上部は一部削平
落とし穴状遺構18号	Ⅸ層	楕円形	132	129	89	73	34	1	8	45	
落とし穴状遺構19号	Ⅸ層	卵形	79	150	113	65?	30?	0			

2　土器（第49～51，53～56，58図）

早期土器は10類に分類した。各類について，以下に記述する。

第１類土器（44～58）

15点を図化した。器形的特徴としては，円筒形土器である。口縁部が直行し，胴部から底部までは直線的で底部は平底を呈する深鉢形土器である。口唇部には，平坦面を形成するものである。

施文的特徴としては，口唇部上面に刻みを施す。口縁部文様帯外面には，貝殻刺突文を横位に２～３条，もしくは斜位に横方向へ巡らす。その下には，クサビ形状貼付文を数条巡らす。57では，３条の粘土紐状貼付文になり，その間に縦位の貝殻刺突文を施す。胴部文様帯では，胴部下端部外面にかけて斜位，もしくは横位の貝殻条痕文を地文とし施すものである。調整方法としては，口縁部から底部にかけて，工具によるケズリ調整後に，ナデ調整を施すものである。加栗山式土器に相当すると考えられる。

第２類土器（59～93）

35点を図化した。器形的特徴としては，円筒形土器と角筒形土器である。口唇部に平坦面を形成し，口縁部は外反し，胴部から底部までは直線的で，底部は平底を呈する深鉢形土器である。

施文的特徴としては，口唇部に縦位の刻みを施す。口縁部文様帯では，横位の貝殻刺突文もしくは貝殻押引文を巡らし，その下には密接な貝殻刺突文を施すことでクサビ状を呈する。胴部文様帯には，貝殻押引文を横位もしくは縦位で横方向に巡らす。胴部下端部には縦位の刻みを施すものである。調整方法としては，口縁部から底部にかけて，工具によるケズリ調整後に粗いナデ調整を施すものである。47と50には補修孔と考えられる孔が，口縁部下端にヘラ工具により穿たれている。吉田式土器に相当すると考えられる。

第３類土器（94）

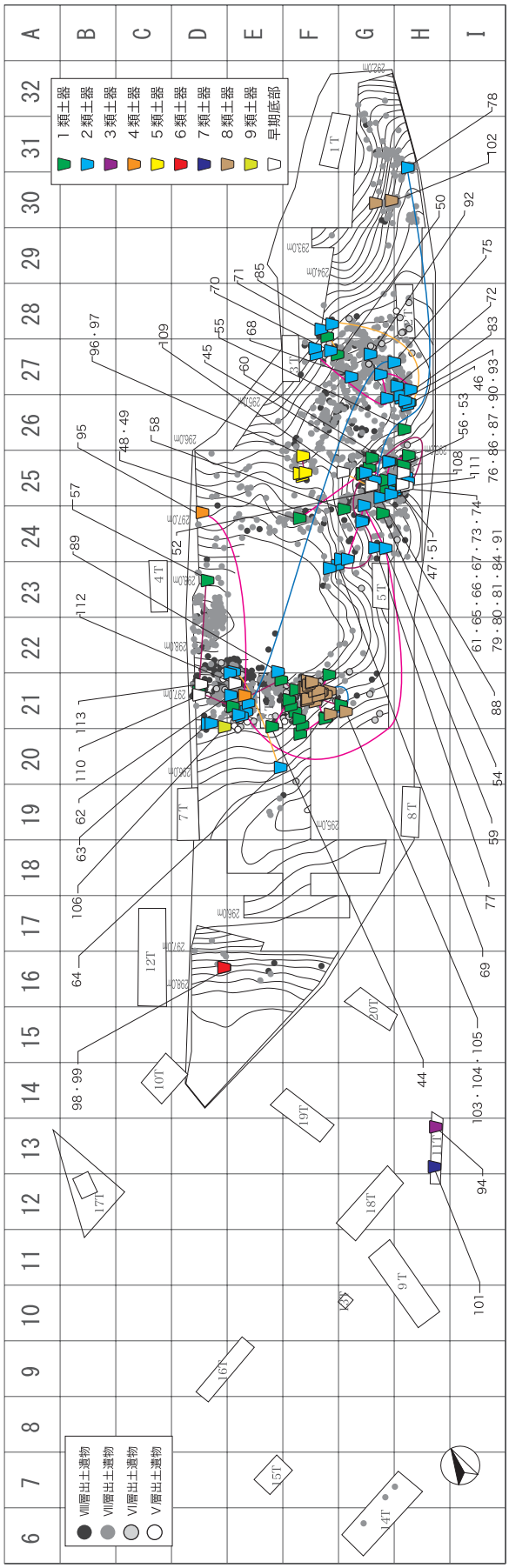
口縁部の１点を図化した。器形的特徴としては，口唇部は肥厚し口唇端部は平坦面を形成し，口縁部は外に開いている。

施文的特徴としては，口唇部に縄目による斜位の施文を施す。胴部上端にも，縄目による斜位の施文を施すものである。調整方法としては，口縁部から底部にかけて，工具によるケズリ調整の後にナデ調整を施すものである。石坂式系式土器に相当すると考えられる。

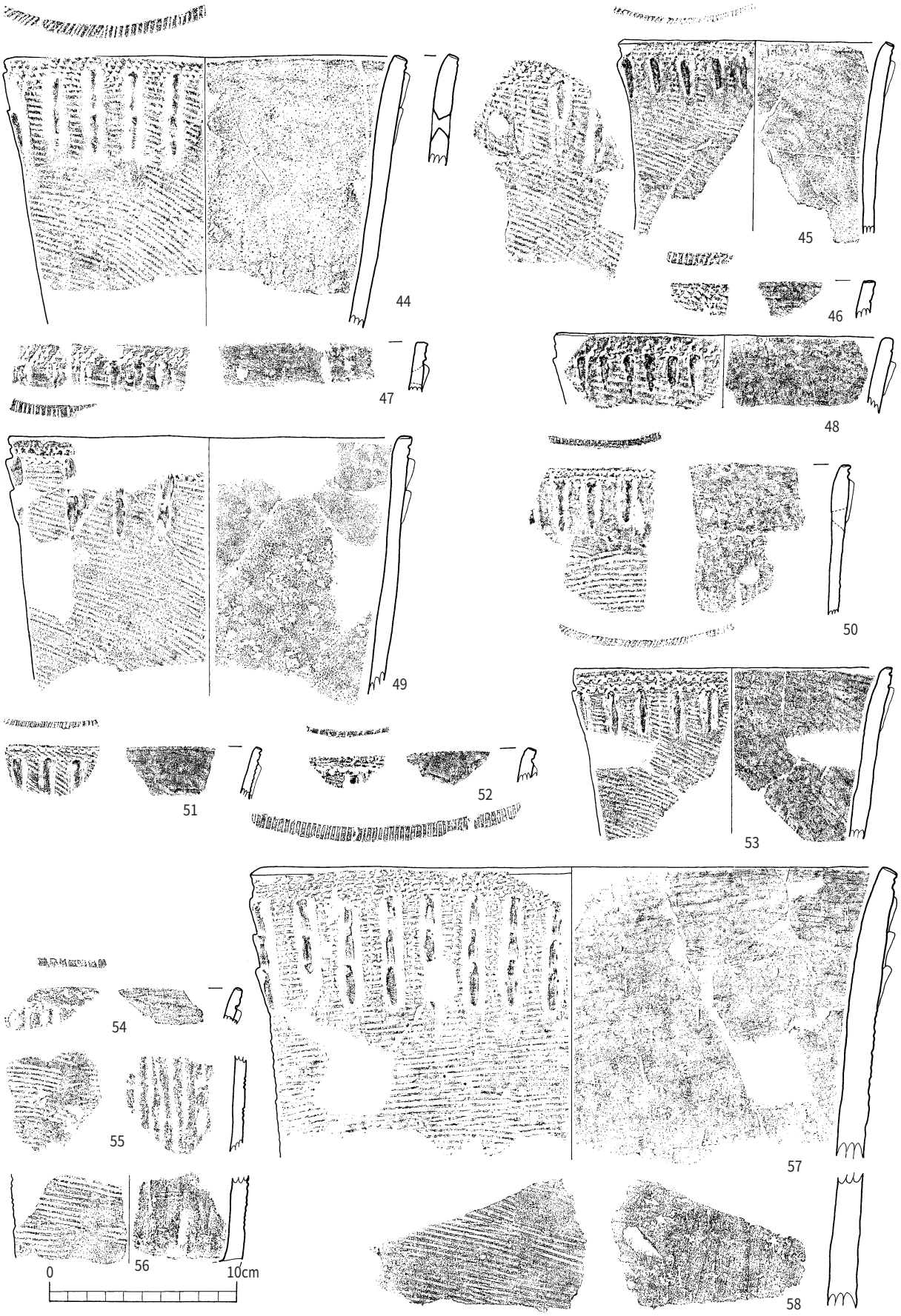
第４類土器（95）

口縁部の１点を図化した。器形的特徴としては，口縁形態は平口縁を呈し，口唇部には平坦面を形成し口縁部はやや内湾し，胴部から直線的に窄まる。

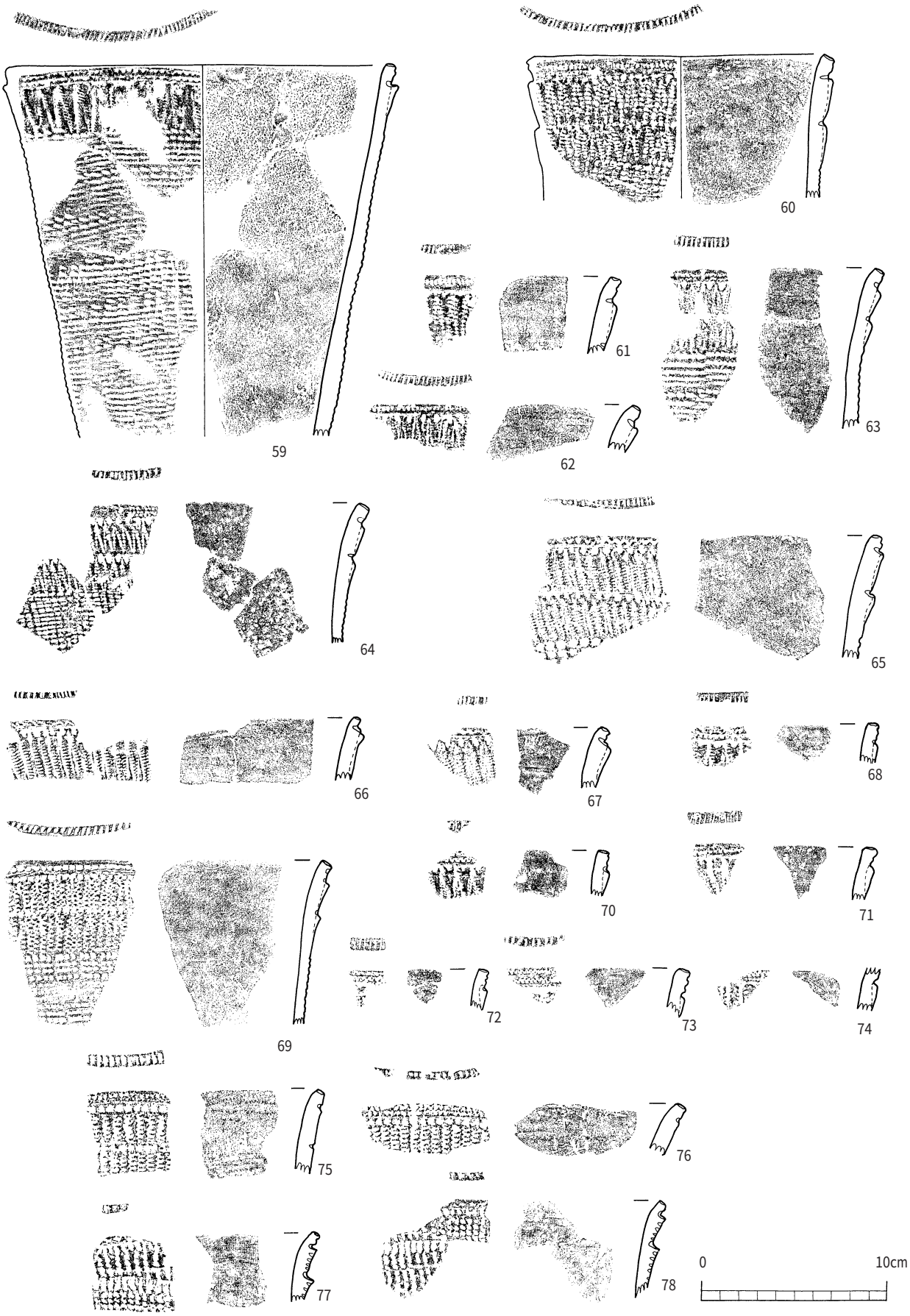
施文的特徴としては，「コ」状を呈する貝殻押引文が特徴である。口縁部文様帯では，横位の貝殻押引文３～



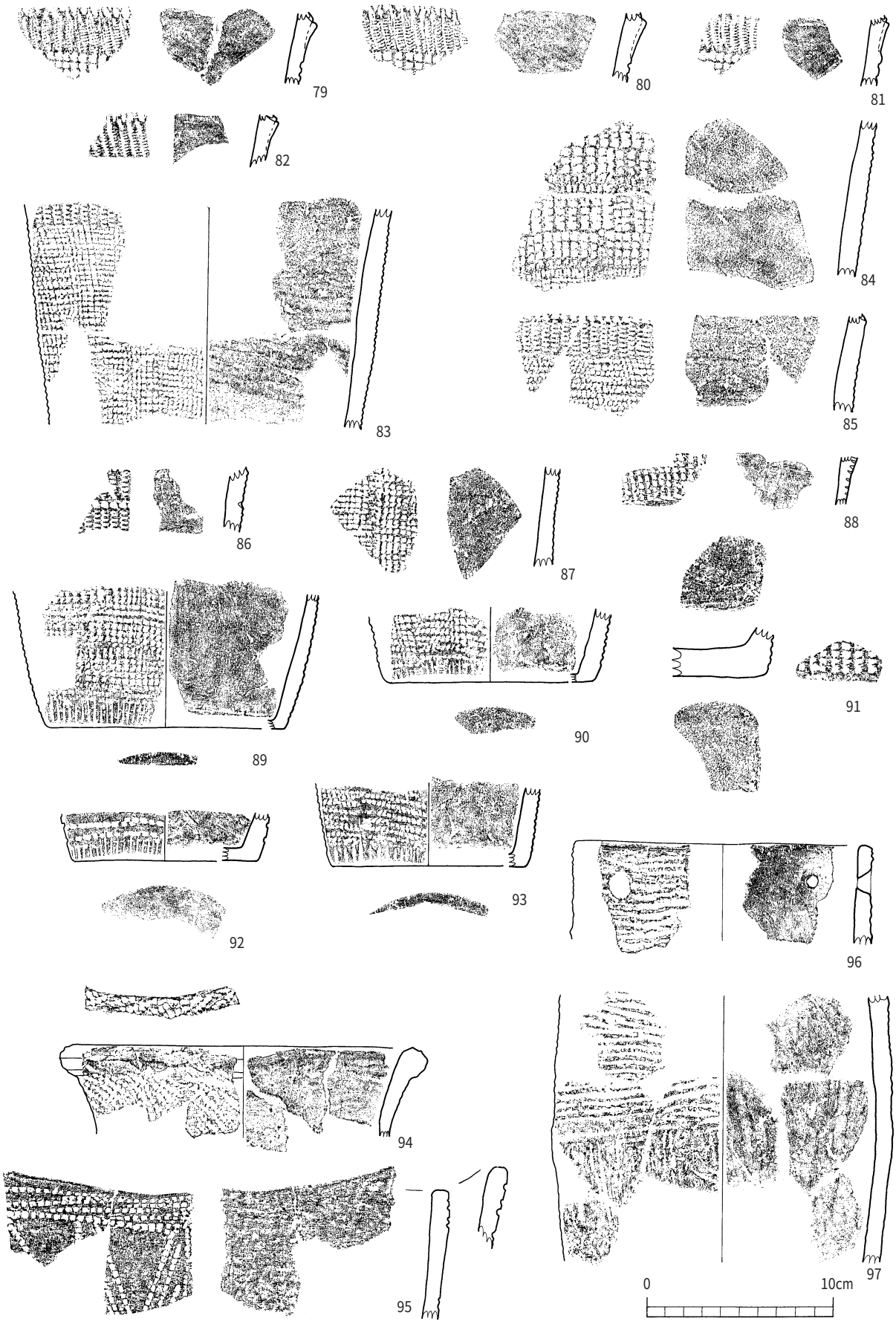
第48図　縄文時代早期の土器出土状況図



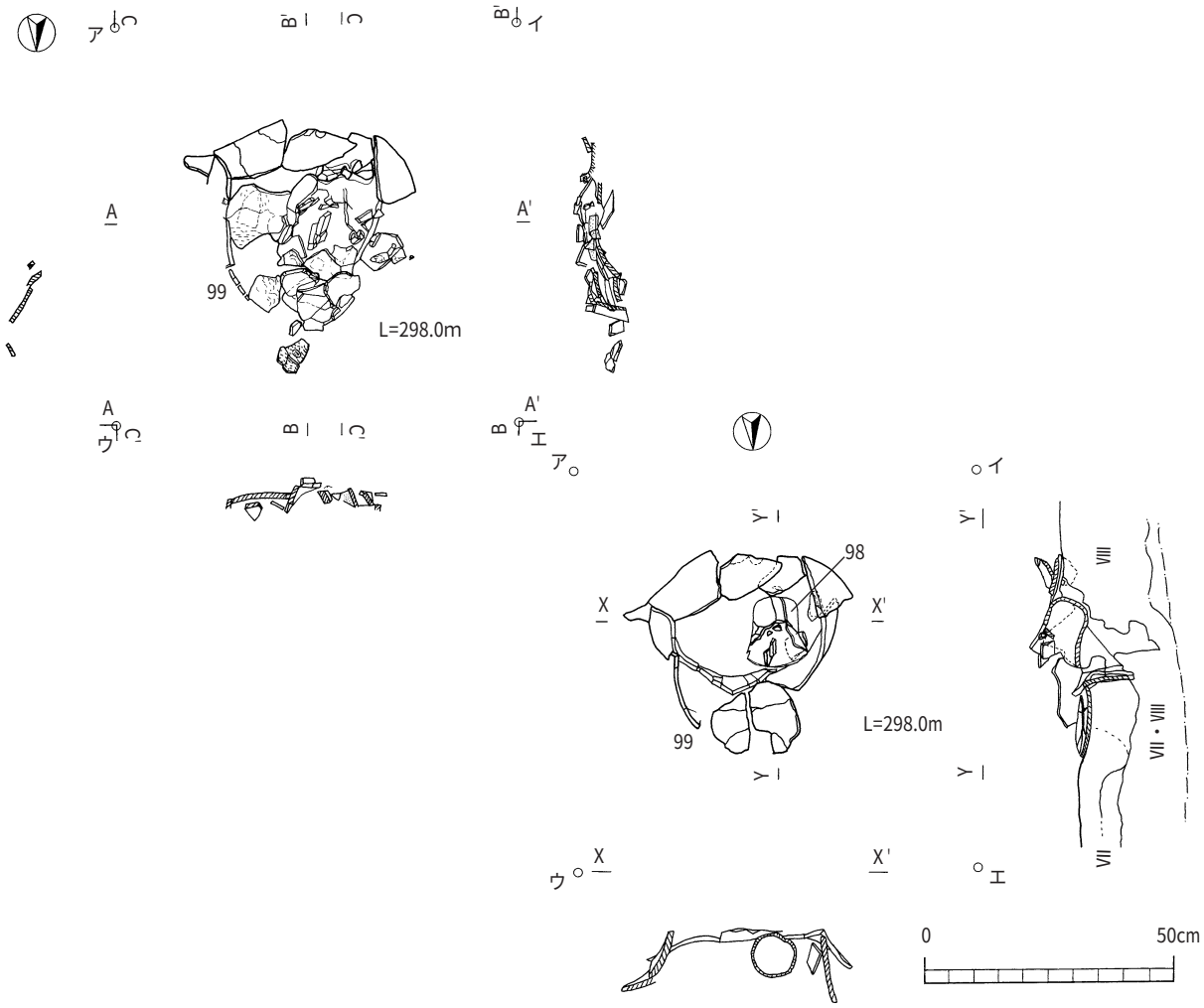
第49図　縄文時代早期の土器(1)



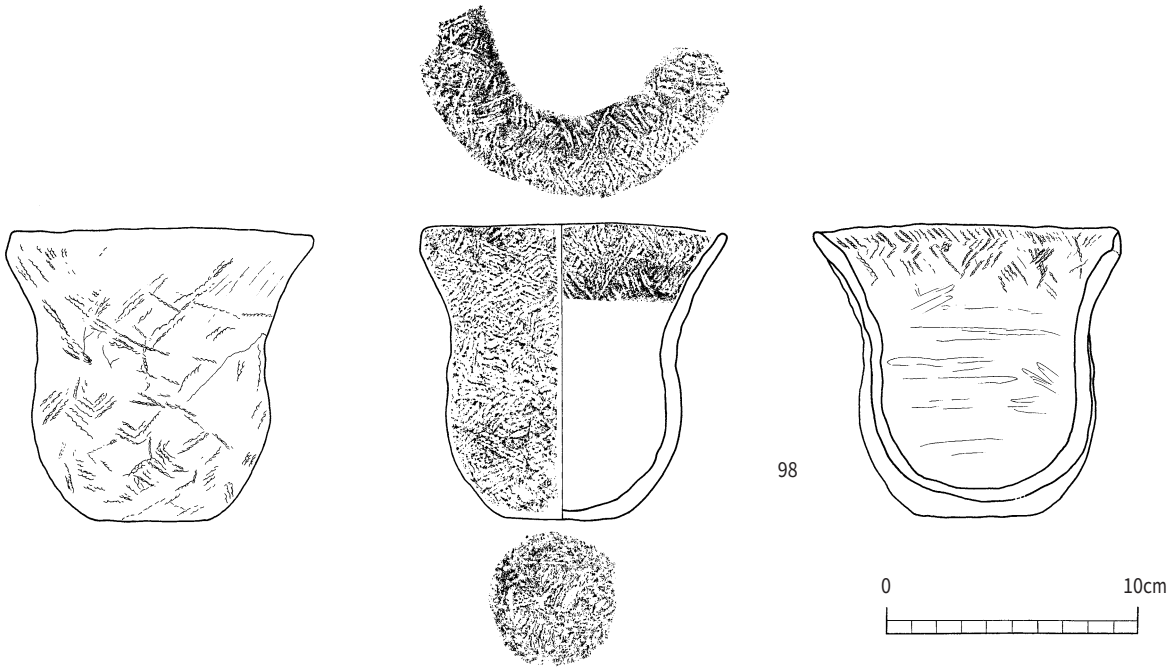
第50図　縄文時代早期の土器(2)



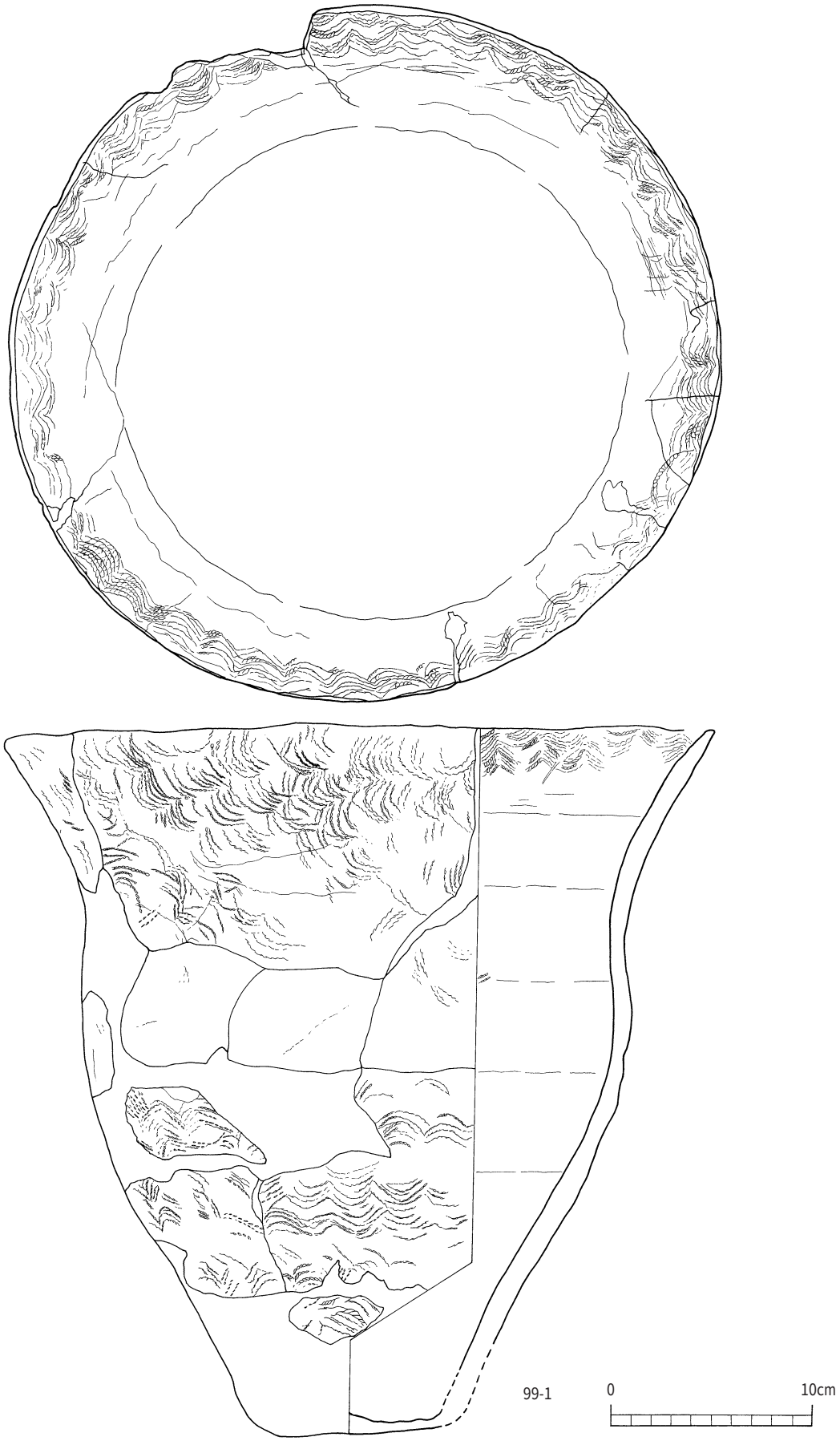
第51図　縄文時代早期の土器(3)



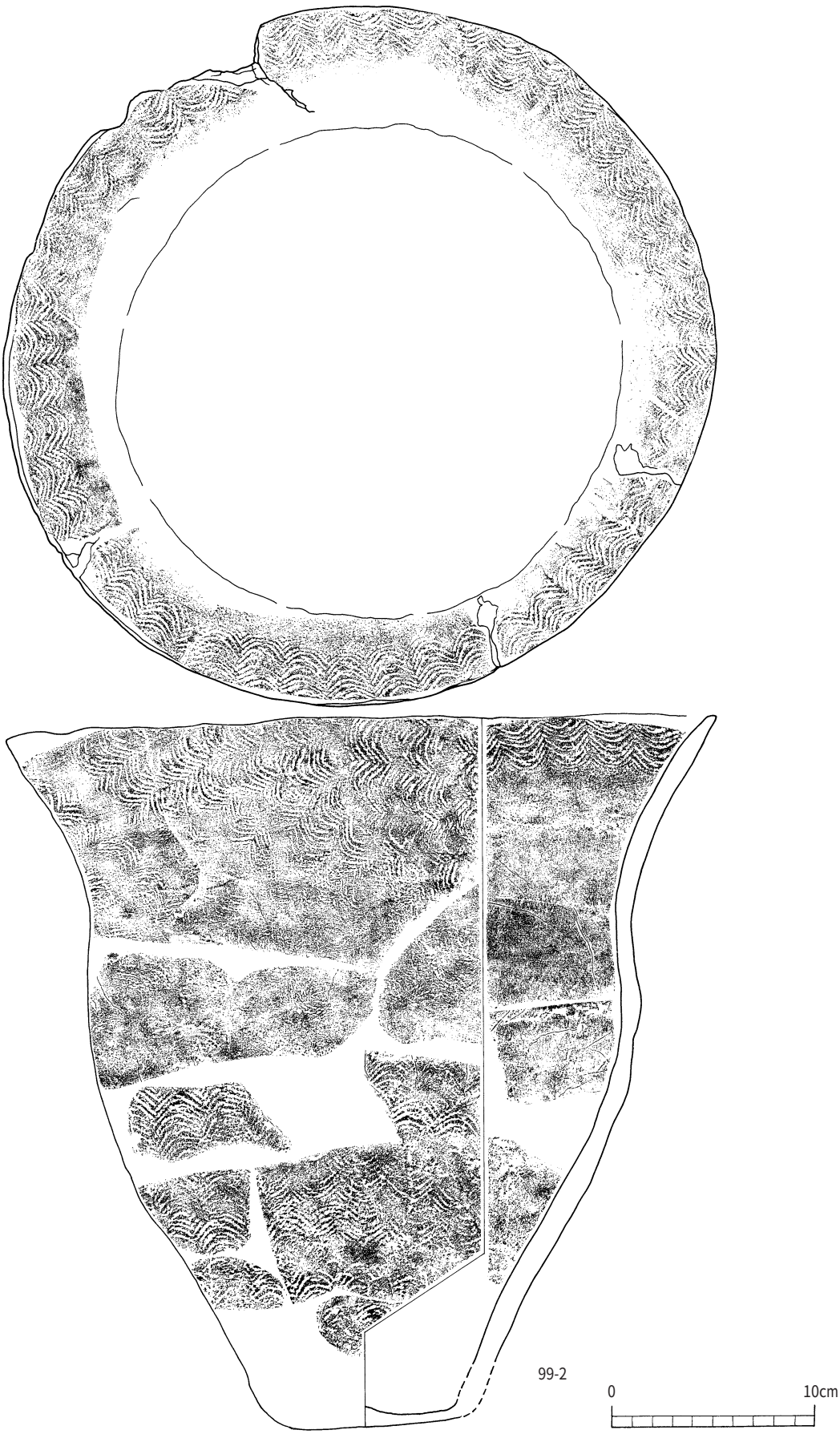
第52図　縄文時代早期土器(98, 99)の出土状況



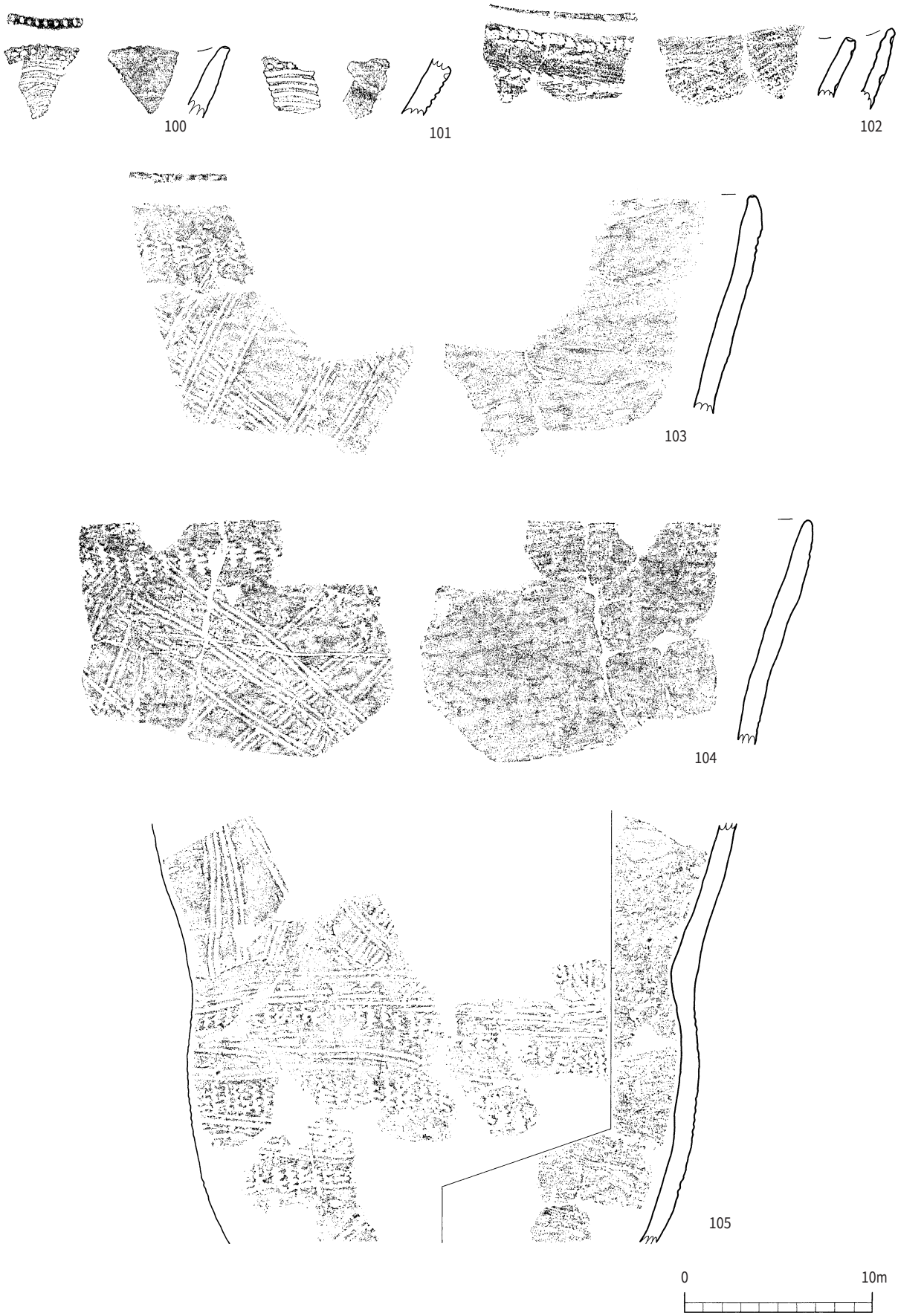
第53図　縄文時代早期の土器(4)



第54図　縄文時代早期の土器(5)



第55図　縄文時代早期の土器(6)



第56図　縄文時代早期の土器(7)

５条施す。胴部文様帯では，貝殻押引文を縦位あるいは斜位に施すものである。調整方法としては，口縁部から底部にかけて，工具によるケズリ調整後に，ナデ調整を施すものである。下剥峯式土器に相当すると考えられる。

第５類土器（96，97）

２点を図化した。出土状況から，96と97は同一個体である可能性がある。器形的特徴としては，口縁形態として平口縁を呈し，胴部下半から口縁部にかけてほぼ垂直に立ちあがる円筒形土器である。口唇部には，平坦面を形成し，口縁部は若干内湾する。

施文的特徴としては，口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて，貝殻腹縁部を使用した条痕文を，横位あるいは斜位に数十条巡らす。調整方法としては，内面においては工具による縦位のハケ調整ののち，丁寧なナデ調整が施されている。外面の胴部下半部には，工具による縦位のハケ調整が施されている。96には補修孔と考えられる孔が，口縁部下端に回転により穿たれている。円筒形条痕文土器に相当すると考えられる。

第６類土器（98，99）

２点を図化した。98は，パイプ状ベンガラを成分とする赤色顔料を内部に貯蔵した状態で出土した。99は，その98を入れ子状にした状態で出土した。

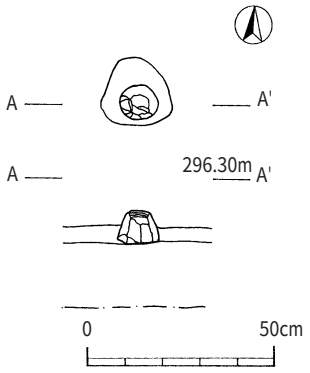
器形的特徴としては，98は口縁部が直線的に開き，99は大きく外反する形態である。胴部中央部は球形状を呈し，底部は平底となる。

施文的特徴として98は，口唇部文様帯から胴部全体にかけて，縦位および横位の撚糸文を施す。さらに口縁部内面には，横位の撚糸文を数条施すものである。99は，口唇部文様帯から胴部全体にかけて縦位および横位の変形撚糸文を施す。さらに口縁部内面には，縦位の変形撚糸文を施すものである。変形撚糸文は連弧文状の形態である。調整方法としては，内面においては工具による縦位のハケ調整ののち，丁寧なナデ調整が施されている。99では，肩部の変形撚糸文の上から，ナデ調整を施している。また，内面では接合痕跡を明瞭に残すものである。変形撚糸文土器に相当すると考えられる。

第７類土器（100，101）

口縁部のみ２点を図化した。11トレンチで出土している。器形的特徴としては，100は口縁形態として浅い波状口縁を呈する。頚部から口縁部にかけては直線的に開く。99の断面形状は口唇部に向けて窄まり，100はほぼ同じ厚みを口唇部まで呈す。

施文的特徴としては，口縁部に，棒状工具による１条の刺突連点文を施し，その下には棒状工具による数条の沈線文を横位に施す。また，99は口唇部に棒状工具による刺突連点文が施すものである。調整方法としては，ナデ調整が施されている。平栫式系土器に相当すると考えられる。



第57図　縄文時代早期土器（107）の出土状況

第８類土器（102～105）

４点を図化した。出土状況から，103と104，105は同一個体である可能性がある。器形的特徴としては，口縁形態として波状口縁を呈し，胴部から口縁部にかけてラッパ状に屈曲し，胴部上半部がやや膨らみを呈する円筒形土器である。

施文的特徴としては，口唇平坦面に刻みを施す。口縁部文様帯には，数条の刺突連点文を施し，102では工具，103と104では貝殻を使用する。102は口縁部下半部から胴部にかけては，二叉状工具による斜位及び縦位の沈線文を施す。その下には，二叉状工具による横位の沈線文と，貝殻による数条の刺突連点文を交互に施すものである。調整方法としては，工具による横位のハケ調整の後，丁寧なナデ調整が施されている。塞ノ神式土器に相当すると考えられる。

第９類土器（106）

１点を図化した。器形的特徴としては，口縁形態は平口縁を呈し，口唇部は平坦面を形成する。胴部は緩やかに膨らみ，口縁部は直線的に開く。

施文的特徴としては，口縁部から胴部全体に斜位の貝殻条痕文を施す。調整方法としては，内面で斜位の貝殻条痕調整が施されている。右京西式土器に相当すると考えられる。

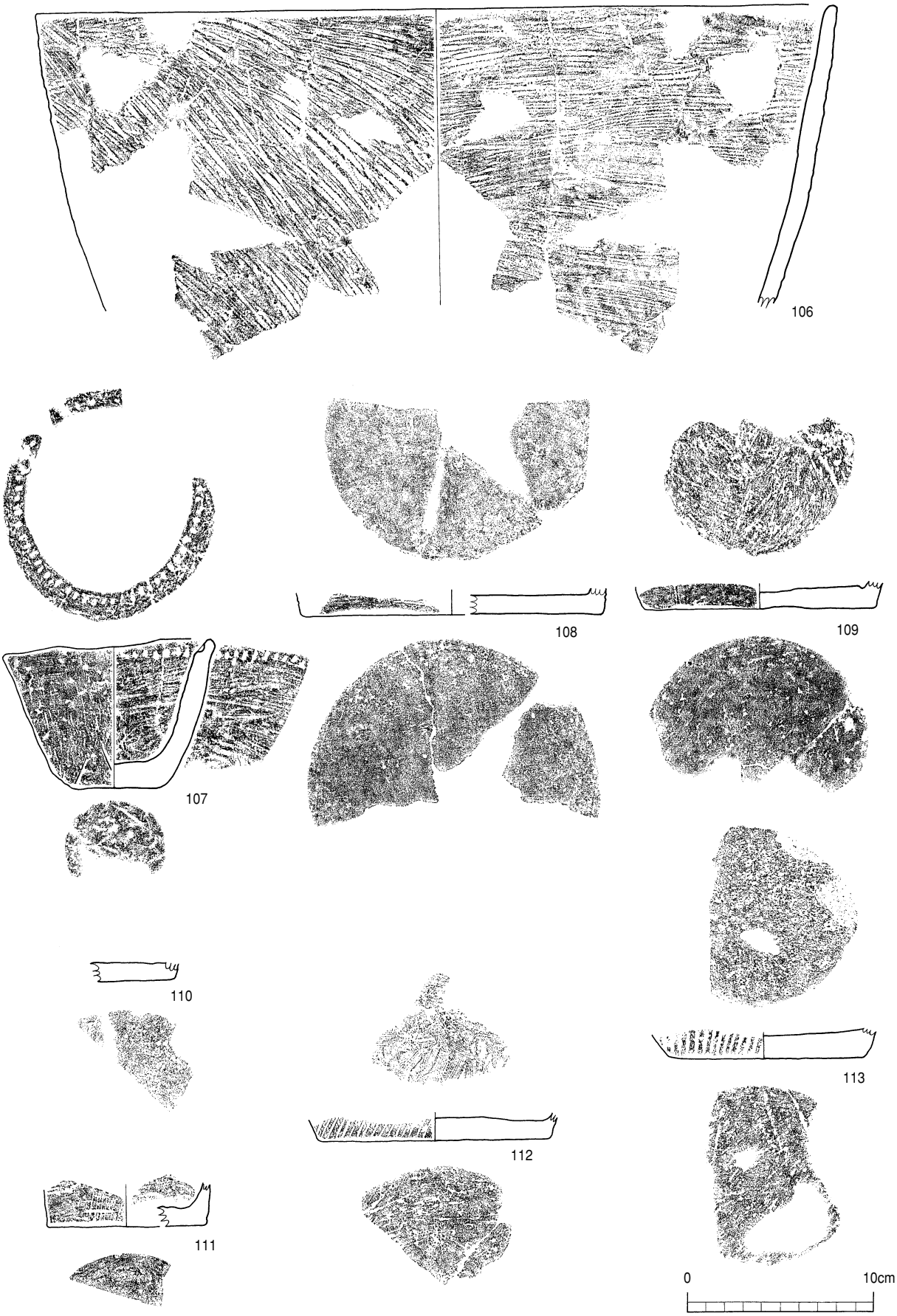
第10類土器（107）

１点を図化した。器形的特徴としては，緩やかな波状口縁を呈し，口唇部内面に４ヶ所の膨らみを呈する。胴部から口縁部までバケツ状に開き，底部は平底である。

施文的特徴としては，外面は無文であるが，内面口縁部に刺突連点文が１条巡らされるものである。調整方法としては，内面で横位ナデ調整が施されている。

土器底部（108～113）

６点を図化した。器形的特徴としては，円筒形の平底である。施文的特徴としては，111と112，113には胴部下端に斜位の刻みが施されている。底面には，植物葉圧痕が確認できる。



第58図　縄文時代早期の土器(8)

第５表　縄文時代早期土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	文様・調整		胎土					色調		取上番号	その他
						外面	内面	石英	長石	雲母	砂礫	その他	外面	内面		
49	44			Ⅰ類		クサビ有り，貝殻条痕文，貝殻刺突文	ケズリ　ナデ						赤褐色	明赤褐色	116 1624 1625 1641 1651 1678 1684 1801 1802 1806 1809 1810	補修孔有り
	45	G-25	Ⅷ	Ⅰ類	円筒	貝殻条痕文　二段クサビ	ケズリ						橙色	にぶい橙	687	
	46	H-26	Ⅶ	Ⅰ類	円筒	貝殻条痕文	ナデ						明赤褐色	赤褐色	1576	
	47	H-25	Ⅶ	Ⅰ類	円筒	クサビ　貝殻条痕文	ナデ						にぶい褐色	にぶい褐色	1780 1926	補修孔あり
	48	G-25	Ⅶ	Ⅰ類	円筒	貼り付けクサビ　貝殻条痕　貝殻刺突	ケズリ後ナデ						黒褐色	黄褐色	683	
	49	G-25,27	Ⅷ,Ⅶ下	Ⅰ類	円筒	貝殻条痕	ナデ		○			火山ガラス	にぶい赤褐色	赤褐色	693 715 721 1362 1383 1560 2029	
	50			Ⅰ類	円筒	貝殻条痕文　クサビ	ケズリ						橙	橙	636 1076	補修孔あり
	51	H-25	Ⅷ	Ⅰ類	円筒	クサビ　条痕　刺突	工具ナデ		○			火山ガラス	にぶい褐色	にぶい褐色	2059	
	52	G-25	Ⅶ	Ⅰ類	円筒	口唇部貝殻筋のキザミ　押引きによる横方向　クサビ型突起	ナデ						暗赤褐色	にぶい橙	1331	
	53			Ⅰ類	円筒	クサビ　貝殻条痕　貝殻腹縁刺突	工具ケズリ						にぶい赤褐色	にぶい褐色	1562	補修孔あり
	54	G-24	Ⅶ下	Ⅰ類	円筒	口唇部貝殻筋のキザミ　押引きによる横方向　クサビ型突起	ナデ						赤褐色	にぶい橙	1899	
	55	H-26	Ⅶ	Ⅰ類	円筒	貝殻条痕文	ケズリ						橙	にぶい赤褐色	735	
	56	H-25	Ⅶ下	Ⅰ類	円筒	貝殻条痕文	ケズリ						にぶい橙	にぶい橙	1563	
	57	G-21	Ⅶ	Ⅰ類		口唇部　貝殻筋のキザミ　貼り付け突帯　押引条痕文	ヘラミガキ						橙	赤褐色	117 1622 1667 2333 3115 3310	
	58	G-24	Ⅷ	Ⅰ類		貝殻条痕文	ケズリ						明赤褐色	赤褐色	1830	
50	59			Ⅱ類	円筒	二条横位貝殻刺突　クサビ　押引　口縁部刻み	ナデ						橙	明黄褐色	1553 1819 1821 1851 1877 3324 3325 3465	補修孔あり
	60	G-25	Ⅷ	Ⅱ類	円筒	一条の横位の貝殻刺突　口唇部刻み	ナデ						にぶい橙	にぶい黄橙	692	
	61	H-25	Ⅷ	Ⅱ類	円筒	口唇部刻み　押引　一条横位貝殻刺突　クサビ形突起	ナデ						にぶい黄橙		2054	
	62	E-21	Ⅷ	Ⅱ類	深鉢	口唇部刻み　クサビ　一条横位貝殻刺突	ナデ						にぶい褐色	にぶい黄橙	3293	
	63	D-21	Ⅶ,Ⅷ	Ⅱ類	円筒	口唇部刻み　押引　一条横位貝殻刺突　クサビ形突起	ケズリ　ナデ						にぶい褐色	にぶい黄橙	3417 3442	
	64	E-20,21	Ⅶ,Ⅷ	Ⅱ類	円筒	口唇部刻み　クサビ　押引	ケズリ　ナデ						にぶい橙	橙	2517 3019 3222	
	65	H-25	Ⅶ下	Ⅱ類		クサビ　口唇部刻み　一条の横位の貝殻腹縁押引	ナデ						橙	橙	1939	
	66	H-25	Ⅷ,Ⅶ下	Ⅱ類	円筒	口唇部刻み　一条横位貝殻刺突　クサビ形突起	ナデ						にぶい橙	橙	1911 1944	
	67	H-25	Ⅷ	Ⅱ類		クサビ　口唇部刻み	ナデ						橙	にぶい橙	2146	
	68	G-27	Ⅶ下	Ⅱ類	深鉢	貝殻押しつけ　刺突く　クサビ有り	ケズリ後ナデ	○	○				褐色	明褐色	2127	
	69	H-25	Ⅷ	Ⅱ類	円筒	口唇部刻み　クサビ形突起	ナデ						にぶい褐色	にぶい橙	2562	
	70	F-27	Ⅵ上	Ⅱ類	深鉢	貝殻押しつけ　刺突く　クサビ有り	ケズリ後ナデ	○	○				明褐色	褐色	638	
	71	F-28	Ⅶ	Ⅱ類	円筒	貝殻刺突文　クサビ貼付	ケズリ		○				明褐色	にぶい橙	1078	
	72	H-27	Ⅶ	Ⅱ類	円筒	口唇部刻み　クサビ　二条横位貝殻刺突	ケズリ後ナデ						橙	にぶい褐色	868	
	73	G-25	Ⅷ	Ⅱ類	円筒	貝殻刺突文　クサビ貼付	ケズリ		○				にぶい黄褐色	明黄褐色	2505	
	74	H-25	Ⅷ	Ⅱ類	円筒	貝殻刺突文　クサビ貼付	ケズリ		○				にぶい黄橙	にぶい黄橙	2047	
	75	H-27	Ⅶ	Ⅱ類	円筒	貝殻腹縁刺突　押しつけ	ヘラミガキ	○		○	○	火山ガラス	にぶい橙	にぶい橙	1035 3334	
	76	H-26	Ⅶ	Ⅱ類	円筒	口唇部押圧	ヘラミガキ						にぶい橙	にぶい橙	1580	
	77	G-24	Ⅶ下	Ⅱ類	円筒	刺突	ヘラケズリ						にぶい橙	にぶい橙	1871	
	78	G-25	Ⅶ下	Ⅱ類	円筒	刺突	ヘラケズリ						にぶい橙	にぶい橙	1375 1447	
51	79	H-25	Ⅷ	Ⅱ類		クサビ　一条の横位の貝殻腹縁押引							橙	にぶい橙	2051 2053	
	80	H-25	Ⅶ下	Ⅱ類		クサビ　一条の横位の貝殻腹縁押引	ナデ						橙	橙	1943	
	81	G-25	Ⅷ	Ⅱ類	円筒	クサビ　押引	ナデ						にぶい橙	橙	2077	
	82	H-25	Ⅶ下	Ⅱ類	円筒	クサビ	ナデ						にぶい橙	橙	1944	

第６表　縄文時代早期土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	文様・調整		胎土					色調		取上番号	その他
						外面	内面	石英	長石	雲母	砂礫	その他	外面	内面		
51	83	F-27	Ⅶ,Ⅷ	Ⅱ類	円筒	貝殻押引	ヘラミガキ						にぶい橙	にぶい橙	640 641 844 904 1590	
	84	H-25	Ⅶ下,Ⅷ	Ⅱ類		一条の横位の貝殻腹縁押引	ナデ						橙	橙	1934 1963	
	85	H-26	Ⅶ,Ⅶ下	Ⅱ類	円筒	押引　貝殻押つけ	ヘラミガキ	○		○	○	火山ガラス	にぶい橙	にぶい橙	1080 1577	
	86	H-26	Ⅵa	Ⅱ類	深鉢	貝殻押圧文　刺突文	ケズリ後ナデ	○	○				黒褐色	褐色	1402	
	87	H-26	Ⅶ	Ⅱ類	深鉢	貝殻押引文	ケズリ後ナデ	○	○				にぶい黄橙	にぶい赤褐色	853	
	88	G-25	Ⅶ下	Ⅱ類	円筒	刺突	ヘラケズリ						にぶい橙	にぶい橙	1320	
	89	E-21	Ⅷ	Ⅱ類	円筒	押引横方向の施文 底部縦位の沈線	ナデ						にぶい黄橙	にぶい橙	3269	
	90	H-26	Ⅶ	Ⅱ類	深鉢	貝殻押引文	ケズリ後ナデ	○	○				灰黄褐色	明黄褐色	1575	
	91	H-25	Ⅶ下	Ⅱ類	角？	一条の横位の貝殻腹縁押引	ナデ						橙	橙	1945	
	92	G-27	Ⅶ	Ⅱ類	深鉢	貝殻押引文	ケズリ後ナデ	○	○				明褐色	明赤褐色	603	
	93	H-26	Ⅶ	Ⅱ類	円筒	押引横方向の施文 底部縦位の沈線	ナデ						にぶい褐色	橙	854	
	94	11T	Ⅶ	Ⅲ類	深鉢	縄目による押型文	ナデ						暗赤褐色	にぶい赤褐色	一括	
	95	D-24	Ⅷ	Ⅳ類		貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	○					明赤褐色	明赤褐色	2344 3474	
	96	F-25	Ⅶ下	Ⅴ類	円筒	貝殻条痕文							黒褐色	黒褐色	1392	補修孔有り
	97	F-25	Ⅶ,Ⅶ上	Ⅴ類	円筒	貝殻条痕文　工具ケズリ	工具ケズリ								648 1391 1392 1393 1394	
53	98			Ⅵ類	深鉢	撚糸文									1733	
54 55	99			Ⅵ類	深鉢	撚糸文	口唇内部撚糸文　ナデ				○		にぶい黄橙	橙	1732	
56	100			Ⅶ類		口唇クサビ　貝殻押引	ナデ			○			にぶい赤褐色	にぶい褐色	番号なし	口縁波状
	101	11T	Ⅶ	Ⅶ類		沈線　工具刺突	ナデ	○		○		火山ガラス	明赤褐色	明赤褐色	一括	
	102	G-30	Ⅶ上,Ⅷ	Ⅷ類		貝殻腹縁刺突	ケズリ						にぶい黄橙	にぶい橙	1509 1516	
	103	F-21	Ⅵa	Ⅷ類	深鉢	貝殻条痕文　貝殻刺突文	ケズリ　ナデ	○	○				明赤褐色	赤褐色	1156 1219 1227	
	104	F-21	Ⅵa	Ⅷ類	深鉢	貝殻条痕文　貝殻刺突文	ケズリ　ナデ	○	○				黒褐色	赤褐色	1153 1196 1234 1237 1239 1248	
	105	F-21	Ⅵa	Ⅷ類	深鉢	貝殻刺突文　貝殻条痕文	ケズリ　ナデ	○	○				赤褐色	赤褐色	1150 1152 1155 1165 1169 1171 1197 1198 1202 1203 1204 1212 1213 1225 1243 1249 1181 1256 1242	
58	106	D-21	Ⅴ	Ⅸ類	深鉢	条痕　ケズリ	条痕　ケズリ	○	○		○	火山ガラス	橙	灰褐色	3186	
	107	D-?		Ⅹ類		無文､ナデ	ヘラナデ　口縁に刺突						にぶい橙	浅黄色	3496	
	108	H-25	Ⅶ下	早期底部		ナデ	ケズリ後ナデ						明褐色	明赤褐色	1940 1978	
	109	G-25	Ⅶ下	早期底部		ナデ　ケズリ	ナデ　ケズリ						橙	にぶい赤褐色	1351 1386	
	110	D-21	Ⅷ	早期底部		ナデ	ケズリ	○	○				赤褐色	橙	3116	
	111	H-25	Ⅶ下	早期底部		縦位の刻み	ナデ		○			角閃石	にぶい橙	橙	1938	
	112	E-21	Ⅷ	早期底部		ハケ　工具ナデ	ハケ　工具ナデ	○	○			角閃石	明赤褐色	明赤褐色	3244	
	113	D-21	Ⅷ	早期底部		縦位の刻み	ナデ				○		にぶい橙	浅黄	3111	

3　石器

石鏃（114～177）

縄文時代の石鏃は欠損品や未製品を含め66点出土しており，分類すると以下の通りになる。

１類：直線的な基部を持つ石鏃

図の114～119・121～127・158がこれに該当する。114・116は逆刺が鋭く浅い抉りのある小型正三角形で，116は基部が欠損している。115・117・119は逆刺が鋭く直線的な基部を持つ小型三角形で，どれも正三角形である。115は先端部が欠損しており，117・119は先端部が鋭い作りになっている。118は直線的な基部を持つ小型正三角形で，先端部が鋭い作りになっている。121～124・127は逆刺の鋭い直線的な基部を持つ正三角形である。122・127は先端部が欠損しており，121・123は先端部が鋭い作りになっている。124は側辺が内湾的な作りになっている。158は逆刺の鋭い直線的な基部を持つ二等辺三角形である。側辺が外湾的で先端部が欠損している。

２類：浅い凹基式の石鏃

ａ：逆刺が丸いもの

図の130～132・137・142・147・148がこれに該当する。130・142・147は逆刺が丸く浅い抉りのある凹基式の正三角形である。142は厚めの剥片を素材に用い側辺が外湾的な作りになっている。147は基部の一部が欠損している。131・132・137・148は同じ形態の二等辺三角形である。132は基部の一部が欠損している。

ｂ：逆刺が鋭いもの

図 の120・129・133～136・138～141・144～146・149がこれに該当する。120は逆刺が鋭く浅い抉りのある凹基式の小型二等辺三角形である。133・139・149は逆刺

が鋭く浅い抉りのある凹基式の正三角形である。139は側辺が内湾的な作りになっており，基部から側辺の部分が一部欠損している。149は基部の一部に欠損がある。129・134～136・138・140・141・144～146は同じ形態の二等辺三角形である。136は先端部と基部の一部，138・141・144は基部の一部がそれぞれ欠損している。また，146の側辺は外湾的で最大幅が下方の位置にある。

3類：五角形の石鏃

図の150～154がこれに該当する。150・152・153は逆刺が丸く浅い抉りのある凹基式の五角形である。151は逆刺が鋭く直線的な基部を持つ五角形である。154は側辺が内湾的な五角形で先端部が鋭い作りになっており，基部の一部が欠損している。

4類：未製品の石鏃

図の155～157・171がこれに該当する。155～157は側辺が外湾的で先端部に丸みを持つ作りになっており，155は基部の一部に欠損がある。171は厚めの剥片を使用しており，左側面・正面・裏面に自然面が残り凹厚剥離がされていない。

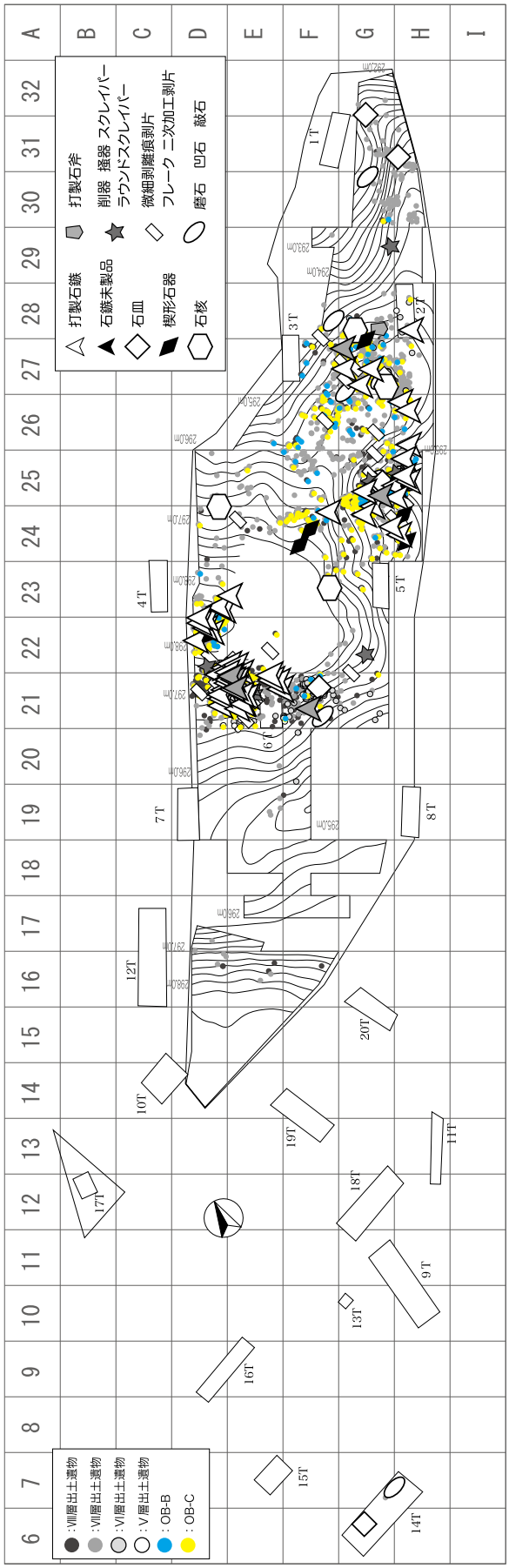
5類：剥片石鏃

図の159・162・163・170・172・176・177がこれに該当する。159は基部に丸みを持つ二等辺三角形である。162は逆刺の鋭い直線的な基部をもつ二等辺三角形である。163は深い抉りのある凹基式の剥片石鏃で先端部から側辺の一部にかけて欠損している。170・176は側辺が外湾的な作りの剥片石鏃で，170は右側面の一部が欠損しており，176は先端部と基部が欠損している。172・177は薄い剥片を使用した石鏃で，172は基部から側辺にかけて一部欠損している。

6類：深い凹基式の石鏃

図の164～169がこれに該当する。164・165・167～169は逆刺が丸く深い抉りのある凹基式の二等辺三角形である。167は先端部が，165・169は基部の一部がそれぞれ欠損している。168は未製品である。166は逆刺が鋭く深い抉りのある二等辺三角形で，基部の一部が欠損している。

図の128・143・160・161・173～175は分類外の石鏃である。128・160は基部に膨らみを持つ三角形で，128は外湾的な側辺を持っている正三角形で，160は二等辺三角形である。143は基部が僅かな波状に抉れた二等辺三角形である。161は片脚が違う基部を持つ正三角形である。173は基部に僅かな膨らみのある石鏃で中間部から先端部にかけて欠損している。174は基部に僅かな膨らみをもつ石鏃である。左側面に自然面が残り右側面には外湾的な側辺をもっている。175は基部が僅かな波状に抉れており，先端部から右側面にかけて欠損している。



第59図　縄文時代早期の石器出土状況図

楔形石器（178～184）

楔形石器は９点出土しており，うち７点を図化した。178は正面・裏面ともに上下からの剥離が確認できた。179は正面・裏面の下部に剥離面を確認できた。180は正面上部と下部，裏面上部に剥離面を確認できた。181は正面上部と裏面下部に剥離面を確認できた。182は上部と右側面部，裏面下部に僅かな剥離面を確認できた。183は正面・裏面の上部に剥離面を確認できた。184は左側面の正面・裏面に剥離面を確認できた。尚，181・183・184は正面形は長楕円で縦断面形状はレンズ状を形成しており，180・182は上下の刃部が平らに加工されている。

スクレイパー（185～201）

スクレイパーは17点出土しており，図の185～194は剥片の側縁に連続した剥離を施し刃部としたもので，いわゆるサイドスクレイパー（削器）である。185は安山岩製で両面の側縁に連続した刃部加工を施している。186は右側縁の両面に刃部加工を施されているが，刃が潰れている。187は厚めの剥片を素材とし，上部と右側縁の両面に刃部加工を施している。188は薄い剥片を素材とし，正面の両側縁に刃部加工を施している。189は正面の上部・左側縁・下部に刃部加工を施している。190は小型の剥片を素材とし，正面の両側縁と裏面の下部に刃部加工を施している。191は両面の上下に刃部加工を施しており，両側辺が欠損している。192は正面の右側縁と下部に刃部加工を施している。193は両面の下部に刃部加工が施されており，上部から右側面にかけて欠損している。194は小型の剥片を素材としており左側辺に刃部として使用した痕跡がある。図の195～197は略円形の形状で周縁の一部もしくは全周に剥離を施し刃部としたもので，いわゆるラウンドスクレイパー（円形掻器）である。195は側縁の全周に急角度の刃部加工が施されている。196・197は両側辺の全周に刃部加工が施されており，196の左側辺部は急角度の二次加工が施されている。図の198～201は剥片の端部に急角度の剥離を施し刃部としたもので，いわゆるエンドスクレイパー（掻器）である。198は両側縁に刃部加工が施されている。199は両側辺に加工が施されており，左側縁に急角度の刃部加工が施されている。200は左側辺の両面に急角度の刃部加工が施されており，右側辺が欠損している。201は正面の上部と裏面の下部に急角度の刃部加工を施している。また，裏面の左側辺に微細な使用痕を確認している。

二次加工剥片（202～206）

図の202～206は一部に二次加工が認められる剥片である。202は頁岩製で正面上部と両面下部，裏面右側辺に微細な二次加工が施されている。203は左側辺の両面に二次加工を施している。204は正面上部と右側辺に微細な二次加工を施している。また形状から石錐として使用された可能性も考慮できる。205は両面の全周に二次加工を施している。206は左側辺の両面に粗い二次加工が施されており右側辺が欠損している。

微細剥離痕のある剥片（207～213）

図の207～213は微細剥離痕が確認された剥片である。207は正面の上部と裏面の右側面に微細剥離がある。208はチャート製の厚めの剥片に微細剥離を施したもので，両面の上下に見られる。209は両面の上部と裏面の右側辺に微細剥離がある。210は正面の上下，両側辺に微細剥離がある。211は正面の上下，両側辺と裏面の下部に微細剥離がある。

石核（214～218）

図の214～218は石核である。214・215は剥離を作り出した打面から剥離をおこなう石核である。図の216～218は素材剥片を用い単一方向から剥離をおこなう石核である。

打製石斧（219）

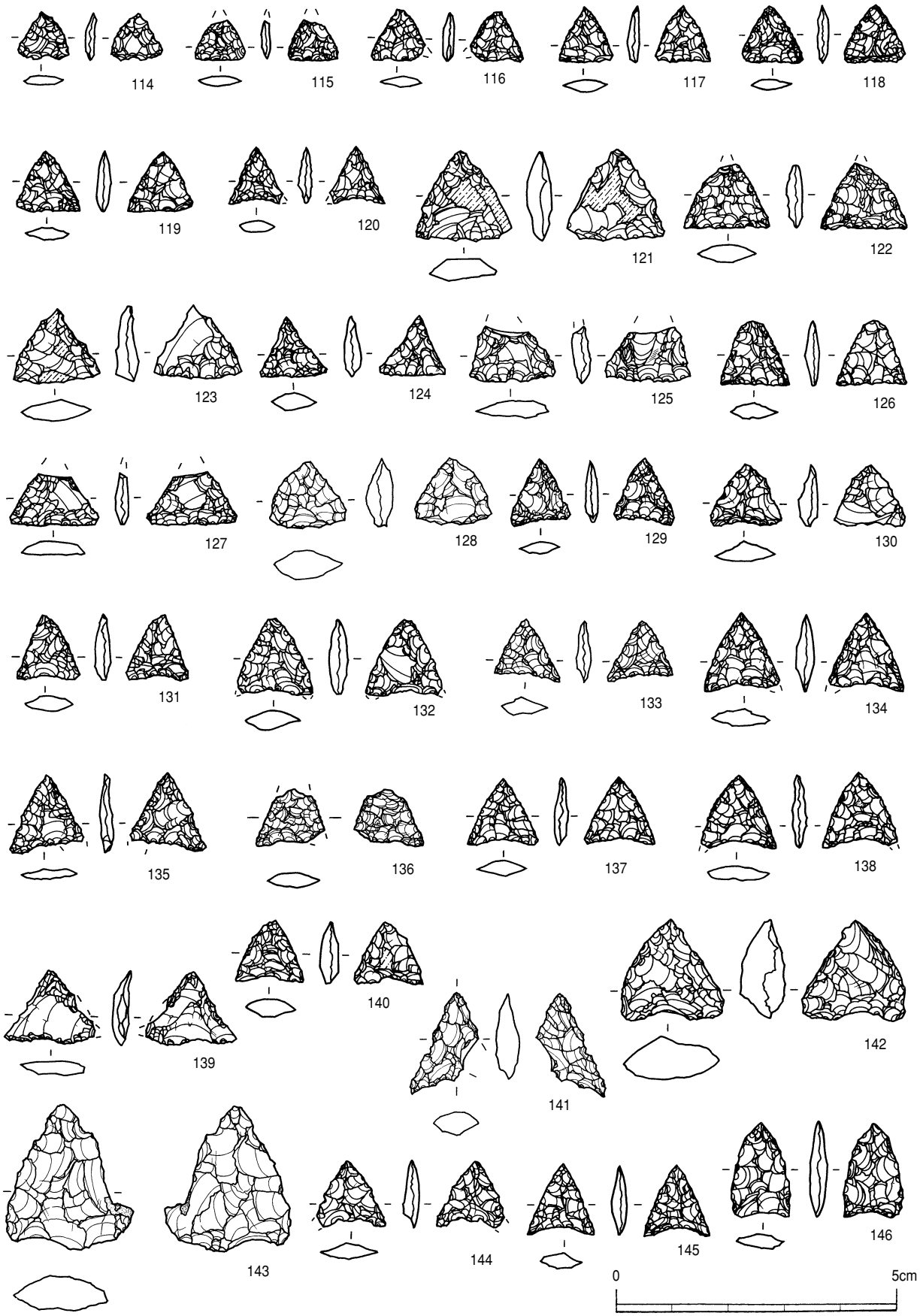
図の219は打製石斧である。材質は頁岩が使用されており，整形剥離の段階の未製品である。

磨石・敲石・ハンマー・凹石（220～227）

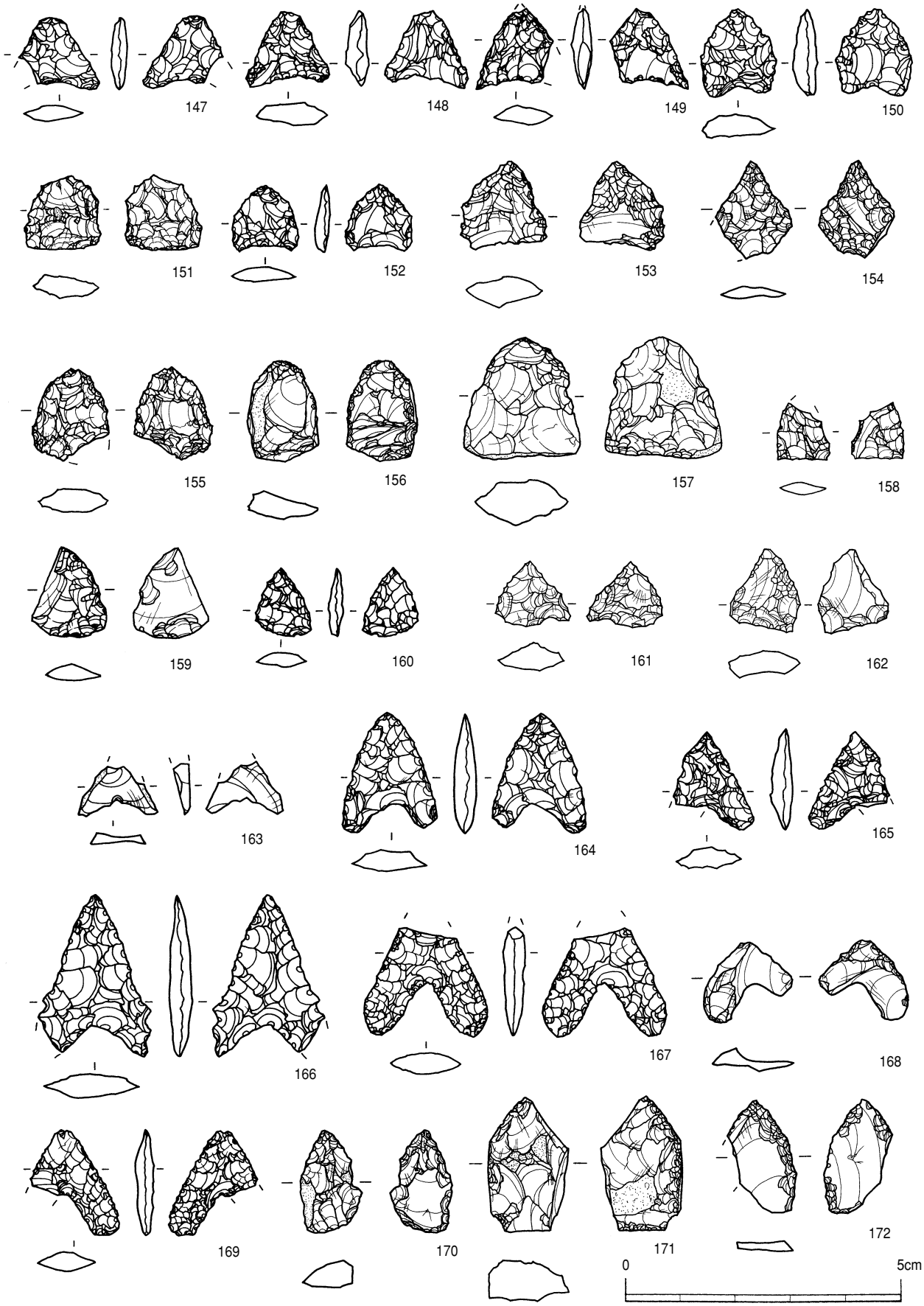
図の220・226・227は磨石・敲石である。220は材質に砂岩を使用しており，正面に磨面，下面に敲打痕を確認している。226・227は安山岩製で227は右側面と下面に敲打痕，4面に磨面を確認しており，226は正面と裏面に磨面，左右側面と下面に敲打痕を確認している。221はハンマーである。砂岩製で上下に敲打痕を確認している。222は凹石である。安山岩を使用しており正面と右側面に使用の痕跡を確認している。223は磨石・凹石・敲石である。砂岩製で正面に磨面と凹石としての使用痕，裏面に磨面，左側面に複数の敲打痕を確認している。224・225は敲石である。224は砂岩製で上下と右側面に敲打痕を確認している。225は安山岩製で下面に敲打痕を確認している。

石皿（228～232）

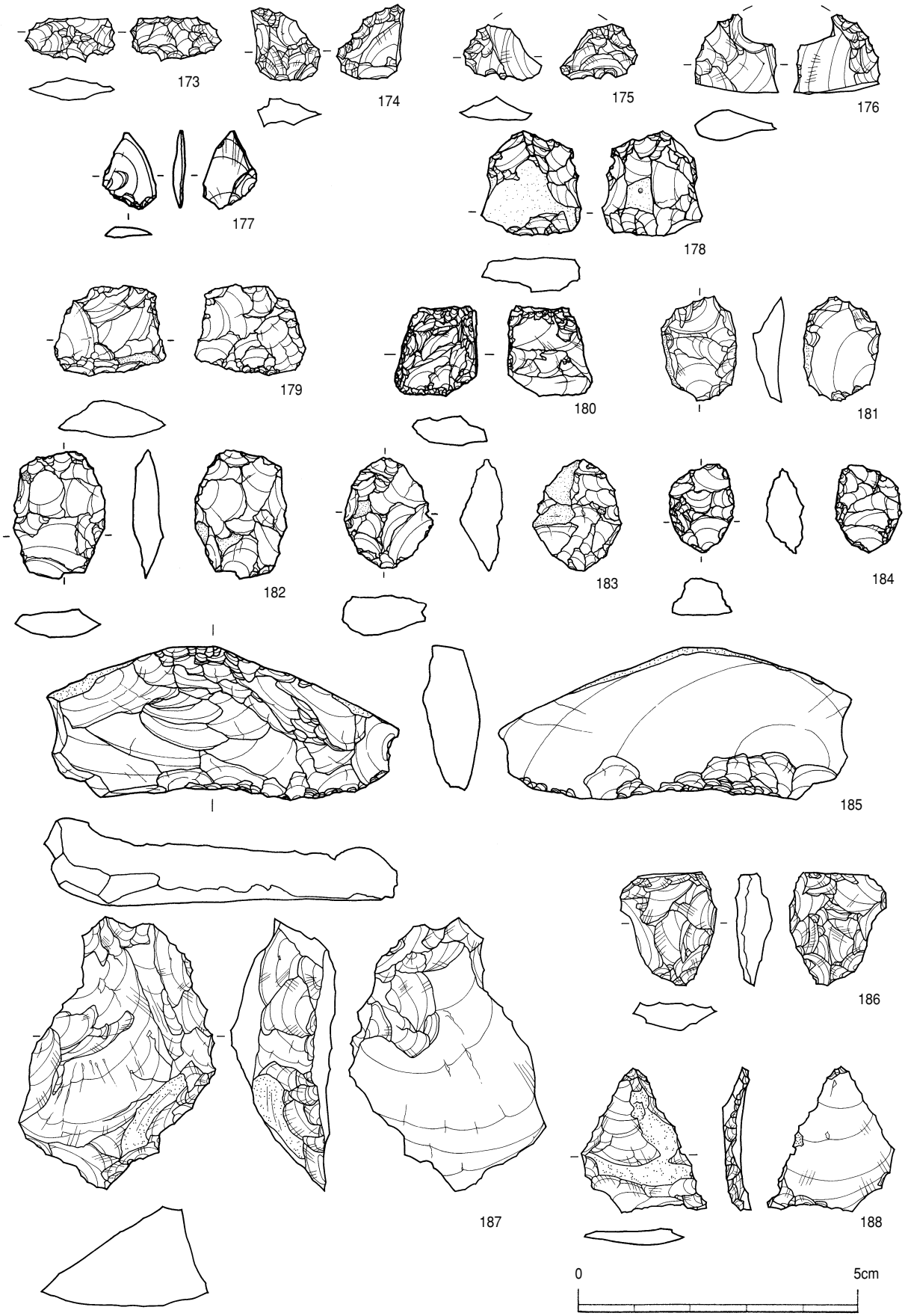
図の228～232は石皿である。228・229・231・232は材質に安山岩が使用されており，228・229は正面と裏面に敲打痕を確認している。231は正面に磨面，裏面に磨面と敲打痕を確認しており，232は正面と裏面に磨面を確認している。230は砂岩製で，正面と裏面に磨面を確認している。また両面とも上の部分が一番使用されており，下から上にかけて窪む形になっている。



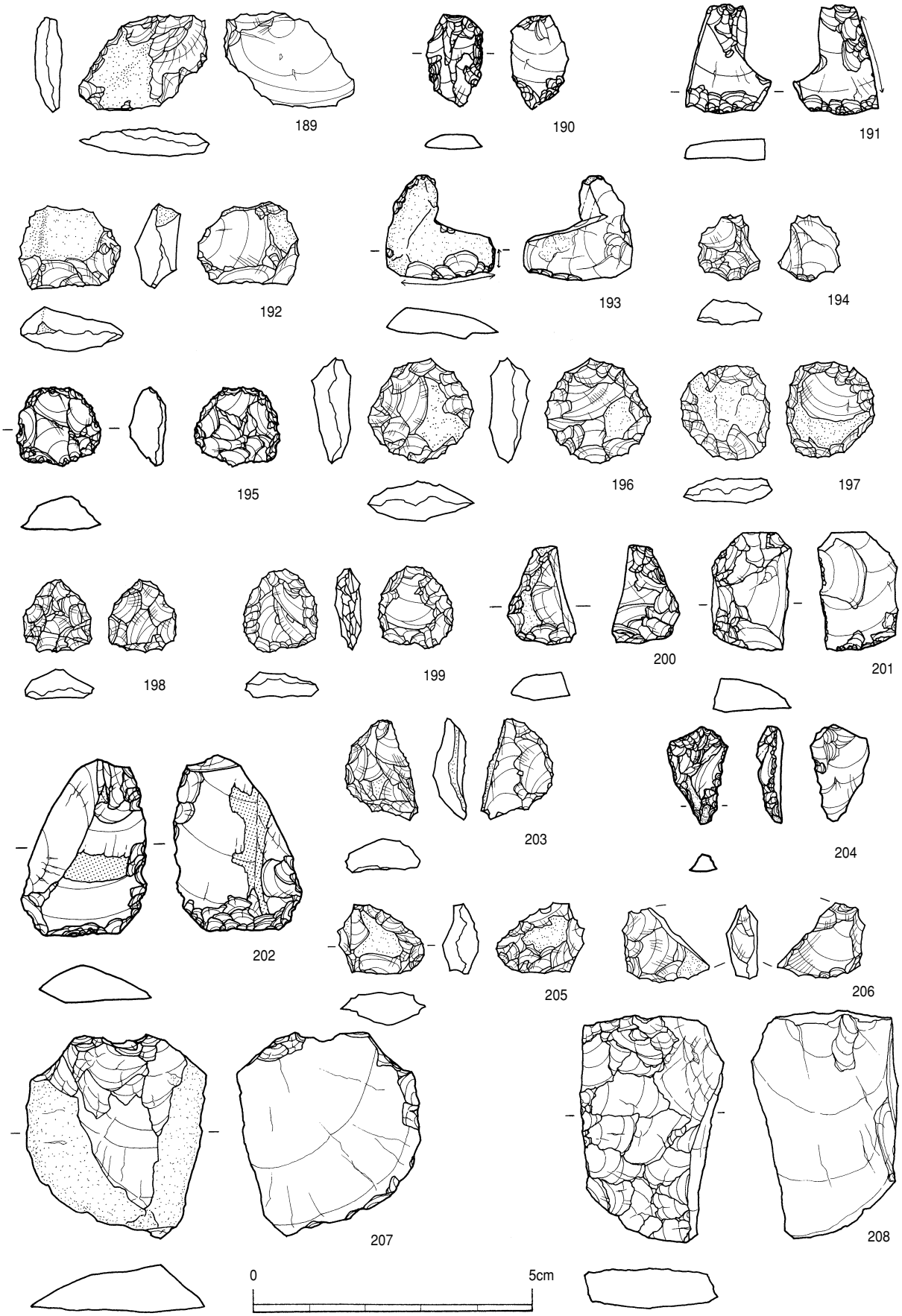
第60図　縄文時代早期の石器(1)



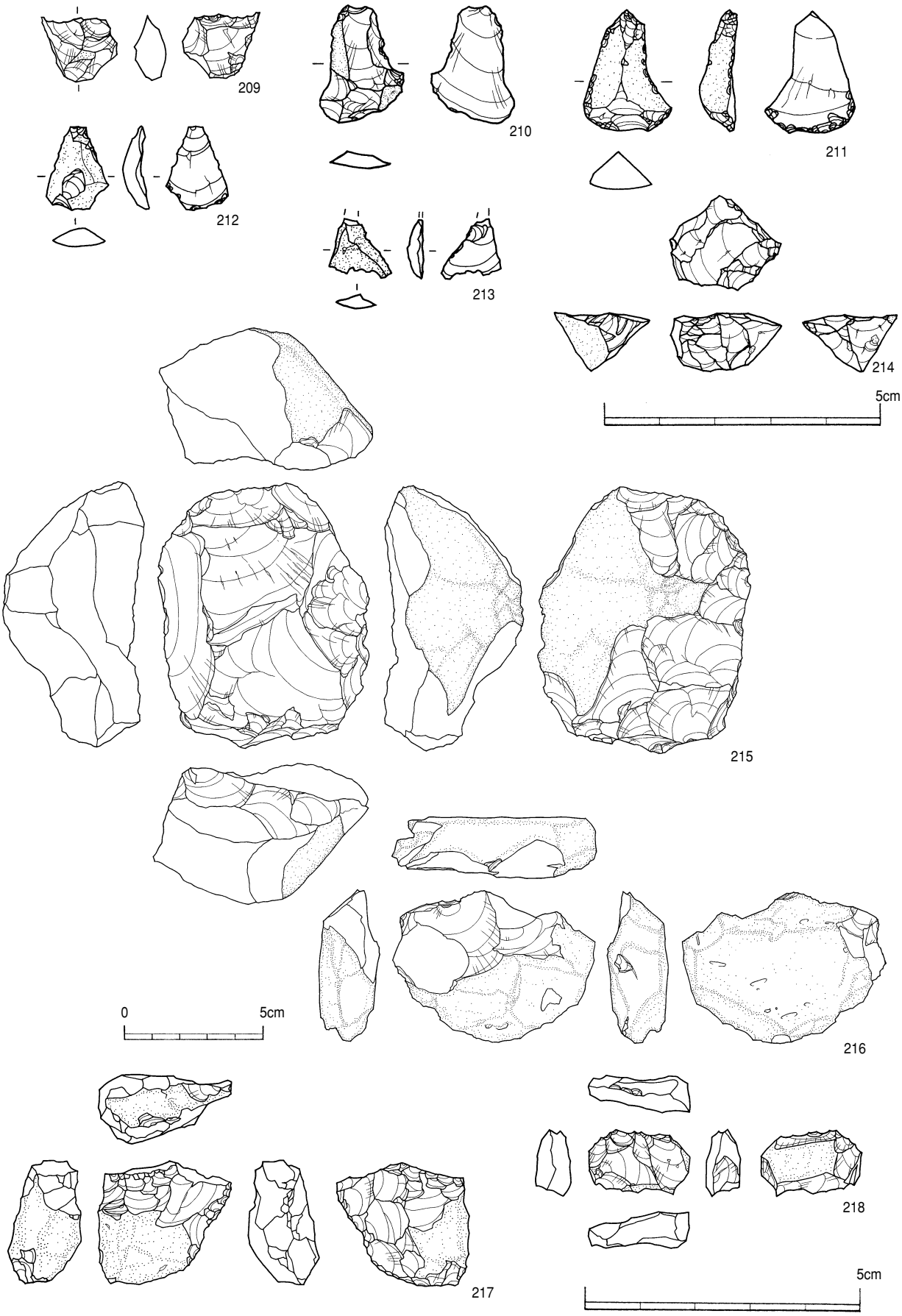
第61図　縄文時代早期の石器(2)



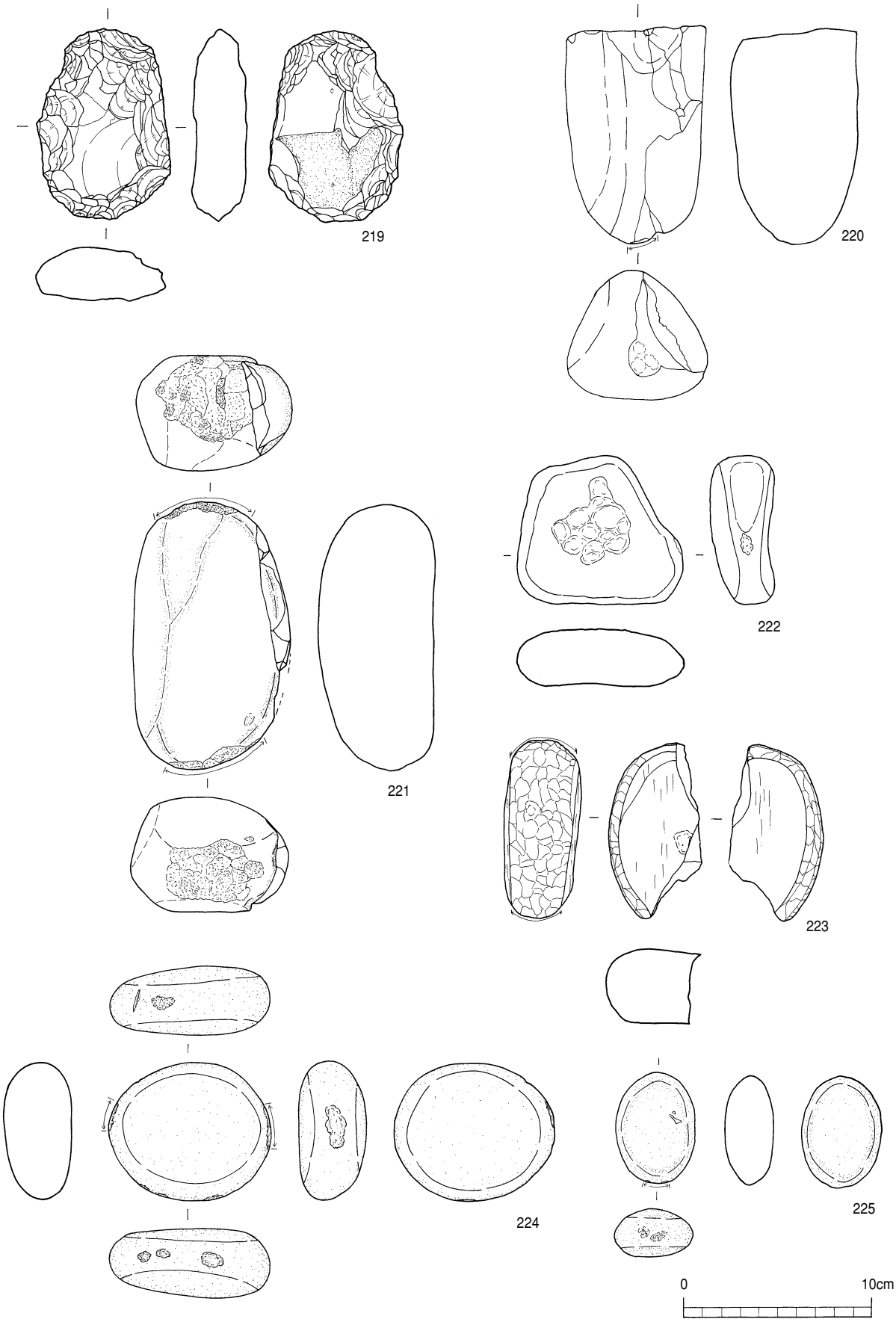
第62図　縄文時代早期の石器(3)



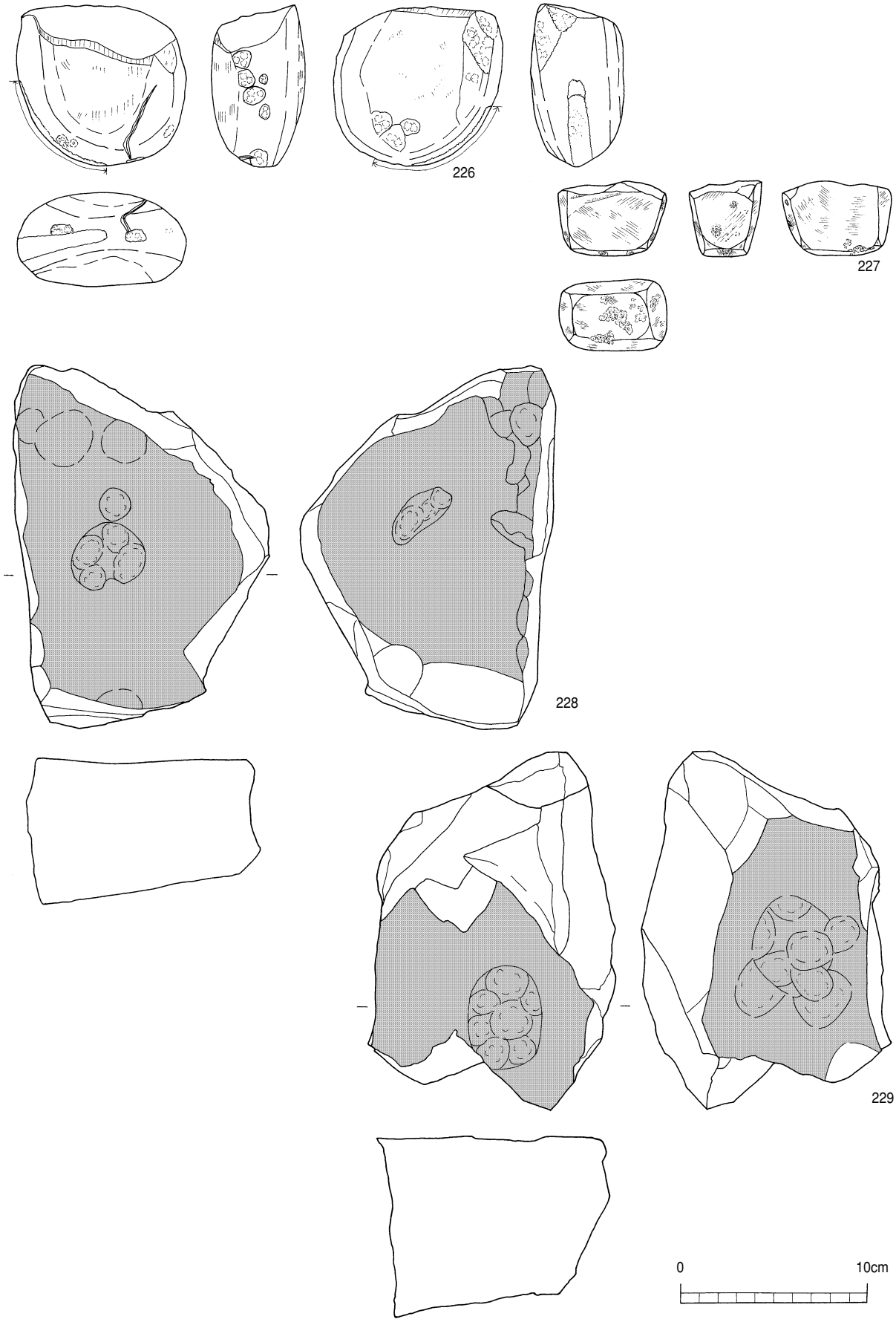
第63図　縄文時代早期の石器(4)



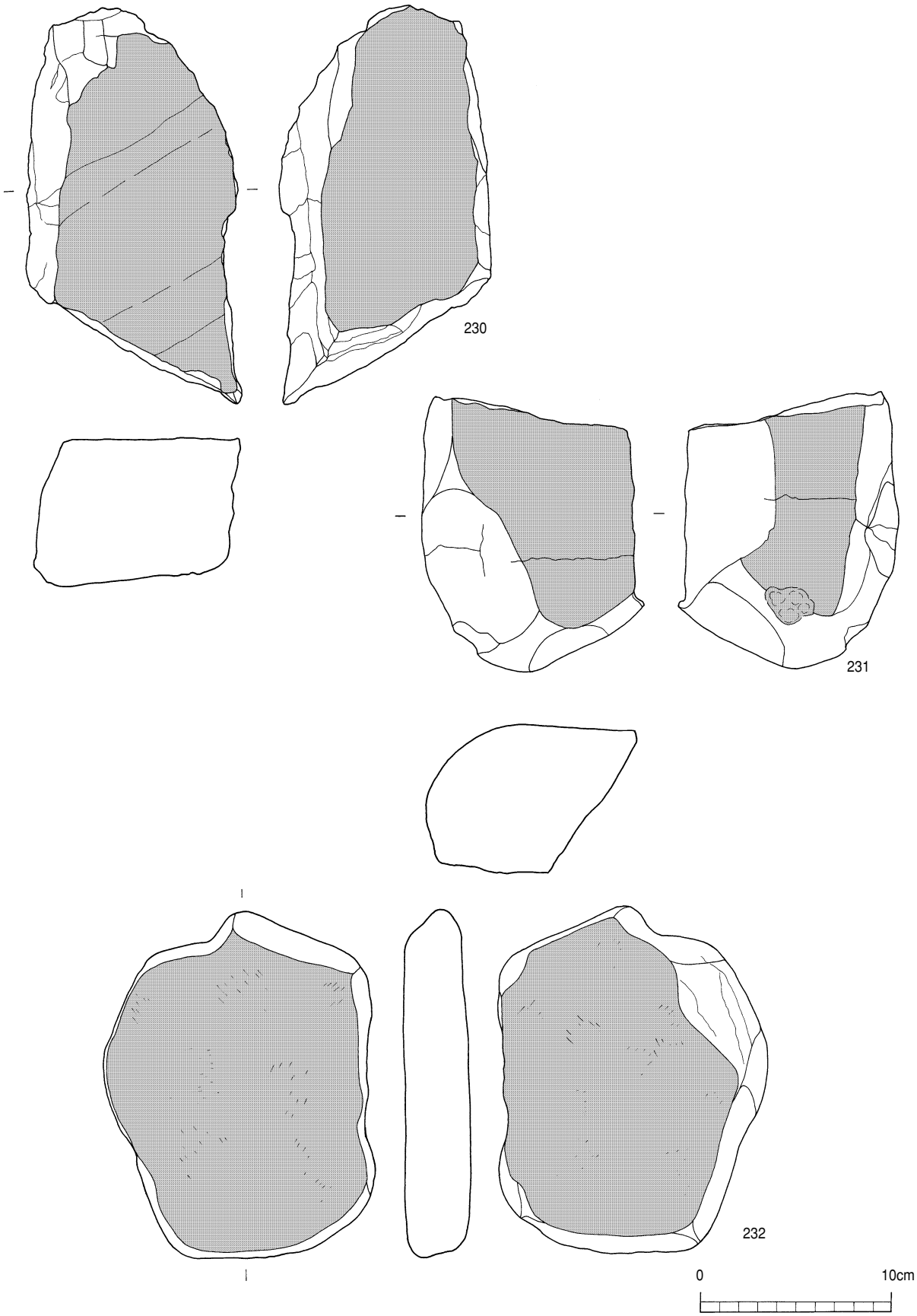
第64図　縄文時代早期の石器(5)



第65図　縄文時代早期の石器(6)



第66図　縄文時代早期の石器(7)



第67図　縄文時代早期の石器(8)

第７表　縄文時代早期石器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土区	層位	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
60	114	2315	D－23	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	0.80	0.90	0.20	0.09	
	115	2209	D－22	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	0.70	0.90	0.20	0.10	
	116	3231	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	0.90	0.95	0.20	0.13	
	117	3228	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.00	0.95	0.20	0.12	
	118	2227	D－22	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	1.00	1.10	0.20	0.17	
	119	3448	D－21	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.10	1.10	0.25	0.22	
	120	80	6 T	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.10	1.10	0.20	0.12	
	121	1346	G－25	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.60	1.80	0.40	0.79	
	122	1887	H－24	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.20	1.50	0.30	0.36	
	123	3225	D－22	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.30	1.50	0.40	0.61	
	124	2409	H－25	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.10	1.15	0.30	0.25	
	125	73	6 T	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.00	1.55	0.30	0.46	
	126	3402	D－21	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.20	1.20	0.25	0.23	
	127	702	H－25	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	0.90	1.60	0.20	0.27	
	128	990	G－27	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.20	1.30	0.50	0.65	
	129	2269	D－22	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	1.20	1.10	0.20	0.17	
	130	3126	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.10	1.25	0.35	0.30	
	131	3157	E－22	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.20	1.10	0.25	0.22	
	132	1891	G－24	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.35	1.40	0.30	0.44	
	133	92	6 T	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.10	1.10	0.30	0.17	
	134	3363	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.40	1.30	0.30	0.41	
	135	2403	H－25	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	1.30	1.30	0.20	0.25	
	136	3420	E－24	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.00	1.20	0.29	0.23	
	137	3236	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.20	1.20	0.25	0.22	
	138	3083	D－22	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.30	1.30	0.25	0.27	
	139	2303	D－23	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	1.35	1.60	0.30	0.42	
	140	3235	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.10	1.20	0.35	0.30	
	141	2274	D－22	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	1.80	1.20	0.40	0.42	
	142	1565	H－26	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	1.75	1.90	0.70	2.07	
	143	1574	H－26	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	2.50	2.25	0.60	2.45	
	144	3005	D－22	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.15	1.20	0.30	0.27	
	145	3256	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.30	1.15	0.30	0.23	
	146	3328	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.70	1.05	0.25	0.44	
61	147	56	6 T	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.30	1.40	0.30	0.41	
	148	977	G－27	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.40	1.50	0.40	0.54	
	149	69	6 T	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.50	1.25	0.30	0.48	
	150	1847	G－24	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.60	1.40	0.50	0.75	
	151	2015	H－25	Ⅶ？Ⅶ下？	打製石鏃	黒曜石C	1.30	1.35	0.40	0.82	
	152	3216	E－22	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.15	1.15	0.25	0.32	
	153	1828	F－24	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.60	1.55	0.55	0.89	
	154	3148	E－22	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.70	1.35	0.28	0.42	
	155	3175	E－22	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.65	1.40	0.40	0.89	
	156	3132	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.80	1.30	0.55	1.34	
	157	632	G－27	Ⅶ上	打製石鏃	黒曜石C	2.20	2.10	0.80	3.88	
	158	3400	D－21		打製石鏃	黒曜石C	1.00	0.95	0.20	0.22	
	159	3391	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.60	1.35	0.30	0.52	
	160	91	6 T	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.20	1.05	0.20	0.23	
	161	55	6 T	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.20	1.40	0.50	0.59	
	162	2330	E－23	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	1.50	1.30	0.50	0.73	
	163	2532	G－27	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	0.95	1.40	0.30	0.16	
	164	5 T	5 T	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	2.20	1.70	0.40	1.18	
	165	3386	D－21	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.80	1.50	0.40	0.65	
	166	1608	H－28	Ⅵa	打製石鏃	黒曜石C	2.90	2.00	0.45	1.46	
	167	851	H－26	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.90	2.25	0.40	1.21	
	168	1691	F－21	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.40	1.60	0.42	0.43	
	169	2219	D－22	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	1.90	1.60	0.35	0.61	
	170	3090	D－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.80	1.10	0.50	0.74	
	171	1322	G－25	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	2.40	1.40	0.70	2.57	
	172	3229	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	2.00	1.20	0.20	0.45	

第８表　縄文時代早期石器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土区	層位	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
62	173	2001	G－25	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石C	0.80	1.60	0.40	0.41	
	174	79	6 T	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.30	1.20	0.50	0.70	
	175	1840	G－24	Ⅶ	打製石鏃	黒曜石C	1.00	1.40	0.40	0.41	
	176	3124	D－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.40	1.50	0.60	0.98	
	177	3284	E－21	Ⅷ	打製石鏃	黒曜石C	1.40	0.95	0.25	0.19	
	178	2148	H－25	Ⅷ	楔形石器	黒曜石C	1.90	1.80	0.60	2.11	
	179	2024	F－24	Ⅶ	楔形石器	黒曜石C	1.60	1.95	0.65	1.77	
	180	1881	H－24	Ⅷ	楔形石器	黒曜石C	1.60	1.50	0.50	1.63	
	181	2217	D－22	Ⅶ下	楔形石器	黒曜石C	1.90	1.40	0.60	1.36	
	182	2022	E－24	Ⅶ	楔形石器	黒曜石A	2.30	1.60	0.55	1.92	
	183	1047	G－27	Ⅶ下	楔形石器	黒曜石C	2.00	1.60	0.75	1.75	
	184	3204	D－22	Ⅷ	楔形石器	黒曜石C	1.55	1.15	0.70	1.06	
	185	3497	D－16	Ⅷ遺構内46	削器	安山岩	2.70	6.30	1.00	19.41	
	186	1559	G－25	Ⅷ	削器	黒曜石C	2.00	1.70	0.50	1.88	
	187	733	G－22	Ⅶ	削器	黒曜石C	4.80	3.50	1.80	21.18	
	188	一括	6 T	Ⅵ	削器	黒曜石C	2.50	2.20	0.30	1.58	
63	189	3380	E－21	Ⅶ	削器	黒曜石C	1.70	2.30	0.50	1.65	
	190	1304	G－25	Ⅶ	削器	黒曜石C	1.70	1.00	0.30	0.40	
	191	1991	H－25	Ⅷ	削器	黒曜石C	1.90	1.50	0.40	1.22	
	192	3071	D－22	Ⅷ	削器	黒曜石C	1.50	1.80	0.80	1.91	
	193	1760	H－25	Ⅶ	削器	黒曜石C	1.80	1.90	0.60	1.45	
	194	3207	D－22	Ⅷ	削器	黒曜石C	1.20	1.10	0.50	0.47	
	195	3196	D－21	Ⅷ	円形掻器	黒曜石C	1.40	1.50	0.65	1.21	
	196	2166	H－25	Ⅶ下	円形掻器	黒曜石C	1.90	1.90	0.70	1.98	
	197	1985	H－25	Ⅷ	円形掻器	黒曜石C	1.70	1.60	0.50	1.34	
	198	3224	E－22	Ⅶ	掻器	黒曜石C	1.30	1.20	0.50	0.86	
	199	1972	H－25	Ⅶ下	掻器	黒曜石C	1.40	1.40	0.40	0.82	
	200	2055	H－25	Ⅷ	掻器	黒曜石C	1.75	1.20	0.50	1.08	
	201	3475	E－21	Ⅷ	掻器	黒曜石C	2.10	1.35	0.60	2.03	
	202	688	G－25	Ⅷ	二次加工剥片	頁岩	3.10	2.25	0.78	5.05	
	203	62	6 T	Ⅶ	二次加工剥片	黒曜石C	1.80	1.30	0.60	1.07	
	204	3486	E－21	Ⅷ	二次加工剥片	黒曜石C	1.70	1.05	P95	0.57	
	205	970	G－27	Ⅶ	二次加工剥片	黒曜石C	1.30	1.60	0.60	0.97	
	206	3096	D－21	Ⅶ	二次加工剥片	黒曜石C	1.30	1.60	0.60	1.08	
	207	一括	8 T	Ⅶ	微細剥離痕	黒曜石B	3.60	3.20	0.80	10.42	
	208	1172	G－21	Ⅵa	微細剥離痕	チャート	4.00	2.60	0.70	10.09	
64	209	3192	D－21	Ⅷ	微細剥離痕	黒曜石C	1.20	1.40	0.60	0.81	
	210	1558	G－25	Ⅷ	微細剥離痕	黒曜石C	2.10	1.50	0.45	0.79	
	211	3172	E－21	Ⅶ	微細剥離痕	黒曜石C	2.20	1.60	0.70	1.39	
	212	3210	E－22	Ⅷ	微細剥離痕	黒曜石C	1.55	1.10	0.45	0.38	
	213	3233	E－21	Ⅷ	微細剥離痕	黒曜石C	1.10	1.10	0.35	0.18	
	214	2346	D－24	Ⅷ	石核	黒曜石C	1.70	2.00	1.00	2.69	
	215	724	F－23	Ⅶ	石核	黒曜石B	7.60	9.60	5.00	319.11	
	216	898	H－27	Ⅶ	石核	黒曜石C	5.40	7.30	2.20	85.31	
	217	1061	G－28	Ⅶ	石核	黒曜石C	2.20	2.40	1.30	6.06	
	218	97	6 T	Ⅷ	石核	黒曜石C	1.20	1.80	0.60	1.30	
65	219	1043	G－28	Ⅶ下	打製石斧	頁岩	10.20	7.00	2.80	270.00	
	220	1376	G－25	Ⅶ下	磨石・敲石	砂岩	11.60	7.20	175.00	780.00	
	221	143	G－ 6	Ⅶ	ハンマー	砂岩	14.30	8.30	6.10	980.00	
	222	903	G－27	Ⅶ	凹石	安山岩	7.80	8.80	3.00	355.00	
	223	937	G－27	Ⅶ	磨石・凹石・敲石	砂岩	9.50	4.70	4.00	260.00	
	224	945	F－27	Ⅶ	敲石	砂岩	7.40	8.55	3.70	310.00	
	225	3013	D－22	Ⅵ	敲石	安山岩	5.90	4.20	2.60	110.00	
66	226	2595	F－28	Ⅷ	磨石・敲石	安山岩	8.60	9.00	4.90	560.00	
	227	1626	F－21	Ⅷ	磨石・敲石	安山岩	4.00	5.00	3.90	110.00	
	228	1475	G－33	Ⅷ	石皿	安山岩	13.40	19.20	7.90	2980.00	
	229	1557	G－25	Ⅷ	石皿	安山岩	12.60	19.00	9.50	3450.00	
67	230	142	G－ 6	Ⅶ	石皿	砂岩	20.80	11.00	7.30	2170.00	
	231	1459	H－31	Ⅶ	石皿	安山岩	14.40	11.10	7.70	1760.00	
	232	1646	G－30	Ⅶ上	石皿	安山岩	18.10	13.80	3.60	1650.00	

第３項　縄文時代中期

出土分布は第68図で示したように，台地上にまとまって出土した。

遺構の分布は第68図で示したように，落とし穴状遺構と考えられる土坑がＤ～Ｇ－20区に４基，Ｆ－25区に１基の計５基検出した。いずれも逆茂木痕と思われるピットが検出されたため，落とし穴状遺構として取り扱うことにする。落とし穴状遺構３基は第68図で示したように同一の等高線上に並んで配置されたかのように検出した。検出面は地形的には平坦である。

１　遺構

落とし穴状遺構１号（第69図）

Ｆ－25区，Ⅳｂ層上面で検出された。平面の形状は隅丸長方形であり，一部削平されている。長軸が推定で206㎝，短軸が推定で103㎝である。底面は長軸が132㎝，短軸が64㎝である。深さは検出面から103㎝である。底面には逆茂木痕が４本検出された。それぞれは径10㎝と深さ44㎝，径12㎝と深さ33㎝，径８㎝と深さ34㎝，径７㎝と深さ32㎝である。埋土は，底部はＰ－11の二次堆積土とアカホヤ火山灰の二次堆積土の混土，最上部は御池火山灰の二次堆積土である。　（SD１）

落とし穴状遺構２号（第70図）

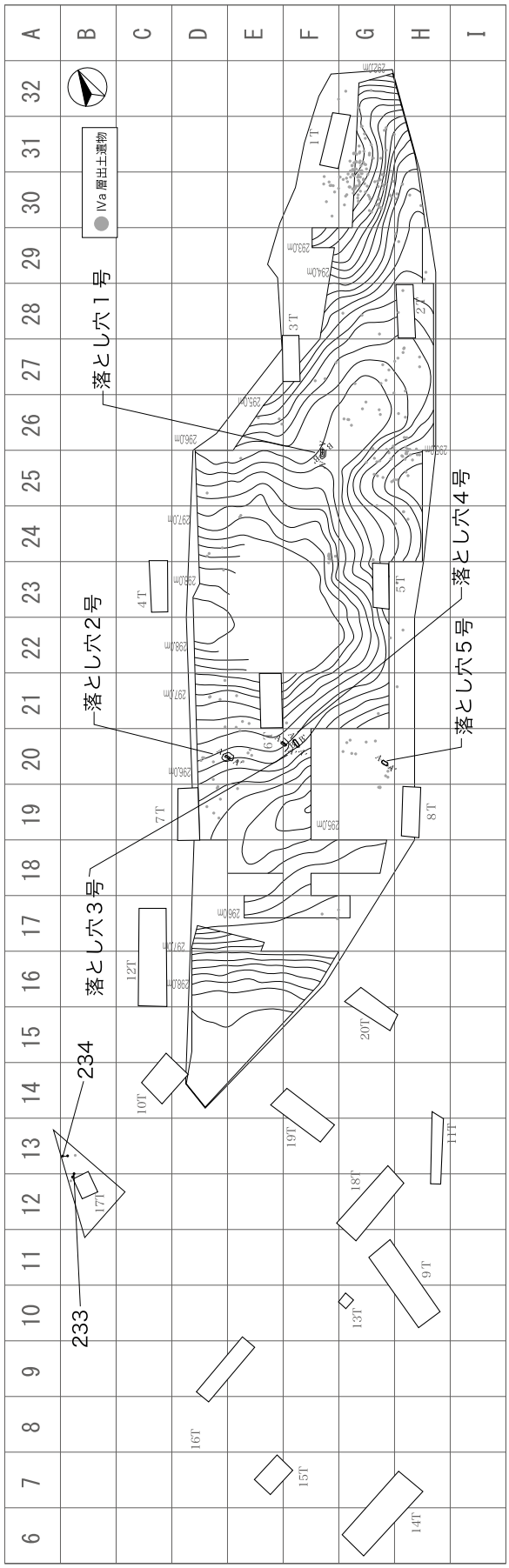
Ｄ－20区，Ｖａ層上面で検出された。平面の形状は円形であり，長軸が190㎝，短軸が173㎝である。底面は長軸が108㎝，短軸が37㎝である。深さは検出面から126㎝である。底面には逆茂木痕が３本検出された。それぞれは径５㎝と深さ35㎝，径５㎝と深さ38㎝，径８㎝と深さ39㎝である。埋土は，底部はⅦ・Ⅷ層土にＰ－11が混ざり，最上部は御池火山灰土である。　（SD６）

落とし穴状遺構３号（第71図）

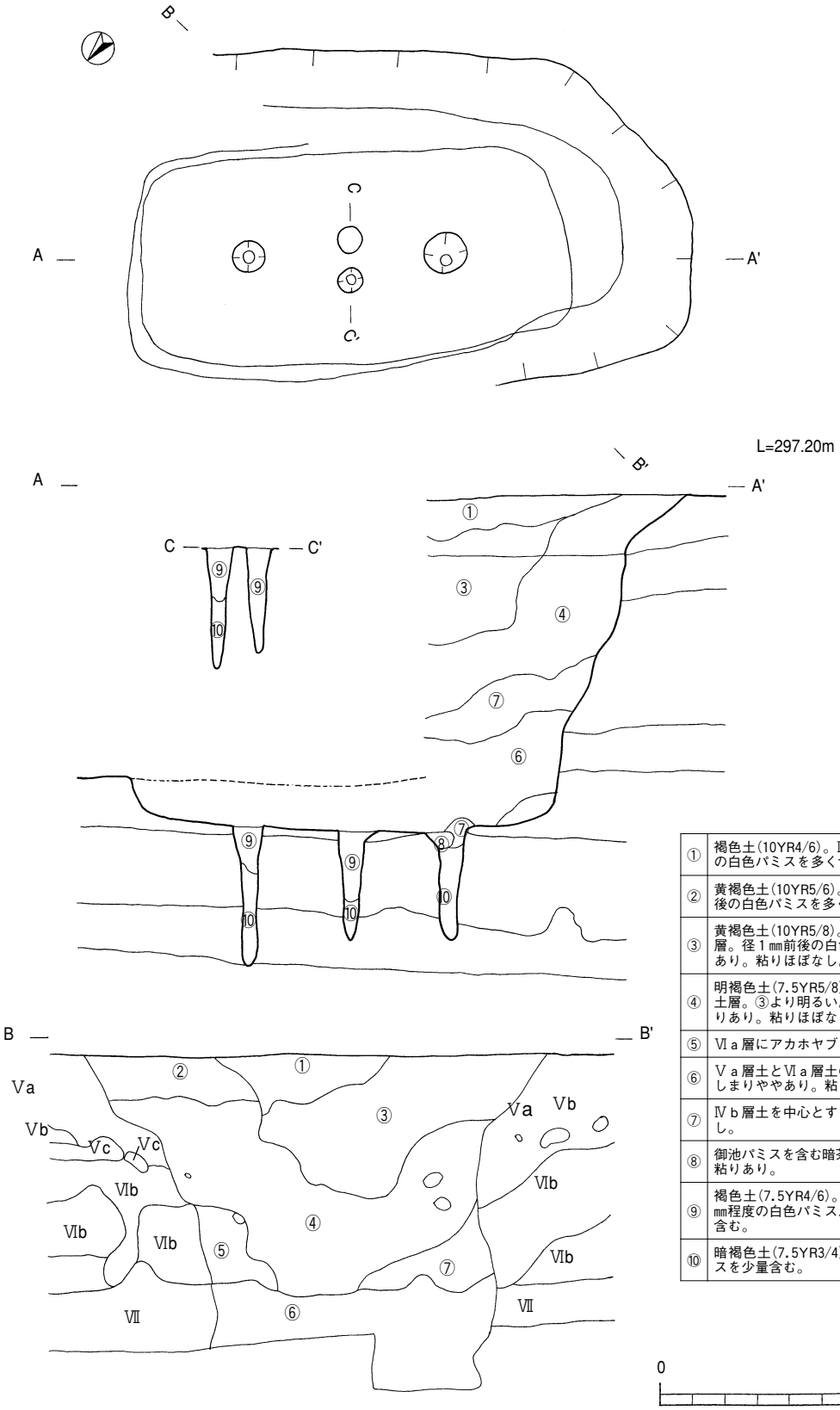
Ｆ－20区，Ⅳｂ層上面で検出された。平面の形状は円形であり，一部削平されている。長軸が205㎝，短軸が163㎝である。底面は長軸が101㎝，短軸が48㎝である。深さは検出面から119㎝である。底面には逆茂木痕が４本検出された。それぞれは径８㎝と深さ25㎝，径４㎝と深さ33㎝，径14㎝と深さ38㎝，径４㎝と深さ47㎝である。底面は平坦である。埋土は，底部はⅦ・Ⅷ層土にアカホヤ火山灰の二次堆積土が混ざり，上部はほぼ御池火山灰土である。　（SD３）

落とし穴状遺構４号（第72図）

Ｆ－20区，Ⅶ層上面で検出されたが，制作面はさらに上の可能性がある。平面の形状は長方形であり，長軸が158㎝，短軸が54㎝である。底面は長軸が131㎝，短軸が39㎝である。深さは検出面から58㎝である。底面には逆茂木痕はみられなかった。埋土は，底部はⅦ・Ⅷ層土に，わずかに御池火山灰が混ざり，上部はほぼ御池火山灰土である。　（SD２）

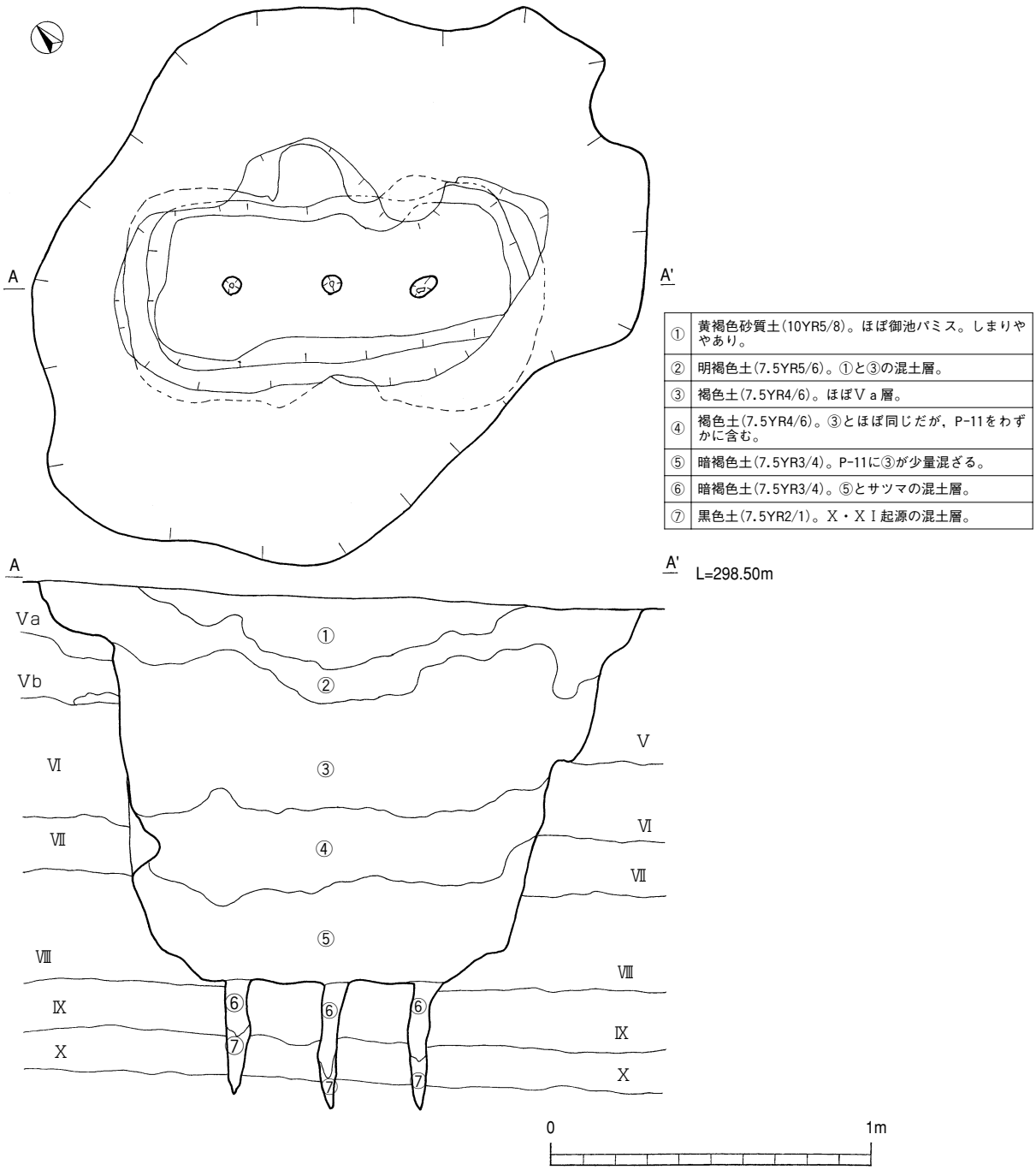


第68図　縄文時代中期の遺構配置・遺物出土状況図



①	褐色土(10YR4/6)。Ⅳａ層土が中心。径１㎜前後の白色パミスを多く含む。
②	黄褐色土(10YR5/6)。Ⅴａ層土が中心。径１㎜前後の白色パミスを多く含む。砂状硬質。粘りなし。
③	黄褐色土(10YR5/8)。Ⅳｂ層土とⅤａ層土の混土層。径１㎜前後の白色パミスを多く含む。しまりあり。粘りほぼなし。
④	明褐色土(7.5YR5/8)。Ⅳｂ層土とⅤａ層土の混土層。③より明るい。Ⅴｃ層土を少量含む。しまりあり。粘りほぼなし。
⑤	Ⅵａ層にアカホヤブロックが混ざる。
⑥	Ⅴａ層土とⅥａ層土の混土層。Ⅴｃ層土を含む。しまりややあり。粘りなし。
⑦	Ⅳｂ層土を中心とする混土層。砂状硬質。粘りなし。
⑧	御池パミスを含む暗茶褐色土層。しまりややあり。粘りあり。
⑨	褐色土(7.5YR4/6)。⑦とⅧ層土の混土層。径１㎜程度の白色パミス，径２㎜前後の黄色パミスを含む。
⑩	暗褐色土(7.5YR3/4)。径３㎜前後のサツマパミスを少量含む。

第69図　縄文時代中期の落とし穴状遺構１号



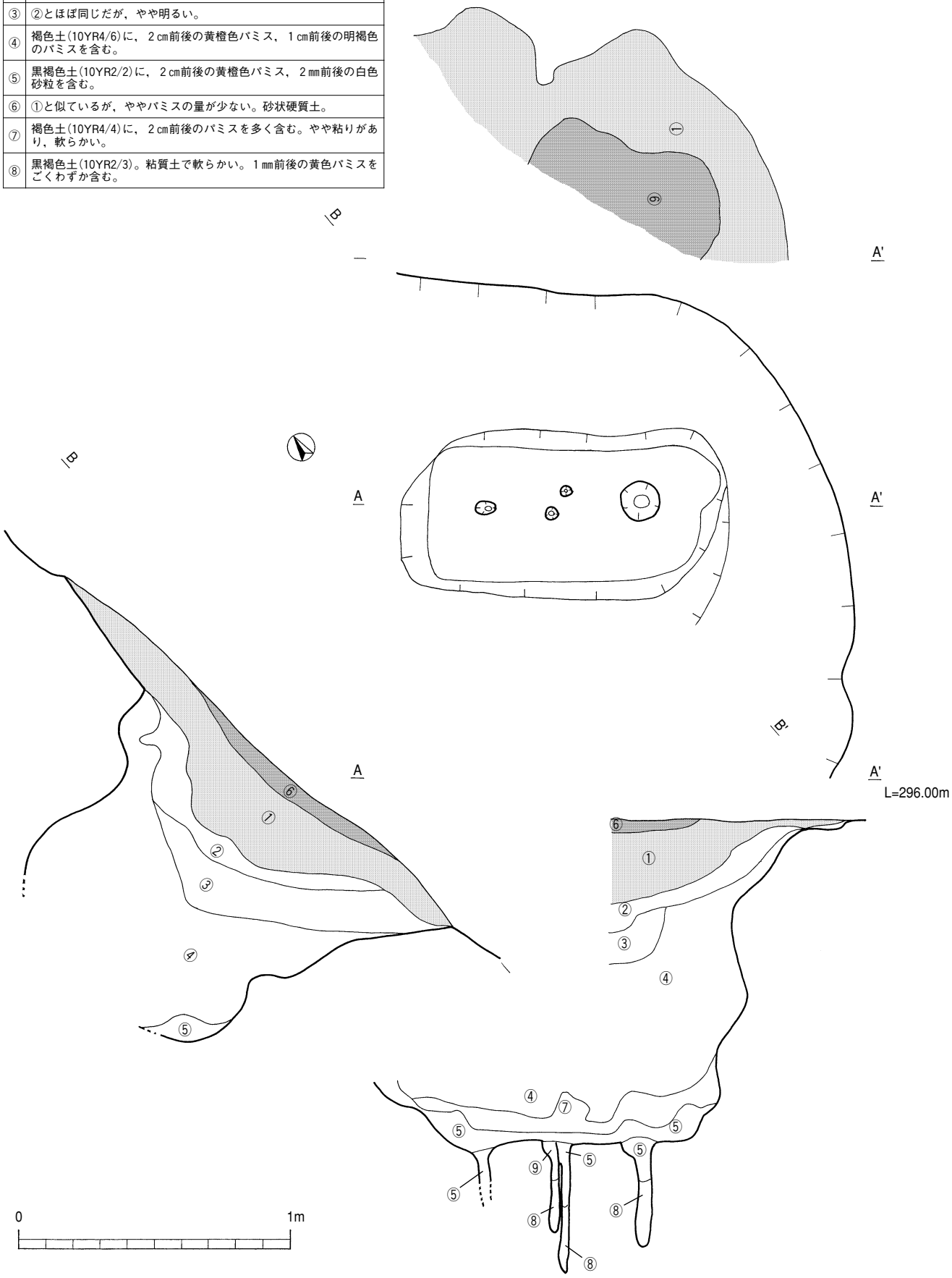
①	黄褐色砂質土(10YR5/8)。ほぼ御池パミス。しまりややあり。
②	明褐色土(7.5YR5/6)。①と③の混土層。
③	褐色土(7.5YR4/6)。ほぼⅤａ層。
④	褐色土(7.5YR4/6)。③とほぼ同じだが，P-11をわずかに含む。
⑤	暗褐色土(7.5YR3/4)。P-11に③が少量混ざる。
⑥	暗褐色土(7.5YR3/4)。⑤とサツマの混土層。
⑦	黒色土(7.5YR2/1)。Ⅹ・ⅩⅠ起源の混土層。

第70図　縄文時代中期の落とし穴状遺構２号

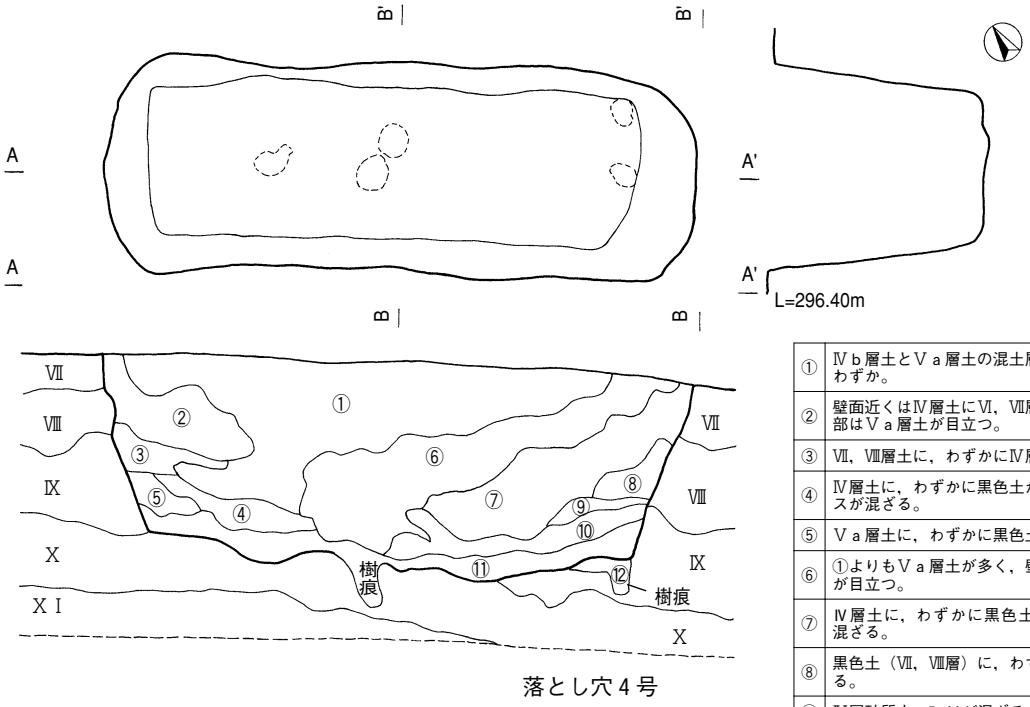
第９表　縄文時代中期落とし穴状遺構観察表

遺構名	検出面	形状	検出面からの深さ(cm)	上面		底面		底面のピット			備考
				長軸(cm)	短軸(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)	数	上面の径(cm)	検出面からの深さ(cm)	
落とし穴状遺構１号	Ⅳb層	隅丸長方形？	103	206？	103?	132	64	4	10	44	上部は一部削平
									12	33	
									8	34	
									7	32	
落とし穴状遺構２号	Ⅴa層	円形	126	190	173	108	37	3	5	35	
									5	38	
									8	39	
落とし穴状遺構３号	Ⅳb層	円形？	119	205?	163?	101	48	4	8	25?	上部は一部削平
									4	33	
									14	38	
									4	47	
落とし穴状遺構４号	Ⅶ層？	長方形	58	158	54	131	39	0			
落とし穴状遺構５号	Ⅴb層	隅丸長方形	75	132	67	109	50	0			

①	黄褐色土(10YR5/6)。黄褐色の２㎜～１㎝のパミスを含む。砂状硬質土。
②	①と褐色土(10YR4/6) の混土層。やや粘性があり，硬くしまる。
③	②とほぼ同じだが，やや明るい。
④	褐色土(10YR4/6)に，２㎝前後の黄橙色パミス，１㎝前後の明褐色のパミスを含む。
⑤	黒褐色土(10YR2/2)に，２㎝前後の黄橙色パミス，２㎜前後の白色砂粒を含む。
⑥	①と似ているが，ややパミスの量が少ない。砂状硬質土。
⑦	褐色土(10YR4/4)に，２㎝前後のパミスを多く含む。やや粘りがあり，軟らかい。
⑧	黒褐色土(10YR2/3)。粘質土で軟らかい。１㎜前後の黄色パミスをごくわずか含む。

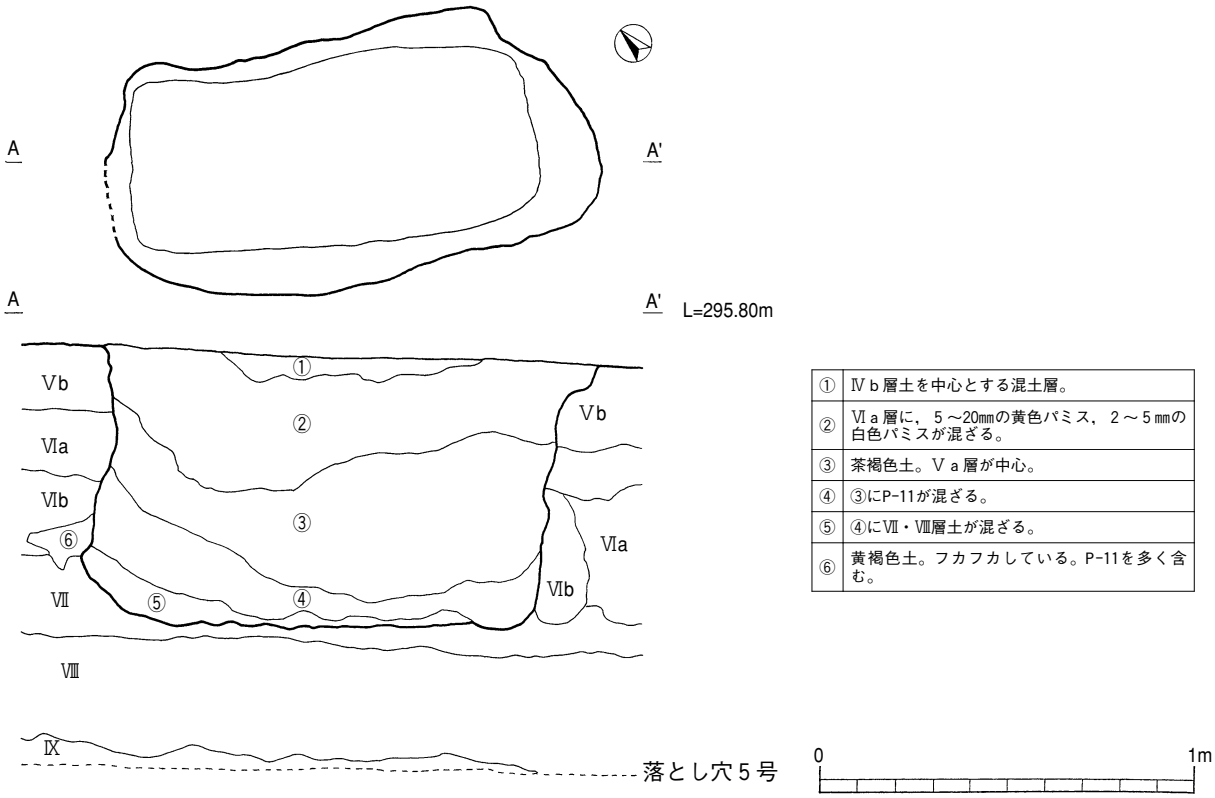


第71図　縄文時代中期の落とし穴状遺構３号



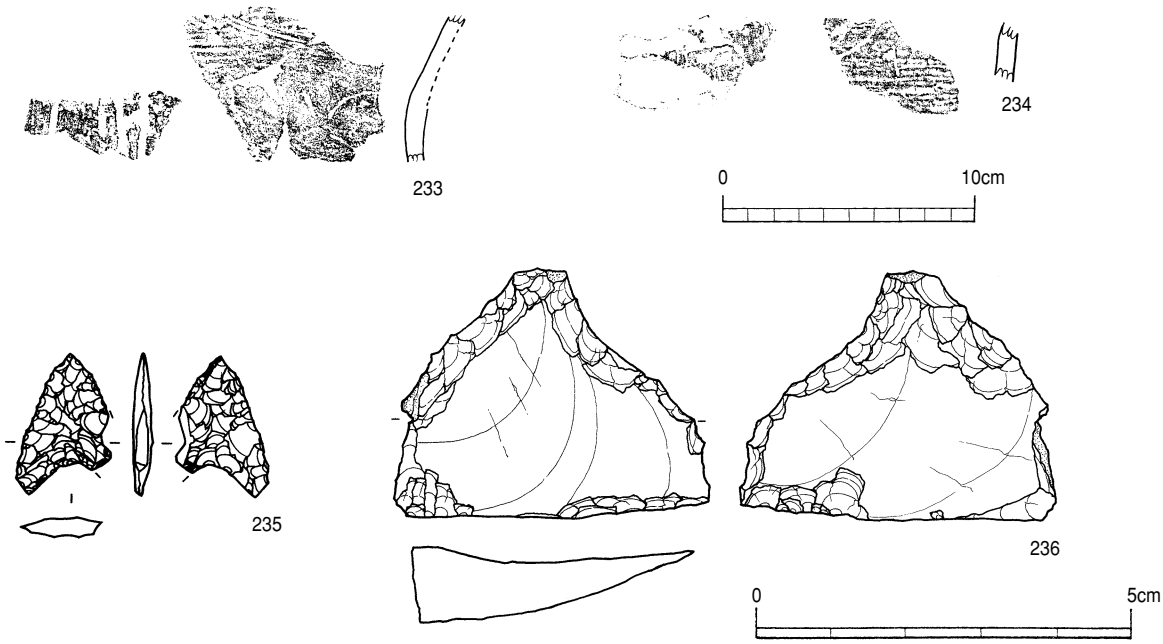
落とし穴４号

①	Ⅳｂ層土とⅤａ層土の混土層。Ⅴａ層土はごくわずか。
②	壁面近くはⅣ層土にⅥ，Ⅶ層土が混ざる。中央部はⅤａ層土が目立つ。
③	Ⅶ，Ⅷ層土に，わずかにⅣ層土が混ざる。
④	Ⅳ層土に，わずかに黒色土が混ざる。黄色パミスが混ざる。
⑤	Ⅴａ層土に，わずかに黒色土が混ざる。
⑥	①よりもⅤａ層土が多く，壁面近くはⅤａ層土が目立つ。
⑦	Ⅳ層土に，わずかに黒色土が混ざる。P-11が混ざる。
⑧	黒色土（Ⅶ，Ⅷ層）に，わずかにⅣ層土が混ざる。
⑨	Ⅳ層砂質土。P-11が混ざる。
⑩	Ⅶ層土にⅣ層土が混ざる。P-11が目立つ。粘性を帯びる。
⑪	黒色土（Ⅶ，Ⅷ層）にⅣ層土が混ざる。
⑫	暗茶褐色土。サツマ小ブロック混入。



①	Ⅳｂ層土を中心とする混土層。
②	Ⅵａ層に，５～20㎜の黄色パミス，２～５㎜の白色パミスが混ざる。
③	茶褐色土。Ⅴａ層が中心。
④	③にP-11が混ざる。
⑤	④にⅦ・Ⅷ層土が混ざる。
⑥	黄褐色土。フカフカしている。P-11を多く含む。

第72図　縄文時代中期の落とし穴状遺構４号・５号



第73図　縄文時代中期の遺物

落とし穴状遺構５号（第72図）

Ｇ－20区，Ｖｂ層上面で検出された。平面の形状は隅丸長方形であり，長軸が132㎝，短軸が67㎝である。底面は長軸が109㎝，短軸が50㎝である。深さは検出面から75㎝である。底面には逆茂木痕はみられなかった。埋土は，底部はⅦ・Ⅷ層土にＰ－11が混ざり，最上部は御池火山灰土である。（SD４）

２　土器・石器

土器

図の233・234は，調査区南側のトレンチ17を拡張した部分で出土した。滑石が非常に多く混入されていた。その影響で，表面の剥落が激しい。胴部には太い縦位の条痕が確認され，曽畑式系土器に類似する。

石器

図の235は，石鏃である。チャート製で逆刺が丸く深い抉りのある凹基式の二等辺三角形をした石鏃である。

図の236は，スクレイパーである。安山岩製で剥片の側片に連続した剥離を施している。上部につまみを作り出しているように見えるがここでは削器とした。

第10表　縄文時代中期土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	文様・調整		胎土					色調		取上番号	その他
						外面	内面	石英	長石	雲母	砂礫	その他	外面	内面		
73	233	B-13	Ⅳb	曽畑式系	鉢	ナデ	条痕ナデ		○			滑石多い	にぶい黄	にぶい黄	146 159	
	234	B-13	Ⅳb	曽畑式系		ナデ	条痕		○			滑石多い	にぶい黄	黄灰	144	

第11表　縄文時代中期石器観察表

図版番号	遺物番号	取上番号	出土区	層位	器種	石材	長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)	重量(g)	備考
75	235	４Ｔ	４Ｔ	Ⅴ	打製石鏃	チャート	1.90	1.20	0.25	0.46	
	236	１Ｔ	１Ｔ	Ⅴa	スクレイパー	安山岩	3.30	4.20	1.00	12.19	

第４項　縄文時代後・晩期

出土状況は，第74図と第79図に示した。台地から北側に突き出た尾根上に，後期の竪穴式住居跡が検出されている。後期の遺物は，同じ尾根上にも散見されるが，尾根北側と南側の谷部への，流れ込みと考えられるものの出土量が多い。また，南側に隣接する唐尾遺跡との境界に近い17トレンチからも出土している。

晩期の遺物も，台地から北側に突き出た尾根から谷部への流れ込みと考えられるものが多い。また，後期より台地上の遺物がみられるが，南側への広がりはみられない。遺構は確認されていない。

１　遺構

竪穴住居跡

竪穴住居跡は，平成13年の確認調査時に２トレンチで検出した。遺構の実測は，平成17年度の本調査時に行っている。

台地から北側に突き出た小尾根の平坦部で検出した。形態は3.5×2.5mの楕円形で，中央に深さ50㎝直径20㎝の柱穴が１ヶ所,中央から南西方向には１ｍ×0.5mの落ち込みがみられる。埋土は黒褐色土で，黄褐色土（Ⅳb層）を掘りこんでいる。近くからは石匙が出土している。

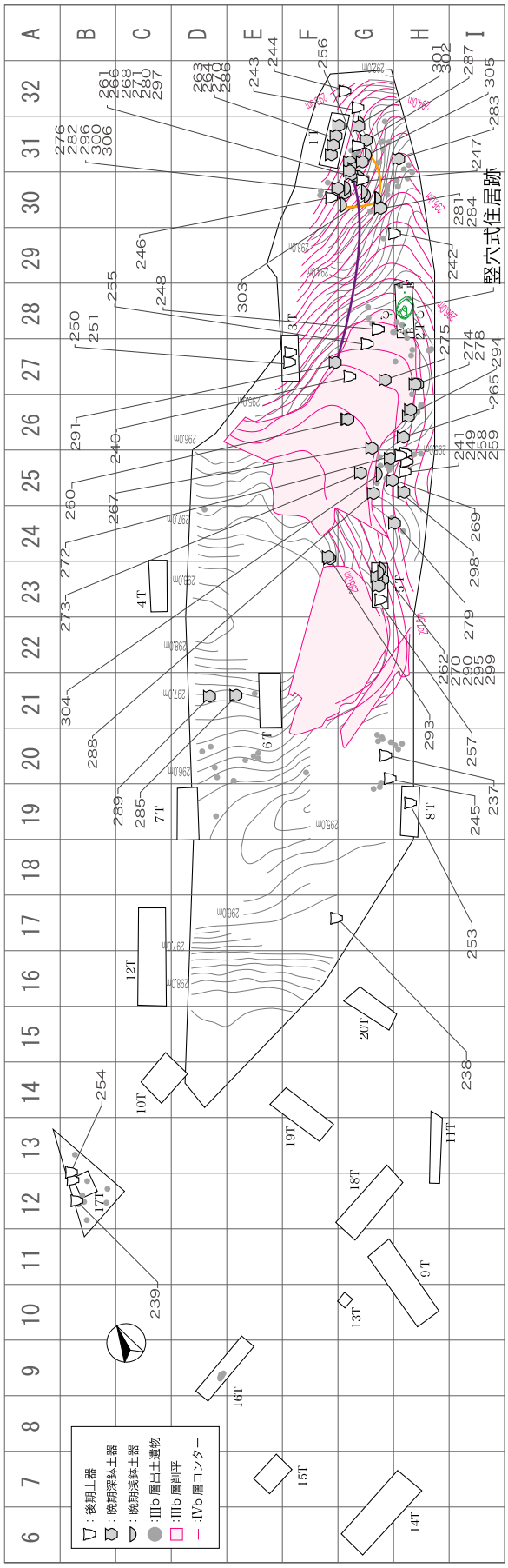
２　土器

後期土器（237～259）

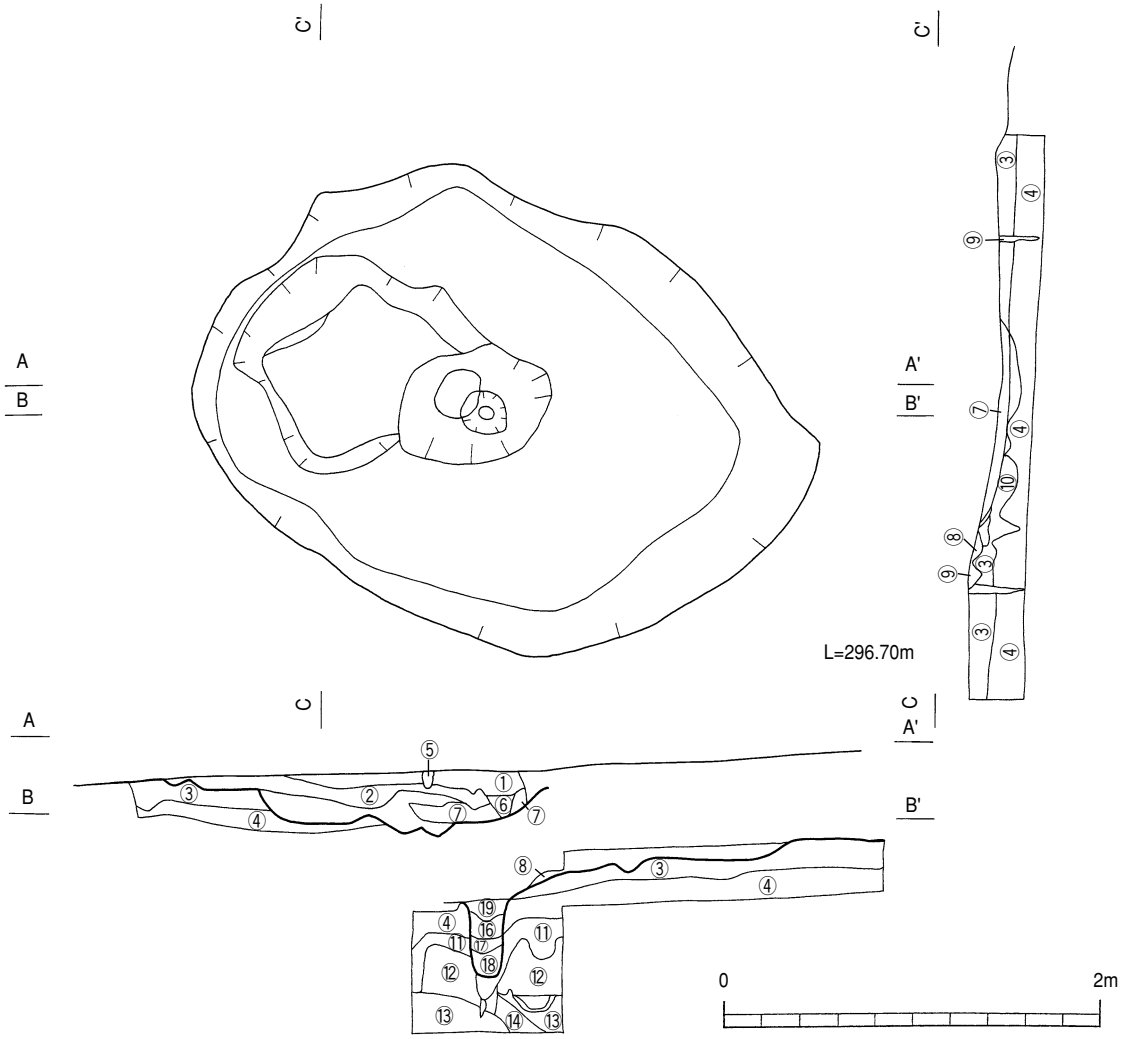
23点を図化した。238，239，241，242，243，244は，凹線文の施文を特徴とした後期初頭の土器である。242には凹施文の区画内に，貝殻沈線による疑似縄文が施文されている。237は，口縁部の断面形が三角形で，口唇部には貝殻腹縁による刺突文が施されている。また，貝殻条痕により調整がなされている。このような特徴から，松山式土器であると考えられる。240は，口縁部が肥厚しする文様帯であることから，北久根山式土器であると考えられる。240と241は，口縁部肥厚帯の中央部に斜位の貝殻刺突文を１条巡らせている。調整方法としては，貝殻条痕調整の後，丁寧なハケ調整を施されている。このような特徴から，市来式土器であると考えられる。249は，頸部がくびれ，胴部中央部でやや膨らみ，下半部で窄まる形態から，市来式土器の無文土器であると考えられる。246と254は，磨消縄文による，くの字型の屈曲部をもつ口縁部形態から，西平式土器であると考えられる。245と243は，口縁部肥厚部に２本の凹線が施され，篦磨研磨で調整されていることから，中岳式土器であると考えられる。

晩期土器（260～306）

260から276は，口縁部に３条の沈線を施し，外反しながら開く形態から,入佐式土器であると考えられる。302から306は浅鉢土器であると考えられる。



第74図　縄文時代後・晩期の遺構配置・土器出土状況図

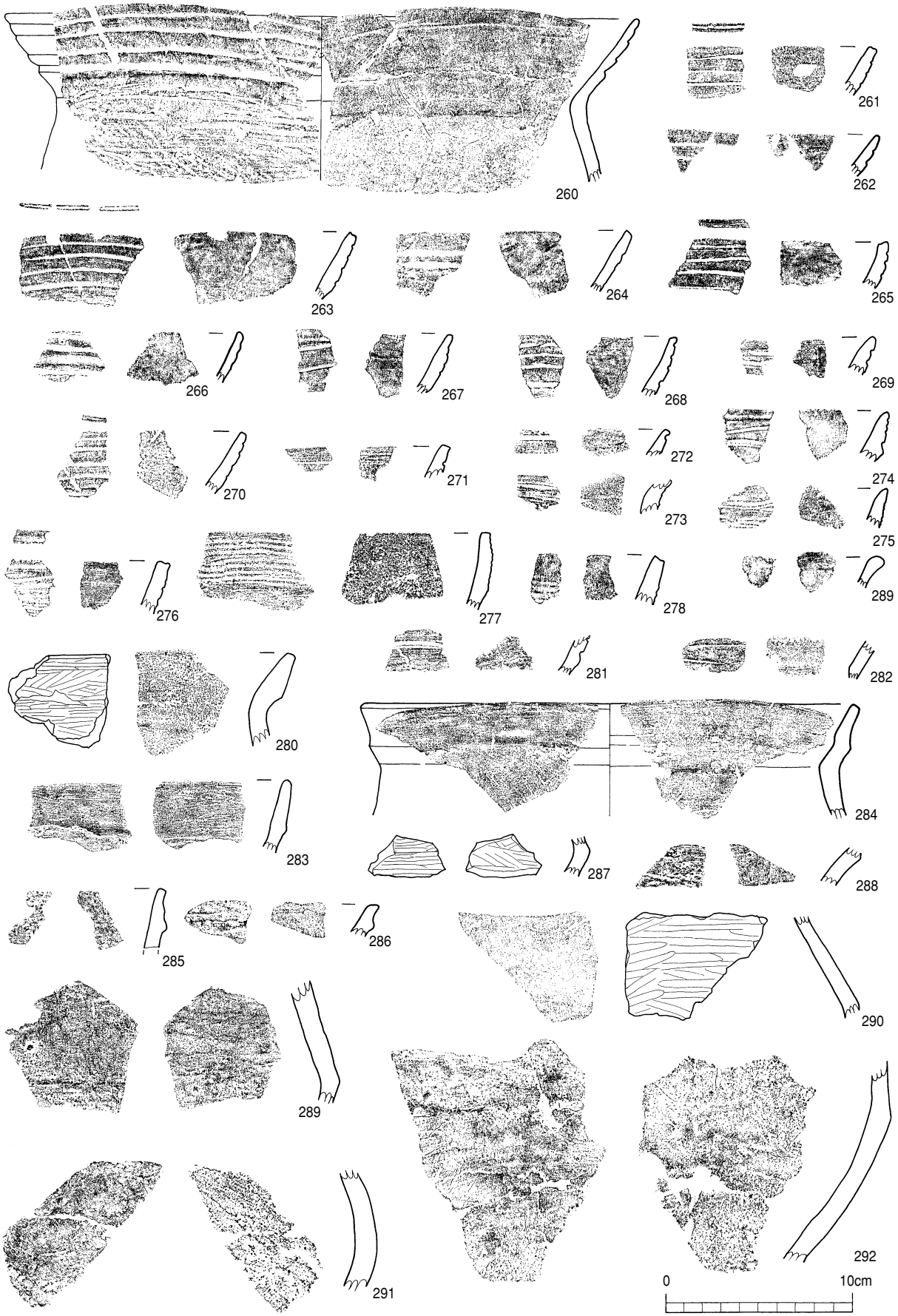


竪穴式住居跡（H―28区）

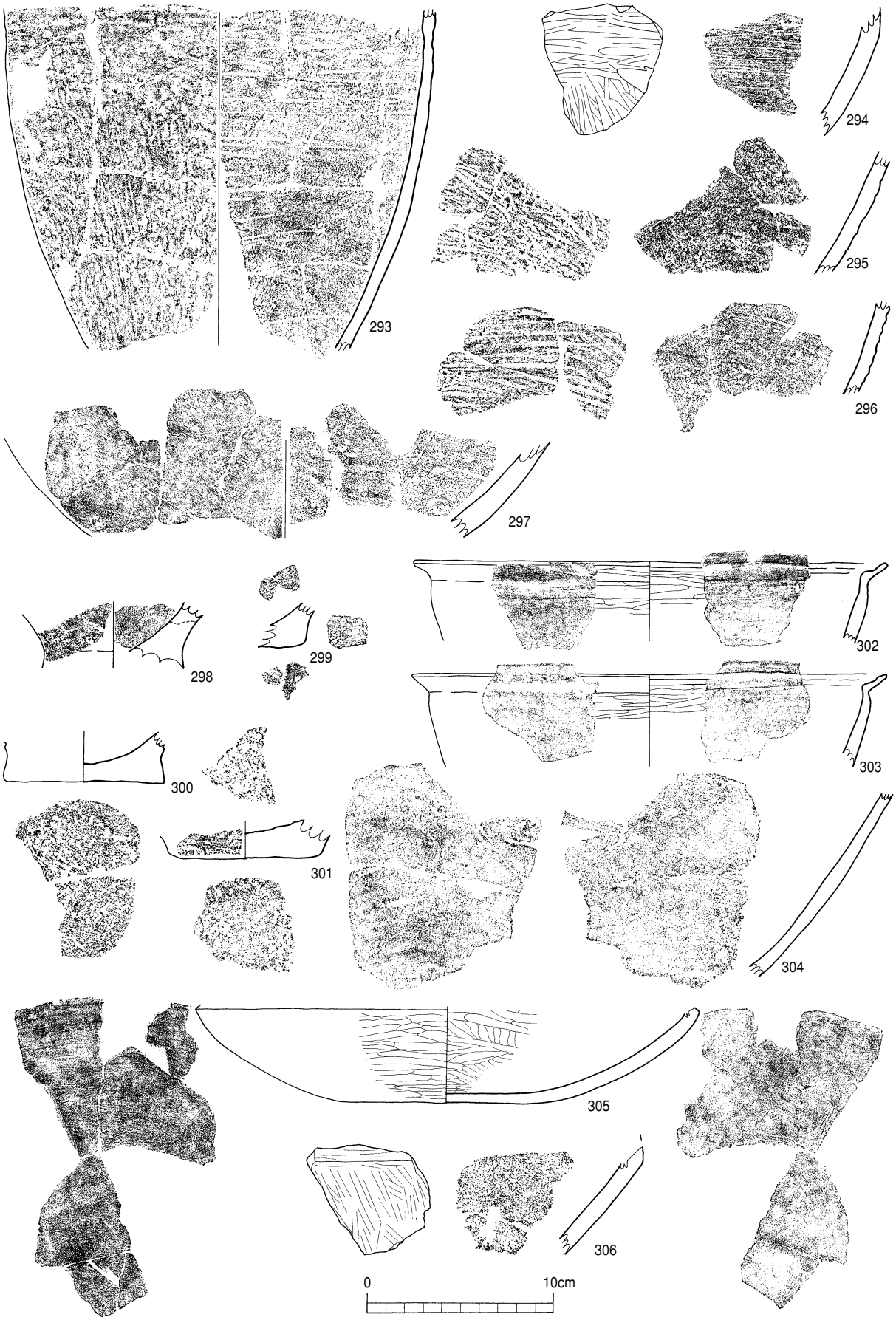
① 黒褐色土(10YR2/2)。1㎜大の黄色パミスをやや多く含む。ややしまる。
② 黒褐色土(10YR2/3)。1㎜～2㎜大の黄色パミスをやや多く含む。また，5㎜大の黄色パミスを2～3粒含む。黒褐色(10YR2/3)がベースとなるが，2㎝大ほどの下層（Ⅳa層，黄褐色土(10YR5/6)）のブロックを含む。ややしまる。炭化物がやや多く混じる。
③ 黄褐色土(10YR5/6)(2㎜大のパミスをとても多く含む〈御池〉)の割合が多く，少し黒褐色土(10YR2/3)が混じる。硬く，ややしまっている。
④ 褐色土(10YR4/6)。1㎜～2㎜大の黄色パミスをごく少量含む。やや柔らかい。
⑤ 黒色土(10YR1.7/1)。1㎜大の黄色パミスをごく少量含む。ベースはⅢa層と考えられる。樹根によるⅢa層の流入。フカフカしている。
⑥ 黒色土(10YR2/1)。やわらかい。1㎜大の黄色パミスと5㎜大の黄色ブロックをやや含む。
⑦ 5㎝～10㎝大の黄ブロックを含む。②と③が混じるような土。黒色土(10YR2/1)と④や③がブロックで混ざる。柔らかい2㎜大の黄色パミスをやや多く含む。
⑧ 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)。2㎜下の黄色パミスを少量含む。硬くしまる。
⑨ 黒褐色土(10YR2/2)。とても柔らかい。
⑩ 褐色土(10YR4/4)。5㎜～1㎝大の黄色パミスが少量混ざり，2㎜大の黄色パミスがやや含まれる。
⑪ P11上層。褐色土(10YR4/4)をベースとし，1㎝程の明褐色(7.5YR5/8)のパミスをやや多く含む。ややしまる。
⑫ P11。褐色土(10YR4/4)をベースとし，1㎝～2㎝大の明褐色(7.5YR5/8)のパミスを非常に多く含む。パラパラとしており，しまりがない。
⑬ P11下層。黒褐色土（7.5YR3/2)。粘性の強い性質をもち，ややしまっている。
⑭ 黒褐色土(7.5YR3/2)をベースとして，上層のパミス（明褐色(7.5YR5/8）の1㎝～2㎝大のパミス）がやや多く混じる。
⑮ 褐色土(10YR4/4)をベースとして，1㎝大の明褐色(7.5YR5/8）のパミスを多く含む。やや柔らかい。
⑯ 暗褐色土(10YR3/4)をベースとして，にぶい黄褐色(10YR4/3）の2㎝大円形のブロックを多く含む。さらに明褐色(7.5YR5/8)の1㎝大のパミスも少量含む。やや柔らかい。
⑰ 暗褐色土(10YR3/4)をベースとして，にぶい黄褐色(10YR4/3）の2㎝大円形のブロックを多く含む。明褐色(7.5YR5/8)の5㎜大のパミスを少量含む。やや柔らかい。
⑱ 暗褐色土(10YR3/4)をベースとして，にぶい黄褐色(10YR4/3）の2㎝大円形のブロックを多く含む。明褐色(7.5YR5/8)の5㎜～1㎝大のパミスをやや多く含む。やや柔らかい。
⑲ 黄褐色土(10YR5/6)，1㎜大の黄色パミスをとても多く含む。しまる。

第75図　縄文時代後期の竪穴住居跡

第76図　縄文時代後期の土器



第77図　縄文時代晩期の土器(1)



第78図　縄文時代晩期の土器(2)

第12表　縄文時代後・晩期土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	文様・調整		胎土					色調		取上番号	その他
						外面	内面	石英	長石	雲母	砂礫	その他	外面	内面		
76	237	G-20	Ⅲb	Ⅰ		工具ナデ	ナデ	○	○	○			明赤褐色	赤褐色	564	
	238	F-17	Ⅳa	Ⅱ		凹線文　貝殻押付	ナデ						にぶい橙	橙	1183	
	239	B-12	Ⅳa	Ⅱ	深鉢	凹線文	ケズリ			○		砂利	にぶい褐色	にぶい褐色	149	
	240	D-23	Ⅶ	Ⅱ		凹線文　貝殻押付けあり(口縁)	凹線文						橙	浅黄橙	2128	
	241	H-25	Ⅳa	Ⅱ		凹線文	ケズリ　ナデ						明黄褐色	にぶい橙	408	
	242	H-29	Ⅳa	Ⅱ		貝殻凹線	ケズリ						にぶい黄橙	橙	383	
	243	G-32	Ⅳa	Ⅱ		凹線文	ナデ							にぶい明褐	394	
	244	G-32	Ⅳa	Ⅱ		凹線文	ナデ						褐色	明褐	418	
	245	G-19	Ⅱa	Ⅱ		ミガキ	ミガキ						にぶい黄橙	にぶい黄橙	1126	
	246	F-30	Ⅲa	Ⅱ		ミガキ	ナデ						にぶい褐色	にぶい黄橙	380	
	247	G-30	Ⅳa	Ⅱ		ナデ	ケズリ後ナデ						橙	橙	451	
	248	G-28		Ⅲ			ナデ						黒	にぶい赤褐色	247	
	249	H-25	Ⅳ	Ⅳ	深鉢	ナデ　無文	ナデ					細粒	にぶい黄橙	にぶい黄橙	293	
	250	3T	Ⅳa	Ⅳ		貝殻刺突文	ナデ	○				火山ガラス	灰褐色	橙		
	251	3T	Ⅲ下	Ⅳ		貝殻刺突文	ナデ	○				火山ガラス	灰褐色	橙		
	252			Ⅳ		頸部に刻みの突帯	ナデ	○	○	○			にぶい赤褐色	褐色		
	253	8T	Ⅳa	Ⅴ		ミガキ	ミガキ						黒褐色	にぶい橙		
	254	B-12	Ⅳa	Ⅴ	深鉢	ミガキ	ミガキ					火山ガラス	褐灰	にぶい褐色	147 148	
	255	G-27	Ⅷ	後期底部	深鉢	ナデ	—	○		○		火山ガラス	にぶい橙		1413	
	256	G-31	Ⅳa	後期底部		無文	ナデ						橙	にぶい赤褐色	352	
	257	5T	Ⅲ	後期底部		ナデ　無文	ナデ						橙	にぶい橙		
	258	H-25	Ⅲb	後期底部		無文　ナデ	ナデ						明赤褐色	褐灰	296	
	259	H-25	Ⅳa	後期底部		無文　ナデ	ナデ						明赤褐色	褐灰	511	
77	260	G-26	Ⅳa	晩期	深鉢	沈線　ナデ　ミガキ	ナデ						赤褐色	赤褐色	201 202	
	261	G-31	Ⅲa	晩期	深鉢	ナデ　沈線	ナデ						にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	365	
	262	5T	Ⅲ下	晩期	深鉢	沈線　ナデ　ミガキ	ナデ　ミガキ						にぶい橙	暗褐色	一括	
	263	1T	Ⅲ下	晩期	深鉢	ナデ　沈線	ナデ						灰褐色	橙		
	264	1T	Ⅲ下	晩期	深鉢	ナデ　沈線	ナデ						灰褐色	橙		
	265	H-26	Ⅳ	晩期	深鉢	ナデ　沈線	ナデ						にぶい赤褐色	褐灰	312	
	266	G-30	Ⅲb	晩期	深鉢	ナデ　沈線	ナデ						灰褐色	橙	376	
	267	G-26	Ⅳa	晩期	深鉢	ナデ　沈線	ナデ　ミガキ						灰褐色	明褐色	1396	
	268	G-31	Ⅳa	晩期	深鉢	ナデ　沈線	ナデ						灰褐色	にぶい橙	459	
	269	G-25	Ⅳa	晩期	深鉢	沈線	ナデ						黒褐色	黒褐色	410	
	270	1T	Ⅲ下	晩期	深鉢	沈線	ナデ						にぶい赤褐色			
	271	G-31	Ⅳa	晩期	深鉢	ナデ　沈線	ナデ						黒褐色	黒褐色	432	
	272	G-25	Ⅳa	晩期	深鉢	ナデ　沈線	ナデ						灰褐色	にぶい赤褐色	550	
	273	H-27	Ⅲb	晩期	深鉢	沈線	ナデ						にぶい褐色	橙	267	
	274	H-27	Ⅲa	晩期	深鉢	沈線	ナデ						黒褐色	黒褐色	230	

第13表　縄文時代後・晩期土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	文様・調整		胎土					色調		取上番号	その他
						外面	内面	石英	長石	雲母	砂礫	その他	外面	内面		
77	275	G-27	Ⅲb	晩期	深鉢	沈線	ナデ						褐色	にぶい褐色	222	
	276	F-30	Ⅳa	晩期	深鉢	沈線	ナデ						明赤褐色	明赤褐色	403	
	277	5T	Ⅲ下	晩期	深鉢	沈線	ナデ						黒褐色	灰黄褐色	一括	
	278	H-27	Ⅲb	晩期	深鉢	貝殻条痕文	ナデ						褐灰	黒褐色	231	
	279	G-30	Ⅳa	晩期	深鉢	ナデ	ナデ						灰褐色	にぶい橙	506	
	280	G-31	Ⅳa	晩期	深鉢	ミガキ	ナデ						黒褐色	褐色	371	
	281	H-25	Ⅳa	晩期	深鉢	沈線	ナデ						灰黄褐色	褐灰	496	
	282	G-30	Ⅲa	晩期	深鉢	沈線	ナデ						黒褐色	赤褐色	378	
	283	H-31	Ⅶ上	晩期	深鉢	ナデ	ナデ						黄灰	にぶい黄	1457	
	284	G-30	Ⅳa	晩期	深鉢	ケズリ　ナデ	ケズリ　ナデ						褐灰	にぶい黄橙	536	
	285	G-25	Ⅲb	晩期	浅鉢	突帯あり	ナデ						橙	にぶい橙	270	
	286	E-21	Ⅴ	晩期	深鉢	口唇の間際に突帯あり	ナデ						橙	橙	3037	
	287	1T	Ⅲ下	晩期	深鉢	ミガキ	ナデ								一括	
	288	G-31	Ⅲb	晩期	深鉢	ミガキ	ミガキ						黒褐色	明赤褐色	351	
	289	G-26	Ⅳa	晩期	深鉢	ナデ	ナデ	○				火山ガラス	黒褐色	にぶい褐色	1339	
	290	D-21	Ⅴ	晩期	深鉢	ナデ	ナデ						明赤褐色	黒褐色	3031	
	291	5T	Ⅲ下	晩期	深鉢	ナデ	ミガキ						赤褐色	赤褐色	一括	
	292	G-30	Ⅳa	晩期	深鉢	ケズリ	ケズリ						橙	にぶい橙	456 522	
78	293	B-12	Ⅳ	晩期	深鉢	ナデ	ナデ						にぶい褐色	橙	無し	
	294	H-25	Ⅲb	晩期	深鉢	ナデ	ナデ						橙	にぶい黄橙	281	
	295	F-24	Ⅳa	晩期	深鉢	ケズリ	ナデ						にぶい褐色	にぶい黄橙	537 540	
	296	H-26	Ⅲb	晩期	深鉢	工具ナデ	ナデ	○	○			火山ガラス	明赤褐色	灰黄褐色	209 211	
	297	5T	Ⅲ下	晩期	深鉢	ナデ	ケズリ						赤褐色	明赤褐色	一括	
	298	H-25	Ⅳa	晩期	深鉢	ミガキ	ナデ	○	○				黄褐色	暗灰黄	513	
	299	G-30	Ⅳa	晩期	深鉢	ナデ	ナデ						灰オリーブ	黒褐色	481	
	300	5T	Ⅲ下	晩期	浅鉢	ナデ　無文	ナデ						にぶい赤褐色	にぶい橙	一括	
	301	G-30	Ⅲb	晩期	浅鉢	ナデ	ナデ						明赤褐色	赤	377	
	302	G-31	Ⅳa	晩期	浅鉢	ナデ　ミガキ	ナデ　ミガキ						暗赤褐色	黒褐色	420	
	303	G-31	Ⅳa	晩期	浅鉢	ナデ　ミガキ	ナデ　ミガキ						黒褐色	黒褐色	524	
	304	G-30	Ⅳa	晩期	浅鉢	ナデ　ミガキ	ナデ　ミガキ						明赤褐色	黒褐色	492　493	
	305	G-31	Ⅳa	晩期	浅鉢	ナデ　ミガキ	ナデ　ミガキ						暗赤褐色	黒褐色	339 474 494 535	
	306	G-30	Ⅳa	晩期	浅鉢	ミガキ	ケズリ　ナデ						赤褐色	明褐色	530	

3　石器

石鏃（307～309）

図の307～309は石鏃である。307は安山岩製で逆刺が鋭く浅い抉りのある凹基式の二等辺三角形をした石鏃である。308はチャート製で逆刺が丸く深い抉りのある凹基式の二等辺三角形をした石鏃である。なお先端と基部の部分は欠損している。309は腰岳産黒曜石製で逆刺が鋭い凹基式の二等辺三角形をした石鏃である。

石匙（310～312）

図の310～312は石匙である。310は安山岩製で正面にのみ両側縁に縦方向の刃部加工を施している。311はチャート製で正面と裏面に縦方向の刃部加工を施している。312は頁岩製で正面と裏面に横方向の刃部加工を施している。

スクレイパー（313・314）

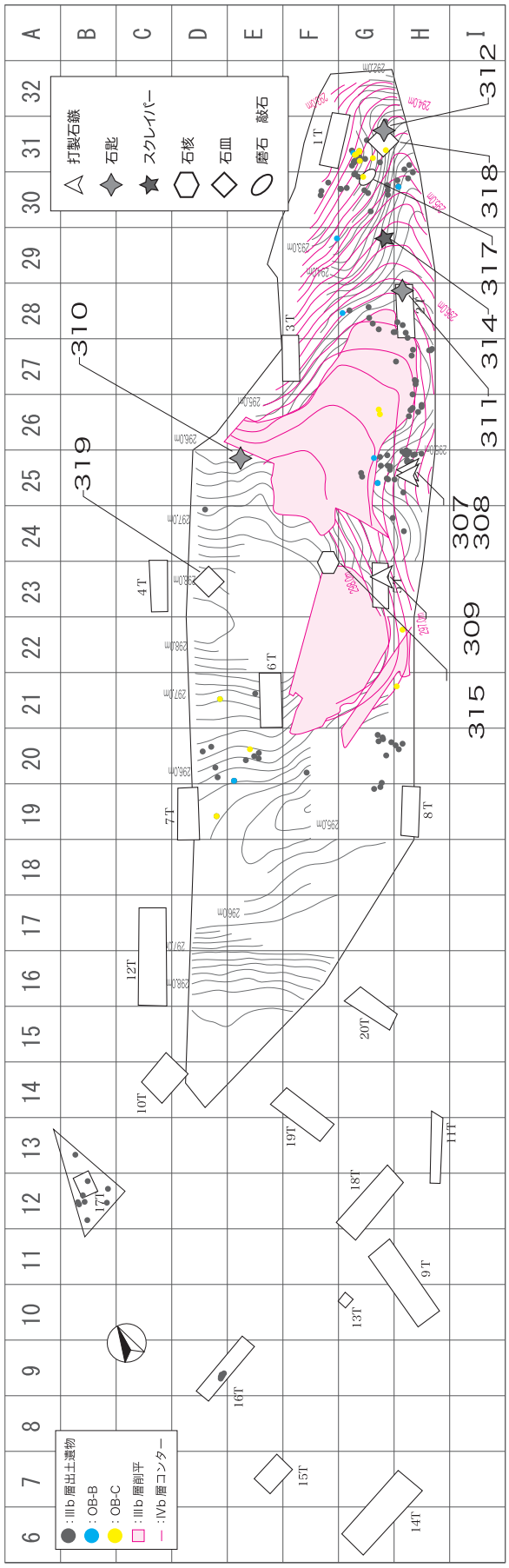
図の313・314はスクレイパーである。313は安山岩製で上面に自然面を残す素材剥片を用いている。剥片の正面と裏面に連続した剥離を施していることから削器に分類される。314は頁岩製で剥片の端部に急角度の剥離を施していることから掻器に分類した。

石核（315）

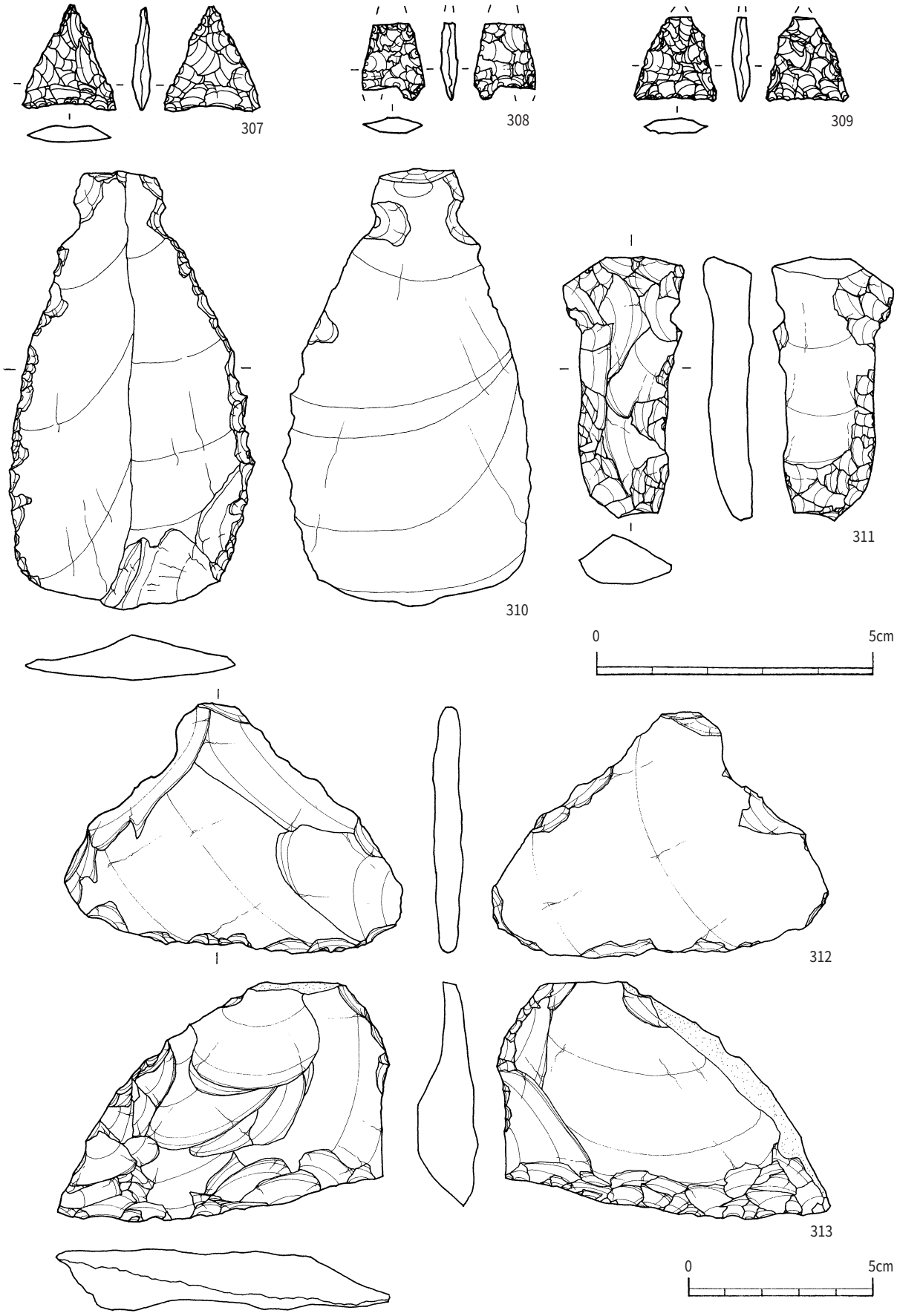
図の315は石核である。チャート製の素材の周縁部から求心的な剥離をおこなう石核で，上下面に二次加工も確認できることからスクレイパーとして利用された可能性もある。

磨石・敲石・石皿（316～319）

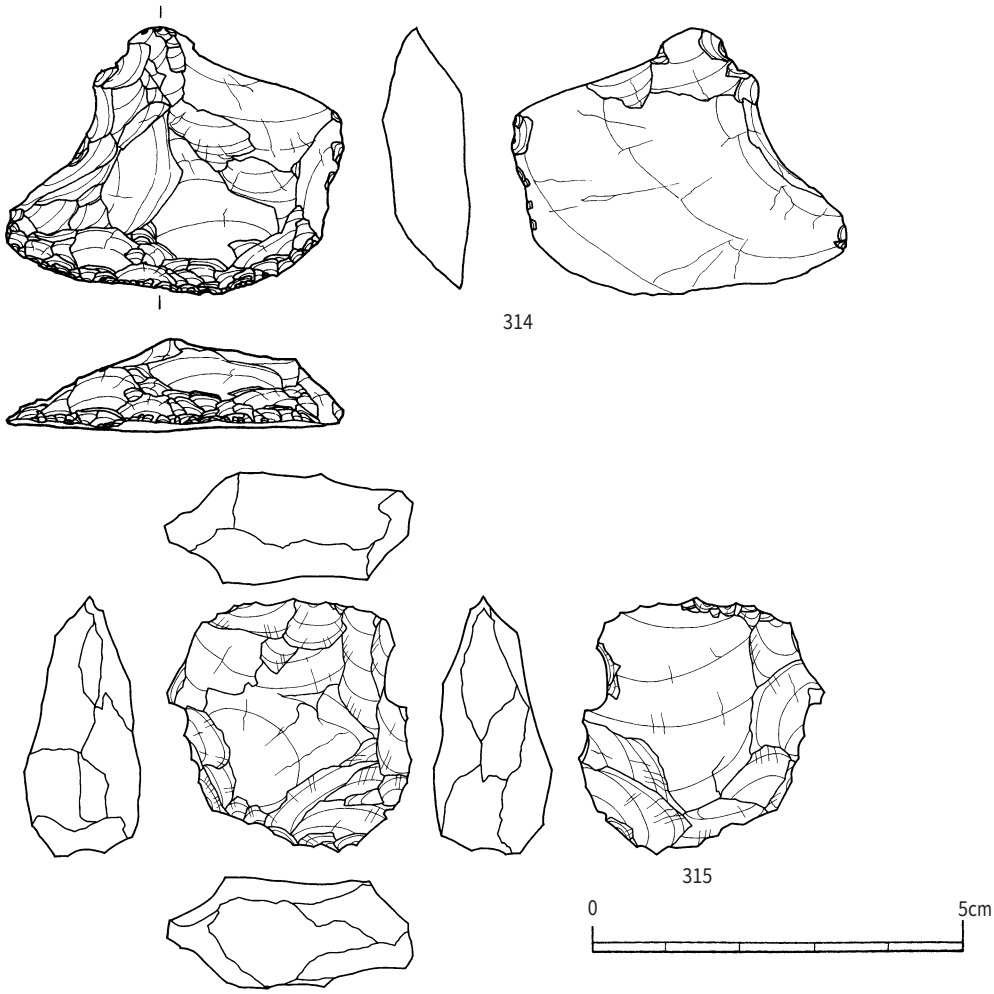
図の316は石皿である。砂岩製で正面と裏面に磨面を確認している。また，上面に敲打痕も確認しており，敲石として利用した可能性もある。317は磨石・敲石である。砂岩製で正面と裏面に磨面，上下に敲打痕を確認している。318は石皿である。安山岩製で正面と下面に磨面を確認している。319は石皿である。砂岩製で正面と左右側面に磨面，正面の左端と左側面に僅かな敲打痕を確認している。



第79図　縄文時代後・晩期の石器出土状況図



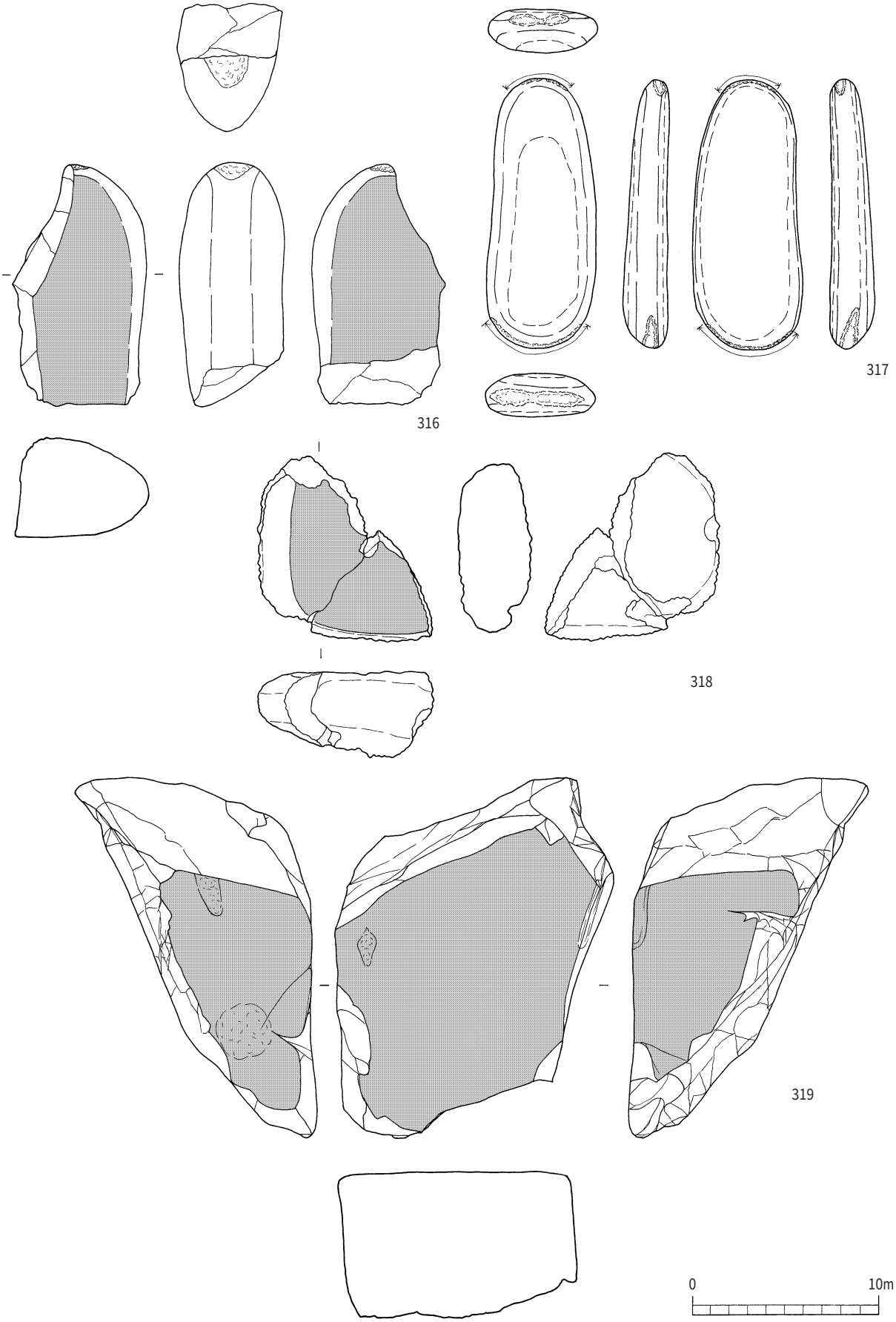
第80図　縄文時代後・晩期の石器(1)



第81図　縄文時代後・晩期の石器(2)

第14表　縄文時代後・晩期石器観察表

図版番号	報告書番号	取上番号	出土区	層位	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
81	307	285	H－25	Ⅲb	打製石鏃	安山岩	1.90	1.70	0.30	0.65	
	308	508	H－25	Ⅳa	打製石鏃	チャート	1.40	1.10	0.30	0.44	
	309	5T	5T	Ⅶ下	打製石鏃	黒曜石A	1.50	1.45	0.30	0.62	
	310	1799	E－25	Ⅳa	石匙	砂質安山岩	7.80	4.50	0.80	30.34	
	311	1614	H－28	Ⅳa	石匙	チャート	4.70	2.20	0.90	8.58	
	312	346	G－31	Ⅳa	石匙	頁岩	6.70	9.10	0.80	37.06	
	313	一括	G－28		スクレイパー	安山岩	6.40	8.95	1.60	88.27	
82	314	382	G－29	Ⅲb	スクレイパー	頁岩	3.55	4.45	1.15	14.96	
	315	545	F－23	Ⅳa	石核	チャート	3.40	3.30	1.50	17.30	
83	316	一括	表砕		石皿	砂岩	13.00	7.20	5.50	620.00	
	317	321	G－30	Ⅲb	磨石・叩石	砂岩	14.50	5.80	2.40	280.00	
	318	343	G－30	Ⅲb	石皿	輝石安山岩	9.20	8.50	4.60	390.00	
	319	1121	D－23		石皿	砂岩	19.30	14.90	7.80	3270.00	



第82図　縄文時代後・晩期の石器(3)

第３節　古墳時代・古代・中世の調査

第１項　分布状況

古墳時代から古代・中世にかけての遺物包含層は，文明３年（1471）の桜島噴出物のボラ層（Ｐ３）より下層になるⅢa層からⅢb層に該当する。これらの層の旧地形のうち，尾根部に当たるＥ－22～Ｇ－27区などは，後世の削平を受けて消失した部分が多い。そのような状況の中で，旧地形の谷部に当たる地点で，一部包含層が残存し，遺構・遺物を確認した。Ｄ－19～Ｈ－21区にかけては，溝状遺構を検出した。また，溝状遺構内などで遺物を確認した。

第２項　遺構

溝状遺構

溝状遺構は，旧地形の台地平坦部から谷部へと緩やかに傾斜しつつ，直線状に延びている。概ねＤ－20～21区からＨ－19区に向けて16条が確認できる。南側からグループ化し，1～８の番号を付した。また，Ｅ－20区には，全長５m未満の短めのものが５条以上並走している。これには９の番号を付した。

埋土は，基本的に黒色腐食土である。断面Ｅ，Ｆ，Ｊ，Ｋ，Ｌ，Ｎ，Ｏ，Ｐ，Ｑでは底部に硬質の砂質土が確認された。断面図内の斜線部は硬化面である。

溝状遺構１～３

旧地形の谷頭付近から谷底へ，谷を下るように伸びている。長さは，１が約3.5m，2－①が約15.5m，２－②が約６m，３－①が約26.5m，３－②が約３mである。２－①と３－①，3－②では，底面に波板状遺構が確認できる。

溝状遺構４・５・８

旧地形の谷部のゆるやかな斜面に位置している。長さは，４が約７m，５が約3.5m，８－①が約3.5m，８－②が約1.5mである。１～３と６・７の間に位置する。６・７とは，平行している。４と８－①では，底面に波板状遺構が確認できる。

溝状遺構６

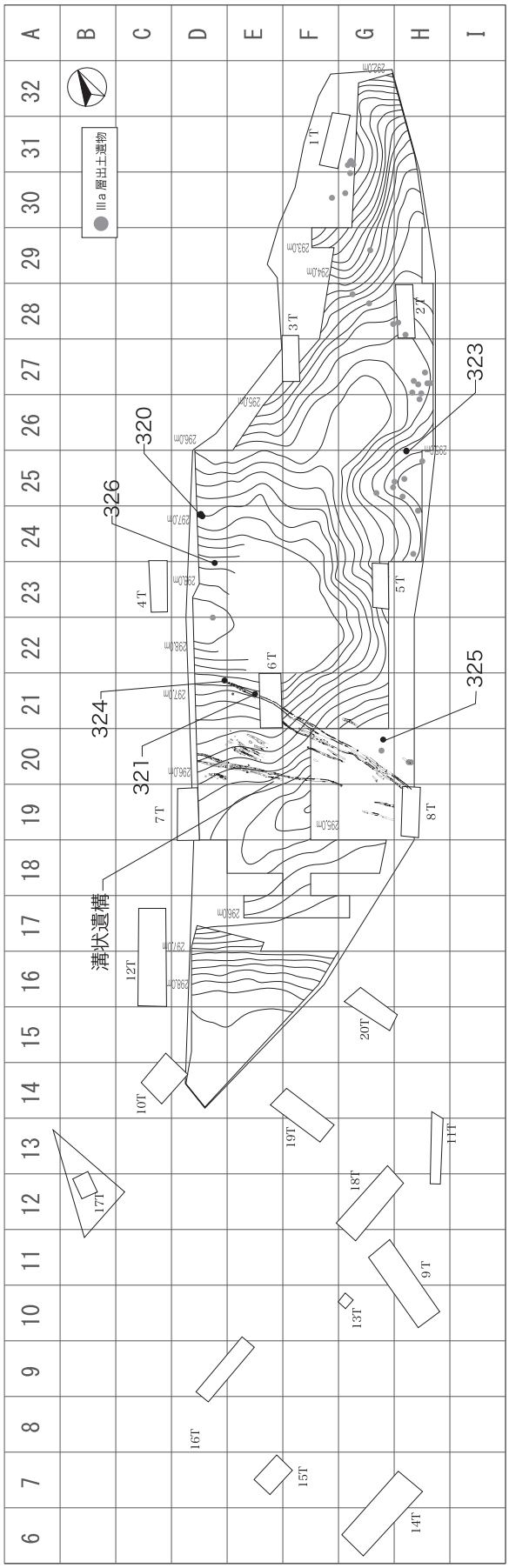
旧地形の谷部を横断するように，台地端部から谷底へ伸びている。長さは約24.5mである。谷底側で，底面に波板状遺構が確認できる。

溝状遺構７

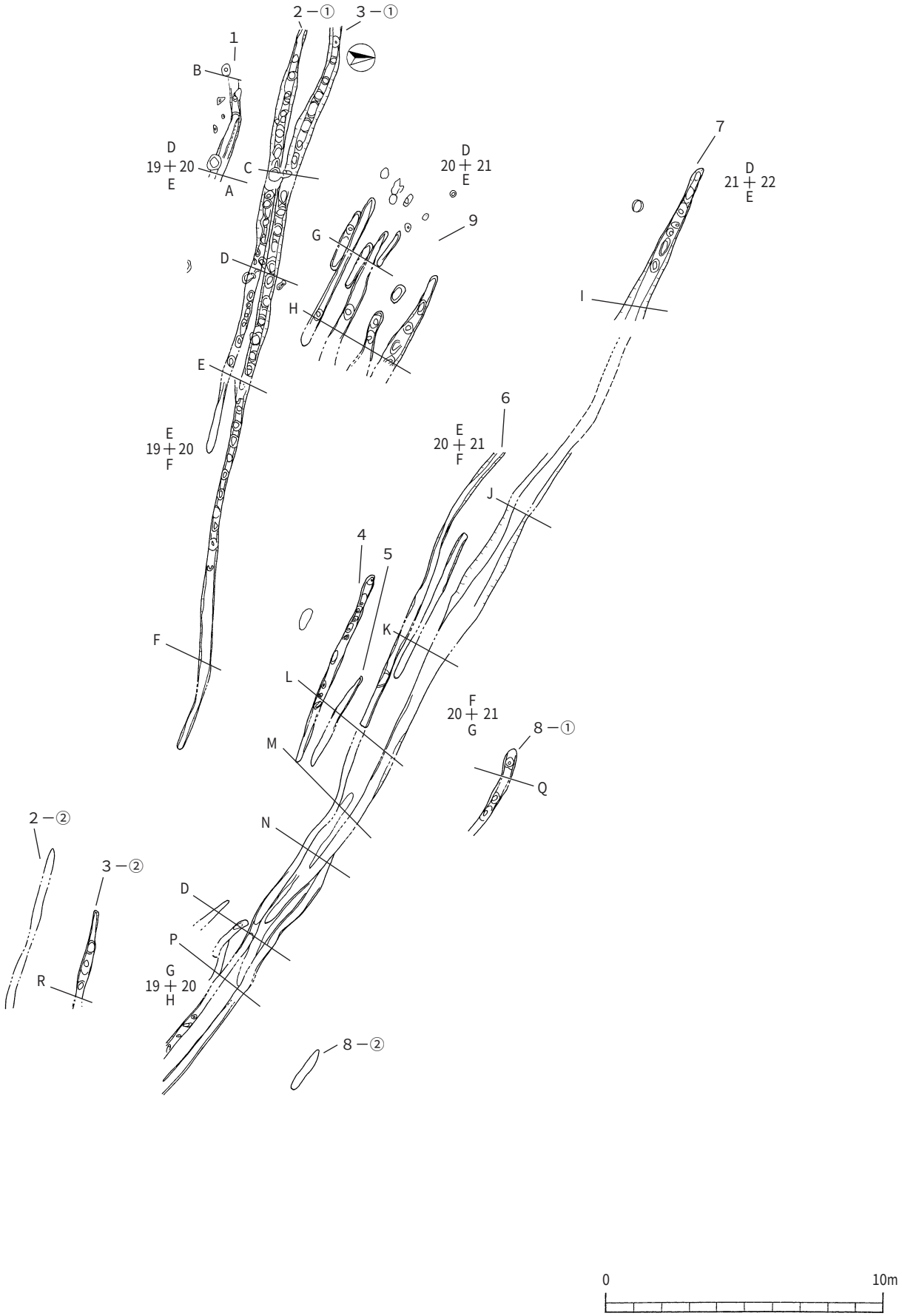
旧地形の谷部を横断するように，台地平坦部から谷底へ伸びている。６との間に約６mの溝状遺構があるが，谷部のゆるやかな斜面で，7に収束している。谷底側で，台地平坦部側で，底面に波板状遺構が確認できる。土師器321と324が出土している。

溝状遺構９

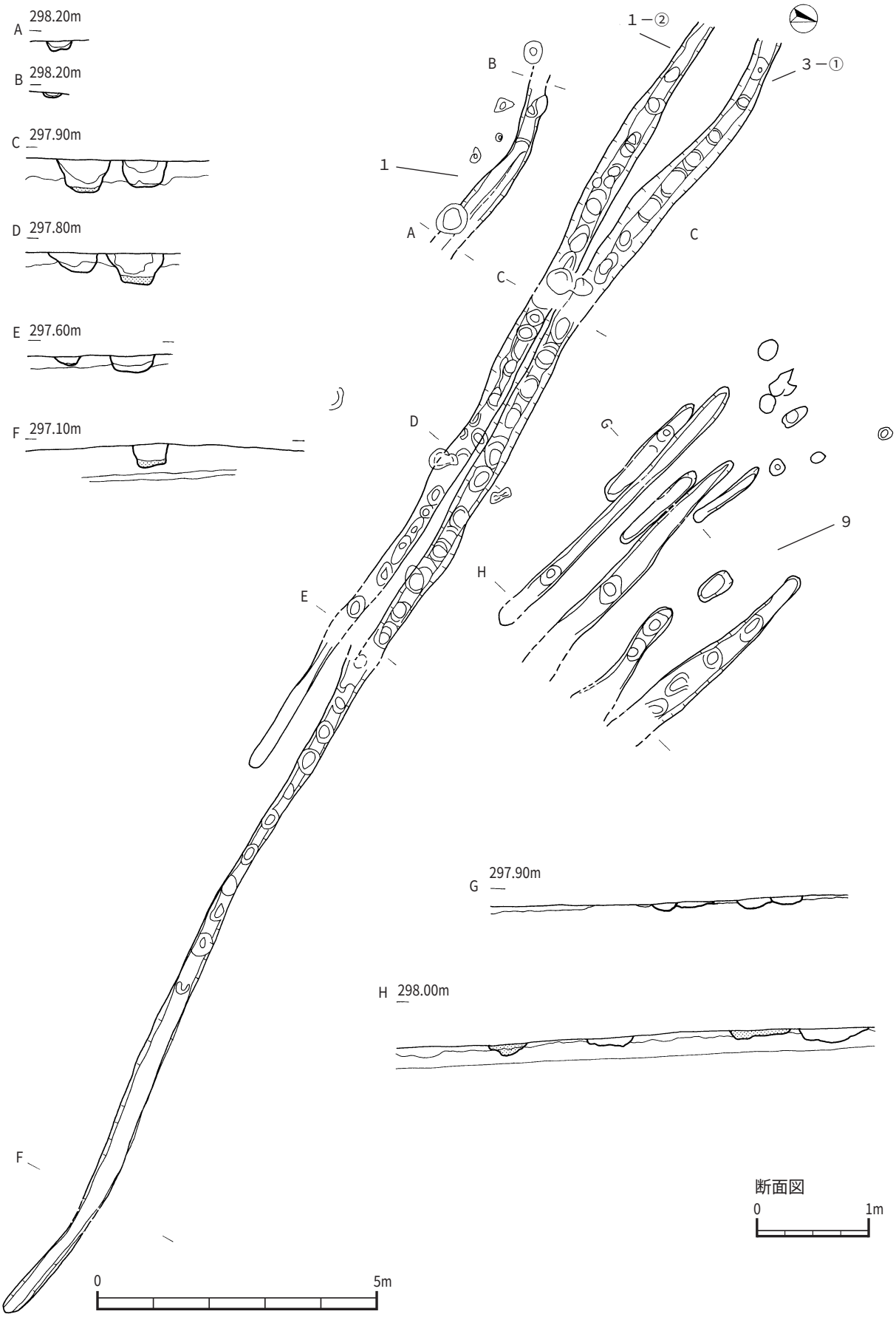
旧地形の台地平坦部に位置している。部分的に，底面で波板状遺構が確認できる。



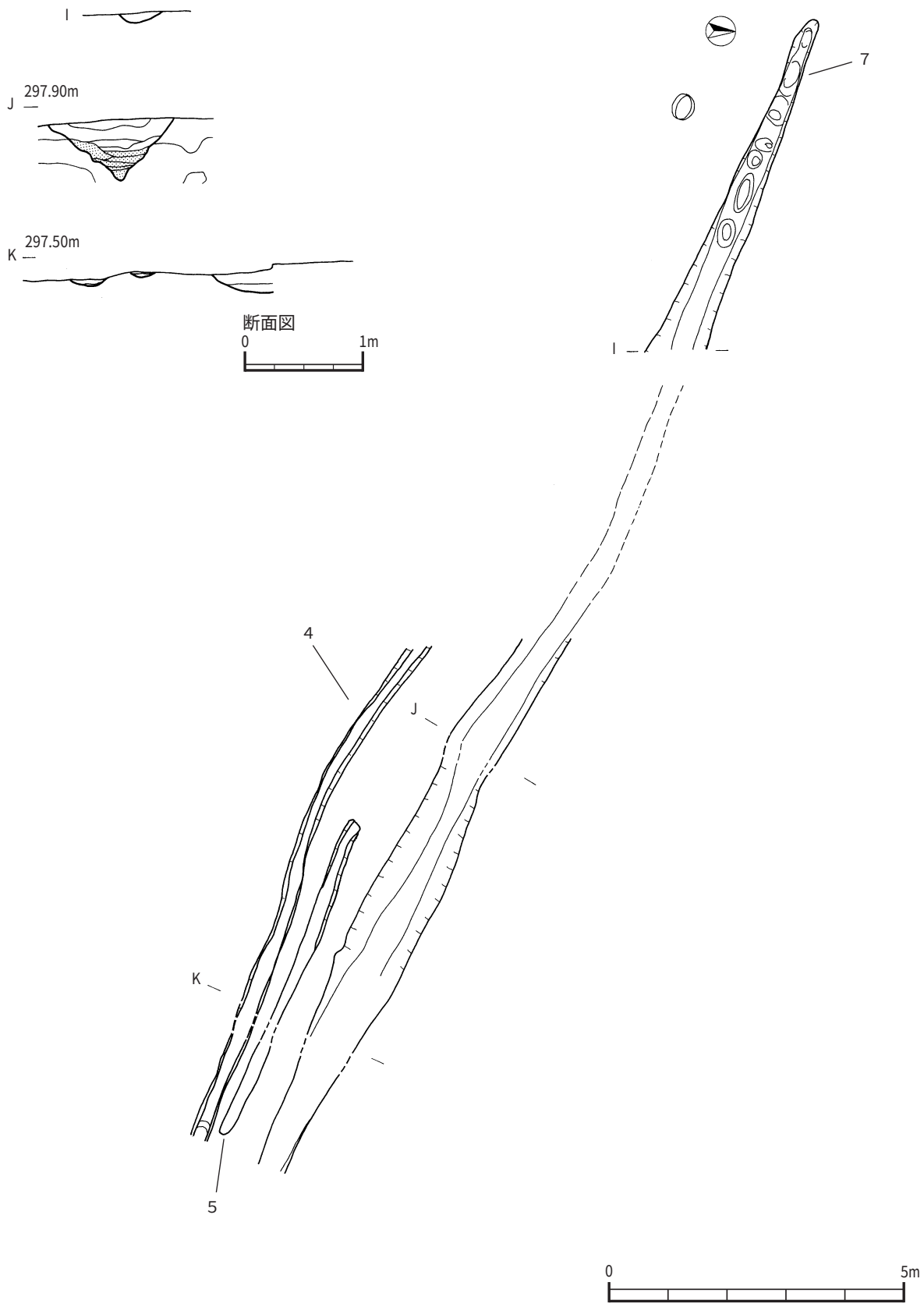
第83図　古墳時代・古代・中世の遺構配置・遺物出土状況図



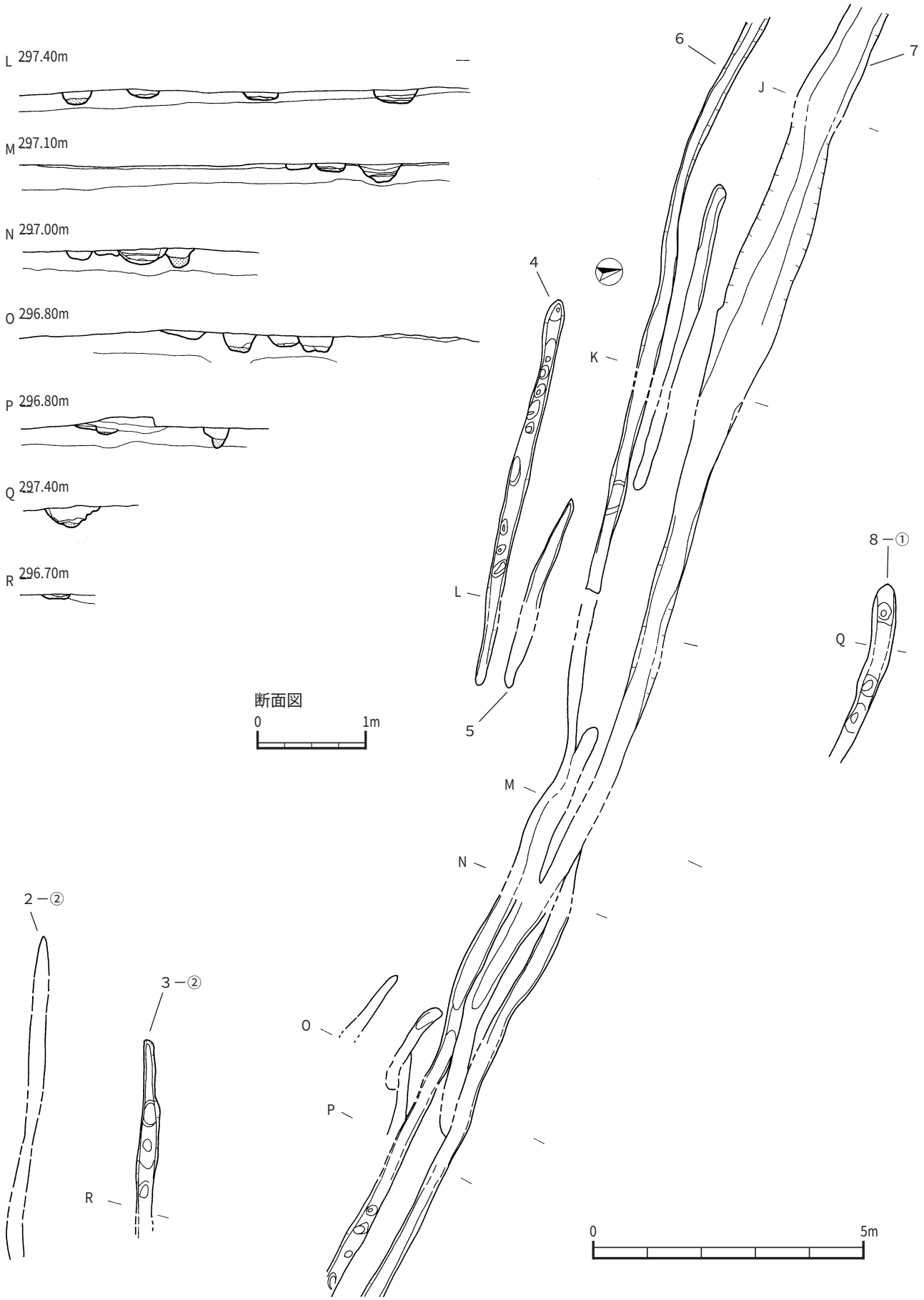
第84図　中世の溝状遺構全体図



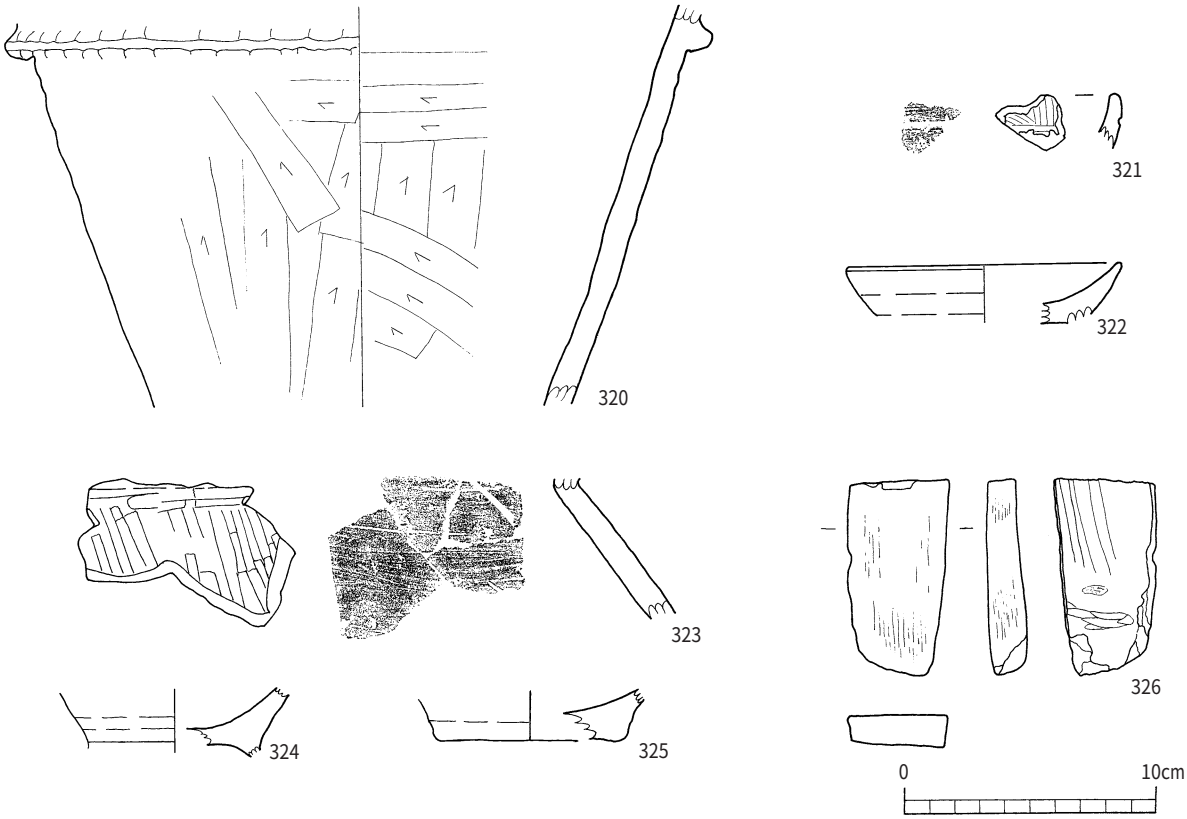
第85図　中世の溝状遺構(1)



第86図　中世の溝状遺構(2)



第87図　中世の溝状遺構(3)



第88図　古墳時代・古代・中世の遺物

第３項　遺物

成川式土器（320）

旧地形の台地上の平坦部に位置するＤ－24区で出土した。本遺跡で確認された古墳時代の遺物はこの１点だけである。胴部に突帯が回る甕であることから，笹貫タイプのものと考えられる

土師器（321～325）

図の321と324は，Ｄ・Ｅ－21区溝状遺構内で出土している。その他のものは，旧地形の谷部で出土している。

砥石（326）

旧地形の台地上の平坦部に位置するＤ－23区で出土した。正面・裏面・右側面に磨面を確認している。また，裏面は上部が最も使用されており，下から上にかけて窪む形になっている。

第15表　古墳時代・古代・中世遺物観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	文様・調整		胎土					色調		取上番号	その他
						外面	内面	石英	長石	雲母	砂礫	その他	外面	内面		
88	320	D–24	IIIa	成川式土器	甕	ヘラけずり	ヘラけずり		○		○	輝石	橙	橙	1417 1418 1419 1420 1421 1422	
	321			土師器	内黒	ロクロ	研磨		○		○	輝石	にぶい黄橙	褐灰	注記なし	
	322	E–21	IIIb	土師器	埦	ロクロ	ロクロナデ		○				にぶい黄橙	浅黄橙	3038	
	323	H–25	IIIb	土師器	甕	ロクロ	工具を利用したナデ		○		○	輝石	にぶい褐色	にぶい褐色	300 301	
	324	D–21	V	土師器	埦	ロクロ	ロクロナデ		○		○		浅黄橙	にぶい黄橙	3023	
	325	G–20	IIIb	土師器	坏	ヘラ切りはなし	ロクロ		○		○		浅黄橙	にぶい黄橙	562	
	326	D–23		砥石											1122	泥岩，重さ80g

第４節　近世・近代の調査

第１項　分布状況

近世から近代にかけての遺物包含層は，Ⅰ層の表土層に該当する。この層は，耕作やボラ除去作業，近代以降の県道建設などのため，削平や撹乱を受けて消失した部分が多い。そのような状況の中で，Ｄ・Ｅ－19～25区にかけて，一部包含層が残存し遺構・遺物を確認した。また，一部のⅠ層埋土中からは，安永８年（1779）の桜島噴出物のボラ（Ｐ２）を確認した。

第２項　遺構

Ｄ・Ｅ－19～25区に近世における掘立柱建物跡を４棟確認した。Ｐ２を含むものも確認していることから18世紀後半以降のものと思われる。柱穴痕の中には，鉄製品や茶碗などの遺物も確認している。４棟とも北東～南西を軸にした，ほぼ同じ方向に向いていたことが想定される。

また，柱穴痕の埋土を以下のように分類する。

①黒色土。２㎝大の黄褐色パミスが非常に多い。しまりはない。

②黒色土。１㎜以下の黄色砂粒土（Ⅳ層）を少量含む。

③黒色土と暗褐色土のブロック。Ⅲａ，Ⅲｂ，Ⅳａ層の混在。やわらかい。

④黒色土。５㎜大のにぶい黄褐色パミスが非常に多い。Ⅲ層とⅡ層の混在。しまりはない。

⑤黒色土。５㎜大のパミスが非常に多い。

⑥黒褐色土。５㎜大のパミスがやや多い。少しねばりがある。ややしまる。

⑦黒色土。２㎝大のにぶい黄褐色パミスを少量含む。

Ⓐ黒色土。１㎝大の褐色砂粒土（Ⅳ層）を少量含む。ややしまる。

Ⓑ黒色土。３㎜～１㎝大のにぶい黄色パミスが非常に多い。しまりがなく脆い。

Ⓒ黒色土。３㎜～１㎝大のにぶい黄色パミスが非常に多く，3～４㎝大の褐色土ブロック（Ⅳ層）をやや多く含む。しまりはなく脆い。

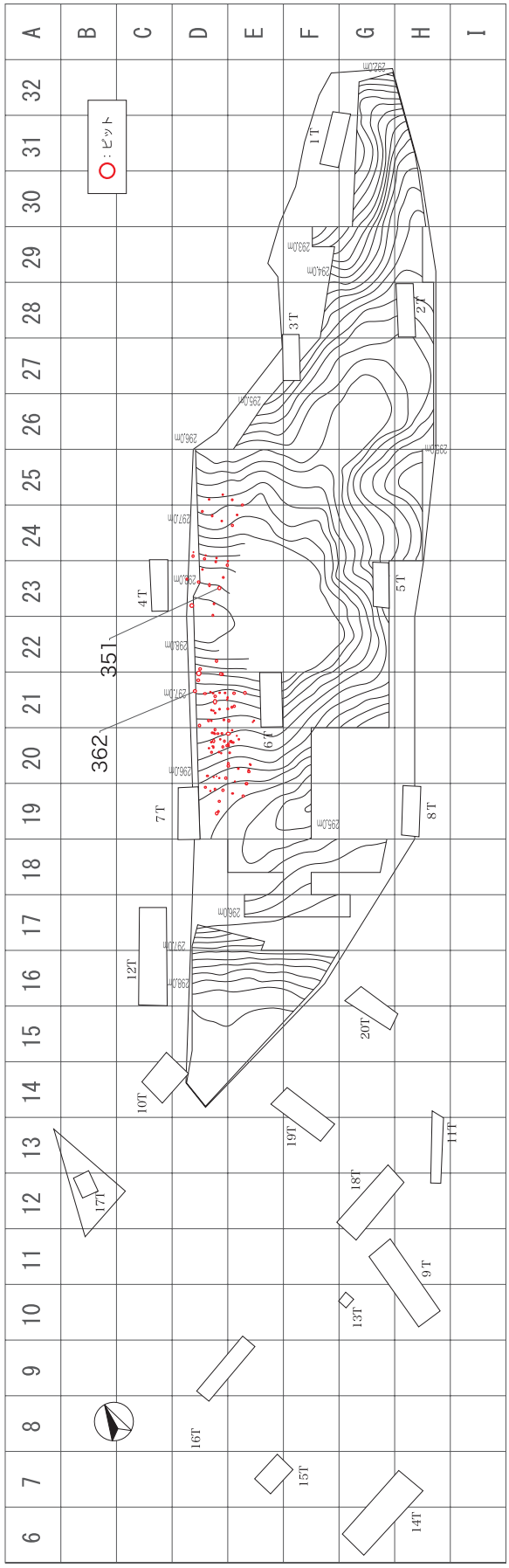
Ⓓ明褐色土。一度掘り上げたアカホヤ（Ⅴ層）を柱穴に入れたもの。柔らかい。

掘立柱建物跡１号（第91図）

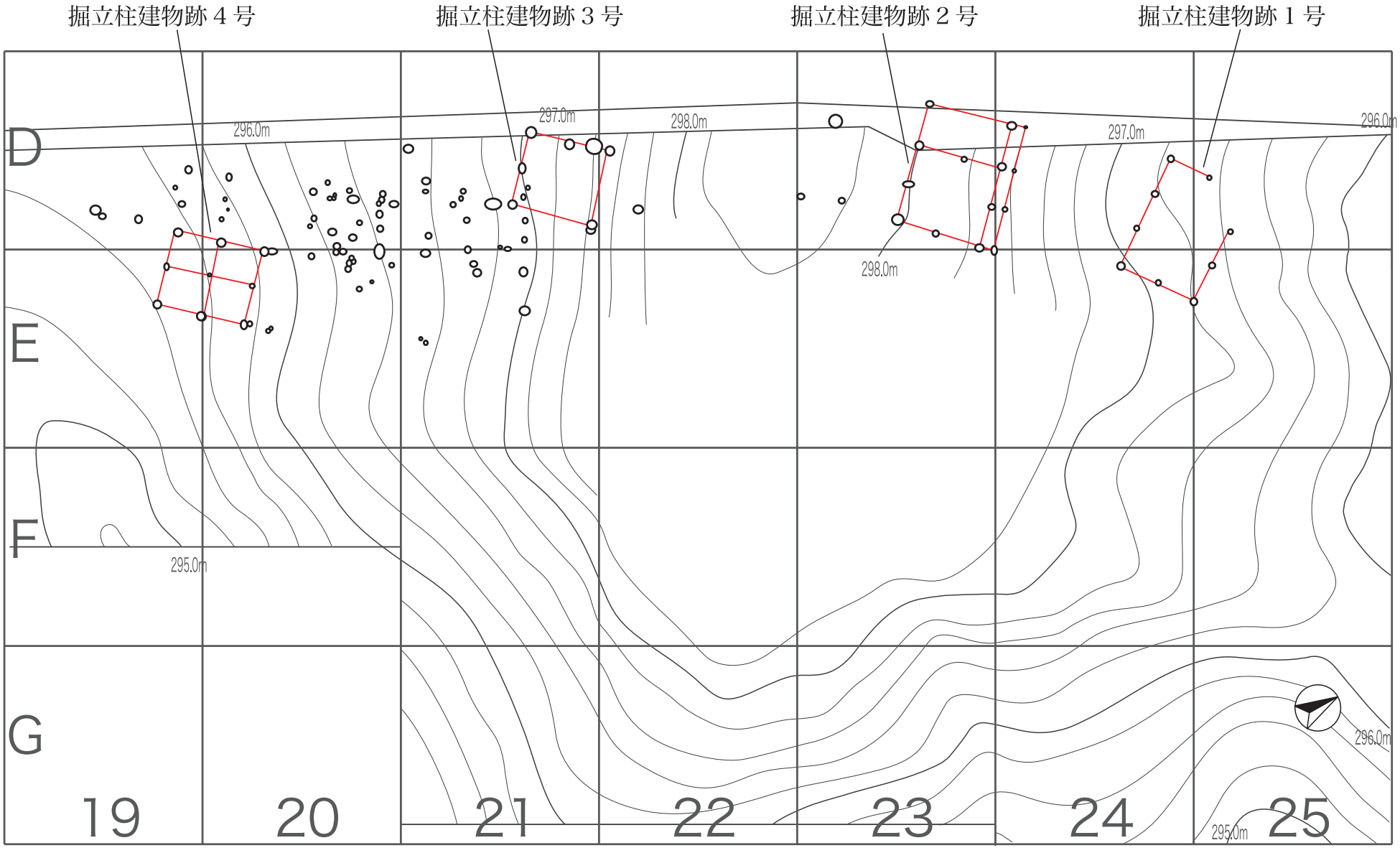
Ｄ・Ｅ－24～25区で検出した。２間×３間，約4.5m×７mの大きさである。

掘立柱建物跡２号（第92図）

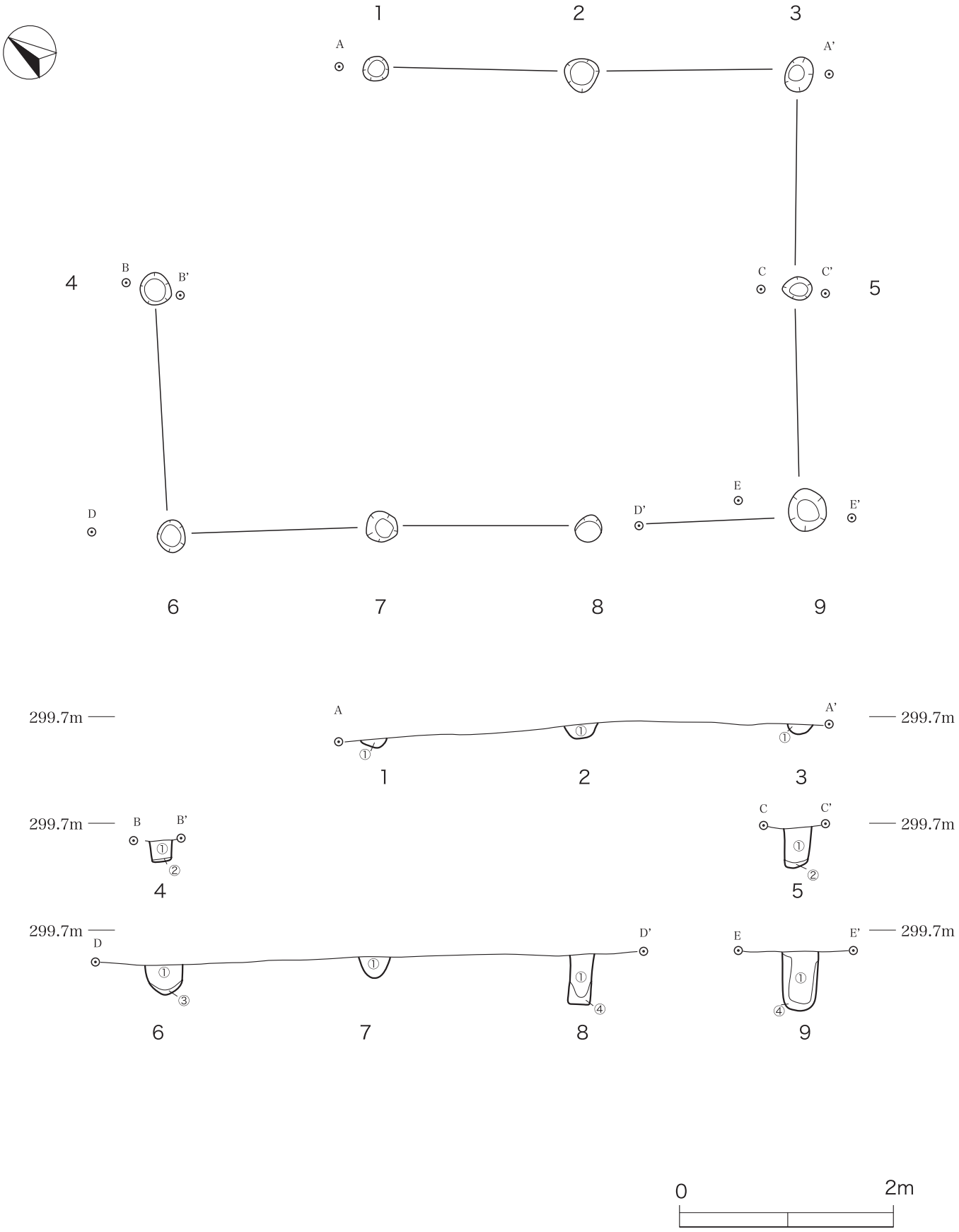
Ｄ－23～24区で検出した。２間×３間，約５m×７mの大きさである。柱穴11は，壁面に幅７㎝程度の先の丸い工具による工具痕が明瞭に残る。底面には，層にならないシミのような硬化面が残っていた。柱穴14からは蓋付茶碗が出土した。調査区外に広がる可能性がある。



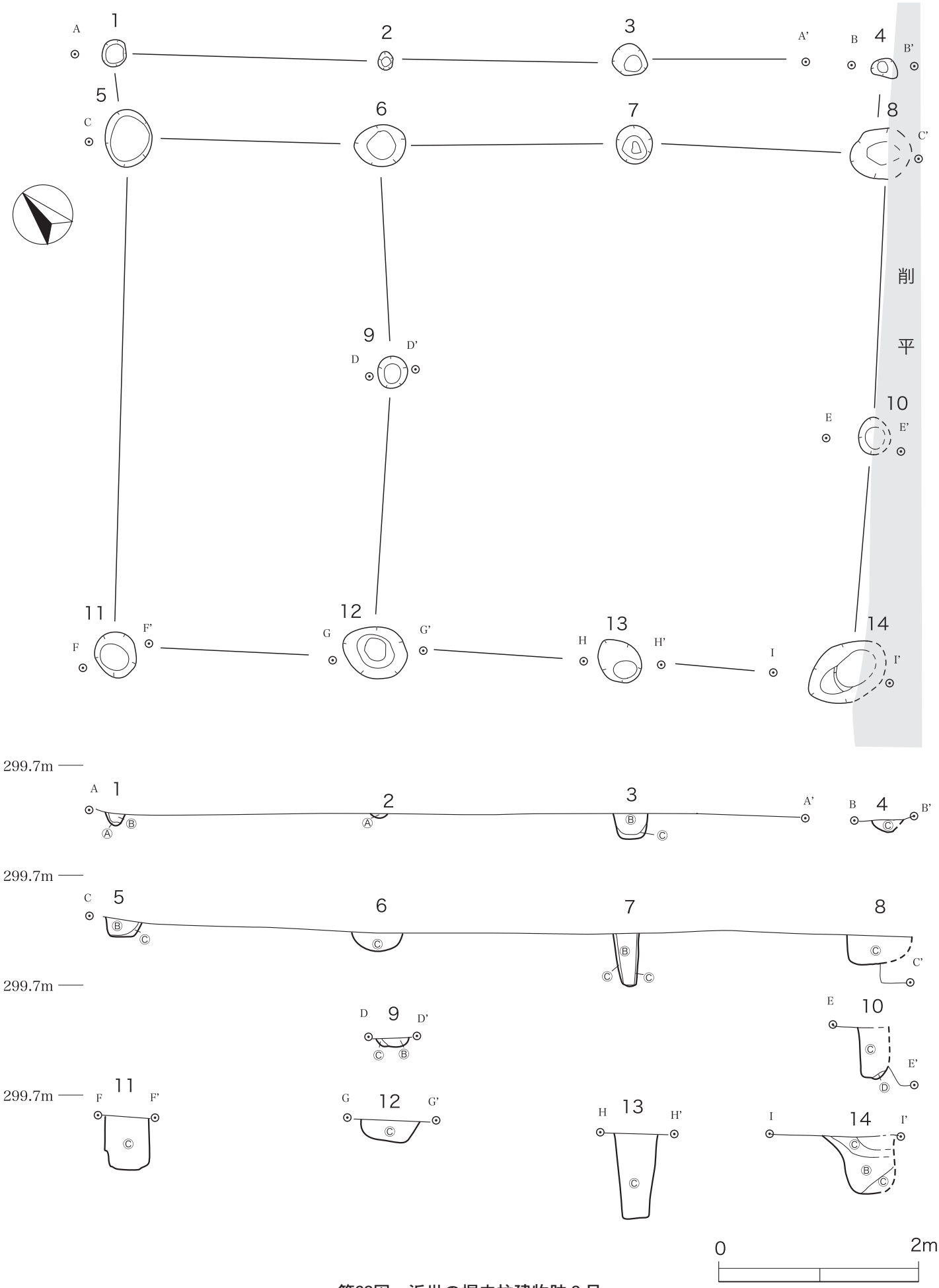
第89図　近世の遺構配置・遺物出土状況図



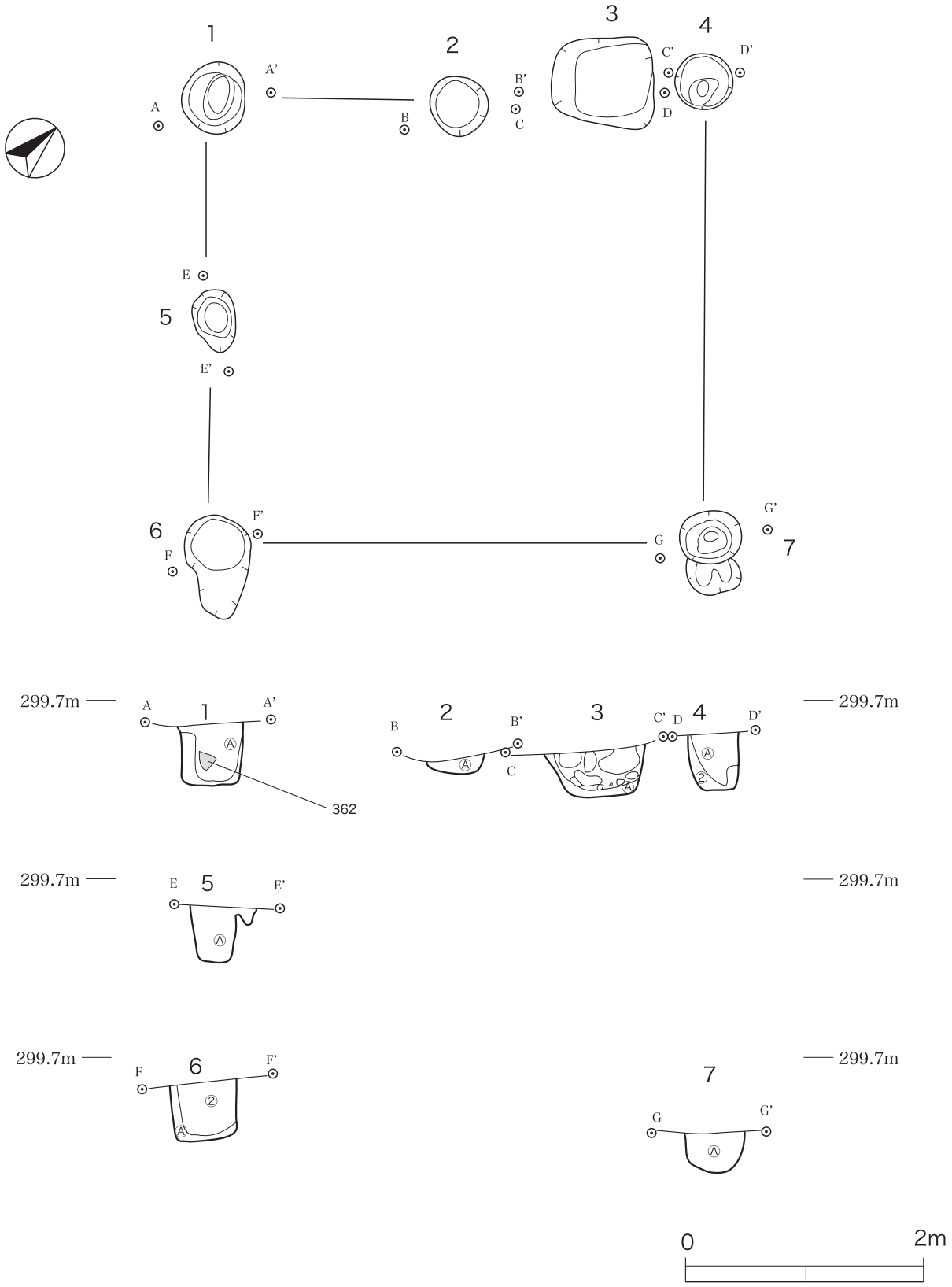
第90図　近世の掘立柱建物跡配置図



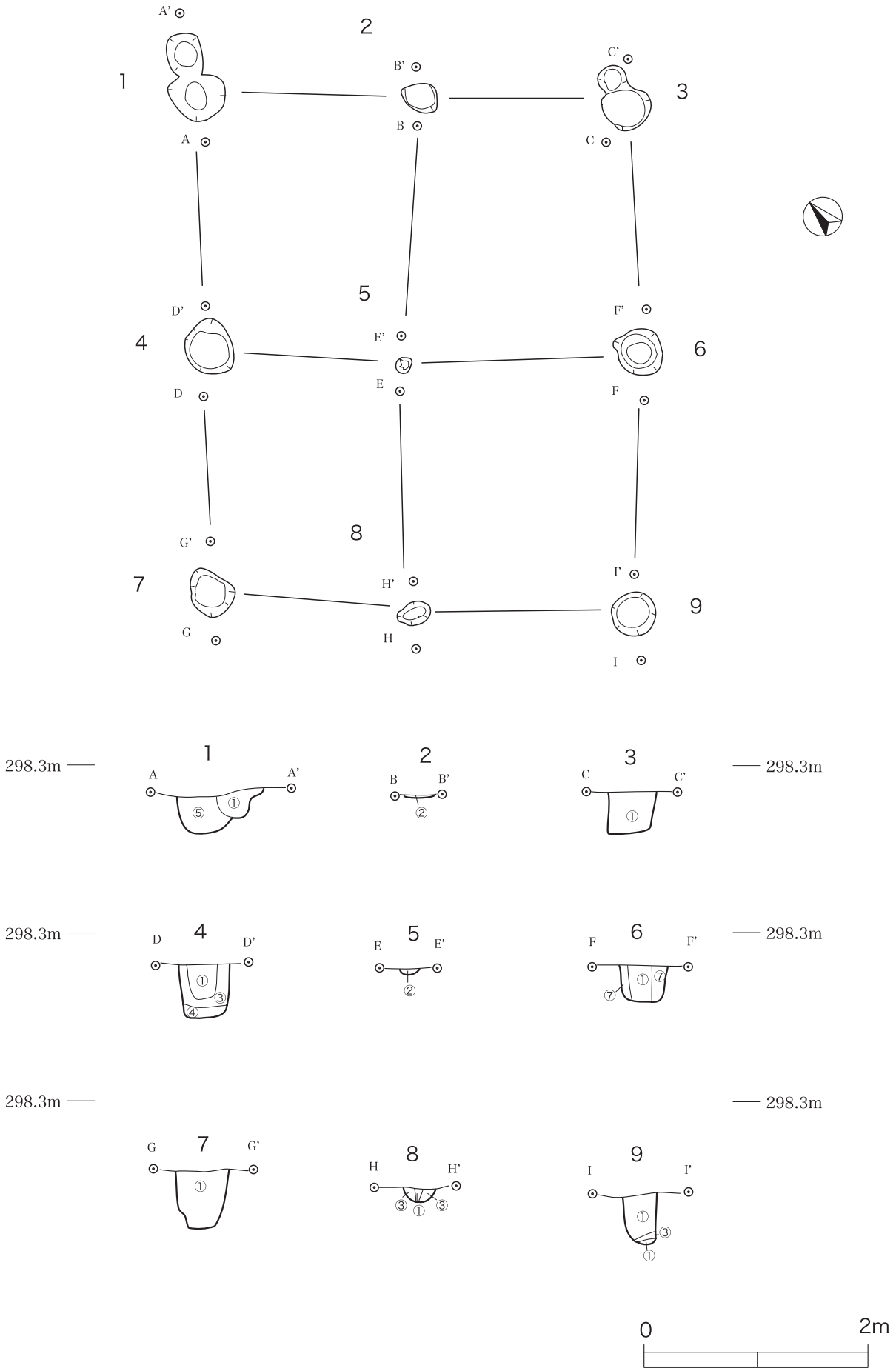
第91図　近世の掘立柱建物跡１号



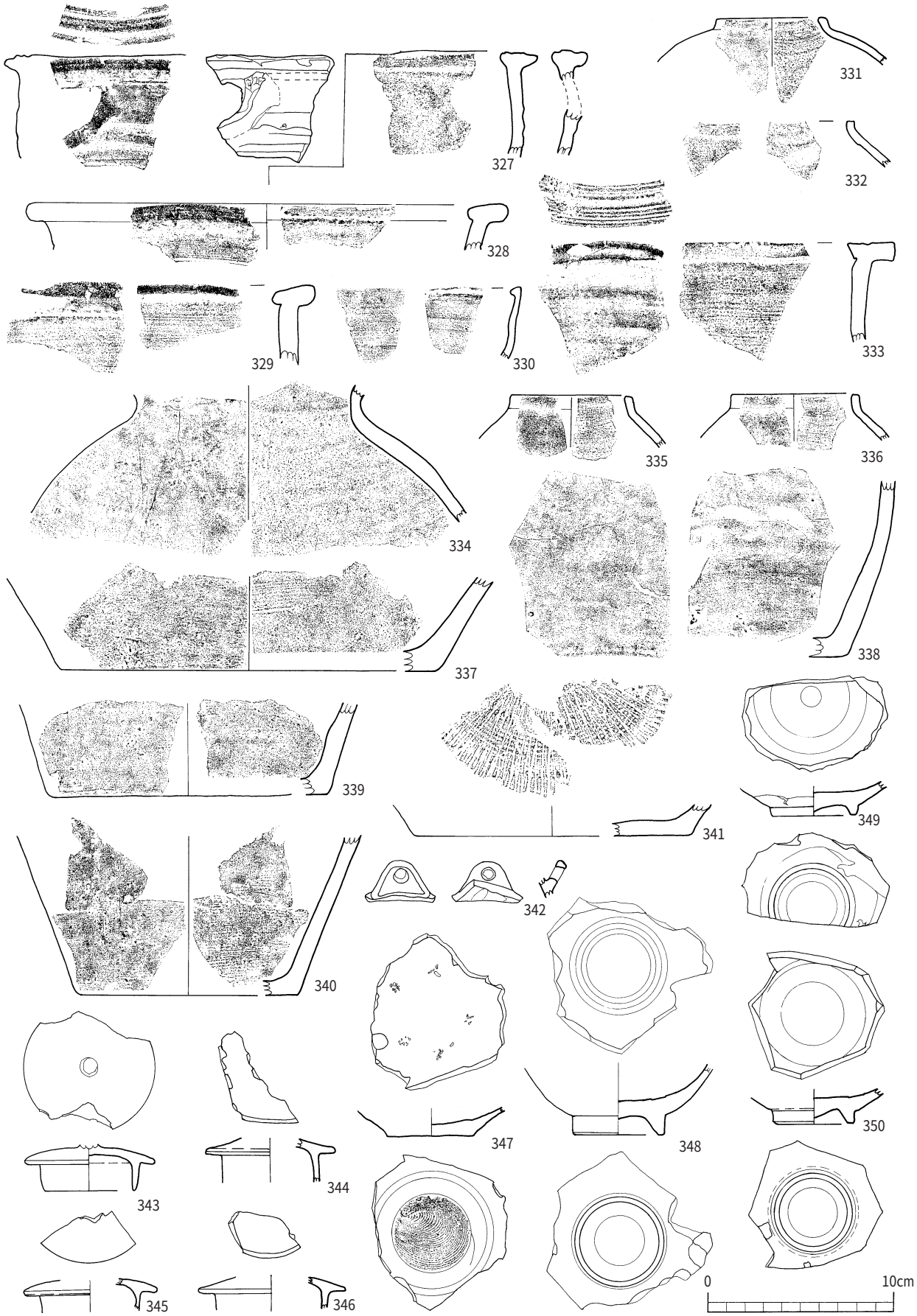
第92図　近世の掘立柱建物跡２号



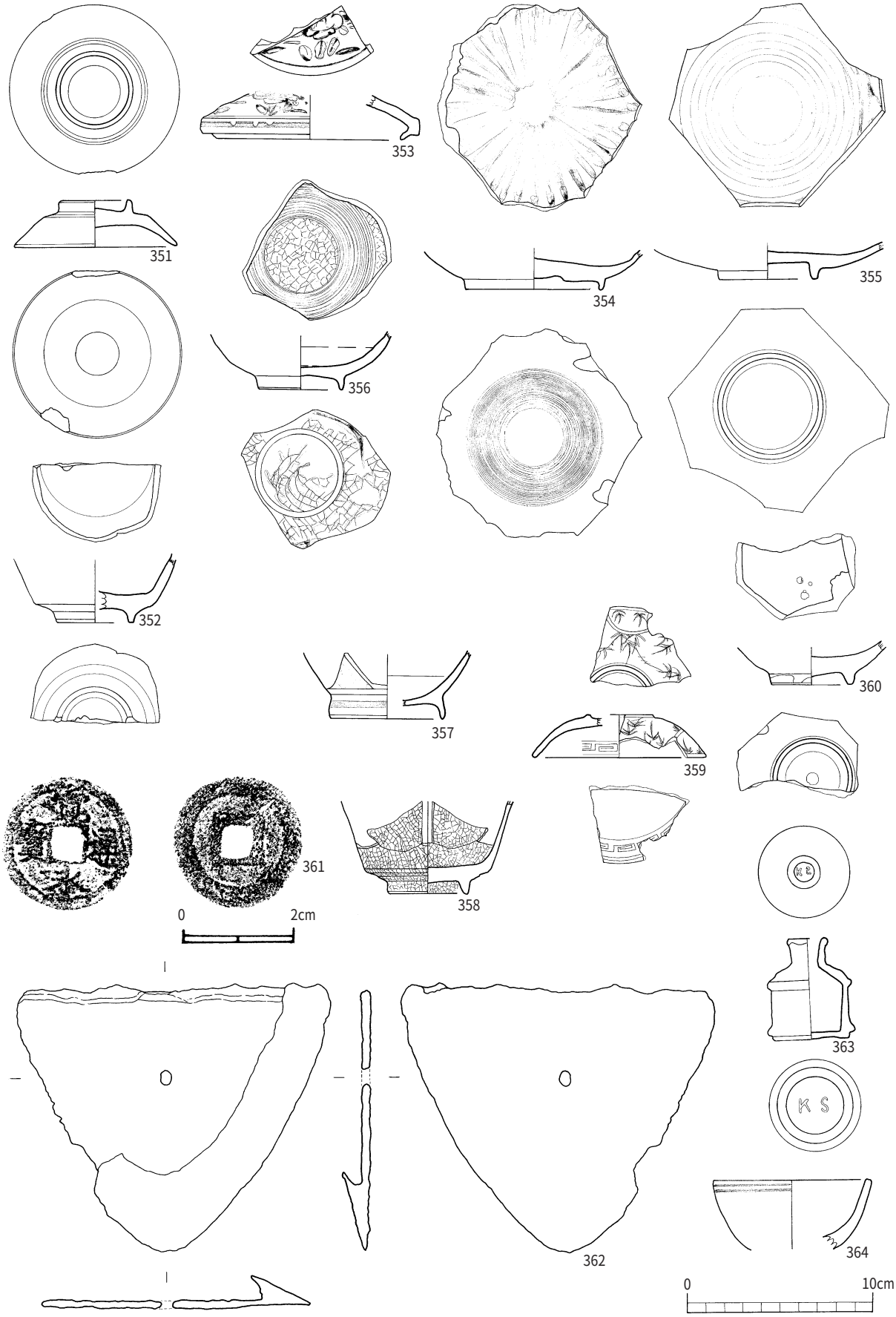
第93図　近世の掘立柱建物跡３号



第94図　近世の掘立柱建物跡４号


327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
0
10cm

第95図　近世の遺物



第96図　近世・近代の遺物

第16表　近世・近代遺物観察表

yh	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	文様・調整		胎土					色調		取上番号	その他
						外面	内面	石英	長石	雲母	砂礫	その他	外面	内面		
	327			薩摩焼	半胴甕				○				にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		口唇部以外全面施釉
	328		表採	薩摩焼	半胴甕								暗灰黄	暗灰黄		
	329		表採	薩摩焼									暗灰黄	暗灰黄		
	330		表採	薩摩焼	線香立								黒褐色鉄釉	明赤褐色		
	331			薩摩焼	土瓶	口縁部釉剥ぎ　施釉	施釉						にぶい黄褐色	赤褐色	注記無し	
	332			薩摩焼	土瓶								黒褐色鉄釉	明赤褐色	注記無し	
	333		表採	薩摩焼	半胴甕								暗灰黄	暗灰褐色		
	334	F−22	表採	薩摩焼	壺	鉄釉だれ							黒褐色鉄釉	暗灰黄鉄釉		
	335			薩摩焼	土瓶	釉							暗褐色	黒褐色	注記無し	
	336			薩摩焼	土瓶	釉							暗褐色	黒褐色	注記無し	
	337		表採	薩摩焼	半胴甕				○				暗灰黄	にぶい黄褐色		底部以外全面施釉
	338		表採	薩摩焼	半胴甕								黒褐色鉄釉	黒褐色鉄釉		
	339		表採	薩摩焼	半胴甕								黒褐色鉄釉	黄褐色		
	340		表採	薩摩焼	半胴甕								黒褐色鉄釉	黄褐色		底部以外全面施釉
	341		表採	薩摩焼	擂鉢		おろし						暗褐色	にぶい赤褐色		
	342			薩摩焼	茶家	施釉							黒褐色鉄釉	明赤褐色	注記無し	
	343	F−22	表採	薩摩焼	土瓶蓋	施釉							黒褐色	褐灰		
	344			薩摩焼	土瓶蓋								黒褐色	黒褐色	注記無し	
	345			薩摩焼	土瓶蓋								褐色	赤褐色	注記無し	
	346			薩摩焼	土瓶蓋								にぶい黄褐色	にぶい褐色	注記無し	
	347			薩摩焼	灯明皿										注記無し	
	348			薩摩焼	高台付き皿	釉タレ							明赤褐色	黒褐色	注記無し	目跡
	349			薩摩焼	高台付き皿	釉							灰褐色	灰褐色	注記無し	輪積痕
	350	F−22	表採	薩摩焼	皿型	釉かけ	蛇目痕						褐色	褐色		
	351	D−23	SP23		蓋付茶碗	釉有り	目跡有り						灰白	灰白	1123	輪積痕
	352				蓋付茶碗	染付け							灰白	灰白		
	353			染付									灰白	灰黄		
	354			染付	高台付き皿	輪花							灰白	灰白		
	355			染付	陶器	高台釉剥ぎ	目跡有り						灰色	灰色		
	356			染付	湯呑	高台釉剥ぎ							灰白	灰白		
	357			染付	磁器	染付釉	染付釉						灰白	灰白		
	358				皿								灰色	灰色		
	359			染付	陶器								灰白	灰色		
	360				高台付き皿	釉タレ	目跡有り						暗灰褐色	灰色		
	361			古銭	寛永通宝											古寛永
	362			鉄製品	鍬											
	363			ガラス製品	薬壜	気泡							薄緑	薄緑		底面にK. S.の凹み
	364	F−22	表採	統制食器	湯呑	二条の緑線							白, 緑	白		

掘立柱建物跡３号（第93図）

Ｄ－21～22区で検出した。１間×１間，約４ｍ×4.５ｍの大きさである。柱穴３からは，鉄製品や平鍬と思われる鉄製農具が出土した。

掘立柱建物跡４号（第94図）

Ｄ・Ｅ－19～21区で検出した。２間×２間，約４ｍ×５ｍの大きさである。調査区外に広がる可能性がある。

第３項　遺物

遺物は，一括取上遺物が大半であり，出土地点を特定できるものは少ない。この中で，図351の蓋付茶碗の蓋部と，図362の平鍬と考えられる鉄製農具は，掘立柱建物跡の柱穴痕から出土した。

薩摩焼（327～350）

図327には注ぎ口が付いていたと思われる。図330は線香立ての口縁部と考えられる。図331，332，335，336は土瓶の口縁部であると考えられる。図341は擂鉢の底部であると考えられる。図342は土瓶の耳部であると考えられる。図343，344，345，346は土瓶の蓋と考えられる。図347は灯明皿であると考えられる。図349，350は19世紀の姶良・加治木系のものであると考えられる。

平佐焼とその他の陶磁器（351～360）

図351，352，354は平佐焼であると考えられる。うち，351，352は蓋付茶碗の蓋と茶碗であると考えられる。図356，358，360は18世紀後半の肥前系のものであると考えられる。

古銭（361）

寛永通宝である。文字の判別が難しいが，古寛永の可能性がある。

鉄製品（362）

掘立柱建物跡３号の柱穴３から出土した。牛馬で牽いて使用する平鍬の可能性がある。

ガラス製品（363）

緑色の瓶で，底面に「K」「S」型の凹みがある。薬瓶であると考えられる。

統制食器（364）

白色の湯呑で，濃オリーブ色の二本線が口縁下の胴部を廻っている。戦時下の昭和16年（1941）３月以降に製造された，工場食器であると考えられる。

第６節　まとめ

第１項　遺構・遺物について

１　遺構

本遺跡における検出遺構は，旧石器時代と，縄文時代早期・中期・後期，古代・中世，近世に分けられる。

旧石器時代該当層からは，礫群を２基検出した。縄文時代該当層からは，早期の集石９基，土坑２基，落とし穴状遺構19基，中期の落とし穴状遺構５基，後期の竪穴住居跡１軒を検出した。中世該当層からは，溝状遺構16条を検出した。近世該当層からは，掘立柱建物跡４棟を検出した。

縄文時代の生活範囲は，時期により変化している。早期前葉においては，台地北側に突き出た尾根の周辺で，集石，落とし穴状遺構が多くみられる。遺物も，その南北の斜面から出土している。早期後葉においては，南斜面側に重点が移っている。前期から中期にかけては，遺構・遺物とも激減するが，さらに南側へ移っている。中期の落とし穴状遺構は，台地北側に突き出た尾根と，その南側の台地との間の谷部を下っている。遺物は台地上の唐尾遺跡に隣接する地点から出土している。後期から晩期にかけては，再び北側に移り，台地北側に突き出た尾根の先端部付近で，掘立柱建物跡を検出した。遺物も，北斜面側に集中して出土している。また，南側台地上の，唐尾遺跡に隣接する地点でも出土している。

なお，縄文時代の落とし穴状遺構については，第２項にて詳述する。以下，時代ごとに記述する。

・旧石器時代

礫群を，台地から突き出た小尾根の頂端部に形成された平坦地端部で２基検出した。被熱のあとがみられる礫で構成され，石材は，頁岩，砂岩，凝灰岩が多い。礫群１号の落ち込みには，ＸⅡ層の埋土が見られる。

・縄文時代早期

集石を，台地と小尾根の接続部で１基，台地から突き出た小尾根頂端部の北側落ち際で６基，小尾根先端部で２基検出した。石材は，凝灰岩，砂岩，頁岩が多い。大半の礫が，被熱による赤化のあとがみられる。落ち込み内の埋土は，Ⅶ・Ⅷ層土が見られるものと，Ⅵ層起源のパミスが混在したⅦ層土がみられるものがある。

土坑は，台地から突き出た小尾根頂端部に形成された平坦地中央部で１基，台地から谷部に下る南斜面上で１基を検出した。１号からは，多数の礫の他に黒曜石や土器片，炭化物もみられる。２号は，隅丸長方形で底部は平坦である。埋土はⅧ層土で，2号には黄色パミスや１㎜程度の白色粒も混在する。

落とし穴状遺構を，　Ｄ－19区からＨ－27区で19基検出した。内容については，第２項で詳述する。

・縄文時代中期

落とし穴状遺構を，Ｄ～Ｇ－20区を中心に５基検出した。内容については，第２項で詳述する。

・縄文時代後期

竪穴式住居跡を，台地から突き出た小尾根の平坦部で１軒検出した。形態は3.5×2.5mの楕円形で，中央に柱穴が１ヶ所，中央から南西方向には落ち込みがみられるものである。埋土は黒褐色土で，黄褐色土（Ⅳb層）を掘りこんでいる。

・古代・中世

溝状遺構を，台地上から谷部に向かう地形で16条検出した。遺構内からは，土師器が出土している。

・近世

掘立柱建物跡を，台地平坦部で４棟検出した。柱穴痕の埋土に，安永８年（1779）の桜島噴出物であるＰ２を確認している。埋土中からは，18世紀後半以降とみられる陶磁器が出土している。また，発掘調査時に地域から，関山は関所に由来すると伝聞した。北東に位置する通山地区には，近世の番所の存在が知られているが，関山については明らかにできなかった。

２　遺物

本遺跡における出土遺物は，旧石器時代の小型ナイフ形石器文化期と細石刃文化期，縄文時代の早期・前期・中期・後期・晩期の時期，古墳時代，古代，中世，近世，近代に分けられる。

旧石器時代の石器の中には小型ナイフ形石器文化期と細石刃文化期の混在層からの出土遺物など時期の特定が難しい石器も含まれているが，本報告書ではナイフ形石器文化期の遺物として紹介している。石材については不純物を多く含みガラス質の強い性質のOB-Bや，不純物が少なく透明度が高い性質を持つOB-Cが多く出土しており，ガラス質が強く光沢があり透明感のない性質を持つOB-Aや安山岩，頁岩，砂岩，チャート等が僅かに出土している。

以下，時代ごとに記述する。

・旧石器時代小型ナイフ形石器文化期

小型ナイフ形石器，使用痕剥片，スクレイパー，二次加工剥片，石核，礫器，凹石，敲石が確認できた。遺物量は少ない。しかし，出土した石核からは打面と作業面を交互に入れ替える剥離，単一方向から作出した平坦な面の剥離，礫面上で複数回の打面転移を行う剥離，単一方向から円礫の自然面の剥離など，多様な剥片剥離技術が存在していたことを確認できた。

・旧石器時代細石刃文化期

細石刃，細石刃核，掻器，削器，石核，石鏃，小型の尖頭器が確認できた。石鏃は，旧石器時代の遺物包含層から出土したと思われる。この時期では九州における細石刃文化期においては古相に位置する細石刃核である野岳・休場系の細石刃核が出土している。

・縄文時代早期

土器は，加栗山式土器，吉田式土器，石坂式系土器，下剥峯式土器，円筒形条痕文土器，変形撚糸文土器，平栫式系土器，塞ノ神式土器，右京西式土器を確認できた。加栗山式土器と吉田式土器の出土量が多い。加栗山式土器に分類したものの中には，「札ノ元Ⅶ類土器」に類似するものも含まれる。

また，大型の変形撚糸文土器が，小型の撚糸文土器と入れ子状で出土し，撚糸文土器には，パイプ状ベンガラを成分とする赤色顔料が貯蔵されていた。出土状況は，早期の本体部である尾根と，谷を挟んで反対側の南側の台地上のⅦ層で出土し，周りに遺構・遺物は少なく，掘りこみは確認されていない。なお，本遺跡では赤色顔料が付着した遺物および変形撚糸文土器の出土は，この他にはない。本県では，この時代での類例はなく，特に注目される。

石器は，石鏃，楔形石器，スクレイパー，二次加工剥片，微細剥離痕剥片，石核，打製石斧，磨石，敲石，凹石，ハンマー，石皿が確認できた。この時期は本遺跡では遺物量が一番多く，特に石鏃の出土量は豊富で，小型の石鏃から剥片を使用した石鏃まで多様の種類の石鏃が出土している。石鏃の中には形態や制作技術に草創期の特徴を持っている物もある。

・縄文時代前・中期

土器は，曽畑式系土器を確認できた。調査区南側の唐尾遺跡に隣接する地点で出土した。滑石を極めて多く含み，剥落が激しいものである。

石器は，石鏃１点とスクレイパー１点を確認できた。本遺跡の縄文時代では最も出土量が少ない。２つとも別々のトレンチから出土している。

・縄文時代後・晩期

土器は，後期土器として岩崎上層式土器，松山式土器北久根山式土器，市来式土器，西平式土器，中岳式土器が確認できた。晩期土器は，入佐式土器，深鉢土器，浅鉢土器が確認できた。

石器は，石鏃，石匙，スクレイパー，石核，磨石，敲石，石皿が確認できた。この時期の石材は主に安山岩，砂岩，頁岩，チャート等が使用されている。なかでも310の石匙や318の磨石は砂質安山岩や輝石安山岩等，数は少ないが複数の種類の安山岩が石材に使用されている。また,312の石匙は頁岩製で表面に鉄錆が浮かび上がっているという特徴を持っている。

・古墳時代

成川式土器を１点確認できた。笹貫タイプと考えられ，台地の平坦部にあたるＤ－24区で出土している。本遺跡では，弥生～古墳時代の遺物量が最も少ない。

・古代・中世

土師器を数点，砥石を１点確認できた。土師器のうち２点は溝状遺構から出土している。

・近世

薩摩焼（姶良加治木系含む），平佐焼，肥前系の陶磁器，寛永通宝，鉄製品を確認できた。うち２点は，掘立柱建物跡の柱穴痕から出土している。陶磁器の器種は，半胴甕，高台付皿，蓋付茶碗，土瓶，擂鉢，灯明皿，線香立である。18世紀後半から19世紀半ばの時期と考えられるものが多い。また，鉄製品は平鍬と考えられる。

・近代

薬壜と考えられるガラス製品を１点，統制食器と考えられる陶磁器を１点確認できた。いずれも，一括取り上げ遺物である。統制食器は，戦時中の工場食器の湯呑であった可能性がある。

また，発掘調査時の地域での聴き取りから，調査区には近代に病院が存在したことを確認している。

（長﨑慎太郎・岩下直樹）

第２項　縄文時代の落とし穴状遺構について

１　縄文時代早期の落とし穴状遺構

19基の落とし穴状遺構は,調査区のほぼ中央，Ｄ－19区からＨ－27区にかけて検出された。標高296ｍから298ｍにかけて,ほぼ谷頭付近のコンターラインに沿うように検出されている。この辺りは，調査区内で最も標高が高い場所である。長軸の向きについては，全ての落とし穴状遺構の長軸の向きを揃えたという様子や，地形に沿って長軸の向きを揃えたという様子はみられないようである。どちらかといえばコンターラインに直交するものが９基，平行するものが10基となっており，長軸の向きに，特に共通性はないようである。隣り合う落とし穴状遺構の間隔については，最短で約４ｍ，最長で約23ｍ，平均で約10ｍとなっている。

平面の形状については，楕円形のものが17基，卵形のものが２基である。19基の上面の長軸の平均は146㎝，短軸の平均は93㎝であり，底面の長軸の平均は76㎝，短軸の平均は39㎝である。断面の形状については，検出面から平均で約30㎝のところで段を持ち，そこからほぼ垂直に掘り込まれるという形状を持つものがほとんどである。検出面からの深さについては，19基の平均が163㎝である。

逆茂木痕と思われる底面のピットについては，落とし穴状遺構13号と19号を除き，全ての落とし穴状遺構の底面のほぼ中央から，それぞれ１基ずつ検出された。17基の底面のピットの径の平均は８㎝，検出面からの深さは51㎝であり，逆茂木は地面に直接打ち込まれたものではないかと思われる。埋土については，全ての落とし穴状遺構の上部が，自然堆積したと思われるＰ－13を含むⅧ層土に覆われている。Ｐ－13は底部に近づくにつれ量が少なくなっていくが，ほぼ全ての埋土中にみられる。そ

落とし穴状遺構16号完掘状況

のため，時期については，Ｐ－13降下の直前に近い頃ではないかと考えられる。

しかし，落とし穴状遺構14号と落とし穴状遺構16号の埋土の堆積状況については，他の落とし穴状遺構とは異なる点がみられる。上部がＰ－13を含むⅧ層土に覆われているという点は同じであるが，底面だけではなく，埋土の中央付近にも逆茂木痕と思われる跡がみられ，周辺の埋土は，中央の逆茂木痕と思われる跡を避けるようにして堆積している。逆茂木がまだしっかりとしている状況で，何らかの理由で人為的に埋められたのではないかという様子もうかがえる。その場合，底面付近にもＰ－13がみられることから，これらの落とし穴状遺構が埋められたのは，Ｐ－13降下後ではないかとも考えられる。そのため，詳しい時期の判定については，今後の考察を待つ必要がある。

また，落とし穴状遺構２号，落とし穴状遺構６号，落とし穴状遺構９号，落とし穴状遺構10号，落とし穴状遺構16号，落とし穴状遺構17号では，完掘後の比較的硬いＸＶ層からＸⅧ層にかけた壁の一部に，掘削工具痕と思われる跡が確認された。写真では確認しづらいが，調査者は２～４㎝程度の棒状の物ではないかと述べている。

２　縄文時代前期以降の落とし穴状遺構

５基の落とし穴状遺構が検出された。

落とし穴状遺構１号は，埋土の底部にアカホヤ火山灰を含むことから，時期については，アカホヤ火山灰降下の直前に近い頃ではないかと考えられる。

落とし穴状遺構２号は，底部のアカホヤ火山灰の二次堆積土にＰ－11が多く混ざるが，底部のＰ－11は，壁から崩れ落ちたものと思われる。時期については，アカホヤ火山灰堆積後と考えられる。

落とし穴状遺構３号は，中部から底部にかけてはアカホヤ火山灰の二次堆積土，上部は御池火山灰土である。時期については，アカホヤ火山灰堆積後と考えられる。

落とし穴状遺構４号は，検出されたのはⅦ層上面であるが，さらに上位で検出されるものと思われる。底部に御池火山灰を含むことから，時期については，御池火山灰降下の直前に近い頃ではないかと考えられる。

落とし穴状遺構５号は，検出されたのはＶb層上面であるが，さらに上位で検出されるものと思われる。形状は異なるものの，埋土の堆積状況は落とし穴状遺構３号に近く，時期についても，落とし穴状遺構３号と同じ頃ではないかと考えられる。

落とし穴状遺構１号と落とし穴状遺構４号については，単独で使用されていた可能性が高いが，落とし穴状遺構２号，落とし穴状遺構３号，落とし穴状遺構５号については，同時期に使用されていた可能性も考えられる。

（木内敏生）

（参考文献）

栗山葉子2006「変形撚糸文の原体復元－桐木耳取遺跡の変形撚糸文土器から－」『南九州縄文通信№16』

黒川忠広2004「南九州貝殻文土器に見られる地域性について」『縄文の森から』第２号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

㈶岐阜県陶磁資料館2001「戦時中の統制されたやきもの」『特別展図録』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「九日田・供養之元・前原和田遺跡」『発掘調査報告書36』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「瀬戸頭Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡」『発掘調査報告書85』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「南田代遺跡」『発掘調査報告書88』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「桐木耳取遺跡」『発掘調査報告書91』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006「伏野・隠迫・枦堀・仁田尾・御仮屋跡遺跡」『発掘調査報告書101』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「堂園平遺跡」『発掘調査報告書104』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「堂平窯跡」『発掘調査報告書106』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「仁田尾中Ａ・Ｂ遺跡」『発掘調査報告書110』

変形撚糸文土器内入れ子に貯蔵された赤色顔料の科学分析

鹿児島県立埋蔵文化財センター

本遺跡出土の赤色顔料について，次のとおり分析を行った。

1　試料

変形撚糸文土器内入れ子に貯蔵された赤色顔料

2　観察・分析方法

⑴　形状観察

走査型電子顕微鏡（日本電子製ＪＳＭ－5300ＬＶ）による2000～7500倍観察を行った。

⑵　蛍光Ｘ線分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製ＸＧＴ－1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径100μｍ）を使用した。分析対象は元素番号11のナトリウム（Na）からウラン（U）までである。分析条件は次のとおりである。

Ｘ線照射径	：100μｍ
測定時間	：100ｓ
Ｘ線管電圧	：50ｋＶ
電流	：260μＡ
パルス処理時間	：Ｐ3
Ｘ線フィルタ	：なし
試料セル	：なし
定量補正法	：スタンダードレス

胎土の分析については，断面の一部を削り，新鮮な胎土面を出して，同じ条件で分析した。

3　結果（電子顕微鏡写真及び蛍光Ｘ線分析結果は次項掲載）

⑴　形状観察

サイズの土器内にあふれるほどの量が貯蔵されている。出土時の色調は鮮明な赤褐色であった。電子顕微鏡観察により，パイプ状の粒子を確認した。

⑵　蛍光Ｘ線分析

分析の結果，強い鉄（Fe）のピークが得られた。不純物がほとんど無い，良質のベンガラである。

4　鹿児島県内における赤色顔料の観察例

顔料とは着色剤の一種で，水には溶けない微粒子である。赤色顔料はその主成分から「ベンガラ」，「朱」，「鉛丹」の３種類に分けられ，ベンガラは酸化第二鉄（Fe_2O_3），朱は硫化水銀（HgS），鉛丹は四酸化三鉛（Pb_3O_4）を主成分とする。

赤色顔料の歴史は，古いもので1.5～２万年前に北海道，東北地方においてベンガラが付着した石器や顔料原石が出土した例があり，朱は縄文時代後期から，鉛丹は古墳時代から使われている。これまでに鹿児島県内で出土した縄文時代の赤色顔料は，ほとんどが土器に付着したベンガラであり，朱の検出は数例しかない。

当センターでは，遺跡から出土するベンガラについて，電子顕微鏡観察により次の２種類に分類している。

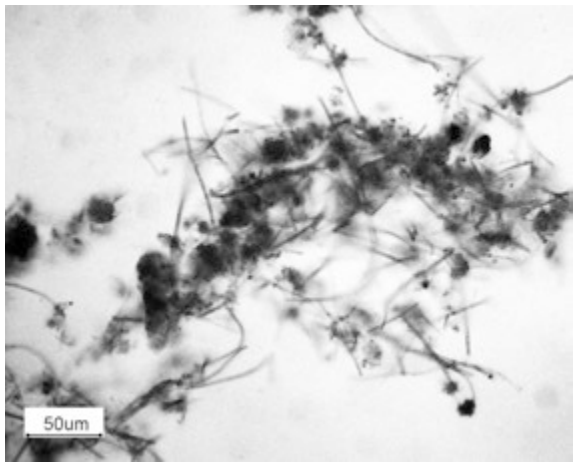
○レプトシリックス（Leptothrix）などの鉄細菌（鉄バクテリア）に由来するパイプ状の形状をもつ粉末

○天然の原石に由来する不定形の粉末

これまでに，県内各地の多くの遺跡で赤色顔料を確認しており（観察表参照），岩本遺跡や稲荷原遺跡の岩本式土器に付着していた例など，縄文時代早期初頭にはすでに使われていたことが分かっている。

本遺跡のように，貯蔵したと見られるものは，これまで縄文時代後期の市来貝塚出土の二枚貝が知られているのみであった。

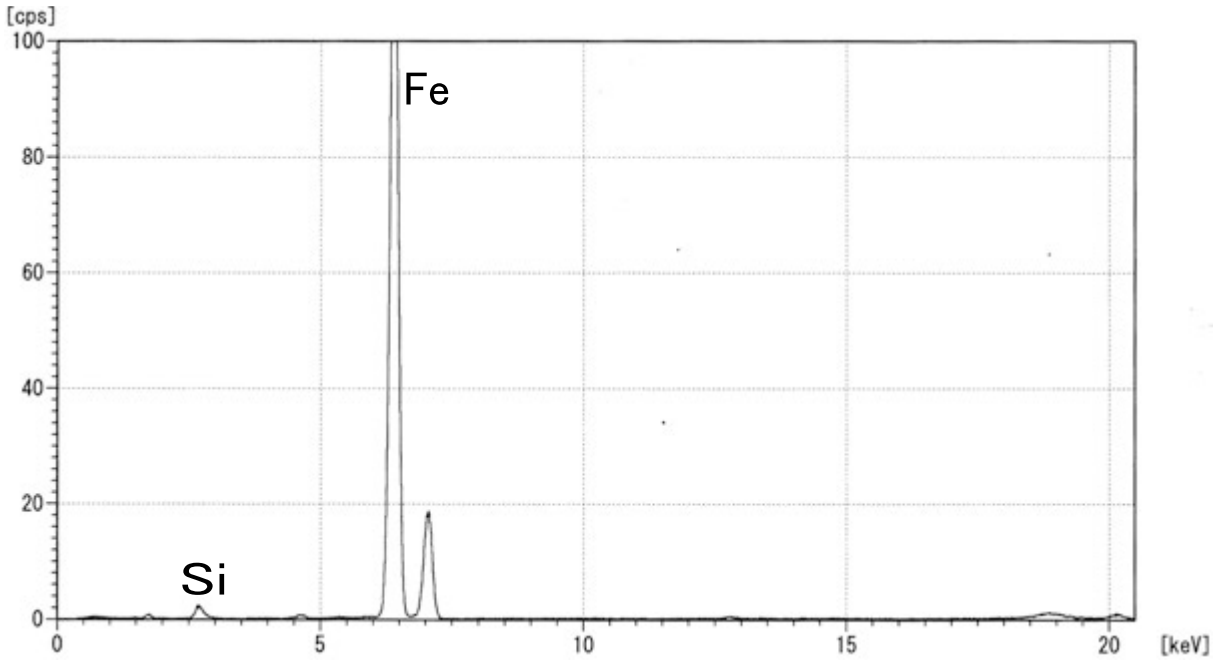
今回の例は，縄文時代早期後葉としては初めての例であり，貯蔵の形態や量など特筆すべき点が多い。



鉄細菌（細い棒状のもの）

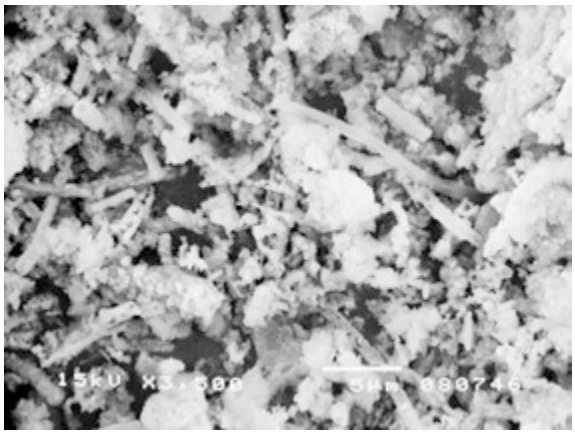
水路に見られる鉄細菌

蛍光Ｘ線分析結果

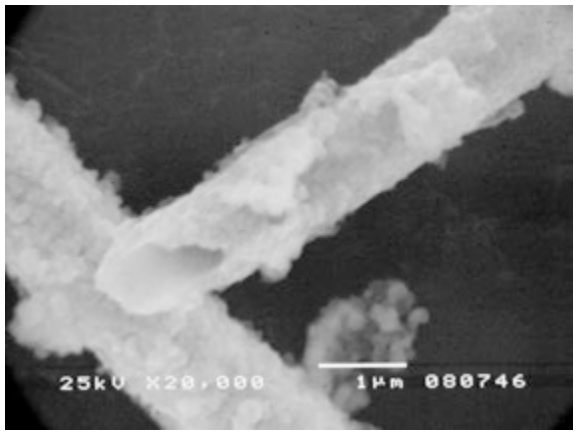


元　　素	ﾗｲﾝ	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/mA]
14Si けい素	K	7.06	0.99	31.48
26Fe 鉄	K	92.94	0.99	8207.30

電子顕微鏡観察画像



（×3500）



（×20000）

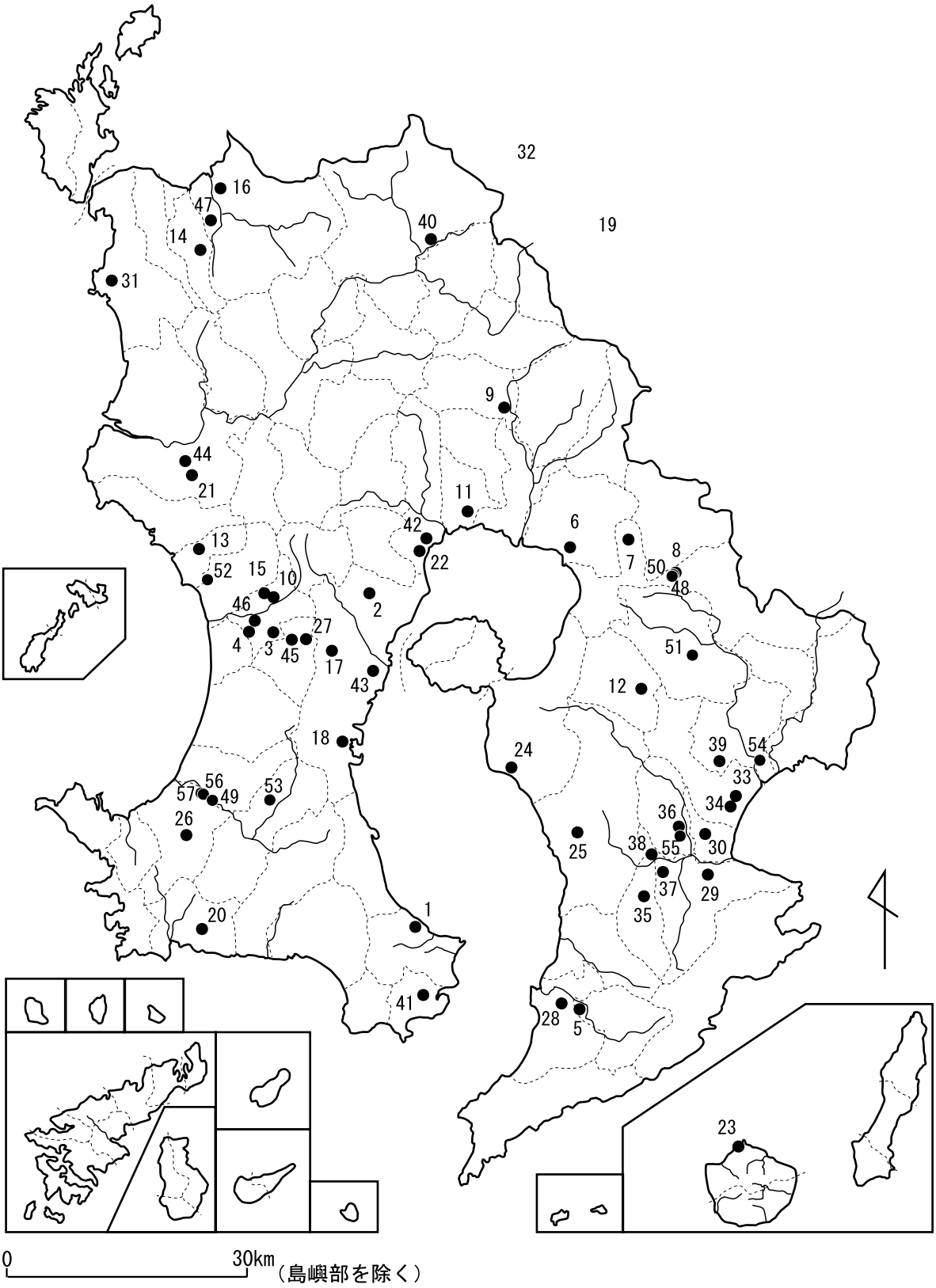
第17表　鹿児島県内出土赤色顔料観察表（一部宮崎県を含む）

（成分分析により同定した資料のみ掲載）

時期		地図	遺跡名	所在地	観察対象	ベンガラ		水銀朱	その他
						パイプ	非パイプ		
縄文時代	早期初頭	1	岩本	指宿市	岩本式土器		○		
		2	加栗山	鹿児島市	岩本式土器		○		
		3	稲荷原	伊集院町	岩本式土器３点		○		
		4	上山路山	伊集院町	岩本式土器４点		○		
		5	ホケノ頭	田代町	岩本式土器１点（完形品）		○		
	早期後葉	6	上野原	国分市	平栫式土器（深鉢壺）耳栓	○	○		○
		7	城ヶ尾	福山町	塞ノ神式土器共伴の耳栓状土製品	○	○		○
		8	桐木B	末吉町	土器付着	○	○		
		48	関山	曽於市末吉町	変形撚糸文土器（入れ子）	○	○		
	前期	9	星塚	横川町	深浦式土器	○	○		○
		10	山ノ脇	伊集院町	深浦式土器	○	○		
		11	干迫	加治木町	深浦式土器	○	○		
		49	上水流	南さつま市金峰町	深浦式土器ほか	○	○		
	中期	12	前床	輝北町	石皿（春日式土器共伴）	○	○		
	中期末	13	市来貝塚	市来町	南福寺式土器	○	○		
		14	柿内	高尾野町	南福寺式土器	○	○		
	後期	15	上ノ平	伊集院町	土器付着，土坑内		○		
		16	出水貝塚	出水市	出水式土器	○	○		○
		17	山ノ中	鹿児島市	土器，敲石（指宿式土器共伴）	○	○		
		13	市来貝塚	市来町	市来式土器（台付皿形土器）	○	○		○
					二枚貝に入ったベンガラ	○	○		
		18	草野貝塚	鹿児島市	市来式土器（台付皿形土器）	○	○		
					軽石加工品		○		
		11	干迫	加治木町	市来式土器（台付皿形土器）		○		白色顔料
					市来式深鉢形土器（１点）		○		
					鐘崎式土器		○		
					加曽利B式土器類似の注口土器（移入品）			○	
		19	佐土（宮崎県）	高原町	市来式土器（台付皿形土器）		○		白色顔料
		20	滝ノ下	枕崎市	市来式土器に伴う磨石	○	○		○
		21	楠元	川内市	台付皿形土器		○		
		22	中原	姶良町	鐘崎式土器		○		
		23	一湊松山	上屋久町	鐘崎式土器		○		
					市来式土器（台付皿形土器）	○	○		
	晩期	24	柊原貝塚	垂水市	軽石製品	○	○		
		6	上野原	国分市	土坑内出土	○	○		
		25	榎崎B	鹿屋市	黒川式土器（浅鉢）		○外面	○内面	
		26	干河原	加世田市	黒川式土器（浅鉢深鉢）	○	○		○
		27	枦掘	松元町	黒川式土器（深鉢）		○		
		28	出口	根占町	突帯文に伴う壺形土器	○	○		○
		49	上水流	南さつま市金峰町	黒川式土器（浅鉢）		○外面	○内面	
					黒川式土器	○			
		50	関山西	曽於市末吉町		○	○		
		51	チシャノ木	曽於市大隅町	黒川式土器	○	○		
弥生時代		24	柊原貝塚	垂水市	板付Ⅰ式土器（壺形土器）	○	○		
		29	東田	高山町	口唇部に櫛描波状文のある壺形土器	○	○		
		30	西牟田	東串良町	北部九州から移入された壺形土器		○		
		52	市ノ原４地点	日置市東市来町	壺型土器		○		黒色顔料
		53	堂園A	南九州市川辺町	土坑内埋土	○	○		
		54	上苑A	志布志市有明町	竪穴住居内出土の浅鉢等	○	○		
古墳時代		31	鳥越古墳	阿久根市	小口積みの石室内面と割り竹型木棺跡(4c中)		○		
		32	島内地下式横穴４号	えびの市	鹿角製刀装具1994年			○	
		32	島内地下式横穴40号	えびの市	石室内面1994年	○	○		
		33	飯隈地下式横穴	大崎町	軽石製石棺の内面		○		
		34	神領地下式横穴	大崎町	軽石製石棺の内面		○		
		35	中尾１号地下式横穴	吾平町	玄室床面		○		
		36	岡崎４号墳	串良町	土師器		○		
		36	岡崎１号地下式横穴	串良町	朱玉	○	○		
		37	北後田地下式横穴	高山町	頭蓋付着			○	
		38	天神原地下式横穴	高山町	石棺内側付着	○	○		
		39	原田地下式横穴	有明町	石棺内側付着	○	○		
		40	平田地下式板石積石室	大口市	丹粉	○	○		
		41	成川	山川町	磨石付着	○	○		
					成川式土器	○	○		
		42	保養院	姶良町	成川式土器（鉢　高杯）	○	○		○
		29	東田	高山町	成川式土器（手づくね土器）	○	○		
		43	鹿大構内L-６区	鹿児島市	竪穴住居炉周辺の床面	○	○		
		55	塚崎古墳	肝付町高山	埴輪付着	○			
古代		44	西ノ平	川内市	内赤土師器		○		
		45	フミカキ	松元町	土師器		○		
		46	下永迫A	伊集院町	土師器		○		
		47	六反ヶ丸	出水市	土師器		○		
		52	市ノ原４地点	日置市東市来町	土師器		○		
		49	上水流	南さつま市金峰町	土師器椀・杯ほか		○		
		56	芝原	南さつま市金峰町	土師器		○		
		57	持躰松	南さつま市金峰町	土師器		○		

「パイプ」はパイプ状粒子を確認したもの。
「その他」はパイプ状粒子以外のベンガラや白色顔料を確認したもの。

（成分分析により同定した遺跡のみ掲載）



第97図　赤色顔料付着遺物の出土遺跡地図

放射性炭素年代測定結果報告書
（ＡＭＳ測定）
関山遺跡

㈱加速器分析研究所

⑴　測定対象試料

炭化物№13（遺物№1252：IAAA-70821），Ｄ－24区炭化物№14（遺物№1422：IAAA-70822），合計２点である。

⑵　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

⑶　測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SD H-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C／^{12}Cの測定も同時に行う。

⑷　算出方法

１）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

２）ＢＰ年代値は，過去において大気中の^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る^{14}Ｃ年代である。

３）付記した誤差は，次のように算出した。

複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

４）δ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定される

δ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - ^{14}A_R)/^{14}A_R] \times 1000$ (1)

$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - ^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}] \times 1000$ (2)

ここで，$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に^{13}C／^{12}Cを測定し，標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，$\triangle^{14}$Cは，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$(‰）であるとしたときの^{14}C濃度($^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。(1)式の^{14}C濃度を，δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2$ （$^{14}A_S$として^{14}C/^{12}Cを使用するとき）

または

$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))$ （$^{14}A_S$として^{14}C/^{13}Cを使用するとき）

$\triangle^{14}C = [(^{14}A_N - ^{14}A_R)/^{14}A_R] \times 1000$（‰）

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており，$\triangle^{14}$Cとの関係は次のようになる。

$\triangle^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$（‰）

$pMC = \triangle^{14}C/10 + 100$ （%）

国際的な取り決めにより，この$\triangle^{14}$CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\triangle^{14}C/1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC/100)$

5）^{14}C年代値と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv 3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey，van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

⑸ 測定結果

炭化物№13（遺物№1252：ＩＡＡＡ-70821）の^{14}C年代は6910±40ｙｒBP，炭化物№14（遺物№1422：ＩＡＡＡ-70822）の^{14}C年代は1330±30ｙｒBPである。暦年較正年代（1σ＝68.2%）は，№13が5840～5820BC（10.0%）・5815～5735BC（58.2%）であり，縄文時代早期後葉に相当する。№14は650～700AD（55.9%）・740～770AD（12.3%）であり，飛鳥時代末から奈良時代に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355－363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37⑵, 425－430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355－363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381－389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029－1058

IAA

IAA Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比			
IAAA-70821	試料採取場所 ：鹿児島県 関山遺跡	Libby Age(yrBP)	:	6,910 ±	40
		δ^{13}C(‰)、(加速器)	＝	-26.09 ±	0.97
	試料形態 ： 炭化物	Δ^{14}C(‰)	＝	-577.0 ±	2.2
	試料名(番号) ：13	pMC(%)	＝	42.30 ±	0.22
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C(‰)	＝	-577.9 ±	2.0
		pMC(%)	＝	42.21 ±	0.20
#1832-1		Age (yrBP)	:	6,930 ±	40
IAAA-70822	試料採取場所 ：鹿児島県 関山遺跡 D-24 区	Libby Age(yrBP)	:	1,330 ±	30
		δ^{13}C(‰)、(加速器)	＝	-23.53 ±	0.78
	試料形態 ： 炭化物	Δ^{14}C(‰)	＝	-152.6 ±	3.6
	試料名(番号) ：14	pMC(%)	＝	84.74 ±	0.36
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C(‰)	＝	-150.1 ±	3.3
		pMC(%)	＝	84.99 ±	0.33
#1832-2 代替 2		Age (yrBP)	:	1,310 ±	30

参考

IAAA-70821に関しましては，試料名13及び追加試料を合わせて処理し測定した結果になります。

IAAA-70822に関しましては，代替２試料（代替の代替試料）を処理し測定した結果になります。

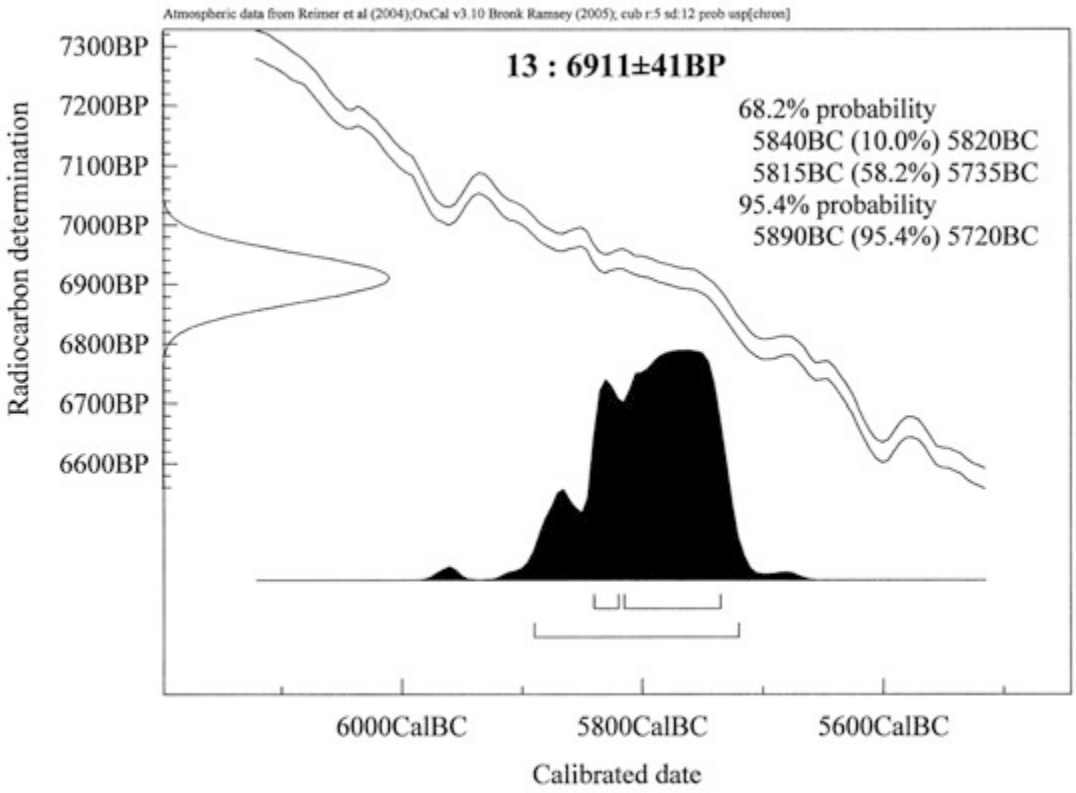
参考資料:暦年較正用年代

IAA

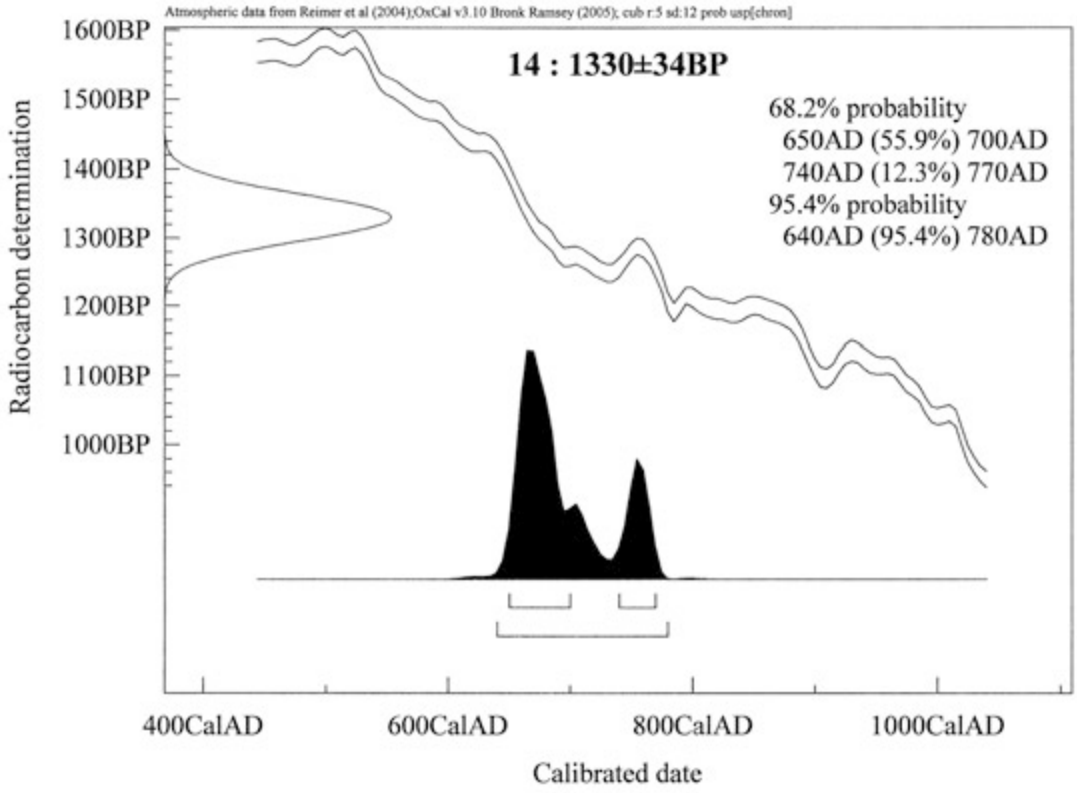
IAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA-70821	13	6911 ± 41
IAAA-70822	14	1330 ± 34

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



放射性炭素年代測定結果報告書
（ＡＭＳ測定）
関山遺跡

㈱加速器分析研究所

⑴　遺跡の位置

関山遺跡は，鹿児島県曽於市末吉町に所在する。

⑵　測定対象試料

測定対象試料は，Ｄ－24区の遺物№1422付着炭化物（3：IAAA-70404），Ｇ－25区の遺物№683付着炭化物（4：IAAA-70405），合計２点である。

⑶　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

⑷　測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SD H-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C／^{12}Cの測定も同時に行う。

⑸　算出方法

１）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

２）BP年代値は，過去において大気中の^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る^{14}C年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。

複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R)/{}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB})/{}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで，$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に^{13}C／^{12}Cを測定し，標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，△^{14}Cは，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$(‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。(1)式の^{14}C濃度を，δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2 \qquad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{12}C\text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000)) \qquad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{13}C\text{を使用するとき})$$

$$\triangle^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R)/{}^{14}A_R] \times 1000 \text{（‰）}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており，△^{14}Cとの関係は次のようになる。

$$\triangle^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000 \text{（‰）}$$

$$pMC = \triangle^{14}C/10 + 100 \qquad (\%)$$

国際的な取り決めにより，この△^{14}CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\triangle^{14}C/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(pMC/100)$$

5） ^{14}C年代値と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv 3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey，van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

⑹　測定結果

Ｄ－24区の遺物№1422付着炭化物（３：IAAA-70404）の^{14}C年代が8210±50yrBP，Ｇ－25区の遺物№683付着炭化物（４：IAAA-70405）の^{14}C年代が9220±50yrBPである。暦年較正年代（1σ＝68.2%）は，３が7320～7140BC，４が8540～8510BC（6.9%）・8480～8330BC(61.3%)である。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion:Reporting of 14C data，*Radiocarbon* 19，355－363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program，Radiocarbon 37⑵，425－430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal，*Radiocarbon* 43(2A)，355－363

Bronk Ramsey C.，van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates，*Radiocarbon* 43(2A)，381－389

Reimer，P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration，0－26cal kyr BP，*Radiocarbon* 46，1029－1058

IAA

IAA Code No.	試　　料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-70404	試料採取場所 ：曽於市末吉町 関山遺跡 試料形態　：　土器付着炭化物 試料名(番号) ：3	Libby Age(yrBP) : 8,210 ± 50 δ ^{13}C(‰)、(加速器) ＝ -23.05 ± 0.92 Δ ^{14}C(‰) ＝ -640.2 ± 2.0 pMC(%) ＝ 35.98 ± 0.20
#1771-1	(参考)　　δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰) ＝ -638.8 ± 1.9 pMC(%) ＝ 36.12 ± 0.19 Age (yrBP) : 8,180 ± 40
IAAA-70405	試料採取場所 ：曽於市末吉町 関山遺跡 試料形態　：　土器付着炭化物 試料名(番号) ：4	Libby Age(yrBP) : 9,220 ± 50 δ ^{13}C(‰)、(加速器) ＝ -22.14 ± 0.66 Δ ^{14}C(‰) ＝ -682.6 ± 1.8 pMC(%) ＝ 31.74 ± 0.18
#1771-2	(参考)　　δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰) ＝ -680.7 ± 1.7 pMC(%) ＝ 31.93 ± 0.17 Age (yrBP) : 9,170 ± 40

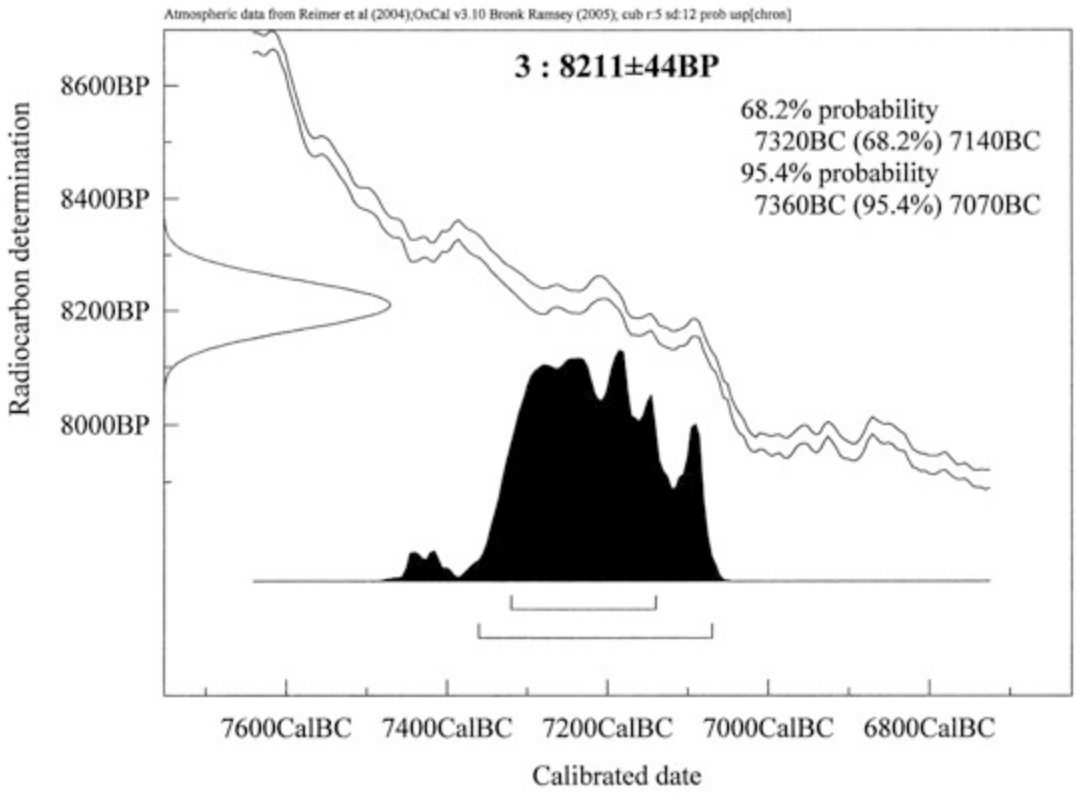
参考資料:暦年較正用年代

IAA

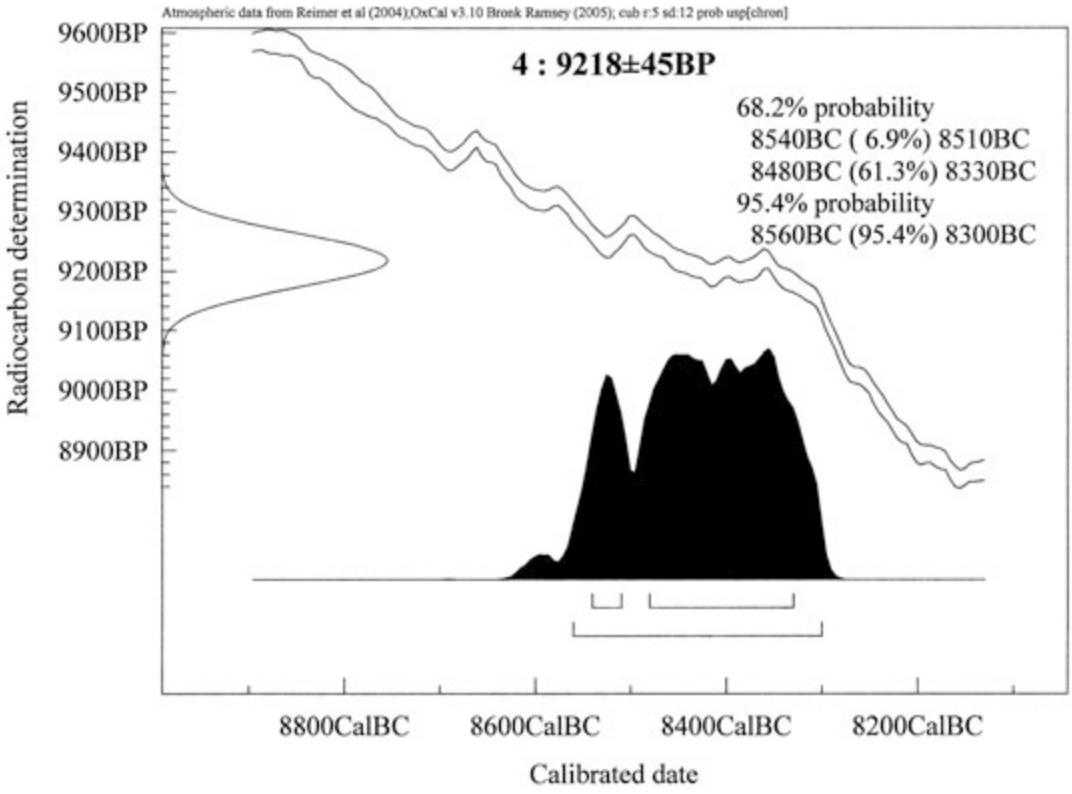
IAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA-70404	3	8211 ± 44
IAAA-70405	4	9218 ± 45

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



鳥 居 川 遺 跡
チシャノ木遺跡

第Ⅵ章　鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡

第１節　発掘調査の方法と層位

第１項　発掘調査の方法

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡の確認・本調査は，平成18年５月９日から平成18年11月28日（実働110日）まで実施した。工事の関係上チシャノ木遺跡の調査を，平成18年５月９日から平成18年９月28日まで実施した。その後鳥居川遺跡の調査を，平成18年10月３日から平成18年11月28日まで行った。

調査区域は，公共座標Ｘ＝－156600，Ｙ＝－2800を基準に，東西に１～40までを付け，南北にＡ～Ｔまでを付け，１区画10ｍのグリッドを設定し，Ａ－１区と呼称することとした。鳥居川遺跡では，調査区が２つに分かれるため，Ｂ～Ｈ－４～７区をＡ地点，Ｎ～Ｔ－１～８区をＢ地点とした。

チシャノ木遺跡の調査は，重機で表土を除去したところ，圃場整備等により層が攪乱されⅡ～Ⅲ層はほとんど残存しておらず，Ⅳ層は残存していたり攪乱されていたりと場所によって残存の度合いが違うことが判明した。その後，確認トレンチをＭ～Ｑ－18～34区に17か所設定し，Ⅷ層まで人力で掘り下げて確認調査を行った。その結果，遺物の存在が確認されたので本調査を行うこととした。

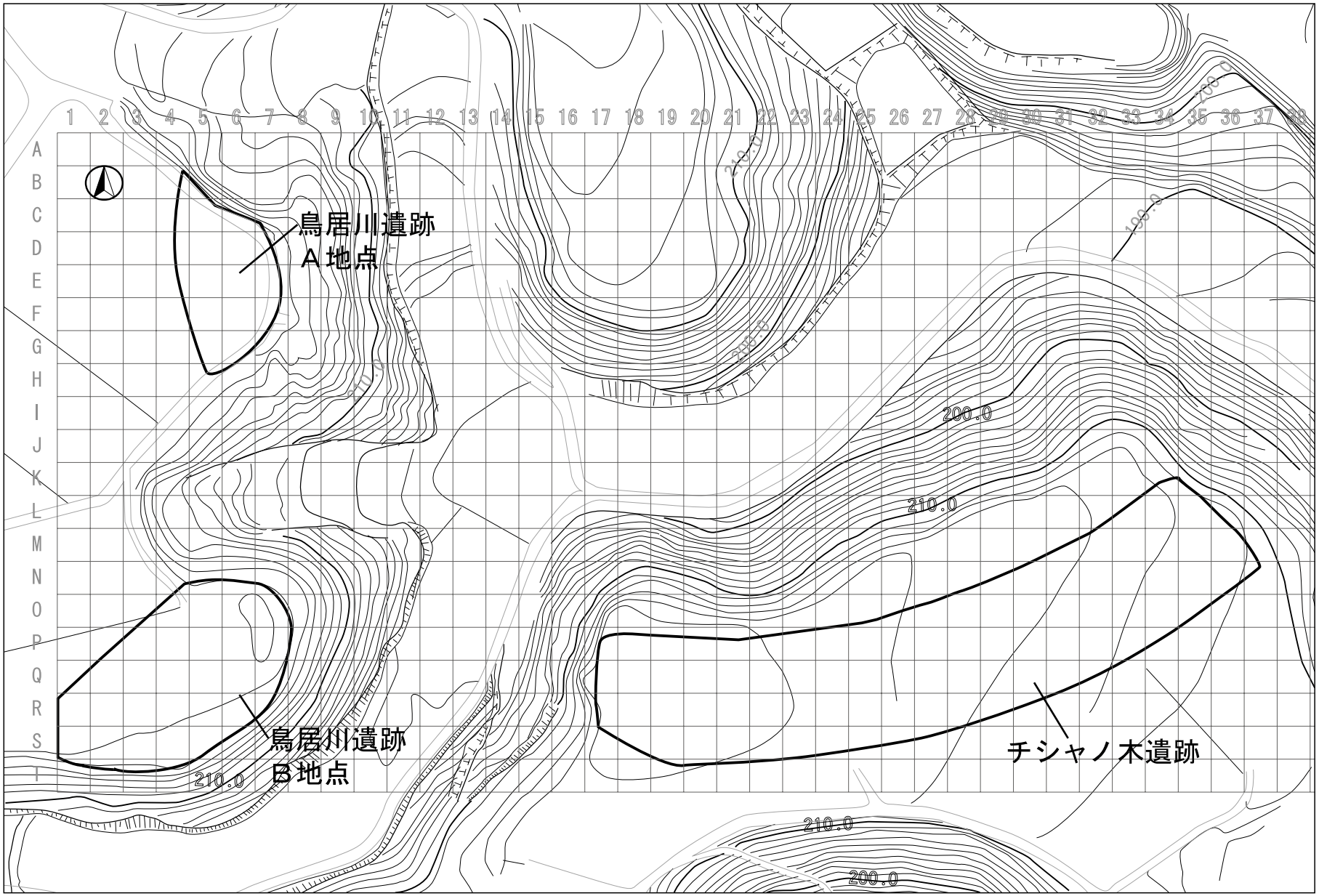
本調査は，Ⅷ層まで人力で掘り下げた。その後，旧石器時代及び縄文時代草創期文化層における遺構・遺物の有無を確認するためのトレンチを32か所設定し，ⅩⅧ層（シラス）上面まで人力で掘り下げた。調査の結果，旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物が確認され，特に，縄文時代晩期の遺物が多く出土した。結果の詳細については，第３節で述べてある。

鳥居川遺跡の調査は，Ａ地点・Ｂ地点とも重機でⅠ層を除去したところ，圃場整備等により層が攪乱されていたのでⅤ層からの調査となった。Ⅴ層からⅧ層まで人力で掘り下げ，その後，下層確認のためのトレンチを設定し，ⅩⅧ層（シラス）上面まで人力で掘り下げた。調査の結果，遺構は確認されなかったが，縄文時代早期及び後期の遺物が確認された。結果の詳細については，第２節で述べてある。

遺物は，トータルステーションを使って取り上げたものもあるが，基本的には，平板により実測を行うとともに，レベルを測定して遺物台帳に記載して取り上げを行った。遺構は，検出状況を写真で撮影し，位置を記録してから個別に実測を行った。

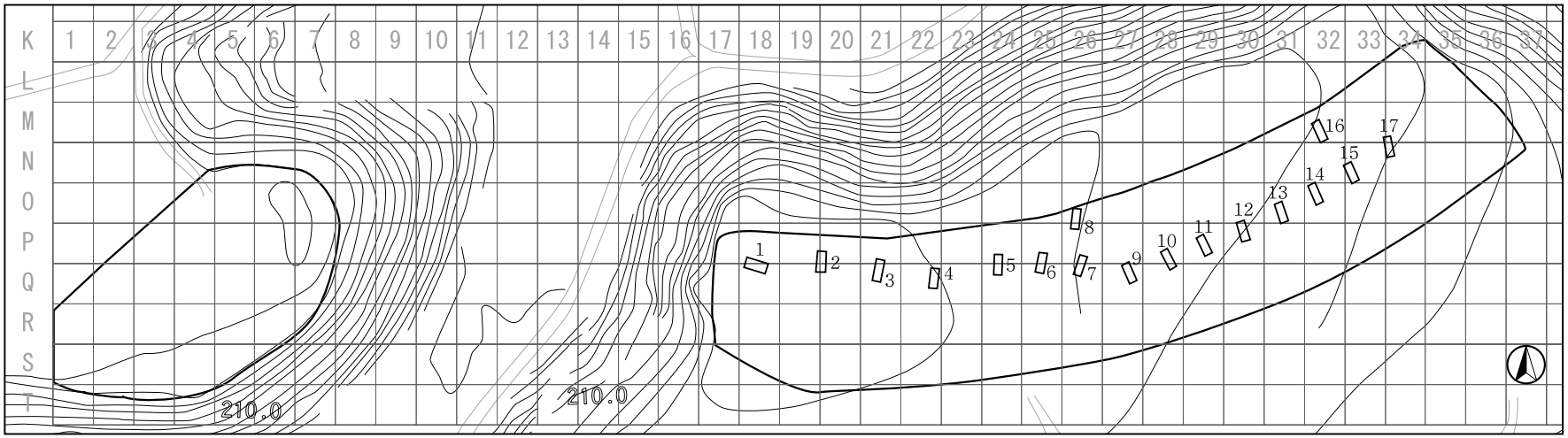
第２項　層位

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡の基本土層，火山灰の堆積状況等については，「第Ⅳ章　遺跡の層位」で示したとおりである。しかし，遺跡の大部分が圃場整備等により表土からⅢないしⅣ層まで攪乱されていた。

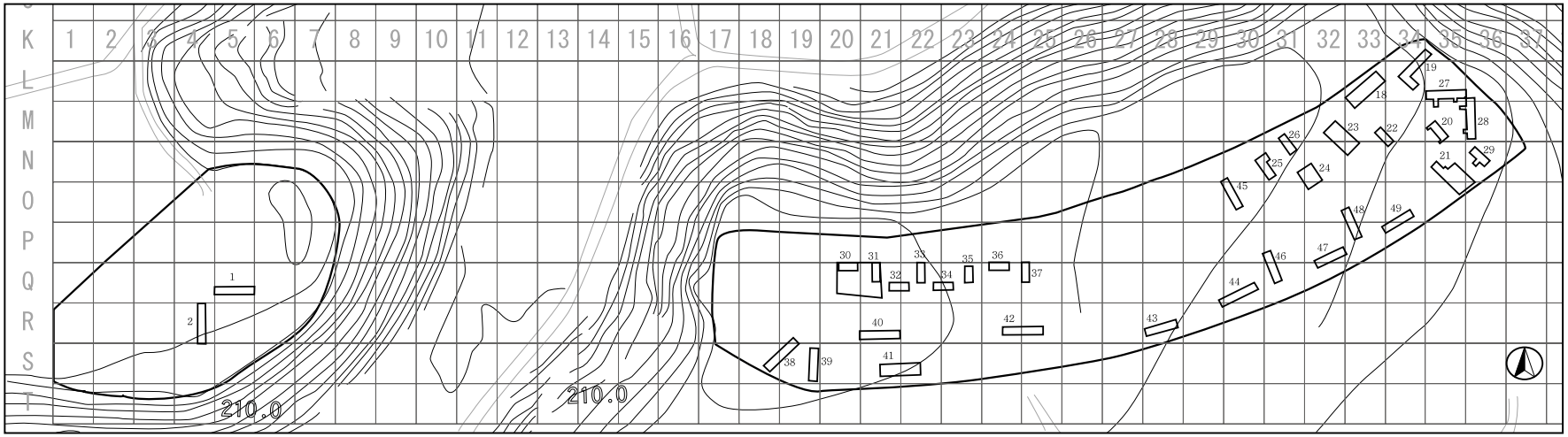


第１図　遺跡周辺地形及びグリッド図

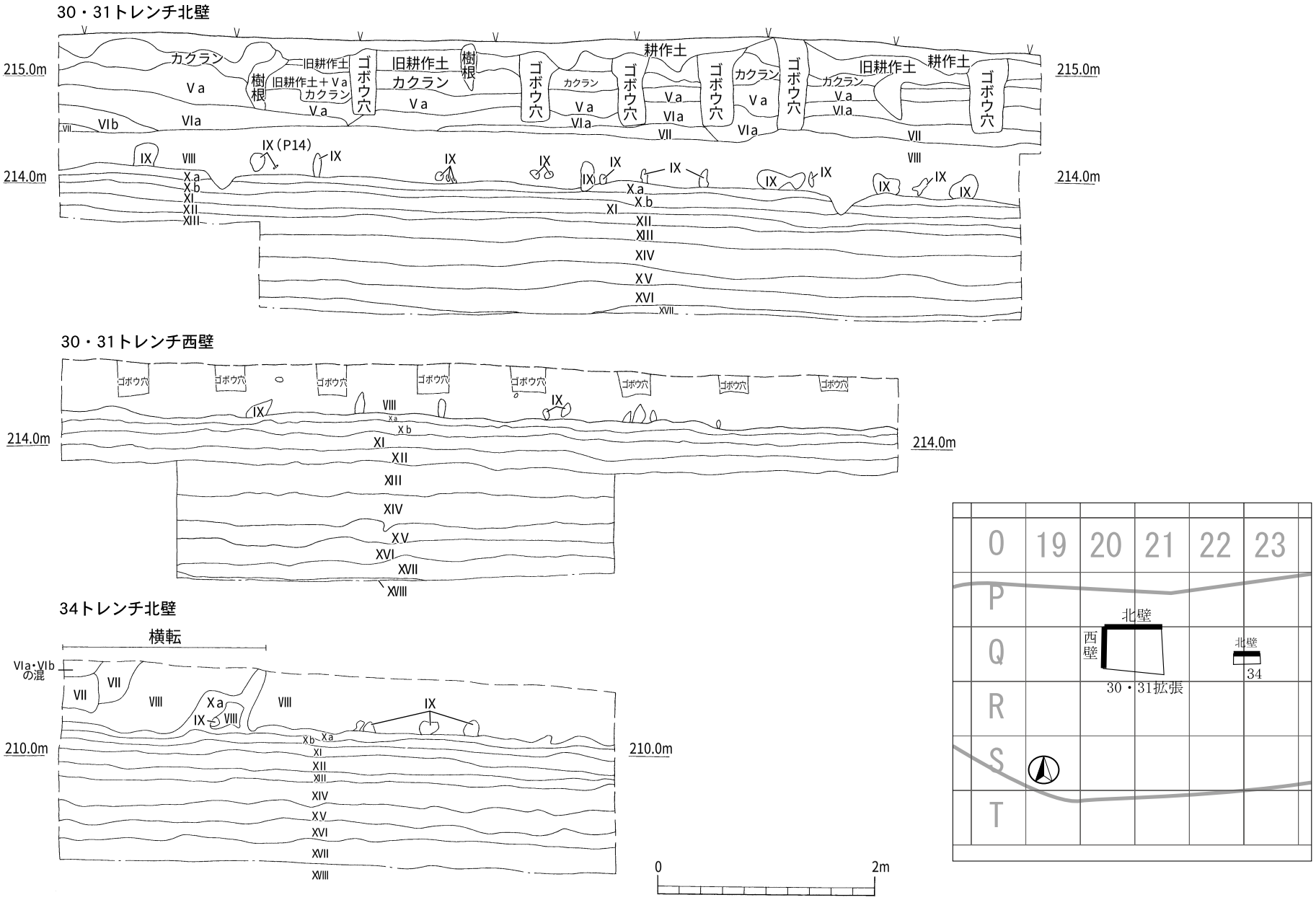
確認トレンチ



下層確認トレンチ

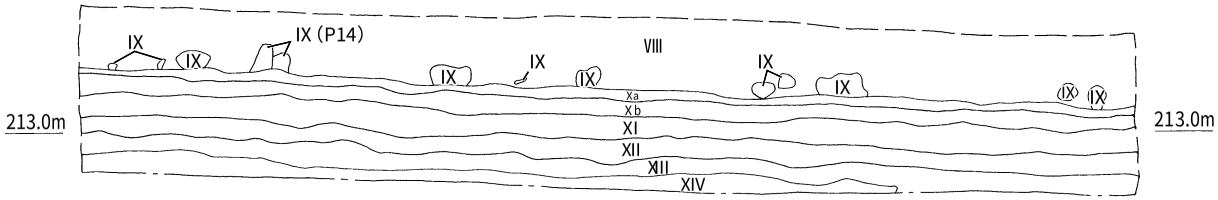


第２図　トレンチ配置図

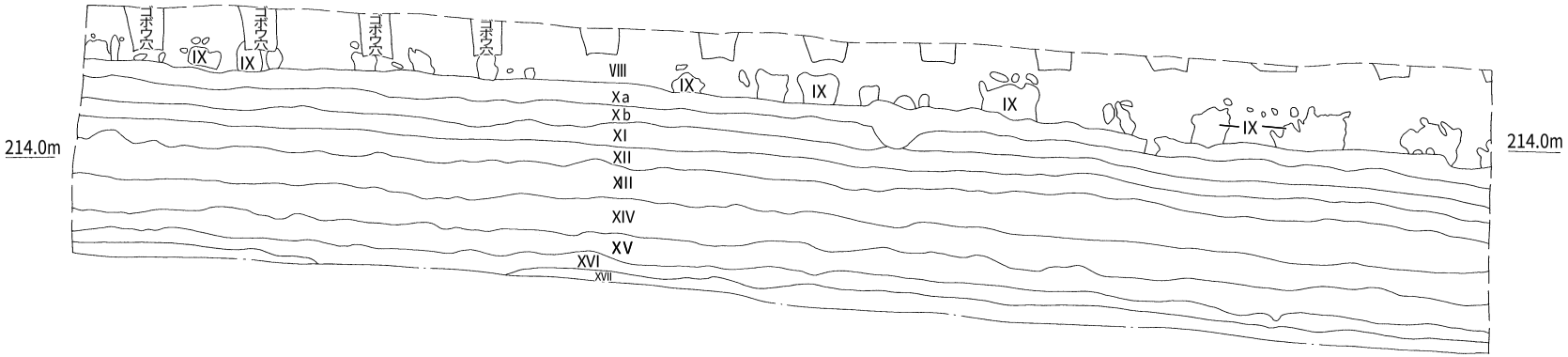


第３図　トレンチ土層断面図１

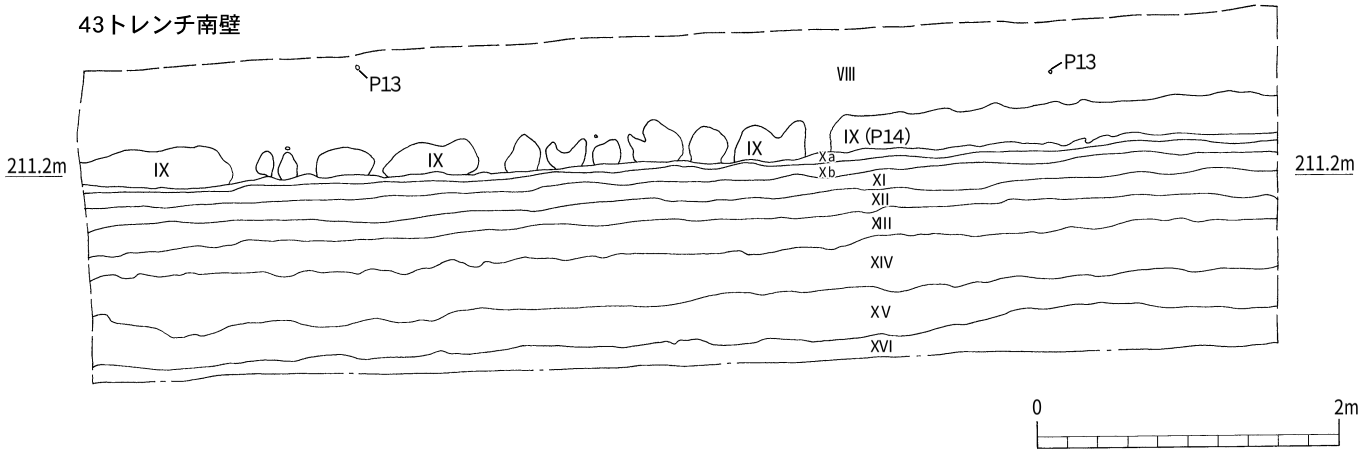
35トレンチ西壁

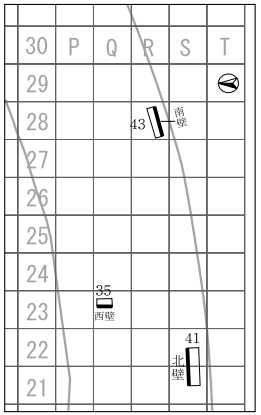


41トレンチ北壁



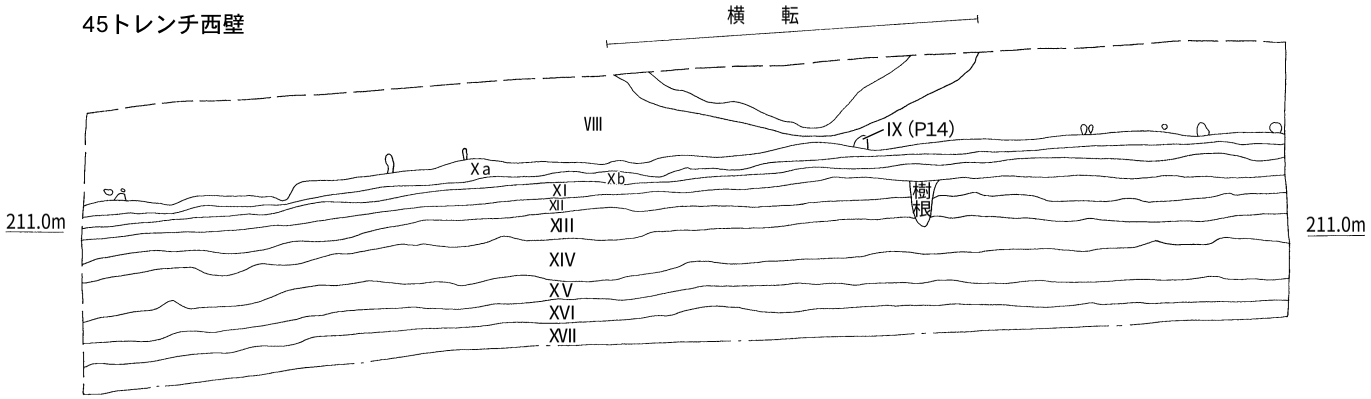
43トレンチ南壁



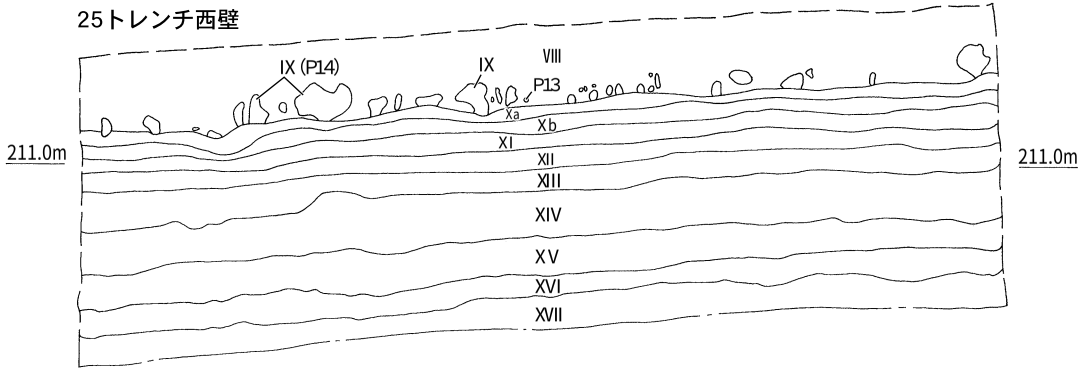


第４図　トレンチ土層断面図２

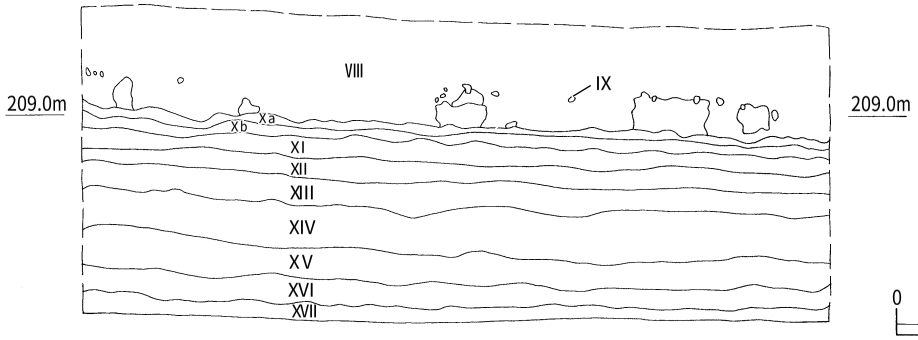
45トレンチ西壁

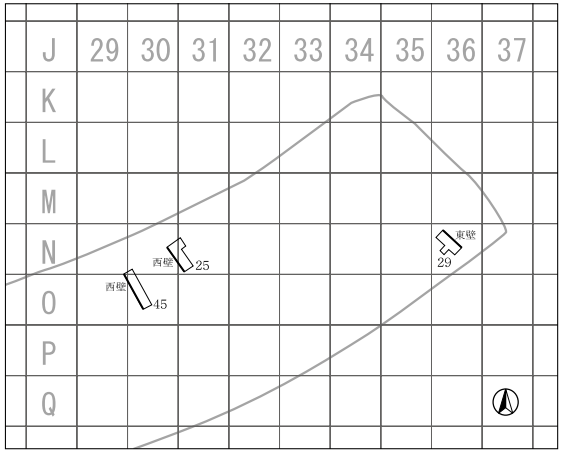


25トレンチ西壁



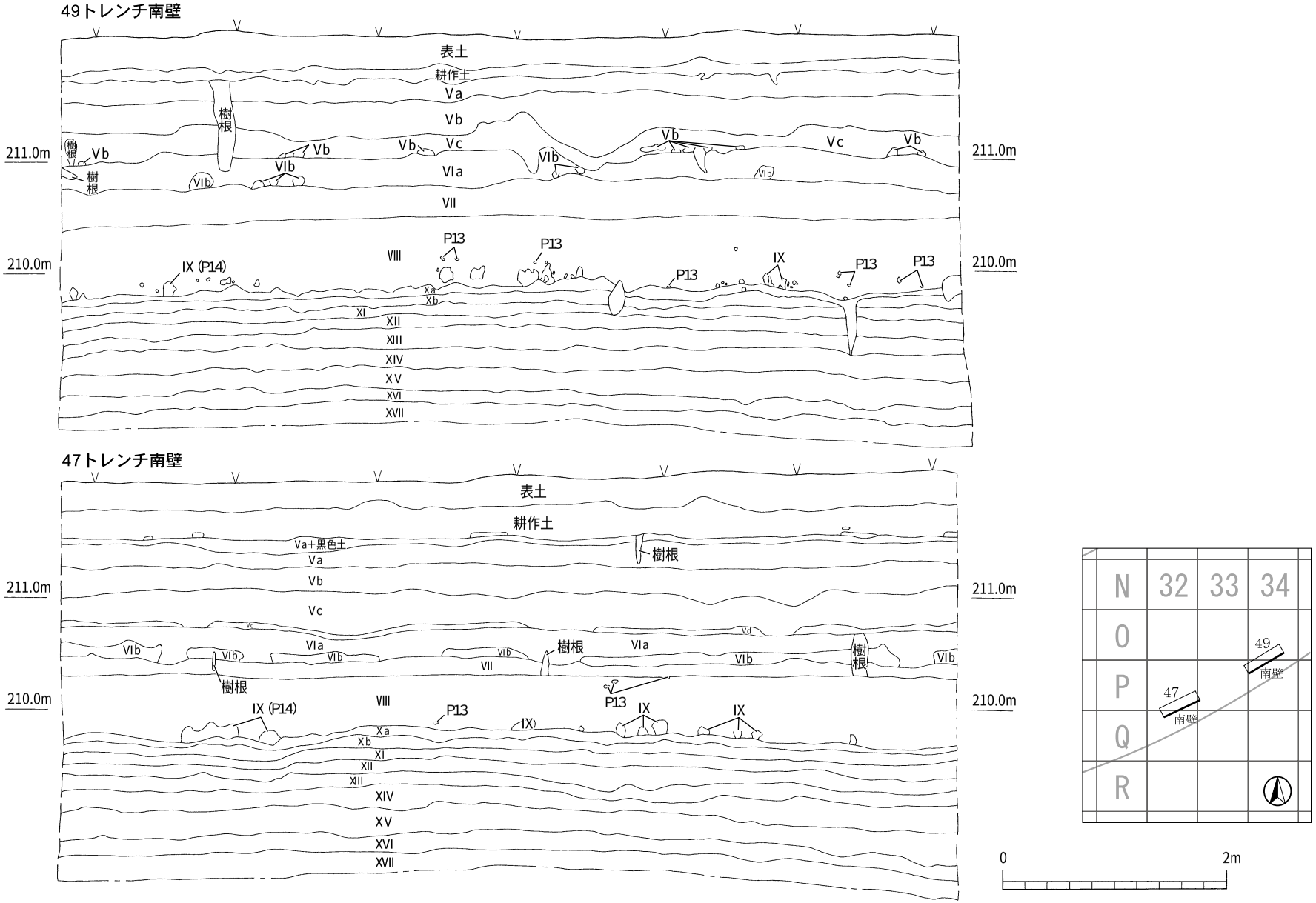
29トレンチ東壁





0　2m

第５図　トレンチ土層断面図３



第６図　トレンチ土層断面図４

第２節　鳥居川遺跡の調査成果

第１項　縄文時代の調査成果

１　調査の概要

本遺跡の調査は，圃場整備等により層が攪乱されていたので，Ｖ層からの調査となり，ⅩⅧ層上面（シラス上面）まで調査を行った。調査の結果，縄文時代の遺物のみ出土した。縄文時代の調査は，Ｖ層（縄文時代後期該当層）からⅩ層（縄文時代草創期該当層）まで行ったが，遺構は確認できなかった。遺物は縄文時代早期，縄文時代後期・晩期の遺物が出土しており，縄文時代後期・晩期の遺物が半数近くを占める。

２　遺物

遺物総数は，313点で，そのうち246点が土器である。土器は，縄文時代早期押型文（１類）が主にⅦ・ⅧⅢ層から７点，早期後葉土器（２類）が主にⅥ層から64点，後期末の黒色磨研系と思われる破片が１点，晩期土器（３類）がG・F－５・６区を中心に，主にＶ層から134点出土している。ただし，Ｖ層は晩期土器が出土する該当層ではなく，遺跡の地形から流れ込みの可能性が高い。

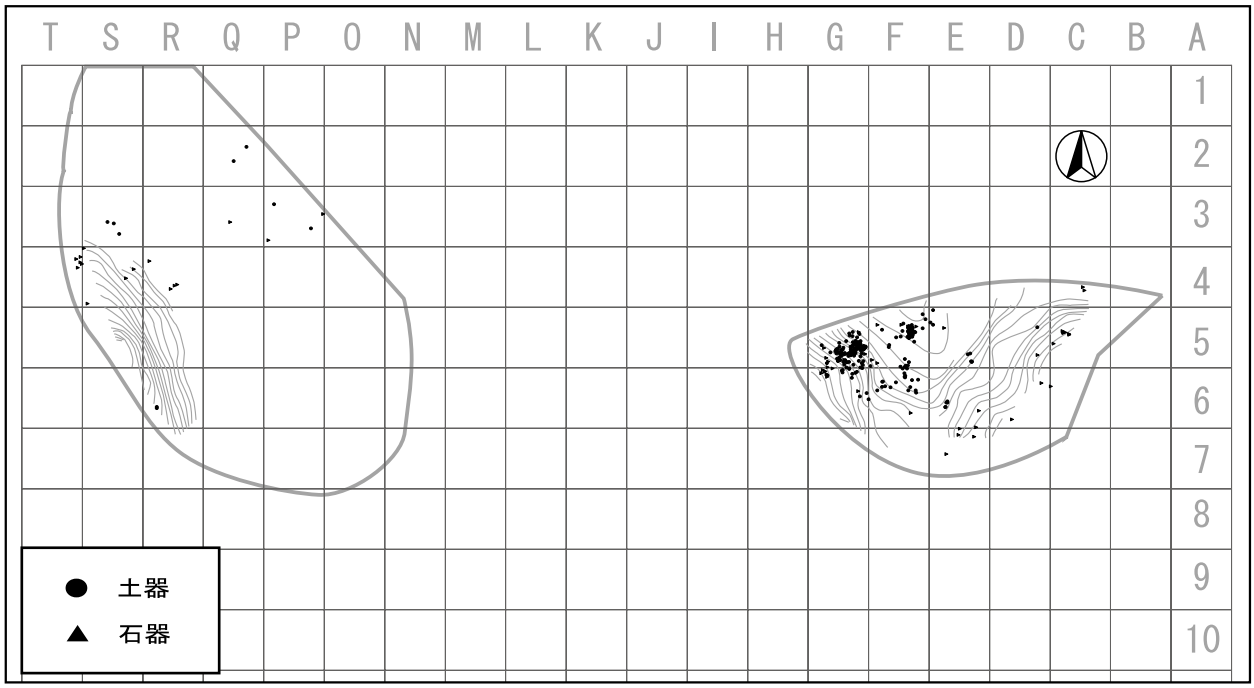
土器

１類土器（第８図　１・２）

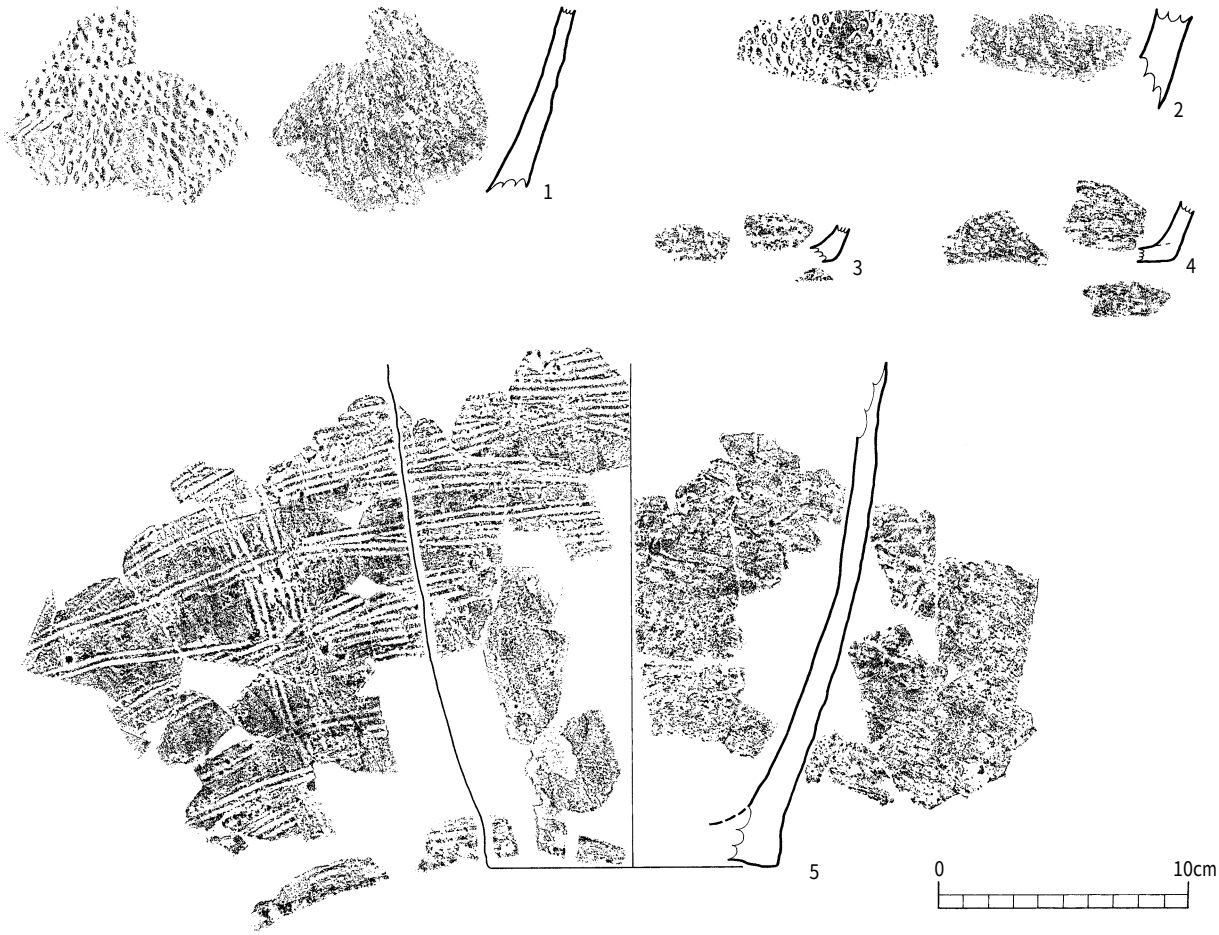
１・２は外面に楕円押型文が施文された胴部土器片である。同一個体の可能性がある。外面は楕円押型文を施文後，部分的に文様がナデ消された部分がみられる。内面はナデられ，外面にはうすくススが付着している。胎土には雲母がみられる。

２類土器（第８図　３～５）

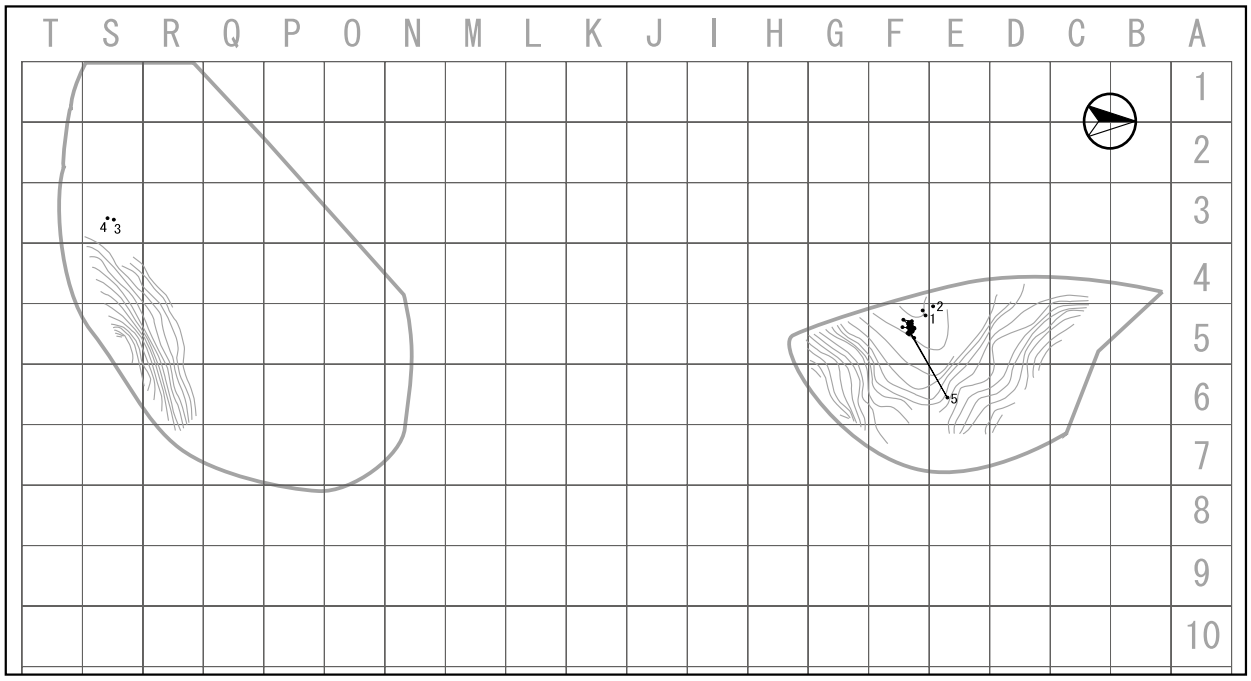
３・４は５と類似するバケツ状の底部を呈する土器片である。小片であるが，外面に撚糸の施文がみられる。５は条痕が横位・縦位に施される土器で，縦位２単位の条痕は，ほぼ均一な間隔で３



第７図　縄文時代遺物出土分布図



第８図　縄文時代早期土器

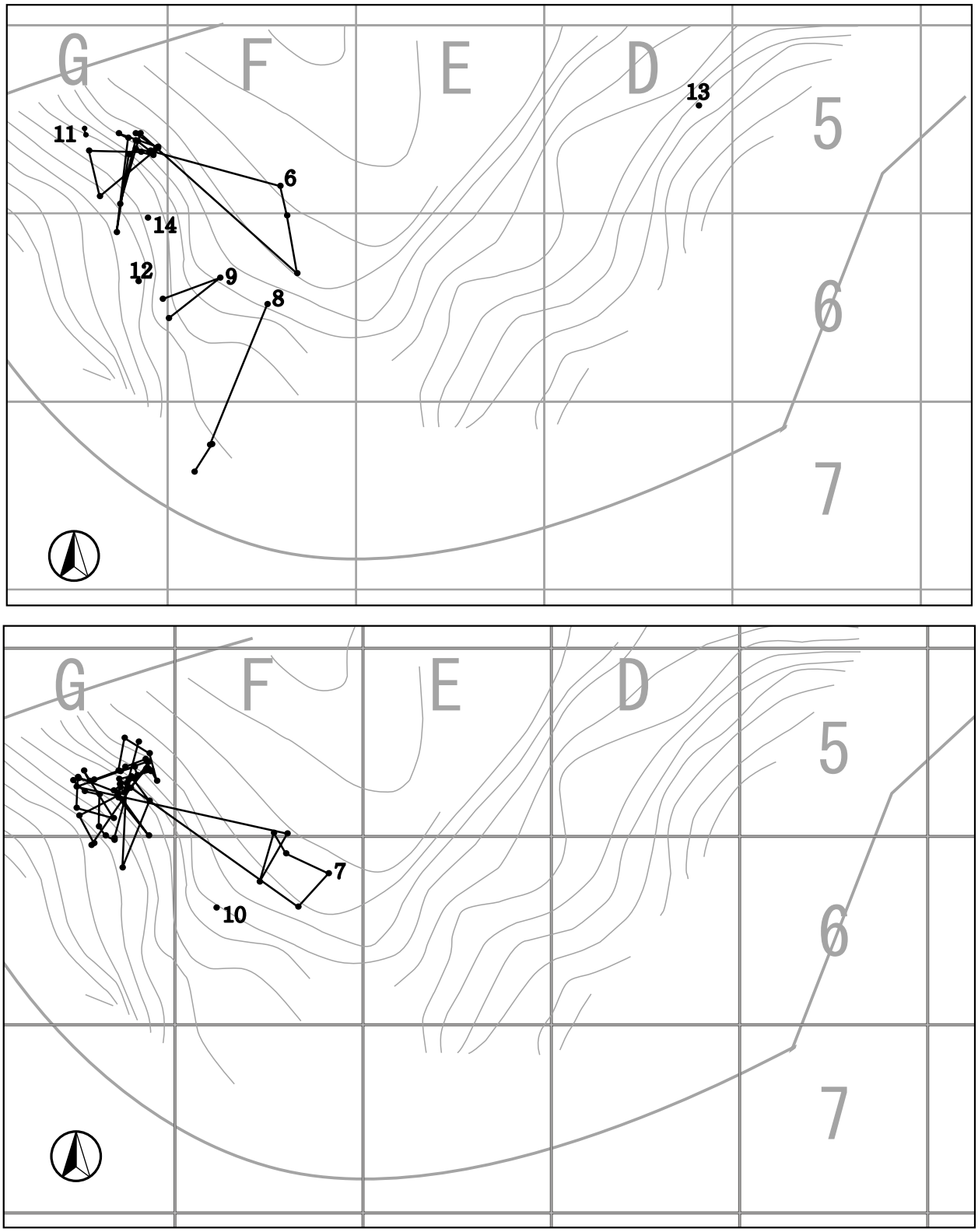


第９図　縄文時代早期土器出土分布図

か所に施されていたと思われる。内面・外面上半部にススが付着している。

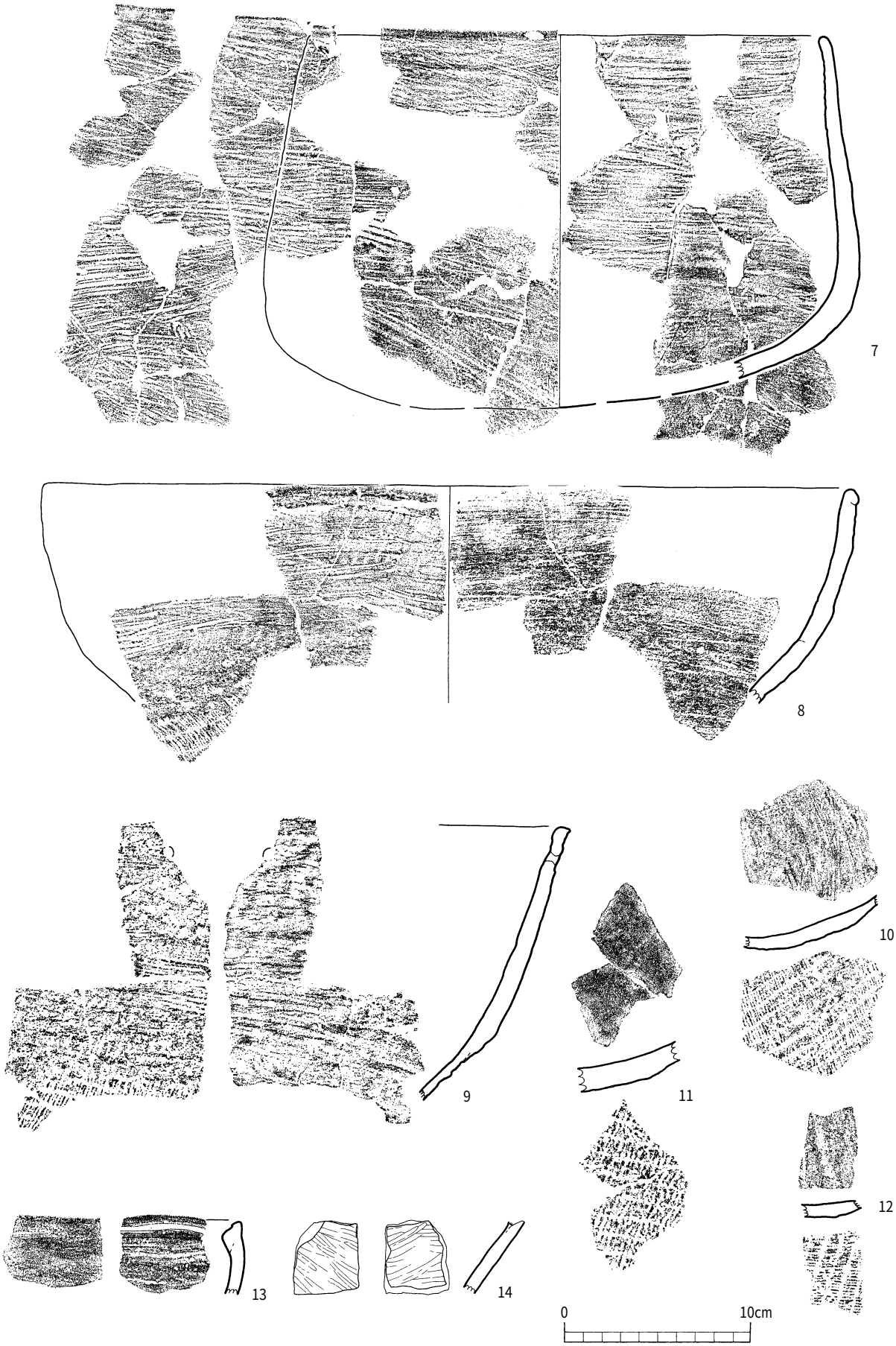
３類土器（第11・12図　６～14）

６は口縁部から胴部に向かって湾曲して，胴部に明瞭な屈曲をもつ深鉢形土器である。ほぼ粗製であるが，胴部の屈曲部より下方向へ約５㎝ほど磨かれている。口縁部は３分の１ほど欠損してるが，口縁部の突起は１か所のみと思われる。内外面にススが付着しており，外面のススの^{14}Ｃ年代



第10図　縄文時代晩期土器出土分布図

第11図　縄文時代晩期土器(1)



第12図　縄文時代晩期土器(2)

第１表　鳥居川遺跡出土土器観察表

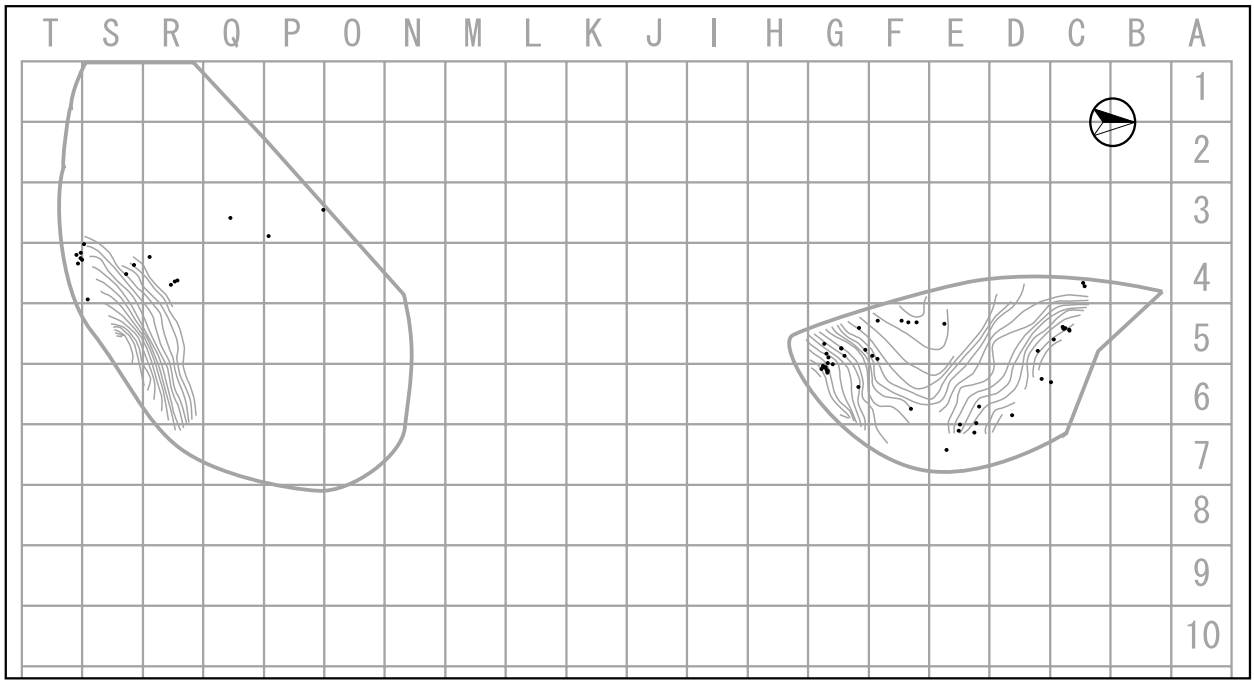
挿図	番号	型式等	区	層	器種	部位	取上番号	調整・文様		色調		胎土							備考
								内面	外面	内面	外面	石英長石	輝石角閃	雲母	火山ガラス	軽石	小礫	その他	
8	1	押型文土器	F5	Ⅶ	深鉢	胴部	266 267	ナデ	ナデ，楕円押型文	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	○	○		○		外面スス付着
	2	押型文土器	E5	Ⅷ	深鉢	胴部	304	ナデ	ナデ，楕円押型文	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	○	○		○		外面スス付着
	3	塞之神式	S3	Ⅶ上	深鉢	底部	150	ナデ	ナデ，撚糸文	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	○	○		○		内面コゲ付着
	4	塞之神式	S3	Ⅶ上	深鉢	底部	151	ナデ	ナデ，撚糸文	暗灰黄色	にぶい黄橙色	○	○	○	○		○		
	5	塞之神式	F5 G5	Ⅴ Ⅵ Ⅶ	深鉢	胴～底部	27 28 108 158 161 162 171 172 175 176 179 183 185 187 191 193 199 200 202 205 208 209 211 212 215 219 220 223 226 263 157 195 222	ナデ	条痕，ナデ	暗褐色	にぶい褐色	○	○	○	○	○	○		内外面スス付着
11	6	黒川式	G5 G6	Ⅴ	深鉢	口～胴部	7 9 12 18 30 31 38 40 51 65 84 87 105 112 242 261	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○		○	○	△		内外面スス付着
12	7	黒川式	G5 G6	Ⅴ Ⅵ	鉢	口～底部	6 14 15 41 44 49 55 57 63 66 68 76 77 89 100 102 113 115 121 122 128 130 134 137 228 231 238 235 247 250 251 258 259 262 281 283 285	ハケメ状ナデ後ナデ	条痕，ハケメ状ナデ	褐色	暗褐色	○	○		○	△			内面スス付着
	8	黒川式	F6	Ⅴ	鉢	口～胴部	21 24 50 246	ハケメ状ナデ後ミガキ	ハケメ状ナデ後ミガキ，一部ケズリ，組織痕	にぶい赤褐色	黒褐色	○	○		○	○	○		経10㎜　緯7本　Ｚ撚 外面スス付着
	9	黒川式	G6	Ⅴ	鉢	口～胴部	20 23 70	ハケメ状ナデ後ミガキ	条痕後一部ケズリ，組織痕	暗褐色	褐色	○	○		○	○	○		経9㎜　緯6本 穿孔あり
	10	黒川式	F6	Ⅴ	鉢	胴～底部	22	ハケメ状ナデ後ミガキ	組織痕	にぶい赤褐色	黒褐色	○	○		○	○	○		経5－8㎜ 緯7本　Ｚ撚
	11	黒川式	G5	Ⅴ	鉢	胴～底部	74 75	ミガキ	組織痕	黒色	にぶい黄橙色	△	○		○				経10㎜　内面炭素分吸着
	12	黒川式	G6	Ⅴ	鉢	胴～底部	243	ハケメ状ナデ後ミガキ	組織痕	黒褐色	橙色	○	○		○	○	○		経7㎜　緯7本 Ｚ撚
	13	黒川式	D5	Ⅴ	浅鉢	口縁部	82	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	褐色	褐色	○	○		○				
	14	黒川式	G6	Ⅴ	浅鉢	胴部	133	ミガキ	ミガキ	褐灰色	褐灰色	○	○		○	△			

測定を行ったところ，2730±30であった。

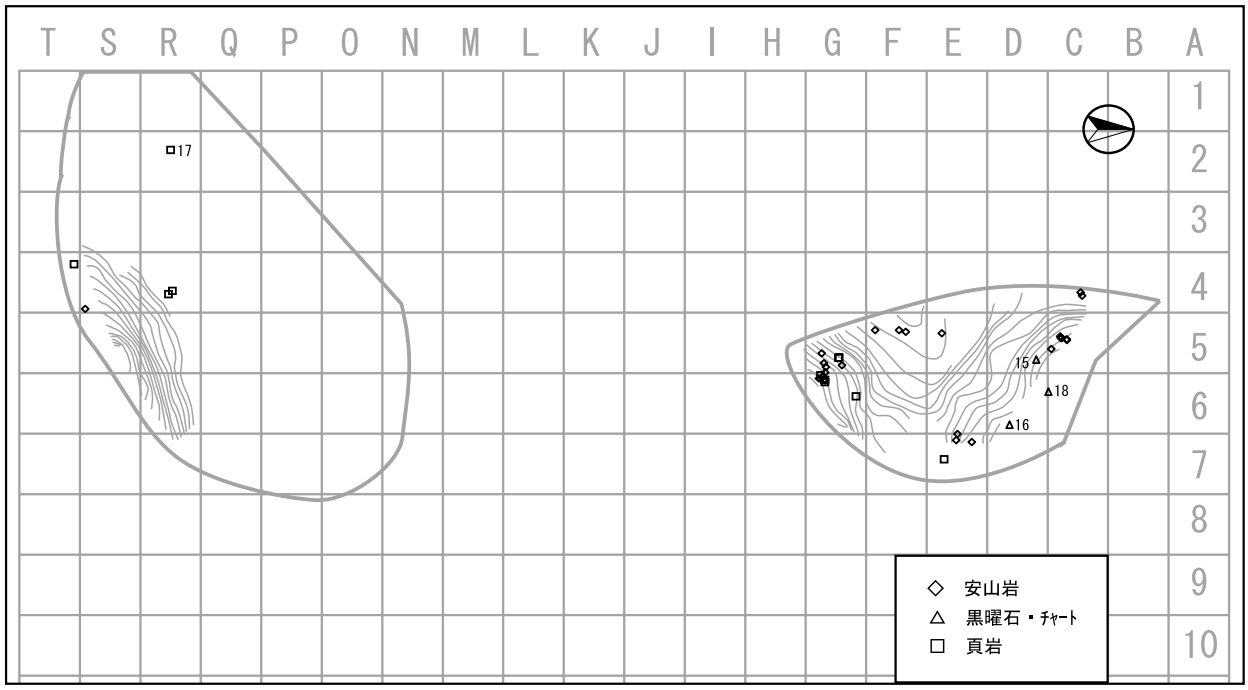
７は粗製鉢である。底部は欠損しているが，緩やかにカーブしていたと思われる。胴部下半に張りをもち，そこから緩やかに内傾して口唇部に至る。内面はほぼ横方向，外面は横・斜め方向に条痕，ハケメ状ナデがみられる。内面底部はナデの痕跡がほとんどみられないため，丁寧にナデが施されたか，磨かれた可能性もある。内面のススの^{14}Ｃ年代測定を行ったところ，2750±30の年代を得た。

８～12は組織痕土器である。８・９は底部に組織痕の見られる鉢である。８は内外面ともにハケメ状ナデのあと荒く磨かれる。型取りをしたと思われる底部と口縁部をつなぐ屈曲部は，ケズリ調整がみられる。９も８と類似する調整であるが，ミガキは内面のみで丁寧に磨かれている。８の外面にはススが付着している。10は９と同一個体となる可能性のある胴部片で，ナデられたのち，内面が丁寧に磨かれている。11は底面に近いと思われる破片である。内面は丁寧に磨かれ，断面をみると内面側が黒化している。12は８・９と同一個体の胴～底部片の可能性がある。

13・14は浅鉢である。13は胴部から口縁部にかけて内湾する器形で，口縁部に凹線が施される浅鉢である。14は精製浅鉢の胴部である。内外面が丁寧に磨かれ，胴部が屈曲する器形を呈していたと思われる。



第13図　縄文時代石器出土分布図



第14図　縄文時代石材別出土分布図

石器

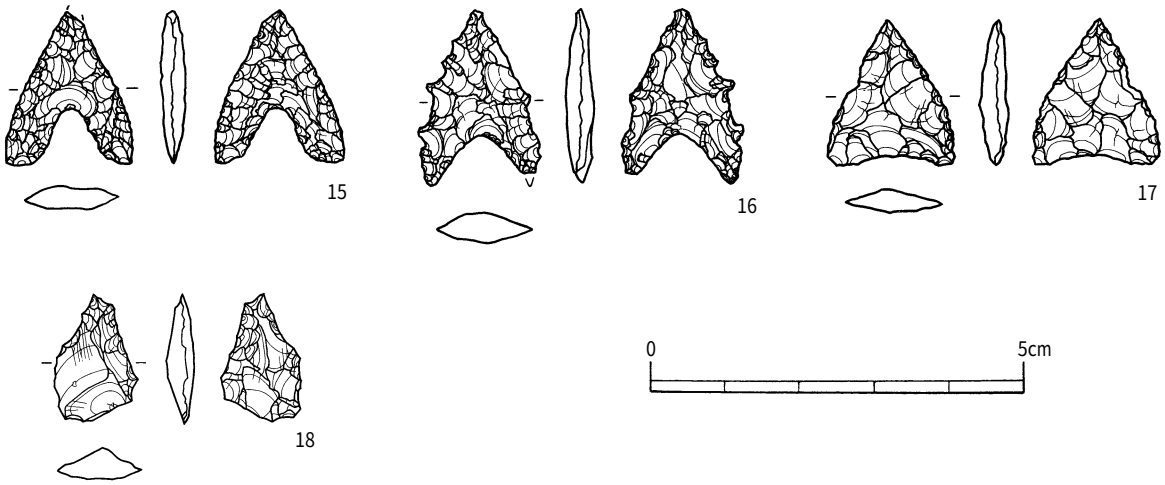
鳥居川・チシャノ木遺跡の石材は，肉眼観察で以下のように分類した。

ＡＮ１：外面は黒灰色もしくは灰色に風化しているが，破損面は黒色安山岩である。

ＡＮ２：黒灰色でやや光沢があり，細かい不純物を含む。嬉野産の黒色安山岩である。

ＡＮ３：黒灰色～青灰色で不純物を含む安山岩。西北九州系の可能性のあるものも含まれる。

ＡＮ４：斑晶組織を有し，主に磨石・敲石などに使用される。



第15図　縄文時代石器

第２表　鳥居川遺跡出土石器観察表

挿図番号	番号	石器器種	石材	区	層	標高	遺物番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)
15	15	石鏃	CH	D5	Ⅵ	216.780	255	2	1.70	0.30	0.82
	16	石鏃	OB3	D6	Ⅴ	217.345	72	2.3	1.60	0.40	0.92
	17	石鏃	SH3	R2	攪乱	－	306	1.9	1.70	0.40	0.85
	18	石鏃片	OB2	D6	Ⅴ	217.215	33	1.7	1.10	0.40	0.53

ＳＨ１：灰白色～青灰白色のシルト質頁岩で，粒子は細かい。

ＳＨ２：やや粒子が粗く，珪質分が含まれるもの。

ＳＨ３：やや粒子が粗く，珪質分があまり含まれない。

ＳＨ４：節理が発達しており，はがれやすい性質の頁岩。一部粘板岩も含まれる。

ＳＨ５：ホルンフェルス。風化しており，白色を呈するものもある。

ＯＢ１：透明感がありガラス質が強く，不純物を多く含む。いわゆる三船（鹿児島市）産と思われる黒曜石である。

ＯＢ２：透明感があり不純物が少なく，いわゆる霧島系と呼ばれる黒曜石である。また，一部腰岳産の可能性のあるものも含む。

ＯＢ３：青灰色を呈し，ガラス質で不純物が少ない。西北九州系の針尾または淀姫産の可能性がある黒曜石である。

ＯＢ４：ガラス質で灰白色をしており，透明感は低い。姫島産の可能性のある黒曜石である。

ＯＢ５：アメ色を呈し，ガラス質が強く，不純物は少ない。桑の木津留産の黒曜石に類似する。

その他は，CH：チャート，CC：玉髄，CR：水晶，SA：砂岩，TU：凝灰岩，KS：軽石，KA：花崗岩などに分類される。

鳥居川遺跡の石器は，石鏃が４点，安山岩製の磨石が２点出土している。

15はチャート製の石鏃である。基部の抉りが深く，逆刺は丸くなっている。16は西北九州系の黒曜石を素材とする石鏃である。17は頁岩製の石鏃で，基部の抉りは浅い。18は片面に広い剥離面を残し，両側縁に押圧剥離を施している。

第３節　チシャノ木遺跡の調査成果

第１項　旧石器時代の調査成果

１　調査の概要

チシャノ木遺跡の旧石器時代の調査は，２ｍ×５ｍの確認トレンチを32か所設定して行った。旧石器文化層でも細石刃文化層であるⅩ層は，慎重に調査を行い，最終的には，ⅩⅧ層のシラス上面まで調査を行い終了した。

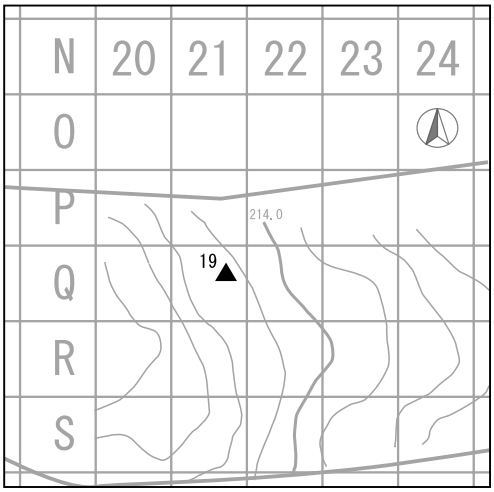
調査の途中，Ｑ－21区，31トレンチのⅩⅢ層上面で削器が１点出土したため，30・31トレンチを拡張して調査を行った。同時に，31トレンチ周辺であるＰ・Ｑ－21～24区に設定した確認トレンチの調査を一時中断し，地形を考慮して，トレンチとトレンチの間に１区画２ｍ×２ｍのメッシュを設定し，千鳥方式でⅩⅢ層上面まで調査を行ったが，遺物は出土せず，包含層の広がりは確認されなかったので，確認トレンチの調査を再開した。

調査の結果，旧石器時代の遺物は，31トレンチで出土した削器１点のみであった。

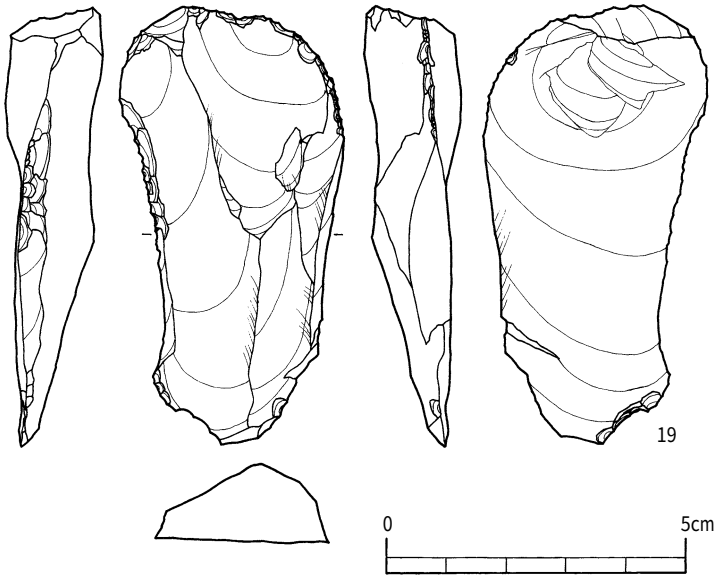
２　遺物

削器（第17図）

Ｑ－21区，31トレンチ内ⅩⅢ層上面で出土した。頁岩製の縦長剥片を素材とする削器である。両側縁と剥片先端部に部分的に細かい二次加工が施される。



第16図　旧石器出土状況



第17図　旧石器時代遺物

第３表　旧石器観察表

挿図番号	番号	石器器種	石材	区	層	標高	遺物番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)
17	19	削器	ＳＨ1	Q21	ⅩⅢ	213.501	712	7.30	3.75	1.60	34.34

第２項　縄文時代の調査成果

１　調査の概要

チシャノ木遺跡の縄文時代の調査は，畑造成のため上の層が削平されており，一部Ⅳａ・Ⅳｂ層が残存していたが，Ⅴ層から調査となった。遺溝は，検出面や埋土の状況から縄文時代早期の集石が２基，落とし穴が２基，土坑が３基の計７基検出されている。遺物は，Ⅶ～Ⅷ層上面で縄文時代早期の石器や土器，Ⅳｂ～Ⅴａ層で縄文時代後期から晩期の石器や土器が出土しており，縄文時代晩期の遺物が大半を占める。

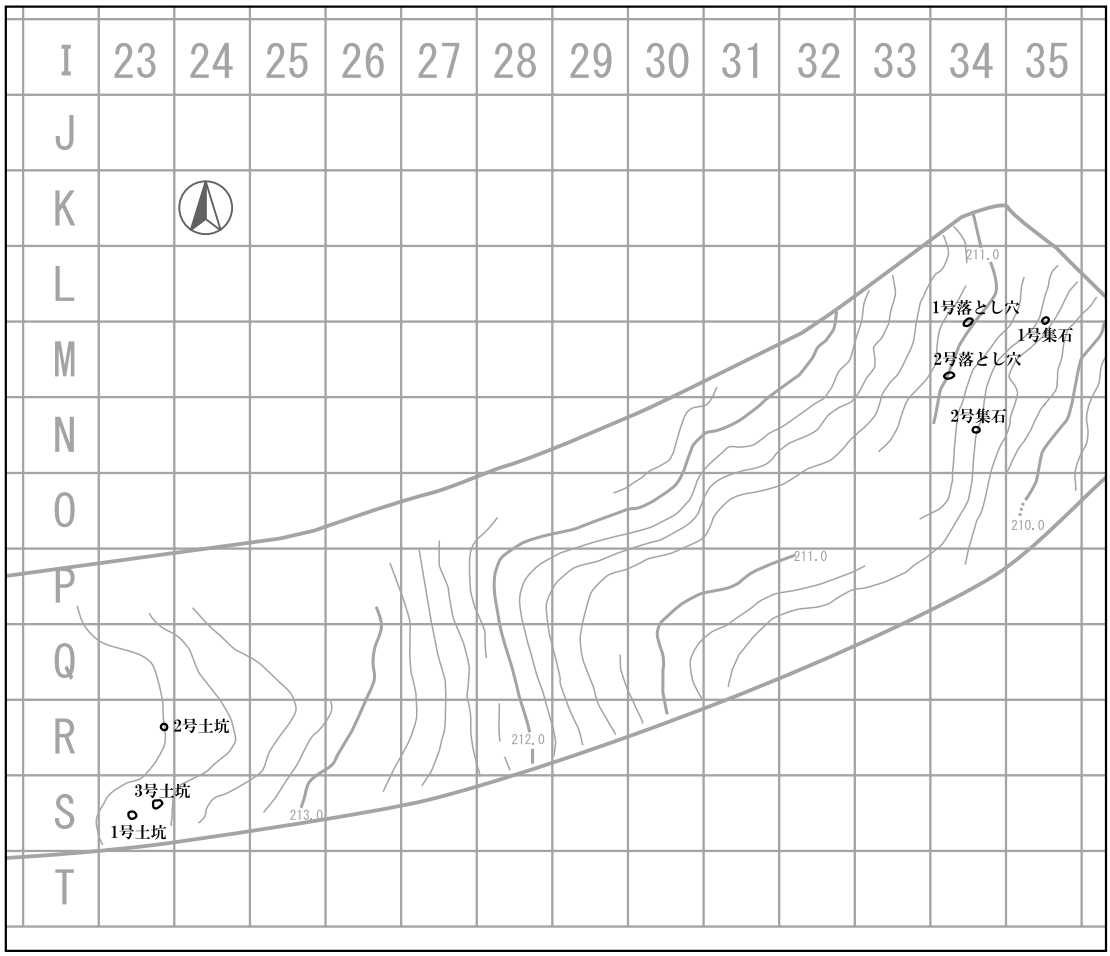
２　遺溝

集石（第19図）

縄文時代早期の集石がⅧ層上面で２基検出されている。

１号集石（第19図上）

Ｌ・Ｍ－35区で検出された集石である。径0.4m×0.3mのほぼ円形プランをしている。すぐ近くで廃棄したと思われる礫も３点検出されている。礫総数は13個で，石材は，全て安山岩であった。



第18図　縄文時代早期遺構配置図

また，集石中の１個と27トレンチの横転層（Ⅶ層下該当）で出土した礫が接合できた。

２号集石（第19図下）

Ｎ－34区で検出された集石である。径0.7m×0.5mの楕円形プランで，少し掘り込みをもつ。0.8m×0.9mの範囲に炭化物の広がりが確認された。礫総数は25個で，石材は，砂岩が１点，他は全て安山岩であった。また，集石中の２個の礫が接合できた。

落とし穴（第20図）

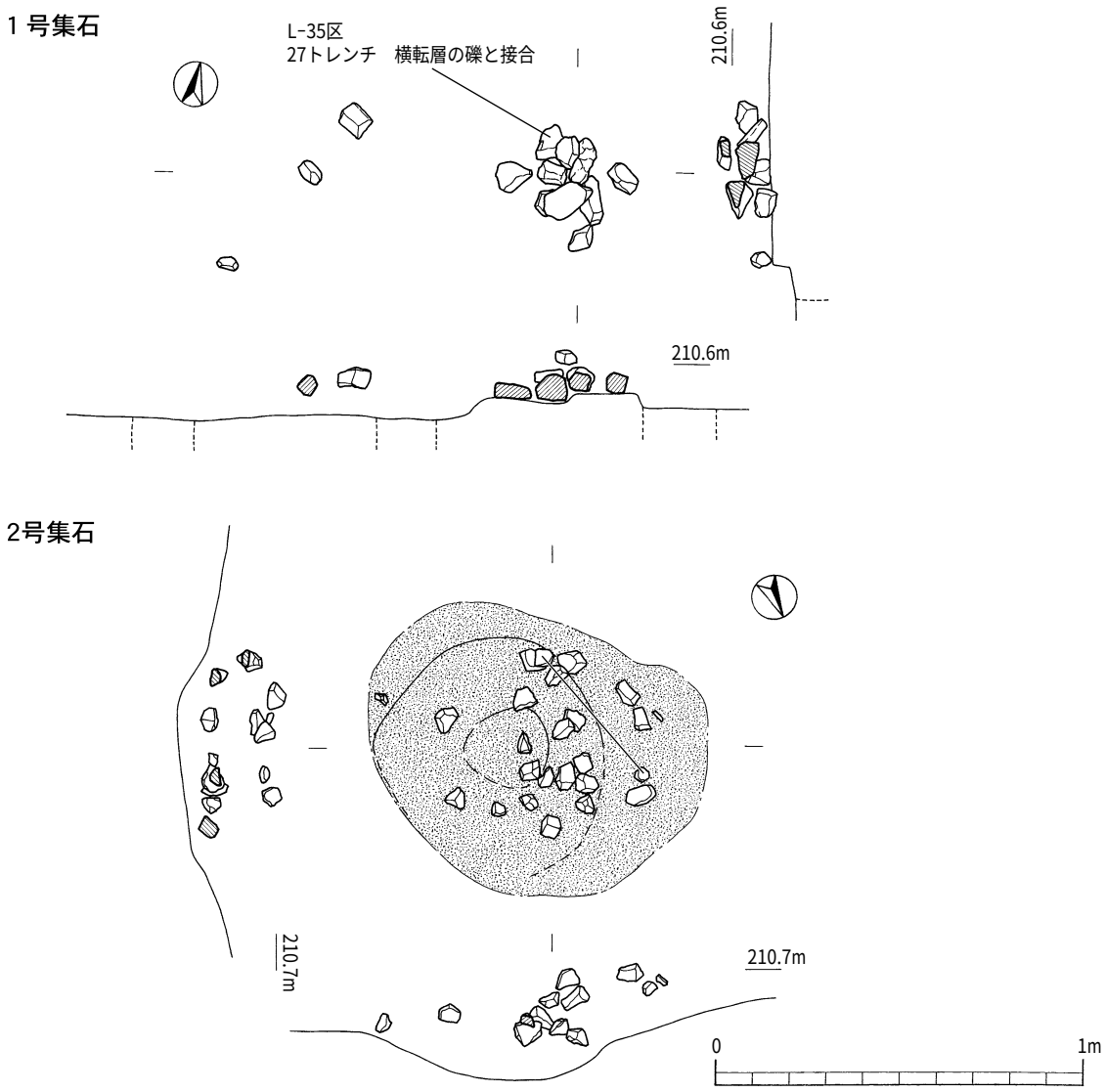
縄文時代早期の落とし穴が２基検出されている。

１号落とし穴（第20図上）

Ｌ・Ｍ－34区で検出された落とし穴である。平面プランは長軸1.2m，短軸0.8mの楕円形で，検出面から底面までの深さは0.3mである。底面には，逆茂木痕と思われる小ピットが，12個検出された。観察できた埋土はＶａ層と同一のアカホヤ火山灰の二次堆積土を主体とし，上部に少しⅣｂ層と同一の御池火山灰が含まれていた。

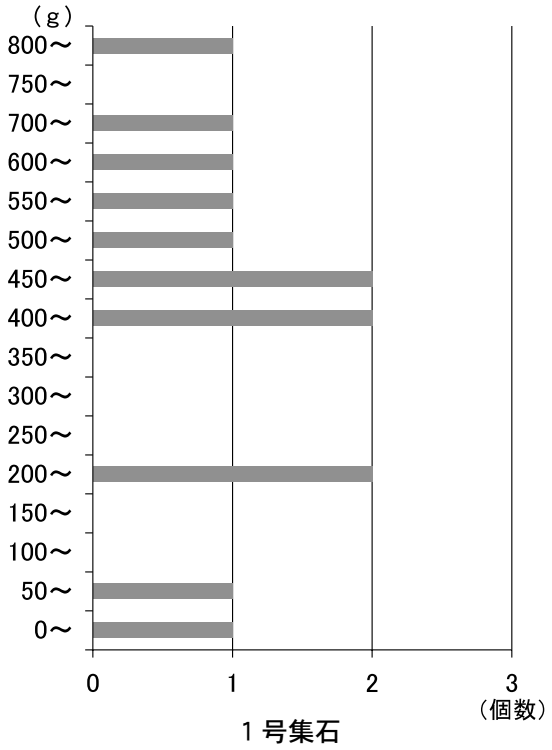
２号落とし穴（第20図下）

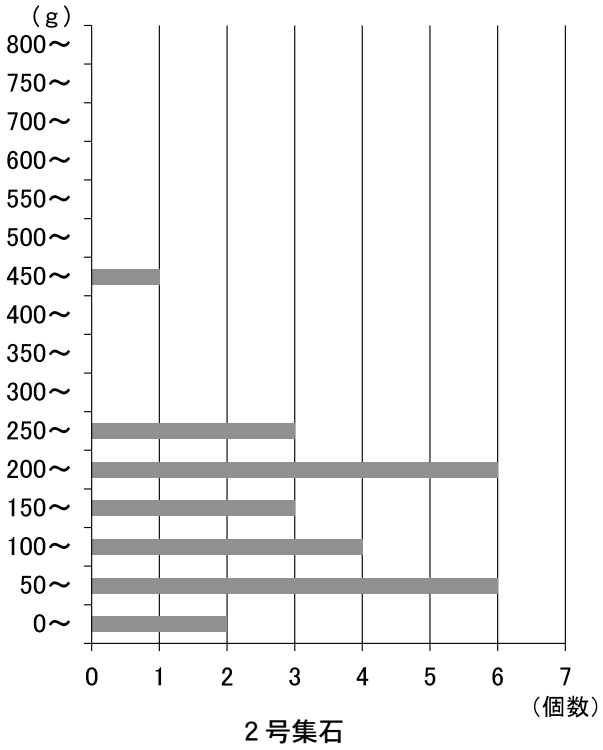
Ｍ－34区で検出された落とし穴である。平面プランは長軸1.2m，短軸0.7mの楕円形で，検出面



第19図　縄文時代早期集石遺構

第４表　集石重量計測表





から底面までの深さは0.2mである。底面には，逆茂木痕と思われる小ピットが４個検出された。観察できた埋土はＶａ層と同一のアカホヤ火山灰の二次堆積土であった。

土坑（第21図）

縄文時代早期の土坑が３基検出されている。検出面は１号土坑がⅧ層上面，２号・３号土坑がⅦ層上面で，埋土の状況等から，古いと思われる順に１～３号と番号を付けた。

１号土坑（第21図上左）

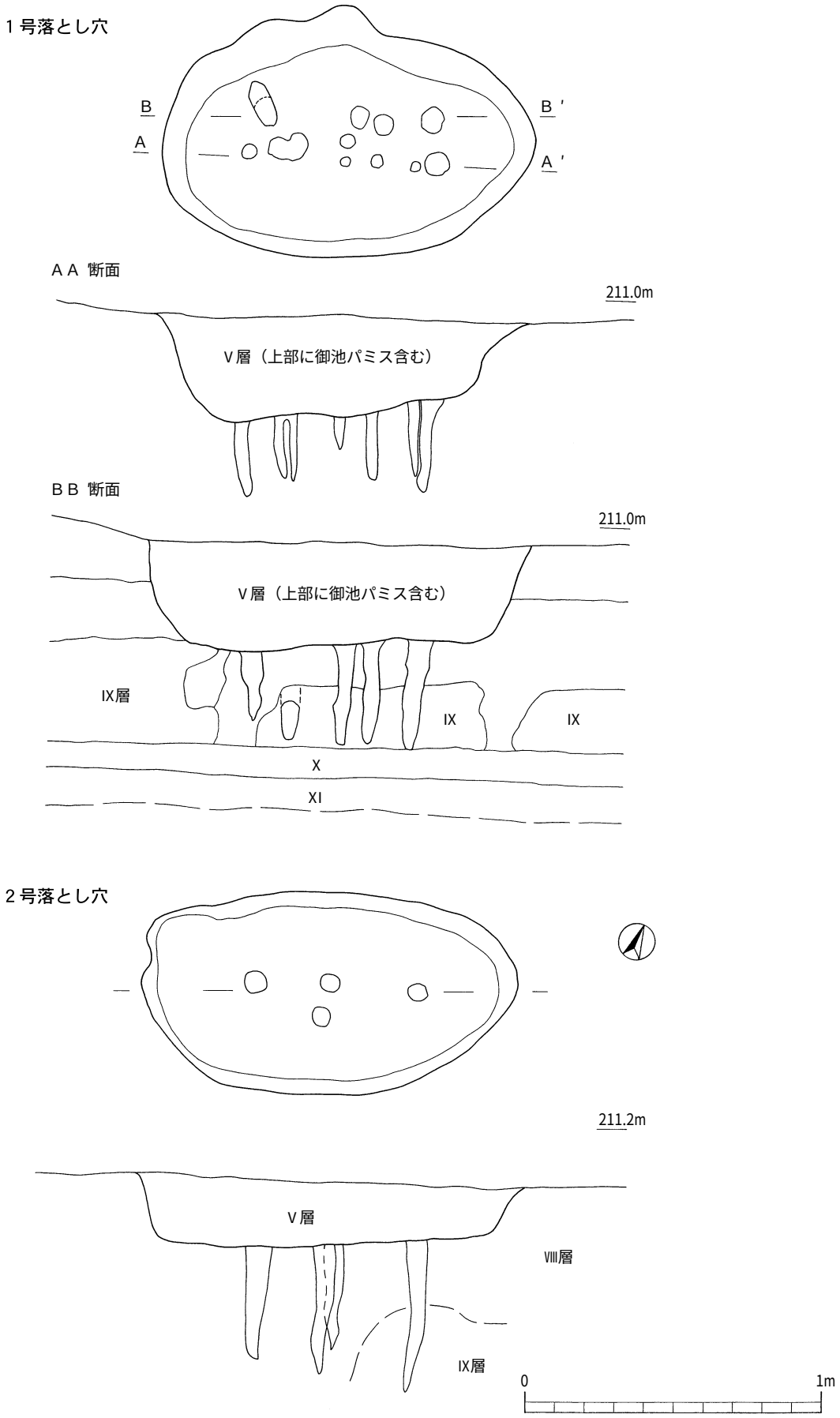
Ｓ－23区で検出された土坑で，検出面はⅧ層上面である。平面プランは長軸1.1m，短軸0.9mの楕円形で，検出面から底面までの深さは0.7mである。観察できた埋土はいずれもＰ－11が混ざった土で，その割合や土の硬さ等から３つに分層することができた。

２号土坑（第21図上右）

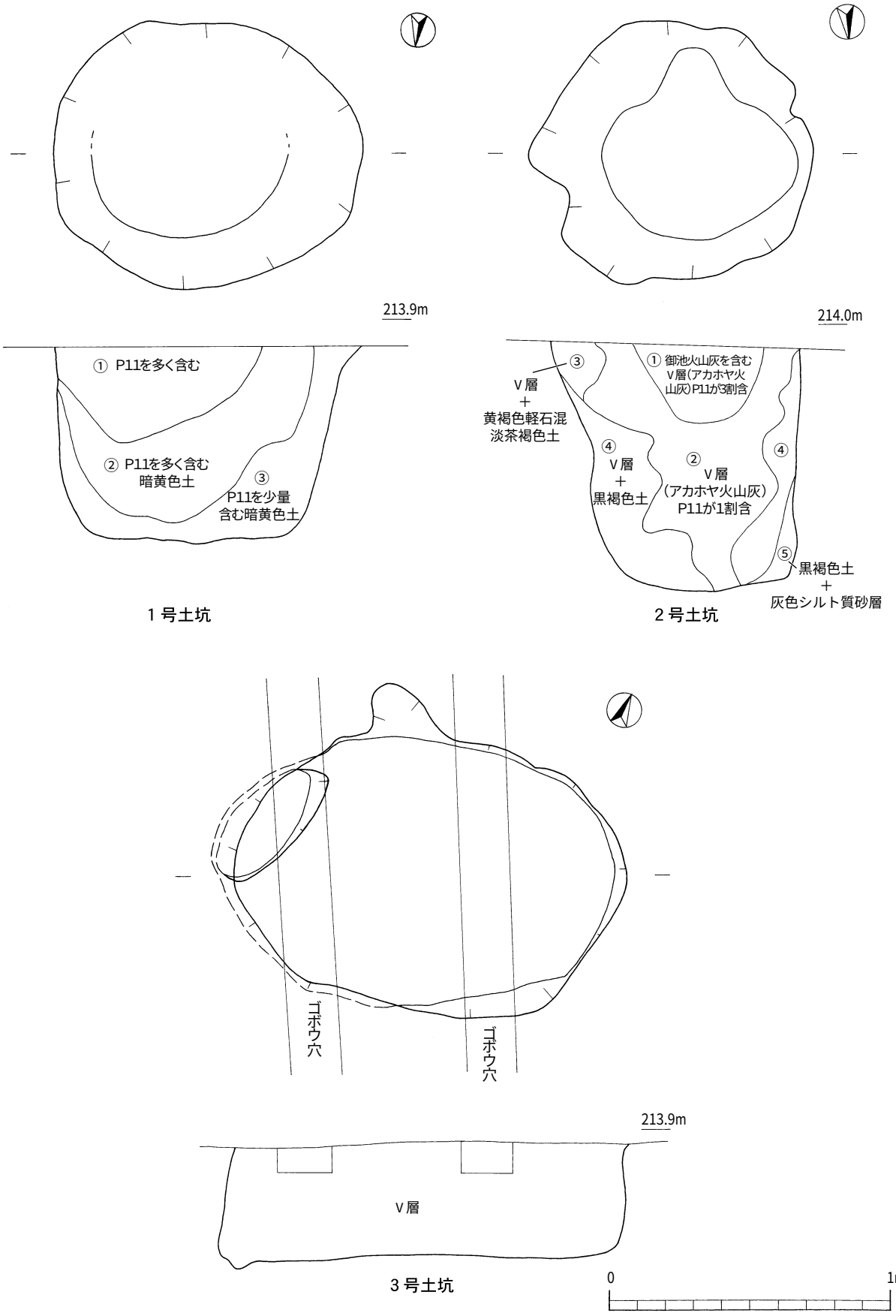
Ｒ－23区で検出された土坑で，検出面はⅦ層上面である。平面プランは長軸１m，短軸0.9mのほぼ円形で，検出面から底面までの深さは0.85mである。観察できた埋土はアカホヤとＰ－11が混ざった土が大半を占めており，その混ざりの度合いから６つに分層することができた。

３号土坑（第21図下）

Ｓ－23区で検出された土坑で，検出面はⅦ層である。平面プランは長軸1.4m，短軸１mの楕円形で検出面から底面までの深さは0.4mである。観察できた埋土はアカホヤであった。



第20図　縄文時代早期落とし穴



第21図　縄文時代早期土坑

3　遺物

縄文時代の土器・土製品

縄文時代の土器は，早・前期，後・晩期のものが出土している。時期毎には，早期土器15点，前期土器８点，後期土器43点，晩期土器1019点出土しており，大半を晩期土器が占める。出土層としては，Ⅶ・Ⅷ層からは早期土器が，Ⅳ・Ⅴ層からは晩期土器が出土している。また，晩期土器の出土区は主にＰ・Ｑ－29～31区に集中している。土器の形態・文様などから，以下の１～７類に分類した。

１類土器（第24図　20）

Ｑ－24区から３点出土している。20は外面に山形文を施す押型文土器である。内面には部分的にコゲが付着している。

２類土器（第24図　21・22）

21・22は同一個体と思われる無文土器である。Ｎ－34区から出土している。22には口唇部にやや高い部分がみられ，波頂部であった可能性もある。出土層からも１類土器と近い時期であったと思われる。ススの付着がみられる。

３類土器（第24図　23・24）

２点とも底部に近いと思われる胴部片である。23は内面にコゲが付着し，外面は丁寧にナデられている。24は内面に調整によるハケメが観察できる。

４類土器（第24図　25～27）

25は，幅５㎜の凹線が施されている胴部片である。26・27は同一個体と思われるが，25もこれらの胴部片の可能性がある。

５類土器（第25図　28・29）

28・29ともにＯ・Ｐ－34区より出土している。28は29の口縁部と思われ，波状口縁の頂部付近である。口唇部凹線内には右の諸撚り（Ｓ撚り）縄文が施されている。口唇部付近は内側に屈曲し，頸部屈曲部に向かって内傾し，胴部は丸く張る。29は，胴部にＳ撚りの縄文を転がした後，6条の凹線を施している。また，頸部屈曲部には粗雑な刺突が連続して施されている。

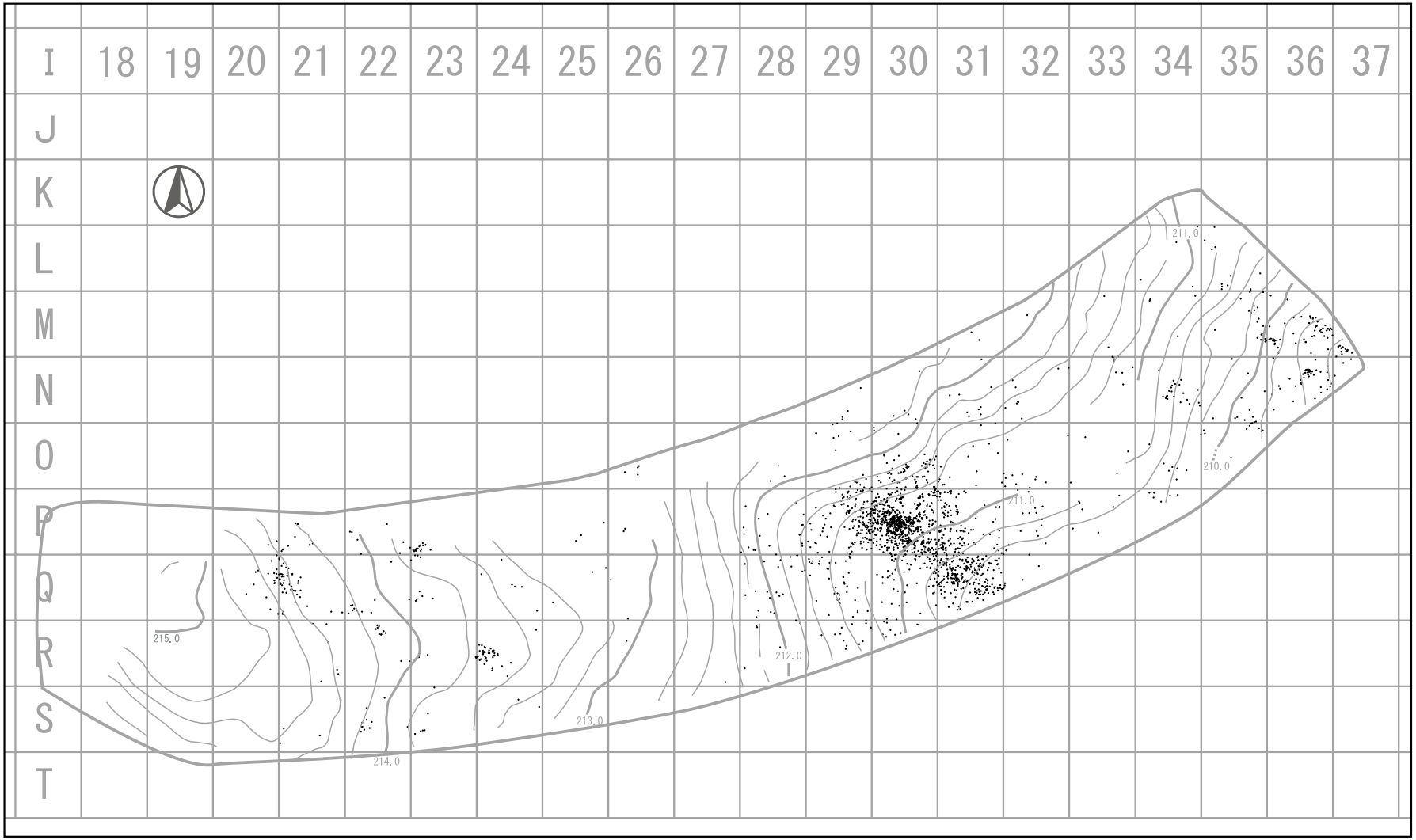
６類土器（第27～29，31・32，34，36～39，41～44，46・47図　30～194）

６類土器は，本遺跡の出土遺物の主体を占める一群である。ここでは器形によって，深鉢（６ａ類），鉢（６ｂ類），中華鍋形を呈する鉢（６ｃ類），浅鉢類（６ｄ類）で分類した。調整などの特徴も加味して分類を行ったが，全形が分かるものが少なく，判別が困難なものも少なくなかった。

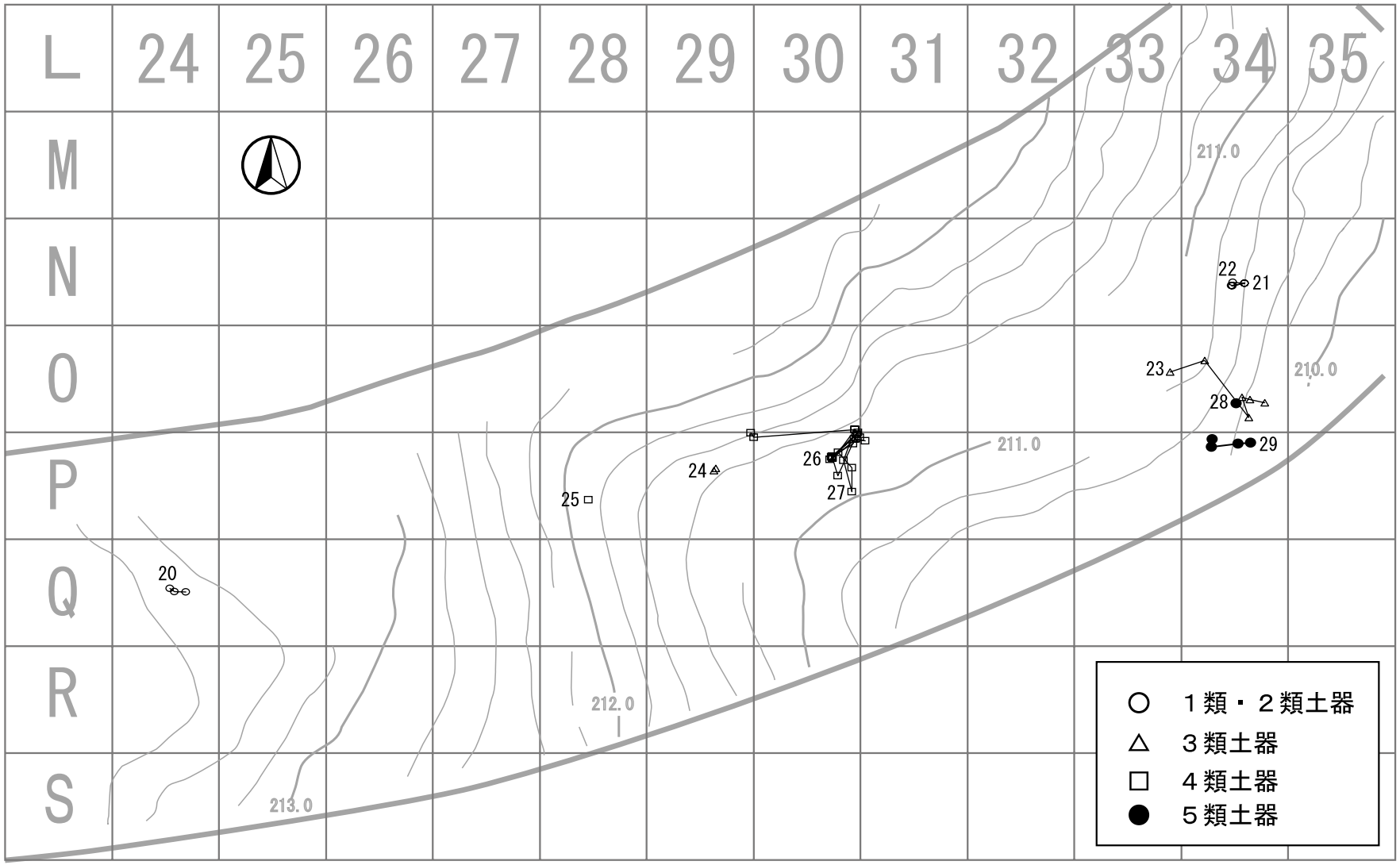
６ａ類（第27～29図　30～67）

粗製の深鉢形土器で，多くは内外面に条痕もしくはナデによる器面調整が施されている。さらに１～４類に分類した。

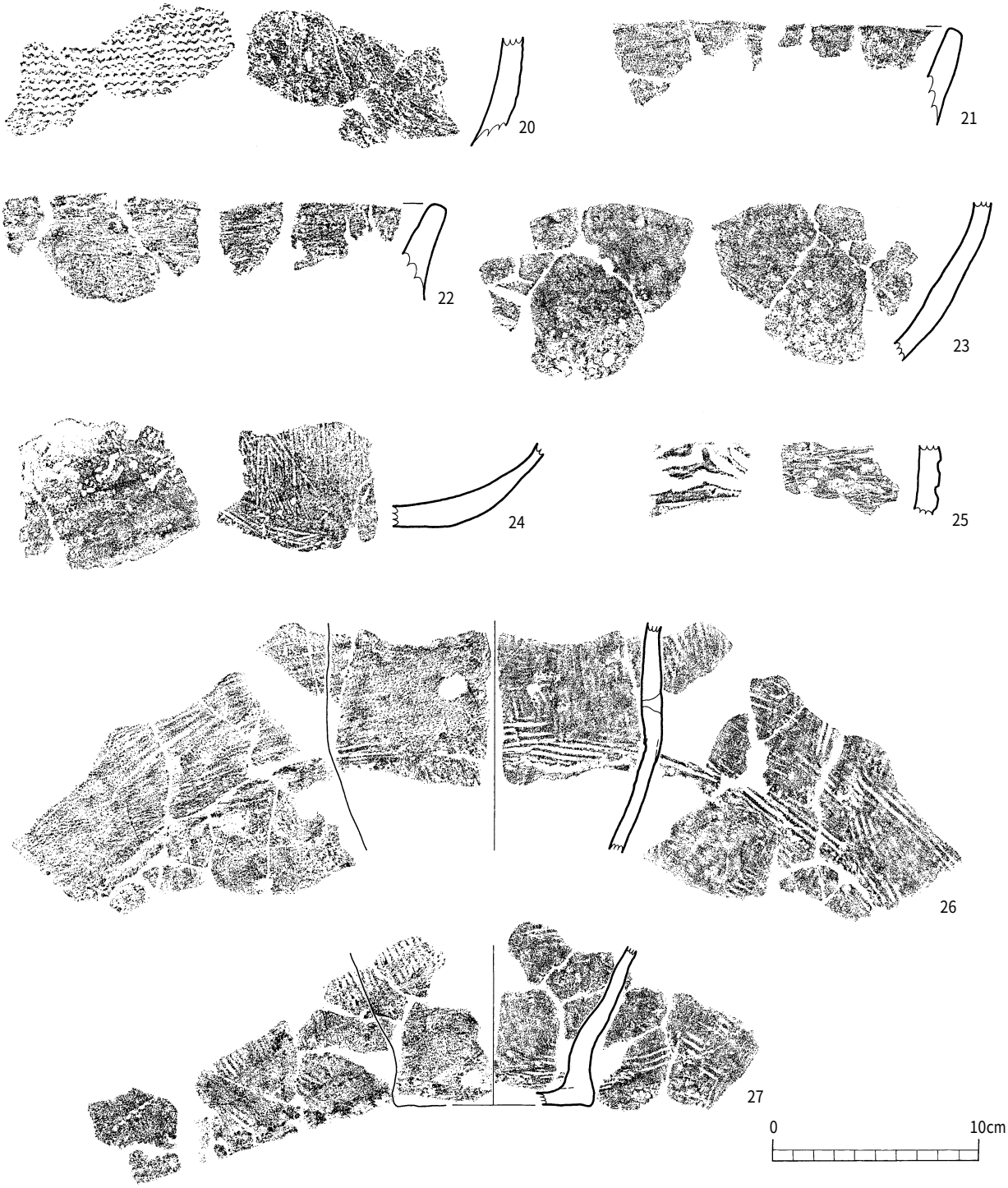
６ａ－１類：　口縁部がわずかに肥厚し，胴部に屈曲部がみられる粗製の深鉢形土器である。胴部下半の形状を示す接合例はみられないが，胴部屈曲部から底部に向かってほぼ直線的につながると考えられる。(30～50)



第22図　縄文時代遺物出土分布図



第23図　縄文時代早期～後期土器（１～５類）出土分布図



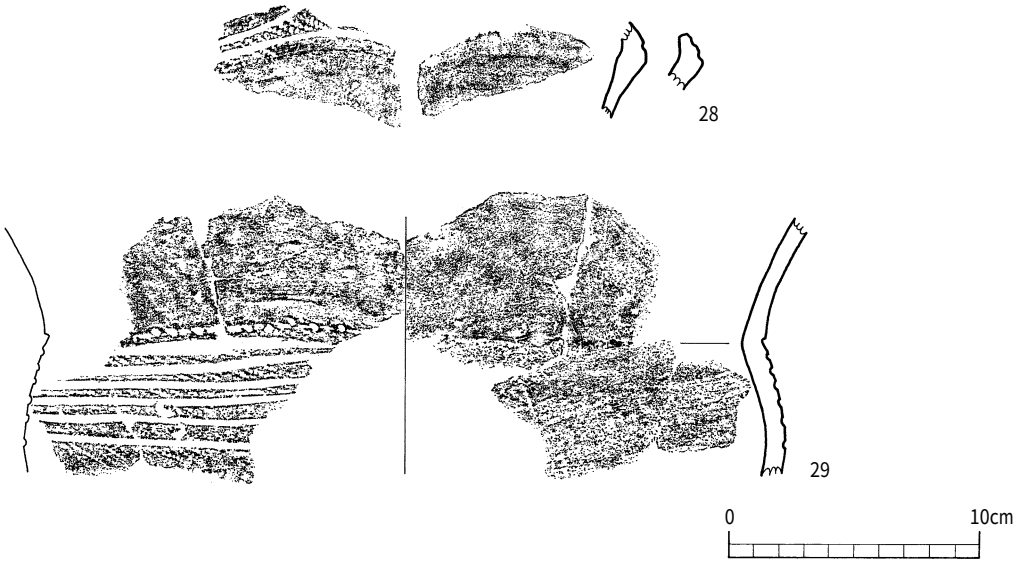
第24図　縄文時代早期～後期土器

６ａ－２類：　６ａ－１類以外の深鉢と思われるものを一括した。(51～59)

６ａ－３類：　胴部片（60～64）

６ａ－４類：　底部（65～67）

６ａ－１類の30～32は，胎土・調整などの観察から同一個体の可能性がある屈曲型深鉢である。口縁部はわずかに肥厚し，胴部屈曲部から口縁部に向かってやや内傾する。外面にはススが付着している。31の口縁は平らではなく，波状もしくは何らかの突起物がつけられていた可能性がある。



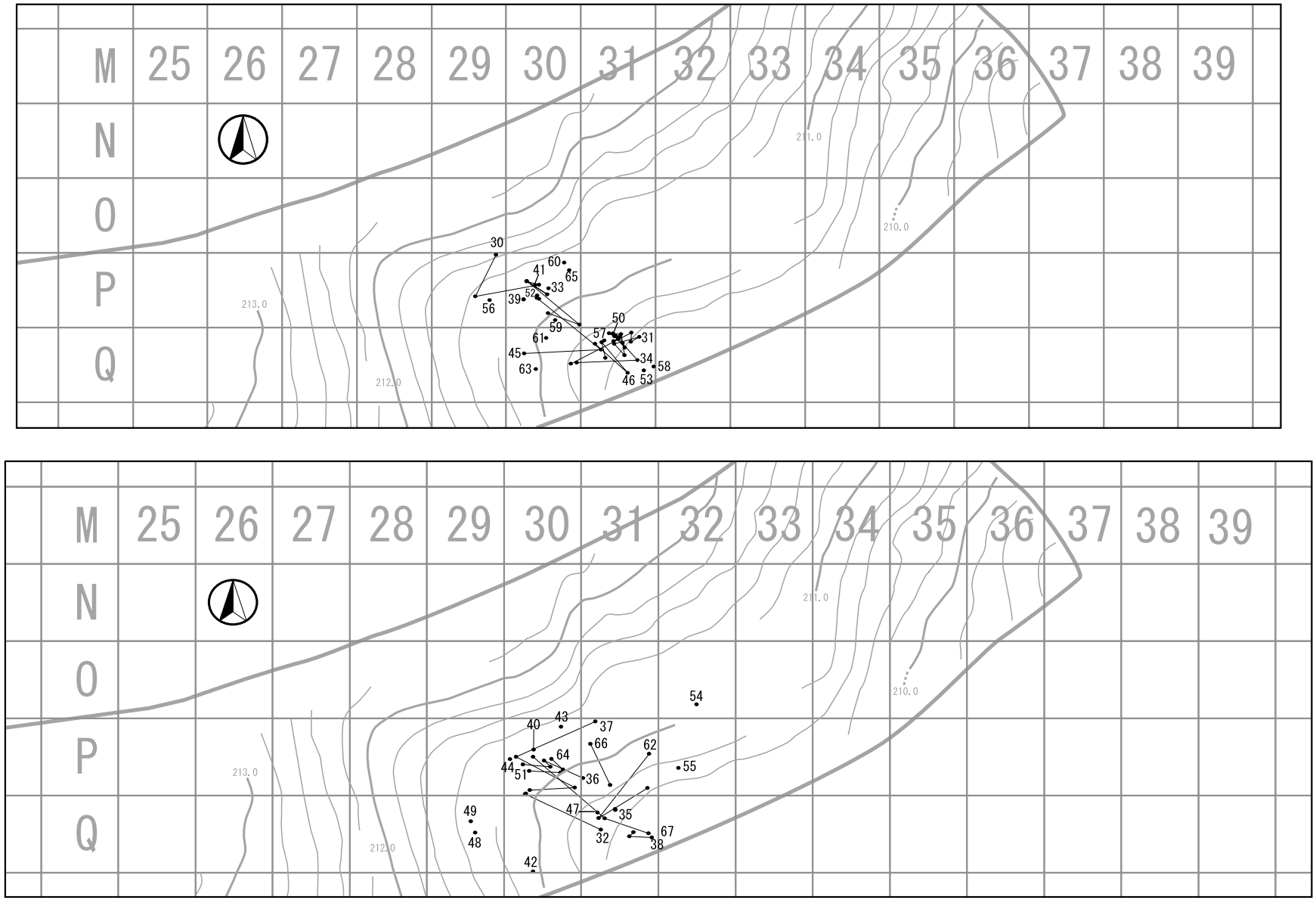
第25図　縄文時代後期土器

38は，補修のためか部分的に粘土が塗り重ねられているため，口縁部は部分的に肥厚している。40～42は同一個体と思われる。外面にはススが付着し，内外面ともに丁寧にナデられている。肥厚部は緩やかな段をもって形成されている。43は口唇部から約４㎝の広い肥厚部がみられる。外面にはススが付着している。45～50は深鉢とよぶには器高が低いと思われるが，この類に含めた。突帯をもち，突帯の下には径２㎜ほどの穿孔が施されている。いわゆる孔列土器の可能性が高い。45は２孔であり連続性が不明であるが，50は，約1.2㎝の等間隔をおいて孔が３つ並んでいることがうかがえる。また，他の土器の孔と孔の間隔は，45は1.7㎝，47は1.5㎝，49は１㎝と少々バラつきがみられる。各々が同一個体の可能性もあるが，不明である。また，46は胎土，調整などの点から45の胴部と思われ，同一個体と考えられる。45・46ともに内外面は丁寧にナデられている。胴部である46は屈曲部より下位の内面にミガキが施されている。

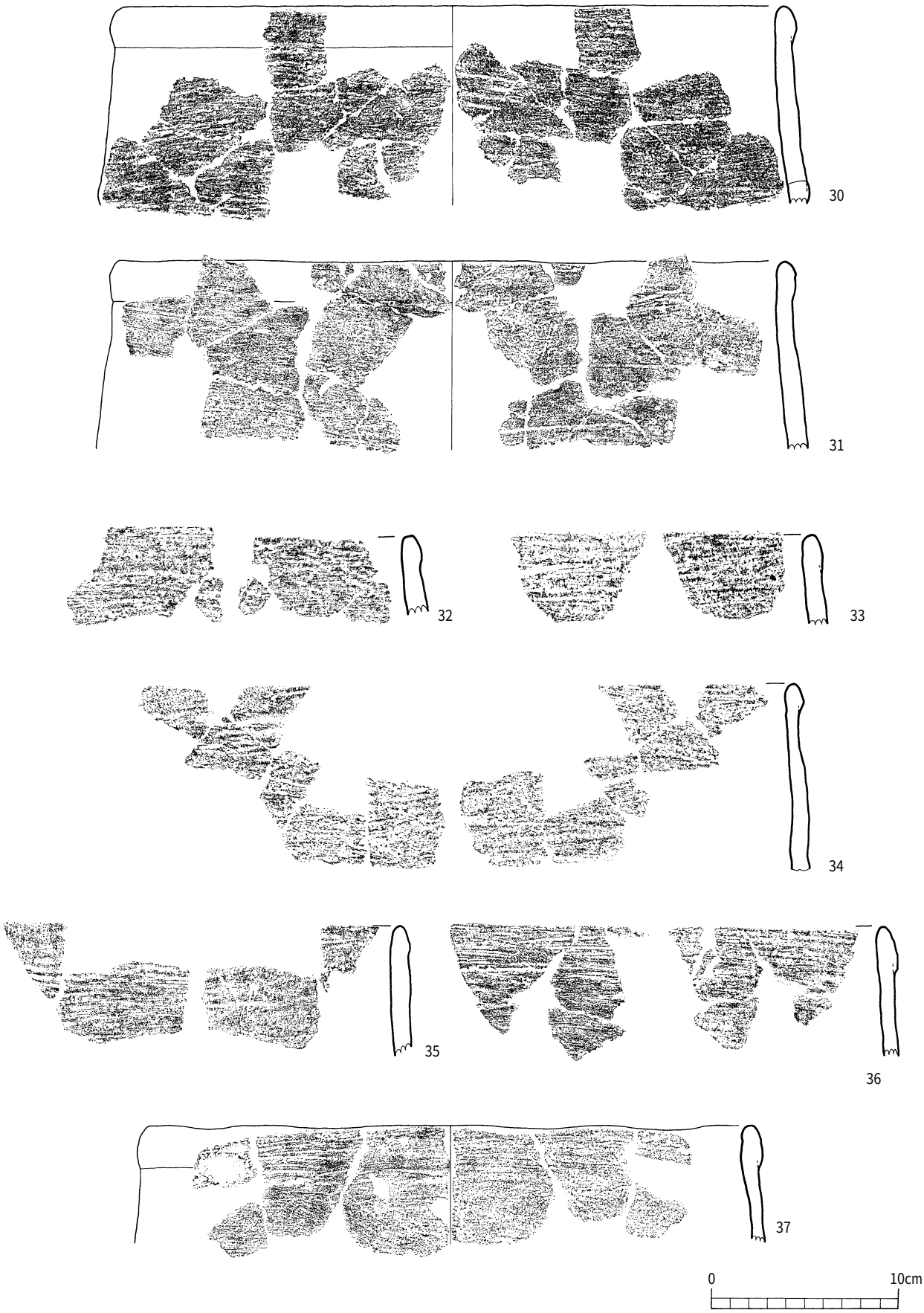
６ａ－２類は，屈曲型以外の深鉢形土器と思われる一群である。51は口唇部に粘土紐を貼り付けている。外面のススを^{14}Ｃ年代測定した結果，2720±30の年代を得ている。52・53は突帯をもつものである。52は外面にススが付着している。54・55は同一個体の可能性がある。外面にはススが付着している。56は外面が赤化している。

６ａ－３類の60～63は深鉢形土器の胴部片と思われるものである。60は粗製で，恐らく６ａ－１類の胴部屈曲型の深鉢胴部と思われる。61・62も粗製である。62は内面にススが付着している。63は鉢の胴部片である可能性もある。内面は部分的に磨かれている。64も60と同じく胴部屈曲型の可能性がある。内面は丁寧に磨かれている。

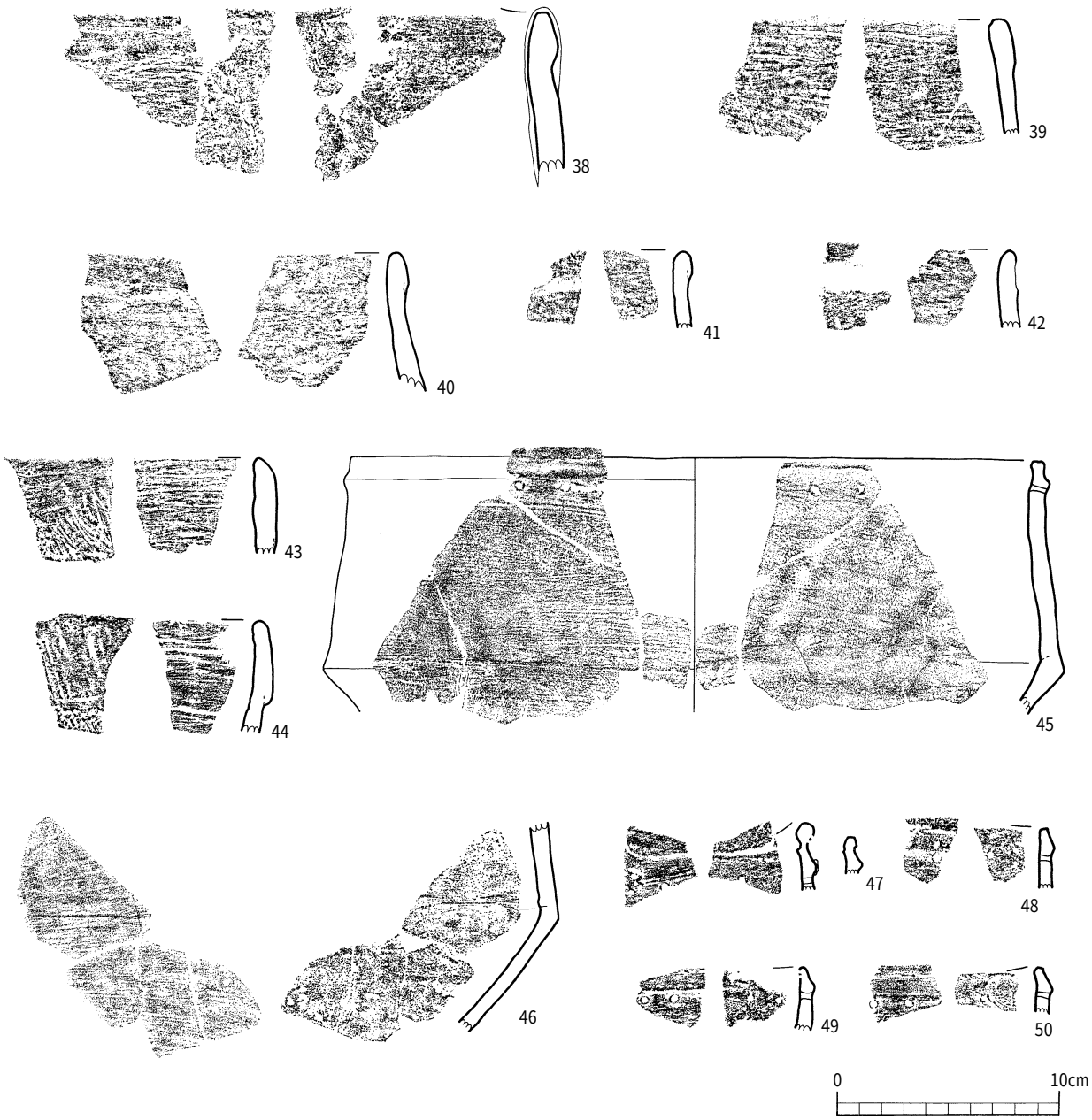
６ａ－４類の65～67は底部である。65と66は同一個体の可能性がある。65と66の内面は丁寧にナデられており，磨かれていた可能性もある。67の底部には，丸く薄いススが付着している。



第26図　縄文時代晩期土器（６ａ類）出土分布図



第27図　縄文時代晩期土器(1)



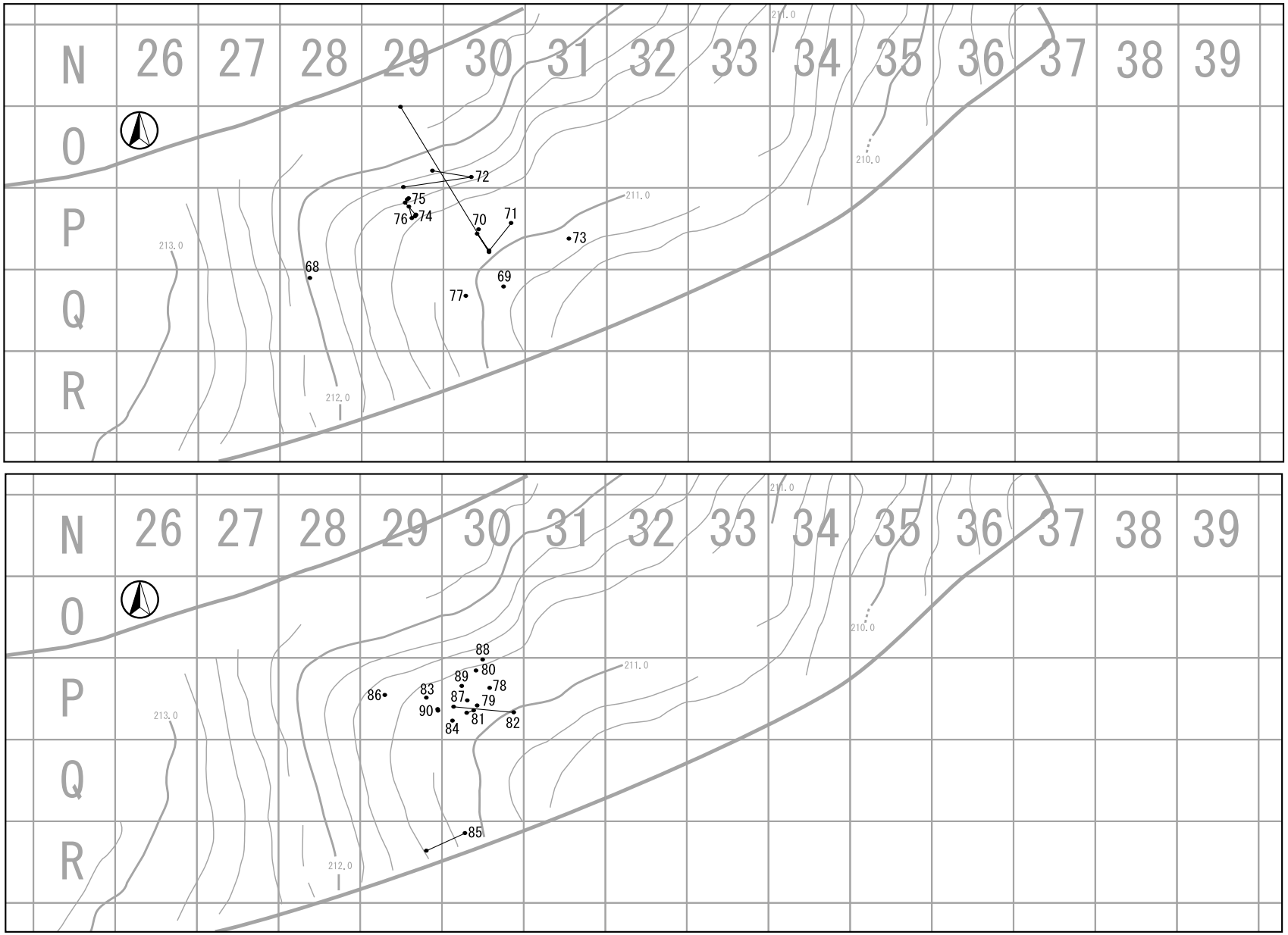
第28図　縄文時代晩期土器(2)

6ｂ類（第31・32図　68～90）

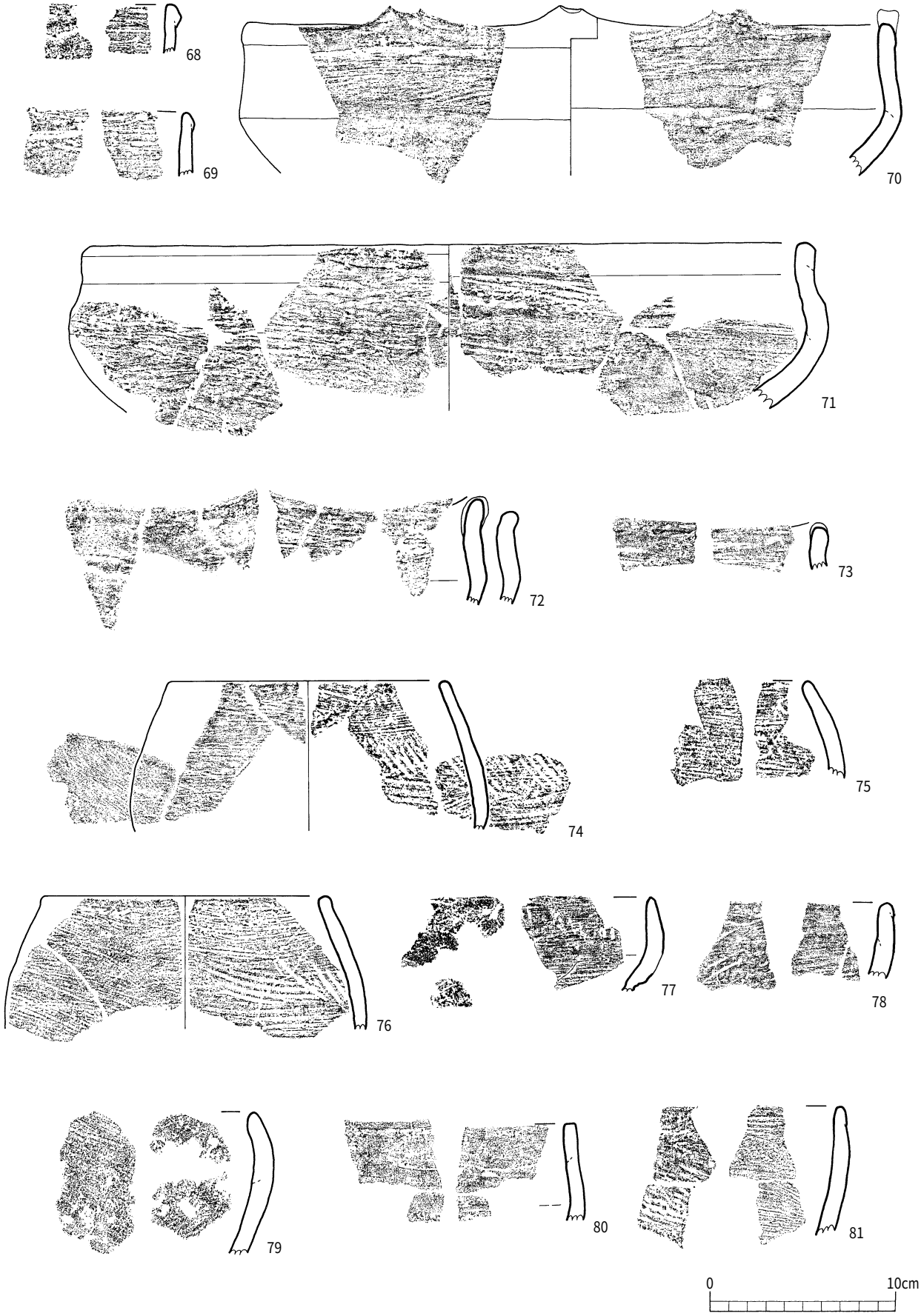
その他の器形を呈すると思われる鉢形土器である。全形が把握できるものはないため，一部深鉢形土器も含まれている可能性がある。器形としては，⑴口縁部に突帯をもつもの（68・69），⑵口縁部をわずかに肥厚させて，頸部はややまるく内湾し，胴部は口径ほどかそれ以上にまるく張るもの（70～73），⑶口縁部がやや内湾し，口径より胴部径がやや大きくなり，胴部が丸く屈曲しているもの（74～81），⑷その他の形状不明の鉢形土器（82～90），に大まかに区分される。また6ｂ類のものと思われる胴部も含めて掲載する。

71～73は同一個体の可能性が高い。72の形状から口縁部は波状か突起がついていたと思われる。内面上部には条痕がみられるが，下部は丁寧にナデられている。

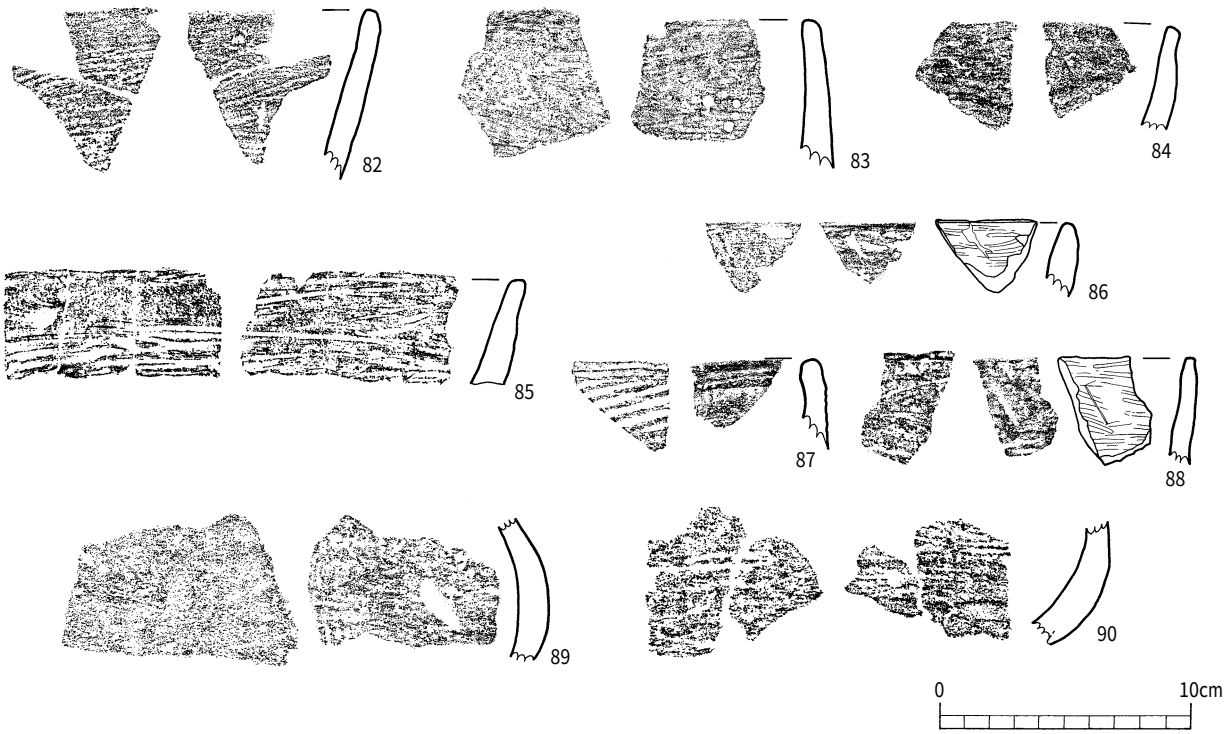
第29図　縄文時代晩期土器(3)



第30図　縄文時代晩期土器（６ｂ類）出土分布図



第31図　縄文時代晩期土器(4)



第32図　縄文時代晩期土器(5)

74は深鉢の可能性もあるが，この類に含めた。内面に白い粘土のようなものが多く付着している。74～76は同一個体の可能性が高い。79は内面が大きく剥落しているが，丁寧にナデられている。80は胴部に屈曲部をもち，外面にススが付着している。83・84は胎土や調整などから同一個体の可能性がある。外面にススが付着している。内外面ともに明瞭ではないが磨かれたあとがうかがえる。86・88は内面から口唇部までミガキが及んでいる。外面はナデである。89・90はこれらの鉢類の胴部片と思われるものである。

６ｃ類（第34・36～39・41～44図　91～167）

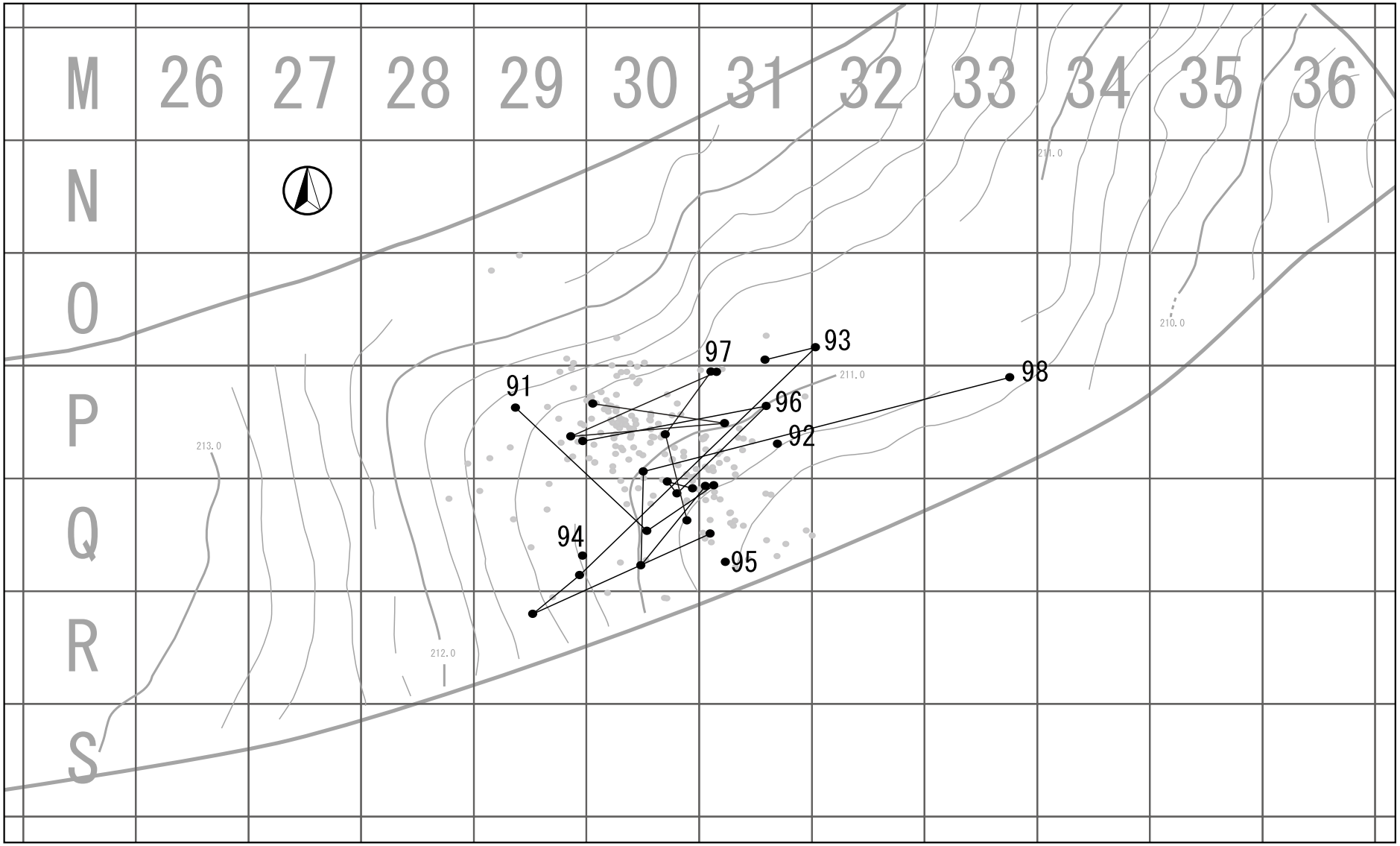
鉢形土器のうち，口縁部が直行もしくはやや外反，または屈曲し，胴下半部に向かって緩やかに屈曲し，丸もしくは平底となるもので，いわゆる中華鍋形を呈するものに代表される一群である。調整，組織痕の有無によってさらに３つに分類した。

６ｃ－１類：　底部に組織痕がみられるもの。調整は主に内部にミガキがみられるいわゆる半粗半精製土器が主体を占める。(91～149)

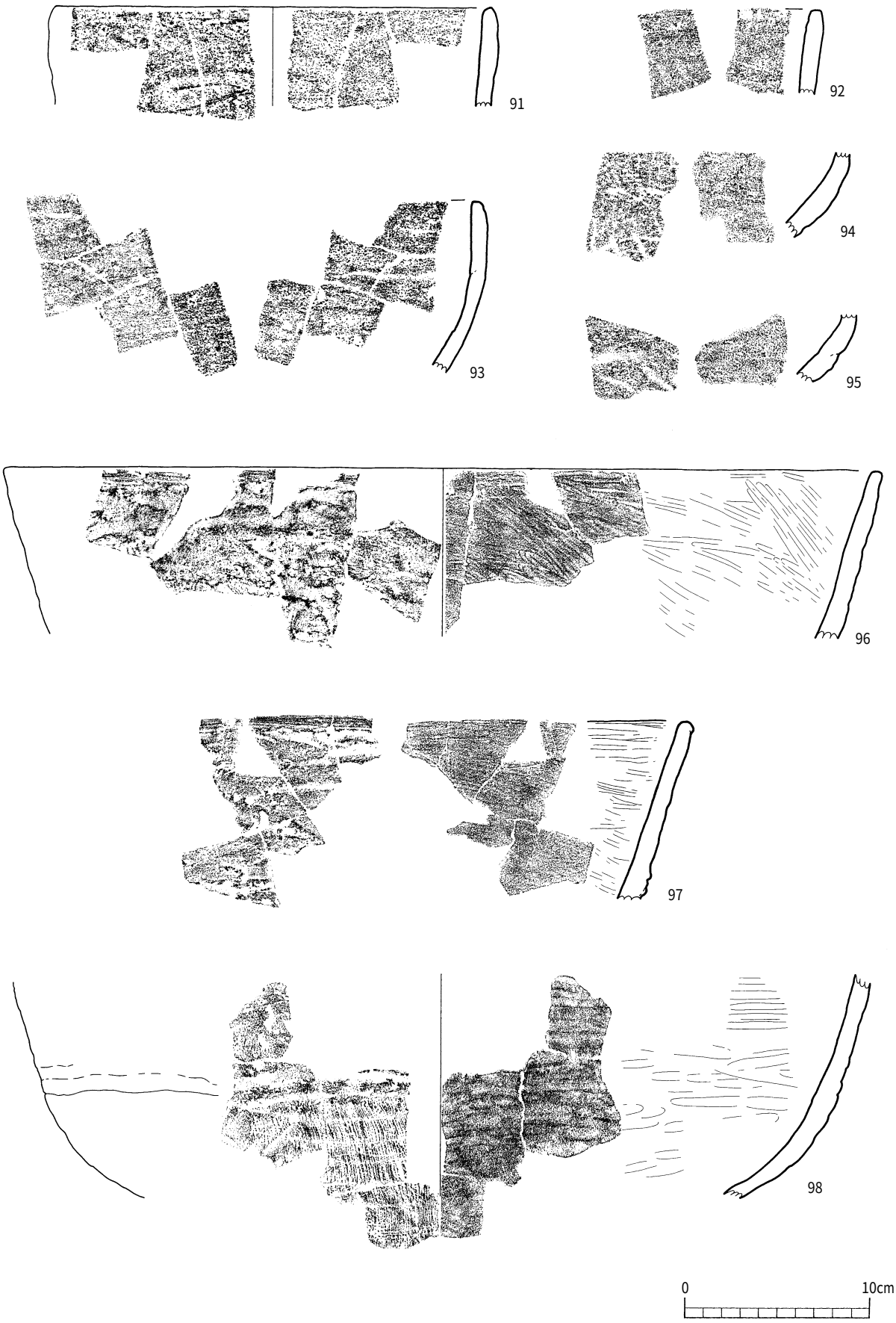
６ｃ－２類：　組織痕はみられないが，形状は中華鍋形を呈し，内面にはミガキが施されている。(150～160)

６ｃ－３類：　組織痕が部分的に観察できる。器形は中華鍋形と想定されるが，内面外面ともに磨かれている精製土器である。(161～167)

６ｃ－１類の91～95は同一個体の可能性の高いものである。胎土に小礫が多く混ざり，調整も一見すると粗製土器である。また，内面のミガキもはっきりと確認できないが，94・95は胴部屈曲部にあたると思われ，外面にはわずかに組織痕が観察できるため，この分類に含めた。96～98も同一



第33図　縄文時代晩期土器（６ｃ類）出土分布図(1)



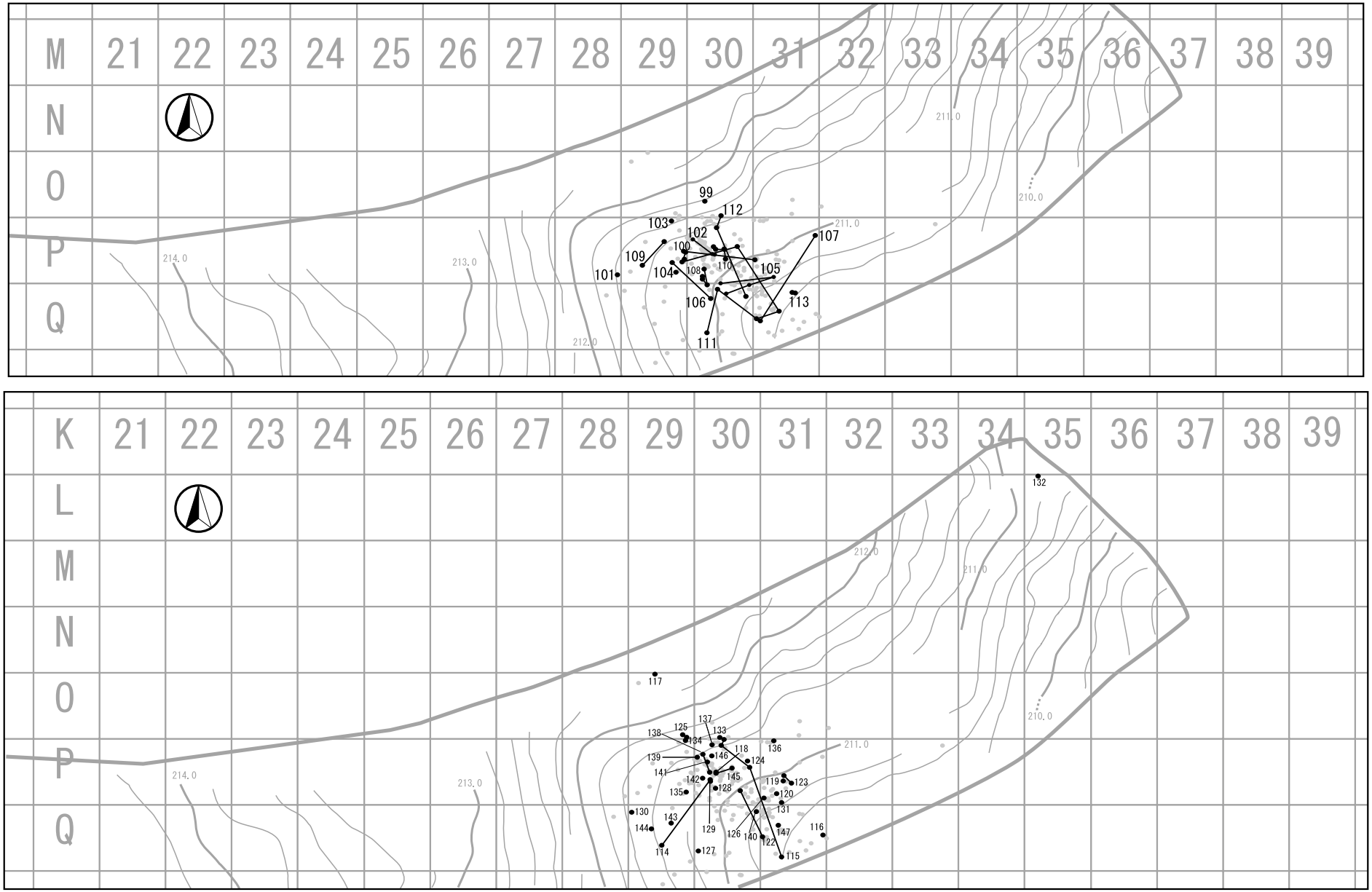
第34図　縄文時代晩期土器(6)

個体と思われるものである。胴部下半部には組織痕がみられ，胴部上半部との境目に明瞭ではないが突帯が施されていると思われる。

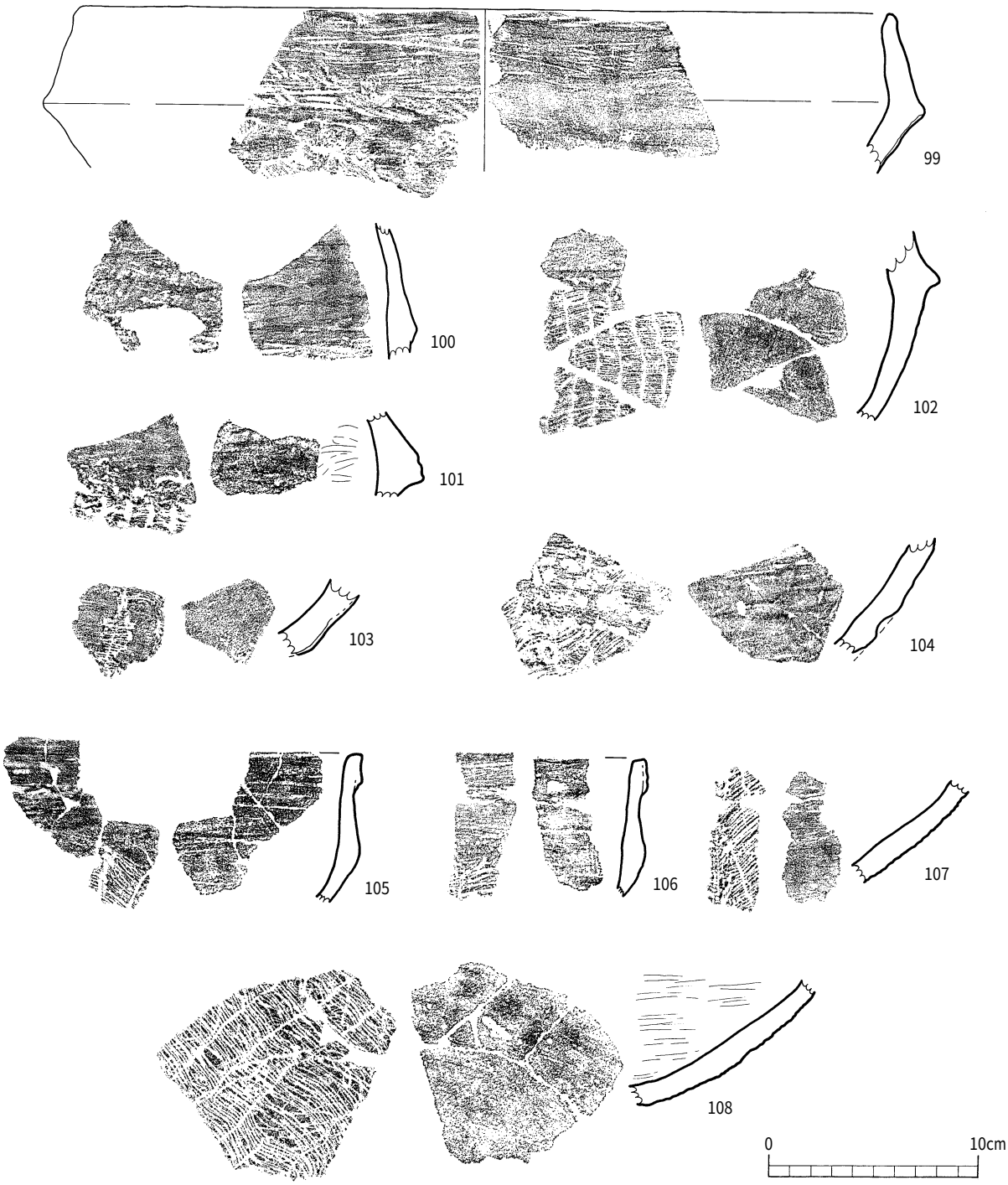
99～104も同一個体の可能性が高いものである。99は胴部屈曲部より下半部で粘土が剥がれた下から組織痕が確認でき（写真１），型取りをしたあと組織痕の上から粘土を重ねたことが見て取れる。103・104も同様である。105～108も同一個体と思われる鉢形土器である。口唇部はやや肥厚し，胴部にやや屈曲部をもつ形態である。組織痕を観察すると，経糸が一部ほどけているのが分かる。また，一部分は２枚の編布が重なっていることがわかる。109も，底部型取り部と胴部上半部のつなぎ目がよく分かる組織痕土器である。接合部分は粘土がやや厚く重ねられている。110～114は同一個体の可能性があるものである。110は補修孔がみられる。また，アンギンの編布は縦糸が部分的に解けており，凹凸のないなだらかなカーブをもつ容器のようなものに編布をひいて型取りをしていたことが分かる。また，110の器面には２段の段（深いところで３㎜）がみられ，段の上下で経糸・緯糸は繋がっており，型取りをする際に何らかのものがそこにあったことが分かる。110～114は，経糸はほとんどが１㎝間隔であるが，部分的に経糸が３～４㎜の間隔で２本入る部分がある。111は部分的に２枚の布が重なっており，下の布の経糸のくぼみが観察できる。115は２枚の編布を重ねて型取りをしていることが分かる資料である。上下の編布の経糸は60°ほどずれており，緯糸の間から下の編布の緯糸が確認できる。116・118は同一個体の可能性がある。117は組織痕は明瞭ではないが，胴部屈曲部に接合痕が観察される。120・121は胎土や調整から同一個体と思われる。121は平織り，そして120はアンギン編みと平織りの２種類が混在している。尾関清子氏に見ていただいたところ，重なり部分から，別の布が重なっているという御教示をいただいた。122は胴部で屈曲し，内傾しながら口縁部に至ると思われる組織痕土器である。経糸は１㎝幅のものと２～４㎜幅のものが混在している。142～144は網目圧痕土器である。網目の屈曲部間の最大長をそれぞれ計測した。148は，底部はほぼ平底の鉢であるが，組織痕がわずかに確認できたため，この類に含めた。149は148の底部である可能性が高い。粗製の鉢であるが，底部付近の内面は比較的丁寧になでられている。

写真２～４は組織痕のモデリング陽像である。モデリング陽像を観察すると，137・139などは経糸が異なる２方向にみられ，２枚の布が重なっていたことがよくわかる。また，観察できた片撚糸は，ほとんどが左撚り（Ｓ撚り）である。

６ｃ－２類の150～160は組織痕がみられない中華鍋形タイプのものである。150・151は口縁部形態から，波状もしくは突起物がつけられていた可能性がある。151は外面にススが付着しており，152も同一個体と思われる。口縁部は波状もしくは突起物がつけられていたと思われる。153～155は同一個体と思われ，外面にススが付着している。156は補修孔がみられる。158は，胎土や調整などから156の胴部の可能性がある。屈曲部は粘土を厚く貼り付けており，型取り部分との接合部であると思われる。160は組織痕は見られないが，底部と胴部の接合部だけでなく，底部にも粘土が重ねられていると思われる。外面上部には，ススが付着している。

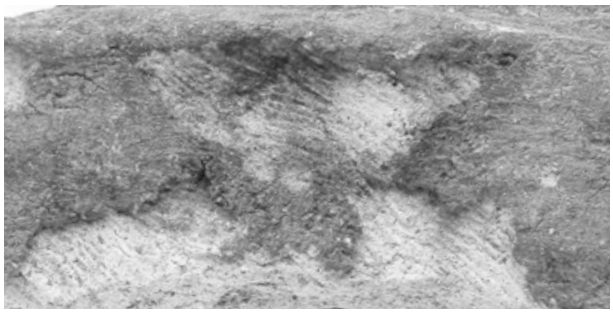


第35図　縄文時代晩期土器（６ｃ類）出土分布図(2)



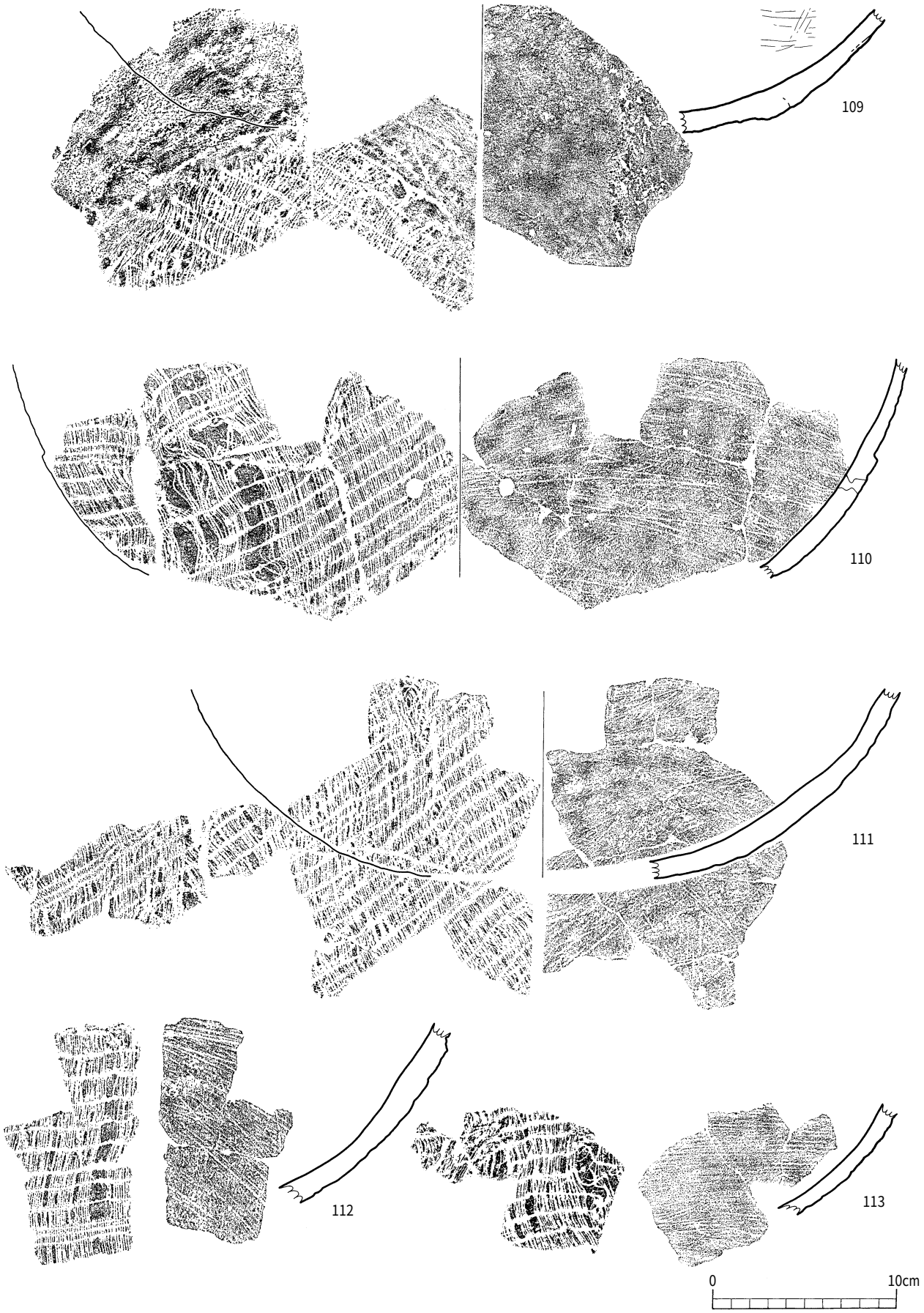
第36図　縄文時代晩期土器(7)

粘土貼付部分



粘土剥落部分

写真１　No.99の拡大部分



第37図　縄文時代晩期土器(8)

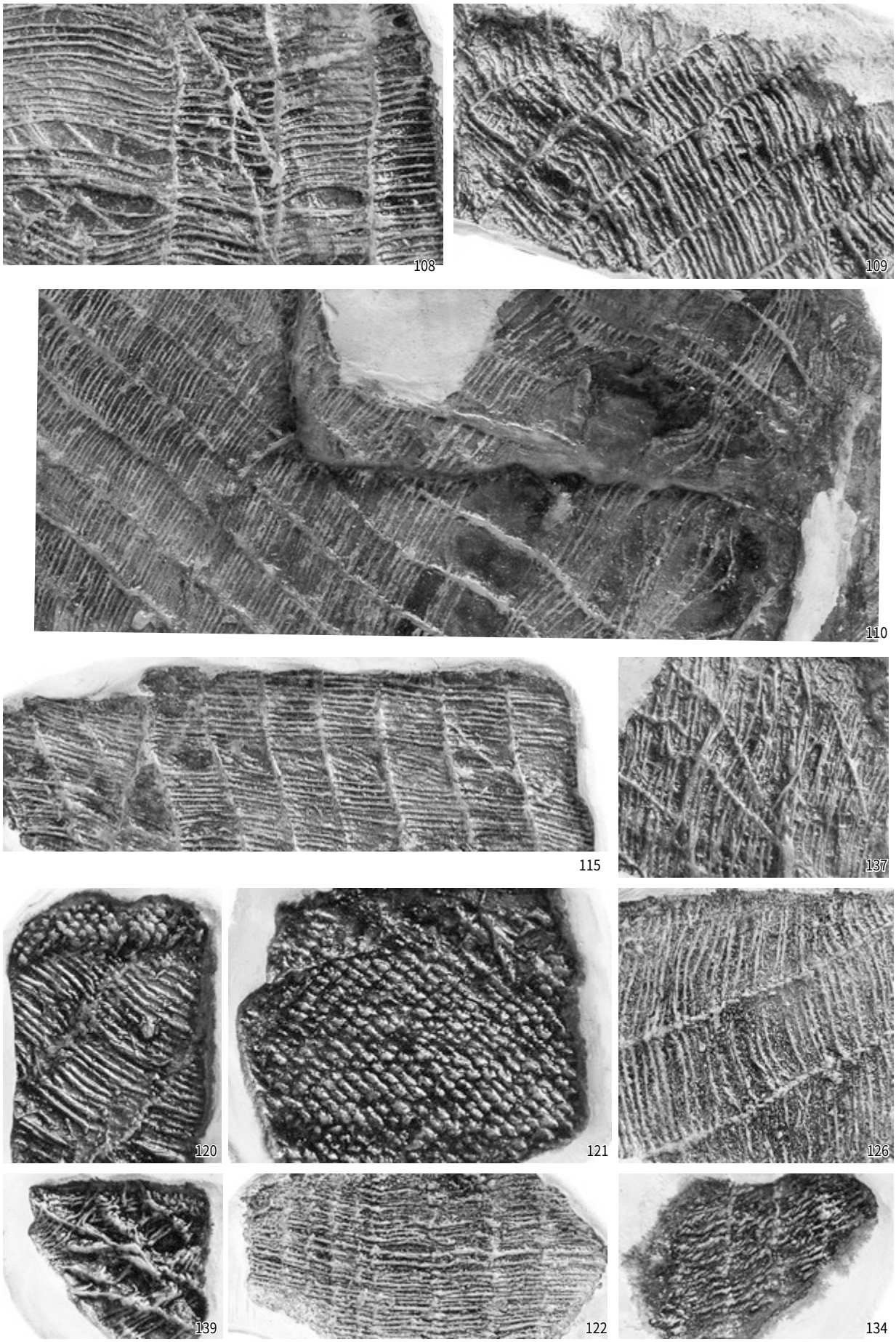
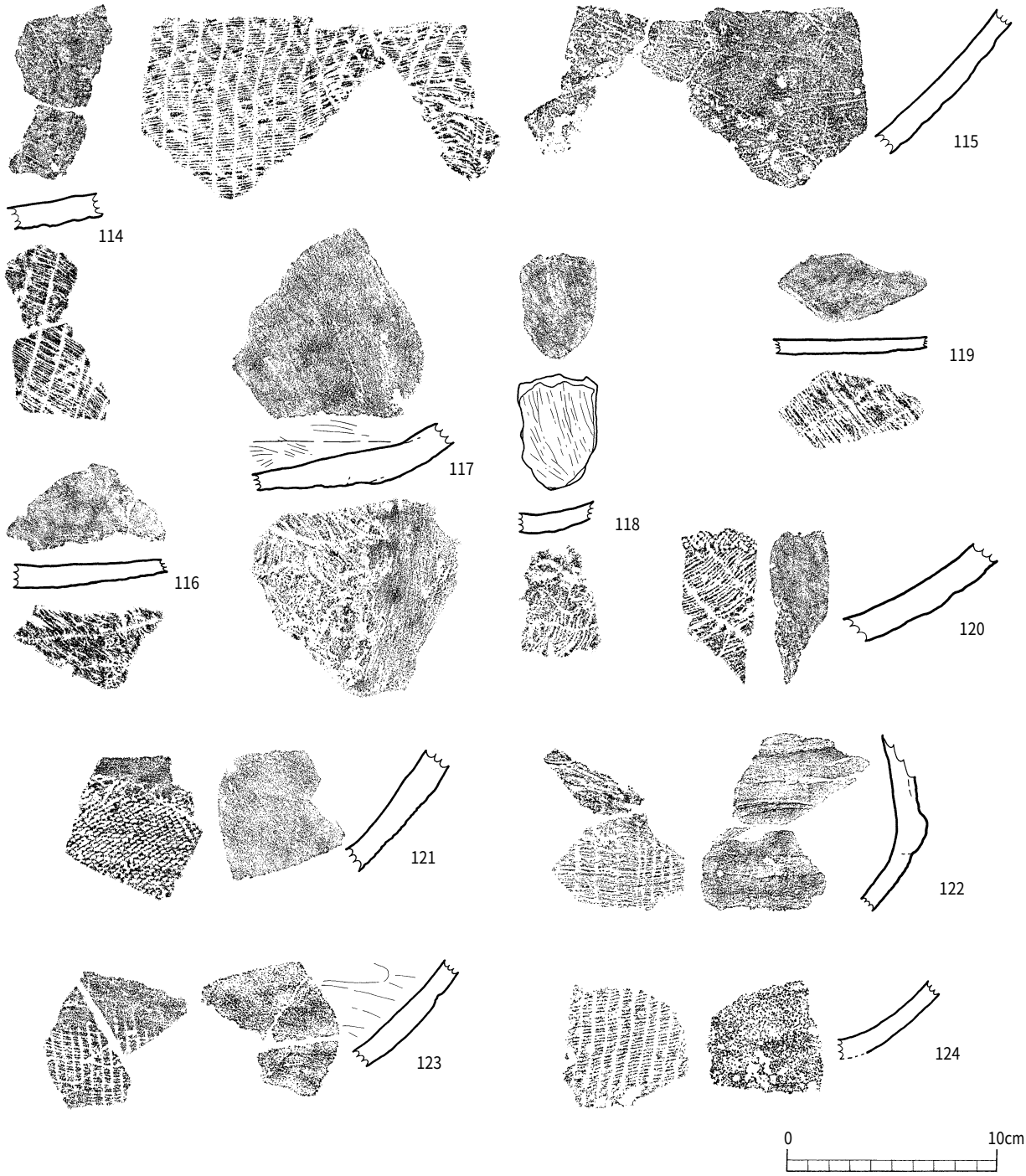


写真２　組織痕土器モデリング陽像(1)



第38図　縄文時代晩期土器(9)

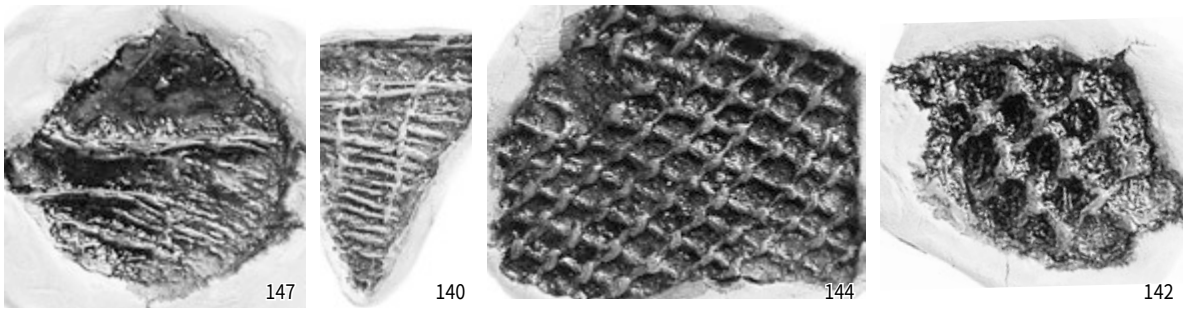
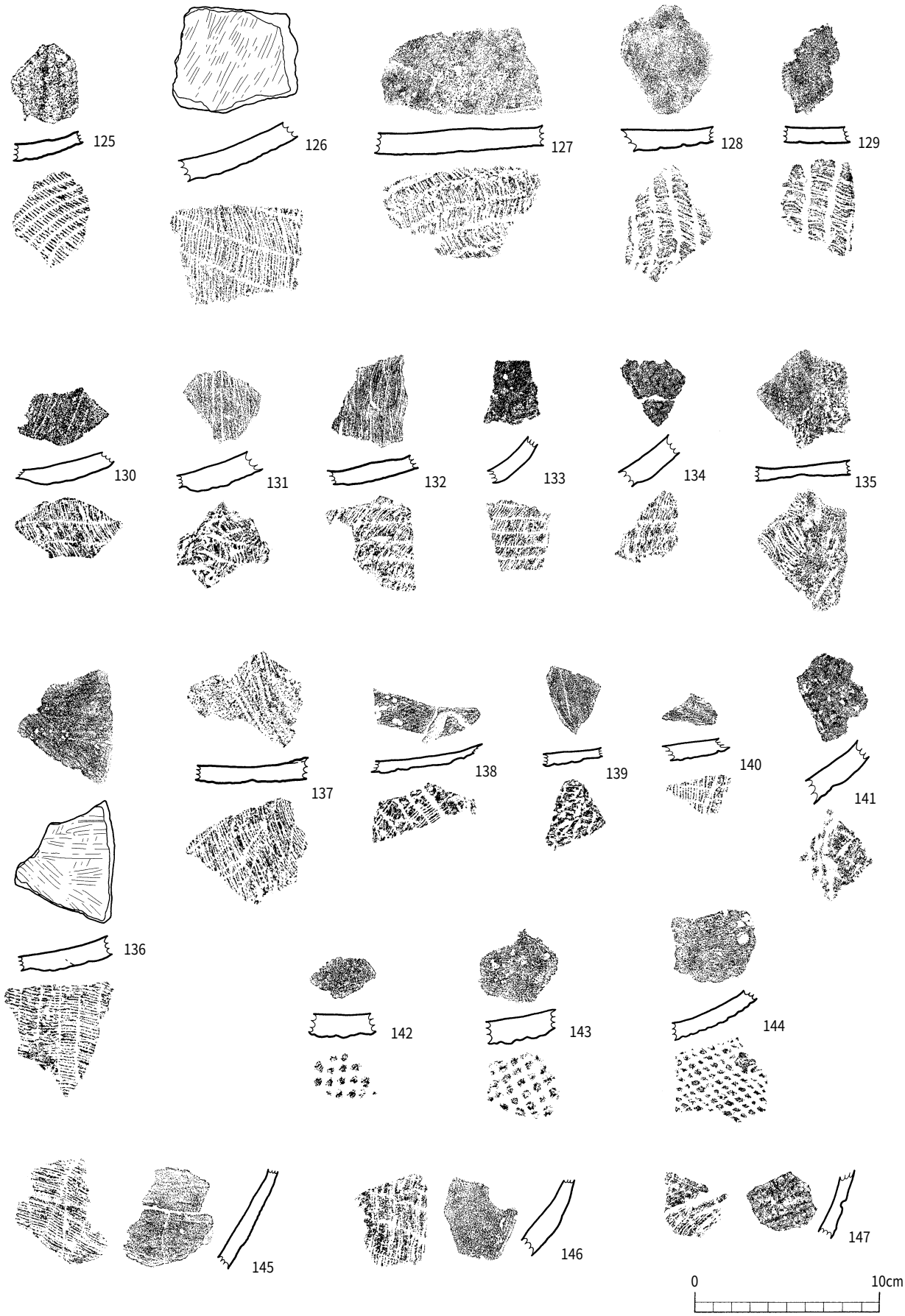
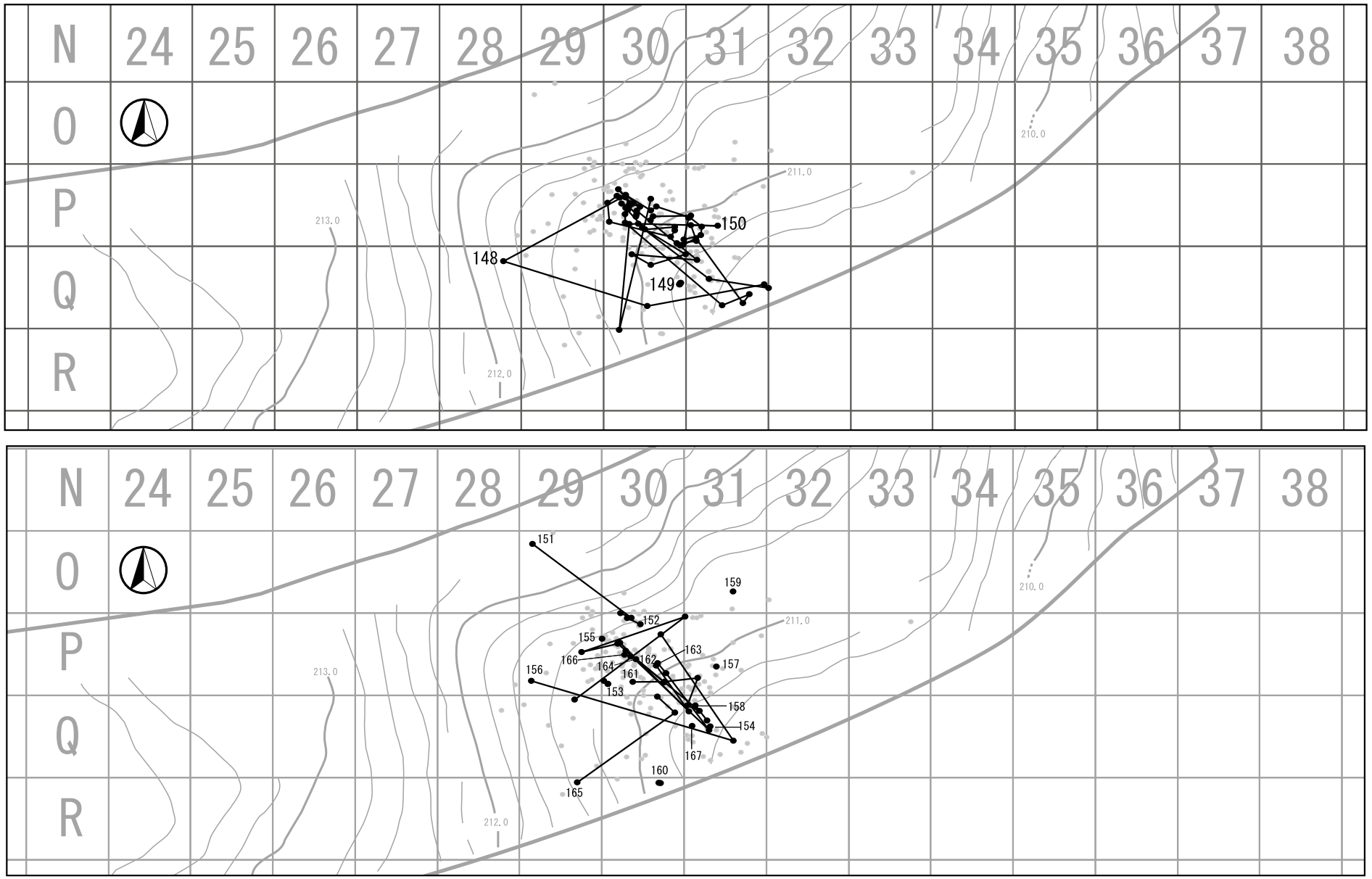


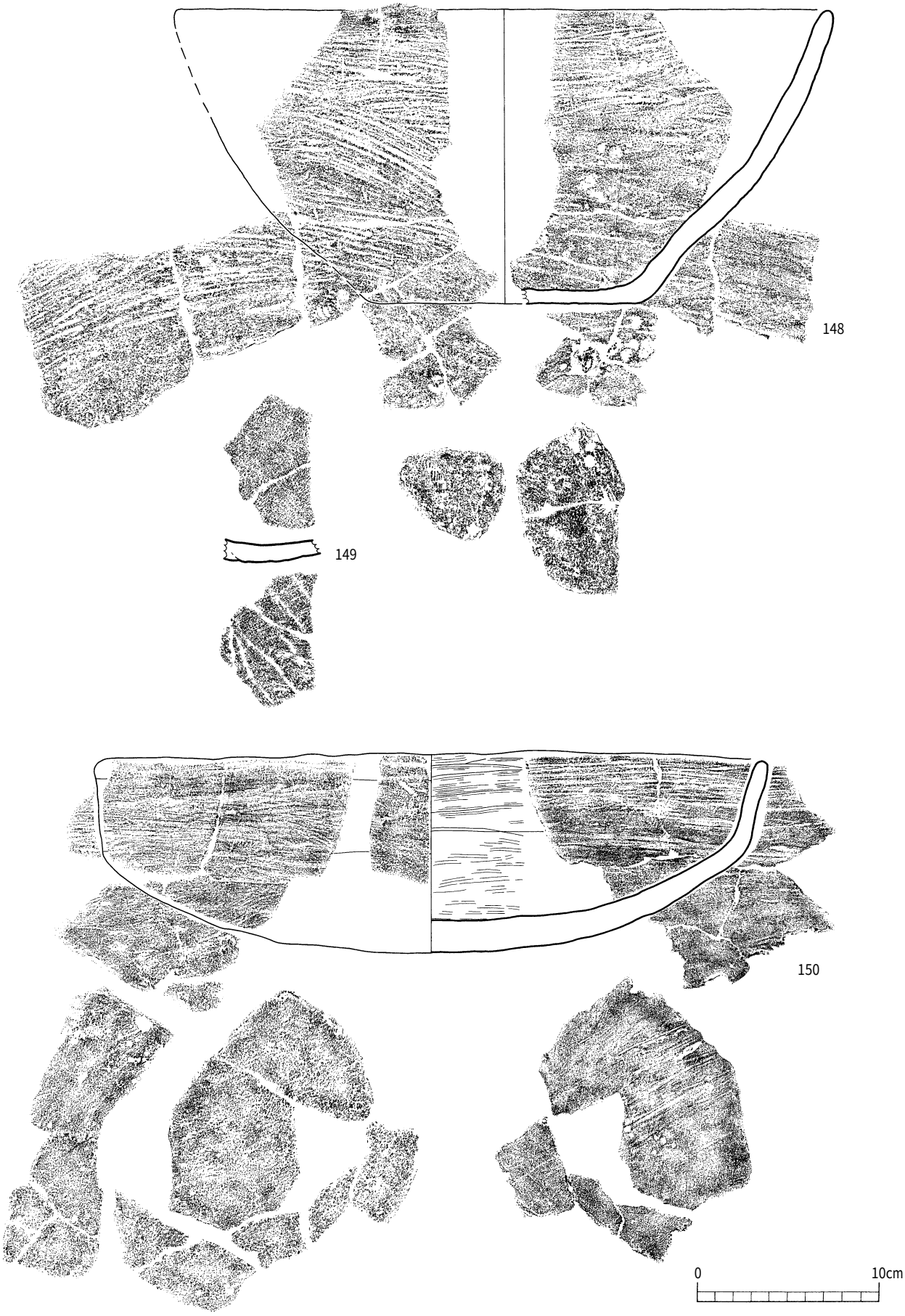
写真３　組織痕土器モデリング陽像(2)



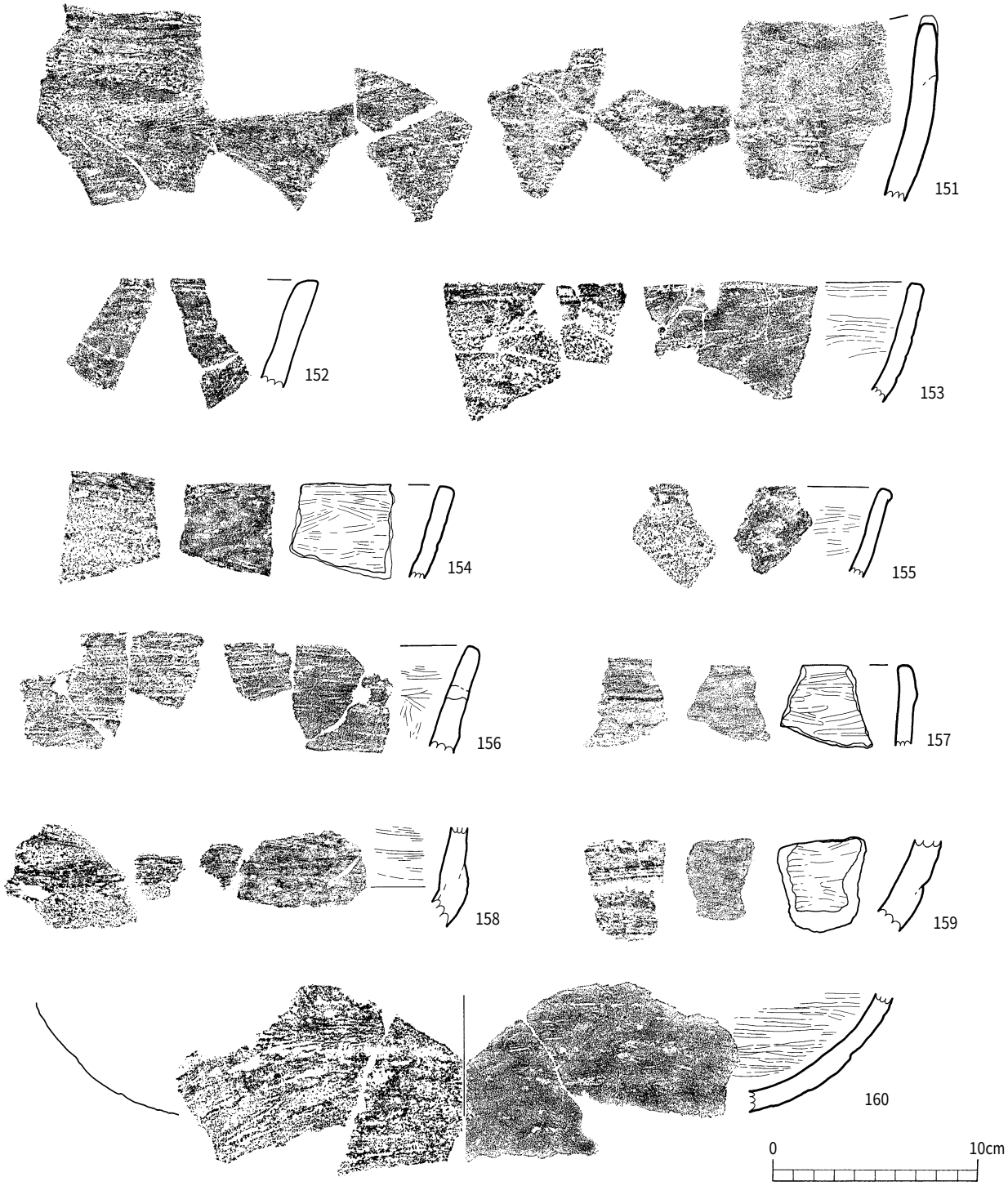
第39図　縄文時代晩期土器⑽



第40図　縄文時代晩期土器（６ｃ類）出土分布図(3)

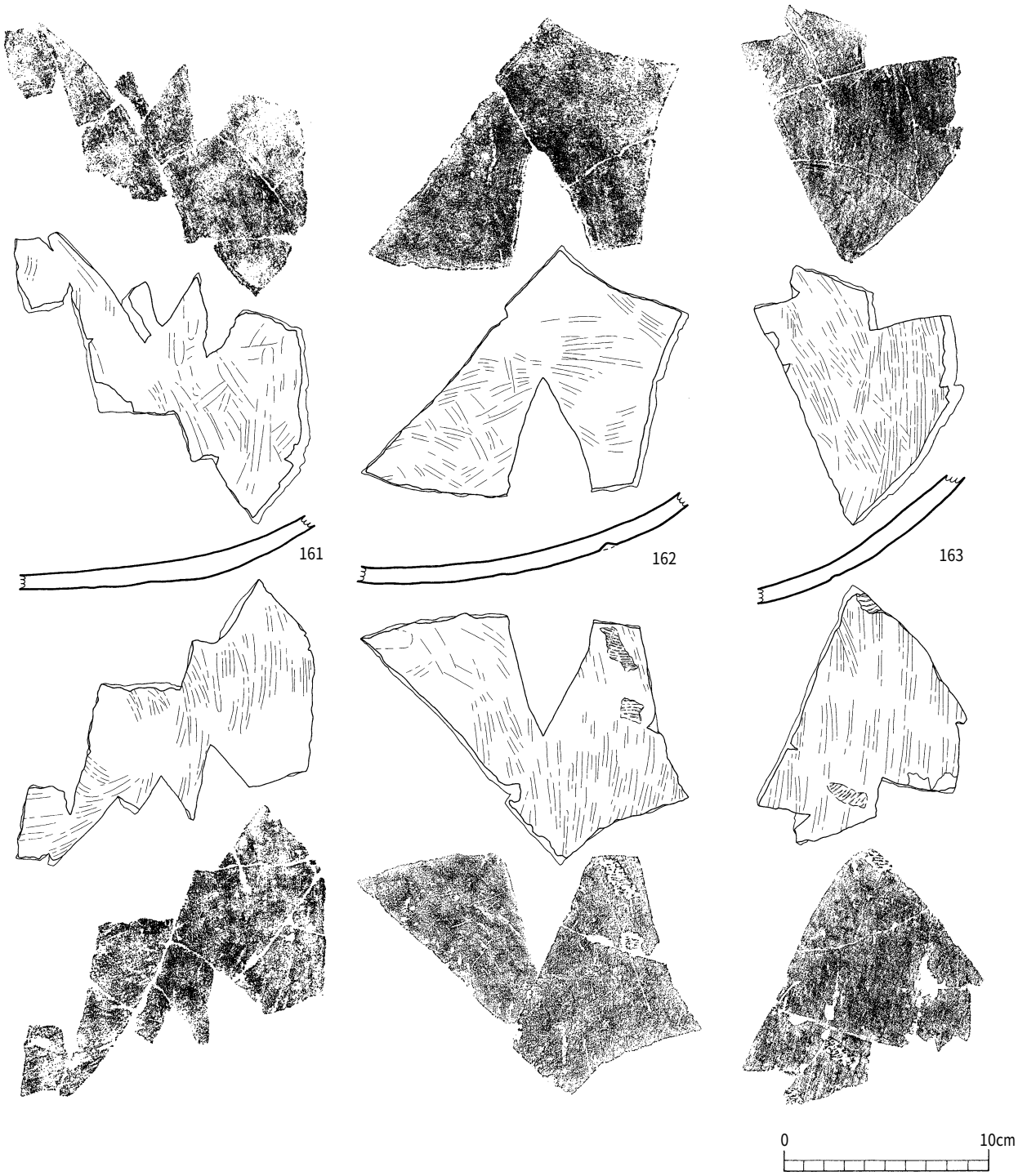


第41図　縄文時代晩期土器(11)



第42図　縄文時代晩期土器⑫

６ｃ－３類の161～167は内外面を丁寧に磨いた精製土器である。破片であるが，中華鍋形を呈していたと思われる。注目されるのは，162・163・164・166・167のように外面に組織痕がわずかに残存している点である。なぜこのように部分的に組織痕が残存しているのかは検討を要するが，型取り後にくぼんだ部分を磨き損ねたか，剥落して組織痕が観察されたのか，という可能性が考えら

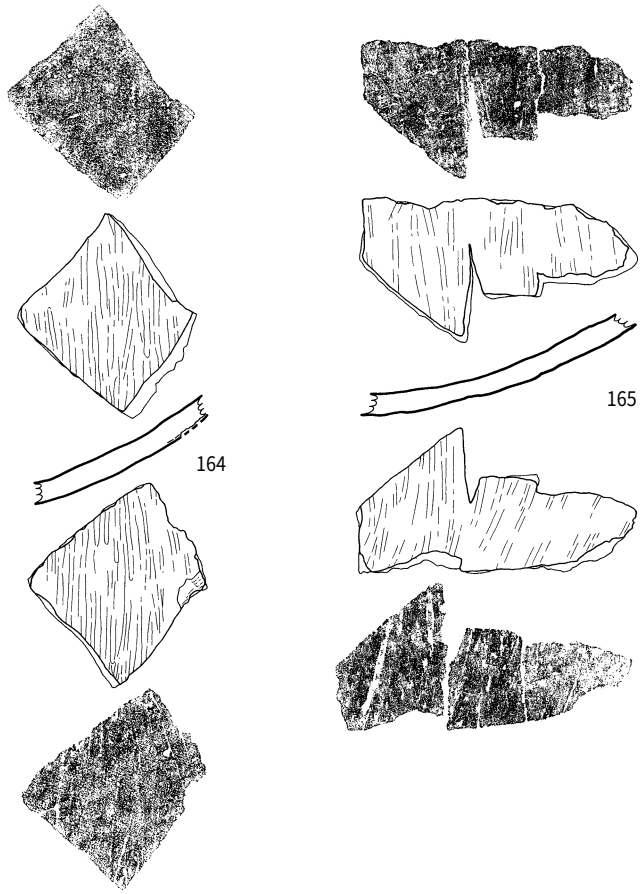


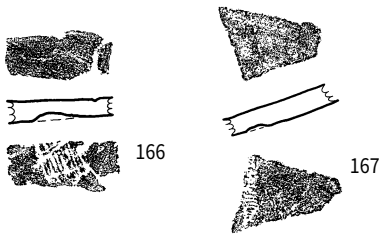
第43図　縄文時代晩期土器⒀

れる。組織痕土器の外面までをも丁寧に磨いている例はほとんどなく，広く精製土器の製作方法を考える上でも貴重な資料である。

６ｄ類（第46・47図　168～194）

主に内面外面ともに磨かれている精製土器である。しかし，本遺跡においては，ミガキが粗雑でナデ調整が観察できる土器の方が多い。168は口唇部にヒレ状の突起をもち，その下に凹線が巡る。





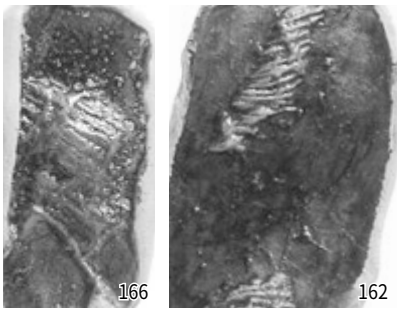
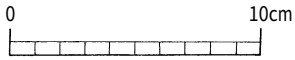


写真４　組織痕土器モデリング陽像⑶



第44図　縄文時代晩期土器⒁

胴部が屈曲する形態である。169は玉縁状の口縁で頸部で屈曲する。170・171は口唇部にヒレ状の突起をもち，口縁部近くの凹線，胎土，胴部が丸く屈曲部をもつ点などから同一個体の可能性が高い。172も類似する形態で，173～176は口縁部に凹線が１条巡る。178～180は波状口縁をもつもので，178は波頂部に上面観が丸い突起物がみられ，パイプ状のベンガラが検出された。また，180も同様にパイプ状のベンガラが検出されている（第５節第２項参照）。188～189は同一個体の可能性が高い。口縁部が短く外反し，胴部が屈曲する形態である。189・190は凹線が巡る底部である。

７類土器（第47図　195・196）

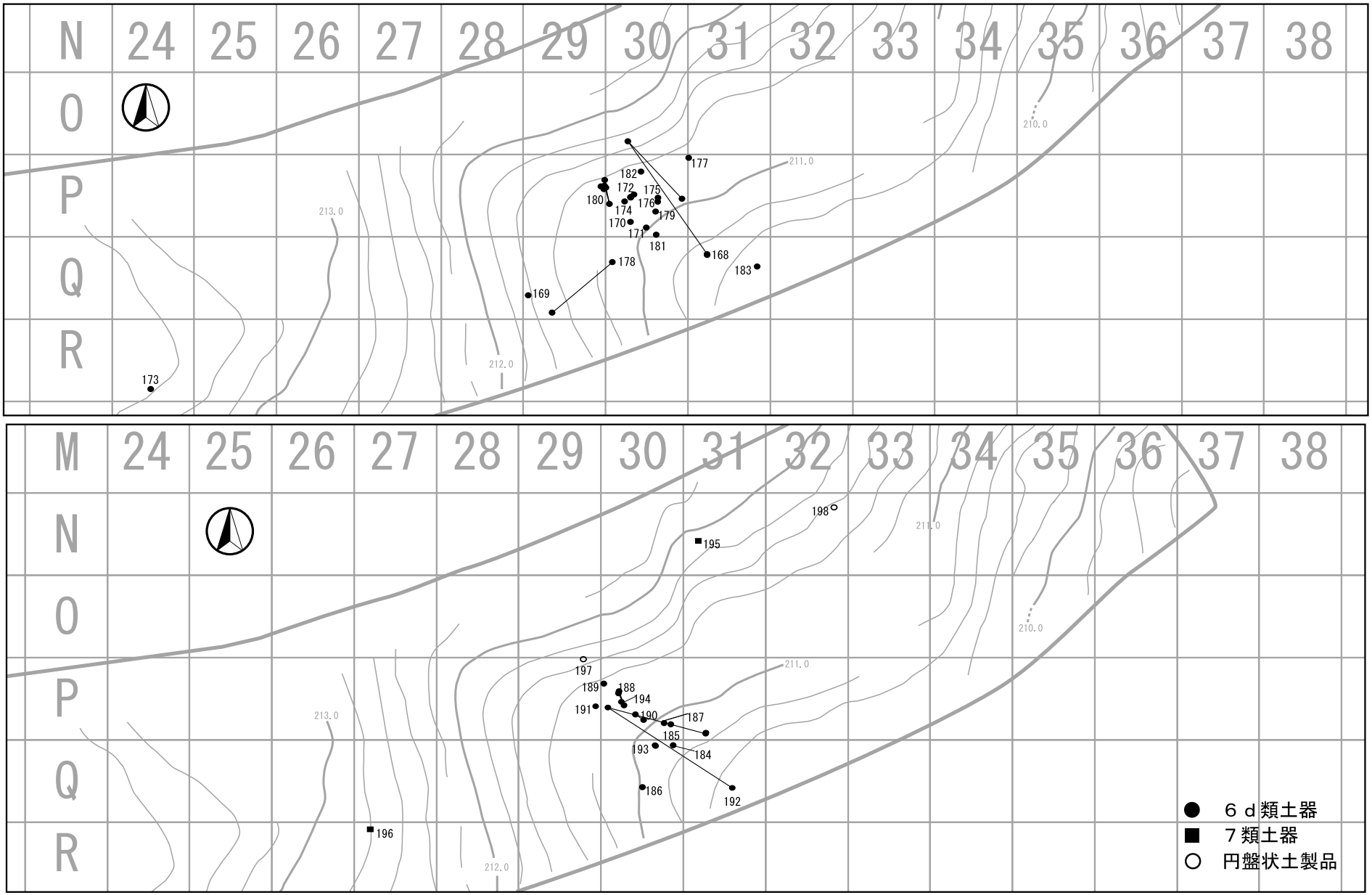
195は口唇部に刻みがあり，横方向の条痕の上にくぼみがみられる。縄文時代早期土器の可能性がある。196は口唇部に縦方向の条線，その下に横方向の浅い凹線が施されている。

円盤状土製品（第47図　197・198）

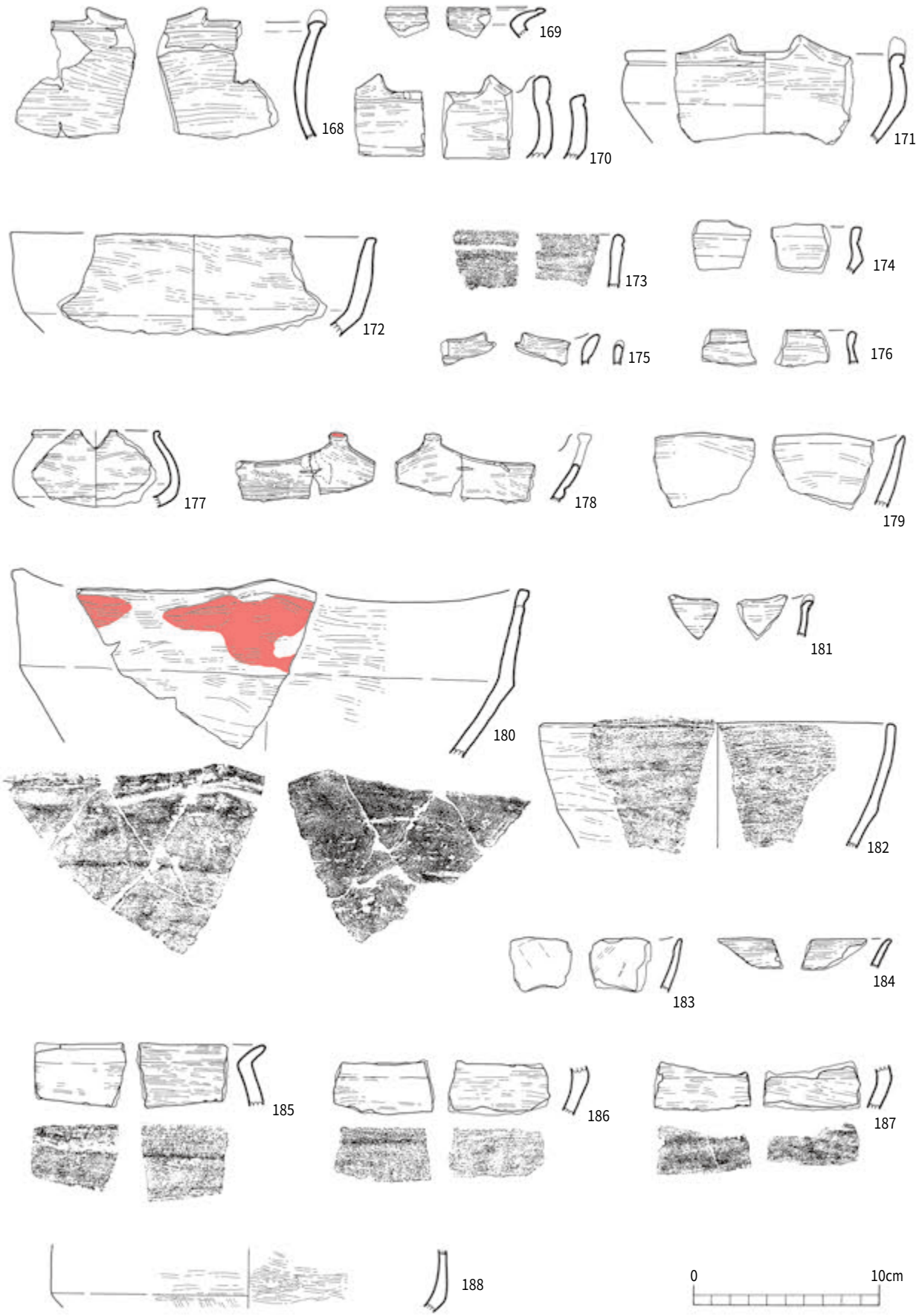
２点出土している。所属時期は不明であるが，197は表裏面が磨かれた土器片を利用しており，晩期のメンコ状土製品と思われる。

縄文時代の石器

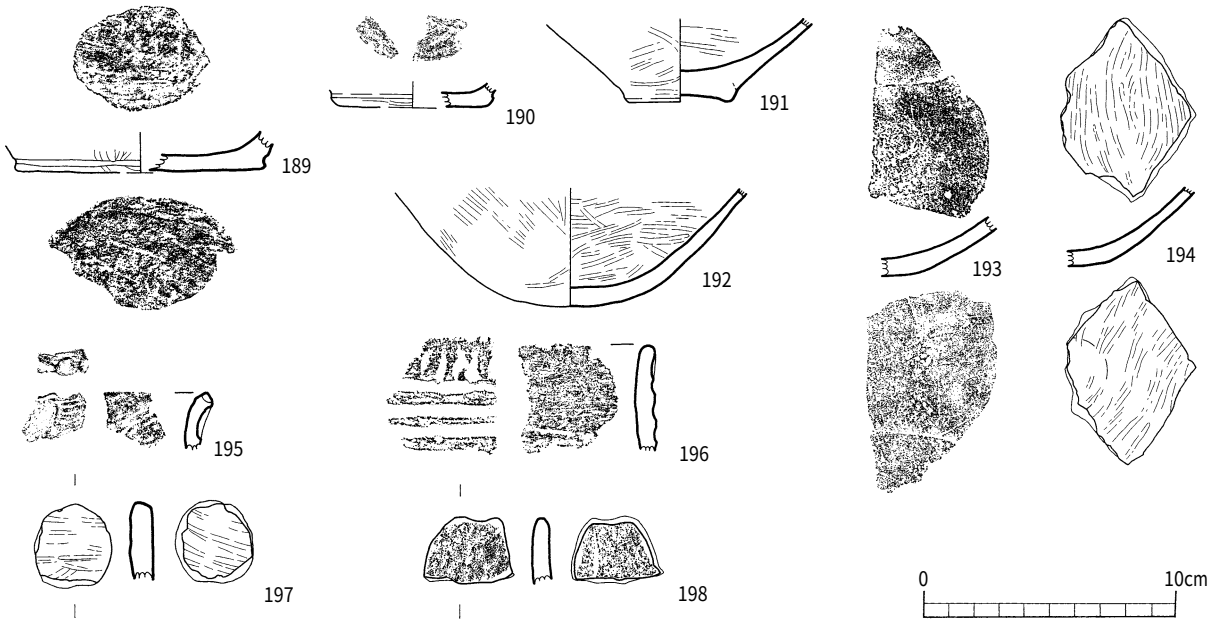
縄文時代の石器は，出土層と形態から全ての帰属年代を検討することが困難な部分があるため，ここではⅣ～Ⅷ層の遺物を一括して掲載する。石材分類については先述（157ｐ）の通りである。



第45図　縄文時代晩期土器（６ｄ類）・その他円盤状土製品出土分布図



第46図　縄文時代晩期土器(15)



第47図　縄文時代晩期土器⑯・その他円盤状土製品

第５表　縄文時代出土土器観察表１

挿図	番号	型式等	区	層	器種	部位	取上番号	調整・文様		色調		胎土							備考
								内面	外面	内面	外面	石英長石	輝石角閃	雲母	火山ガラス	軽石	小礫	その他	
24	20	押型文土器	Q24	Ⅶb	深鉢	胴部	388 390	ナデ	山型文	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	○	○		○	○	○		内面コゲ付着
	21	無文土器	N34	Ⅶa Ⅶb	－	口縁部	215 217	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○		○				
	22	無文土器	N34	Ⅶa Ⅶb Ⅷa	－	口縁部	279 213 217	ナデ	ナデ	暗灰黄色	黒褐色	○	○		○				外面スス付着
	23	前期土器	O34	Ⅴ Ⅴa	深鉢	胴部	281 282 283 286 1759 1758	ナデ	ナデ	褐色	橙色	○	○		○	○	○		内面コゲ付着
	24	前期土器	P29	Ⅳb	鉢	底部	733 736	ハケメ状ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい褐色	○	○		○	○			
	25	阿高式	P28	Ⅴ		胴部	1528	ナデ	ナデ，凹線文	橙色	にぶい黄橙色	○	○		○				
	26	後期前半土器	O30 P30 P31	Ⅳb Ⅴ	深鉢	胴部	1140 1498 1298 1308 1306 1307 1610 1836	条痕，ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	橙色	○	○		○	△			穿孔あり
	27	後期前半土器	O30 P30	Ⅳb Ⅴ	深鉢	底部	1117 1132 1213 1303 1499 1840	条痕，ナデ	条痕，ナデ	にぶい黄橙色	橙色	○	○		○	△			
25	28	西平式	O34	Ⅴa	深鉢	口縁部	285	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ，磨消縄文	黒褐色	褐色	○	○		○	○			外面スス付着 Ｓ撚
	29	西平式	P34	Ⅴa	深鉢	胴部	287 288 290 291	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ，磨消縄文	灰黄褐色	褐色	○	○		○	○			Ｓ撚
27	30	黒川式土器	P29 P30	Ⅳb Ⅴa Ⅴ	深鉢	口～胴部	511 888 1022 1325 1796 1866	条痕後ナデ	条痕後ナデ	にぶい黄色	褐灰色	○	○		○	○	○		
	31	黒川式土器	Q31	Ⅳb Ⅴa Ⅴ	深鉢	口～胴部	635 640 647 1157 1477 1787	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色	褐灰色	○	○		○	○	○		外面スス付着
	32	黒川式土器	P30 Q31	Ⅳb Ⅴa	深鉢	口縁部	474 475 1168	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○		○	○			
	33	黒川式土器	P30	Ⅳb	深鉢	口縁部	1016	ナデ	条痕後ナデ	にぶい黄橙色	褐灰色	○	○		○	○			
	34	黒川式土器	Q31	Ⅳb Ⅴ Ⅴa	深鉢	口～胴部	633 822 1155 1201 1650 1782	ナデ	条痕後ナデ	黄灰色	黄灰色	○	○		○	○	○		外面スス付着
	35	黒川式土器	Q31	Ⅳb Ⅴa	深鉢	口～胴部	634 824	条痕後ナデ	条痕後ナデ	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○		○	○			

第６表　縄文時代出土土器観察表２

挿図	番号	型式等	区	層	器種	部位	取上番号	調整・文様		色調		胎土							備考
								内面	外面	内面	外面	石英長石	輝石角閃	雲母	火山ガラス	軽石	小礫	その他	
27	36	黒川式土器	P30 P32	Ⅳb Ⅴ	深鉢	口縁部	863 1028 1057 1772	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色	暗灰黄色	○	○		○	○			
	37	黒川式土器	P30 P31	Ⅳb Ⅴa	深鉢	口縁部	473 553 896 1098	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○		○	○			
28	38	黒川式土器	Q31	Ⅳb Ⅴa	深鉢	口縁部	657 828 1890	ナデ	条痕後ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○		○		○		
	39	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	口縁部	1086 1290	ハケメ状ナデ	ハケメ状ナデ	黒褐色	灰色	○	○		○	○			
	40	黒川式土器	P30	Ⅳb	深鉢	口縁部	1065	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	○	○				外面スス付着
	41	黒川式土器	P30	Ⅳb	深鉢	口縁部	1064	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○		○				外面スス付着
	42	黒川式土器	P30	Ⅴ	深鉢	口縁部	1756	ナデ	ナデ	灰黄褐色	黒褐色	○	○		○				外面スス付着
	43	黒川式土器	P30	Ⅳb	深鉢	口縁部	1126	ハケメ状ナデ	条痕	灰黄褐色	黒褐色	○	○		○	○	○		外面スス付着
	44	黒川式土器	P30	Ⅴ	深鉢	口縁部	1389	条痕，ナデ	条痕，ナデ	黒褐色	黒色								
	45	黒川式土器	Q30 Q31 P30	Ⅳb Ⅴ	鉢	口縁部	1046 1077 1196 1743	ナデ，ミガキ	ハケメ状ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○		○	△			外面スス付着 孔列土器
	46	黒川式土器	Q31	Ⅳb Ⅴ	深鉢	胴部	1163 1197 1468 1636	ナデ，ミガキ	ハケメ状ナデ	黒褐色	灰黄褐色	○	○		○				外面スス付着
	47	黒川式土器	Q31	Ⅴ	鉢	口縁部	1442	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○		○				孔列土器
	48	黒川式土器	Q29	撹乱	鉢	口縁部	421	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○		○				孔列土器
	49	黒川式土器	Q29	撹乱	鉢	口縁部	424	ナデ	ナデ	褐灰色	黒褐色	○	○	△	○				孔列土器
	50	黒川式土器	Q31	Ⅳb	鉢	口縁部	823	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○		○				外面スス付着 孔列土器
29	51	黒川式土器	P30	Ⅳb Ⅴa	鉢	口縁部	532 1081	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○		○				外面スス付着
	52	黒川式土器	P30	Ⅴ	鉢	口縁部	1585	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○			○		○		外面スス付着
	53	黒川式土器	Q31	Ⅳb	鉢	口縁部	1888	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○		○				
	54	黒川式土器	O32	Ⅴa	鉢	口縁部	298	ナデ	ハケメ状ナデ	にぶい黄橙色	黒色	○	○		○		○		外面スス付着
	55	黒川式土器	P32	Ⅴa	鉢	口縁部	688	ナデ	ハケメ状ナデ	にぶい橙色	黒褐色	○	○		○		○		外面スス付着
	56	黒川式土器	P29	Ⅳb	鉢	口縁部	965	ハケメ状ナデ	ハケメ状ナデ	にぶい褐色	明赤褐色								
	57	黒川式土器	Q31	Ⅳb	鉢	口縁部	1159	条痕	条痕	にぶい黄色	灰黄色	○	○		○	○	○		外面スス付着
	58	黒川式土器	Q31	Ⅳb	鉢	口縁部	1894	条痕	条痕	にぶい黄色	にぶい黄橙色	○	○		○	○	○		
	59	黒川式土器	P30	Ⅴa	鉢	口縁部	518	条痕	条痕，ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○		○				
	60	黒川式土器	P30	Ⅳb	深鉢	胴部	1124	ハケメ状ナデ	ナデ	にぶい黄色	灰色	○	○		○	○	○		
	61	黒川式土器	Q30	Ⅳb	深鉢	胴部	1189	ハケメ状ナデ	ハケメ状ナデ	灰黄色	橙色	○	○		○	○			
	62	黒川式土器	P31 Q31	Ⅴ	鉢	胴部	1426 1446 1653	ハケメ状ナデ 後ミガキ	ハケメ状ナデ	黒色	にぶい褐色	△	△		○				内面スス付着
	63	黒川式土器	Q30	Ⅳb	深鉢	胴部	1192	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい褐色	○	○		○		○		
	64	黒川式土器	P30	Ⅳb Ⅴa	鉢	胴部	531 1012	ミガキ	条痕，ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄色	△	○		○	△			
	65	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	底部	1131	ナデ	ナデ	黒褐色	褐色	○	○		○				
	66	黒川式土器	P31	Ⅳb Ⅴ	鉢	底部	1107 1425	ナデ	ナデ	黒褐色	褐色	○	○		○				
	67	黒川式土器	P30 Q31	Ⅳb Ⅴ	深鉢	底部	1275 1688 1891	ナデ	条痕	にぶい黄橙色	にぶい橙色	○	○		○				
31	68	黒川式土器	P28	Ⅴ	鉢	口縁部	1537	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	橙色	○	○		○		○		
	69	黒川式土器	Q30	Ⅳb	鉢	口縁部	1191	ハケメ状ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○			○		○		外面スス付着
	70	黒川式土器	P30	Ⅴ	鉢	口～胴部	1587	ハケメ状ナデ	ハケメ状ナデ	赤褐色	明赤褐色	○	○		○	○			
	71	黒川式土器	P30 O29	Ⅳb Ⅴ Ⅴa	鉢	口～胴部	1141 1404 1586 1751 2008	条痕，ナデ	条痕後ナデ， 一部ミガキ	にぶい黄橙色	褐灰色	○		△	○				外面スス付着
	72	黒川式土器	O29 O30	Ⅳb Ⅴ	鉢	口縁部	810 1843 1859	条痕後ナデ	条痕後ナデ	にぶい黄橙色	浅黄橙色	○		△	○				外面スス付着
	73	黒川式土器	P31	Ⅴa	鉢	口縁部	602	条痕後ナデ	条痕後ナデ	にぶい黄橙色	褐灰色	○		△	○				外面スス付着
	74	黒川式土器	P29	Ⅳb Ⅴ	鉢	口～胴部	732 734 1874 1877	条痕	ハケメ状ナデ	黒色	にぶい黄褐色	○	○		○	○			
	75	黒川式土器	P29	Ⅳb 撹乱	鉢	口～胴部	725 2014	条痕	ハケメ状ナデ	黒褐色	にぶい褐色	○	○		○	○			
	76	黒川式土器	P29	Ⅳb	鉢	口～胴部	727 737	条痕	ハケメ状ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○		○	○			
	77	黒川式土器	Q30	Ⅳb	鉢	口～胴部	1187	ハケメ状ナデ	ハケメ状ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○				○		
	78	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	口縁部	27	ナデ	ハケメ状ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○			○				
	79	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	口～胴部	1242	ナデ	ナデ	橙色	黒褐色	○	○		○				外面スス付着
	80	黒川式土器	P30	Ⅳb Ⅴ	鉢	口縁部	12 1857	ナデ	ナデ	黄灰色	にぶい黄橙色	○	○		○			黒曜石	外面スス付着

第７表　縄文時代出土土器観察表３

挿図	番号	型式等	区	層	器種	部位	取上番号	調整・文様		色調		胎土							備考
								内面	外面	内面	外面	石英長石	輝石角閃	雲母	火山ガラス	軽石	小礫	その他	
31	81	黒川式土器	P30	Ⅳb Ⅴ	鉢	口～胴部	1082 1396	ハケメ状ナデ	条痕，ナデ	黒褐色	黒褐色	○			○				
32	82	黒川式土器	P30	Ⅳb Ⅴa	鉢	口縁部	543 915	ハケメ状ナデ	ハケメ状ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○		○	○			
	83	黒川式土器	P29	Ⅳb	鉢	口縁部	744	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	浅黄色	にぶい黄橙色	○	○		○				外面スス付着
	84	黒川式土器	P30	Ⅴa	鉢	口～胴部	458	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	○	○		○				
	85	黒川式土器	R 29･30	Ⅴ Ⅴa	深鉢	口縁部	448 1514	条痕，ナデ	条痕，ナデ	にぶい褐色	黒褐色	○	○	△	○				
	86	黒川式土器	P29	Ⅴ	鉢	口縁部	1884	ナデ後ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○			○		○		
	87	黒川式土器	P30	Ⅴ	鉢	口縁部	1371	ナデ	条痕	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○		○				外面スス付着
	88	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	口縁部	2	ミガキ	ナデ	褐灰色	にぶい黄橙色	○			○	○			
	89	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	胴部	885	ナデ	ナデ	褐灰色	浅黄橙色	○	○		○		○		
	90	黒川式土器	P29	Ⅳb	鉢	胴部	948 950	条痕後ナデ，一部ミガキ	ナデ	にぶい褐色	褐色	○	○		○	○			
34	91	黒川式土器	P29 Q30 Q31	Ⅳb Ⅴ	鉢	口縁部	811 840 1433	ナデ	ハケメ状ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	○	○		○	○	○		外面スス付着
	92	黒川式土器	P31	Ⅴ	鉢	口～底部	1766	ナデ	ナデ	褐色	黒褐色	○	○		○	○	○		
	93	黒川式土器	O32 O31 Q29 Q32 R29	Ⅳb Ⅴa Ⅴ	鉢	口縁部	30 303 420 1512 1778	ナデ	ハケメ状ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	○	○		○	○	○		外面スス付着
	94	黒川式土器	Q29	Ⅴa	鉢	胴部	438	ナデ	ナデ，組織痕	黒褐色	暗褐色	○	○		○	○	○		経13㎜
	95	黒川式土器	Q31	Ⅴ	鉢	胴部	1692	ナデ	ナデ，組織痕	黒褐色	黒褐色	○	○		○	○	○		経13㎜
	96	黒川式土器	P31 Q30	Ⅳb Ⅴ Ⅴa	鉢	口縁部	435 685 838 1626 1629	ナデ後ミガキ	ケズリ，ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	△	○	△			外面スス付着
	97	黒川式土器	P29 P31 Q29 Q30 Q31	Ⅳb Ⅴ Ⅴa	鉢	口縁部	437 570 963 1099 1431 1710 1789	ミガキ	ケズリ，ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	△	○	△			外面スス付着
	98	黒川式土器	P30 P33 Q31 R32	Ⅳb Ⅴ Ⅴa	鉢	口縁部	292 1183 1791 1839	ミガキ	ナデ，組織痕	褐色	黒褐色	○	○	△	○	△			経10－12㎜ 緯８－10本 外面スス付着
36	99	黒川式土器	O30	Ⅳb	鉢	口縁部	804	ナデ後ミガキ	ハケメ状ナデ，ナデ，組織痕	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○		○	△			緯10本 外面スス付着
	100	黒川式土器	P29	Ⅳb	鉢	胴部	949	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	灰黄褐色	黒褐色	○	○		○	△			
	101	黒川式土器	P28	Ⅳb	鉢	胴部	980	ミガキ	ナデ，組織痕	黒褐色	黒褐色	○	○		○	△			経11㎜ 緯７本 外面スス付着
	102	黒川式土器	P30	Ⅳb Ⅴ	鉢	胴部	904 1076 1417	ミガキ	ナデ，組織痕	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	○	○		○	△			経11㎜ 緯10本　Ｓ撚
	103	黒川式土器	P29	Ⅳb	鉢	胴部	722	ナデ後ミガキ？	組織痕後ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○		○		○		経15㎜ 緯７本
	104	黒川式土器	P29	Ⅳb	鉢	胴部	957	ナデ後ミガキ	ナデ，組織痕	灰黄褐色	黒褐色	○	○		○	△			緯７本 外面スス付着
	105	黒川式土器	Q30	Ⅳb Ⅴ Ⅴa	鉢	口～胴部	484 558 835 1488	ナデ後ミガキ	ナデ，組織痕	褐色	暗褐色	○	○		○	△			経15㎜ 緯６本 外面スス付着
	106	黒川式土器	P29 Q30	Ⅳb Ⅴa	鉢	口～胴部	480 961	ナデ後ミガキ	ナデ，組織痕	褐色	暗褐色	○	○		○	△	○		緯７本 外面スス付着
	107	黒川式土器	P31 Q31	Ⅴ	鉢	胴部	1427 1452	ナデ後ミガキ	組織痕	暗赤褐色	黒褐色	○	○		○	△	○		経20㎜ 緯７本　内外面スス付着
	108	黒川式土器	P30 Q30	Ⅳb Ⅴ Ⅴa	鉢	胴部	1177 1181 1182 1394	ナデ後ミガキ	組織痕	明赤褐色	黒褐色	○	○		○	△	○		経15－18㎜ 緯７本　内外面スス付着
37	109	黒川式土器	P29	Ⅳb	鉢	胴～底部	735 973	ミガキ	ナデ，組織痕	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○		○	○	○		経14㎜ 緯７本　Ｓ撚
	110	黒川式土器	P30	Ⅳb Ⅴ Ⅴa	鉢	胴部	499 1017 1018 1259 1594	ナデ後ミガキ	組織痕	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○		○				経10㎜，３㎜ 緯９本　Ｓ撚 穿孔あり
	111	黒川式土器	P29 P30 P31 Q30 Q31	Ⅳb Ⅴ Ⅴa	鉢	胴部	548 953 939 940 1147 1162 1483 1492 1451	ナデ後ミガキ	組織痕	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	△	○	△			経10㎜，３㎜ 緯８本　Ｓ撚 内外面スス付着
	112	黒川式土器	O30 P30 Q30	Ⅳb	鉢	胴部	1 13 1173	ハケメ状ナデ後ミガキ	組織痕	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	△	○	△	○		経11－13㎜，３㎜　緯９本 Ｓ撚　内外面スス付着
	113	黒川式土器	Q31	Ⅳb Ⅴa	鉢	胴部	644 821	ナデ後ミガキ	組織痕	灰黄褐色	黒褐色	○	○	△	○	△	○		経８－11㎜ 緯10本　Ｓ撚
38	114	黒川式土器	Q29 P30	Ⅳb Ⅴ	鉢	胴部	860 1508	ナデ	組織痕	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○		○				経11㎜，３㎜ 緯９本　Ｓ撚
	115	黒川式土器	P30 Q31	Ⅳb Ⅴ	鉢	胴部	3 6 1214 1455	ナデ後ミガキ	組織痕	暗褐色	にぶい黄橙色	○	○		○		○		経11－９㎜ 緯７－10本 内面スス付着
	116	黒川式土器	Q31	Ⅳb	鉢	胴～底部	1895	ナデ	組織痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	△		○				経14㎜ 緯５本 内面スス付着
	117	黒川式土器	O29	Ⅴa	鉢	胴～底部	2007	ナデ後ミガキ	ナデ，組織痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	△	△		△				
	118	黒川式土器	P30	Ⅴ	鉢	胴部	1660	ナデ後ミガキ	組織痕	黒褐色	黄橙色	○	△		○				経21㎜ 緯６本　Ｓ撚 内面スス付着

第８表　縄文時代出土土器観察表４

挿図	番号	型式等	区	層	器種	部位	取上番号	調整・文様		色調		胎土							備考
								内面	外面	内面	外面	石英長石	輝石角閃	雲母	火山ガラス	軽石	小礫	その他	
38	119	黒川式土器	P31	Va	鉢	胴部	598	ミガキ	組織痕	にぶい黄橙色	暗褐色	○	△		○				経19mm 緯９本　Ｓ撚
	120	黒川式土器	P31	Va	鉢	胴部	590	ミガキ	組織痕	黄灰色	にぶい黄橙色	△	○		○	△			経20mm 緯７本　Ｓ撚 平織り
	121	黒川式土器		撹乱	鉢	胴部	一括	ミガキ	組織痕	灰黄褐色	にぶい黄橙色	△	○		○	△			平織り
	122	黒川式土器	P30 Q32	Ⅳb Va	鉢	胴部	523 1780	ナデ，ケズリ	ハケメ状ナデ，組織痕	にぶい黄褐色	にぶい褐色	○	○		○		○		経10mm，３mm 緯12本　Ｓ撚
	123	黒川式土器	P31	Va	鉢	胴部	597 600	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	橙色	○	○		○				経４mm 緯６本
	124	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	胴部	1138	ナデ	組織痕	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○		○	○			経５－６mm 緯６本　Ｚ撚
39	125	黒川式土器	O29	V	鉢	胴部	1862	ナデ	組織痕	にぶい黄橙色	にぶい橙色	○	○		○	○			経４－６mm 緯６本　Ｚ撚
	126	黒川式土器	P31	V	鉢	胴～底部	1774	ミガキ	組織痕	暗褐色	明褐色	○	○		○				経15－20mm 緯７本　Ｓ撚
	127	黒川式土器	Q30	Va	鉢	胴部	443	ミガキ	組織痕	黄橙色	にぶい橙色	○	△		○	△			経８－12mm 緯８本　Ｓ撚
	128	黒川式土器	P30	Va	鉢	胴～底部	465	ミガキ	組織痕	灰黄褐色	にぶい橙色	○	△		○				経11mm 緯８本　Ｓ撚
	129	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	胴～底部	857	ミガキ	組織痕	灰黄褐色	にぶい橙色	△	△		○				経12－15mm 緯６本　Ｓ撚
	130	黒川式土器	Q29	V	鉢	胴部	1504	ナデ	組織痕	黄灰色	にぶい黄橙色	○	○		○	△			経11mm 緯８本
	131	黒川式土器	P31	Va	鉢	胴部	606	ナデ	組織痕	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○		○		○		経12mm 緯５－７本 外面スス付着
	132	黒川式土器	L35	Ⅳ	鉢	胴～底部	63	ナデ	組織痕	暗褐色	暗褐色	○	△		△	△			経10mm 緯７本　Ｓ撚
	133	黒川式土器	O30	Ⅳb	鉢	胴部	778	ミガキ	組織痕	橙色	橙色	○	○		○	○			経８mm 緯６本　Ｓ撚
	134	黒川式土器	O29	V	鉢	胴部	1860 1861	ミガキ	組織痕	暗褐色	橙色	○	○	△	○	○			経８mm 緯７本　Ｓ撚
	135	黒川式土器	P29	Ⅳb	鉢	胴部	956	ミガキ	ナデ，組織痕	黒褐色	黒褐色	○	○		○		○		経21mm 緯５本　内外面スス付着
	136	黒川式土器	P31	Ⅳb	鉢	胴～底部	1097	ミガキ	組織痕	暗褐色	にぶい橙色	△	△		○		○		経11mm 緯６本　Ｚ撚
	137	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	胴部	774	ハケメ状ナデ	組織痕	灰黄色	にぶい橙色	○	○		○	○			経11mm 緯７本
	138	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	胴部	814 1284	ナデ	組織痕	橙色	明黄褐色	○	△		○				経７mm 緯７本
	139	黒川式土器	P30	V	鉢	胴部	1852	ミガキ	組織痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○		○				経５－８mm 緯９本
	140	黒川式土器	Q30	Va	鉢	胴部	578	ナデ後ミガキ	組織痕	にぶい黄橙色	にぶい褐色	○	○		○	△			経７mm 緯７本　Ｓ撚
	141	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	胴部	883	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	○	○		○	○	○		網？
	142	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	胴部	914	ミガキ	組織痕	黄橙色	灰黄褐色	○	○		○		○		網目９mm
	143	黒川式土器	Q29	Va	鉢	胴部	425	ミガキ	組織痕	明黄褐色	明黄褐色	○	○		○		○		網目８mm
	144	黒川式土器	Q29	Va	鉢	胴部	408	ナデ	組織痕	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○		○	○			網目７mm
	145	黒川式土器	P30	Ⅳb V	鉢	胴部	25 1606	ナデ後ミガキ	組織痕	黄橙色	黒褐色	○	○		○				経18mm 緯８本 外面スス付着
	146	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	胴部	877	ミガキ	組織痕	にぶい黄橙色	灰黄褐色	△	○		○				経15－17mm 緯７本
	147	黒川式土器	Q31	V	鉢	胴部	1643	ミガキ	組織痕	灰褐色	黒褐色	○			○	△			緯６本　Ｓ撚
41	148	黒川式土器	P28 P30 P31 Q31 R30 R31	Ⅳb V Va	鉢	口～底部	498 501 550 584 588 693 1009 1023 1269 1350 1369 1379 1790 1895	条痕ナデ後ナデ	条痕ナデ，底部組織痕	にぶい褐色	褐色	○	○		○	△	○		
	149	黒川式土器	Q30	Va	鉢	底部	569 567	ナデ	組織痕	灰黄褐色	橙色	○	○		○	○			経12－15mm
	150	黒川式土器	O29 O30 P30 P31 Q30 Q31 Q32 R30	Ⅲ Ⅳb V Va	鉢	口～底部	23 464 491 581 577 661 830 889 992 900 1038 1070 1250 1416 1485 1630 1775 1896	ナデ，ミガキ	ナデ	にぶい褐色	明褐色	○	○		○	○			
42	151	黒川式土器	P30 O29 O30	Ⅳb	鉢	口～胴部	777 816 2006	ナデ	ナデ	浅黄色	褐灰色	○	○		○	○			外面スス付着
	152	黒川式土器	P30	Ⅳb	深鉢	口縁部	9 776	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○		○		○		外面スス付着
	153	黒川式土器	P30 Q29	V Va	鉢	口縁部	433 1391 1576	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○		○	○	○		外面スス付着
	154	黒川式土器	Q31	V	鉢	口縁部	1462	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい黄色	黄灰色	○	○		○	○	○		外面スス付着
	155	黒川式土器	P30	V	鉢	口縁部	1387	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	褐灰色	○	○		○	△	○		外面スス付着
	156	黒川式土器	O29 P30 Q31	Ⅳb V	鉢	口縁部	1137 1467 1554	ナデ後ミガキ	ハケメ状ナデ	橙色	にぶい橙色	○	○		○		○		穿孔あり

第９表　縄文時代出土土器観察表５

挿図	番号	型式等	区	層	器種	部位	取上番号	調整・文様		色調		胎土							備考
								内面	外面	内面	外面	石英長石	輝石角閃	雲母	火山ガラス	軽石	小礫	その他	
42	157	黒川式土器	P31	Va	鉢	口縁部	599	ナデ後ミガキ	ナデ，ミガキ	にぶい黄褐色	黒褐色	○	○		○	△			
	158	黒川式土器	Q31	V	鉢	胴部	1444 1633	ミガキ	ナデ，一部ケズリ	にぶい橙色	明黄褐色	○	○		○	○	○		
	159	黒川式土器	O32	V	鉢	胴部	1837	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	△	○		○				
	160	黒川式土器	R30	Va	鉢	胴部	451 452	ナデ後ミガキ	ナデ，ケズリ	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○		○	△	○		外面スス付着
43	161	黒川式土器	P30 P31 Q30 Q31 P29	Ⅳb V Va	鉢	胴～底部	471 536 575 612 614 1797 882 937 1116	ミガキ	ナデ後ミガキ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	△	○		○	△			
	162	黒川式土器	P30 Q31	Ⅳb Va	鉢	胴部	526 613 884	ミガキ	ミガキ	褐灰色	にぶい黄橙色	△	○		○	△			緯８本
	163	黒川式土器	P30 Q30	Ⅳb V Va	鉢	胴部	527 1000 1274 1408	ナデ後ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	△	○		○	△			緯８本 外面スス付着
44	164	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	胴部	1244	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	△	○		○	△			外面スス付着
	165	黒川式土器	Q30 R29	Ⅳb Va	鉢	胴部	413 837 988	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	暗褐色	にぶい橙色	△	○		○	△			
	166	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	胴部	871 1279	ナデ後ミガキ	ミガキ	褐灰色	にぶい褐色	△	○		○	○			経10mm 緯７本　Ｓ撚
	167	黒川式土器	Q31	Ⅳb	鉢	胴部	833	ミガキ	ミガキ	褐灰色	にぶい黄橙色	△	○		△	△			
46	168	黒川式土器	P30 O30 Q31	Ⅳb V Va	浅鉢	口～胴部	545 806 1440 1637	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○			○				
	169	黒川式土器	Q29	Va	浅鉢	口縁部	404	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰黄褐色	○	○		○				
	170	黒川式土器	P30	Va	浅鉢	口～胴部	468	ナデ	ナデ	灰黄褐色	黒褐色	○		△	○	○			
	171	黒川式土器	P30	Va	浅鉢	口～胴部	488	ナデ後ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい褐色	○		△	○	○			
	172	黒川式土器	P30	Ⅳb V	浅鉢	口～胴部	1282 1364 1370 1605	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○		○	○			
	173	黒川式土器	R24	Ⅶ下	浅鉢	口縁部	1958	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黄褐色	黄褐色	△	○		○	○			
	174	黒川式土器	P30	Ⅳb	浅鉢	口縁部	1289	ナデ後ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○		○				
	175	黒川式土器	P30	Ⅳb	浅鉢	口縁部	1222	ミガキ	ミガキ	灰黄色	暗灰黄色	○	○		○				
	176	黒川式土器	P30	V	浅鉢	口縁部	1320	ナデ後ミガキ	ミガキ	黒褐色	黄褐色	△	△		○				
	177	黒川式土器	P31	Ⅳb	浅鉢	口～底部	1211	ナデ後ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	褐色	○	○		○				
	178	黒川式土器	Q29 Q30	Ⅳb V	浅鉢	口～胴部	1511 1185	ミガキ	ミガキ	赤褐色	赤褐色	○			○	○			赤色塗布
	179	黒川式土器	P30	Ⅳb	浅鉢	口縁部	1030	ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○		○	○			
	180	黒川式土器	P29 P30	Ⅳb V	浅鉢	口～胴部	750 907 924 931	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○		○	○	○		赤色塗布
	181	黒川式土器	P30	Va	浅鉢	口縁部	516	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○		○	○			
	182	黒川式土器	P30	Ⅳb	浅鉢	口～胴部	15　17	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい黄褐色	黒褐色	○	○		○	○			
	183	黒川式土器	Q31	V	浅鉢	口縁部	1473	ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	○	○		○	○			
	184	黒川式土器	Q30	Ⅳb	浅鉢	口縁部	836	ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	褐色	○	○		○	○			
	185	黒川式土器	P30	Ⅳb	浅鉢	口縁部	995	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	褐灰色	暗灰黄色	△	○		○				
	186	黒川式土器	Q30	Ⅳ	浅鉢	胴部	1193	ミガキ	ミガキ	褐灰色	暗灰黄色	△	○		○				
	187	黒川式土器	P30	Ⅳb	浅鉢	胴部	994	ナデ後ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	△	○		○				
	188	黒川式土器	P30	Ⅳb V	浅鉢	胴部	1068 1288 1382	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	△	○		○	△			
47	189	黒川式土器	P30	V	浅鉢	底部	1385	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	△	△		○	○			
	190	黒川式土器	P30	Va	浅鉢	底部	493 507	ナデ後ミガキ	ミガキ	橙色	にぶい黄橙色	○	○		○	△			
	191	黒川式土器	P29	Ⅳb	鉢	底部	946	ナデ後ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	にぶい黄橙色	○	○		○	○			
	192	黒川式土器	P30 P31 Q31	Ⅳb V	鉢	底部	829 919 1202 1422	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	△		△	△			
	193	黒川式土器	Q30	Ⅳb	浅鉢	底部	987 1190	ミガキ	ミガキ	黄灰色	黄褐色	△	○		○	○			
	194	黒川式土器	P30	Ⅳb	鉢	底部	1286	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	△	△		○	△			
	195	－	N31	Ⅶb	－	口縁部	210	条痕のちナデ	条痕後ナデ	暗褐色	黒褐色	○	○		○				
	196	－	R27	V	－	口縁部	1574	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	橙色	○	○		○	○			
	197	円盤状土製品	P29	Ⅳb	－	－	721	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい褐色	○	○		○				
	198	円盤状土製品	N32	Va	－	－	48	ナデ	ナデ	暗灰黄色	暗灰黄色	○	○		○		○		

石鏃・石鏃片（第53図　199～214）

石鏃は欠損品も含め17点出土しており，16点図化した。２点がⅦ層から出土し，そのほかのものはⅣ・Ⅴ層からの出土である。199は姫島産黒曜石，208は水晶を素材としている。

形態的にみると，⑴基部が直線的で全体の形状がほぼ正三角形になるもの（199～202），⑵基部の抉りが浅く，全体の形は正三角形もしくは二等辺三角形になるもの（203～206），⑶基部の抉りが深く，全体の形がほぼ正三角形もしくは二等辺三角形になるもの（207～214）に大別される。また，抉りが深いタイプ⑶には，逆刺が鋭いもの（209・211）と丸くなるもの（207・213）がある。さらに，大きな剥離面を片面もしくは両面に残し，周囲に押圧剥離を行っているもの（200・206・209・214）が数点みられる。各石鏃の帰属時期は判別しがたいが，本遺跡Ｐ・Ｑ－29～31区のⅣ・Ⅴ層出土土器は晩期のものが大半を占めること，また榎崎Ｂ遺跡などからも出土している晩期の剥片鏃に類似していることなども考えると，本遺跡の剥片鏃の帰属時期は晩期に当てはまると考えられる。205は西北九州系の黒曜石ＯＢ３を素材とする局部磨製石鏃である。周囲を押圧剥離後，中心部を磨っている。

石匙（第53図　215）

チャート製の石匙が１点出土している。形態としては，刃部を横方向に作り出しているものである。欠損しているが，つまみはやや斜め方向に作り出されていたと思われる。

楔形石器（第54図　216～218）

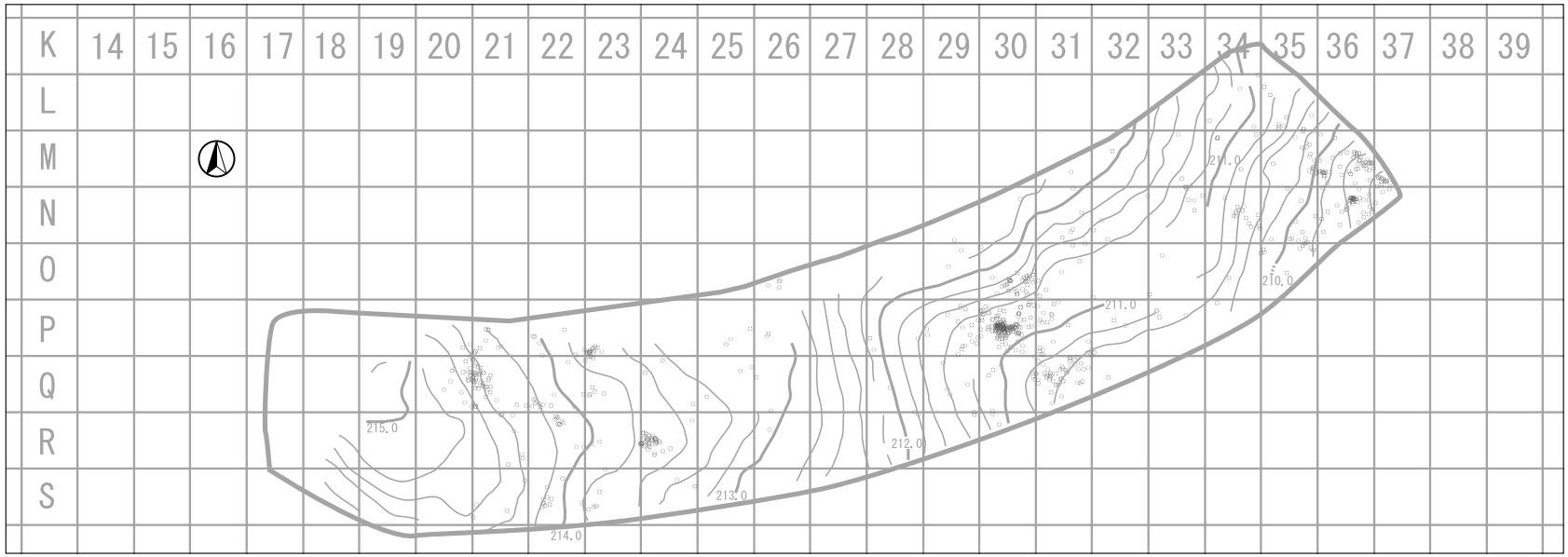
３点出土している。216は嬉野産のハリ質安山岩製の楔形石器である。剥片を利用し，表裏面に上下からの剥離面がみられる。一部欠損しているが，平面形状は楕円形に近いと思われる。また，縦断面形状はレンズ状になっている。217は玉随製のもので，上下からの剥離がみられる。刃部は直線状である。218は三角錐状の形をしており，各稜に細かい剥離がみられる。上部は欠損しており，使用による欠損の可能性もある。

スクレイパー（第54図　219～223）

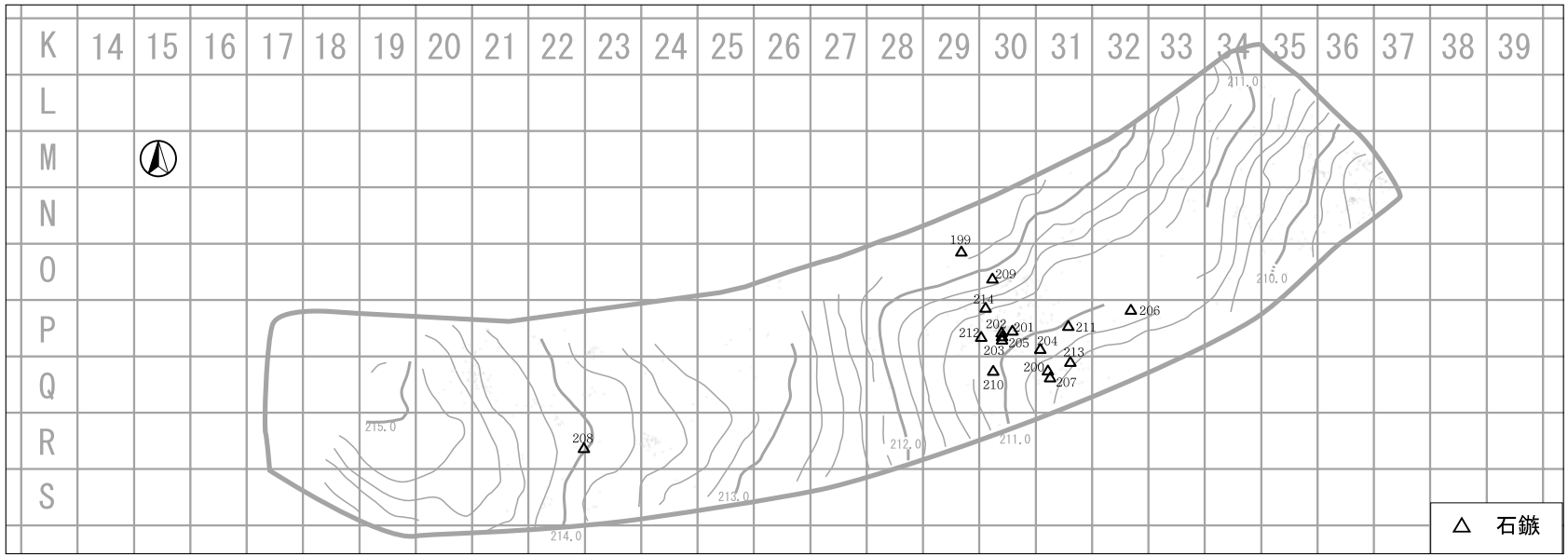
スクレイパーは６点出土している。219は嬉野産安山岩を素材とするものである。スクレイパーとしたが，石匙片の可能性もある。表裏面に広い剥離面を残し，周縁は細かい加工が施されている。220は桑ノ木津留産の黒曜石を素材とするものである。右半分と下半部は欠損しているが，左側縁には部分的に二次加工と使用によると思われる先端までの微細剥離痕が観察できる。221はチャートを素材とするスクレイパーである。片側の側縁には二次加工により刃部が作り出されている。もう片側の側縁部は節理面となっている。222・223は安山岩製のスクレイパーである。222は欠損後の二次利用の可能性がある。223は丁寧な二次加工により横刃が作り出されている。

石錐（第55図　224）

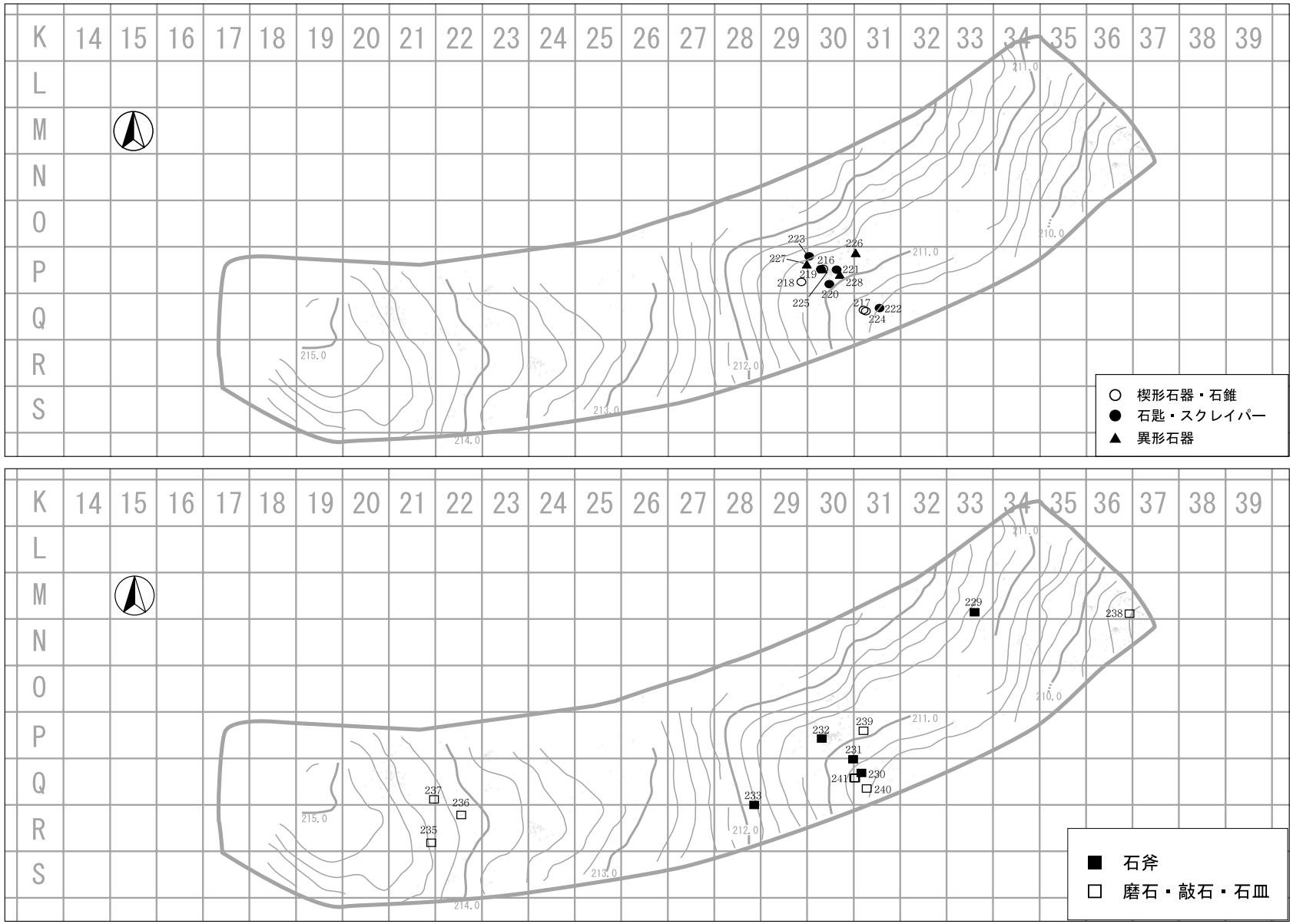
１点出土している。224はやや珪質分のある頁岩を素材とする石錐である。横断面は方形になっており，二次加工により対峙する稜を鋭く作り出している。側面には節理面が残る。



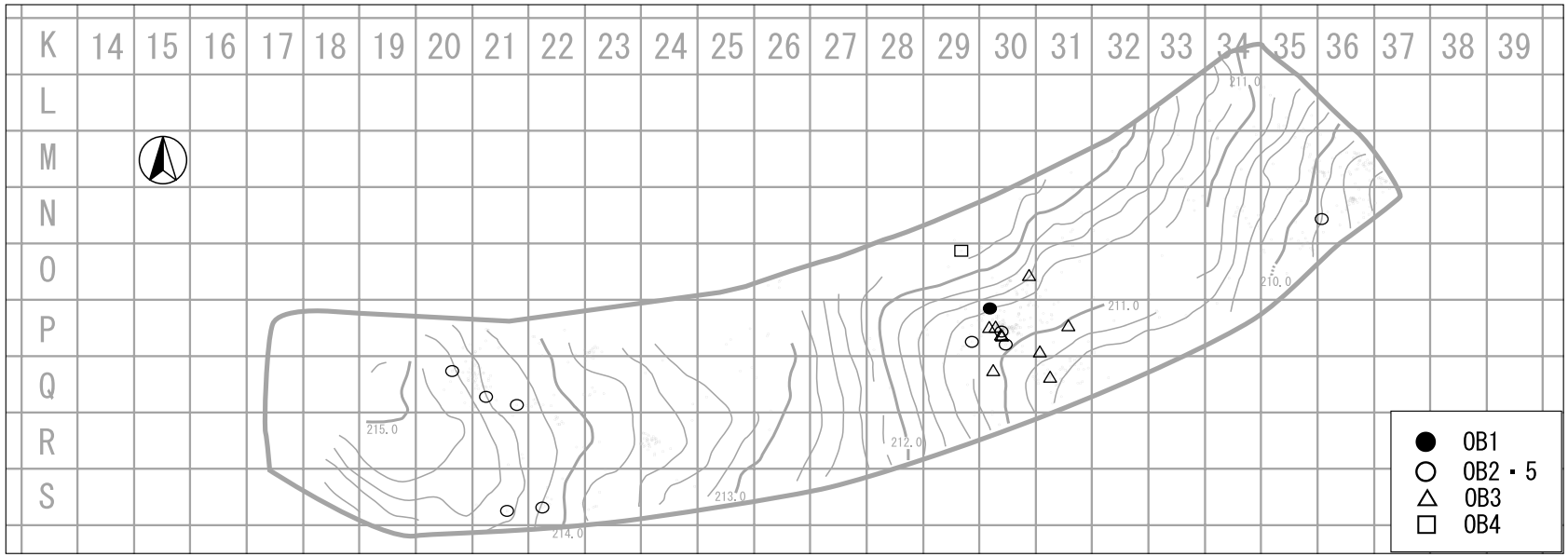
第48図　縄文時代石器全出土分布図

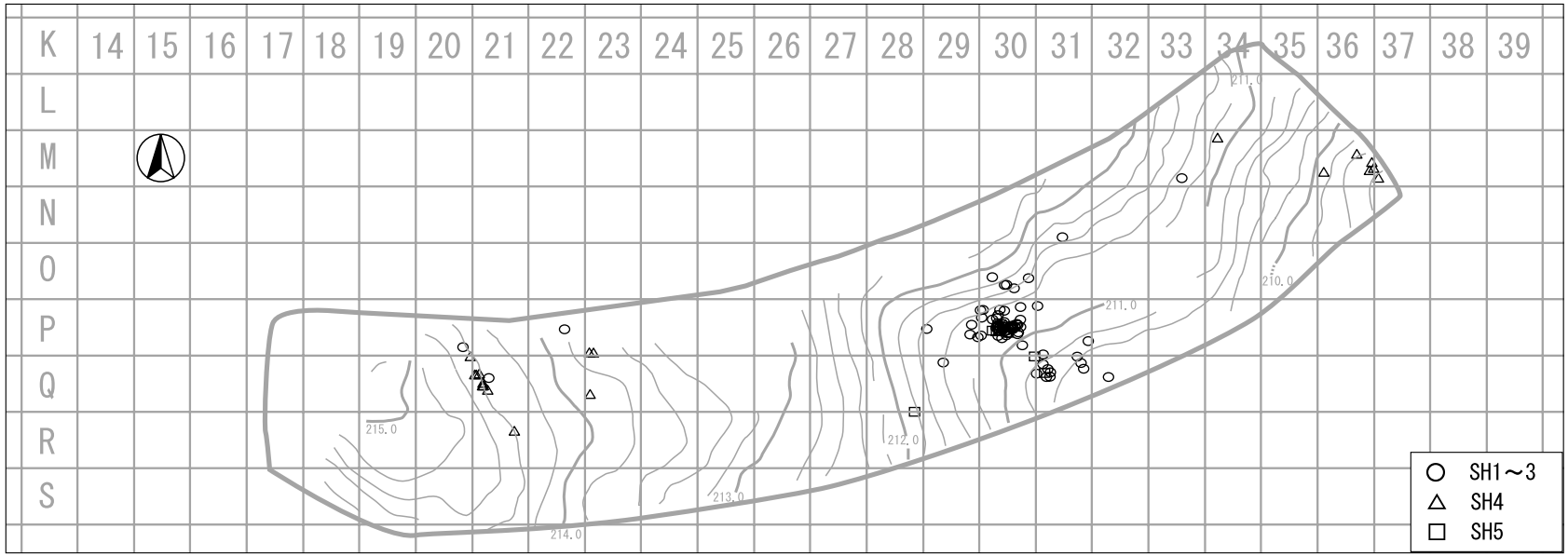


第49図　縄文時代石器器種別出土分布図(1)

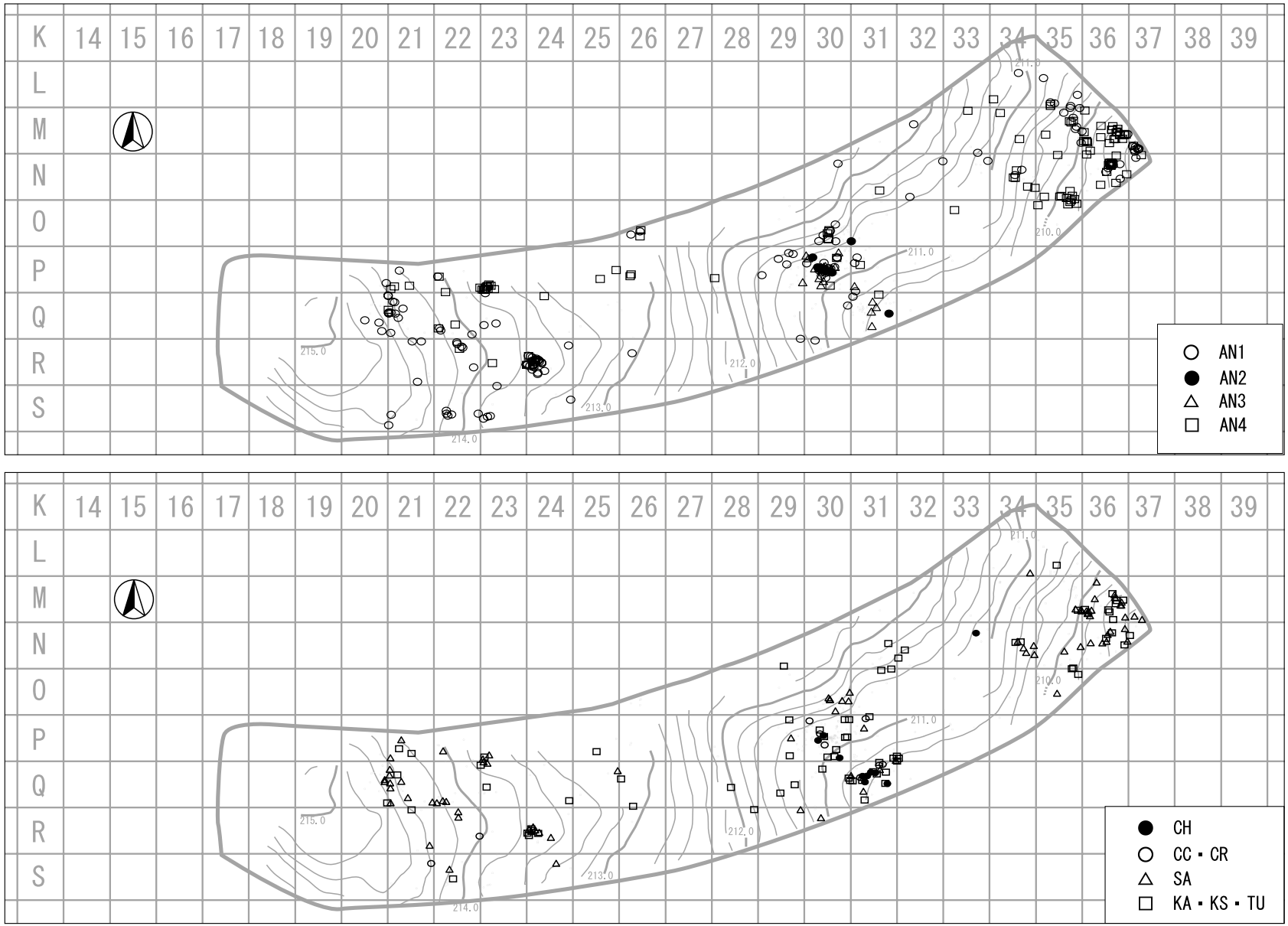


第50図　縄文時代石器器種別出土分布図(2)

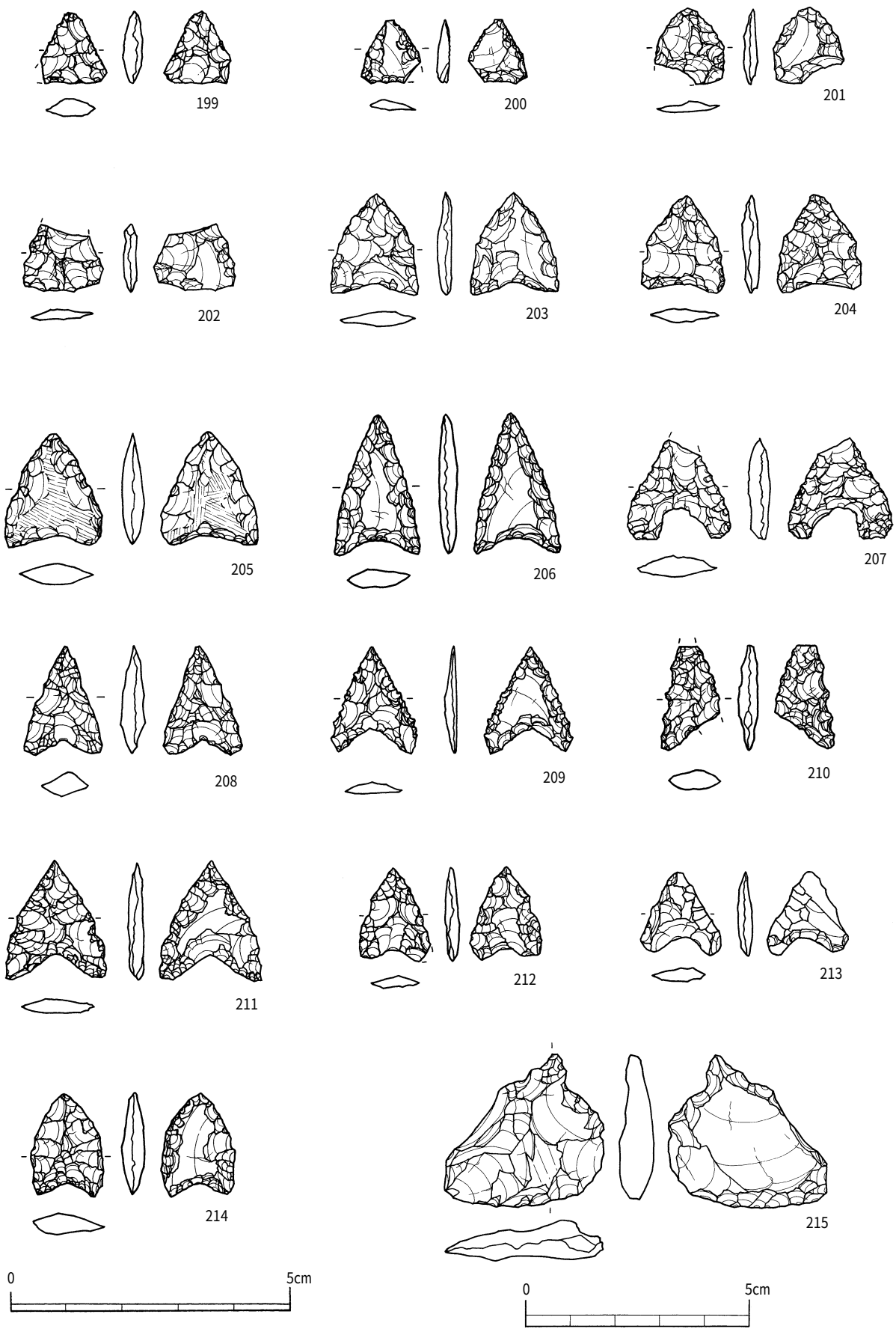




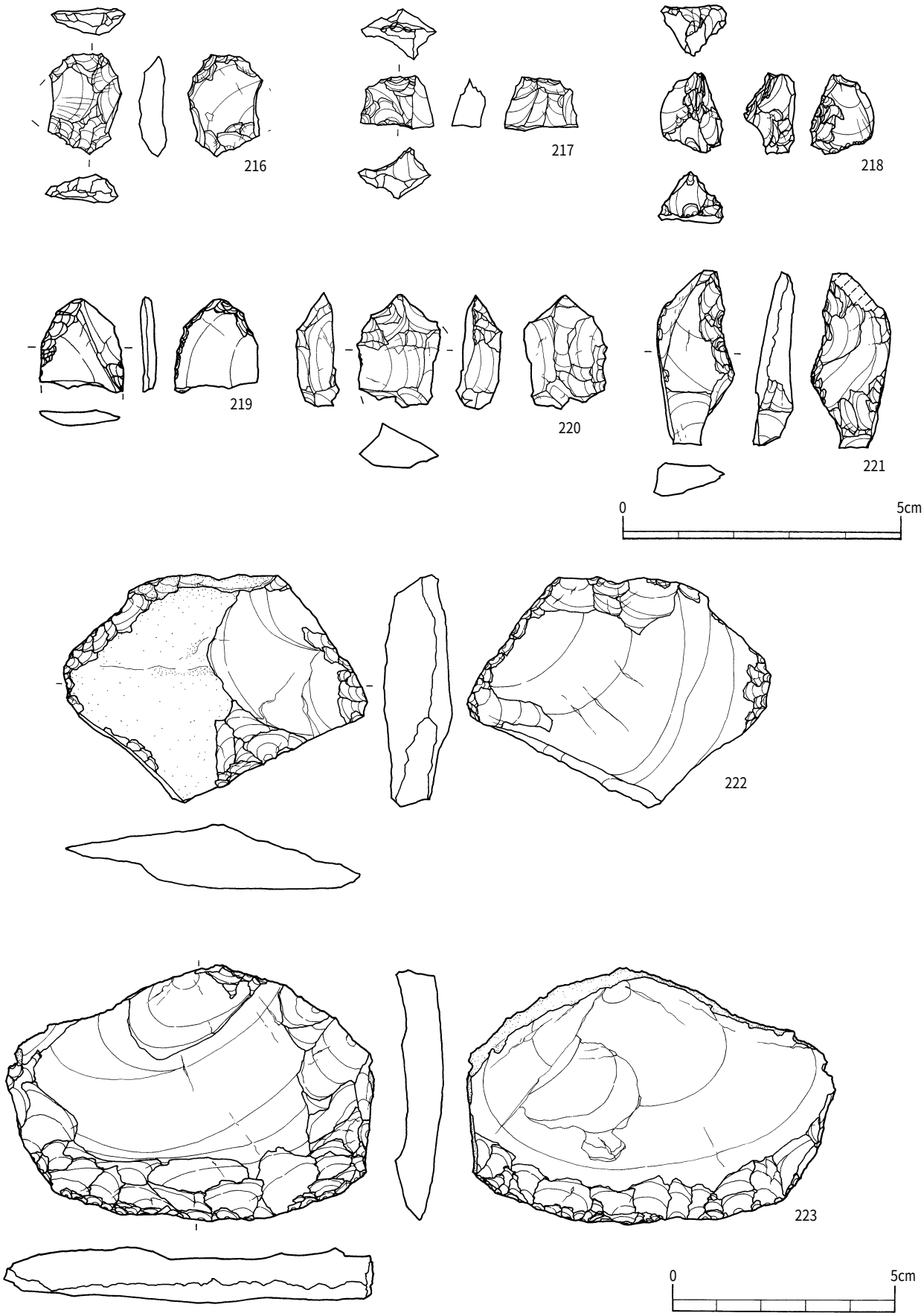
第51図　縄文時代石器石材別出土分布図(1)



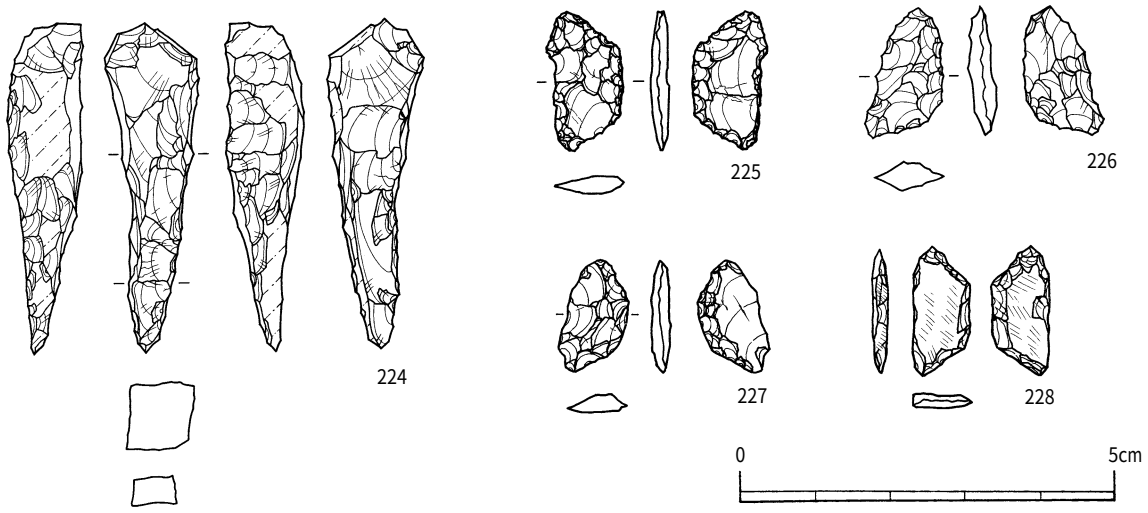
第52図　縄文時代石器石材別出土分布図(2)



第53図　縄文時代石器(1)



第54図　縄文時代石器(2)



第55図　縄文時代石器(3)

異形石器（第55図　225～228）

4点出土している。4点とも，大きさからみても石鏃の欠損品を二次加工したものである可能性もあるが，周縁には丁寧に二次加工が施されているため，石鏃とは別に取り扱った。225は安山岩製で薄く，周縁には二次加工が施されている。226・227は頁岩製の異形石器である。2点とも同様に周縁には丁寧に二次加工が施されている。228は頁岩製のもので，表裏面が平らに磨られたのち，側縁に細かく二次加工が施されている。特に長い方の側縁の中央部にはややくぼみがみられ，石鏃の抉りであった可能性がある。ごく薄い石器であるが，側縁も両側から磨かれ，稜が確認できる。

石斧（第56・57図　229～234）

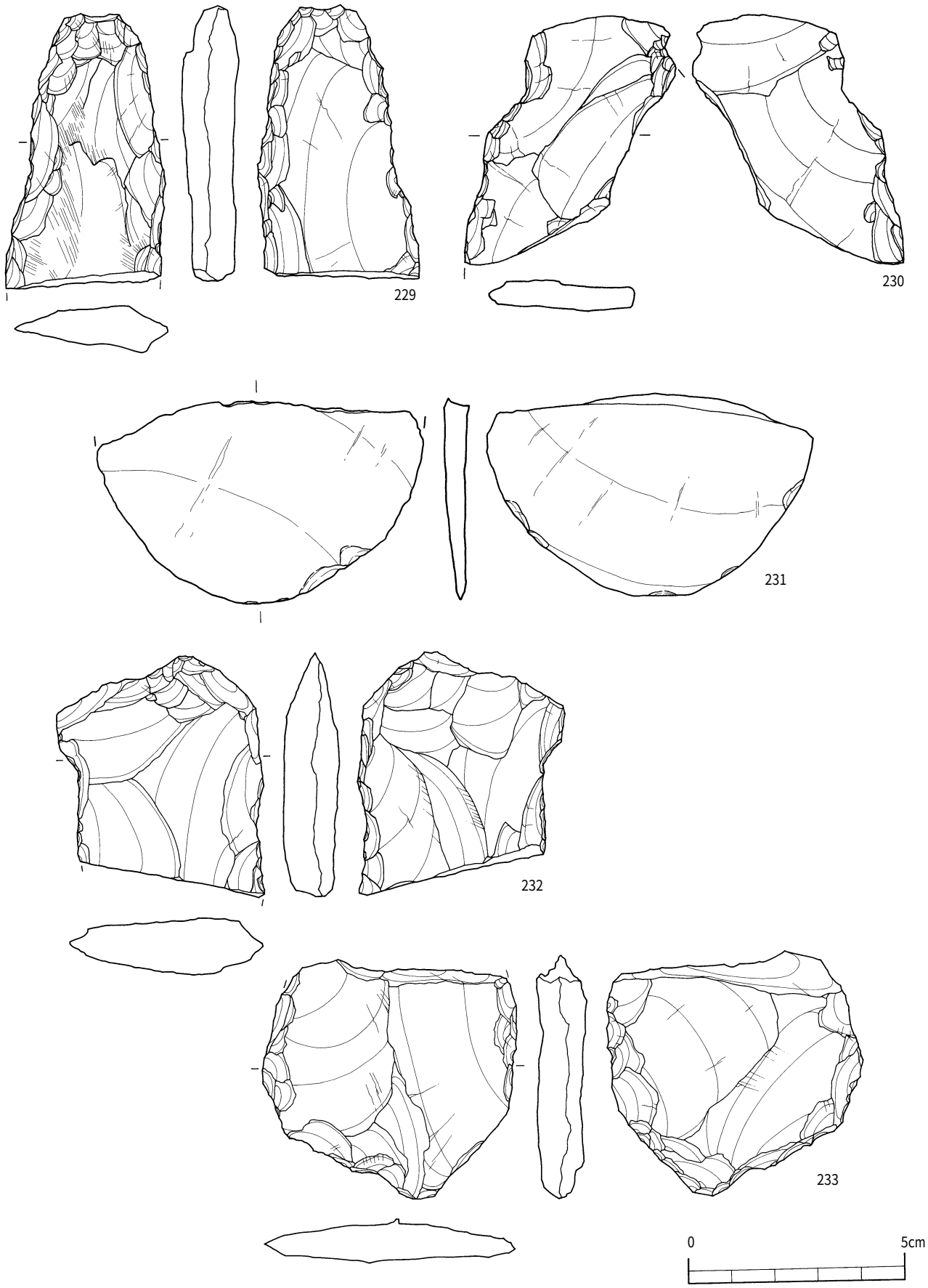
石斧片は6点出土しており，すべて図化した。229は頁岩製の石斧である。下部は欠損している。表面には擦痕がみられるが，側面からの剥離はそのあとから施されており，二次的に加工されていたことがわかる。230・232はホルンフェルス製の打製石斧片である。230は抉り部分は残るが，下半部は欠損している。233もホルンフェルス製の打製石斧である。両面に大きな剥離面を残し，周縁には細かく剥離が施されている。上半部は欠損している。231はホルンフェルス製の石斧片である。恐らく節理面より剥落しており，断面は薄くなっている。234は頁岩製の打製石斧で，表採品である。上部欠損後，上部周縁に二次加工を施している。晩期に相当する石斧類と思われる。

磨石・敲石（第58図　235～240）

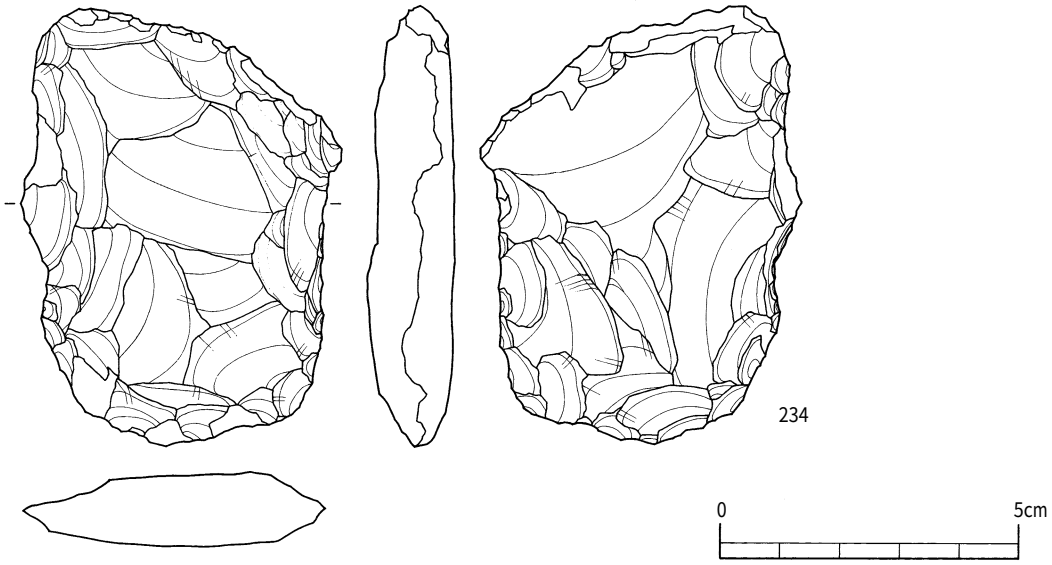
8点出土しており，6点図化した。235は砂岩製の磨石・敲石である。周縁部に敲打痕がみられ，上部の欠損は使用によるものと思われる。また裏面は磨って使用されている。236は安山岩製の磨石・敲石である。両面とも磨られ，片方の周縁に敲打痕がみられる。237は硬質砂岩を用いた磨石・敲石である。238は砂岩を素材とする磨石・敲石である。239は片面が磨られている安山岩製の磨石である。240は硬質砂岩を素材とする磨石である。欠損した平坦面を打面として，二次加工を行った剥離面が確認できる。

石皿（第58図　241）

241は接合資料である。花崗岩を素材としており，欠損品であるが平坦な磨面を残す。



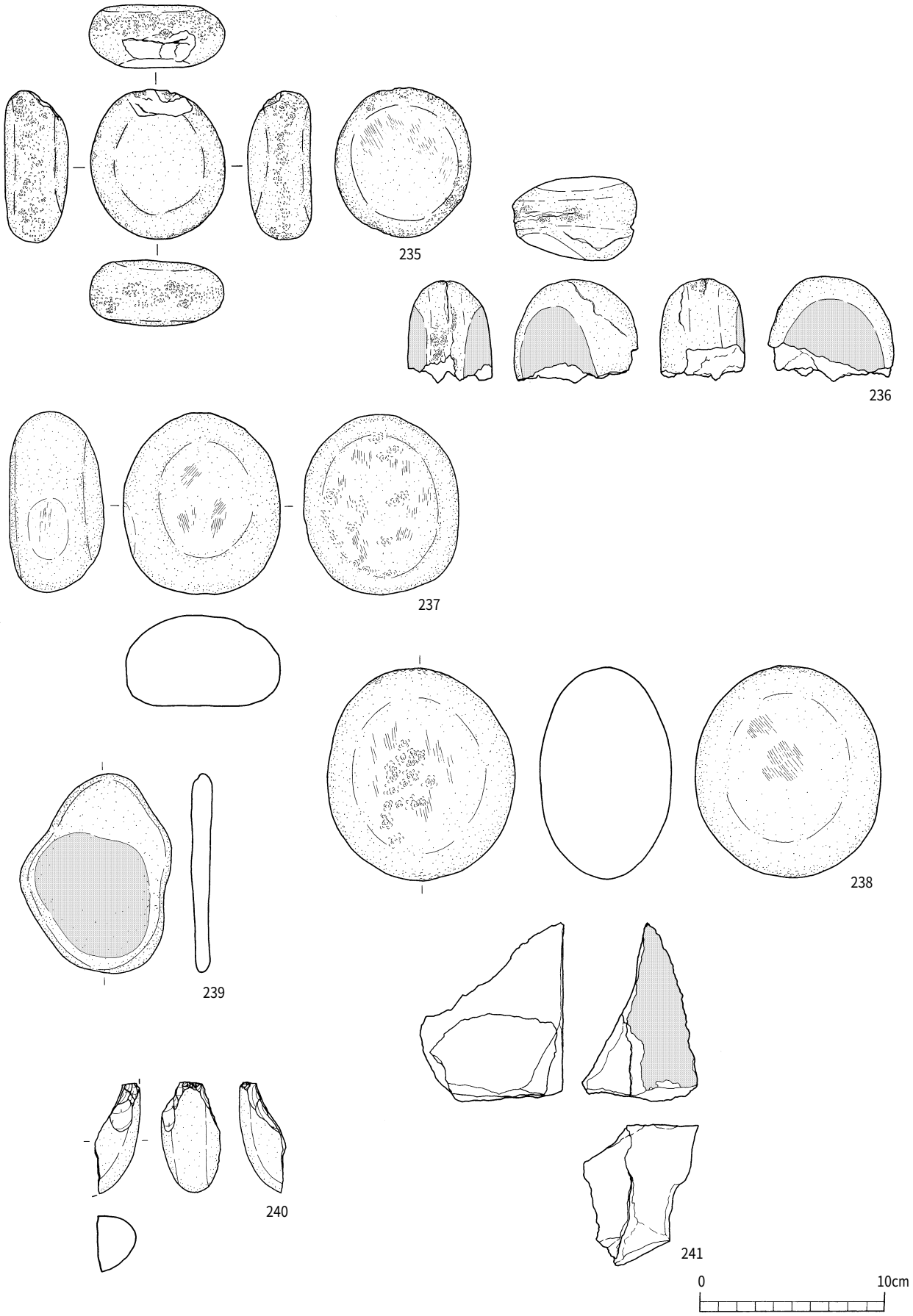
第56図　縄文時代石器(4)



第57図　縄文時代石器(5)

第10表　縄文時代出土石器観察表

挿図	番号	石器器種	石材	区	層	標高	遺物番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)
53	199	石鏃	ＯＢ4	Ｏ29	Ⅴ	212.794	1550	1.30	1.15	0.40	0.37
	200	石鏃	ＡＮ2	Ｑ31	Ⅴ	211.490	1753	1.10	1.05	0.20	0.22
	201	石鏃	ＳＨ3	Ｐ30	Ⅳｂ	212.147	1230	1.35	1.25	0.25	0.30
	202	石鏃	ＯＢ2	Ｐ30	Ⅳｂ	212.216	1245	1.20	1.40	0.25	0.33
	203	石鏃	ＳＨ3	Ｐ30	Ⅴａ	212.284	492	1.80	1.55	0.25	0.57
	204	石鏃	ＡＮ3	Ｐ31	Ⅴ	211.728	1621	1.75	1.45	0.30	0.59
	205	石鏃	ＯＢ3	Ｐ30	Ⅳｂ	212.136	1249	2.05	1.75	0.40	1.01
	206	石鏃	ＳＨ3	Ｐ32	Ⅴ	211.290	1764	2.45	1.50	0.30	0.93
	207	石鏃	ＳＨ1	Ｑ31	Ⅴ	211.804	1443	1.80	1.85	0.40	0.90
	208	石鏃	ＣＲ	Ｒ23	Ⅶ下	214.014	1949	1.90	1.40	0.45	0.18
	209	石鏃	ＳＨ3	Ｏ30	Ⅴ	212.514	1847	1.90	1.55	0.20	0.42
	210	石鏃	ＯＢ3	Ｑ30	Ⅴ	211.885	1746	1.85	1.00	0.35	0.51
	211	石鏃	ＯＢ3	Ｐ31	Ⅳｂ	211.898	1208	2.10	1.80	0.30	0.68
	212	石鏃	ＳＨ3	Ｐ30	Ⅳｂ	212.488	921	1.65	1.25	0.25	0.33
	213	石鏃	ＣＣ	Ｑ31	Ⅳｂ	211.726	1206	1.50	1.45	0.25	0.23
	214	石鏃	ＣＣ	Ｐ30	Ⅳｂ	212.472	767	1.80	1.35	0.40	0.71
	215	石匙片	ＣＨ	横転	－	211.778	52	3.35	3.50	0.75	8.49
54	216	楔形石器	ＡＮ2	Ｐ30	Ⅴ	212.138	1600	1.80	1.30	0.50	1.33
	217	楔形石器	ＣＣ	Ｑ31	Ⅴ	211.540	1686	0.95	1.30	0.60	0.78
	218	楔形石器	ＯＢ2	Ｐ29	Ⅳｂ	212.383	958	1.45	1.10	0.90	1.05
	219	スクレイパー片	ＡＮ2	Ｐ30	Ⅴ	212.269	1374	1.70	1.50	0.30	0.73
	220	スクレイパー片	ＯＢ5	Ｐ30	Ⅴ	212.064	1398	2.00	1.50	0.80	2.23
	221	スクレイパー	ＣＨ	Ｐ30	Ⅳｂ	212.308	1010	3.15	1.40	0.70	3.28
	222	スクレイパー	ＡＮ3	Ｑ31	Ⅴａ	211.781	651	5.20	6.80	1.50	41.72
	223	スクレイパー	ＡＮ3	Ｐ30	Ⅳｂ	212.557	759	5.75	8.30	1.05	54.37
55	224	石錐	ＳＨ2	Ｑ31	Ⅴａ	211.846	621	4.40	1.30	1.00	6.00
	225	異形石器	ＡＮ3	Ｐ30	Ⅴ	211.995	1732	1.85	1.00	0.25	0.43
	226	異形石器	ＳＨ1	Ｐ31	Ⅳｂ	212.341	1113	1.70	1.00	0.40	0.50
	227	異形石器	ＳＨ3	Ｐ29	Ⅳｂ	212.467	752	1.50	0.95	0.25	0.27
	228	異形石器	ＳＨ3	Ｐ30	Ⅴ	211.900	1711	1.70	0.80	0.20	0.31
56	229	石斧片	ＳＨ3	Ｍ33	Ⅶ下	211.408	98	6.20	3.70	1.30	35.66
	230	石斧片	ＳＨ5	Ｑ31	Ⅴ	211.610	1685	5.70	4.80	0.60	17.39
	231	石斧片	ＳＨ5	Ｑ30	Ⅳｂ	211.943	990	4.60	7.50	0.60	23.48
	232	石斧片	ＳＨ5	Ｐ30	Ⅳｂ	212.318	1075	5.50	4.70	1.30	43.52
	233	石斧片	ＳＨ5	Ｑ28	Ⅴ	212.734	1522	5.50	5.85	1.15	40.18
57	234	石斧片	ＳＨ3	表採	－	－	－	7.30	5.30	1.50	78.00
58	235	敲石	ＳＡ	Ｒ21	Ⅶ下	214.384	1940	8.00	7.30	3.40	283.39
	236	磨石	ＡＮ4	Ｒ22	Ⅶ下	214.077	367	5.60	6.80	4.60	226.00
	237	磨石・敲石	ＳＡ	Ｑ21	Ⅶ下	214.407	351	9.80	8.50	5.10	610.00
	238	磨石・敲石	ＳＡ	Ｍ36	Ⅵａ	210.126	110	11.50	10.20	7.20	1130.00
	239	磨石	ＡＮ4	Ｐ31	Ⅴａ	212.161	595	10.60	8.20	1.20	172.11
	240	磨石片	ＳＡ	Ｑ31	Ⅴａ	211.796	626	5.95	1.90	3.15	37.76
	241	石皿片	ＫＡ	Ｑ30･31	Ⅴ	211.710	1682･1683	9.60	6.25	7.70	288.85



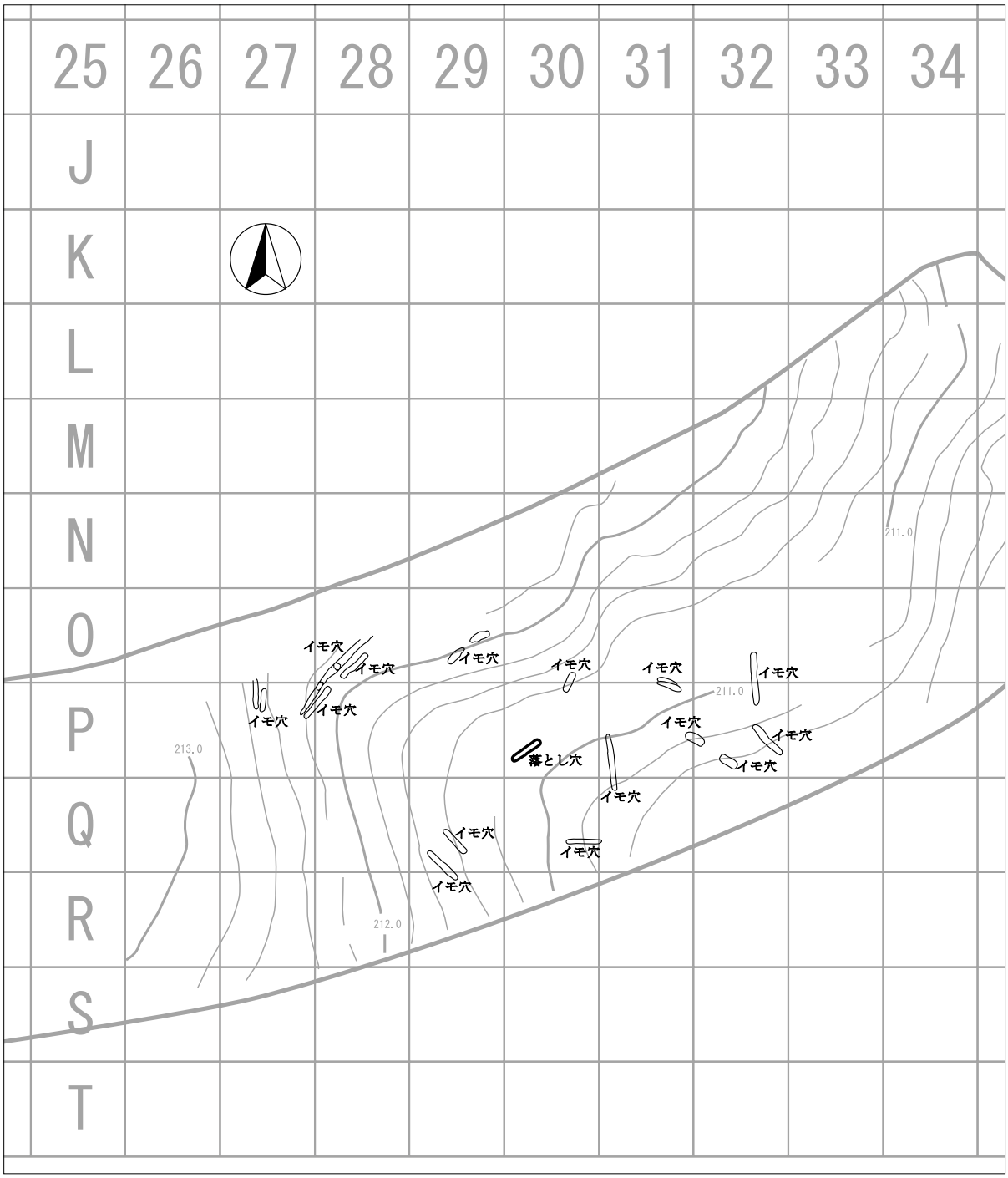
第58図　縄文時代石器(6)

第３項　古代～中世の調査成果

１　調査の概要

チシャノ木遺跡における古代～中世の遺物包含層であるⅢａ層並びに古代・中世の遺構の年代を特定する１つの基準となるⅡ層（文明ボラ層）は，先述のとおり，圃場整備等により層が攪乱されており，ほとんど残存していなかった。

Ｖａ層面を調査中に，細長い箱形をした土坑が切り合うのも含めて22基検出された。調査の結果，イモ穴であることが判明したが，Ｐ－30区で検出されたイモ穴だけは，他のイモ穴よりも掘り込みが深く，底面に小さなピットをもつ落とし穴であることが判明した。



第59図　古代～中世遺構配置図

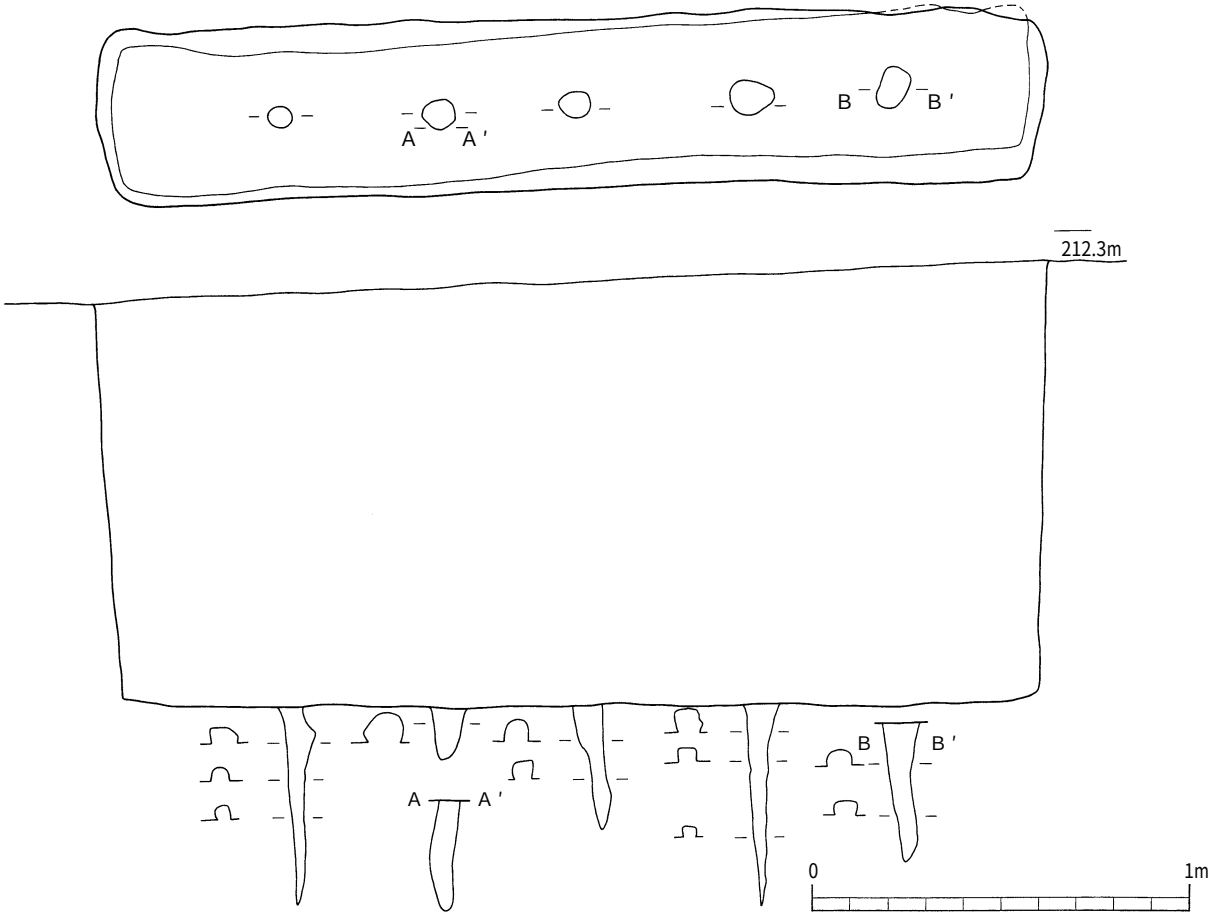
2　遺構

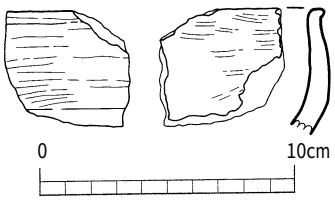
落とし穴（第60図）

Ｐ－30区で検出された落とし穴で検出面はＶａ層である。平面形は約260㎝×約40㎝の細長い箱形の形状で，深さは約120㎝を測る。当初，先述のとおり「イモ穴」として調査を始めたが，底面に５個の小さなピットをもつ落とし穴であることが判明した。調査終了後，実際に杭を刺してみたところ，逆茂木痕であることが判明した。埋土は，Ⅲ層の黒色土を主体としてⅡ層の文明ボラ等が混ざった土であった。この埋土内から縄文時代晩期相当の土器片が１点出土した。

3　遺構内遺物（第60図）

縄文時代晩期の黒川式土器に比定できる浅鉢の口縁部～胴部片で，６ｄ類に属する。





第11表　古代～中世遺構内遺物観察表

型式等	出土区	層	器種	部位	取上番号	調整		色調		胎土			
						内面	外面	内面	外面	石英長石	角閃輝石	火山ガラス	軽石
黒川式土器	－	－	浅鉢	口～胴部	－	ナデ後ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○	○

第60図　古代～中世落とし穴及び遺構内遺物

第４項　近世の調査成果

１　調査の概要

チシャノ木遺跡における近世の遺構・遺物の検出・出土層は，表土中であるが，先述のとおり，圃場整備等により表土はかなり攪乱されていたので，近世の遺構・遺物が検出・出土するにはかなり困難な状況であった。

しかし，Ｏ～Ｑ－32・33区で，表土を剥いだ後にＰ２（安永ボラ，1771年）と思われる白色の火山灰が溝状に所々残っていたため，調査を行ったところ溝状遺構が２条，東西方向に並行して検出された。しかし，東側は調査区外，西側は途中で切れており全体の様相はつかめなかった。遺構の埋土内からは陶器，火打ち石，軽石製品，寛永通宝といった近世の遺物をはじめとして，縄文時代晩期の黒川式土器に比定できる３点の土器片も出土した。

２　遺構

溝状遺構１（第62図）

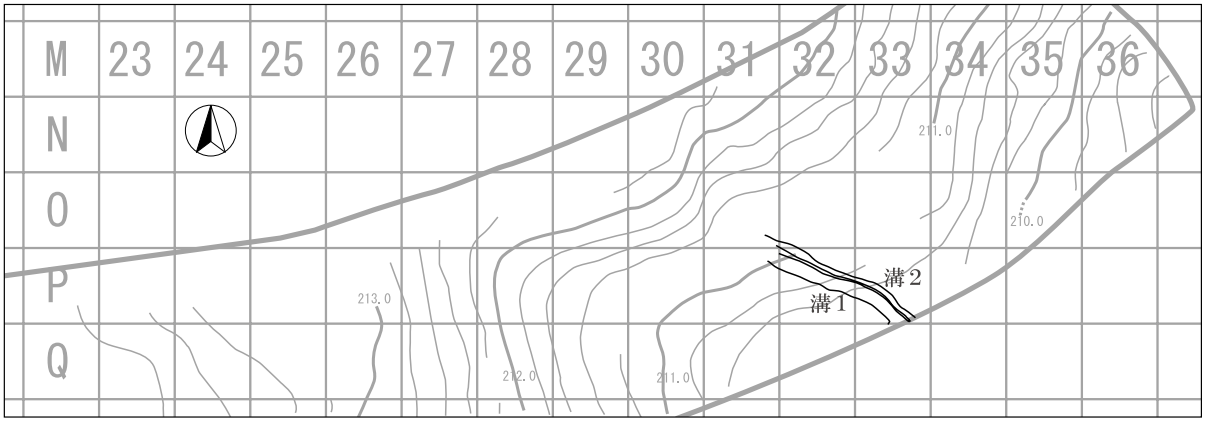
長さ約20m，幅約1.8m，深さ約10～20㎝の規模で検出された。埋土は，細かく分けて９つに分層することができた（第63図）。遺構内から，陶器，軽石製品，寛永通宝，縄文時代晩期相当の土器片が出土した。

溝状遺構２（第62図）

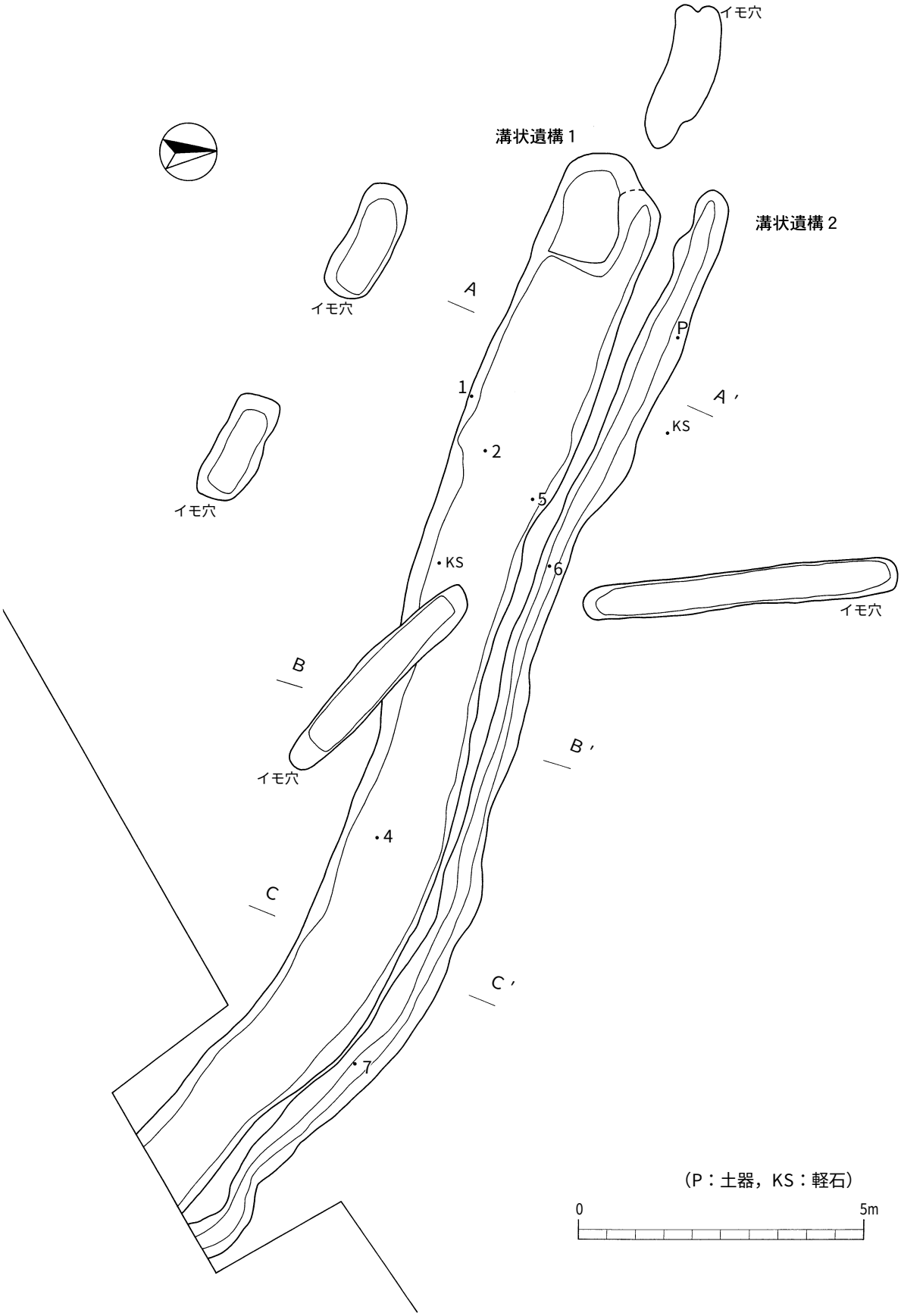
長さ約20m，幅約１m，深さ約10㎝の規模で検出された。埋土は，細かく分けて３つに分層することができた（第63図）。　遺構内から，縄文時代晩期相当の土器片が出土した。

３　遺構内遺物（第64図　溝－１～溝－７）

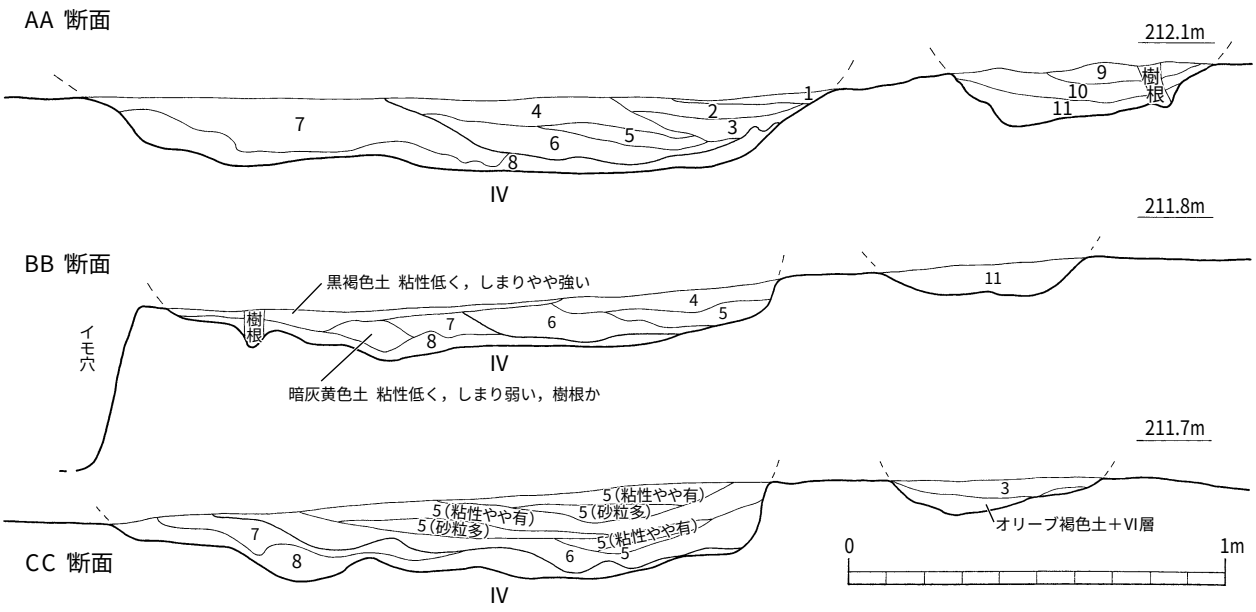
溝－１は陶器である。溝－２は軽石製品で片面に刻みが施されている。溝－３は玉髄製の火打ち石である。溝－４は寛永通宝である。日本出土銭総覧（兵庫埋蔵銭調査会　1996年版）によると，背面に文字がないことと刻印の書体から，鋳造時期は，1697年（元禄10年）～1747年（延享４年）及び1767年（明和４年）～1781年（天明元年）で新寛永に属することが判明した。溝－５～７は縄文時代晩期の黒川式土器に比定できる鉢の胴部片で，３点とも外面に組織痕が見られ，６ｃ－３類に属する。溝－５・７は内面にミガキが施され，また，外面の組織痕からも同一個体の可能性がある。溝－６は内面にナデ調整が，外面には組織痕が観察できる。



第61図　近世遺構配置図

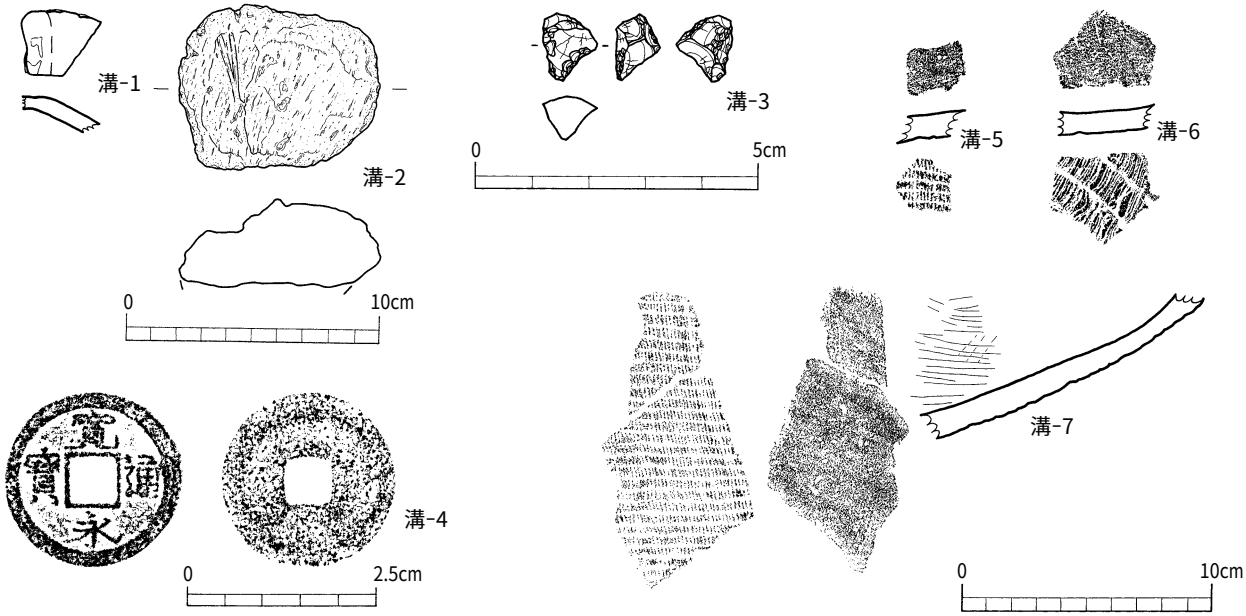


第62図　近世溝状遺構１・２



1．黄灰色砂質土，粘性低く，しまり弱い
2．黒褐色土，粘性低く，しまり弱い
3．黒褐色土＋黄褐色砂質土，粘性低く，しまり弱い
4．オリーブ黒色土，白色軽石1～2%含，粘性低く，しまり弱い
5．オリーブ黒色土，粘性低く，しまり弱い
6．黒色土，粘性低く，しまり強い
7．オリーブ黒色土，粘性低く，しまり強い
8．オリーブ黒色土＋IV層，粘性低く，しまり強い
9．黒色火山灰，粘性低く，しまり弱い
10．灰黄色火山灰，粘性低く，しまり弱い　安政年間の火山灰
11．暗いオリーブ褐色土＋IV層

第63図　近世溝状遺構断面図



第64図　近世溝状遺構内遺物

第12表　近世遺構内遺物観察表

挿図	番号	種別	器種	出土区	層	番号	標高	胎土色	釉	備考
64	溝－1	陶器	蓋	P32	撹乱	2035	211.77	明赤褐色	鉄釉	

挿図	番号	石器器種	石材	区	層	標高	遺物番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)
64	溝－2	軽石製品	軽石	P32	－	211.68	2034	7.90	6.50	3.50	55.76
	溝－3	火打ち石	CC	－	－	－	－	1.10	0.90	0.75	0.61

挿図	番号	種別	種類	鋳造時期	出土区	取上番号	標高	備考
64	溝－4	寛永通宝	新寛永	元禄10年～天明元年	P33	2029	211．363	

挿図	番号	型式等	出土区	層	器種	部位	取上番号	調整・文様		色調		胎土				備考
								内面	外面	内面	外面	石英長石	角閃輝石	火山ガラス	軽石	
64	溝－5	黒川式土器	P32	Ⅳb	鉢	胴部	2033	ミガキ	組織痕	灰黄褐色	明黄褐色	○	○	○	△	経4㎜　緯8本
	溝－6	黒川式土器	P32	－	鉢	胴部	2032	ナデ	組織痕	灰黄褐色	暗赤褐色	○	○	○	△	経1.3㎜　緯10本　S撚
	溝－7	黒川式土器	P33 Q32	Ⅳb	鉢	胴部	1779・2028	ミガキ	組織痕	にぶい黄褐色	明黄褐色	△	○	○	△	経4㎜　緯8本

第４節　まとめ

鳥居川遺跡，チシャノ木遺跡とも圃場整備等により上の層がかなり攪乱されていたので，古代～近世にかけての遺構・遺物はほとんど検出・出土しなかった。

調査の結果，鳥居川遺跡は縄文時代早期～晩期の複合遺跡で，遺構は確認されなかったが，遺物の出土数から縄文時代晩期を主とした遺跡であることが判明した。チシャノ木遺跡は旧石器時代～近世にかけての複合遺跡で，遺構は縄文時代早期，遺物は縄文時代晩期を主とした遺跡であることが判明した。

第１項　縄文時代の遺構・遺物

１　遺構

チシャノ木遺跡では早期の集石２基，落とし穴２基，土坑３基が検出された。

集石２基と落とし穴２基はすべてＬ～Ｎ－34・35区の比較的まとまった形で検出され，検出面はいずれもⅧ層上面であった。また，Ⅷ層上面で計測した等高線で，集石２基は約210.6m付近，落とし穴は約211m付近で検出された。このことから，落とし穴と集石は同じ時期のもので，狩場であった可能性がある。

集石を構成している礫の石材は２号集石の砂岩１点を除いて，すべて安山岩であった。落とし穴は１号落とし穴から４個，２号落とし穴から12個の逆茂木痕と思われる小ピットが底面から検出された。埋土はいずれも上部に御池火山灰を含むアカホヤの二次堆積土であった。

土坑は３基検出されたが，すべてＲ・Ｓ－23区内の標高213.6～213.8mでまとまって検出された。検出面は１号土坑はⅧ層上面，２号土坑と３号土坑はⅦ層上面であった。埋土は１号土坑はＰ－11主体とする混ざり土，２号土坑はＰ－11とアカホヤの混ざり土，３号土坑はアカホヤ二次堆積土で，いずれも埋土内からは遺物は出土しなかった。また，底面から逆茂木痕と思われるピットは確認できなかったので土坑と判断したが，用途は現段階で不明である。（松下）

２　遺物

土器

鳥居川遺跡出土の土器は，１類土器は早期押型文土器，２類土器は塞之神式土器，３類は晩期の黒川式土器に比定される。出土数は多くないが，Ｇ・Ｆ－５・６区から黒川式土器の深鉢と鉢がセットで出土しているのが注目される。また，組織痕土器も出土している。

チシャノ木遺跡出土の各類土器について詳述する。１類土器は，早期の楕円押型文土器，２類土器は無文土器であるが，早期に該当すると思われる。３類土器は，型式は不明であるが前期に該当すると思われる胴下半部の土器片である。４類土器は，後期の阿高式土器に比定すると思われる土器である。５類土器は，後期後半の磨消縄文土器で，西平式土器に比定すると思われる。

６類土器は，晩期の黒川式土器で，本遺跡出土土器の大半を占める。Ｐ・Ｑ－29～31区に集中して出土している。６ａ類は粗製の深鉢形土器，６ｂ類は粗製もしくは半粗半精製の深鉢・鉢形土器，６ｃ類は粗製・半粗半精・精製の中華鍋形を呈し組織痕をもつ鉢形土器，６ｄ類は半粗半精製・精製浅鉢形土器である。口縁部がわずかに肥厚し内側にやや屈曲する深鉢，底部に沈線を巡らせる浅鉢などの特徴から，本遺跡出土の黒川式土器は，干河原遺跡などでみられる「干河原段階」（東2002），いわゆる黒川式新段階（堂込　1997）のものであると思われ，これらは近年，計志加里遺

跡，前原遺跡などでそのセット関係が明らかになりつつある。精製浅鉢については，本遺跡では波状口縁の出土がみられるものの，相対的に出土数が少なく，その様相は明瞭ではない。また，壺形土器の出土も確認はできなかった。

また，本遺跡で注目されるのは，６ｃ類の組織痕土器である。これらの土器は，籠のような容器に編布などの組織を敷いて，胴部～底部を型取りによって作り出し，上部は輪積みによって形を整えているものである。類似する形態で，外面に組織痕の全く見られないもの（６ｃ－２類）もあり，ほかには№99（写真１）や№104のように組織痕の上から粘土を塗り重ねているものもみられる。これらの組織痕土器は，内外面の調整から従来「半粗半精製土器」とも呼ばれているが，本遺跡では，№91～95のように粗製のもの，№148・149の粗製で平底のもの，№161～167のように精製のものなど，多様な組織痕土器がみられる。特に№162～164・166・167は，基本的に内外面は丁寧に磨かれているが，わずかに外面に組織痕が残存している。何故このように組織痕が部分的に残存しているのかは不明であるが，可能性として，わずかなくぼみに残っていた組織痕部分を磨き損ねたのか，または土器の割れ口で組織痕が分断されているため，粘土が剥落して組織痕がみえているのか，ということも考えられる。これは，組織痕土器の製作・使用を考える上でも重要な事例であり，今後の検討課題としたい。

また，編布の圧痕については，９割がアンギン編みのものであり，網圧痕（№141～144）と平織り（№120・121）も小数みられる。アンギン編みに関しては，経糸間の幅と１㎝間の緯糸の本数を観察表に示している。緯糸の片撚り糸を観察すると，Ｓ撚りのものが多い。また，平織りと編布の２種類が圧痕として残っているもの（№120）もある。

石器

チシャノ木遺跡出土の石器の器種毎石材別出土数は，第13表に示す通りである。

今回，異形石器として扱った石器は，１点は磨かれているが，その他３点は周囲に押圧剥離が丁寧に施されているものである。使用方法は不明であるが，植刃器のような組み合わせ式の石器であった可能性もある。石鏃の欠損したものに二次加工が施されたとも想定されるが，こうした半月形の形態を呈する石器は，絶対数は多くないが出土例はみられる(東1991)。　　（寒川）

第13表　縄文時代石器器種別出土表

	AN1	AN2	AN3	AN4	SH1	SH2	SH3	SH4	SH5	OB1	OB2	OB3	OB4	OB5	CH	CC	CR	SA	KA	合計	全体比%
石鏃			1		1		5				2	4	1			2	1			17	36.2
石匙															1					1	2.1
楔形石器		1									1					1				3	6.4
スクレイパー			2		2							1		1						6	12.8
石錐						1														1	2.1
異形石器			1		1		2													4	8.5
石斧							2		4											6	12.8
磨石敲石				3														5		8	17
石皿																			1	1	2.1
合　計		1	4	3	4	1	9		4		3	5	1	1	1	3	1	5	1	47	100

第２項　古代～中世の遺構

チシャノ木遺跡のＰ－30区，Ｖａ層で落とし穴が１基検出された。この落とし穴は当初，「イモ穴」として調査を始めた。検出形態が細長い箱形をしており，周辺で検出された同様の形態をした

土坑らしきものがすべてイモ穴であることが判明したからである。しかし，調査を進めていくうちに検出面から底面までの深さが他よりも深く，また，逆茂木痕と思われる小ピットが検出されたので「落とし穴」と判断した。この「イモ穴」は全部で22基検出されたが，落とし穴であったのは１基であった。用途としては，落とし穴の規模からうさぎや大きくてもシカぐらいまでの動物を捕獲するためのものではないかと現段階では考えているが，今後の検討課題である。

この落とし穴について，福岡大学の桃崎祐輔氏から「中世には栃木県の宇都宮氏のように，領主の武士が宮司となり，神饌にするシカやイノシシの狩猟場として未開発の土地を一方的に指定して囲い込み，自身の支配領域を拡大する口実とすることがあったので，地元猟師が残したものか，領主による巻狩りに伴うものかは検討の余地がある。」と指摘をいただいた。また，同じ形態をした落とし穴が，今後刊行予定の大隅町の「西原段Ⅰ遺跡」でも１基検出されているので，大隅町をはじめとする中世の遺跡を抽出し検討していく必要がある。

第３項　近世の遺構

Ｏ～Ｑ－32・33区で溝状遺構が２条検出された。表土を剥いだ後にＰ－２（安永ボラ，1771年）と思われる白色の火山灰が溝状に所々残っていたため，調査を進めたところ溝状遺構であることが判明した。東西方向に２条が並行して検出されたが，東は調査区外，西は途中で切れており全体の様相は不明である。埋土内からは陶器，火打ち石，寛永通宝，縄文時代晩期の黒川式土器に比定できる土器片等が出土しているが，検出状況，遺構内遺物，埋土等から総合的に検討し，近世の溝状遺構と判断した。（松下）

＜引用・参考文献＞

尾関清子　1996 『縄文の衣－日本最古の布を復元－』学生社

下山覚・長野真一他　1986 『水の谷遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（５）鹿屋市教育委員会

堂込秀人　1997 「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－」『鹿児島考古』第31号　鹿児島県考古学会

野間口勇・黒川忠広他　2007『上水流遺跡１』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（113）

東　和幸　1991 「川辺町南田代遺跡の石器について」『鹿児島大学考古学会会報　第11・12合併号』

東　和幸　1998 「鹿児島県の組織痕土器」『南九州縄文通信№12』南九州縄文研究会

東　和幸　2002 『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（38）

牛ノ濱修他　2007 『前原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（107）

福永裕暁　1995 『干河原遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（12）加世田市教育委員会

渡辺　誠　1991 「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』三島格会長古稀記念　肥後考古第８号肥後考古学会

兵庫埋蔵銭調査会　1996年版『日本出土銭総覧』

第５節　科学分析の結果

㈱加速器分析研究所

第１項　放射性炭素年代測定

年代測定報告書

１　算出方法

⑴　年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

⑵　BP年代値は，過去において大気中の^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る^{14}C年代である。

⑶　付記した誤差は，次のように算出した。

複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

⑷　δ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R)/{}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB})/{}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで，$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または $(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に^{13}C／^{12}Cを測定し，標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，Δ^{14}Cは，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$(‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。⑴式の^{14}C濃度を，δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2 \quad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{12}C\text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000)) \quad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{13}C\text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R)/{}^{14}A_R] \times 1000 (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。

多くの場合，同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており，Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000 \quad (‰)$$

$$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより，このΔ^{14}CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radi ocarbonAge;yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(pMC/100)$$

⑸ ^{14}C年代値と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

⑹ 較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey 1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey，van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

２　測定結果

⑴ 鳥居川遺跡

Ｇ－５区の遺物№112付着炭化物（７:IAAA-70408）の^{14}C年代が2730±30yrBP，Ｇ－５区の遺物№76－11付着炭化物（８:IAAA-70409）の^{14}C年代が2750±30yrBPである。暦年較正年代（1σ＝68.2%）は，7が905～835BC，８が915～840BCであり，縄文時代晩期中葉に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

⑵ チシャノ木遺跡

Ｐ－29区の遺物№432付着炭化物（18:IAAA-70826）の^{14}C年代が2680±40yrBP，Ｐ－30区の遺物№532付着炭化物（19:IAAA-70827）の^{14}C年代が2750±30yrBPである。暦年較正年代（1σ＝68.2%）は，18が895～875BC（14.0%）・850～800BC（54.2%），19が900～830BCであり，縄文時代晩期中葉に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

写真５　年代測定用土器写真（表２・資料№18）

表１　鳥居川遺跡の土器付着炭化物年代測定結果

IAA

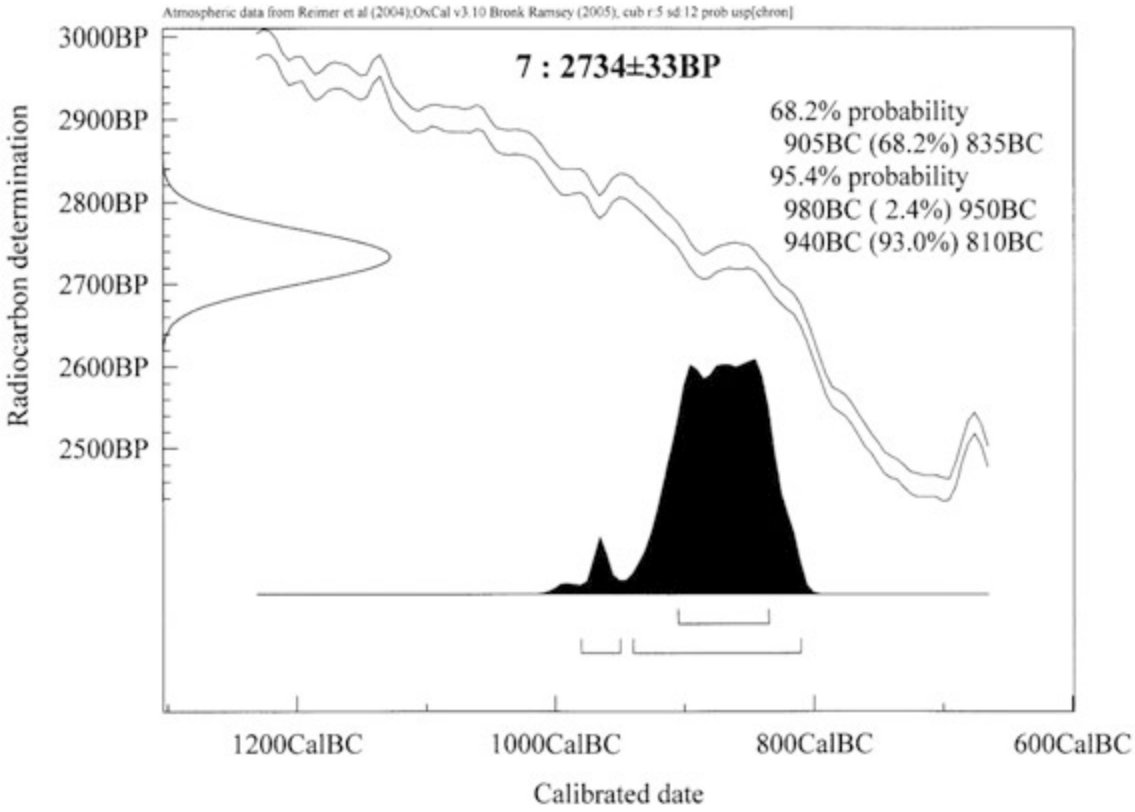
IAA Code №.	試料		BP年代および炭素の同位体比				
IAAA-70408	試料採取場所	： 曽於市大隅町	Libby Age(yrBP)	：	2,730	±	30
		鳥居川遺跡	δ ^{13}C(‰),(加速器)	＝	-25.12	±	0.70
	試料形態	： 土器付着炭化物	Δ ^{14}C(‰)	＝	-288.5	±	3.0
	遺物№.	： 6(資料№.7)	pMC(%)	＝	71.15	±	0.30
	(参考)	δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	＝	-288.7	±	2.8
			pMC(%)	＝	71.13	±	0.28
#1773-1			Age (yrBP)	：	2,740	±	30
IAAA-70409	試料採取場所	： 曽於市大隅町	Libby Age(yrBP)	：	2,750	±	30
		鳥居川遺跡	δ ^{13}C(‰),(加速器)	＝	-21.39	±	0.65
	試料形態	： 土器付着炭化物	Δ ^{14}C(‰)	＝	-289.5	±	2.9
	遺物№.	： 7(資料№.8)	pMC(%)	＝	71.05	±	0.29
	(参考)	δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	＝	-284.2	±	2.8
			pMC(%)	＝	71.58	±	0.28
#1773-2			Age (yrBP)	：	2,690	±	30

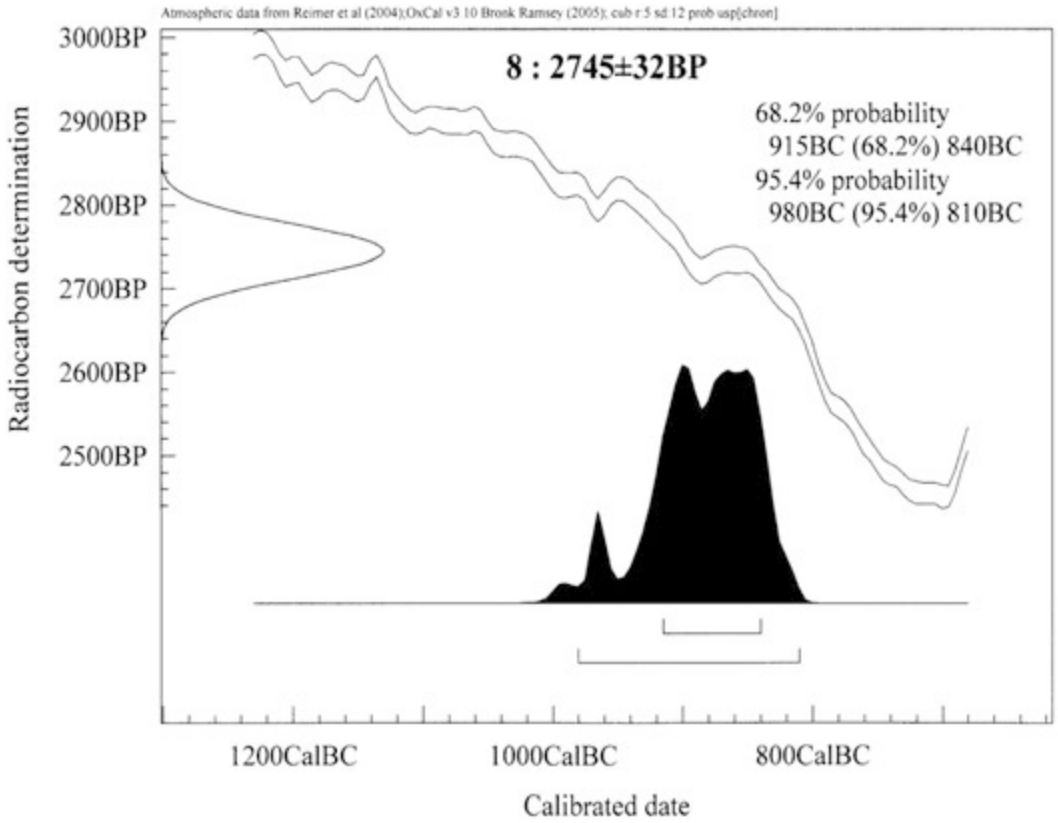
表２　チシャノ木遺跡の土器付着炭化物年代測定結果

IAA

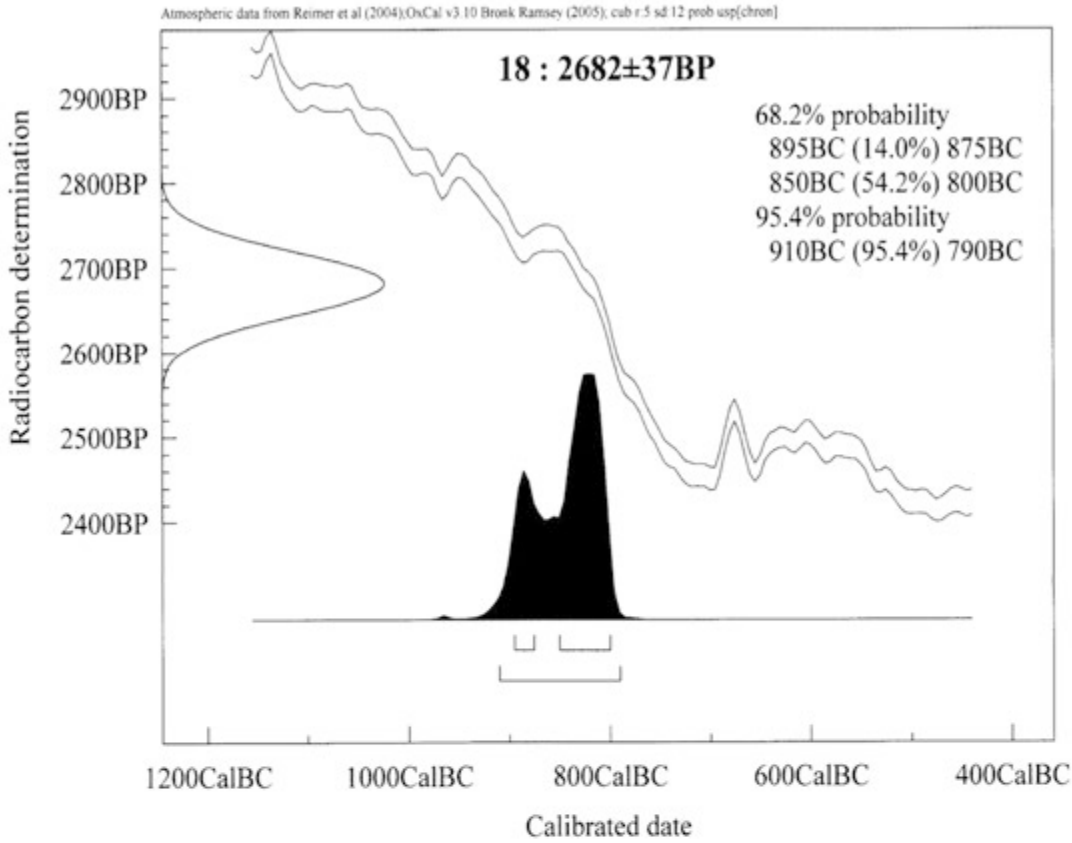
IAA Code №.	試料		BP年代および炭素の同位体比				
IAAA-70408	試料採取場所	： 曽於市大隅町	Libby Age(yrBP)	：	2,680	±	40
		チシャノ木遺跡	δ ^{13}C(‰),(加速器)	＝	-27.65	±	0.92
	試料形態	： 土器付着炭化物	Δ ^{14}C(‰)	＝	-283.9	±	3.3
	遺物№.	： 非実測遺物(資料№.18)	pMC(%)	＝	71.61	±	0.33
	(参考)	δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	＝	-287.7	±	3.0
			pMC(%)	＝	71.23	±	0.30
#1835-1			Age (yrBP)	：	2,730	±	30
IAAA-70409	試料採取場所	： 曽於市大隅町	Libby Age(yrBP)	：	2,720	±	30
		チシャノ木遺跡	δ ^{13}C(‰),(加速器)	＝	-24.41	±	0.61
	試料形態	： 土器付着炭化物	Δ ^{14}C(‰)	＝	-287.6	±	2.8
	遺物№.	： 51(資料№.19)	pMC(%)	＝	71.24	±	0.28
	(参考)	δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	＝	-286.8	±	2.7
			pMC(%)	＝	71.32	±	0.27
#1835-2			Age (yrBP)	：	2,710	±	30

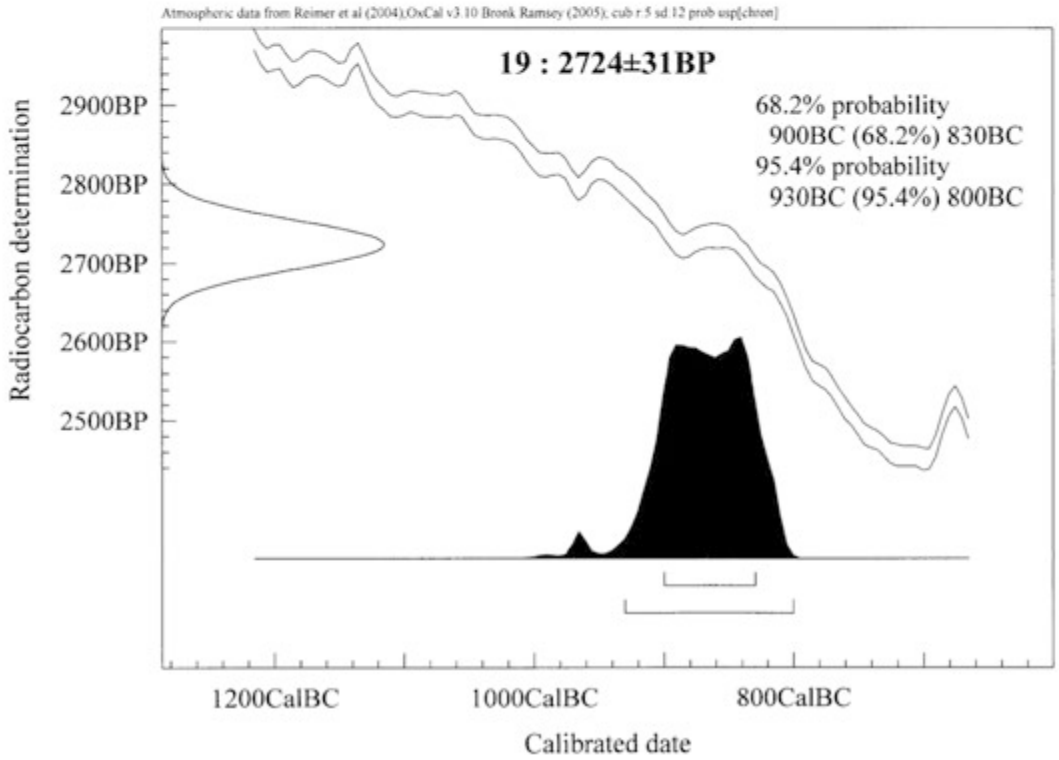
【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】





【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】





第２項　縄文土器表面に塗布された赤色顔料

鹿児島県立埋蔵文化財センター

本遺跡出土の，赤色顔料を塗布された縄文土器について，次のとおり分析を行った。

１　資料

縄文土器４点（遺物番号519，930，985，1185）

２　観察・分析方法

⑴　形状観察

双眼実体顕微鏡による10～30倍観察並びに走査型電子顕微鏡（日本電子製JSM－5300LV）による2000～3500倍観察を行った。電子顕微鏡観察に際しては，顔料の一部を削り取り，観察用の試料を作成した。

⑵　蛍光Ｘ線分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径100μｍ）を使用した。分析条件は右のとおりである。

【分析条件】

Ｘ線照射径	：	100μｍ
測定時間	：	50s
Ｘ線管電圧	：	50kV
電流	：	1000μＡ
パルス処理時間	：	Ｐ３
Ｘ線フィルタ	：	なし
試料セル	：	なし
定量補正法	：	スタンダードレス

胎土の分析については，断面の一部を削り，新鮮な胎土面を出して，同じ条件で分析した。

３　結果

⑴　形状観察

資料930は外部に塗布されており，文様の谷部に一部残存している。985と1185は口縁部上面にわずかに付着している。色調はいずれも鮮やかな赤色である。519は内外面共に，全面にうすく塗布されている。

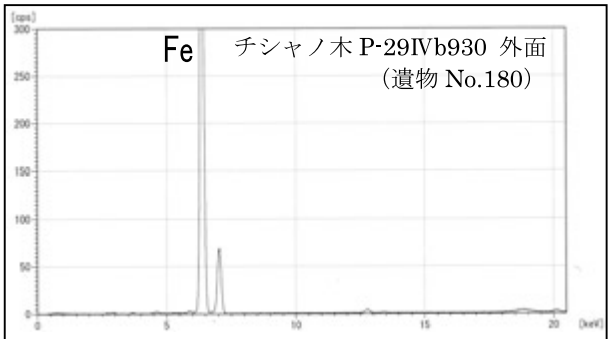
電子顕微鏡による観察では，930，985，1185はいずれも鉄細菌に由来するパイプ状粒子を確認した（写真）。かなり密度の濃い状態でパイプ状粒子が見られ，519は内外面共にパイプ状粒子は確認できなかった。

⑵　蛍光Ｘ線分析

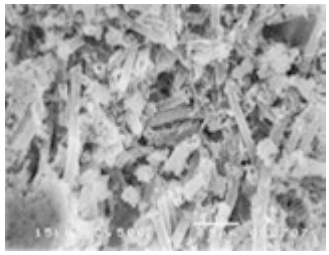
930，985，1185は，いずれも強い鉄（Ｆｅ）のピークが見られた。チタン（Ｔｉ）やマンガン（Ｍｎ）など数種類の元素も検出されたがごく微量で，不純物をほとんど含まないベンガラであることが分かった。519は鉄を検出してはいるものの，胎土部分とほとんど差が無い。土器の内面と外面で，チタンの強度が大きく異なる。今回の分析では，それぞれ任意の２点について分析した。いずれも同様の結果であり，ここでは強度の強い方を提示した。この点については，土壌の影響か，胎土に含まれる粒子の影響かについてさらなる分析が必要である。

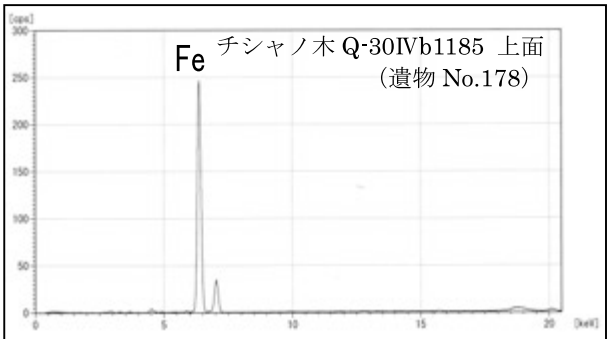
顔料そのものについては，他の３資料とは時期的にも差があり，製造過程も彩色の技法も異なるようである。

第14表　赤色顔料観察表

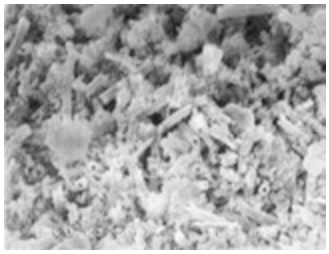


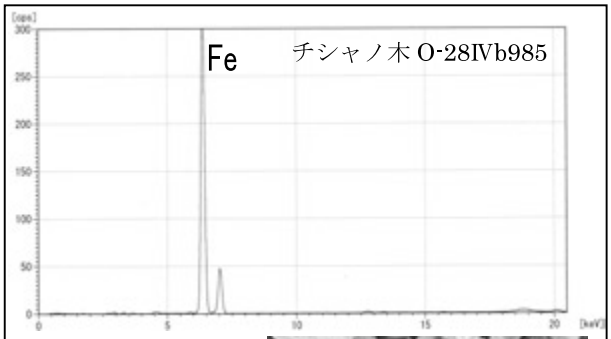
元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Ca カルシウム	0.39	17.09
Ti チタン	0.18	14.10
Mn マンガン	0.33	30.24
Fe 鉄	99.09	8389.65



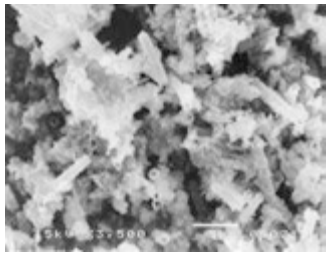


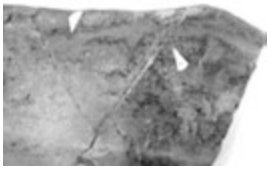
元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
K カリウム	0.78	11.24
Ca カルシウム	0.59	12.64
Ti チタン	1.06	40.33
Mn マンガン	0.37	16.25
Fe 鉄	96.82	4090.43
Zr ジルコニウム	0.39	15.28





元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
K カリウム	0.84	16.00
Ti チタン	0.47	24.60
Mn マンガン	0.16	9.52
Fe 鉄	98.08	5567.83
Rb ルビジウム	0.32	13.28
Zr ジルコニウム	0.13	6.88



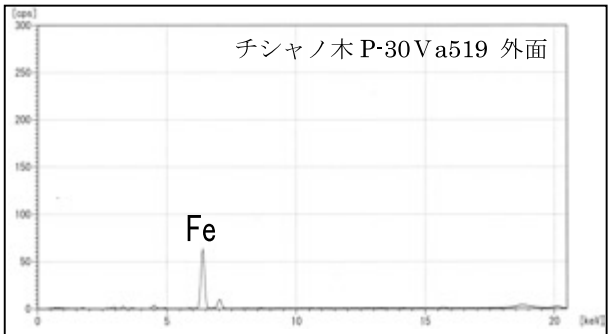


チシャノ木 P-29IVb930 外面
（遺物 No.180）

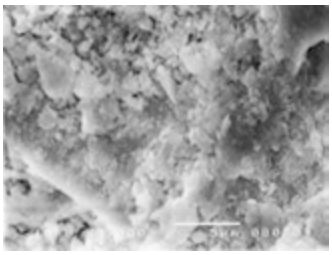
チシャノ木 Q-30IVb1185 上面
（遺物 No.178）

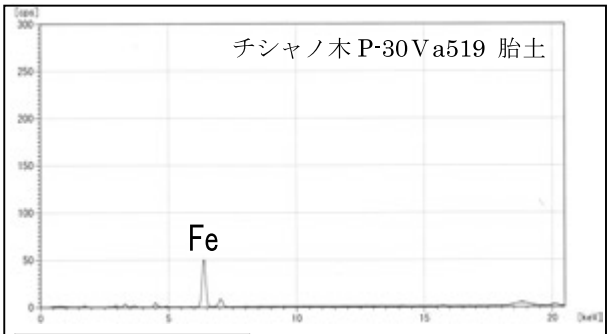
チシャノ木 O-28IVb985

チシャノ木 P-30Va519 外面



元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Si けい素	15.04	11.83
K カリウム	7.14	31.95
Ti チタン	4.59	46.81
Fe 鉄	72.53	1016.87
Zr ジルコニウム	0.69	11.78



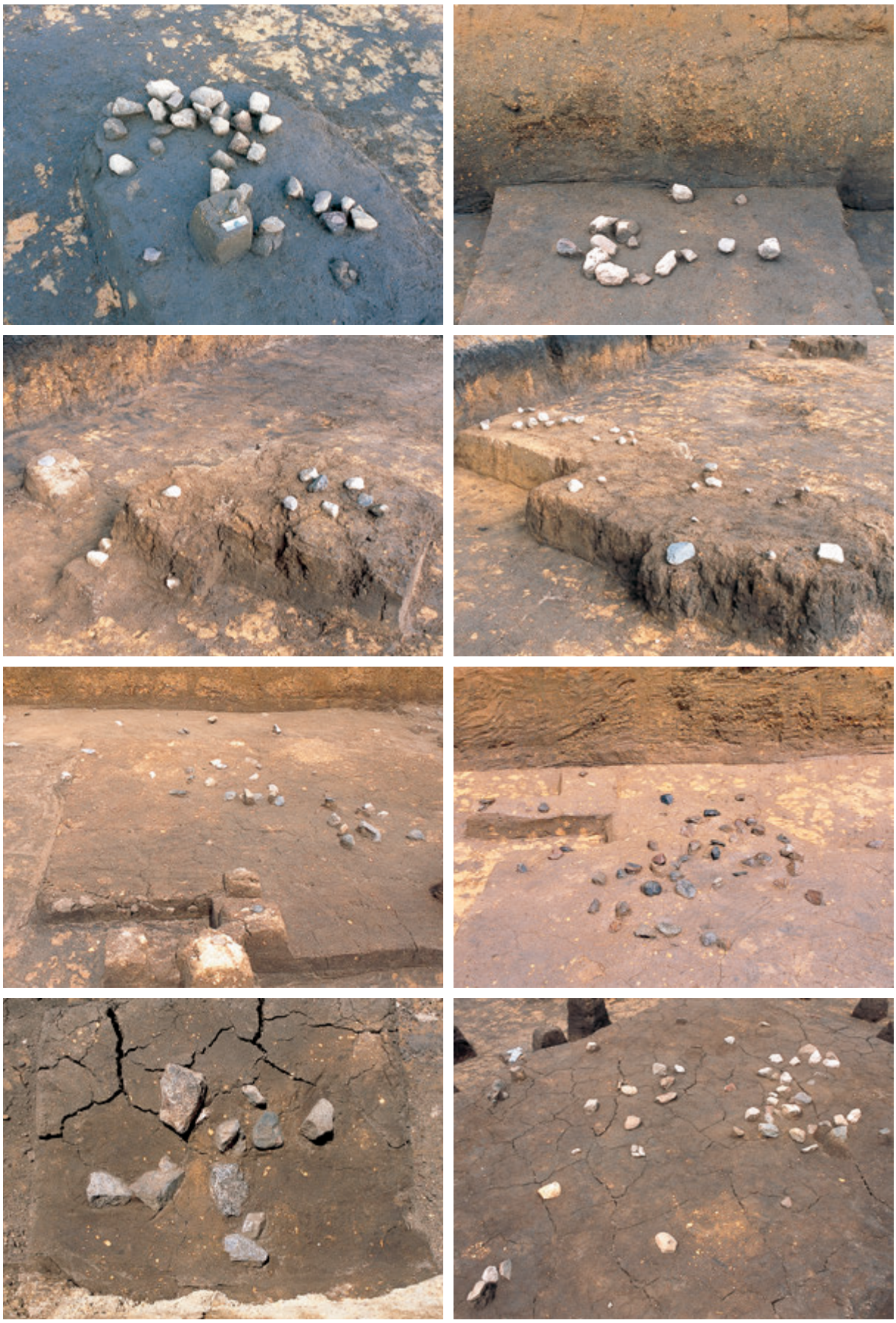


元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Si けい素	15.61	10.32
K カリウム	12.59	44.57
Fe 鉄	70.05	826.27
Rb ルビジウム	0.59	6.82
Zr ジルコニウム	1.15	16.24

写　真　図　版

関山遺跡周辺地形（国土交通省空中写真・昭和49年）
関山遺跡調査区全景・土層断面
旧石器時代の礫群１号・旧石器時代の礫群２号

図版１



図版 2

縄文早期集石 1 号・縄文早期集石 2 号
縄文早期集石 3 号・縄文早期集石 4 号
縄文早期集石 5 号・縄文早期集石 6 号
縄文早期集石 7 号・縄文早期集石 9 号

縄文早期落とし穴10号・縄文早期落とし穴15号・縄文早期落とし穴２号
縄文早期落とし穴17号・縄文早期落とし穴16号・縄文早期落とし穴13号
縄文早期落とし穴１号・縄文早期落とし穴12号・縄文早期落とし穴11号

図版３

図版４

縄文早期落とし穴３号・縄文早期落とし穴６号・縄文早期落とし穴５号
縄文早期落とし穴８号・縄文早期落とし穴検出状況
縄文早期落とし穴14号

縄文早期落とし穴18号・縄文早期落とし穴９号
縄文早期落とし穴19号・縄文早期落とし穴４号
縄文早期落とし穴７号・入れ子状の縄文早期土器出土状況（断面）
入れ子状の縄文早期土器出土状況（平面）

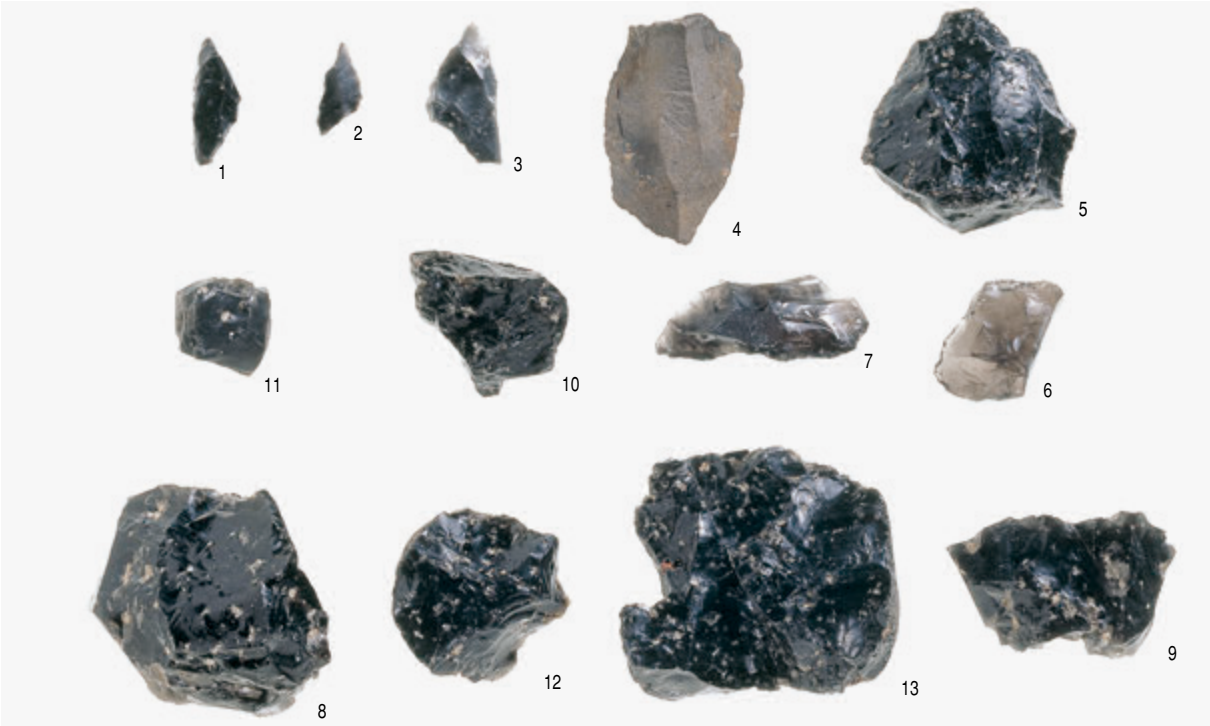
図版５

図版 6

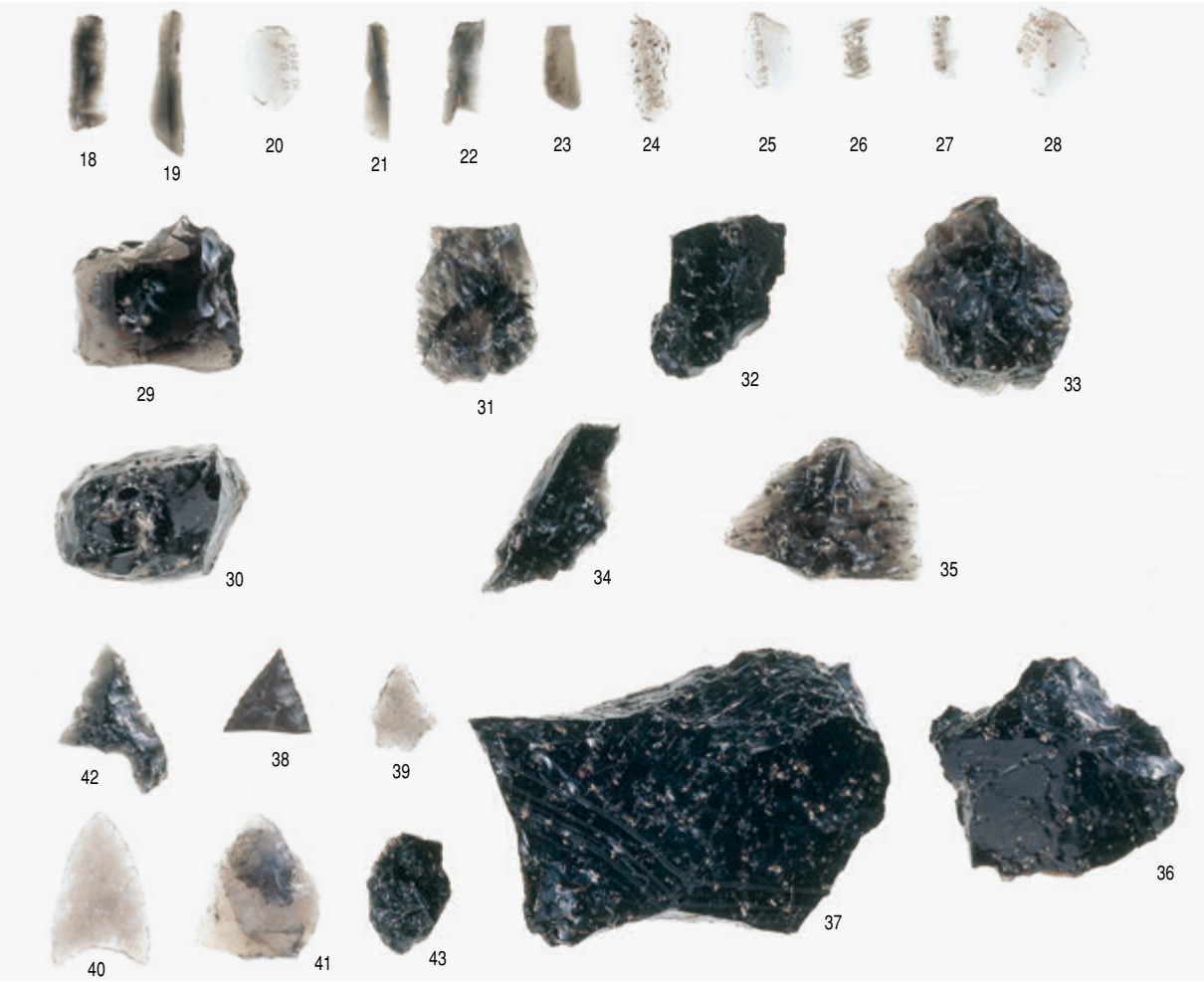
縄文早期土器出土状況・縄文早期調査風景
縄文中期落とし穴１号・縄文中期落とし穴２号
縄文中期落とし穴３号・縄文中期落とし穴４号
縄文中期落とし穴５号・縄文後期竪穴住居跡

中世の溝状遺構３－①・溝状遺構Ｊ地点埋土検出状況
近世の掘立柱建物跡４号検出状況・中世の溝状遺構４，５，６，７
近世の柱穴埋土検出状況・近世の掘立柱建物跡２号完掘状況

図版７



旧石器時代ナイフ型石器文化期の石器



図版 8

旧石器時代細石刃文化期の石器

縄文時代早期土器 1

59　44
99 107
　　98

図版 9

図版10

縄文時代早期土器 2

縄文時代早期土器 3

図版11

図版12

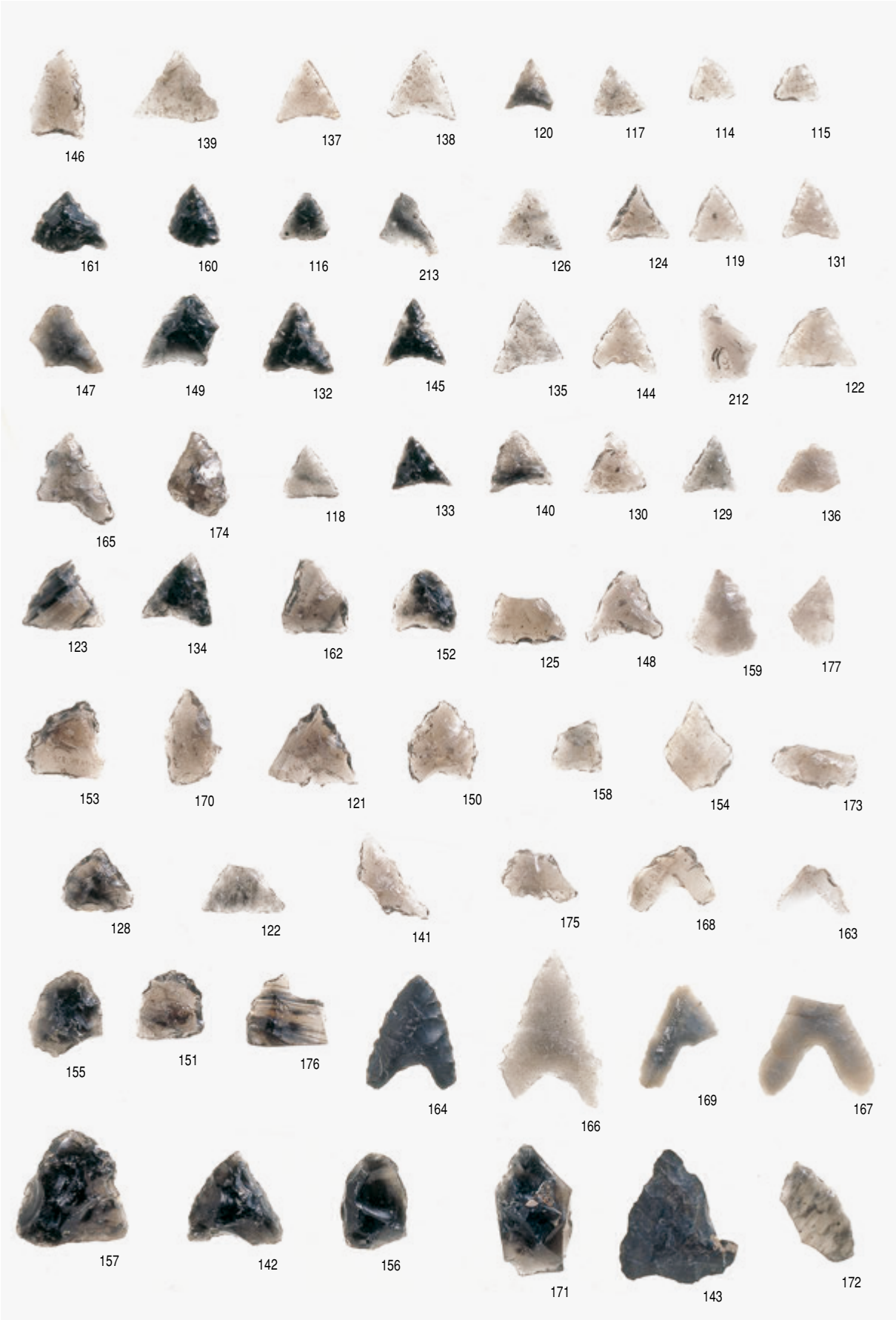
縄文時代早期土器４

縄文時代中期・後期土器

図版13

図版14

縄文時代晩期土器



縄文時代早期石器 1

図版15

図版16

縄文時代早期石器 2

縄文時代中期・後晩期の石器

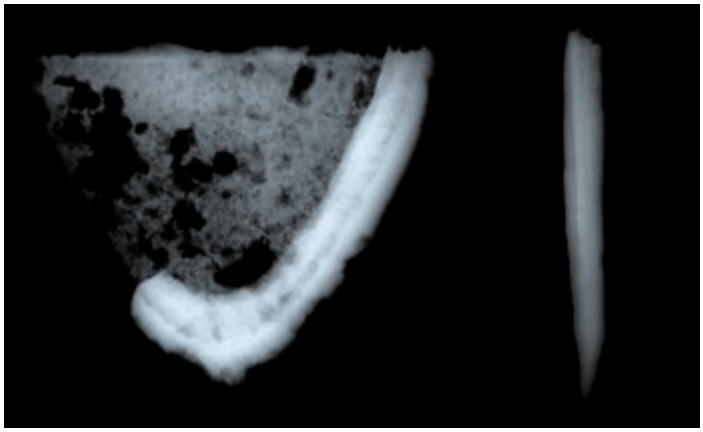
図版17

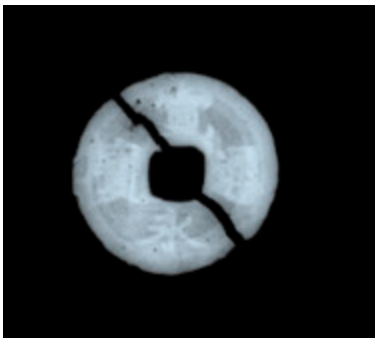
図版18

縄文時代の礫石器・中世の砥石

古墳時代・中世・近世・近代の遺物

図版19





図版20

近世・近代の遺物

鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡遠景（国土交通省空中写真・昭和49年）

図版21

29 トレンチ東壁土層断面

22 トレンチ北壁土層断面

22 トレンチP13・14

P25区Ⅶ層上面横転検出状況

図版22

確認トレンチ土層断面

1号集石検出状況

2号集石検出状況

2号集石土坑検出状況

2号集石土坑半截状況

1号落とし穴検出状況

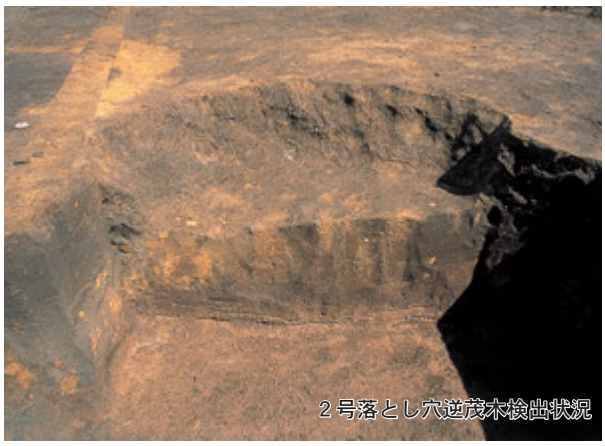
1号落とし穴逆茂木完掘状況

2号落とし穴検出状況

2号落とし穴半截状況

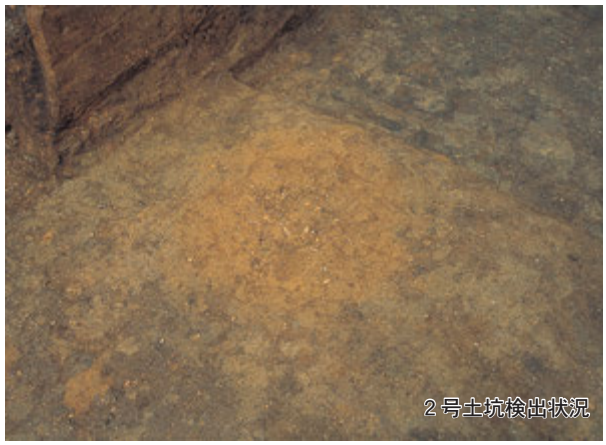
チシャノ木遺跡縄文時代早期の集石・落とし穴

図版23


2号落とし穴逆茂木検出状況

2号落とし穴逆茂木完掘状況1

2号落とし穴逆茂木完掘状況2


2号土坑検出状況

1号土坑検出状況

3号土坑検出状況

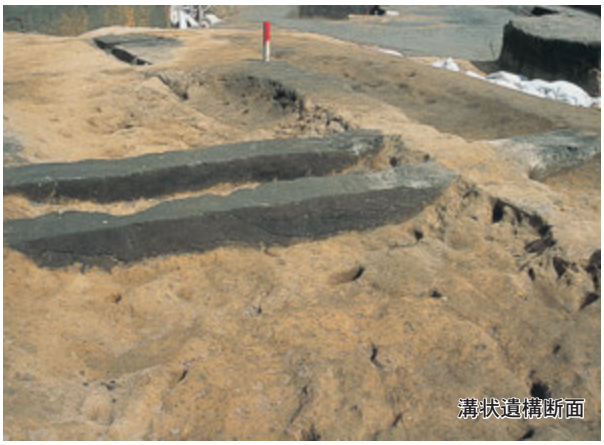
3号土坑半截状況

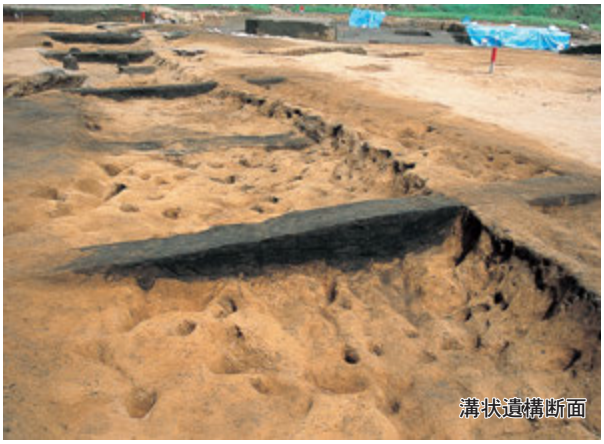
3号土坑完掘状況

図版24　チシャノ木遺跡縄文時代早期の落とし穴・土坑

溝状遺構検出状況

溝状遺構断面


溝状遺構断面


溝状遺構断面

溝状遺構完掘状況

溝内古銭出土状況

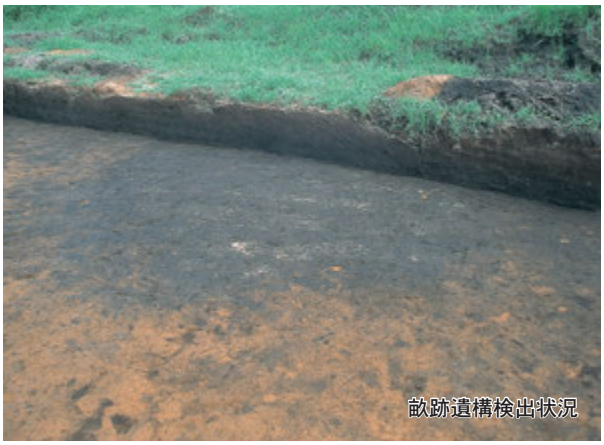
チシャノ木遺跡近世の溝状遺構

図版25

中世落とし穴半截状況

中世落とし穴逆茂木検出状況

中世落とし穴逆茂木半截状況

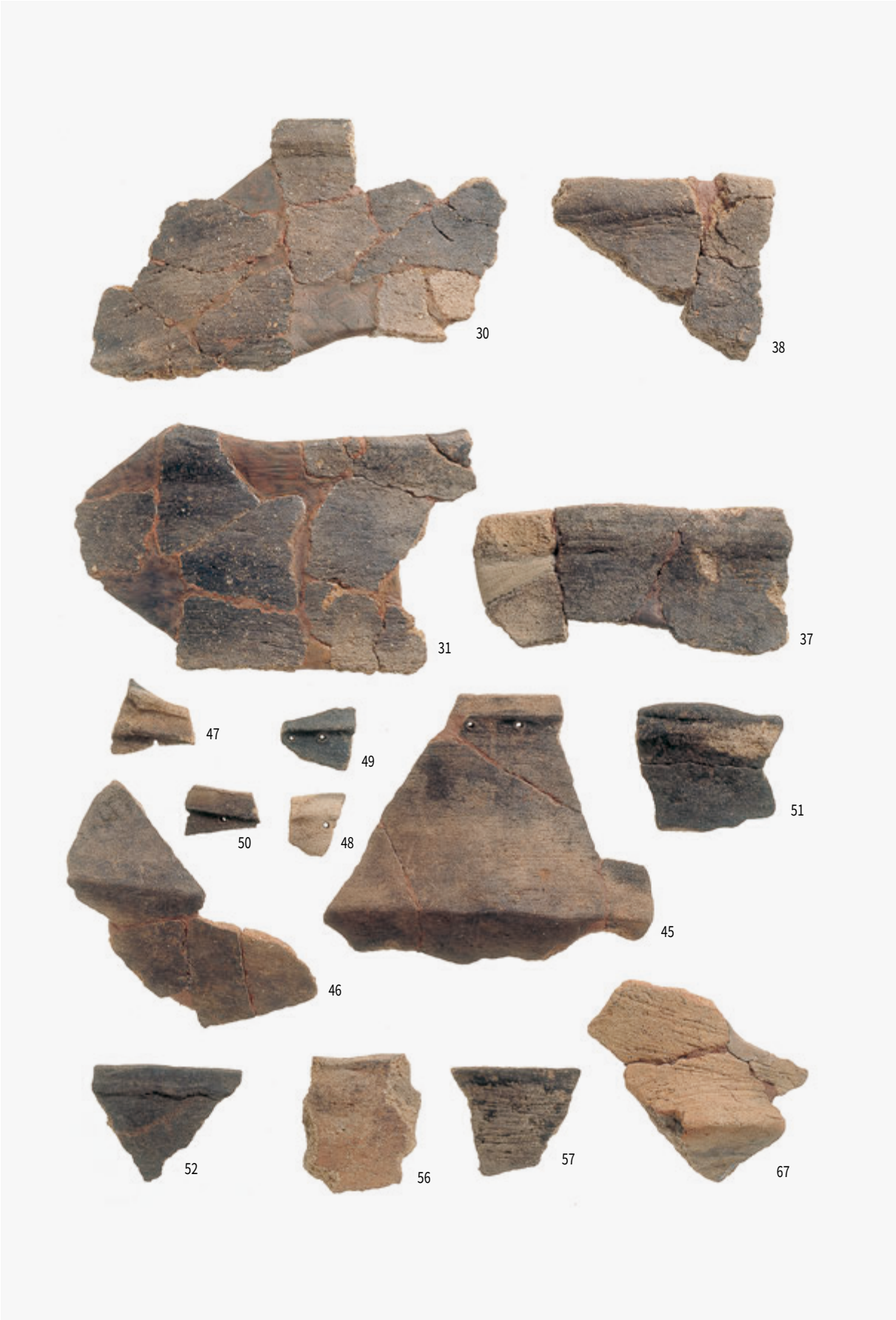

畝跡遺構検出状況

中世落とし穴完掘状況

図版26　チシャノ木遺跡古代～中世の落とし穴

鳥居川遺跡出土土器

図版27

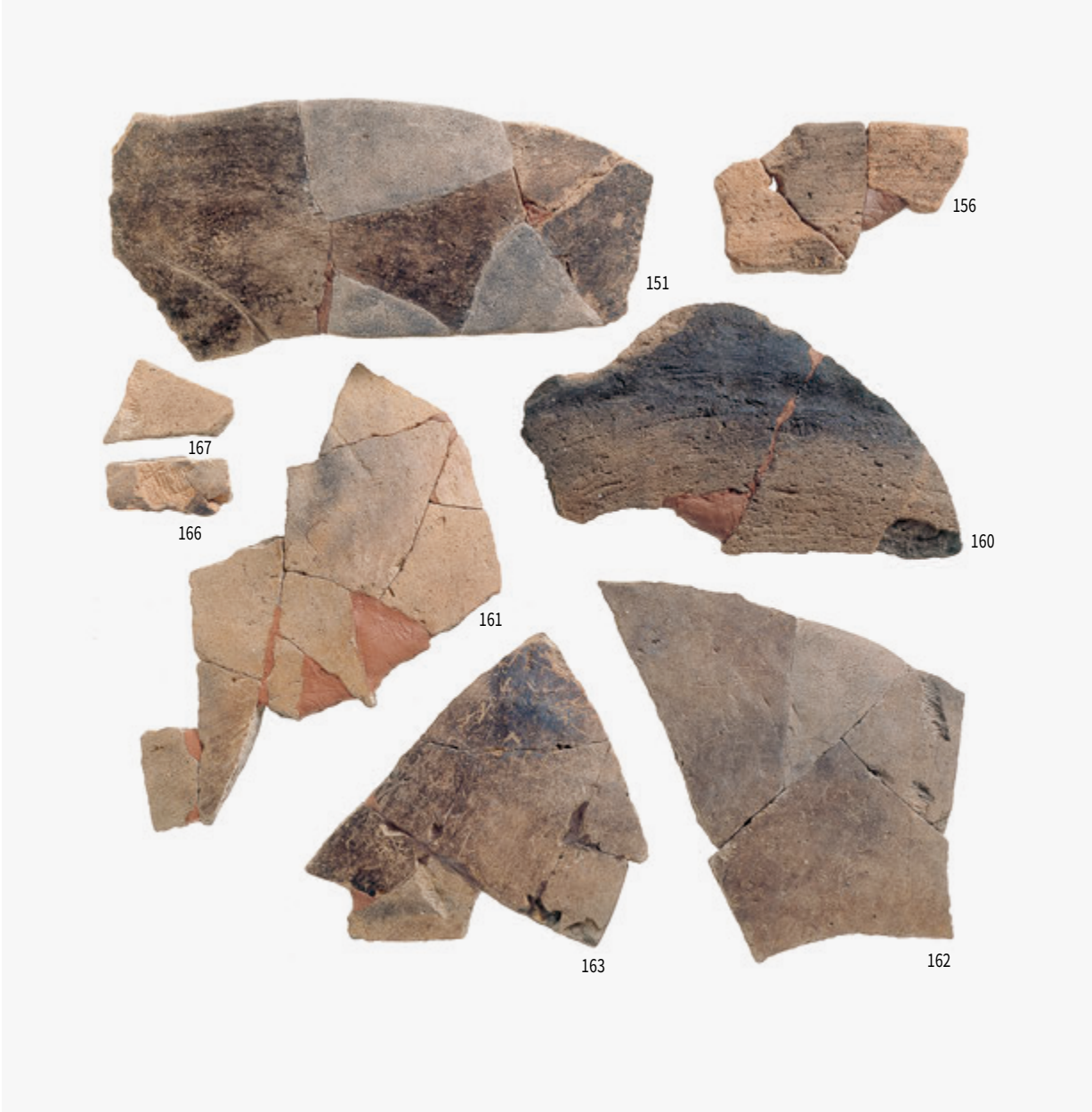


図版28　　チシャノ木遺跡縄文時代晩期土器（６ａ類）

チシャノ木遺跡縄文時代晩期土器（６ｂ・６ｃ類）

図版29

図版30　　チシャノ木遺跡縄文時代晩期土器（６ｃ類）



チシャノ木遺跡縄文時代晩期土器（６ｃ類）

図版31

図版32　チシャノ木遺跡縄文時代晩期土器（６ｄ類）・縄文時代石器

あ　と　が　き

現在，われわれが調査を行っている東九州自動車道は，九州の東側地域において，北九州市を起点として，福岡，大分，宮崎，鹿児島の各県を結び，鹿児島市に至るまでの総延長436㎞に及ぶ本格的な高規格道路であります。

この高速道路は，将来の産業，経済，文化の活性化に大きな役割を果たす大動脈として，各県の同胞たちが総力をあげて調査・記録に取り組んでいる一大イベントでもあります。

東九州自動車道建設に係る分布調査をはじめてから幾多の年月と道のりを経て，ここに大隅ＩＣ～末吉財部ＩＣ間の発掘調査報告書刊行の運びとなりました。

この報告書は，平成15年度の道路関係４公団の民営化にあたり，幹線自動車道整備の補完措置として，必要な高速道路を建設するため，国と地方の負担による新直轄方式を導入した事業に伴う遺跡の記録の一部です。

関山遺跡では，縄文時代早期後葉の変形撚糸文土器が，ベンガラ貯蔵の入れ子状で発見されました。周辺の地層は，県道建設時に攪乱されていたのですが，偶然にもその難を逃れ，今を生きる私たちに対する数千年前に残された何らかのメッセージだと思います。

チシャノ木遺跡では，イモ穴が密集しているところから中世の逆茂木痕を伴った落とし穴が１基検出されました。落とし穴の性格や用途等については，今回の調査では，類例が少なくはっきりしたことが分かりませんでしたが，今後の調査・研究の一資料となるはずです。

発掘調査で検出・出土した遺構・遺物は，現在と過去をつなぐ唯一の架け橋でありメッセージであります。それを紐解き様々な角度から考察し，後世に伝え残していくのが考古学であり，私たち埋文行政職員の仕事です。

私自身のことで恐縮ですが，他では決して経験できないこの仕事に長年携わることができたことを誇りに思います。今後の調査成果を楽しみにしています。

筆を納めるにあたり，発掘調査ならびに報告書作成にかかわっていただいた方々をはじめ，関係機関の方々に感謝を申し上げます。　（立神次郎）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）

東九州自動車道建設(大隅IC～末吉財部IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

関　山　遺　跡
鳥 居 川 遺 跡
チシャノ木遺跡

発行日　平成20年３月

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
ＴＥＬ（0995）48－5811

印刷所　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
ＴＥＬ（099）250－7033